鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　20

平成15年度発掘調査報告
（第２分冊）

平成16年３月

鎌倉市教育委員会

妙本寺遺跡

笹目遺跡

総　目　次

（第２分冊）

口絵……Ⅰ
目次……Ⅲ
鎌倉市全図……Ⅴ

7　大倉幕府周辺遺跡群(No.49) 雪ノ下三丁目607番１地点
第１章　遺跡の概観……5
第２章　検出された遺構と遺物……10
第３章　おわりに……36

8　横小路周辺遺跡(No.259) 二階堂字会下323番外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……59
第２章　出土した遺構と遺物……60
第３章　まとめ……62

9　妙本寺遺跡(No.232) 大町一丁目1140番１外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……69
第２章　調査の経過と層序……70
第３章　検出した遺構と遺物……73
第４章　まとめ……84

10　妙本寺遺跡(No.232) 大町一丁目1140番２地点
第１章　遺跡の位置と調査の経過……109
第２章　検出遺構と出土遺物……112
第３章　まとめ……120

11　新善光寺跡(No.279) 材木座四丁目573番１外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……128
第２章　調査の経過と層序……131
第３章　検出した遺構と遺物……132
第４章　まとめ……132

12　台山遺跡(No.29) 鎌倉市山ノ内字宮下小路819番１外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……154
第２章　調査の概要……157
第３章　検出遺構と出土遺物……159
第４章　まとめ……165

13　笹目遺跡(No.207)　笹目町330番11外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……172
第２章　調査の概要 ……176
第３章　検出遺構と出土遺物 ……179

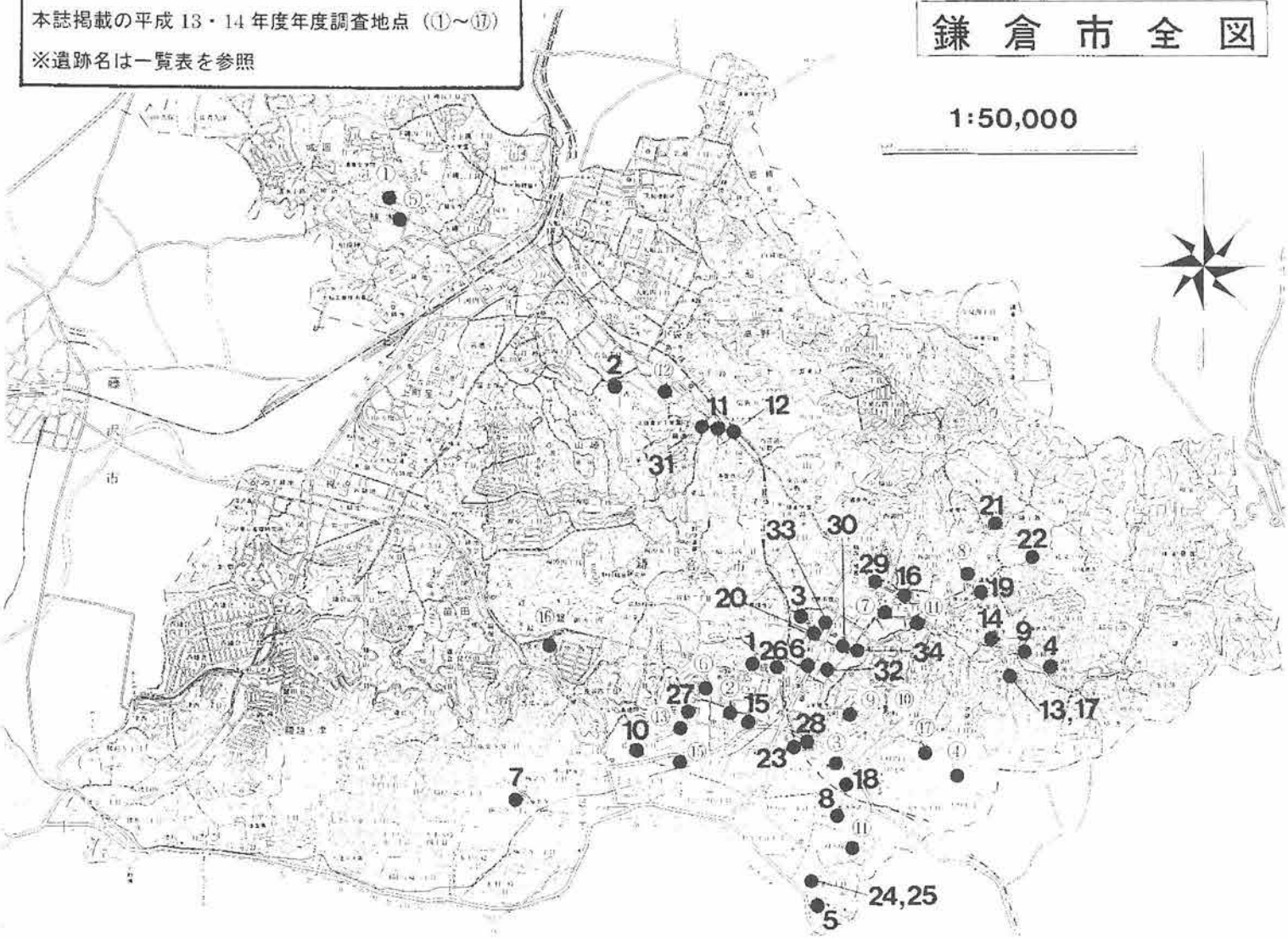
14　大倉幕府周辺遺跡群(No.49)　雪ノ下四丁目567番７地点
第１章　調査地点について ……201
第２章　調査概要 ……204
第３章　調査成果 ……206
第４章まとめ ……207

15　長谷小路周辺遺跡(No.236)　由比ガ浜三丁目194番50地点
第１章　環境と立地 ……218
第２章　調査の概要 ……222
第３章　遺構と遺物 ……224
第４章　調査成果 ……232

16　北条政村屋敷跡(No.131)　常盤字常松下1005番２地点
第１章　調査地点について ……250
第２章　調査の概要 ……252
第３章　検出遺構と出土遺物 ……254
第４章　まとめ ……256

17　名越ヶ谷遺跡(No.231)　大町六丁目1708番４地点
第１章　環境と立地 ……261
第２章　調査の概要 ……264
第３章　遺構と遺物 ……266
第４章　調査成果 ……271

平成１５年度の緊急発掘調査地点（１～34）
本誌掲載の平成 13・14 年度年度調査地点（①～⑰）
※遺跡名は一覧表を参照



大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

おおくらばくふしゅうへんいせきぐん

雪ノ下三丁目607番１地点

例　　言

1．本報告書は、神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目607番地１地点における、自己用店舗併用住宅の建設に伴う国庫補助事業の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は平成13年11月８日～同年12月20日までの期間、鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は43.66㎡である

3．現地での調査体制は以下の通りである。
調査主体　：　鎌倉市教育委員会
調査担当　：　降矢順子
調査員　　：　菊川英政
調査補助員：　根本睦子、長沢保崇、松本卓也、遠藤恵理子、青木美枝子
協力機関　：（社）鎌倉市シルバー人材センター

4．整理作業及び本書の作成は以下の通りである。
挿図・図版作成　　：　降矢順子、矢能明子
遺物実測・トレース：　矢能明子、八木沼ひとみ、野村あおみ

5．本書の執筆、編集は降矢順子が行ったが、第２章８の軟体動物遺存体については、小島奈々子が執筆した。

6．本書の遺構、遺物の縮尺は以下の通りである。
遺構全体図　１／80、個別遺構　１／60。
遺構図の水糸高は、海抜を示す。
遺物実測は１／３、一部常滑甕については１／４、銭は１／１。
遺構図には以下のスクリーントーンを使用している。
かわらけ溜り
炭化物散布範囲
貝がら集中範囲

7．発掘調査において鎌倉市教育委員会、また古代（弥生～古墳）の遺物についての出土品整理にあたっては、大島慎一氏（小田原市教育委員会）に御教え願った。
軟体動物遺体の同定および原稿作成にあたっては、倉持卓司氏に御教え願った。

8．出土品、図面などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　遺跡の概観……5
　第１節　遺跡の立地と歴史的環境……5
　第２節　調査の経過と方法……7
　第３節　堆積土層……8

第２章　検出された遺構と遺物……10
　第１節　第１面検出までの遺構と遺物……10
　第２節　第２面検出までの遺構と遺物……11
　第３節　第３面検出までの遺構と遺物……13
　第４節　第４面検出までの遺構と遺物……19
　第５節　第５面検出までの遺構と遺物……24
　第６節　古代以前の出土遺物……32
　第７節　大倉幕府周辺遺跡出土の軟体動物遺存体……34

第３章　おわりに……36

挿　図　目　次

図１　調査地点の位置図……5
図２　調査地点の周辺の遺跡……6
図３　調査区グリッド設定図……7
図４　確認調査時の堆積土層……8
図５　確認調査時の出土遺物……8
図６　調査区最終面・土層堆積図……9
図７　１面全体図……11
図８　１面までの出土遺物（１）……12
図９　１面までの出土遺物（２）……13
図10　２面全体図……14
図11　２面出土遺物（１）……15
図12　２面出土遺物（２）……15
図13　２面遺構出土遺物……16
図14　１号土壙……17
図15　３面全体図……17
図16　３面出土遺物（１）……18
図17　３面出土遺物（２）……19
図18　３面遺構出土遺物……20
図19　井戸１……20
図20　４面全体図……21
図21　４面出土遺物……22
図22　４面遺構出土遺物（１）……23
図23　溝３……24
図24　４面遺構出土遺物（２）……25
図25　４面遺構出土遺物（３）……26
図26　溝２……26
図27　５面全体図……27
図28　５面出土遺物（１）……28
図29　５面出土遺物（２）……29
図30　溝１……29
図31　５面出土遺物（３）……30
図32　５面遺構出土遺物（１）……31
図33　５面遺構出土遺物（２）……32
図34　古代以前の出土遺物……33
図35　周辺の調査地点との対比図……36

図 版 目 次

図版１　１　１面全景　２　１面全景　３　１面鎌倉石列　４　１面近世基礎石列
５　２面全景　６　２面出土遺物　７　２面出土遺物(鯨骨)　８　２面全景
図版２　１　２面土壙１　２　２面溝２断面　３　２面土丹礎石と遺物出土状況（かわらけ）
４　２面かわらけ出土状況　５　２面検出土壙・ピット群
６　３面琥珀出土状況　７　３面遺物出土状況（かわらけ）
８　３面玉砂利出土状況
図版３　１　３面土壙161・122・ピット125　２　４面土壙100と出土遺物（かわらけ）
３　３面柱穴　４　４面土壙（遺構219）　５　３面全景
６　４面柱穴群　７　３面土壙147　８　４面全景
図版４　１　３面炭化物、貝殻出土範囲　２　４面土壙159
３　５面検出井戸址１　４　５面土壙出土遺物
５　５面柱穴群　６　５面大柱穴内柱痕出土遺物（白磁）
７　５面出土遺物（瓦）　８　５面全景
図版５　１　５面溝２　２　５面下溝２とピット群
３　５面柱穴検出柱痕(北から)　４　５面柱穴内検出礎石
５　５面溝３柱穴群(東から)　６　５面下検出溝１(東から)　７　５面下全景(北西から)
図版６　貿易陶磁器……50
図版７　国内産陶器（１）……51
図版８　国内産陶器（２）……52
図版９　かわらけ……53
図版10　磨常滑・石・鉄製品……54
図版11　鉄製品・瓦……55
図版12　古代以前の遺物……56

表 目 次

表１　出土遺物観察表……37
表２　出土遺物種別点数表……42
表３　出土遺物種別点数表……44

第１章　遺跡の概観

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は、鶴岡八幡宮入り口前より、県道金沢・鎌倉線を東に進み、筋違橋交差点を50m程東金沢方面）へ進んだところに位置している。神奈川県遺跡台帳・大倉幕府周辺遺跡群（No.49）として包括されている地域の西端の部分にあたる。

「大倉（大蔵）」の名は『吾妻鏡』等の資料で大倉稲荷として散見され、地域総称として南北は瑞泉寺辺りから滑川まで、東西は鶴岡八幡宮から朝比奈切通しまでとされる。治承４年（1180年）石橋山での挙兵後、鎌倉に入った源頼朝が居館を新築しこの付近に幕府を開いたことから大倉幕府と呼ばれた。嘉禄元年（1225年）の焼失で幕府が若宮大路東側に移転されるまで、鎌倉の中枢であり、周囲には執政期間の政所が置かれ多くの御家人・被官の屋敷地などもあったと推定される。また、本地点一帯は、滑川右岸に広がる沖積低地上に立地し早くから拓けていた場所である。南御門遺跡（第２図－14）で検出された弥生時代中期から、後期の竪穴住居址群、古墳時代後期の濠流路（第２図－21）平安時代末期の土壙墓（第２図－２）など中世以前の遺構・遺物も数多く検出されている。

中世においては、源頼朝が幕府を開いた地として知られ大倉幕府は調査地点の東側東西約280m、南北220mが範囲とされている。

文献史料などによると、幕府内には寝殿、対屋、大御所、小御所、常御所、また東西南北に門がついていたであろうと考えられているが、調査において現段階で、唯一南東角隅の調査地点（第２図－21）でも中世前期の遺構は明らかにされていない。

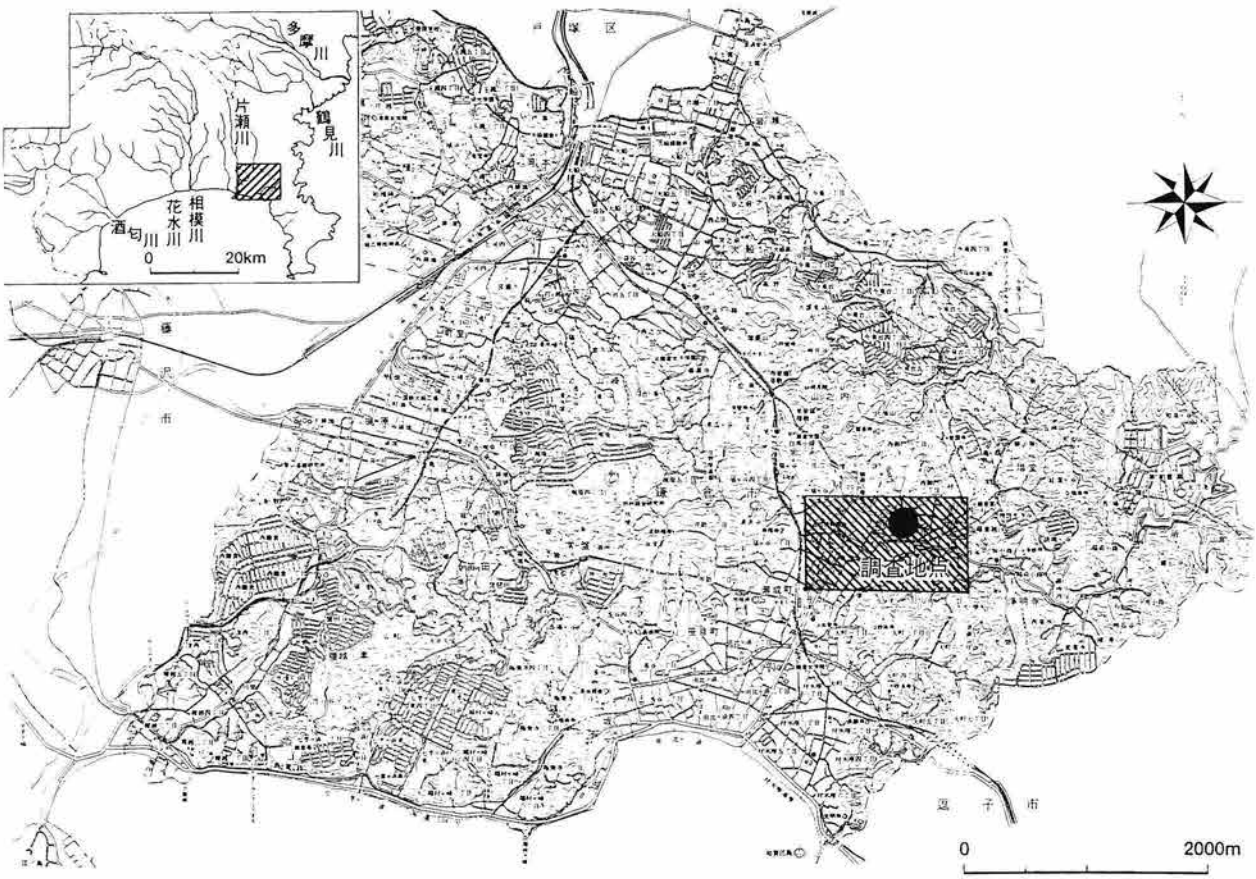


図１　調査地点の位置図

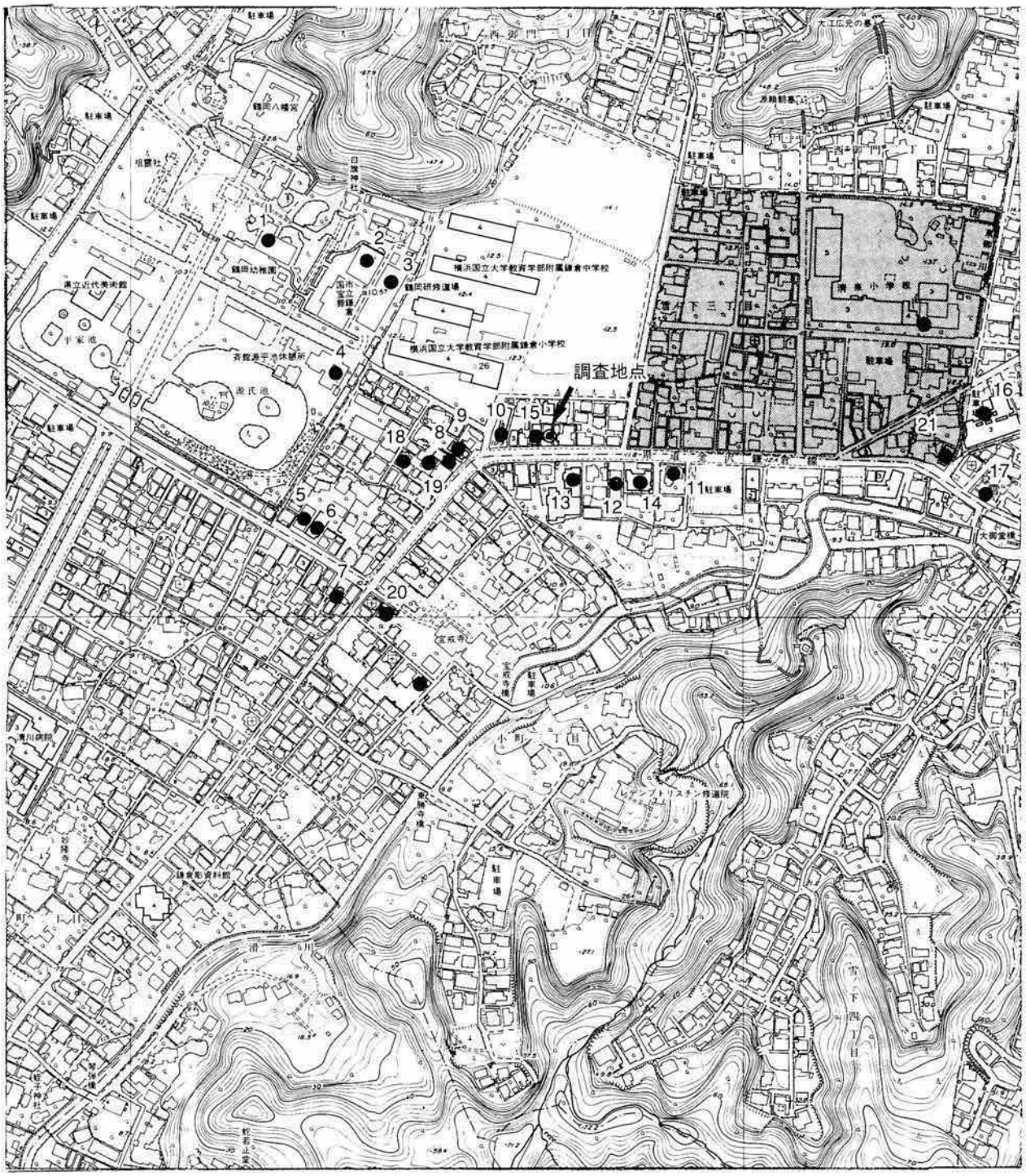


図２　調査地点の周辺の遺跡

◉調査地点　大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目607番１地点

1．鶴岡八幡宮旧境内　直会殿用地
2．鶴岡八幡宮旧境内　鎌倉国宝館用地
3．鶴岡八幡宮旧境内　研修道場用地
4．鶴岡八幡宮境内遺跡（源平茶屋跡地）
5．政所跡　雪ノ下三丁目988番地点
6．政所跡　雪ノ下三丁目987番１・２地点
7．北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目395番地点
8．政所跡　雪ノ下三丁目966番１地点
9．政所跡　雪ノ下三丁目965番１地点
10．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目606番１地点
11．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番５地点
12．大倉南御門遺跡Ｂ地点
13．大倉南御門遺跡Ｃ地点
14．大倉南御門遺跡Ａ地点
15．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下三丁目607番外地点
16．大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄36番１地点
17．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下大倉耕地565番４地点
18．政所跡
19．政所跡
20．北条高時邸跡　小町三丁目426番３地点
21．大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番１地点

大倉幕府は嘉禄元年（1225年）12月に焼失し、若宮大路の東側へ移転している。大倉幕府の執政期間である政所、調査地点西側の筋違橋を渡った辺りと推定されている。同範囲内では、庁屋（政所）・公文所・問注屋・御倉などの存在が知られるが、幕府跡と同様に未確認であり、わずかに南辺と東辺で行われた発掘調査（第２図５－６－８－９）の成果から南辺を土塁で東辺を柵（板塀？）で画していたことが判明した。政所も大倉幕府とともに移転していると考えられる。

幕府と政所に挟まれた地域では、筋違橋に接する北東側（第２図－10）で調査が行われている。西側を西御門川に沿っていた柵列と溝で画し、南側を土塁（築地？）と溝で画した大規模な屋敷地が存在したものと推測され、相前後する時期には主軸方位の異なる東西方向の区画溝が数条検出されている。時期は、13～15世紀に渡るものである。

南御門遺跡（第２図13－14）では、現在の六浦路（県道、金沢・鎌倉線）から10m程南で14世紀代の屋敷地が検出されている。

調査地点の西側にある筋違橋は、文永２年（1265年）３月に鎌倉での商業地の一つとして「小町屋、売買設」の許可された場所である。

鎌倉が衰微する15世紀以降では、遺跡地周辺に係わる文献史料もなく、検出された井戸址・土壙・溝・材などで、建物址を含む遺跡の全体像、生活の様相を検討していくのは不十分であり、調査にかかわるすべての者が同一目的・意識をもって取り組むことにより、明らかにされることは多いと考える。

第２節　調査の経過と方法

調査は個人住宅店舗併用の宅地造成に伴う事前調査として、約44㎡の敷地を対称に平成13年11月８日より表土掘削を開始し、40日の予定で調査を開始した。事前の試掘調査の結果から、比較的浅いところ（現地表下60㎝）のところで中世遺構面・遺物が確認された。

この試掘の結果、埋蔵文化財の記録保存が必要であると認められた。この試掘結果をもとに本調査を実施する運びとなった。調査区が近隣と接触していたため、危険が生じる事を恐れ周囲を東西２m、北２mを残し、調査を設定した。

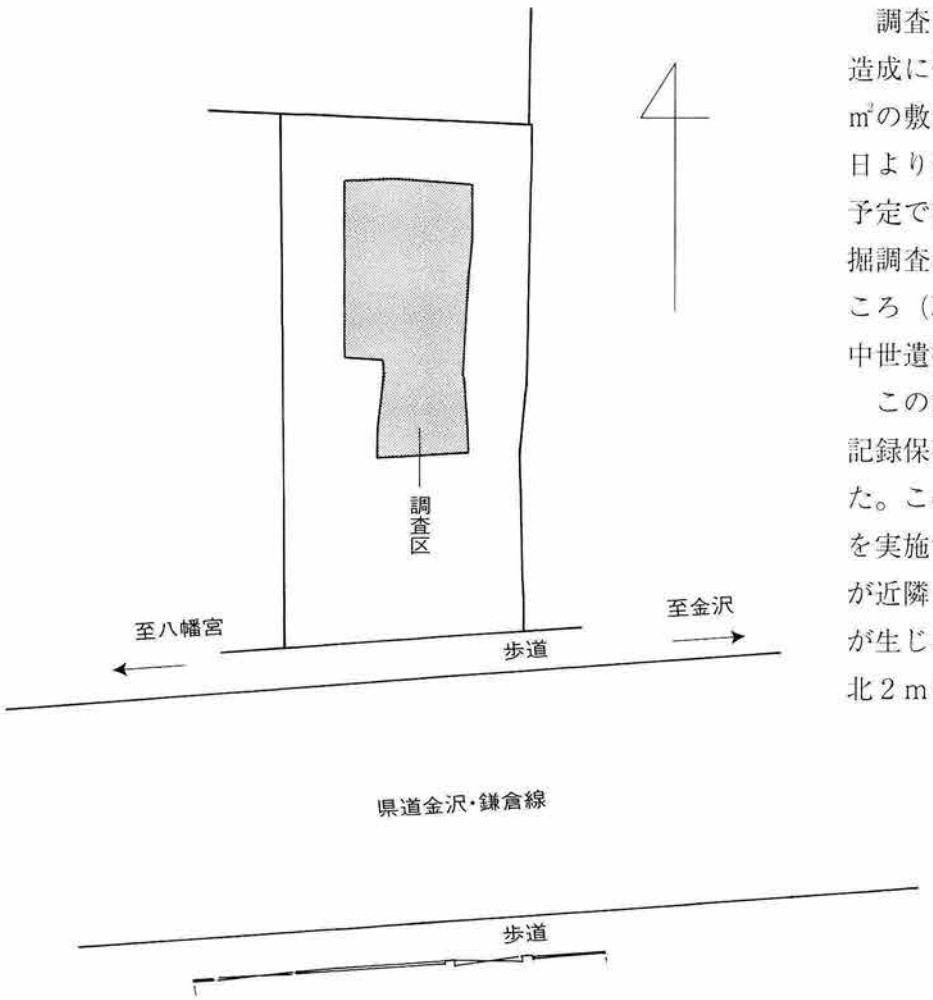


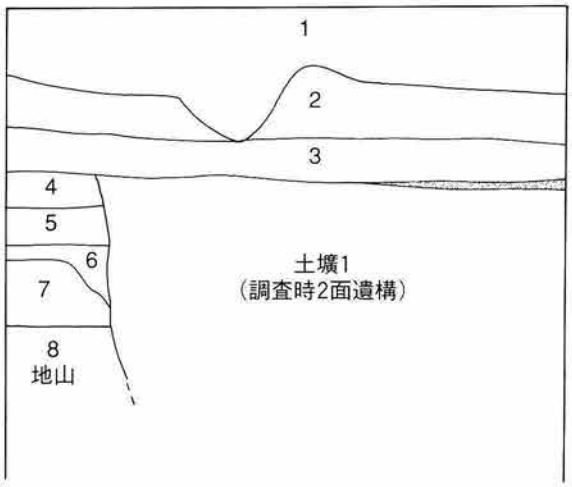
図３　調査区グリット設定図

調査は現地表下約60cmを重機に依り掘削し、人力により精査遺構確認を行って進めて行った。

調査方法として、4級基準点E122（X＝－75372.455、Y＝－24656.791）を支点とし、3級基準点53208（X＝－7、Y＝－24708.360）を見返り、調査区外西部に調査原点（X＝－75356.000、Y＝－24663.000）と、真北にY値の同じ見返り点の2点を設定した。
これを基準に調査原点を（x＝0、Y＝0）とし、南北方向をX径、東西方向をY径として2m四方のグリッドを組み、機械測量と併用して調査を進めて行った。調査は平成13年12月20日に終了した。

第3節　堆積土層

本地点で確認された堆積土層は5面である。1面掘削面は現地表下40cmですべて人為的な埋め土であり、近世撹乱層である。ゆえに確認できた中世生活面は4枚である。また5面の一部で検出された遺構



土層
1面　褐色土：拳大～φ10cmの土丹層。近世撹乱。
2面　褐色土：φ5㎜位の小土丹粒
3面　暗褐色土：φ5㎜～拳大土丹多く含む。炭化物含。含む。しまり粘性あり。
4面　暗褐色土：炭化物を多く含む。しまり、粘性あり。
5面　暗灰褐色粘質土：白色粒子を多く含み、僅かに炭化物を含む。しまり、粘性あり。
5面下　暗灰褐粘質包土：地山（弥生時代～古墳の遺物を多く含む）

図4　確認調査時の堆積土層

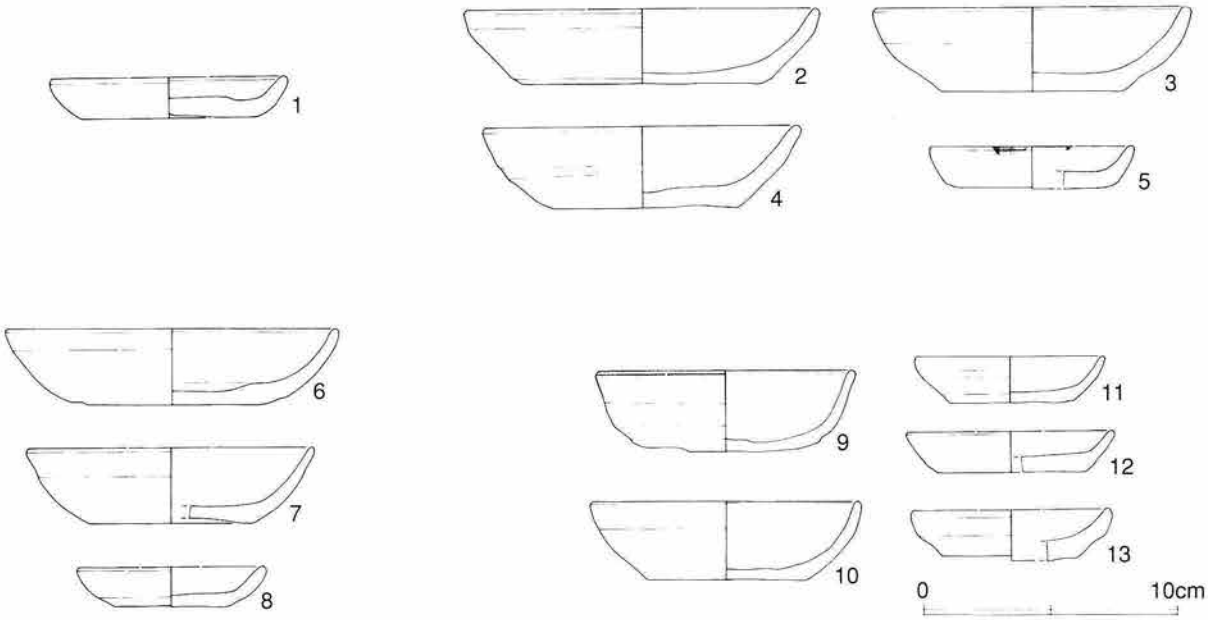


図5確認調査時の出土遺物

の中で溝1。P141・P155・P157・P158・P159・P174・P196は5面で検出された他の遺構よりわずかな時間差があるものと思われる。堆積土層図については面の捉え方が調査時と同一であったため確認調査時のものを使用している。

年代観は、1面は震災後の近世整地層、2面は中世後期、3面は造成は弱いが14世紀から15世紀前半

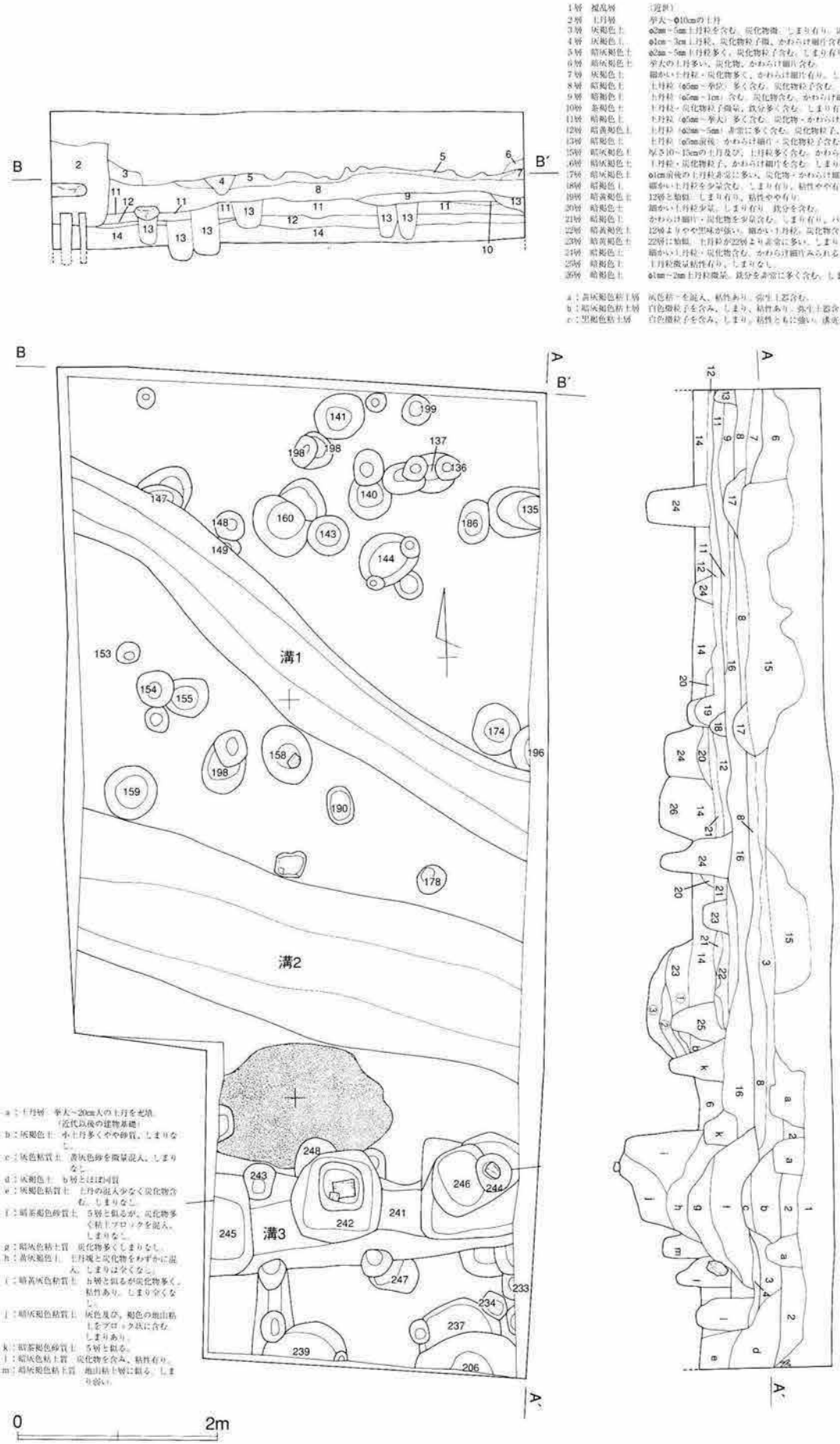


図6　調査区最終面・土層堆積図

代、４面は14世紀中頃、５面は14世紀前半から13世紀中葉と考えたい。

確認調査時における出土遺物（第５図１～13）

確認調査時に出土したかわらけの重量1,280ｇである。そのうち実測点数13点である。その中の９を除いて１～13は糸切り底のかわらけ皿である。

１はかわらけ皿小（調査時の２面土壙１）より出土。２～４はかわらけ皿大で、３は完形品である。５はかわらけ皿小、灯明皿としての使用痕あり。１～２面より出土。６はかわらけ皿大、７はかわらけ皿中、８はかわらけ皿小で３面より出土。９は黒縁瓦器碗で完形。10はかわらけ皿中、11～13はかわらけ皿小で、11は完形品４面より出土。13は体部外面中位に陵をもち内湾気味に立ち上がり13世紀代前～中頃のものと思われる。

第２章　検出された遺構と遺物

本調査で検出した遺構は、掘削深度（地表下1.2m）までの間に中世遺構面を４枚とらえることができた。１面までは近現代の撹乱を帯びた面がほとんどで、わずかに北西隅に倉の基礎と思われる礎石が残っているにすぎない。

また調査中に全ての遺構近代以降の撹乱土壙、ピット、整理層の一部などに遺構番号を付したため、遺構番号には欠番が生じている。また各面に伴うか疑わしいものも含め図化した。遺物については、実測可能な遺物が出土している遺構のみのものを記す。

なお、試掘調査で遺構１として捉えたものを、本調査ではこれを２面の土壙１として取り扱った。遺物については舶載陶磁器、国産陶器（常滑、瀬戸、渥美、備前）、かわらけ皿、瓦、金属製品（釘、スラグ）、銭、骨、貝などが整理箱27箱出土している。

以下それぞれの遺構と遺物について述べる。

近世倉１、掘立柱建物の柱穴、礎石建物の礎石３個、溝４条、溝状遺構３条、土壙６基、井戸１基、大形柱穴５穴（内３穴は布堀りと思われる）、ピット多数である。柱穴・ピットについては多数検出されたが、並びは不明である。また各面に伴うか疑わしいものもふくめて図化した。

第１節　１面検出までの遺構と遺物

（１）遺構

調査区西隅より、近世の倉と思われる鎌倉石敷の土台が伴う基礎部分が検出された。上層は近世の撹乱により壊されていた。礎石は南北に１列５石並ぶ。芯柱より約50㎝間隔で、石の大きさは確認できる範囲で直径45～50㎝を測る。周辺は土丹により堅く築き締められた地業がなされている。建物の主たる部分が西側の調査区外に延びるため様相は捉えることができなかった。検出された礎石の大きさからみてかなり造りのしっかりした建物（倉）と思われる。

（２）出土遺物（第８図）・（第８図14～26・第９図27～39）

14は瀬戸の卸皿底部、15は常滑甕の口縁部、16は常滑捏ね鉢口縁部、17は糸切りかわらけ皿の大、18は糸切りかわらけ皿小、19は軒丸瓦（巴文）、20は刀子、21は土製品で不明で、22は銭で寛永通宝、23は常滑甕口縁部、24は磨常滑、25は常滑甕口縁部、26は銭で大観通寶である。

27は青磁蓮弁文碗体部から底部にかけて、28は常滑甕口縁部、29は常滑壷底部、30・31はかわらけ皿大、32～36はかわらけ皿小である。その中で35・36は打ち欠き痕あり。37は土製品で鏑、38は軒丸瓦（巴文）、39は石製品で温石である。

第２節　２面検出の遺構と遺物

（１）遺構

土壙１

東側部分がわずかに調査区外にのびる。試掘時の遺構に当たる。掘り込み面は　層である。上層は撹乱により壊されていると思われる。確認面までの規模は長径2.55m・短径1.85m・深さ75cmを測る。平面形は楕円形で隅丸を呈す。床面は地山を掘り込んでいる。主軸の方位はN－12°－E方向を示す。

ピット３

１面の撹乱層により南側部分を切られている。掘り込み面は３層である。確認面での規模は長径0.72m、短径0.3m、深さ22cmを測る。平面形は楕円形を呈する。

ピット４

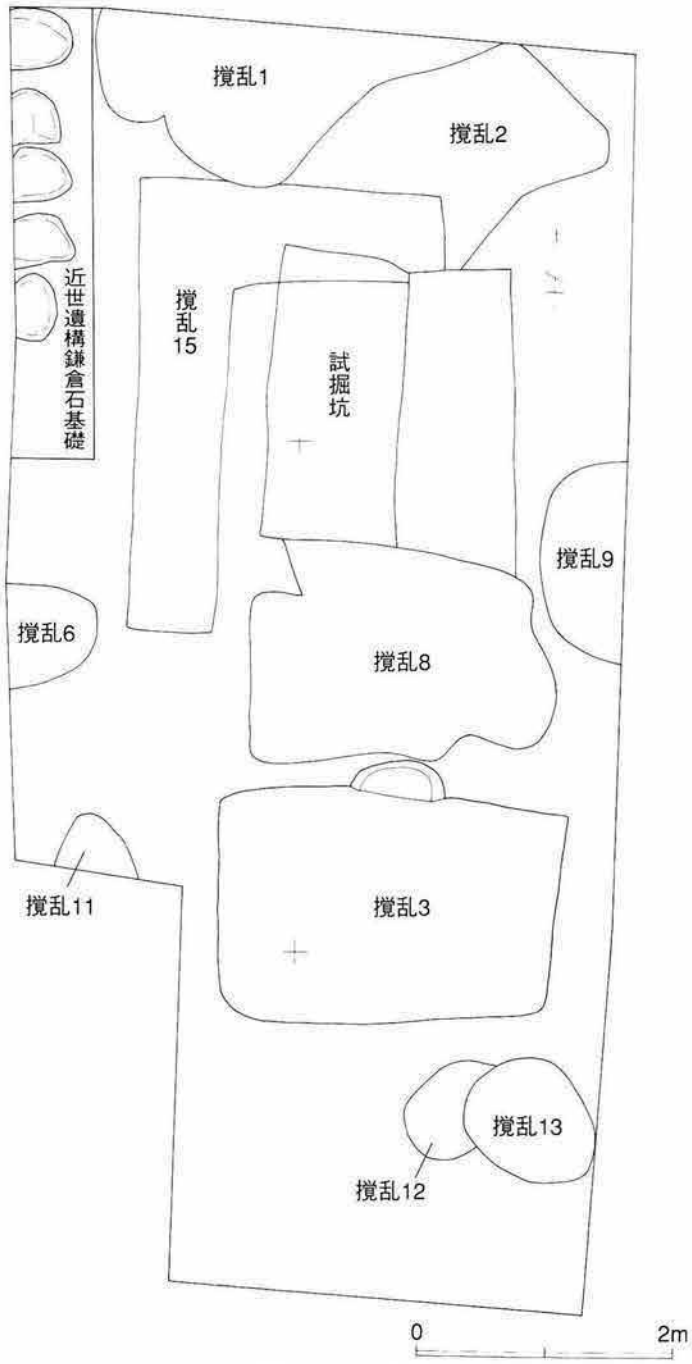


図７　１面全体図

北側を調査区により切られている。確認面での規模は長径1.05m、短径0.25m、深さ17cmを測る。平面形は浅い不整形を呈する。

ピット６

調査区北東側に位置する。確認面での規模は長径0.3m、短径0.35m、深さ2.9cmを測る。平面形は円形を呈する。

ピット７

調査区北東側に位置する。確認面でのの規模は長径0.25m、短径0.25m、深さ32cmを測る。平面形は円形を呈する。

ピット８

調査区北東側に位置する。確認面での規模は長径0.25m、短径0.25m深さ22cmを測る。平面形は円形を呈する。６・７・８号ピット例の規則性はない。

ピット９

調査区東側に位置する。１号土壙を切っている。確認面での規模は長径0.50m、短径0.45m、深さ75cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する。

ピット13

調査区中央付近に位置する。掘り込み面は３層である。確認面での規模は長径0.4m、短径0.35m、深さ30cmを測る。平面形は楕円を呈する。

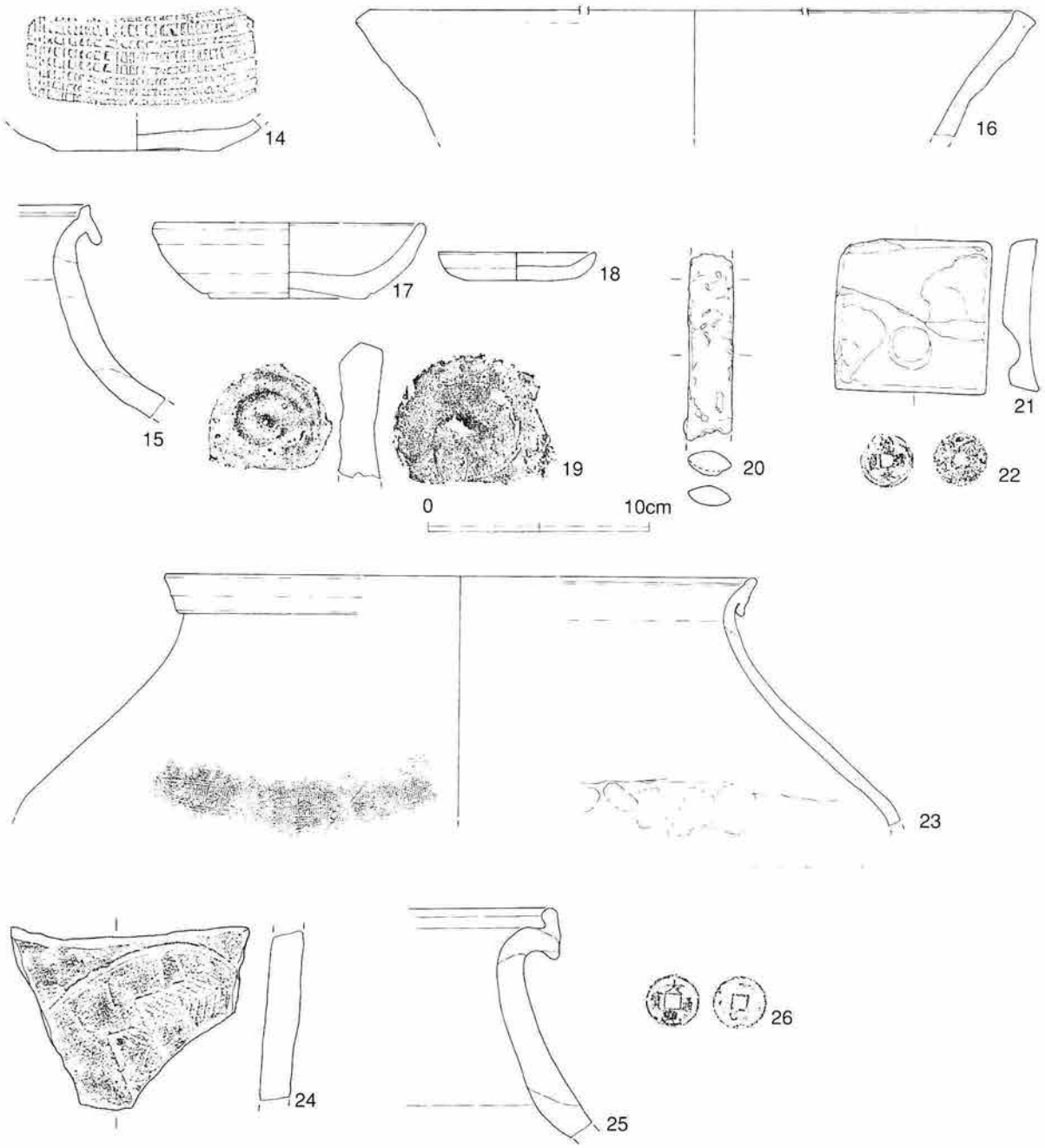


図８　１面までの出土遺物（１）

（２）２面出土遺物（第11図40～57）・（第12図58～76）・（第14図77～119）

40は青磁折縁鉢口縁部、41・42は山茶碗窯捏ね鉢体部～底部。43は常滑捏ね鉢体部～底部、44は土器質鉢型手焙り口縁部、45～55は糸切り底のかわらけ皿である。45～47はかわらけ皿大、48～55はかわらけ皿小で、51は打ち欠き痕あり、55は穿孔あり、56土製品蓋？、57は錠前である。58～87は土壙１出土の遺物である。58～73は糸切りかわらけ皿である。58は異形かわらけ、59～65、67はかわらけ皿大で、63は灯明皿として使用。66はかわらけ皿中、68～73はかわらけ皿小で、68は他の物より古い。74～76は銭である。74は皇宋通寶、75は熙寧元寶、76は元祐通寶である。

77は青磁劃花文底部、78は白磁口兀皿口縁部、79は白磁碗体部～底部、80～82は瀬戸入子口縁部、83は山茶碗窯捏ね鉢口縁部、84は常滑壷口縁部、85～89は常滑甕口縁部、90～102はかわらけ皿である。90は手づくねかわらけ皿大、91～94は糸切りかわらけ皿大、95・96は手づくねかわらけ皿小、97～102は糸切りかわらけ皿小である。103は鞴羽口、104～106は銭で104は治平元寶、105は元祐通寶、106は紹

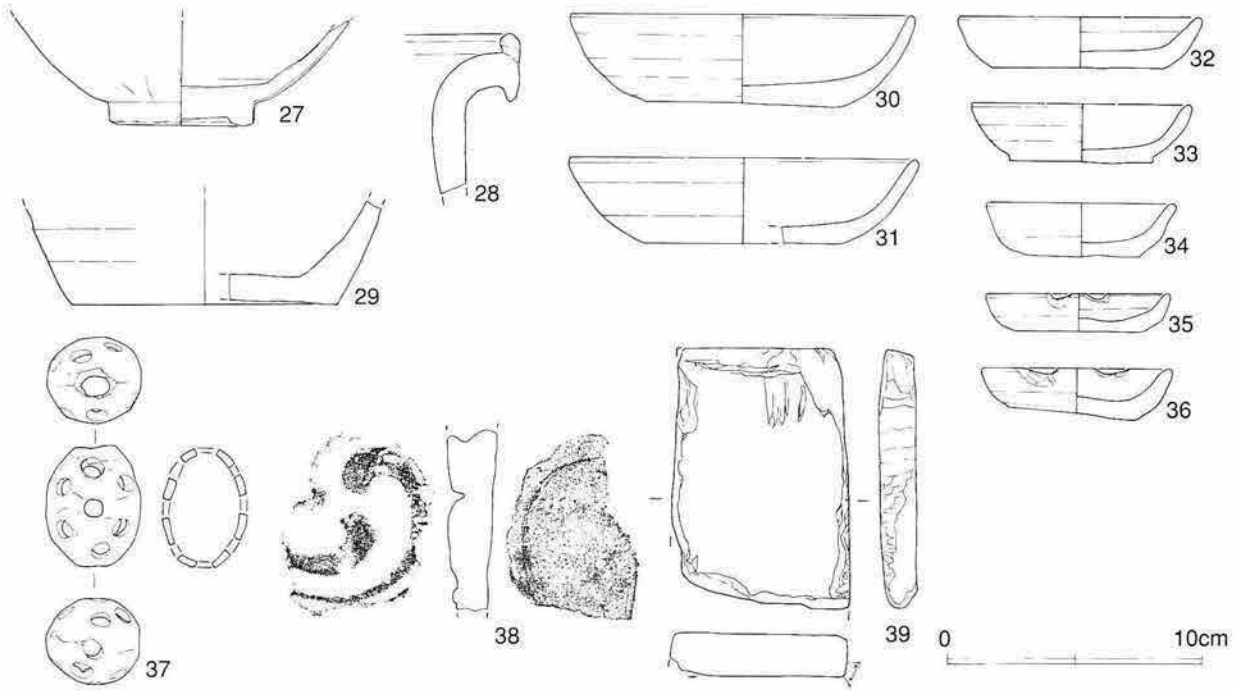


図９　１面までの出土遺物（２）

聖元寶である。107～112は土壙１、113～119はピット９の出土。107は青磁折縁鉢口縁部。108～112はかわらけ皿小で打ち欠き痕あり、灯明皿として使用。119はコースター状の極小かわらけ皿である。

第３節　３面検出の遺構と遺物

（１）遺構

井戸１

調査区中央付近の西側寄りで検出された。掘り込み面は、３面に土壙が重なるようにあったのではっきりしないが、この面として取り扱った。

井戸の掘り方は確認面での規模は長径7.5mで円形に近い平面形を呈し、中以下では、一辺0.8m、前後の隅丸方形を呈している。下底面は確認面から約1.8mの深さを持つ。井戸の掘り方は地山を掘り込み、木枠を持たない素掘りである。確認面　1.5mのところで湧水が出る。覆土上層では特に確認面では拳大の土丹塊が多く投げ込まれており遺物に色々と混入していた。

土壙16

調査区北側中央付近に位置する。北側部分を調査区で切られている。確認面での規模は長径0.7m、短径0.25m、深さ11cmを測る。平面形はおそらく楕円形と思われる。

土壙17

調査区北側に位置する。確認面での規模は長径0.75m、短径0.55m、深さ26cmを測る。土壙の西側下部に25cm×25cmのピット状の堀込みが伴うがこの遺構とは別のものと思われる。平面形は楕円形を呈する。主軸方位はN－40°－W方向を示す。

土壙18－１

調査区中央よりやや西寄りの北側方向に位置する。この土壙は３穴切り合っていて一番新しい。確認面での規模は、長径0.7m、短径0.45m、深さ34cmを測る。平面形は楕円形を呈する。主軸方位はN－２°－W　方向を示す。

ピット18－2

18－1の北側に位置する。掘り込み面は　層である。確認面での規模は長径0.5m、短径0.3m、深さ28cmを測る。平面形は楕円形を呈する。18－1より古い。

ピット18－3

18－1より西側部分に位置し、本ピットの方が古い。確認面での規模長径0.25m、短径0.2m、深さ13cmを測る。

柱穴19

調査区北側の西側寄りに位置する。柱穴中に礎板を伴う。確認面での規模は長径0.28m、短径0.28m、深さ15cmを測る。掘立柱建物の柱穴と思われる。

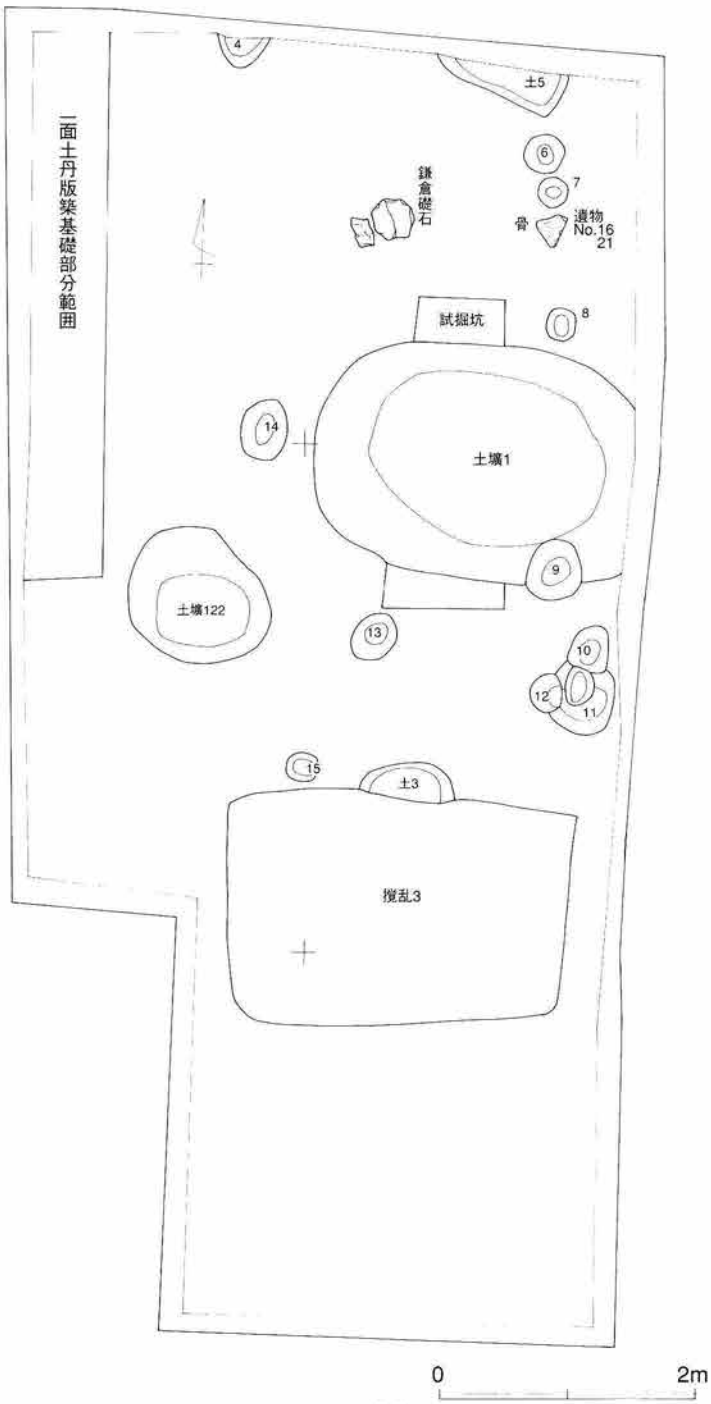


図10　2面全体図

土壙20

調査区北側の東寄りに位置する。遺構75、132により切られている。掘り込み面は　層である。

確認面での規模は長径0.55m、短径0.4m、深さ17cmを測る。

ピット21

1面の1号土壙を切っている。ピット22、柱穴23よりも新しい。確認面での規模は、長径0.4m、短径0.25m、深さ15cmを測る。

柱穴23

1面の遺構により南側部分を切られている。確認面での規模は、長径0.45m、短径0.28m、深さ15cmを測る。

土壙24

調査区北側の西寄りに位置する。東端をわずかにピットにより切られている。又中にピット状のくぼみを2穴もつ。規模は長径0.65m、短径0.35m、深さ10cmを測る。

柱穴26

調査区の土壙62・66の間に位置する。規模は長径0.55m、短径0.5m、深さ20cmを測る。

掘立柱建物の柱穴の一部と思われる。

土壙29

2面の土壙1に切られている。確認面から掘り込みは長径0.55m、短径0.5m、深さ25cmを測る。柱穴の

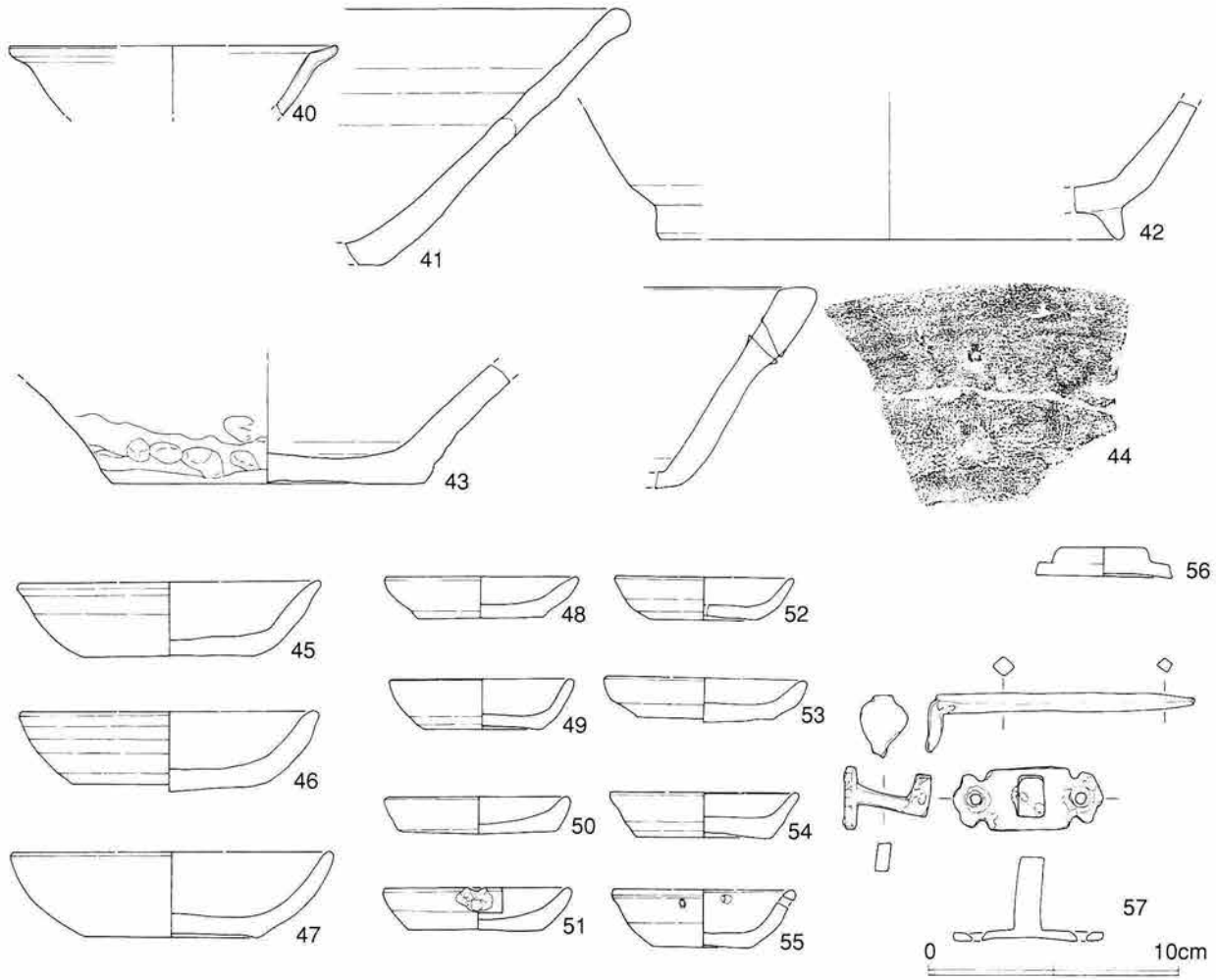


図11　2面出土遺物（1）

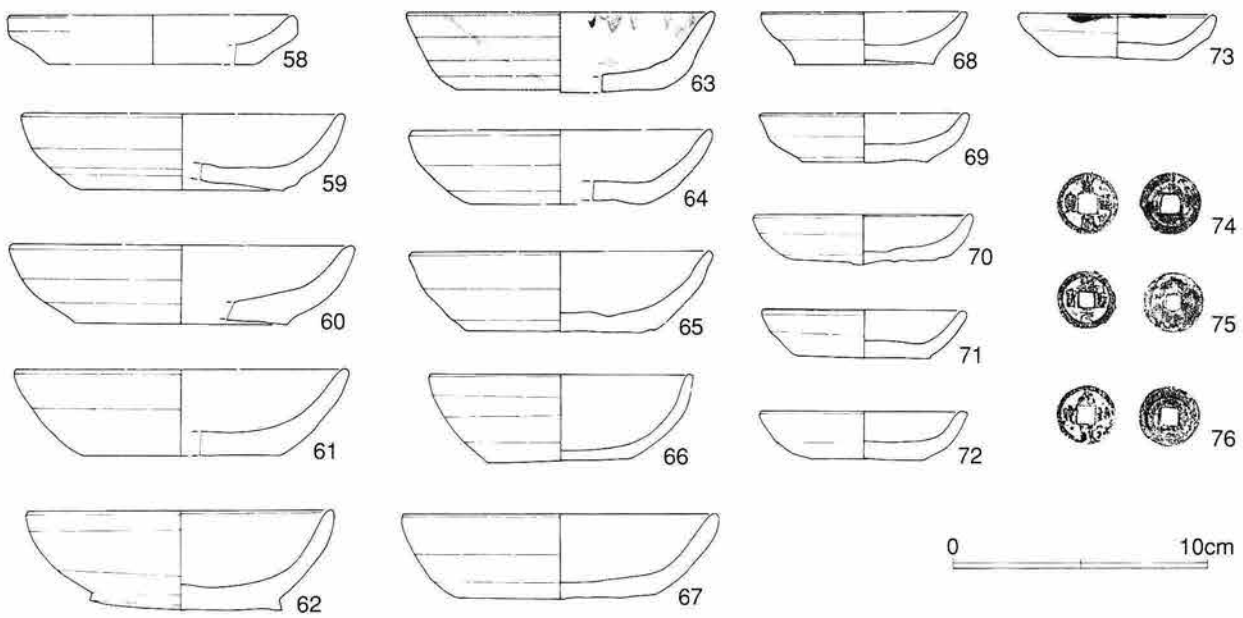


図12　2面出土遺物（2）

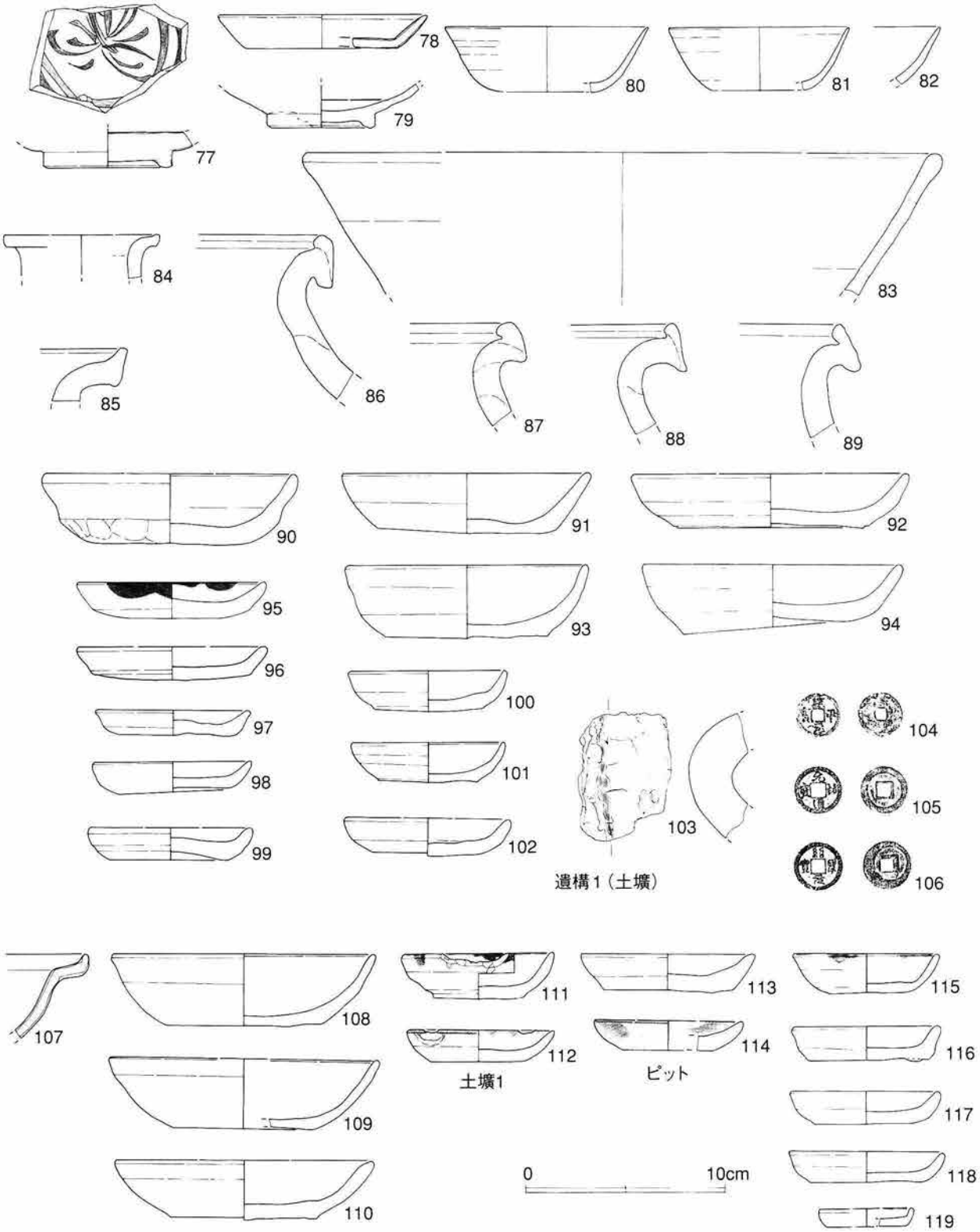


図13　2面遺構出土遺物

中にピット状の掘り込みは掘立柱建物の柱穴と思われる。

柱穴32

調査区東側中央近くに柱穴30の南側に位置する。確認面の規模は長径0.6m、短径0.4m、深さ48cmを測る。方形竪穴の柱穴と思われる。

柱穴34

柱穴32の南下に位置する。確認面での規模は長径0.35m、短径0.3m、深さ15cmを測る。

柱穴36

調査区東側に位置し、東側部分を調査区外で切られている。確認面での規模は、長径0.3m、短径0.25m、深さ58cmを測る。

図15　3面全体図

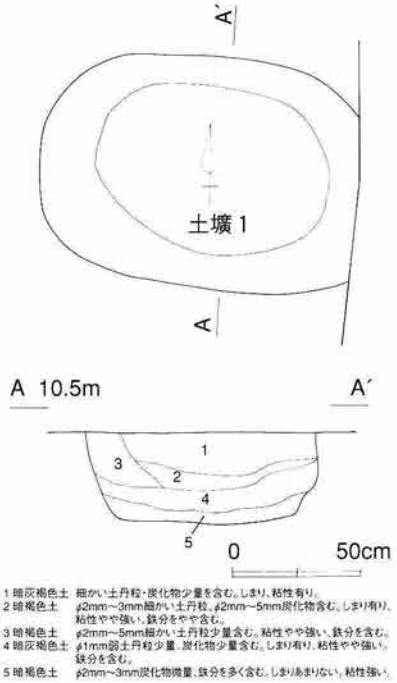


図14　1号土壙

柱穴37

調査区東側の柱穴36の北側に位置する。確認面での規模は、長径0.25m、短径0.28m、深さ19cmを測る。

土壙61

調査区の西側中央部分で検出された。撹乱により南側を切られ、北側をピットを切っている。確認面での規模は、長径0.8m、短径0.5m、深さ26cmを測る。主軸方位はN－63°－E方向を示す。

土壙66

調査区西側部分で検出され、南側を調査区外で切られている。土壙61の南側部分にあたる。確認面での規模は、長径1.25m、短径0.5m、深さ23cmを測る。主軸方位はN－48°－W方向を示す。

土壙123

調査区北側寄りで西側の土壙100の真横に検出された。確認面での規模は長径1.2m、短径0.95m、深さ15cmを測る。主軸方位はN－41°－W方向を示す。

土壙105

調査区の西側に位置し、1面近世倉に壊され西側部分を切られている。確認面での規模

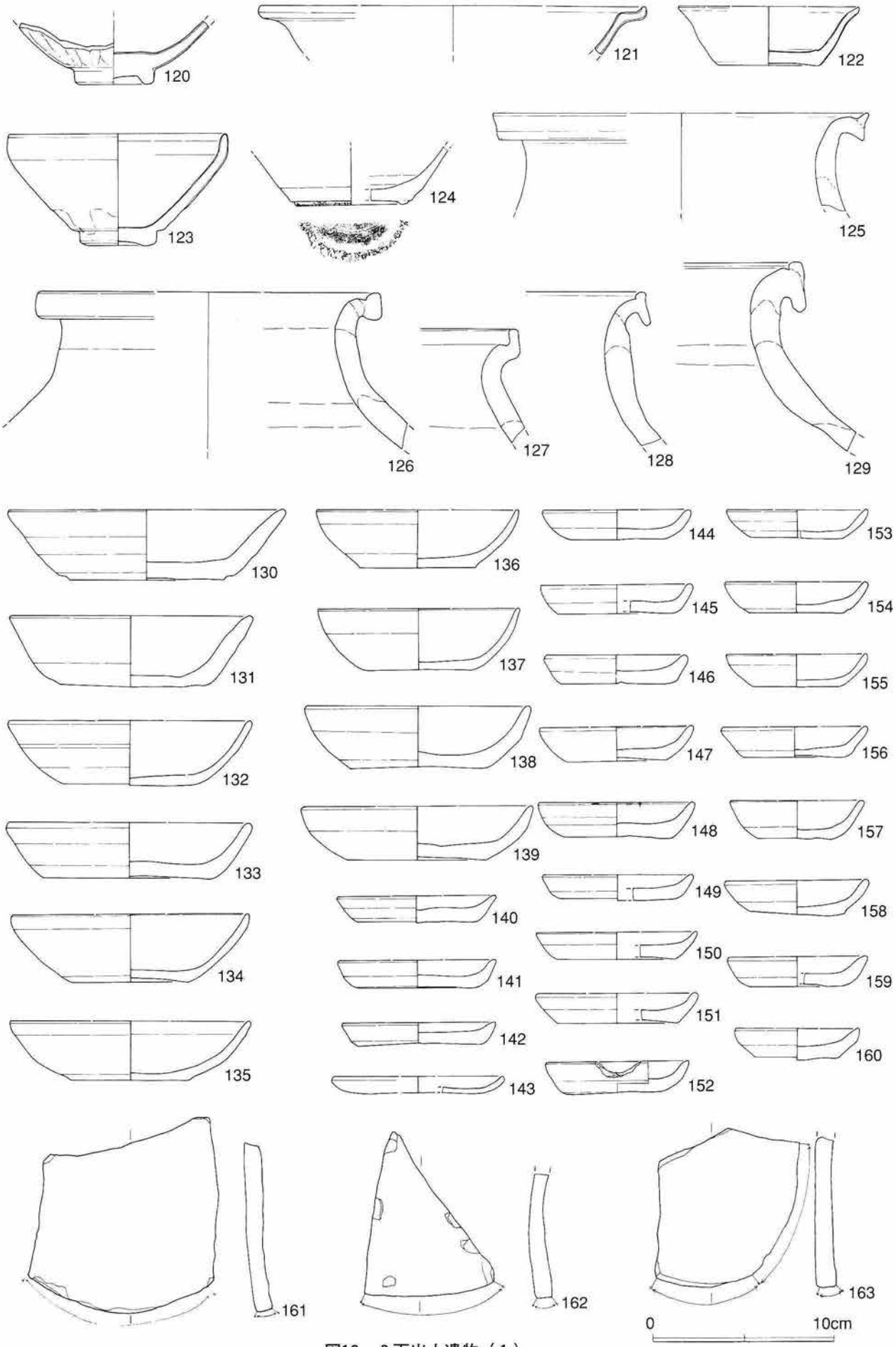

120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
0
10cm

図16　3面出土遺物（1）

は長径0.45　m、短径0.4m、深さ23cmを測る。覆土中の上層には拳大の土丹塊がつまりその下層からは炭化物混じりの土層がみられた。平面形態は不正楕円形を呈する。主軸方位はN－42°－E方向を示す。

土壙200

調査区の南東隅に検出された。確認面での規模は長径1.15m、短径0.65m、深さ72cmを測る。下面は検出出来なかった。ボーリング棒で確認したところ、1m以上下に深さをもつものと思われる。もしかすると井戸の可能性も考えられる。平面形態はほぼ円形に近い。主軸方位はN－5°－E方向を示す。

溝状遺構72

調査区の北東隅に位置する。北側東側は調査区により切られ、北側は東側調査区外へのびる。

確認面での長径1.5m、短径0.25m、深さ10cmを測る。主軸方位はN－5°－W方向を示す。

ピット110

調査区中央付近西側寄りに検出され井戸1を切っている。確認面での規模は長径0.4m、短径0.38m、深さ10cmを測る平面形態はほぼ円形を呈する。

（2）出土の遺物（第16図120～163）・（第17図164～168）

120は青磁蓮弁文体部～底部、121は青磁折縁鉢口縁部、122は白磁口兀皿、123は瀬戸天目碗、124は山茶碗体部から底部、125～127は常滑壷口縁部、128・129は常滑甕口縁部、130～160は糸切り底かわらけ皿である。130～135、138,139はかわらけ皿大、130・131のかわらけ皿大は新しく上層よりの混入と思われる。136・137はかわらけ皿中、140～160はかわらけ皿小である。142は13世紀後半で143は薄手である。152は打ち欠き、161～163は磨常滑である。

164・165は石製品の砥石で産地は鳴滝Ⅲ、166は琥珀、167・168は銭である。167は開元通寶、168は天禧通寶である。

3面遺構出土の遺物（第18図169～177）

遺構18の169は小形のコースター。遺構20の170はかわらけ皿小。遺構26の171はかわらけ皿小。遺構52の172はかわらけ皿大、遺構53の173はかわらけ皿小。遺構62の174は常滑鳶口壷口縁部。遺構63の175は伊勢系土鍋口縁部。遺構66の176は常滑壷口縁部、177は硯の破片。

第4節　4面検出の遺構と遺物

（1）遺構

柱穴112

調査区の中央付近で検出され、南東側の柱穴111と接している。掘込みは長径0.3m、短径0.3m，深さ36cmを測る。掘込み面の形態は方形を呈す。

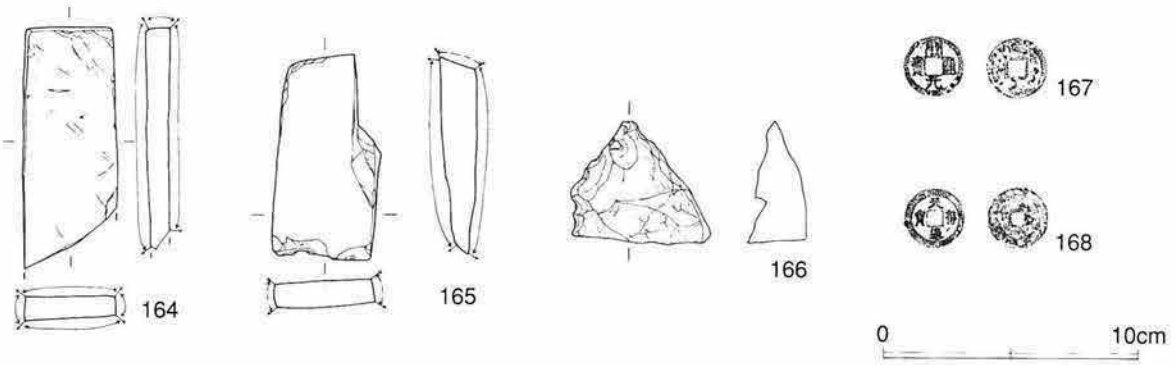


図17　3面出土遺物（2）

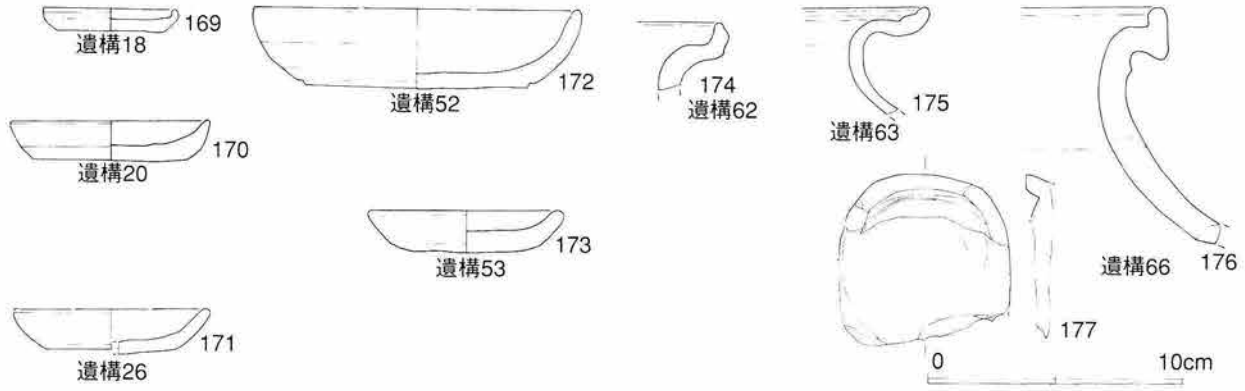


図18　3面遺構出土遺物

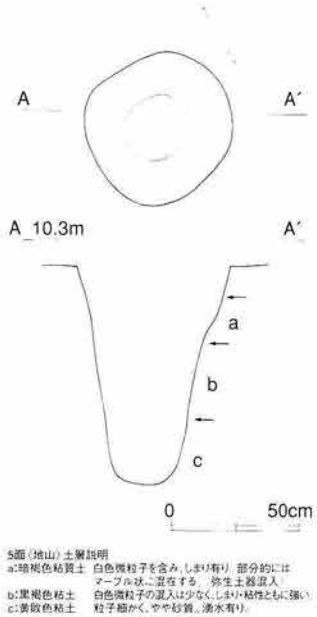


図19　井戸1

溝3

溝3は溝4と同様のところから検出され、溝4に切られている。確認面での規模は長径3.05m、短径1.1m、深さ45cmを測る。断面形はゆるやかなV字形を呈する。主軸方位はN－86°－E方向を示す。

溝4

調査区南側を東西に走る溝で、東壁の土層で確認すると2次期ある。溝3は4を切っている。溝4の遺構部分のほとんどは東側の調査区外にのびる。確認面での規模は長径3.2m、南北0.8m、深さ30cmを測る。溝の断面はV字形を呈する。主軸方位はN－83°－E方向を示す。

ピット76・78

調査区の北東隅に検出された。ピット76・78は切り合い関係にあり、76の方が古い。76は底面に石が2個敷いてあり、確認面での規模は、長径0.45m、短径0.3m、深さ20cmを測る。78は長径0.3m、短径0.25m、深さ20cmを測る。

ピット94

調査区北側端に位置する。柱穴は調査区により北側を切られている。確認面での規模は長径25cm、短径15cm、深さ20cmを測る。掘込み面の形態は円形を呈する。

柱穴95

調査区北側に位置する。確認面での規模は長径40cm、短径32cm、深さ18cmを測る。掘込み面の形態は細くて深い方形を呈する。

土壙100

調査区北側寄りで検出された。柱穴102に切られている。確認面での規模は長径0.85m、短径0.7m、深さ21cmを測る。平面形態は不整形な楕円形を呈する。覆土中に炭化物を多く含んでいた。主軸方位はN－3°－E方向を示す。

柱穴102

調査区の北側寄りで検出され土壙100を切っている。底面に石を置いてある。確認面での規模は長径0.4m、短径0.25m、深さ32cmを測る。平面形態は楕円形を呈する。ピット76との間隔が約2.1mであり関連があると思われる。

ピット106・107・108

調査区の中央付近の西側部分に位置する。ピット106・107は切り合い関係にあり、107の方が古い。確認面での規模は106の確認面での規模は、長径0.52m、短径0.4m、深さ60cmを測る。107の確認面での規模は、長径0.45m、短径0.4m、深さ10cm、を測る。それぞれの平面形態はほぼ円形を呈する。

ピット114、115

調査区の中央付近で検出され切り合い関係にあり、115の方が古い。確認面での規模は、114は長径0.45m、短径0.4m、深さ46cm、115は長径0.2m、短径0.2m、深さ23cmを測る。平面形態はほぼ円形を呈する。

柱穴125

調査区の中央よりに位置し、井戸1に切られている確認面での規模は長径0.4m、短径0.35m、深さ53cmを測る。平面形態は方形を呈する。

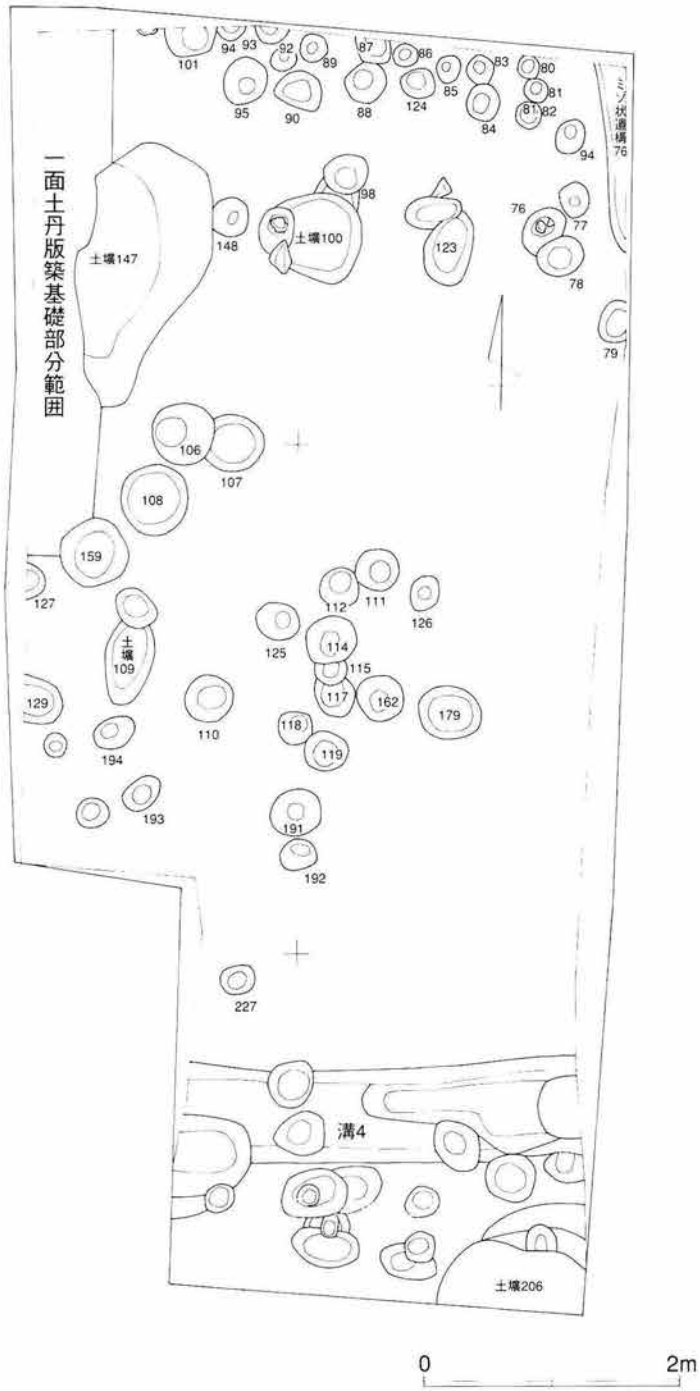


図20　4面全体図

柱穴132

調査区の北側に位置する。確認面での規模は長径0.45m、短径0.4m、深さ54cmを測る。平面形態は深くて方形を呈する。

柱穴133

調査区の北側に位置する。確認面での規模は長径0.65m、短径0.6m、深さ60cmを測る。平面形態は深く大形の方形を呈する。

柱穴139

調査区の北側に位置する。確認面での規模は長径0.65m、短径0.45m、深さ62cmを測る。底面に8×12cmほどの硬化面あり。平面形態は深くて大きな方形を呈する。

柱穴144

調査区の北東に位置する。確認面での規模は長径0.6m、短径0.5m、深さ45cmを測る。平面形態は深くて方形を呈する。

柱穴158

調査区西側に位置する。確認面での規模は長径0.55m、短径0.55m、深さ46cmを測る。柱穴の南側部分に礎板の圧痕あり。平面形態は方形を呈する。

柱穴178

調査区の中央に位置する。確認面での規模は長径0.35m、短径0.3m、深さ33cmを測る。柱穴の上層に貝殻の砕片が入っていた。平面形態は方形を呈する。

柱穴188

調査区の中央部分に位置する。確認面の規模は長径0.45m、短径0.45m、深さ30cmを測る。柱穴内に炭化物が多く含まれていた。確認面での形態は方形を呈する。

土壙206

調査区南東隅で検出。柱穴237を切っている。当所は井戸と思い掘り下げていったが、その結果湧水もなく、断面緩やかな丸味をもつ土壙と判断。確認面での規模は長径1.05m、短径0.5m、深さ53cmを測る。平面形態は、楕円形を呈する。

（2）出土遺物

図21－178～188は2面出土遺物。178は山茶碗窯系捏ね鉢胴部～底部。179・180は常滑甕口縁部、181は常滑捏ね鉢口縁部にススが付着し灯明皿として使用、185は内折れかわらけ皿でコースター状を呈している、186・187はかわらけ皿小。188は宇瓦である。

遺構89の189は伊勢系土鍋口縁部。遺構94の190はかわらけ皿小。遺構100の191は手づくねかわらけ皿小。遺構105の192・193は常滑甕口縁部、194は手づくねかわらけ皿小、195はかわらけ皿大、196は平瓦。遺構106の197は手づくね白かわらけ皿であり、灯明皿としての使用痕あり。遺構108の198は常滑壷口縁部、199は平瓦。遺構114の200は手づくねかわらけ皿小。遺構115の201はかわらけ皿大。遺構123の202は常滑甕口縁部～胴部、203は胴部～底部、204はかわらけ皿小。遺構132の205は手づくねかわらけ皿大。遺構151の206は手づくねかわらけ皿小。

遺構161の207は青磁櫛掻文皿底部、208は瀬戸脚付き大皿底部、209～215は糸切りかわらけ皿である。209・210はかわらけ皿大、211～214はかわらけ皿小、215は極小かわらけ皿あり、上層の混入と思われる。216～218は瓦で、216は丸瓦、217・218平瓦である。

遺構182の219は内折れかわらけ皿でコースター状の小である。

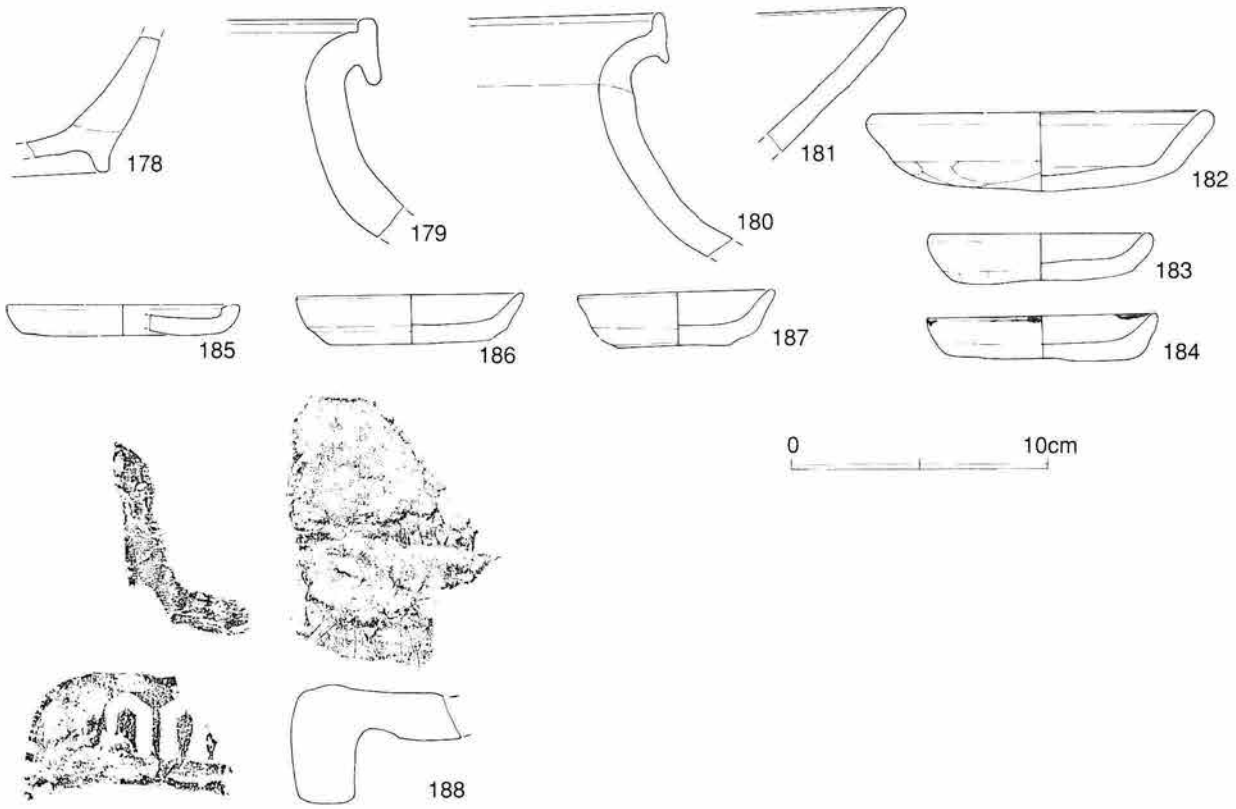


図21　4面出土遺物

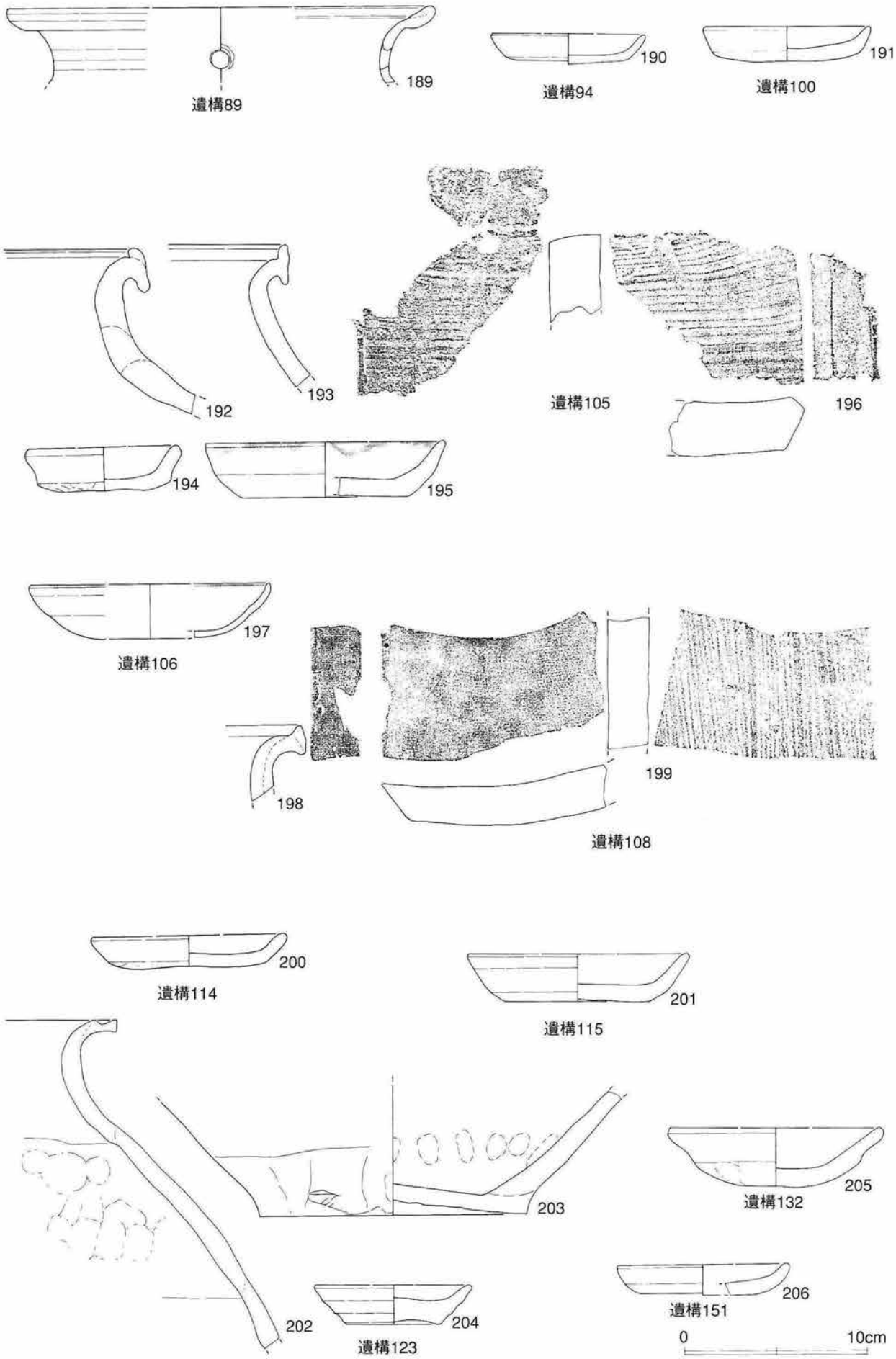


図22　4面遺構出土遺物（1）

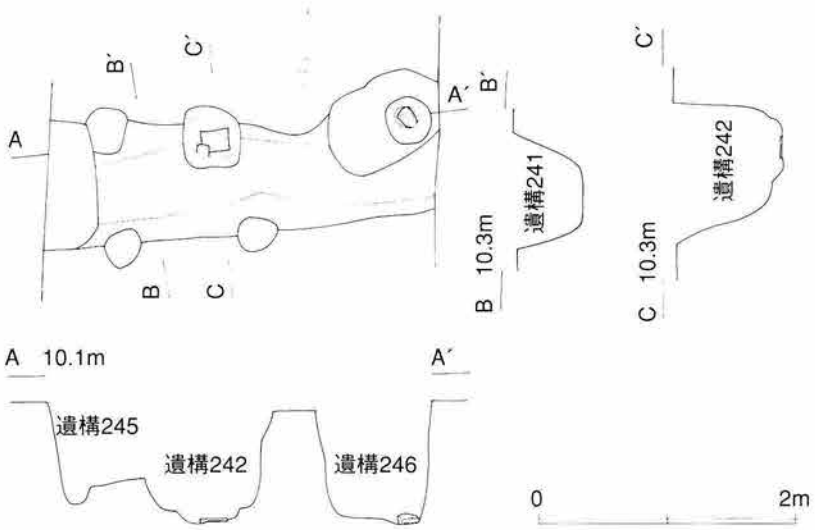


図23　溝３

遺構207の220は山茶碗窯捏ね鉢底部である。

遺構210の221は土製品脚部分、222は石製品温石で切断痕がある。

遺構215の223は鉢形手焙り口縁部～底部、224～226はかわらけ皿。224はかわらけ皿中。227は石製品砥石で産地は鳴滝産である。

遺構219土壙の228は銭で治平元寶である。

229～256は銭である。229と230は開元通寶、231・232は？元重寶、233至道元寶、234・235は咸平元寶、236は景徳元寶、237は祥符元寶、238は景祐元寶、239～242は皇宋通寶、243は治平元寶、244～246は熙寧元寶、247～249は元豊通寶、250は海東通寶、251・252は紹聖元寶、253は大観通寶、254は政和通寶、255は淳熙元寶、256は慶元通寶の計29枚が出土している。

第５節　５面検出の遺構と遺物

（１）遺構

柱穴155

調査区の北西側に位置する。確認面での規模は長径40cm、短径40cm、深さ47cmを測る。堀込み面の形平面形態は、深くて方形を呈する。

柱穴135

調査区の北東隅に位置する。確認面での規模は長径55cm、短径50cm、深さ52cmを測る。柱穴の底面に約11cm×15cmの礎板痕あり。平面形態は大形で深く方形を呈する。

柱穴138

調査区北東側に位置する。確認面での規模は長径62cm、短径50cm、深さ46cmを測る。柱穴の底面は小さく方形であるが、平面形態は大形で深く方形を呈する。

柱穴237

調査区南東隅で検出。土壙206に切られている。底はほぼ平坦で壁は垂直で下端近くがややオーバーハング気味に立ち上がる。確認面での規模は長径80cm、短径35cm、深さ46cmを測る。平面形態は、方形を呈する。

柱穴242

調査区南側で検出。３号溝を切る。245・246と同様、大形の方形の柱穴である。柱穴内に貝殻混入（４面構成土）が流入。下部に拳大の礫があり、根固めの礫と思われる。確認面での規模は長径95cm、短径90cm、深さ85cmを測る。

柱穴245

調査区南側で検出され西側を調査区で切られ、３号溝を切る。大形の柱穴で貝殻が混入（４面構成土）。下部に拳大の礫があり、根固めの礫と思われる。確認面での規模は長径110cm、短径40cm、深さ　61.5cmを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。

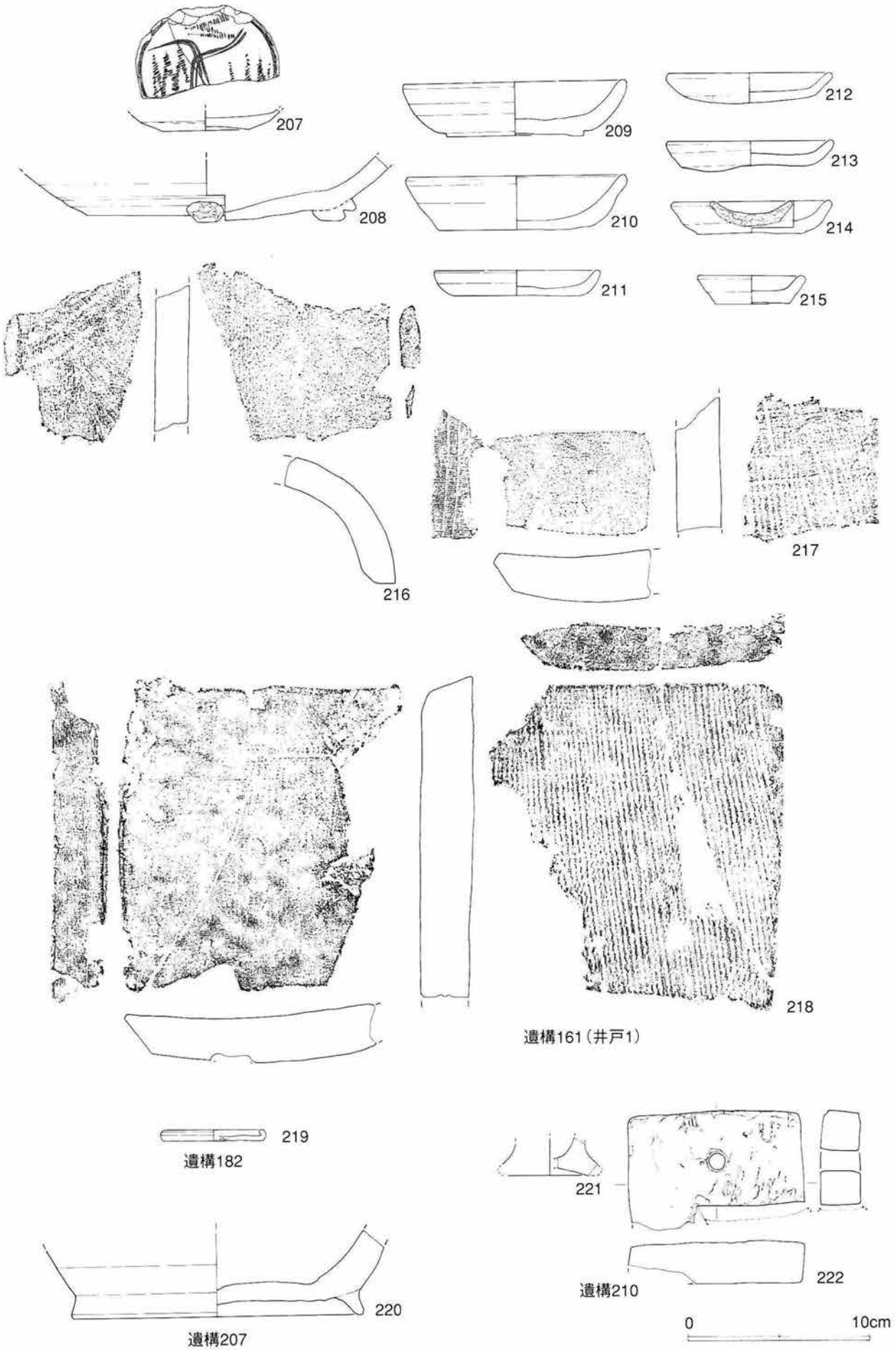


図24　4面遺構出土遺物（2）

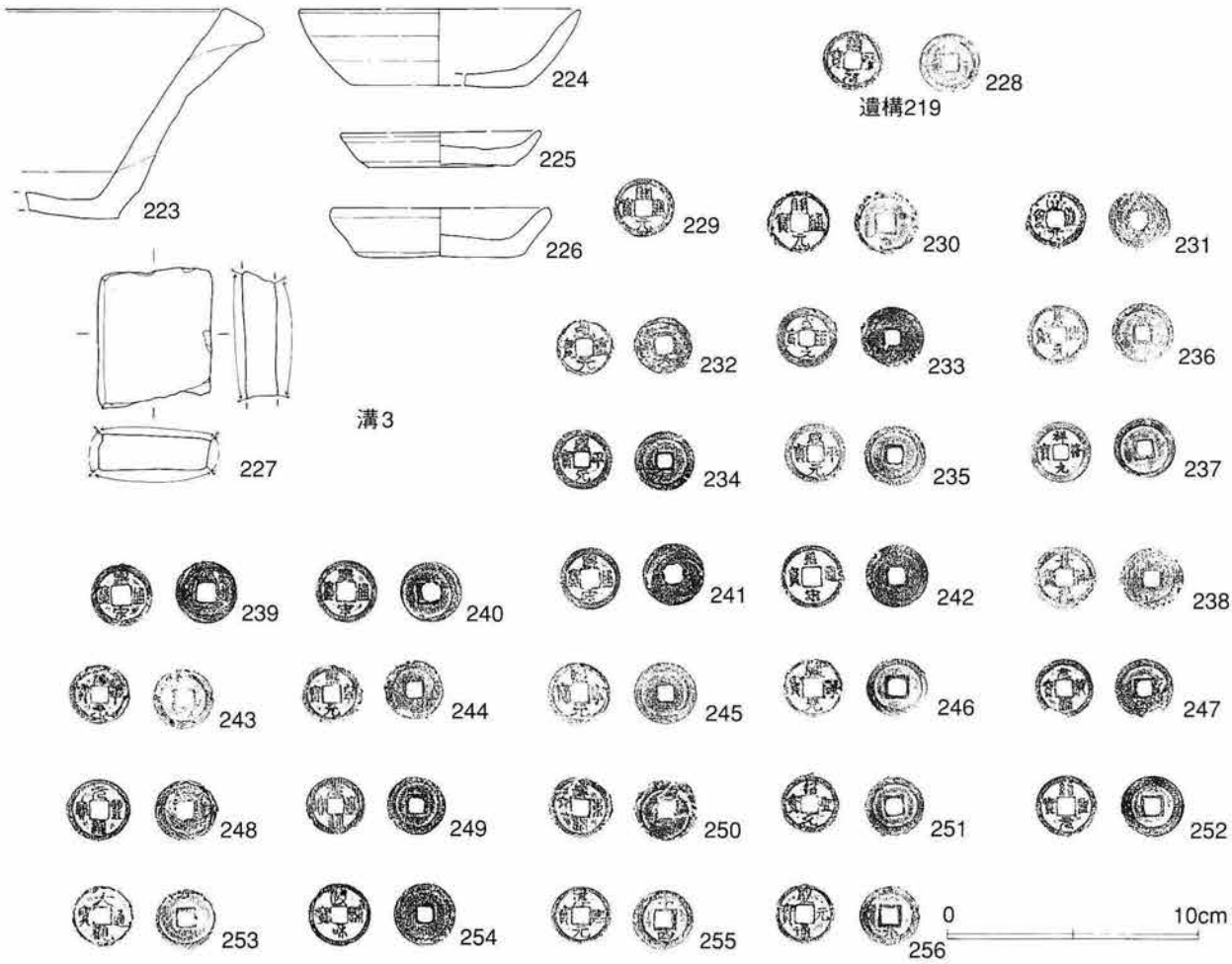


図25　4面遺構出土遺物（3）

溝1（第30図）

3本の溝中の調査区北側で検出された。東西方向の溝である。2号溝同様、中世地山面を堀込んで造られている。壁面は緩やかにカーブをもち立ち上がる。確認面での規模は長さ4.8m、最大幅0.9m、深さ45cmを測る。平面形態は逆台形を呈する。主軸方位はN－29°－E方向を示す。

溝2（第31図）

調査区中央近くで検出された東西方向の溝である。地山面を堀込んで造成されている。壁面は緩やかに立ち上がる。確認面での規模は長さ4.6m、幅0.9m、最大深さ60.5cmを測る。平面形態は逆台形を呈する。主軸方位はN－68°－Wを示す。

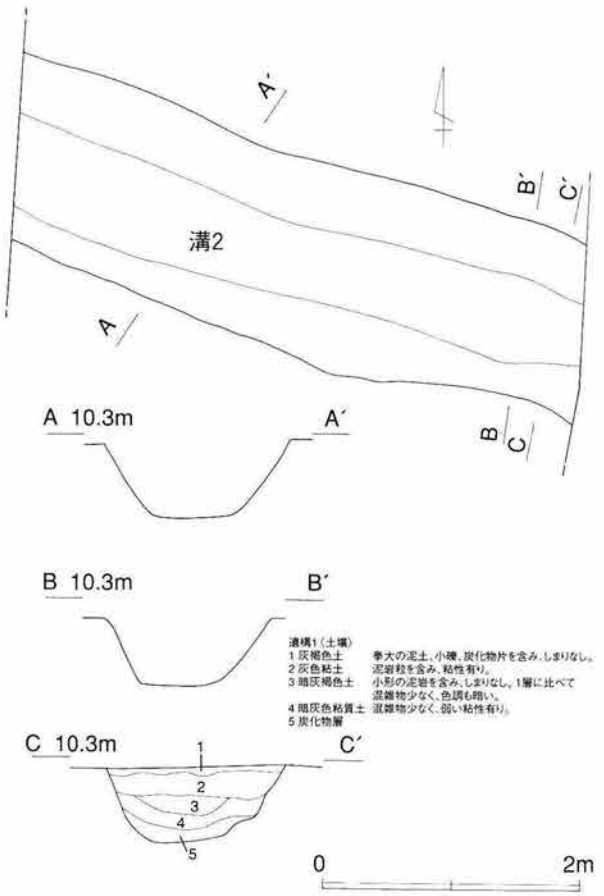


図26　溝2

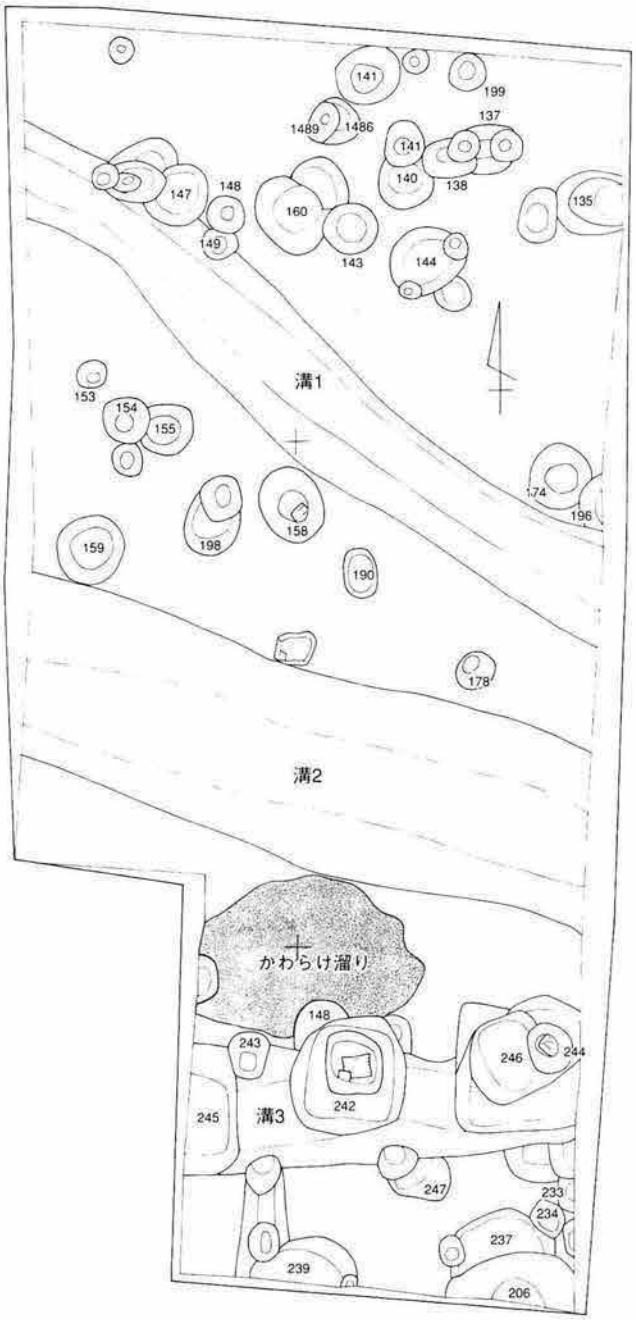


図27　5面全体図

0　2m

（2）出土遺物（第27図257～278・第28図279～282・第29図283～287））

257・258は青磁蓮弁文碗体部、259は浮文青白磁皿、260・261は山茶碗窯捏ね鉢。262～276はかわらけ皿で、262はかわらけ皿大で穿孔あり。263はかわらけ皿大、264～274はかわらけ皿小、271はこの面に伴わない物である。279～280は瓦である。279は軒丸瓦、280は軒平瓦である。281は石製品で温石、282は磨常滑である。

283はかわらけ皿大である。

284はかわらけ皿小である。

285・286は瓦で、285は男瓦、286は平瓦である。287は金属製品で壷金である。

遺構出土遺物（1）（第32図288～303）

遺構139の288はかわらけ皿古手13世紀初め。

遺構148の289は手づくねかわらけ皿小である。

遺構152の290は宇瓦である。

遺構158の291は手づくねかわらけ皿大である。

遺構171・172の292・293は鉱滓である。

遺構182の294は打製石斧である。

遺構190の295は手づくねかわらけ皿大である。

遺構194の296は男瓦である。

遺構196の297・298は13世紀前～中頃のかわらけ皿小である。

遺構241の299・300は手づくねかわらけ皿大である。

遺構242の301鉄製品で針状のもの。

遺構244の302は青磁櫛掻文碗である。

遺構246の303は手づくねかわらけ皿大である。

5面遺構出土遺物（2）（第33図304～323）

304～318の遺物はかわらけ皿である。288～290は手づくねかわらけ皿大、307は黒縁瓦器碗、308・309・310は手づくねかわらけ皿小、311～320はかわらけ皿小、318は打ち欠き痕あり。320はコースター、

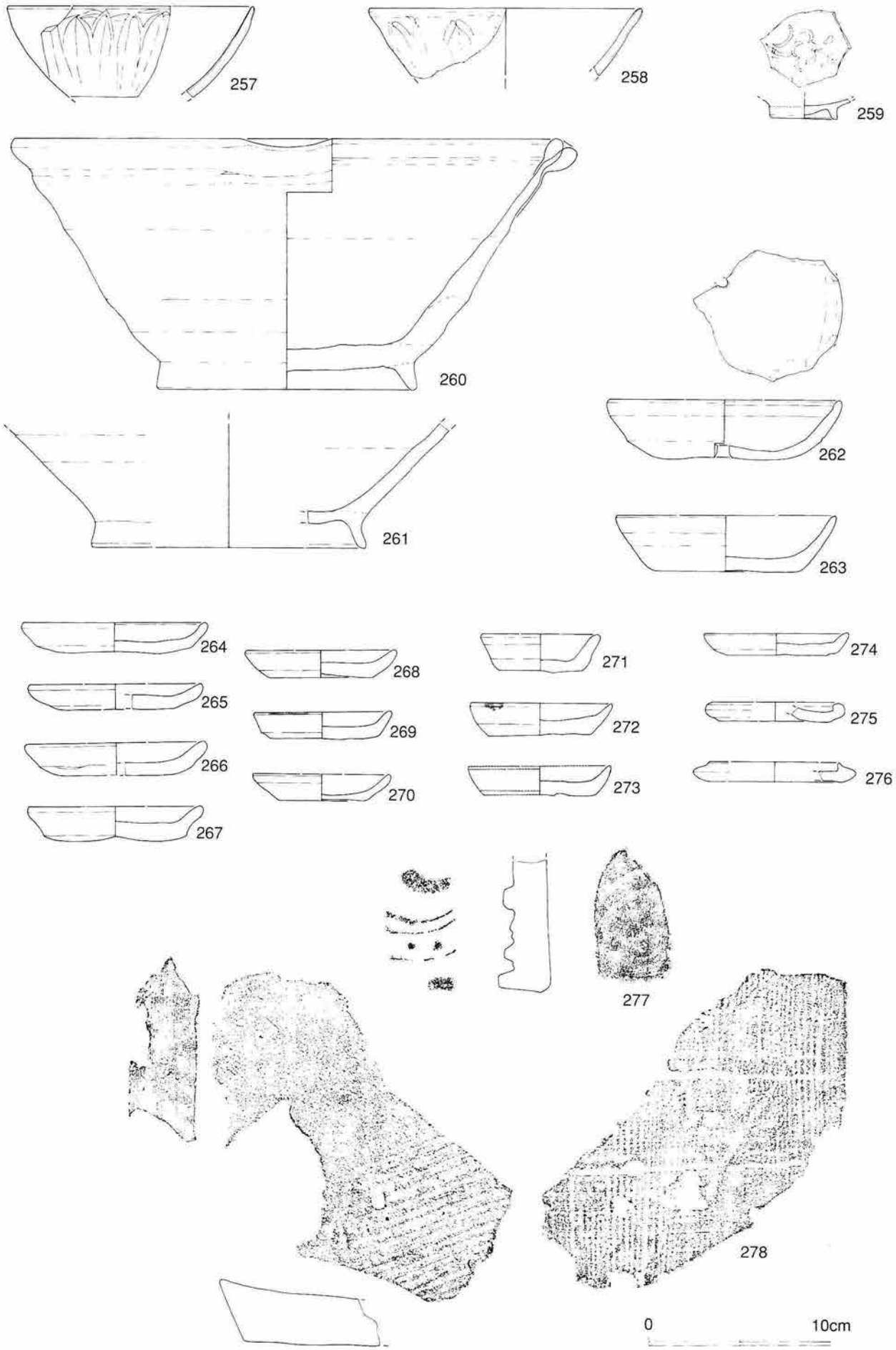

257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
0
10cm

図28　5面出土遺物（1）

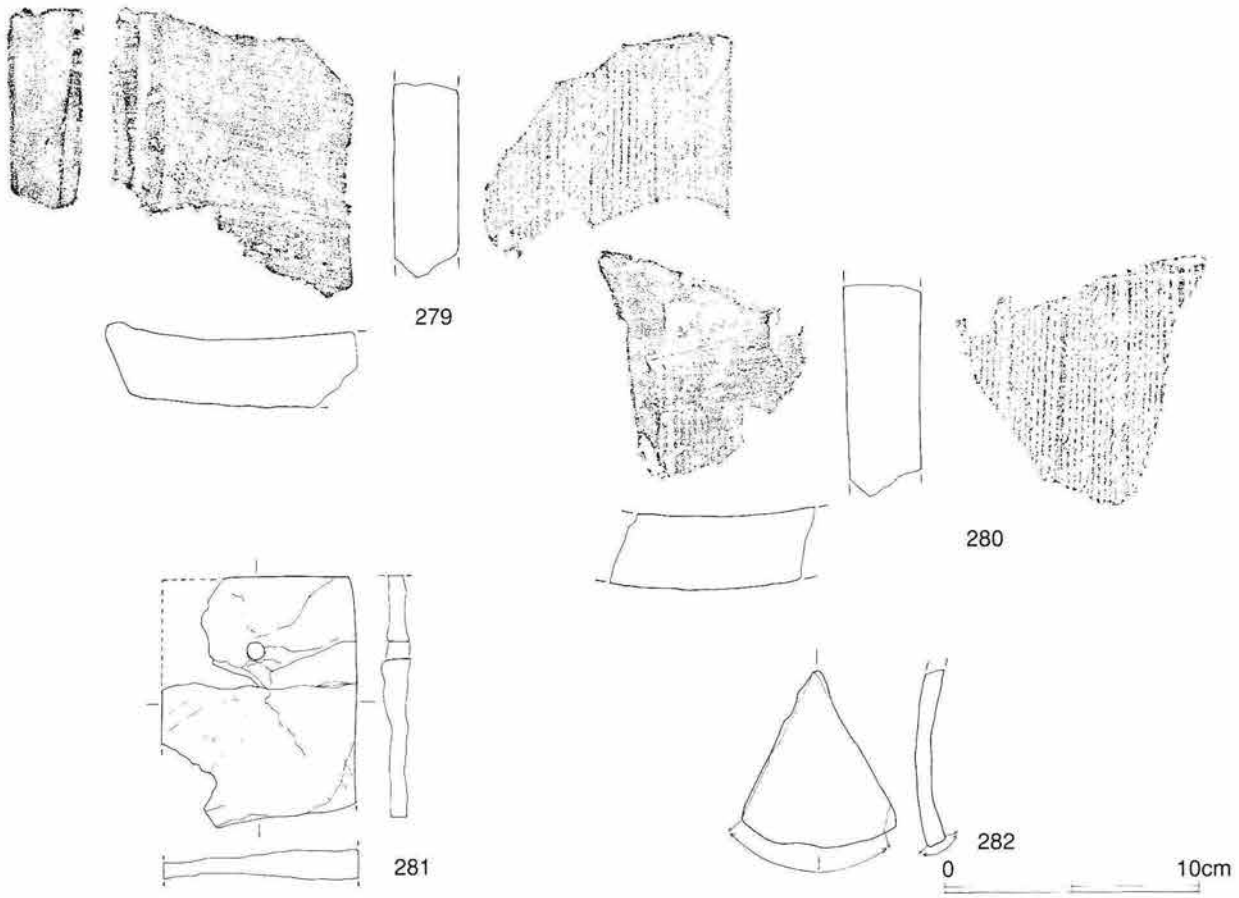


図29　5面出土遺物（2）

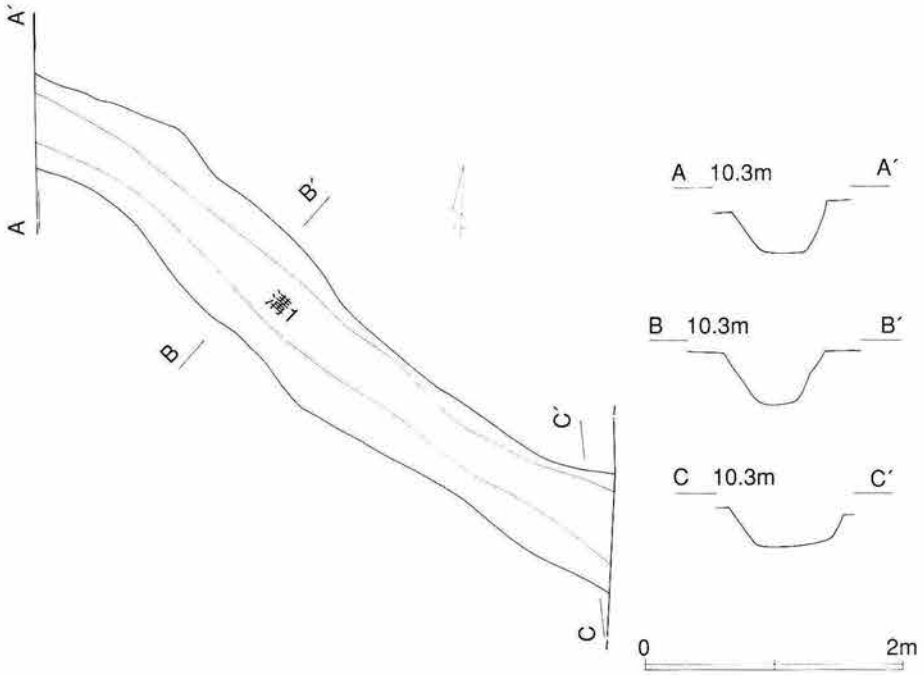


図30　溝1

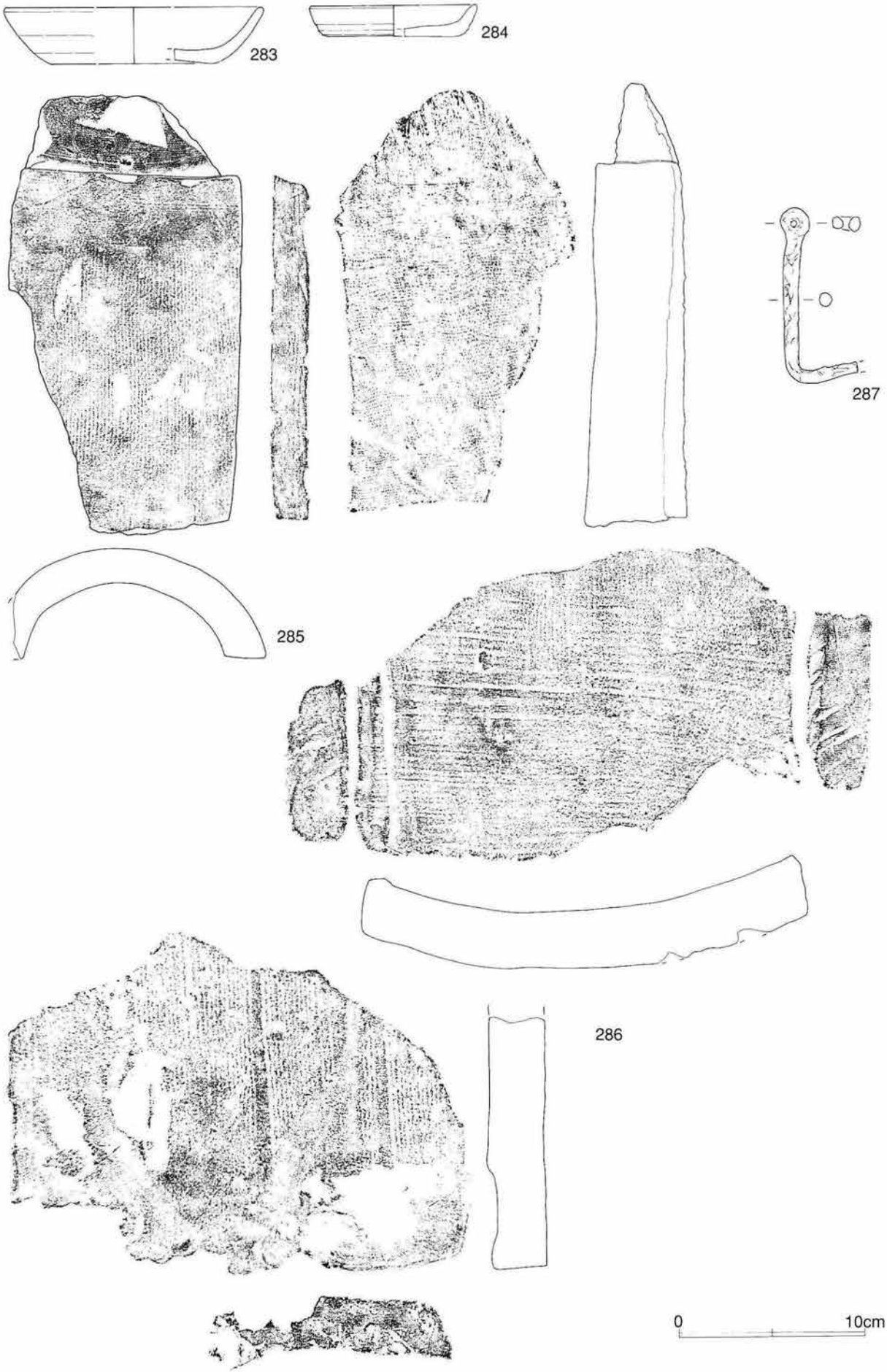


図31　5面出土遺物（3）

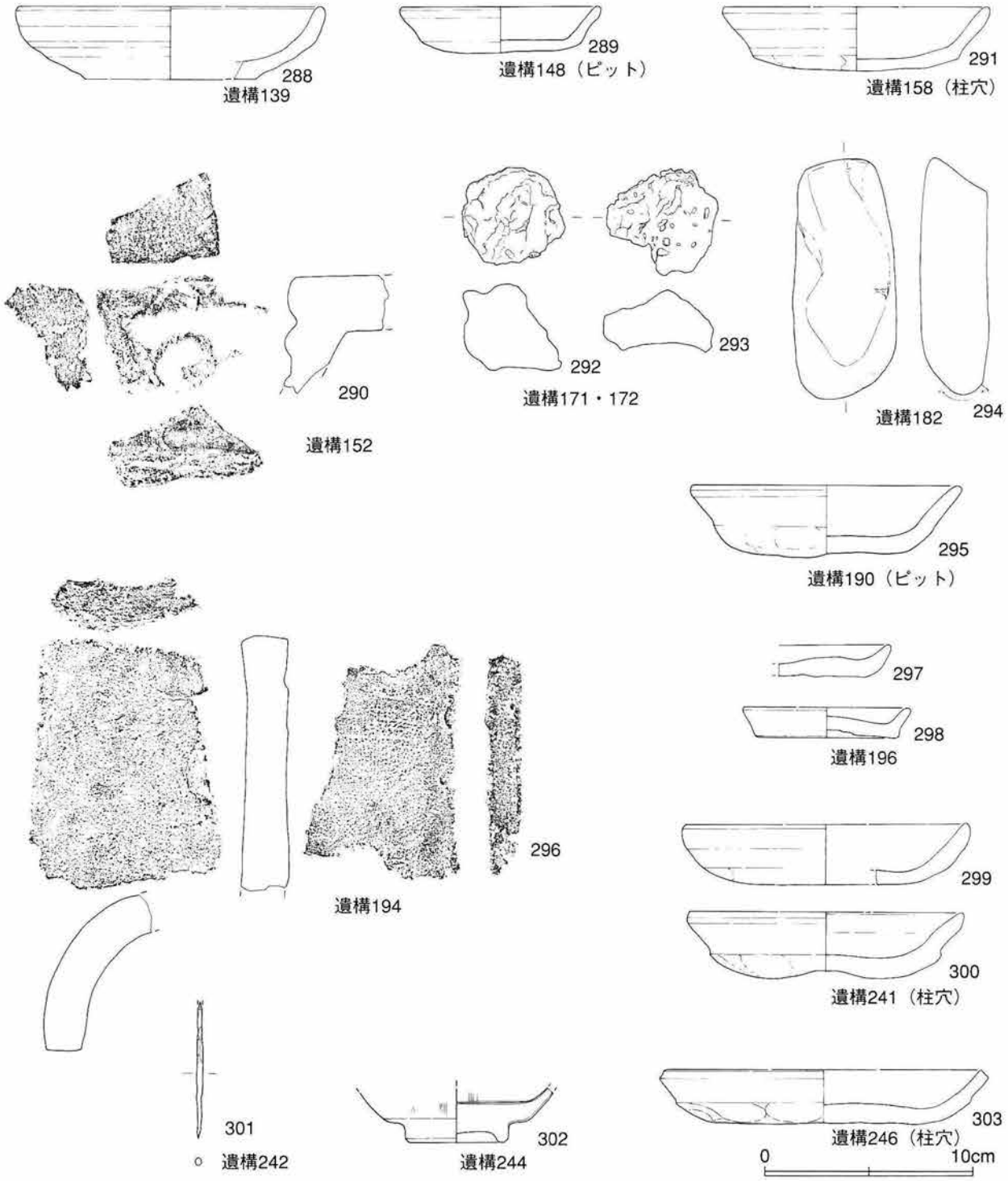


図32　5面遺構出土遺物（1）

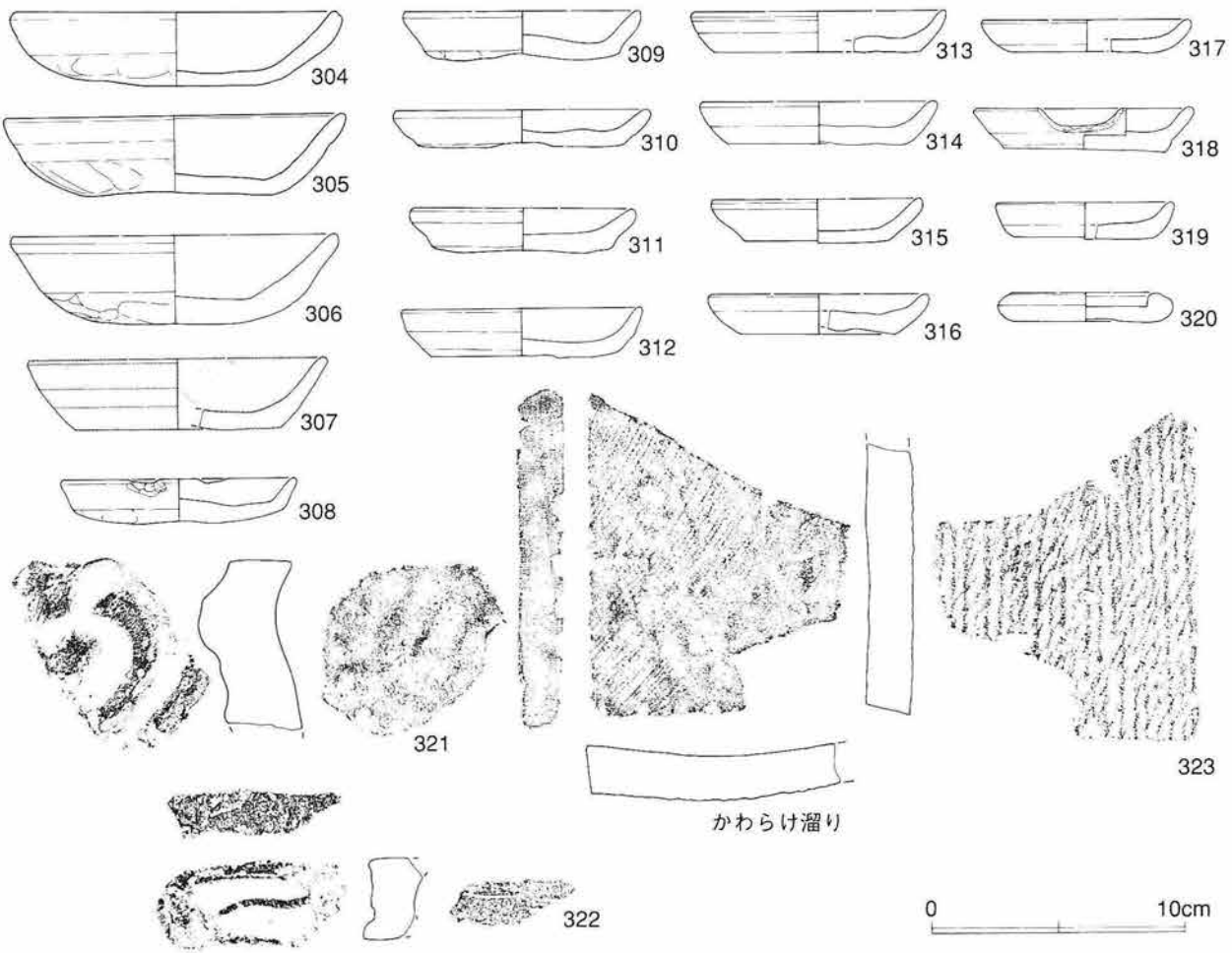


図33　5面遺構出土遺物（2）

321～323は瓦である。321軒丸瓦、322は宇瓦、323は平瓦である。これらの遺物はかわらけ溜まりより出土。

第6節　古代以前の出土遺物（第34図1～18・図版12）

本遺跡から出土した古代以前の遺物は、中世地山面ないし、地山を掘り込んだ遺構より出土したものである。出土総点数107点で、土器片で・全般的に弥生時代中期宮ノ台期に属するもので、わずかに後期の遺物が出土している。また、古代と思われるものが数点出土している。以下に図下した資料を記す。

第34図―1は単純口縁の壷の口縁部である。後期のものと思われる。2は壷の肩部である。肩部に斜縄文が施され、器面はよく磨かれ、前面に赤彩が施されている。3は大型の壷の肩部である。斜縄文の下端を2条の沈線で区画する。4は外来系の壷である。扇状文が櫛歯状工具により施されている。5は壷の外反する口縁部である。口唇部直下に2個の穿孔を有する。6は壷の胴部であり磨きが施され、上端に傾斜する直線を施す。おそらく横位浮縄文。7は大型の壷である。器壁が厚く内外面にハケ調整がされる。8は胴部片で斜縄文。2条単位の櫛歯工具で斜格子文を加え、縄文模様を竹管状工具で区画している。9は甕の口縁部で内外面ともにハケ調整が施される。口唇部に竹管状工具による刺突が加えられる。

10は甕の口縁部で内外面ともにハケ調整が施され、口唇部に竹管状工具による刺突が加えられる。

11は甕の口縁部で内外面ともにハケ調整が施される。口唇部に棒状工具による斜位のキザミが施される。12は甕の口縁部で内外面にハケ調整が施される。口唇部に鋭利な工具で斜位にキザミが施される。

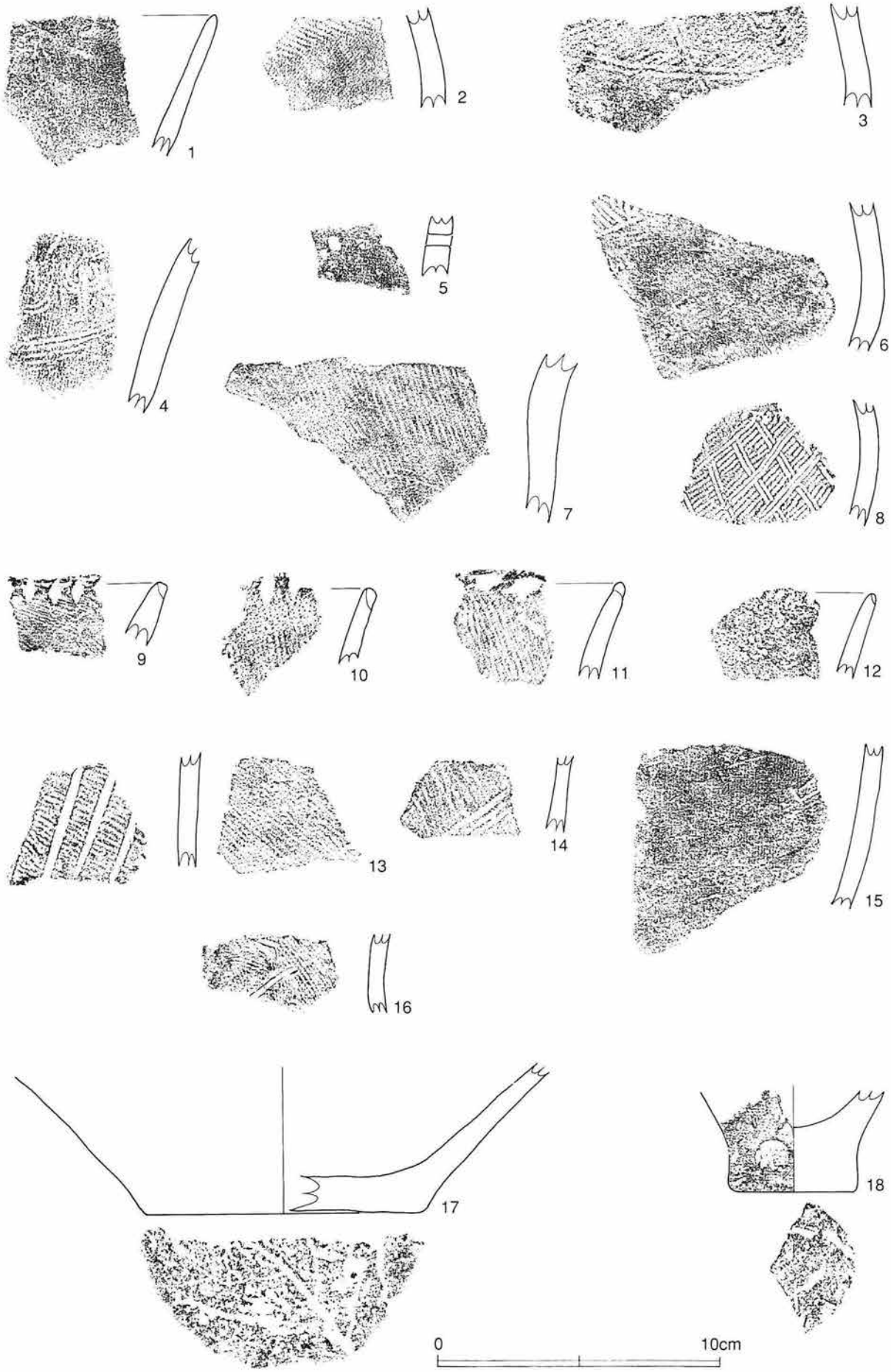


図34　古代以前の出土遺物

13は甕の頸部でハケ調整の後、櫛歯状工具による連続する斜傾の沈線が施される。14は甕の頸部でハケ調整の後、櫛歯状工具による傾斜する直線が施される。15は甕の胴部である。16は内外面ハケ調整の後、波状の沈線を施す。17は壷の底部である。器外面は斜め方向のハケ調整が施され、底部からほぼ直線的に開く器形を呈し、底部に木葉痕を残す。内面は丁寧にナデが施され、胎土は他の土器と異なり、砂粒を含まず良く焼成されている。外来系か？18は宮ノ台式期の甕の底部である。厚みがあり突出する形態と思われる。底部木葉痕？以上のように本遺跡から出土した弥生時代中期から後期の遺物を観察すると、宮ノ台式の資料がほとんどである。また、幅をもちながら宮ノ台式の全般に渡る資料が見られる。鎌倉市街地では、雪ノ下の南御門遺跡、大倉幕府周辺遺跡群の出土例も見られるように宮ノ台式を通じて継続的な周辺に当該時期の集落がもっと広い範囲で展開するものと思われる。

第７節　大倉幕府周辺遺跡出土の軟体動物遺存体

１．はじめに

大倉幕府周辺遺跡の調査では、古代末から14世紀中頃にかけての遺構・生活面等から、軟体動物遺存体が出土した。以下では、これらの内容について報告を行う。

２．出土軟体動物遺存体の概要（表１・２・３）

本遺跡からは、腹足綱３種・二枚貝綱４種の合計７種の、最小個体数で18個体の軟体動物遺存体が出土した（表１・２）。種名が確認された種として、サザエ、アカニシ、ツキヒガイ、ハマグリ、チョウセンハマグリの５種がある。これらは、各遺構・生活面等から、１～７個体ずつ出土した。

大きさでは、傾向等は把握できなかったものの、サザエで殻径85㎜前後、ハマグリで殻高45㎜前後を示す資料があった（表３）。

観察された事項としては、まず、サザエとアカニシで欠損した個体が確認されたことがある（表３）。サザエでは口唇部を、アカニシでは殻軸以外を欠損した個体が各２個体認められた。また、表土掘削出土サザエ１個体については、上記の破損に加え、長径11.3㎜の穿孔痕が認められた。

３．考察

今回出土した遺存体は数が少なく、組成等は明らかにすることができなかった。しかし、確認された種は、ツキヒガイを除いては、鎌倉市内の中世に属する他の遺跡から頻繁に出土する種であることと、採集環境も同様に共通する内容であることを指摘できる。

表２　出土軟体動物遺存体の個体数一覧

綱名 / 種名 / 出土地点	腹足綱					二枚貝綱			
	サザエ（有棘）	サザエ（殻・有棘無棘不明）	サザエ（蓋）	ニシキウズガイ	アカニシ	ツキヒガイL	ハマグリR	ハマグリL	ハマグリ属の一種R	二枚貝綱種不明
５面　柱穴		1								
４面～５面　一括				5	+					+
４面　かわらけ溜り			1		2		1	2		
２面　土壙１						1				
１面　撹乱６									1	
表土掘削	2								1	

表１　大倉幕府周辺遺跡出土の軟体動物遺存体の種名一覧

腹足綱　GASTOROPODA

ニシキウズガイ科　Family Trochidae

ニシキウズガイ科の一種　Trochida gen.et sp.indet.

リュウテン科　Family Trochidae

サザエ　Turbo cornutus LIGHFOOT,1786

アクキガイ科　Family Muricidae

アカニシ　Rapana venosa（VALENCIENNES,1846）

二枚貝綱　BIVALVIA

イタヤガイ科　Family Pectinidae

ツキヒガイ　Amusium Japonicum（GMELIN,1791）

マルスダレガイ科　Family Veneridae

ハマグリ　Meretrix lisoria（RODING,1798）

ハマグリ属の一種　Maretrix sp

種　　名	出土地点	殻高mm※１	殻径・殻長mm※２	備　　考
サザエ（殻・有棘）	表土掘削	99.6	85.1 88.2	口唇部を欠損 殻頂と口唇部を欠損、長径11.3mm・短径3.9mmの孔がある
サザエ（殻・有棘無棘不明）	５面　柱穴			
サザエ（蓋）	４面　かわらけ溜り	40.2※３	36.6※４	
ニシキウズガイ科の一種	４面～５面	－ － － － －	－ － － － －	
アカニシ	４面～５面 ４面　かわらけ溜り	－ － －	－ － －	殻軸の一部と体層より上部の一部が残存、殻頂を欠損 殻軸の一部と体層より上部の一部が残存、殻頂を欠損
ツキヒガイL	土壙１	－	－	
ハマグリR	４面　かわらけ溜り	45.9	－	４面かわらけ溜まり出土の左殻とペアリングが可能
ハマグリL	４面　かわらけ溜り	45.9 45.9	－ －	４面かわらけ溜まり出土の左殻とペアリングが可能
ハマグリ属の一種R	１面　撹乱６	－ －	－ －	
二枚貝綱種不明	４面から５面	－	－	

※１　－印は計測不可を示す
※２　腹足綱では殻径の値を、二枚貝綱では殻長の値を記す
※３　長径の値を示す
※４　短径の値を示す

第3章　おわりに

本調査で検出した遺構は掘立柱建物・柱穴多数、礎石建物・礎石3、溝4条、井戸1基、土壙大形柱穴5穴（うち3穴は布掘？）などであり、およそ4時期の生活面を確認・調査した。その結果、最下面では、中世基盤層（第35図）D・Eが見つかり、近隣地点との対比から溝Eが新発見と判った。

また調査区南側にある大形柱穴は1辺約1m四方程の方形の掘り方をもち、鎌倉市街でも類例のない大規模な遺構であると考えられる。溝Cと重複するが布掘り遺構であったかは、検討を要する。

遺構の年代観は13世紀中頃～15世紀代と考える。又、本遺跡から出土した弥生時代中期から後期の遺物をみると、幅をもちながらも宮ノ台式全般に渡る資料がみられる。市街地では南御門遺跡、大倉幕府周辺遺跡群の出土例にも見られるように、宮ノ台式を通じて継続的に周辺に当該時期の集落がもっと広い範囲で展開するものと思われる。

参考・引用文献

『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』　第3分冊　鎌倉市教育委員会1993
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』　第1分冊　鎌倉市教育委員会1994
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』　第2分冊　鎌倉市教育委員会1998

図35　周辺の調査地点との対比図

出土遺物法量表

図版No.	遺物No.	面	種別	器種	口径	底径	器高	備　考
		確認調査						
図5	1	土壙1	かわらけ	皿	(9.2)	6.8	1.6	
図5	2	土壙1	かわらけ	皿	(13.7)	9.2	(3.0)	
図5	3	土壙1	かわらけ	皿	12.3	7.15	3.2	
図5	4	土壙1	かわらけ	皿	12.2	(7.2)	3.3	
図5	5	土壙1	かわらけ	皿	(8.0)	(5.5)	(1.65)	灯明皿
図5	6	3	かわらけ	皿	13.	6.8	3.	
図5	7	3	かわらけ	皿	(11.2)	(6.5)	(3.0)	
図5	8	3	かわらけ	皿	(7.3)	(4.5)	(1.6)	
図5	9	4	かわらけ	皿	10.0	7.4	3.2	黒縁瓦器
図5	10	4	かわらけ	皿	10.4	6.2	3.1	
図5	11	4	かわらけ	皿	7.4	4.6	1.8	完形
図5	12	4	かわらけ	皿	(8.1)	(5.8)	(1.6)	
図5	13	4	かわらけ	皿	(7.7)	(5.6)	(2.0)	
		1面まで						
図8	14	1面まで	瀬戸	卸皿	—	—	(7.2)	
図8	15	1面まで	常滑	壷	—	—	—	
図8	16	1面まで	常滑	捏鉢	(41.0)	—	—	
図8	17	1面まで	かわらけ	皿	12.0	7.2	3.5	
図8	18	1面まで	かわらけ	皿	7.0	4.6	1.8	
図8	19	1面まで	瓦	軒丸	1.55			
図8	20	1面まで	鉄製品	刀子革羽	(8.5)	2.15	1.2	
図8	21	1面まで	土製品	土鈴	7.0	7.1	1.15	
図8	23	1面まで	常滑	甕	53.8	—	—	
図8	24	1面まで	常滑	磨常滑			1.5	
図8	25	1面まで	常滑	甕	—	—	—	
図9	27	1面まで	青磁	連弁文碗	—	—	(4.8)	
図9	28	1面まで	常滑	甕	—	—	—	
図9	29	1面まで	常滑	壷	—	—	(10.5)	
図9	30	1面まで	かわらけ	皿	13.35	7.85	3.7	
図9	31	1面まで	かわらけ	皿	(13.8)	(7.8)	(3.4)	
図9	32	1面まで	かわらけ	皿	(9.4)	(6.7)	(2.05)	
図9	33	1面まで	かわらけ	皿	(8.5)	(5.6)	2.4	
図9	34	1面まで	かわらけ	皿	7.15	4.45	2.15	
図9	35	1面まで	かわらけ	皿	7.1	5.2	1.5	打ち欠き
図9	36	1面まで	かわらけ	皿	7.2	5.0	2.0	打ち欠き
図9	37	1面まで	土製品	土鈴	4.8	3.7	3.3	
図9	38	1面まで	瓦	軒丸			1.7	
図9	39	1面まで	石製品	温石	(10.3)	7.0	1.7	
		2面						
図11	40	2面	青磁	鉢	(13.0)	—	—	
図11	41	2面	山茶碗窯	捏鉢	—	—	—	
図11	42	2面	山茶碗窯	捏鉢	—	(16.0)	—	
図11	43	2面	常滑	捏鉢	—	12.5	—	
図11	44	2面	手焙り	鉢形	—	—	—	土器質
図11	45	2面	かわらけ	皿	(12.0)	(6.8)	3.0	
図11	46	2面	かわらけ	皿	(11.6)	(7.8)	(3.2)	
図11	47	2面	かわらけ	皿	(12.7)	(6.8)	3.4	
図11	48	2面	かわらけ	皿	7.5	5.0	1.65	
図11	49	2面	かわらけ	皿	7.2	4.7	2.0	
図11	50	2面	かわらけ	皿	7.2	6.0	1.5	
図11	51	2面	かわらけ	皿	7.3	5.3	1.7	打ち欠き

図11	52	2面	かわらけ	皿	(7.0)	(4.3)	(1.7)	
図11	53	2面	かわらけ	皿	(7.85)	(5.4)	(1.8)	
図11	54	2面	かわらけ	皿	7.4	5.4	1.8	
図11	55	2面	かわらけ	皿	(7.15)	(4.0)	(2.3)	穿孔
図11	56	2面	土製品	蓋	外径5.5		1.15	
図11	57	2面	銅製品		(掛)10.8	0.55	0.55	
					(受)2.5	0.35	6.0	
図12	58	2面	かわらけ	皿	(11.1)	(8.1)	(1.95)	
図12	59	2面	かわらけ	皿	(12.5)	(8.0)	(3.0)	
図12	60	2面	かわらけ	皿	(13.4)	(8.3)	(3.1)	
図12	61	2面	かわらけ	皿	(13.0)	(7.8)	(3.4)	
図12	62	2面	かわらけ	皿	11.9	7.6	3.9	完形
図12	63	2面	かわらけ	皿	(12.0)	(8.1)	(3.2)	灯明皿
図12	64	2面	かわらけ	皿	(12.8)	(8.7)	(3.2)	
図12	65	2面	かわらけ	皿	(11.6)	(7.4)	3.2	
図12	66	2面	かわらけ	皿	10.15	5.7	3.5	
図12	67	2面	かわらけ	皿	(12.25)	7.8	3.3	
図12	68	2面	かわらけ	皿	(8.0)	(5.5)	(2.1)	
図12	69	2面	かわらけ	皿	(8.0)	(5.0)	(1.9)	
図12	70	2面	かわらけ	皿	8.4	5.5	2.0	
図12	71	2面	かわらけ	皿	7.8	5.25	1.9	
図12	72	2面	かわらけ	皿	8.0	4.5	1.95	
図12	73	2面	かわらけ	皿	7.5	4.65	1.7	灯明皿
		2面遺構						
図13	77	土坑1	青磁	碗	−	6.0	−	劃花文
図13	78	土坑1	白磁	皿	10.4	7.5	1.7	口兀
図13	79	土坑1	白磁	碗	−	5.0	−	
図13	80	土坑1	瀬戸	入子	(10.0)	(5.5)	(3.3)	
図13	81	土坑1	瀬戸	入子	(8.9)	(4.8)	(3.2)	
図13	82	土坑1	瀬戸	入子	−	−	−	
図13	83	土坑1	山茶碗窯	捏鉢	(31.7)	−	−	
図13	84	土坑1	常滑	壺	(7.7)	−	−	
図13	85	土坑1	常滑	壺	−	−	−	
図13	86	土坑1	常滑	甕	−	−	−	
図13	87	土坑1	常滑	甕	−	−	−	
図13	88	土坑1	常滑	甕	−	−	−	
図13	89	土坑1	常滑	甕	−	−	−	
図13	90	土坑1	かわらけ	皿	(12.5)	7.0	3.5	手づくね
図13	91	土坑1	かわらけ	皿	12.25	8.7	3.0	
図13	92	土坑1	かわらけ	皿	(13.7)	9.4	2.7	
図13	93	土坑1	かわらけ	皿	11.9	8.05	3.7	
図13	94	土坑1	かわらけ	皿	1.9	8.0	3.5	歪みあり
図13	95	土坑1	かわらけ	皿	9.3	5.7	18.0	
図13	96	土坑1	かわらけ	皿	(9.2)	(6.6)	(1.7)	手づくね
図13	97	土坑1	かわらけ	皿	7.5	5.8	1.25	
図13	98	土坑1	かわらけ	皿	7.8	5.55	1.6	
図13	99	土坑1	かわらけ	皿	(8.0)	(5.9)	(1.65)	
図13	100	土坑1	かわらけ	皿	7.6	5.4	1.9	
図13	101	土坑1	かわらけ	皿	7.55	5.0	2.0	
図13	102	土坑1	かわらけ	皿	(8.1)	(5.2)	(1.9)	
図13	103	土坑1	鋳造製品	鞴羽口	外径(6.4)	孔径(2.6)		
図13	107	土坑2	青磁	鉢	−	−	−	
図13	108	土坑2	かわらけ	皿	13.1	7.75	3.6	
図13	109	土坑2	かわらけ	皿	(12.6)	(7.3)	(3.0)	
図13	110	土坑2	かわらけ	皿	(13.4)	(7.0)	(3.5)	
図13	111	土坑2	かわらけ	皿	7.4	4.5	2.3	打ち欠き、灯明皿
図13	112	土坑2	かわらけ	皿	7.2	4.7	1.6	打ち欠き、灯明皿

図13	113	柱穴9	かわらけ	皿	8.4	6.5	1.9	
図13	114	柱穴	かわらけ	皿	(7.3)	(4.6)	(1.5)	
図13	115	2面	かわらけ	皿	7.25	3.7	2.0	灯明皿
図13	116	2面	かわらけ	皿	7.15	6.0	1.7	
図13	117	2面	かわらけ	皿	7.25	4.9	1.65	
図13	118	2面	かわらけ	皿	7.6	5.5	1.6	
図13	119	2面	かわらけ	皿	(4.6)	(3.9)	(0.9)	
		3面						
図16	120	3面	青磁	連弁文碗	−	4.0	−	
図16	121	3面	青磁	折縁鉢	(21.4)	−	−	
図16	122	3面	白磁	口兀皿	(10.0)	5.5	3.3	
図16	123	3面	瀬戸	天目茶碗	12.0	4.2	6.3	
図16	124	3面	山茶碗窯	碗	−	(6.0)	−	
図16	125	3面	常滑	壺	(20.8)	−	−	
図16	126	3面	常滑	壺	(18.4)	−	−	
図16	127	3面	常滑	壺	−	−	−	
図16	128	3面	常滑	壺	−	−	−	
図16	129	3面	常滑	甕	−	−	−	
図16	130	3面	かわらけ	皿	(15.2)	(8.6)	4.9	
図16	131	3面	かわらけ	皿	(12.7)	(6.8)	3.4	
図16	132	3面	かわらけ	皿	(13.2)	(7.5)	(3.6)	
図16	133	3面	かわらけ	皿	(13.2)	(9.3)	(3.1)	
図16	134	3面	かわらけ	皿	(13.0)	(6.5)	(3.75)	
図16	135	3面	かわらけ	皿	(13.2)	(6.4)	(3.3)	
図16	136	3面	かわらけ	皿	(11.0)	6.4	3.2	
図16	137	3面	かわらけ	皿	(11.0)	5.7	3.4	
図16	138	3面	かわらけ	皿	12.3	7.6	3.45	
図16	139	3面	かわらけ	皿	(12.6)	(7.8)	3.0	
図16	140	3面	かわらけ	皿	(8.6)	(6.6)	1.45	
図16	141	3面	かわらけ	皿	(8.6)	(6.4)	(1.5)	
図16	142	3面	かわらけ	皿	8.4	6.8	1.3	
図16	143	3面	かわらけ	皿	(9.3)	(7.4)	(1.0)	
図16	144	3面	かわらけ	皿	(8.0)	5.0	1.65	
図16	145	3面	かわらけ	皿	(8.3)	(6.4)	(1.6)	
図16	146	3面	かわらけ	皿	7.6	5.65	1.6	
図16	147	3面	かわらけ	皿	(8.3)	(5.5)	(1.9)	
図16	148	3面	かわらけ	皿	8.45	6.25	2.0	
図16	149	3面	かわらけ	皿	(8.2)	(6.4)	(1.45)	
図16	150	3面	かわらけ	皿	(8.8)	(6.4)	(1.5)	
図16	151	3面	かわらけ	皿	(8.7)	(6.6)	(1.65)	
図16	152	3面	かわらけ	皿	7.9	4.8	1.8	打ち欠き
図16	153	3面	かわらけ	皿	(7.6)	(5.1)	(1.55)	
図16	154	3面	かわらけ	皿	(7.8)	(5.2)	1.7	
図16	155	3面	かわらけ	皿	(7.6)	(4.9)	1.85	
図16	156	3面	かわらけ	皿	(7.9)	(5.6)	(1.65)	
図16	157	3面	かわらけ	皿	(7.2)	(4.2)	(2.1)	
図16	158	3面	かわらけ	皿	7.65	5.2	2.0	
図16	159	3面	かわらけ	皿	(7.6)	(5.0)	(1.65)	
図16	160	3面	かわらけ	皿	(6.8)	4.6	1.75	
図16	161	3面	常滑	磨常滑	10.85	10.6	1.2	
図16	162	3面	常滑	磨常滑	9.1	7.2	1.0	
図16	163	3面	常滑	磨常滑	8.8	8.1	1.1	
図17	164	3面	石製品	砥石	(9.5)	3.7	1.0	
図17	165	3面	石製品	砥石	(8.1)	4.0	1.5	
図17	166	3面	石	琥珀	4.9	5.5	3.0	
		3面遺構						
図18	169	柱穴18	かわらけ	皿	5.1	4.2	0.9	コースター

図18	170	柱穴20	かわらけ	皿	7.6	6.2	1.6	
図18	171	26	かわらけ	皿	(7.6)	(5.2)	(1.8)	
図18	172	ピット52	かわらけ	皿	(12.8)	(8.7)	(3.2)	
図18	173	柱穴53	かわらけ	皿	7.4	4.6	1.7	
図18	174	土坑62	常滑	鳶口壷	−	−	−	
図18	175	63	伊勢系	土鍋	−	−	−	
図18	176	土坑66	常滑	甕	−	−	−	
図18	177	土坑66	石製品	硯	(6.9)	6.7	−	
		4面						
図21	178	4面	山茶碗窯	捏鉢	−	−	−	
図21	179	4面	常滑	甕	−	−	−	
図21	180	4面	常滑	甕	−	−	−	
図21	181	4面	常滑	捏鉢	−	−	−	
図21	182	4面	かわらけ	皿	(13.1)	7.6	3.1	
図21	183	4面	かわらけ	皿	8.6	5.45	2.0	
図21	184	4面	かわらけ	皿	8.9	6.7	1.8	灯明皿
図21	185	4面	かわらけ	皿	(9.1)	(5.2)	(1.7)	内折れコースター
図21	186	4面	かわらけ	皿	8.8	6.5	1.9	
図21	187	4面	かわらけ	皿	7.6	4.35	2.1	
図21	188	4面	瓦質	宇瓦			2.4	
		4面遺構						
図22	189	ピット89	伊勢系	土鍋	(23.3)	−	−	
図22	190	ピット94	かわらけ	皿	(8.2)	(5.6)	(1.7)	
図22	191	土坑100	かわらけ	皿	8.95	4.95	1.9	
図22	192	105	常滑	甕	−	−	−	
図22	193	105	常滑	甕	−	−	−	
図22	194	105	かわらけ	皿	(8.1)	(4.4)	2.4	
図22	195	105	かわらけ	皿	(13.0)	(9.0)	(3.0)	灯明皿
図22	196	105	瓦	平瓦			2.7	
図22	197	土坑106	かわらけ	皿	(13.0)	(5.0)	(3.0)	白かわらけ灯明皿
図22	198	土坑108	常滑	壺	−	−	−	
図22	199	土坑108	瓦	平瓦			2.1	
図22	200	土坑114	かわらけ	皿	(10.4)	(4.6)	(1.7)	
図22	201	ピット115	かわらけ	皿	(12.0)	(7.9)	2.6	
図22	202	土坑123	常滑	甕	−	−	−	
図22	203	123	常滑	捏鉢	−	14.6	−	
図22	204	123	かわらけ	皿	(8.4)	(5.0)	2.15	
図22	205	132	かわらけ	皿	(11.4)	(4.0)	(3.2)	
図22	206	151	かわらけ	皿	(9.1)	(6.8)	(1.7)	
図24	207	161(井戸)	青磁	櫛掻文皿	−	4.7	−	
図24	208	161(井戸)	瀬戸	脚付皿	−	(13.2)	−	
図24	209	161(井戸)	かわらけ	皿	(12.1)	7.5	3.1	
図24	210	161(井戸)	かわらけ	皿	11.85	8.5	3.0	
図24	211	161(井戸)	かわらけ	皿	(8.9)	(6.8)	1.4	
図24	212	161(井戸)	かわらけ	皿	8.85	3.75	1.7	
図24	213	161(井戸)	かわらけ	皿	9.0	4.8	1.7	
図24	214	161(井戸)	かわらけ	皿	8.5	6.0	1.75	打ち欠き
図24	215	161(井戸)	かわらけ	皿	5.7	4.0	1.6	
図24	216	161(井戸)	瓦	男瓦			1.8	
図24	217	161(井戸)	瓦	女瓦			2.4	
図24	218	161(井戸)	瓦	女瓦			2.5	
図24	219	182	かわらけ	皿	(5.3)	(5.5)	(0.6)	白かわらけ
図24	220	207	山茶碗窯	捏鉢	−	(16.0)	−	
図24	221	210	土器類		−	−	−	脚
図24	222	210	石製品	温石	(6.5)	9.75	2.3	
図25	223	215(溝)	手焙り	鉢型	−	−	−	瓦質
図25	224	215(溝)	かわらけ	皿	(7.8)	(5.8)	1.45	

図25	225	215(溝)	かわらけ	Ⅲ	(8.5)	(6.0)	(1.95)	
図25	226	215(溝)	かわらけ	Ⅲ	(11.0)	(7.0)	(3.1)	
図25	227	215(溝)	石製品	砥石	(5.65)	4.5	1.4	
		5面						
図28	257	5面	青磁	連弁文碗	(13.2)	—	—	
図28	258	5面	青磁	連弁文碗	(15.0)	—	—	
図28	259	5面	青白磁	Ⅲ	—	3.6	—	
図28	260	5面	山茶碗窯	捏鉢	(30.1)	(14.0)	(4.0)	
図28	261	5面	山茶碗窯	捏鉢	—	(15.0)	—	
図28	262	5面	かわらけ	Ⅲ	(12.7)	(8.2)	(3.2)	穿孔
図28	263	5面	かわらけ	Ⅲ	(12.0)	(8.0)	3.1	
図28	264	5面	かわらけ	Ⅲ	(10.0)	(4.8)	(1.6)	
図28	265	5面	かわらけ	Ⅲ	(9.3)	(6.2)	(1.4)	
図28	266	5面	かわらけ	Ⅲ	(9.6)	(6.0)	(1.8)	
図28	267	5面	かわらけ	Ⅲ	(9.4)	(5.4)	(1.7)	
図28	268	5面	かわらけ	Ⅲ	(8.15)	(5.7)	(1.5)	
図28	269	5面	かわらけ	Ⅲ	7.4	6.0	1.5	
図28	270	5面	かわらけ	Ⅲ	(7.4)	(4.7)	(1.45)	
図28	271	5面	かわらけ	Ⅲ	(6.3)	(4.6)	2.1	
図28	272	5面	かわらけ	Ⅲ	(7.7)	5.7	1.85	
図28	273	5面	かわらけ	Ⅲ	(7.8)	(6.2)	1.6	
図28	274	5面	かわらけ	Ⅲ	(7.7)	5.6	1.2	
図28	275	5面	かわらけ	Ⅲ	(6.8)	(6.0)	(1.05)	内折れコースター
図28	276	5面	かわらけ	Ⅲ	(7.1)	(7.4)	(1.1)	
図28	277	5面	瓦	軒丸			2.9	
図28	278	5面	瓦	平瓦			3.6	
図29	279	5面	瓦	平瓦			2.7	
図29	280	5面	瓦	平瓦			2.9	
図29	281	5面	石製品	温石	(9.9)	7.7	(1.2)	
図29	282	5面	常滑	磨常滑	6.95	6.05	0.7	
		5面遺構						
図31	283	5面	かわらけ	Ⅲ	(13.7)	(8.9)	(3.1)	
図31	284	5面	かわらけ	Ⅲ	(8.8)	(7.2)	(1.7)	
図31	285	5面	瓦	男瓦	(23.9)	12.5	2.0	
図31	286	5面	瓦	平瓦	—	24.0	3.3	
図31	287	5面	鉄製品	錠	(12.4)	1.55	0.75	
図32	288	139	かわらけ	Ⅲ	(14.6)	(8.2)	(3.6)	
図32	289	ピット148	かわらけ	Ⅲ	9.5	4.2	2.3	
図32	290	152	瓦	宇瓦			2.7	
図32	291	柱穴158	かわらけ	Ⅲ	(12.8)	(7.0)	(3.2)	
図32	292	171.172	鉄製品	鉱滓	4.8	5.0	3.9	97 g
図32	293	171.172	鉄製品	鉱滓	5.25	5.5	2.5	74 g
図32	294	182	石製品	打製石斧	11.85	5.6	3.5	359 g
図32	295	ピット190	かわらけ	Ⅲ	13.0	7.5	3.55	
図32	296	194	瓦	男瓦			2.0	
図32	297	196	かわらけ	Ⅲ	—	—	—	
図32	298	柱穴196	かわらけ	Ⅲ	(8.0)	(6.6)	1.5	
図32	299	柱穴241	かわらけ	Ⅲ	(13.6)	(8.8)	(2.95)	
図32	300	柱穴241	かわらけ	Ⅲ	(13.2)	(6.0)	(3.3)	
図32	301	柱穴241	鉄製品	針	(6.7)	0.35	0.35	
図32	302	柱穴241	青磁	碗	—	4.5	—	櫛掻文
図32	303	柱穴246	かわらけ	Ⅲ	(15.3)	(8.5)	(2.6)	
図33	304	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	12.6	7.7	3.0	
図33	305	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	平均13.8	7.4	3.1	口径歪みあり
図33	306	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(12.8)	(6.0)	3.6	
図33	307	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(11.8)	(8.2)	2.8	灯明皿？
図33	308	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(7.2)	(5.1)	(1.8)	打ち欠き

図33	309	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(9.3)	(6.6)	(2.0)	
図33	310	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(10.0)	5.3	1.6	
図33	311	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(8.7)	(5.0)	(1.8)	
図33	312	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	9.4	7.45	2.0	
図33	313	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(10.1)	(8.3)	(1.6)	
図33	314	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(9.1)	(7.1)	(1.7)	
図33	315	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(8.1)	(5.8)	(1.8)	
図33	316	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(8.6)	(6.2)	1.6	
図33	317	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(8.2)	(6.0)	(1.3)	
図33	318	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	8.4	6.4	1.8	打ち欠き
図33	319	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(7.0)	(5.6)	(1.5)	
図33	320	かわらけ溜り	かわらけ	Ⅲ	(5.6)	(5.6)	1.15	コースター
図33	321	かわらけ溜り	瓦	軒丸			3.1	
図33	322	かわらけ溜り	瓦	宇瓦			2.0	
図33	323	かわらけ溜り	瓦	平瓦			3.2	

大倉幕府　出土遺物・点数重量表

かわらけ	A小	B小　B大	C小　C中　C大	D小	D大	E小	E中	E大	コースター	白かわらけ
重量（g）	10	5728　58800	713　175　3684	2327	26612	425	80	1180	10	302
総重量（g）	100046 g									

貿易陶磁器	青磁	白磁	青白磁	彩釉
点数	70	40	21	9
計	140点			

古代	
点数	107点

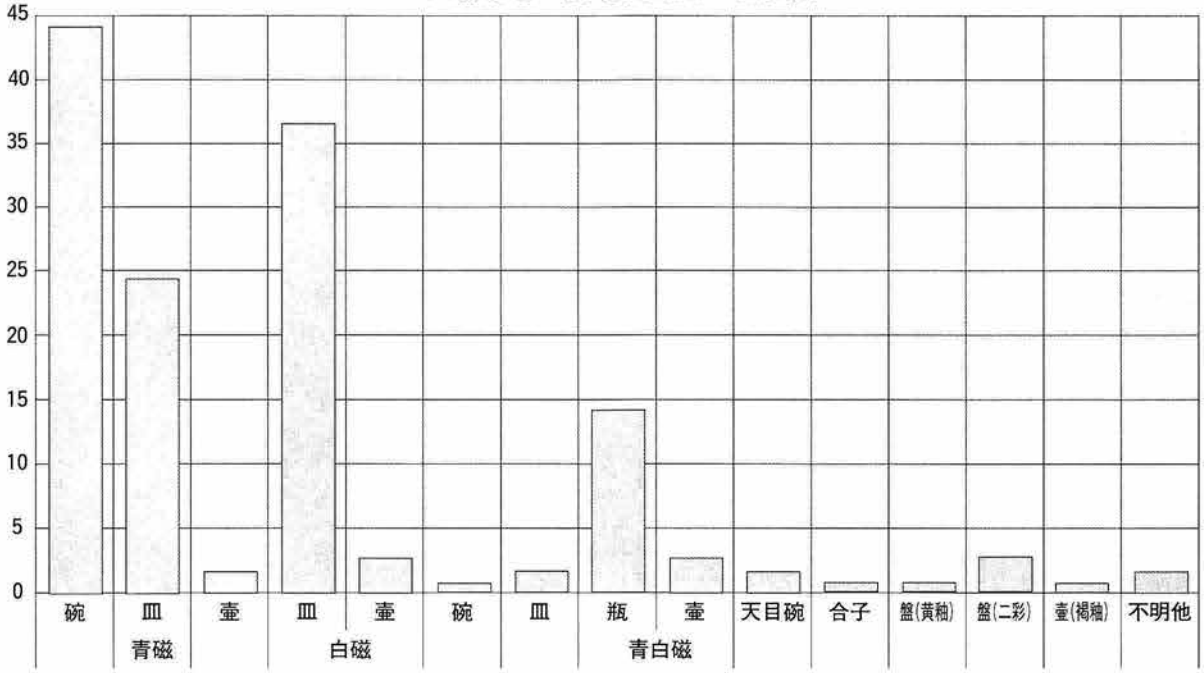
国産陶磁器	瀬戸	常滑	備前	渥美	信楽	山茶	褐釉	瓦器手焙り	羽釜	不明
点数	5	905	11	23	1	111	1	53	43	8
重量（g）	380	56817	570	1242	175	8385	50	5752	297	300
計	1161点　73968 g									

瓦	鐙	宇	男瓦	女瓦	種類不明・他
点数	4	9	5	120	10
重量（g）	460	580	1570	16306	3635
計	148点　22551 g				

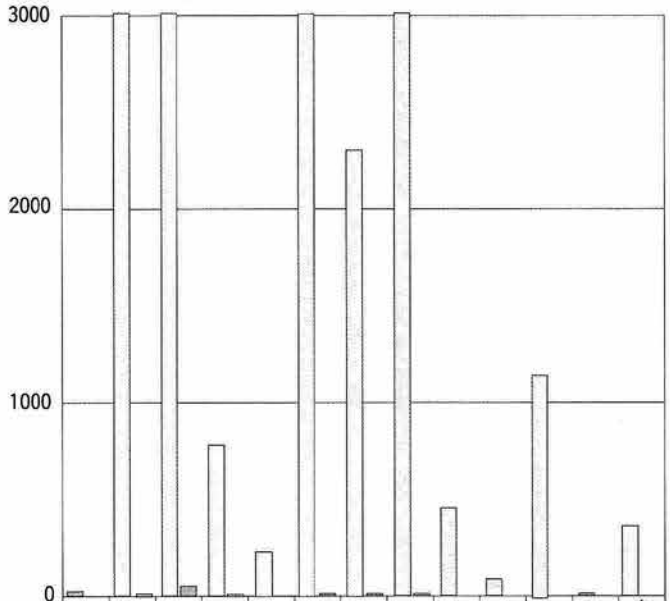
種別	砥石	石鍋	温石	硯	かぶら	琥珀	金属
点数	9	4	2	1	1	1	43
重量（g）	615	145	120	60	1	65	643
計	61点						

図版No.	遺物No.	面	遺構名	銭貨名	国名	初鋳年	西暦	書体	背	枚数	欠け銭
				不明（割）						1	
図8	22		攪乱12	寛永通寶				楷書	無背	1	
図8	26			大観通寶	北宋	大観元年	1107	楷書	無背	1	
図12	74	2		皇宋通寶	北宋	寶元元年	1038	篆書	無背	1	
図12	75	2		熙寧元寶	北宋	熙寧元年	1068	篆書	無背	1	
図12	76	2		元祐通寶	北宋	元祐元年	1086	篆書	無背	1	
				不明						1	
図13	104	2	ピット2	紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094	篆書	無背	1	
図13	105	2	土坑1	治平元寶	北宋	治平元年	1064	楷書	無背	1	
図13	106	2	ピット12	元祐通寶	北宋	元祐元年	1086	行書	無背	1	
図17	167	3		開元通寶	唐	武徳4年	621	隷書	無背	1	
				不明						1	
図17	168	3		天禧通寶	北宋	天禧元年	1017	楷書	無背	1	
		4		不明						1	
図25	237	4	ピット219	祥符元寶	北宋	大中祥符元年	1009	楷書	無背	1	
図25	235	4		治平元寶	北宋	治平元年	1064	楷書	無背	1	
図25	243	4		治平元寶	北宋	治平元年	1064	篆書	無背	1	
図25	247	4		元豊通寶	北宋	元豊元年	1078	篆書	無背	2	※1点
図25	229	4		開元通寶	唐	武徳4年	621	隷書	無背	3	
図25	239	4		皇宋通寶	北宋	寶元元年	1038	楷書	無背	4	
図25	244	4		熙寧元寶	北宋	熙寧元年	1068	楷書	無背	3	
図25	234	4		咸平元寶	北宋	咸平元年	998	楷書	無背	2	
図25	251	4		紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094	篆書	無背	1	
図25	252	4		紹聖元寶	北宋	紹聖元年	1094	行書	無背	1	
図25	233	4		至道元寶	北宋	至道元年	995	行書	無背	1	
図25	255	4		淳熙元寶	南宋	淳熙7年	1187	楷書	上「十」下「四」	1	
図25	256	4		慶元通寶	南宋	慶元元年	1195	楷書	下「元」	1	
図25	253	4		大観通寶	北宋	大観元年	1107	楷書	無背	1	
図25	238	4		景祐元寶	北宋	景祐元年	1034	楷書	無背	1	
図25	247	4		元豊通寶	北宋	元豊元年	1078	篆書	無背	1	
図25	232	4		？元重寶	唐	？元元年	758	隷書	無背	1	
図25	236	4		景德元寶	北宋	景德元年	1004	楷書	無背	1	
図25	250	4		海東通寶	高麗	粛宋2年	1097	隷書	無背	1	
図25	254	4		政和通寶	北宋	政和元年	1111	篆書	無背	1	

大倉幕府　貿易陶磁器　点数表

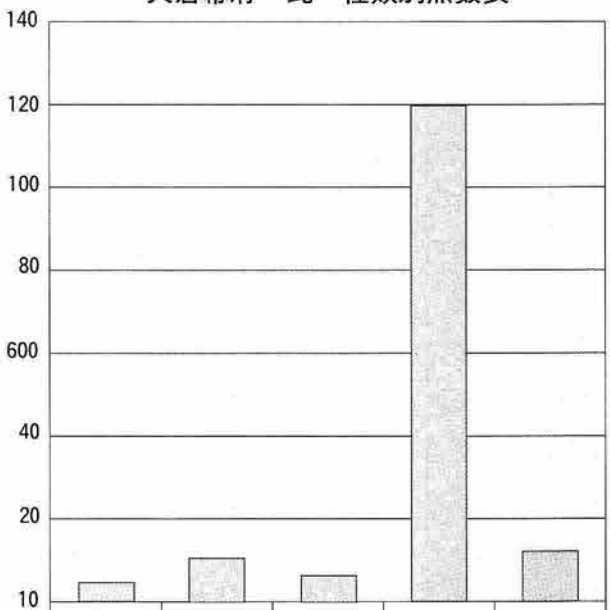


大倉幕府かわらけ種類別　重量表

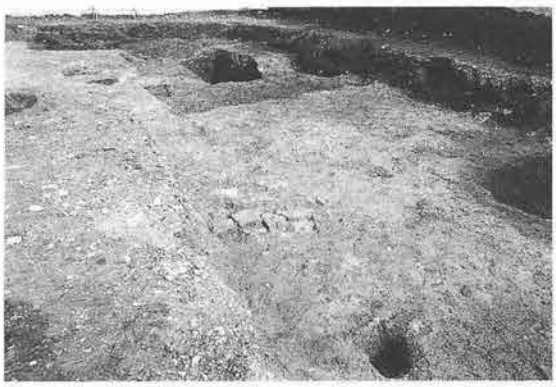


	A小	B小	B大	C小	C中	C大	D小	D大	E小	E中	E大	コースター	白かわらけ
重量g	10	5728	5880	713	175	3684	2327	2661	425	80	1180	10	302
%	0	8	70	1	0	5	1	12	0	0	0	0	1

大倉幕府　瓦　種類別点数表



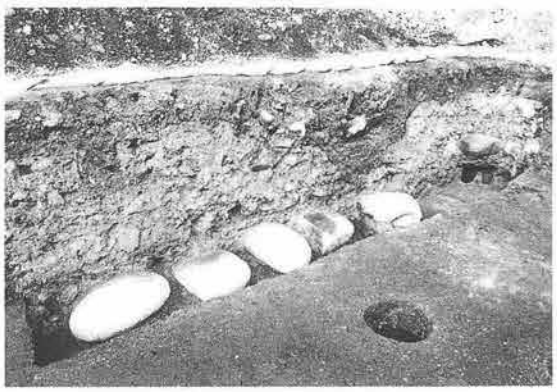
	鐙	宇	男瓦	女瓦	種類不明・他
点数	4	9	5	137	10



（1） 1面全景

（2） 1面全景

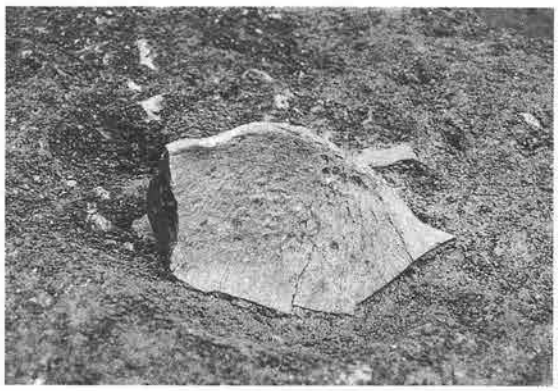
（3） 1面鎌倉石列



（4） 1面近世基礎石列

（5） 2面全景

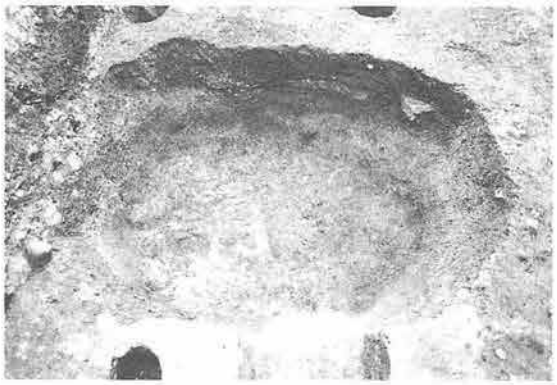
（6） 2面出土遺物



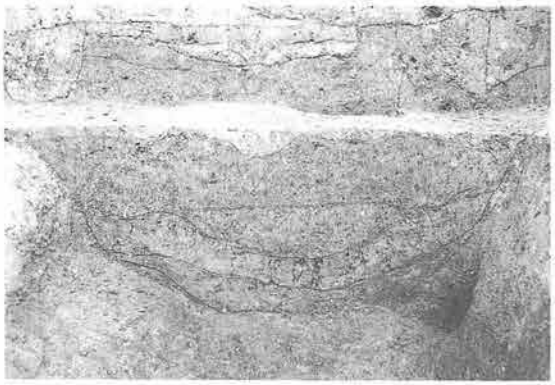
（7） 2面出土遺物（鯨骨）

（8） 2面全景

図版2



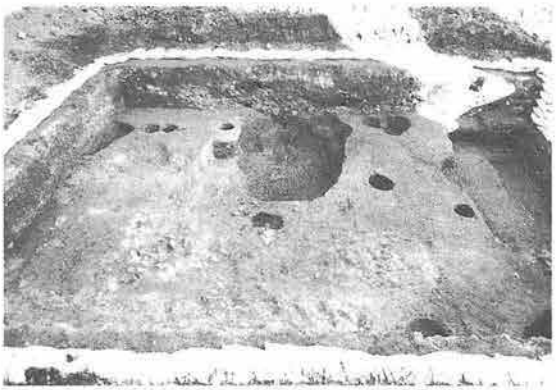
（1） 2面土壙1



（2） 2面溝2断面

（3） 2面土丹礎石と遺物出土状況（かわらけ）

（4） 2面かわらけ出土状況

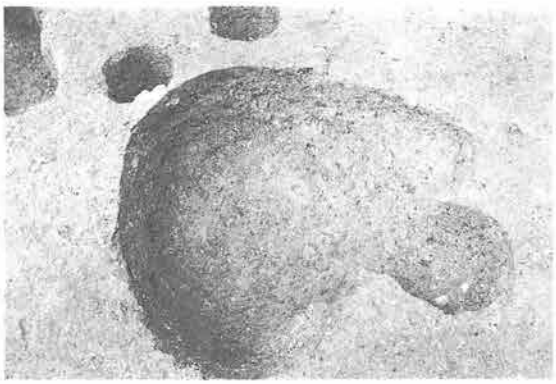


（5） 2面検出土壙・ピット群

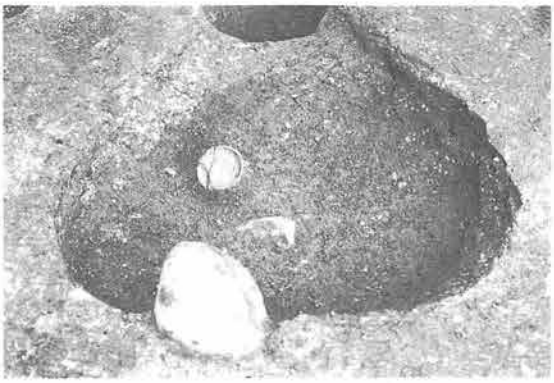
（6） 3面琥珀出土状況

（7） 3面遺物出土状況（かわらけ）

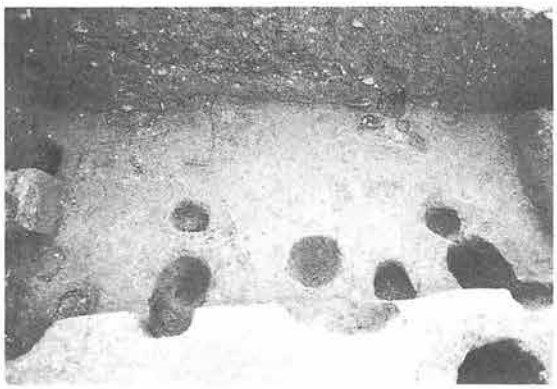
（8） 3面玉砂利出土状況



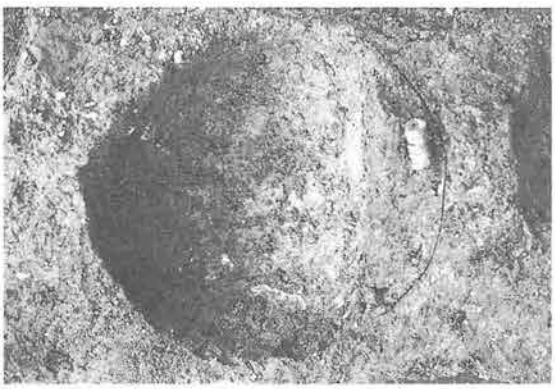
（1） 3面土壙161・122・ピット125



（2） 4面土壙100と出土遺物（かわらけ）

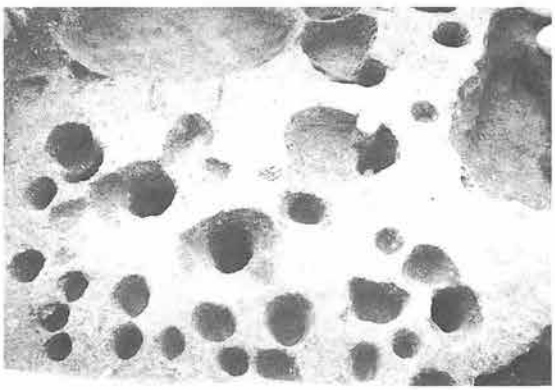


（3） 3面柱穴

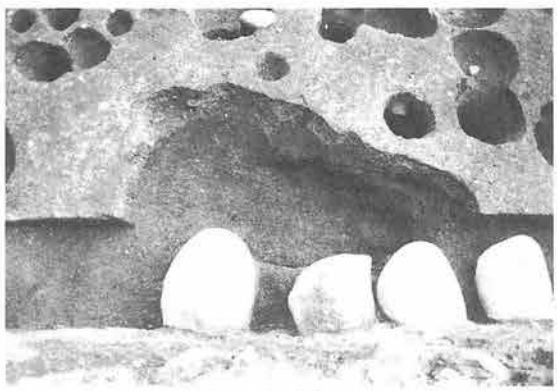


（4） 4面土壙（イコウ219）

（5） 3面全景



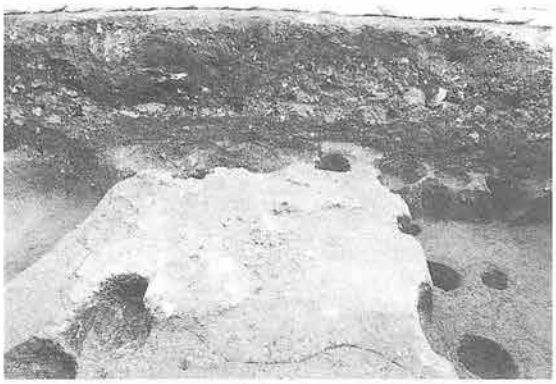
（6） 4面柱穴群



（7） 3面土壙147

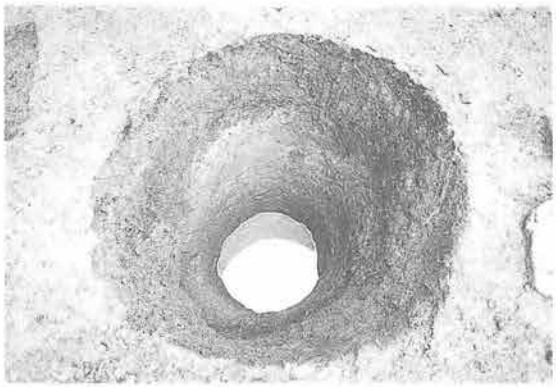
（8） 4面全景

図版4

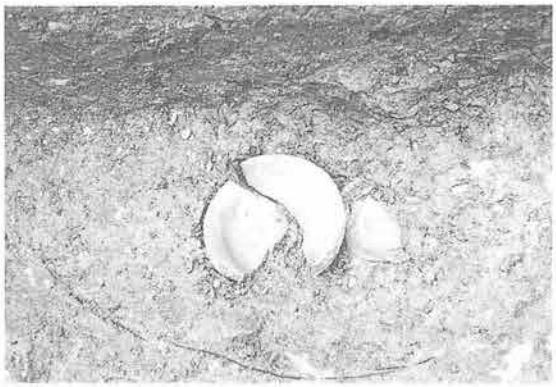


1．3面炭化物・貝殻出土範囲

2．4面土壙159

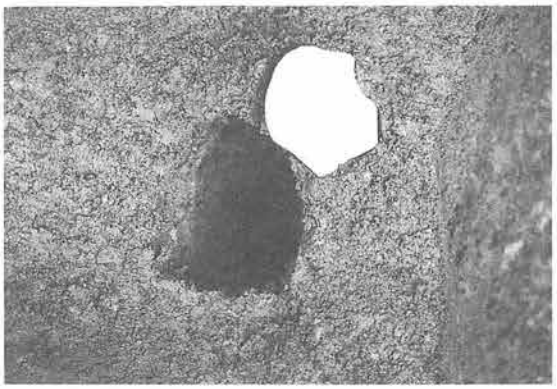


3．5面検出井戸址1



4．5面土壙出土遺物

5．5面柱穴群



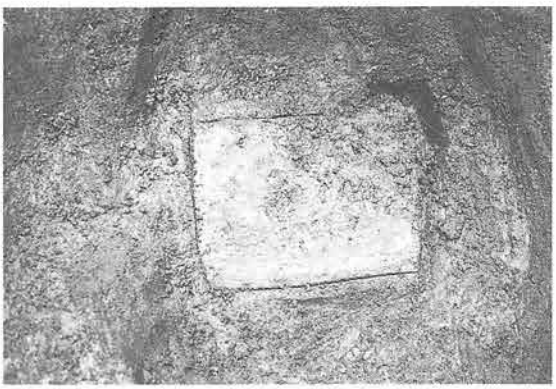
6．5面大柱穴内柱痕出土遺物（白磁）

7．5面出土遺物（瓦）

8．5面全景

1．5面溝2

2．5面下溝2とピット群



3．5面柱穴内検出柱痕（北から）

4．5面柱穴内検出礎石

5．5面溝3・柱穴群（東から）

6．5面下検出溝1（東から）

7．5面下全景（北西から）

図版6

第28図-257

第28図-258

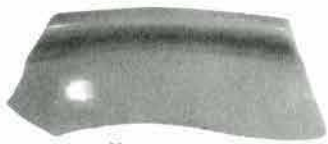
第9図-27

第16図-120

第31図-322

第13図-107

第12図-40



第16図-121

第13図-77

5面

第28図-259

第24図-207

5面
かわらけ溜り

第16図-122

第13図-79

貿易陶磁器

第22図-202

第16図-123

第16図-128

第8図-15

第16図-127

第16図-128

第16図-129

3面

第18図-174

第16図-126

第21図-189

第18図-175

第11図-43

第22図-192

第21図-180

第16図-125

第21図-179

第22図-193

4面

第13図-84

第9図-29

国産陶器（1）

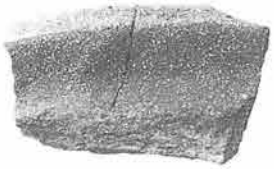
図版8

第8図-16

第11図-44

第11図-41

第13図-83



4面

4面

第25図-223

第28図-260

第24図-220

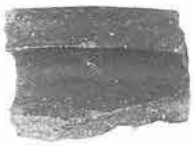
第8図-23

第16図-129

第8図-25

第17図-176

第13図-87



第13図-88

国産陶器（2）

第5図-9

第5図-11

第5図-10

第27図-264

第13図-90

第13図-101

第13図-93

第13図-92

第13図-97

第13図-100

第13図-111

第13図-108

第25図-225

第24図-214

2面
第12図-67

第13図-95

4面

かわらけ

図版10

第16図-161

第16図-163

第16図-162

第29図-282

第9図-37

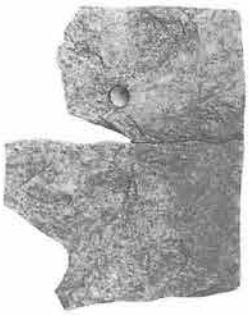
第9図-39

第18図-177

第17図-166

第32図-294

第24図-222



第29図-281

第8図-20

第17図-164

第17図-165

第25図-227

第31図-287

磨常滑・石・鉄製品

第32図-293

第32図-292

第21図-188

第32図-290

第11図-57

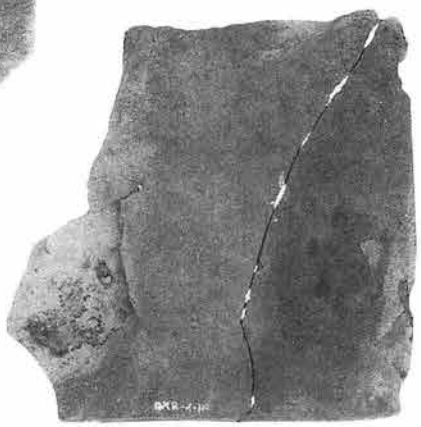
第8図-19

第33図-321

第28図-277

第9図-38

第31図-286

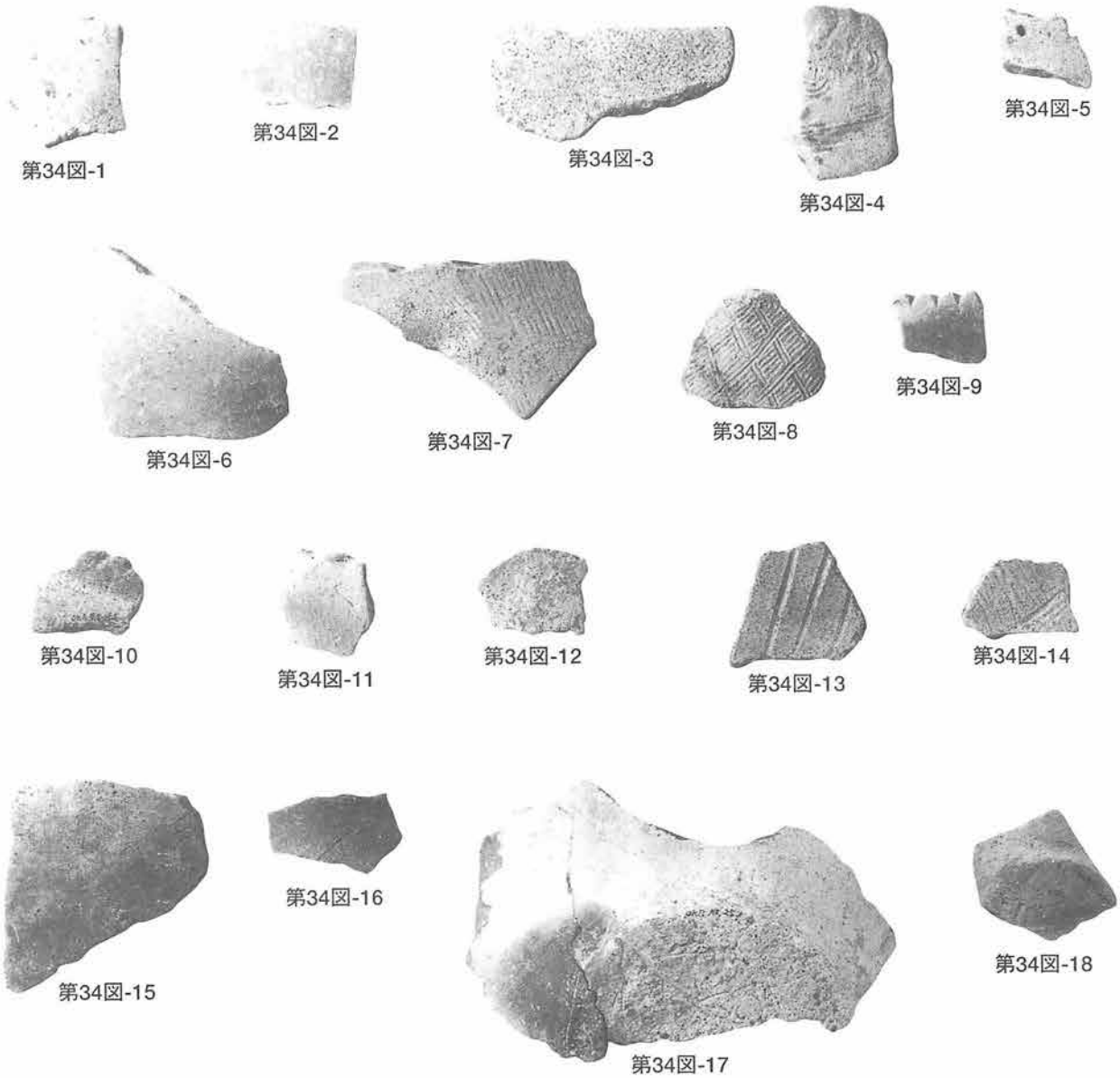


第24図-218

第31図-285

鉄製品・瓦

図版12



古代以前の遺物

横小路周辺遺跡（No.259）

よここうじしゅうへんいせき

二階堂字会下323番外地点

例　　言

1．本報は鎌倉市二階堂字会下323番外地点に所在する個人専用住宅の新築に先だち行われた、横小路周辺遺跡（県遺跡台帳№259）の発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は平成12年12月17日から同年12年12月27日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3．本報使用の遺構図トレース及び遺物実測トレースは長友純子が、原稿執筆・編集は福田が行った。
4．本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真は須佐仁和が、出土遺物写真は菊川泉が撮影を行った。
5．発掘調査・整理の体制は以下の通りである。
　主任調査員　福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託）　原廣志（鎌倉市教育委員会嘱託）
　調　査　員　菊川泉　須佐仁和　早坂伸市　本城裕
　調査補助員　長友純子　猿田功一（鶴見大学）
　作　業　員　（社）鎌倉市シルバー人材センター
6．発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

第1章　遺跡の位置と歴史的環境……59
第2章　出土した遺構と遺物……60
第3章　まとめ……62

図1　調査地点位置図……59
図2　試掘地点及び調査地点……60
図3　全測図・土層断面図及び試掘土層断面図……61
図4　出土した遺物……62

図版1　全景及び土層断面……63
図版2　出土した遺物……64

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は鎌倉宮の北隣、覚園寺のある薬師堂ヶ谷の入り口に位置している。古代において鎌倉（郷）には郡衙がおかれ政治経済の中心地であったと考えられる。当地は隣り合う荏柄天神を中心としていたと考えられる荏草郷に含まれると考えられる。鎌倉幕府成立以前の鎌倉の様子は、中世以降に行われた大規模な土木工事等により破壊されている可能性やこの時期の調査数が少ないこともあり不明な点が多い。しかし平直方の娘婿となった源頼義や子の義家以降、源氏相伝の地となり源頼朝入府以降、荏草は鎌倉に組み込まれていったのかもしれない。相模国府から鎌倉、荏柄を経て抜け房総半島に抜ける、後に六浦道として整備される幹線道路が調査地の南方を東西に通る。道路沿いに、西方から御霊神社、甘縄神明神社、窟堂、荏柄天神社、杉本寺といった古い寺社が並ぶことを見ても古代より拓けていた地域であるといえる。荏柄天神参道脇の縄文土器の出土[(1)]。南御門の弥生時代の集落[(2)]。永福寺跡の土師器、竪穴住居等周辺地域では古くから人々が居住していた。

住環境が大きく変化するのは、源頼朝が鎌倉に入り大倉に居を構えて以降になる。幕府を中心に有力御家人たちの屋敷が造られていった。また、永福寺が創建されそれに伴い二階堂大路が新たに造られた。六浦道と二階堂大路の交差点でもある大倉の辻の東側を中心に鎌倉初期の街が形成されていったと思われる。遺跡地の脇にある鎌倉宮（大塔宮）の境内は東光寺跡と伝えられている。民部大夫行光（二階堂

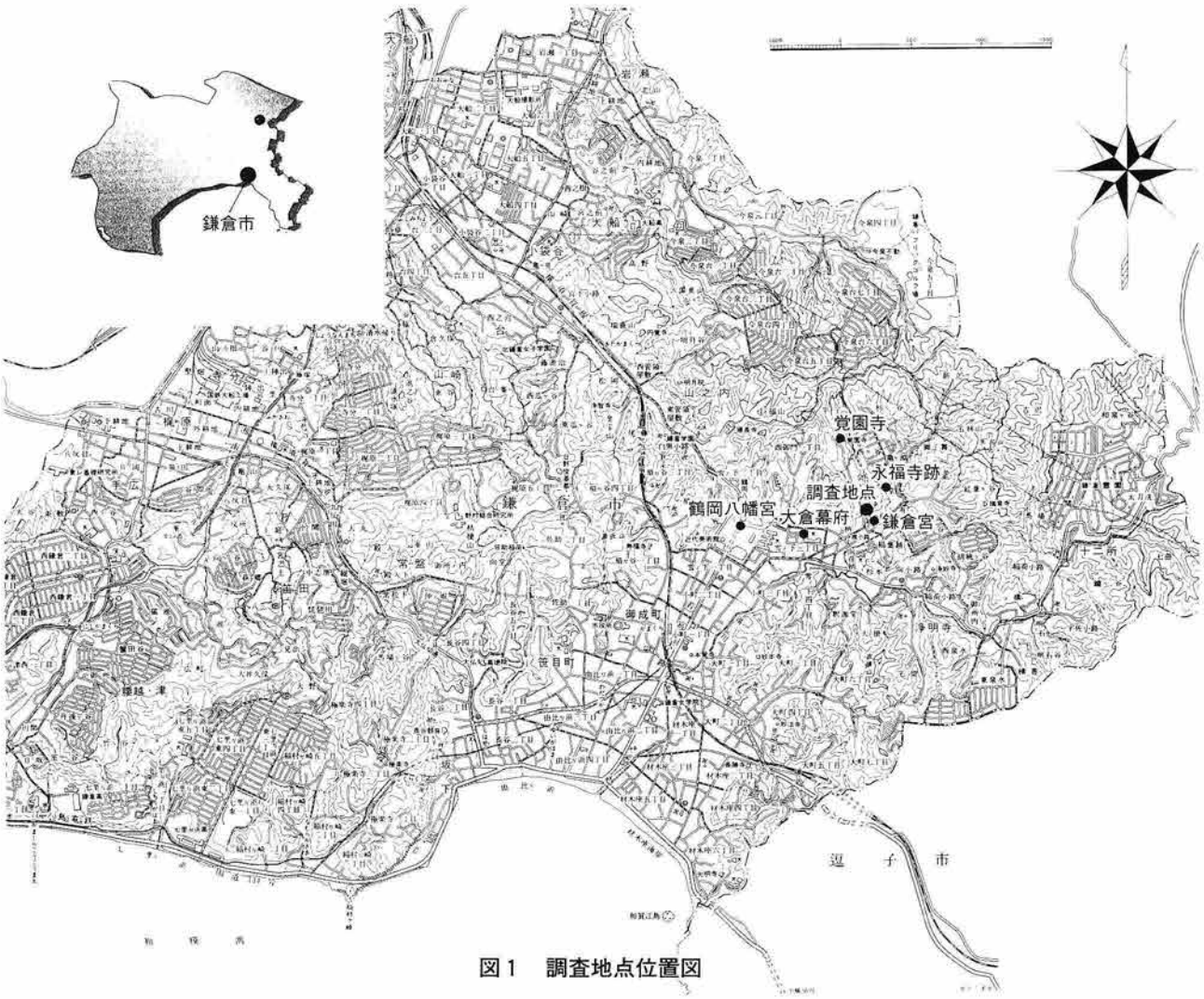


図１　調査地点位置図

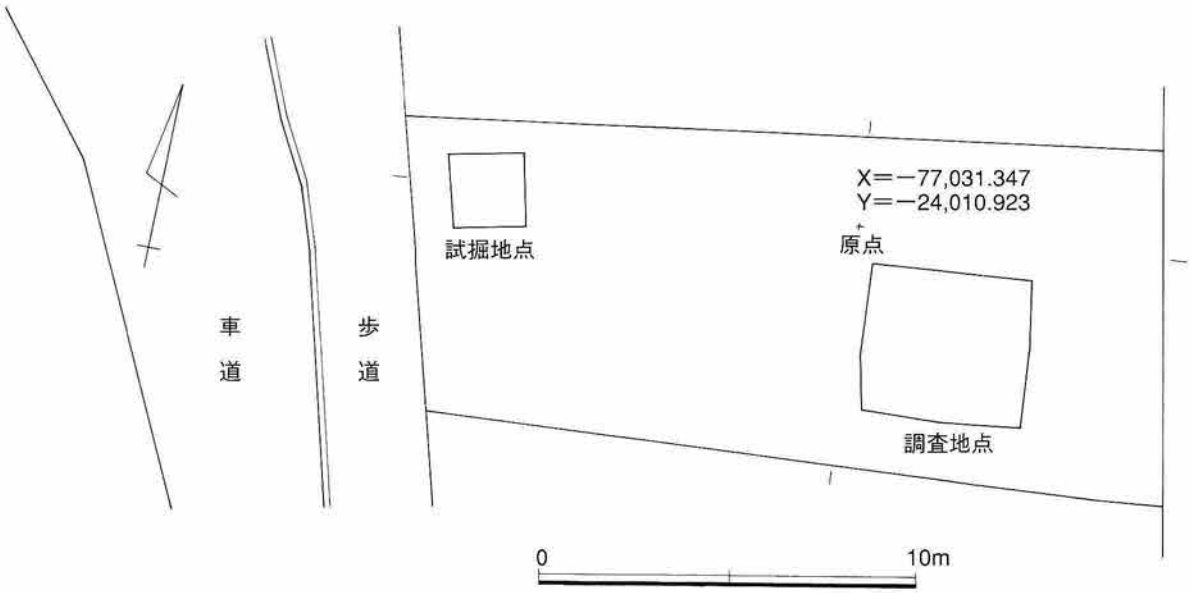


図２　試掘地点及び調査地点

氏）が承元三年（1209）永福寺脇に建てとする説と、頼朝が建久四年（1193）に永福寺傍に建立した薬師堂が当寺の前身であるとする説がある。『鎌倉事典』

また遺跡地のある薬師堂ヶ谷奥には覚園寺（開山智海心慧、開基北条貞時）がある。前身は北条義時の建てた大倉薬師堂と伝えられ鎌倉時代を通し北条氏の厚い外護を受けた。このことを考えると遺跡地周辺もまた家々が建ち並んで賑わったであろうと想像に難くない。

参考文献

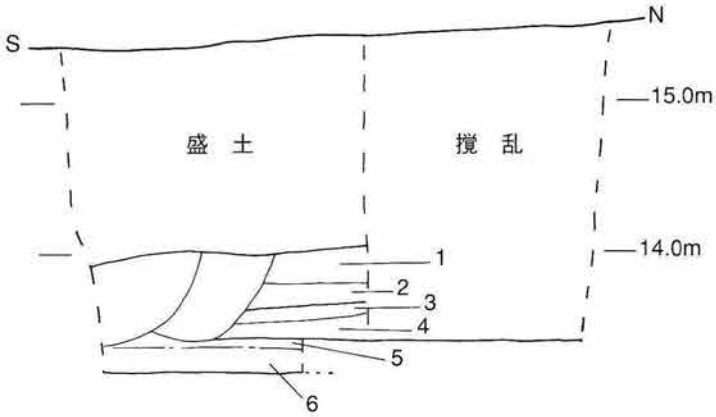
（１）『鎌倉市史』考古編
（２）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』「大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下四丁目620番５地点」1998年
（３）『史跡永福寺跡』鎌倉市教育委員会　昭和63年度
（４）『鎌倉事典』白井永二編　1976年
（５）『鎌倉廃寺事典』貫達人　川副武胤著　有隣堂1980年

第２章　出土した遺構と遺物

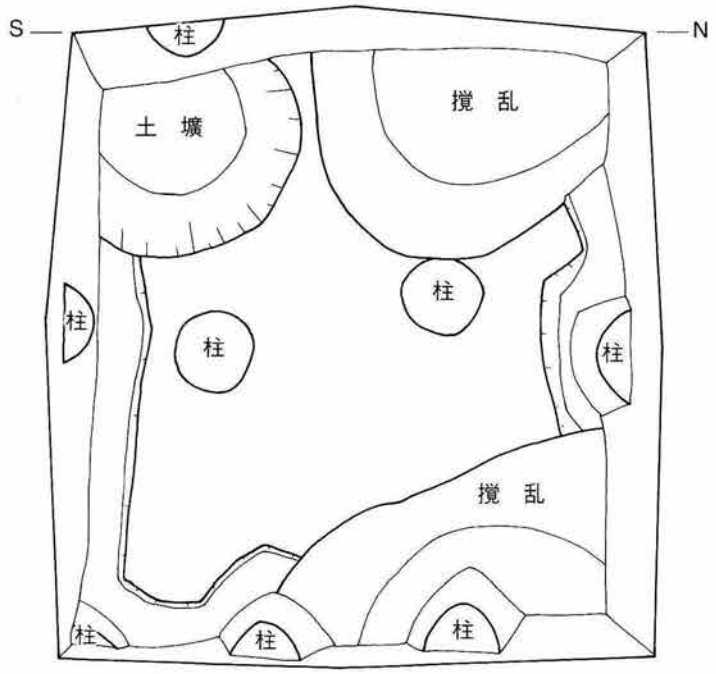
調査にいたる経過

調査開始以前に家の耐震性を高める杭が計36本打たれてしまった。調査対象面積は杭の打たれた範囲の約72㎡であるが打たれた杭の本数が多く、結果的に杭の間隔が広い場所を選び７本の杭に囲まれた４×４ｍ（約16㎡）の調査区を設定したものである。更に調査区内から２本、計９本の杭が発見され十分な調査が出来たとは言えない状況であった。調査地は道路に接した駐車場部分と1.3ｍ程の盛土された敷地からなる。調査に先立って駐車場部分で行われた試掘調査では、地表下２ｍまで掘り下げたところ５面以上の生活面が確認され、本調査では地表から部分的に2.26ｍまで掘り下げ４面以上の生活面を確認した。

調査に先立ち遺構確認のため試掘調査を盛土の無い敷地北西隅で、２×２ｍの四角形の試掘壙を設定した。海抜14.2ｍの地表面下約30㎝で土丹粒に混じりかわらけ片、炭が混じった包含層を確認した。約60㎝と70㎝下で土丹を叩き締めた遺構面（１・２面）を検出した。およそ１ｍ下で黒灰色土と土丹の混



1. 土丹による1面構成工
2. 暗茶褐色粘質土層
3. 土丹による2面構成工
4. 暗茶褐色粘質土層
5. 土丹による3面構成工
6. 暗茶褐色粘質土層
柱. コンクリート基礎



11. 盛　土
12. 黄灰色土層（細かい土丹粒・炭混る）
13. 土丹地業層
14. 土丹地業層
15. 灰褐色粘質土層（炭混る）
16. 黒灰色土と5～15cm大の土丹層
17. 黒灰色粘質土層と1～5cm大の土丹層
18. 土丹層

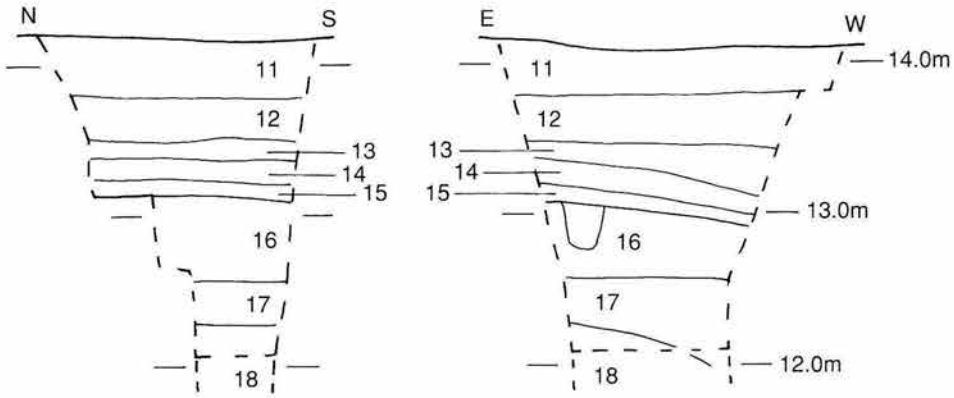


図3　全測図・土層断面図及び試掘土層断面図

じった遺構面（３面）と柱穴を検出した。地表から２ｍまで掘り下げたが地山は確認されていない。３面下にも更に土丹を用いた遺構面が続いている。覚園寺がある薬師堂ヶ谷の谷筋が調査地の西側を南北に通る。この谷筋に向かい検出した遺構面はなだらかに落ち込んで行くことが観察された。

試掘調査の成果を参考に申請建物の東南、杭の間隔が広いところを選び、４×４ｍの四角形の調査地を設定した。海抜約15.5ｍの地表面の下約150㎝までは造成による盛土であった。掘り下げて海抜14ｍ程で土丹を用いて叩き締めた遺構面（１面）を確認した。遺構面からは土壙が１穴検出された。検出した遺構面の下には更に土丹を叩き締めた遺構面（２・３面）が確認された。確認された各遺構面は平坦に広がっていることが観察された。

出土した遺物（図４）

図４－１は青白磁碗。透明度の高い釉が内外面に施され、内面には凸線の葉模様と条線が巡る。

２は常滑壺の体部片。小片のために体部径は不明、表面が細かく剥離しているのは熱を受けたためか。

３～９はかわらけ、３は口縁部片、４～９は底部片。概ね13世紀後半～14世紀初頭のものと思われる。

10は常滑捏鉢底部片。内面は使い込まれたためかつるつるに摩滅している。

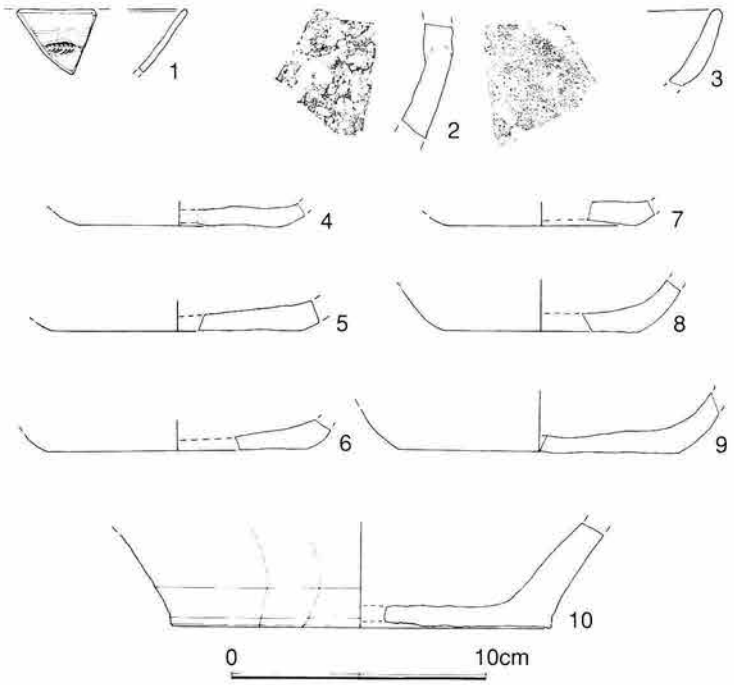
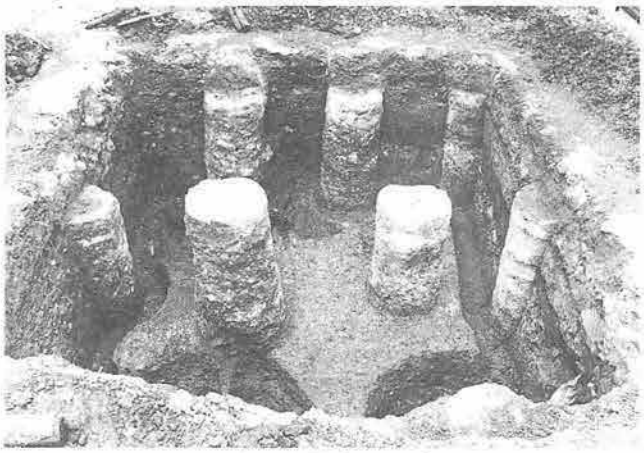


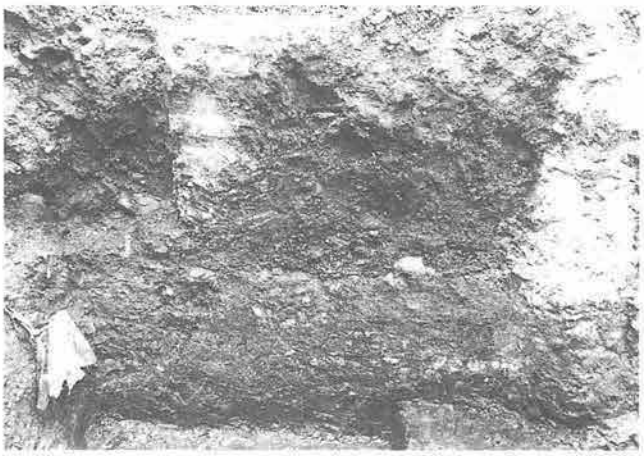
図４　出土した遺物

第３章　まとめ

遺跡の変遷、性格を述べるにはあまりにも調査範囲が限られていたため、十分な調査が出来たとは言えない状況であるが、調査事例の少ない当該当地周辺の情報と資料を得ることが出来た。鎌倉前期源頼朝が建立した永福寺へ向かう二階堂大路に近接し、『吾妻鏡』に永福寺郭内と書き表された東光寺（現鎌倉宮敷地と推定）に隣接、また覚園寺のある薬師堂ヶ谷入り口に面していることから、古くから鎌倉幕府中枢域、御家人たちの屋敷が軒を連ねていた一角であったことは想像に難くない。今後、周辺の調査が進展すれば改めて当遺跡の変遷、性格が明らかにされるものと期待するものである。



調査区全景（西から）



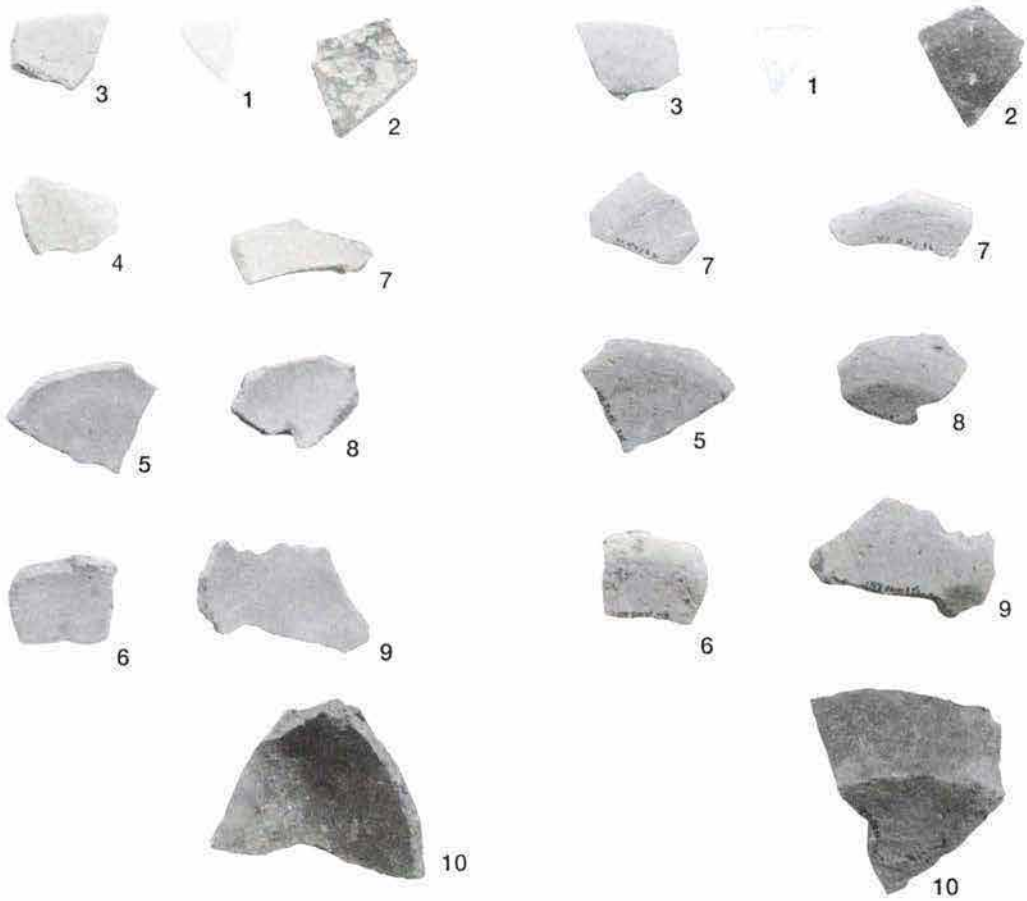
西壁セクション

調査区全景（南から）

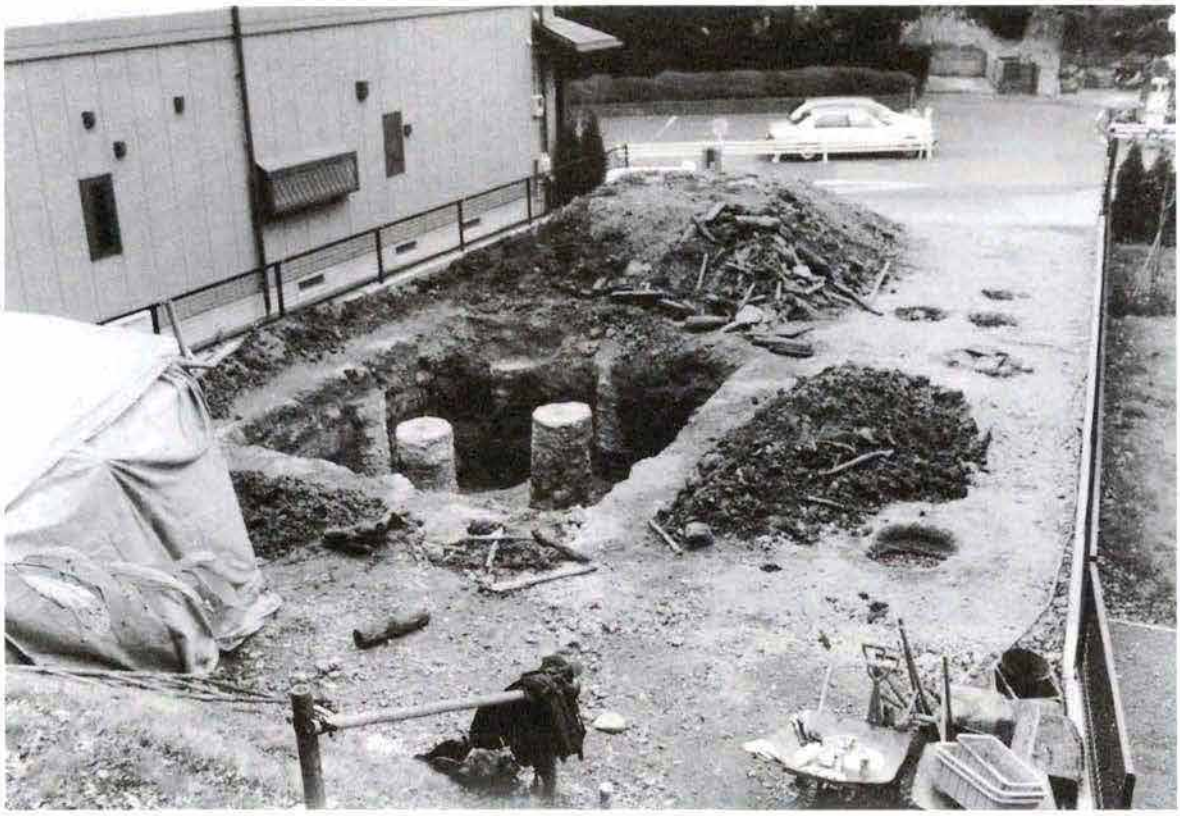
土壙１

土壙１下トレンチ

図版2



出土遺物



調査区遠景（東から）

妙本寺遺跡（No.232）

大町一丁目1140番１外地点

例　　言

1．本報は鎌倉市大町一丁目1140番１地点における宅地造成工事に伴なって実施された妙本寺遺跡（県遺跡台帳№232）の発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は平成14年１月７日から同年２月１日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

3．本報使用の遺構図及び遺物実測図・観察表は調査員が分担作成した。第１章・遺跡の位置と歴史的環境は菊川　泉が、第２章・調査の経過と層序、第３章・検出した遺構と遺物、第４章・まとめは福田　誠が担当し編集は福田が行った。

4．本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真・出土遺物写真は福田が撮影を行った。

5．発掘調査・整理の体制は以下の通りである。

主任調査員　福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託）

調　査　員　太田美知子　石元道子　須佐直子　菊川　泉　神山晶子　須佐仁和　早坂伸市

調査補助員　古田土俊一　猿田功一　阿部潤　鈴木絵美（鶴見大学）　栂岡渓音

作　業　員　（社）鎌倉市シルバー人材センター

6．発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……69
第２章　調査の経過と層序……70
第３章　検出した遺構と遺物……73
第４章　まとめ……84

図１　調査地点位置図及び調査区設定図……68
図２　１区１面、２区１面・２面全測図……71
図３　２区３面全測図及び板溝立面図……72
図４　Ⅰ・Ⅱ区包含層・１面の遺物……74
図５　Ⅱ区１・２面遺構・２面までの遺物……75
図６　Ⅱ区北トレンチ内の遺物……76
図７　Ⅱ区１溝新の遺物……77
図８　Ⅱ区１溝新の遺物……78
図９　Ⅱ区１溝新底部の遺物……79
図10　Ⅱ区１溝の遺物……80
図11　Ⅱ区３面板溝の遺物……81
図12　銭……82
図13　Ⅱ区３面までの遺物……83

表１　遺物観察表……

図版１　１面の調査……91
図版２　２面の調査・１溝新の調査……92
図版３　１溝古の調査……93
図版４　３面の調査……94
図版５　３面板溝の調査……95
図版６　Ⅰ・Ⅱ区包含層・１面の遺物……96
図版７　Ⅱ区１・２面遺構・２面までの遺物…97
図版８　Ⅱ区北トレンチ内の遺物……98
図版９　１溝新の遺物と３面出土の銭……99
図版10　Ⅱ区１溝新～砂層の遺物 ……100
図版11　Ⅱ区１溝新底部の遺物 ……101
図版12　Ⅱ区３面までの遺物 ……102
図版13　Ⅱ区１溝の遺物 ……103
図版14　Ⅱ区３面板溝の遺物 ……104

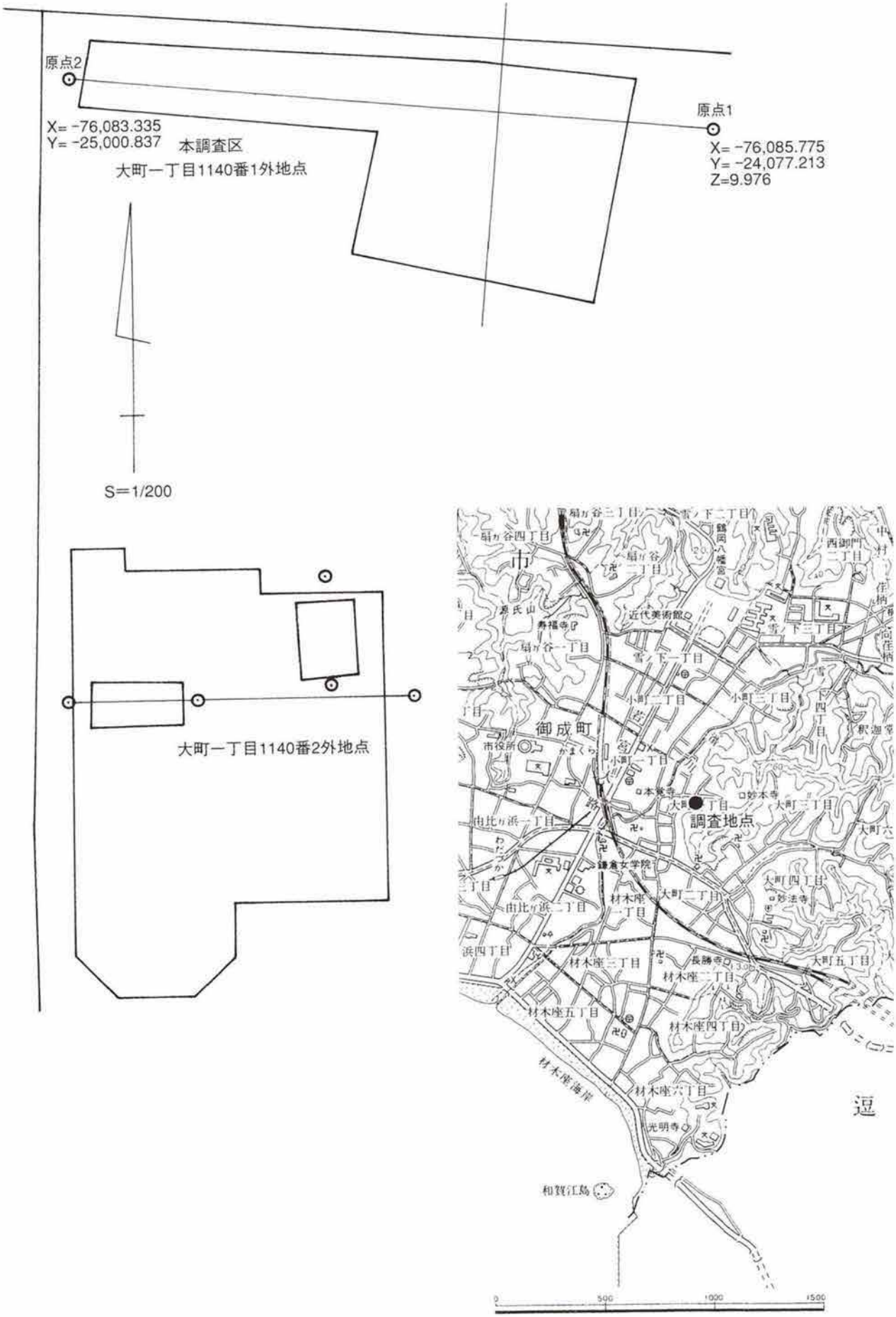


図１　調査地点位置図及び調査区設定図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市大町一丁目1140番１外に位置する。現在のＪＲ鎌倉駅から東およそ１kmのところにあり、東西に伸びる谷、比企ヶ谷（ひきがやつ）の入り口に当たる。現在は閑静な住宅地の一画で、この谷の奥には日蓮宗長興山妙本寺がある。開創は文応元（1260）年、開基は比企大学三郎能本、開山は日朗。寺の前身は比企能員ら一族の屋地と伝えられる。近世の地誌書の多くは、これが「比企谷」の地名の由来であることを伝えている。妙本寺について『新編鎌倉志』[註1]や『新編相模風土記稿』[註2]は十余の院家を挙げているが、現在はない。現在残っている建造物は山門・八角堂・方丈・経蔵・本堂・鐘楼・二天門・霊宝殿・祖師堂・蛇苦止堂である。

比企能員は武蔵比企郡の豪族で、養母比企禅尼が頼朝の乳母であった所縁により、挙兵以来頼朝に従っていた功臣であった。『吾妻鏡』寿永元（1182）年７月12日条には、北条政子が頼家出産のため比企禅尼の宅へ入った記載が見られる。比企能員の妻は頼家の乳母となり、娘の若狭局は頼家の愛妾となって一幡を生んだことにより、比企氏は権勢を増すこととなった。しかし、建仁３（1203）年、頼家の後継をめぐって北条氏と対立し、能員は北条時政の名越邸で謀殺された。能員の子宗能も一幡とともに北条軍に責められて、一幡の住まいでもあった比企谷の小御所で没した。残党は流刑・死罪・配流などの処分を受け、事実上比企氏はここに滅んだ。[註3]

吾妻鏡において「比企が谷」の地名の初見は、比企氏滅亡後の承元３（1209）年５月15日条。神嵩（かうのだけ）・岩殿観音堂に詣でた実朝が、方違のため「女房駿河局の比企が谷の家」に立ち寄った記事である。（「駿河局」は『吾妻鏡』の記載から北条政子に近侍した女房の一人であることが知れる。）

その後この屋地がどのようになったかは明確ではないが、妙本寺境内には現在も一幡の墓と伝えられる一幡袖塚がある。[註3]また、四代将軍藤原頼経の妻となった頼家の娘の屋敷「竹御所（たけのごしょ）」があったとも伝えられる。（「竹御所」の名はそのまま頼経室の名としても用いられている。）

『吾妻鏡』によれば、文応元（1260）年10月15日、北条政村の娘が比企能員の娘讃岐局の悪霊に取り憑かれるという事件が起こる。悪霊は「比企谷の土中にあるの由、言を発」し、「これを聞く人、身の毛竪つと云々。」とあり、若宮別当僧正が加持を行い、悪霊が政村の娘から離れていったのは翌月の27日であった。能員一族の死から57年後、竹御所が難産で没してから26年後のできごとではあるが、一族の怨霊が屋敷のあった比企谷に留まっていたと考える風潮は、文応年間当時においても少なからずあったと推測できる。能員の遺子、大学三郎能本がこの地に妙本寺を開基したのもこの年である。比企能員一族滅亡後も、竹御所や能本など、一族の縁者の屋地としてこの地が使われていたのかもしれない。

ちなみに開基の比企大学三郎能本は、能員が殺害された際、京に逃れ、東寺に学び順徳院に仕えた。承久の乱の後順徳院の佐渡配流にも従い、その後鎌倉に戻って儒官として用いられた。日蓮の儒学の師となり、『立正安国論』の刪正にも関わっている。やがて日蓮の法弟となり、妙本と称えた。後に日蓮から本行日学上人の名を授けられている。

谷戸の入り口には小町大路がせまり、日蓮辻説法跡と伝えられる一画もある。夷堂橋[註4]以南には米町・魚町といった字名が残っており、往時この周辺には町屋が広がり、商業地帯の様相を呈していたと考えらる。

当調査地点の周辺の発掘調査事例は大町一丁目1140番１の一部外[註5]地点及び大町一丁目1140番２[註6]地点がある。

【註１】貞享２（1685）年刊の地誌。延宝（1673～81）年間に徳川光圀が臣下に命じて、江ノ島・葉山

・金沢を含む鎌倉一帯の地名・旧跡・社寺の由緒沿革を調査・編纂させたもの。

【註２】相模九郡の地理誌。天保元（1830）年着手、12（1841）年脱稿。林衡を総裁に、間宮士清・三島行政ら27人の編録。

【註３】比企能員の残党は流刑・死罪になったが、妻妾と二歳の男子は安房に配された記載が建仁２年９月３日条にある。また、同日の記事に、一幡の死骸は確定することができず、焼け残った染付の小袖の残片の柄によってその死が確認されたことを伝えている。源性がこれを高野山の奥の院に納めた。袖塚の名の由来は、おそらくこの記載によるものであろう。

【註４】永享８（1436）年開創の本覚寺の前身である天台宗夷堂の名に由来する。小町大路を南下し、滑川を渡る橋。

【註５】現共同住宅。報告書未刊。概要は『神奈川県埋蔵文化財調査報告41』　平成９年度神奈川県内埋蔵文化財発掘調査一覧（平成11年３月　神奈川県教育委員会）

【註６】個人専用住宅。本報告書に掲載

参考文献

１．白井永二編　『鎌倉事典』1976　東京堂出版
２．『鎌倉市史』「社寺編」1959　吉川弘文館
３．『全譯吾妻鏡』新人物往来社

第２章　調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、平成14年１月７日から表土掘削及び機材の搬入を開始し、同年２月１日まで行った。周辺で行なわれた発掘調査結果を基に、重機で表土を約80～90㎝掘り下げ第１面を検出した。グリッドは、現在の妙本寺参道延びる東西軸方向に平行に設定した。グリットは鎌倉市４級基準点の内ＤＯ1058（Ｘ＝－76,078.520　Ｙ＝－25,067.316）と、ＤＯ1059（Ｘ＝－76,099.553　Ｙ＝－25,061.921）を基準に、調査基準原点１（Ｘ＝－76,085.775　Ｙ＝－24,077.213Ｚ＝9.976m）、原点２（Ｘ＝－76,083.335　Ｙ＝－25,000.837）を設定したもので南北軸線は真北に対して５°53′49″東にずれる。調査中に使用した水準点は鎌倉市３級水準点№53204（Ｌ＝16.147m）から仮原点に移動したもので、仮原点の海抜は9.976mである。

調査地は西に向かい開口する比企ヶ谷の谷口あたり妙本寺参道の南側面に接している。妙本寺参道の先、西に約170mには夷堂橋が架かりこの下を滑川が北から南に向かい流れ下っている。ＪＲ鎌倉駅まで約450m程の距離である。

調査は現地表から表土を重機で掘削し排土および調査中の残土は敷地内に山積みにした。表土は約80～90㎝の厚さの盛土で調査地全体が覆われていた。調査は道路面より約80㎝高い敷地の駐車場部分の切り下げと、下水管等掘削が遺構面まで及ぶ範囲であったため現地表面からおよそ－110㎝までの調査となった。調査面積は110㎡である。

２月１日に器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

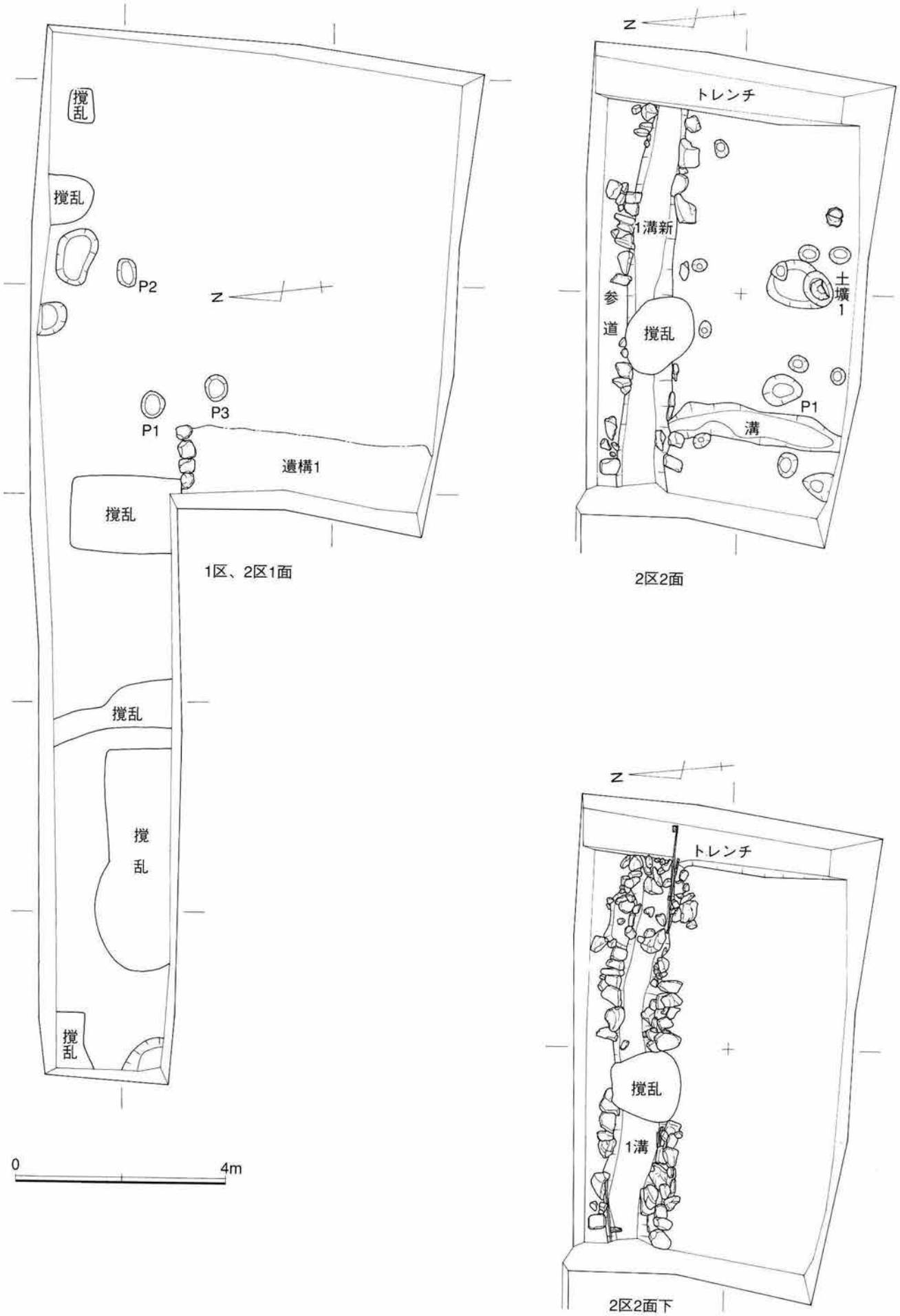
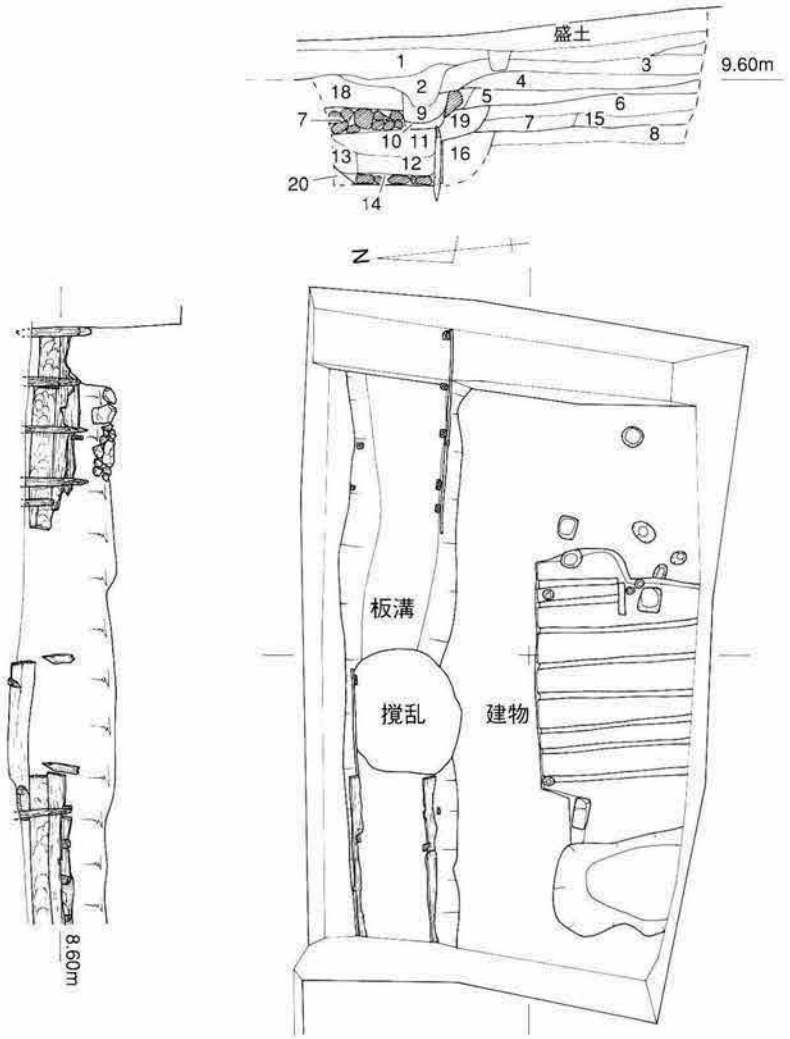


図2　1区1面、2区1面、2面全測図



1. 表　土
2. 淡茶灰色砂層（荒い砂と5～15cm大の土丹）
3. 茶灰色粘質土層
4. 明茶灰色粘質土層
5. 茶褐色粘質土層（5cm大の土丹を含む）
6. 淡茶褐色粘質土層
7. 土丹による1面構成土
8. 黒灰色粘質土層（10cm大の土丹を含む）
9. 荒い砂と0.5～3cm大の土丹層 } 溝覆土
10. 荒い砂と土丹粒多量に含む } 溝覆土
11. 荒い砂と20cm大までの土丹層
12. 荒い砂と5～10cm大の土丹層
13. 20cm大の土丹層（裏込め）
14. 大型（平らな）土丹を敷きつめ、間に荒い砂
15. 暗灰色粘質土層
16. 黒灰色粘質土層（板溝の裏込め）
17. 土丹層（人頭大多数）
18. 土丹層
19. 暗茶褐色土（1溝の裏込め）
20. 地山（青灰色粘質土層）

0　4m

図3　2区3面全測図及び板溝立面図

第３章　検出した遺構と遺物

参道脇の駐車場部分切り下げ範囲を１区、道路及び下水管等が入る範囲を２区として調査を行った。

ａ.1区の調査

参道脇の溝に土砂が落ちることがないように幅約１ｍ程の壁を残しながら、参道に沿って長さ（東西）20m、幅（南北）３ｍの調査区を設けた。重機を用いて表土掘削を行ったところ、ほぼ現在の道路面と同じ高さで土丹を敷き詰めた１面を確認した。駐車場部分でこれ以上の工事による掘削が行われないことから、調査は確認した土丹を敷き詰めた１面までとした。

精査を行ったところ明らかに近代の撹乱と井戸の掘方、数個の柱穴と土壙を確認した。柱穴と土壙は遺物が無く穿たれた時期は特定できない。調査区内に広がる土丹面は２区までは広がらないことからある時期の妙本寺参道の可能性も考えられた。１面の海抜は妙本寺よりの東端で9.58m、滑川に向かう西端では9.30mと緩やかに下がっていることがわかる。

ｂ.2区の調査

Ｌ字形の調査地、参道に面した幅３ｍの１区以外の南部分を２区とした。およそ幅（東西）８ｍ、長さ（南北）５ｍの大きさである。

１面

１区と同じ平坦面が広がり、この１面の海抜は約9.60mである。１区の遺構面に見られる土丹を敷き詰めた面は２区には広がらない。１区の土丹敷き面と２区の境目は東西方向に浅く窪み溝状を呈していた。２区西壁に沿って幅約１ｍ長さ５ｍの範囲に大小の土丹を敷いた基壇状の遺構１を検出した。遺構１の西縁には大きめの土丹が並べられていた。土丹面は調査区外の北東方向に広がりを見せていると考えられる。遺構１から出土している遺物から15世紀代の年代が考えられる。

２面

１面の下約15cmで２面を検出した。海抜約9.45mである。１区と２区の境目、１面で確認していた東西方向の浅い溝状の窪みの下から、東西方向の１溝新を長さ約７ｍ分検出した。溝は幅約80cm、深さ50cmの素掘りの溝である。また１面の遺構１の東側に沿って浅い素掘りの溝が１溝新に注ぎ込んでいる。２面では柱穴10個と土壙４個を検出し土壙１から捏鉢が出土した。１溝新の検出により１区１面で検出した土丹面は妙本寺に向かう参道と考えられる。

１溝新を掘り下げたところ40～50ｃｍ大の土丹塊を用いて護岸されている（１溝）ことが明らかになった。便宜的に２面下と呼ぶ。溝底の海抜は東端で8.56m、西端で8.45mである。この時期の溝の深さは約70cmである。また護岸の土丹の隙間から板溝の部材が観察されたことから、土丹を用いた護岸よりさらに一時期古い溝が存在することが明らかになった。

１溝新と１溝内で出土した遺物から２面は14世紀後半代の年代が考えられる。

３面

２面の下約20cm、海抜約9.25mでほぼ平坦に広がる３面を検出した。２面下の１溝から南に約１ｍ、溝に平行する建物跡を検出した。建物は東西３ｍ、南北は不明、遺存する深さ約３～５cmの床下に転ばし根太８本の痕跡を持つ建物である。根太の上に床を張った板壁を持つ建物と思われる。護岸された土丹を取り除くと幅約１ｍ、深さ１ｍあまり、側壁の土留めに板材を用いた板溝が検出された。溝底の海抜は東端で8.13m、西端で8.03m程である。若宮大路を始め側溝の土留めに板材を用いた板溝は、市内の発掘調査で数多く検出されているが、中でも若宮大路の側溝は幅３ｍ、深さ1.5mの規模を誇り、側

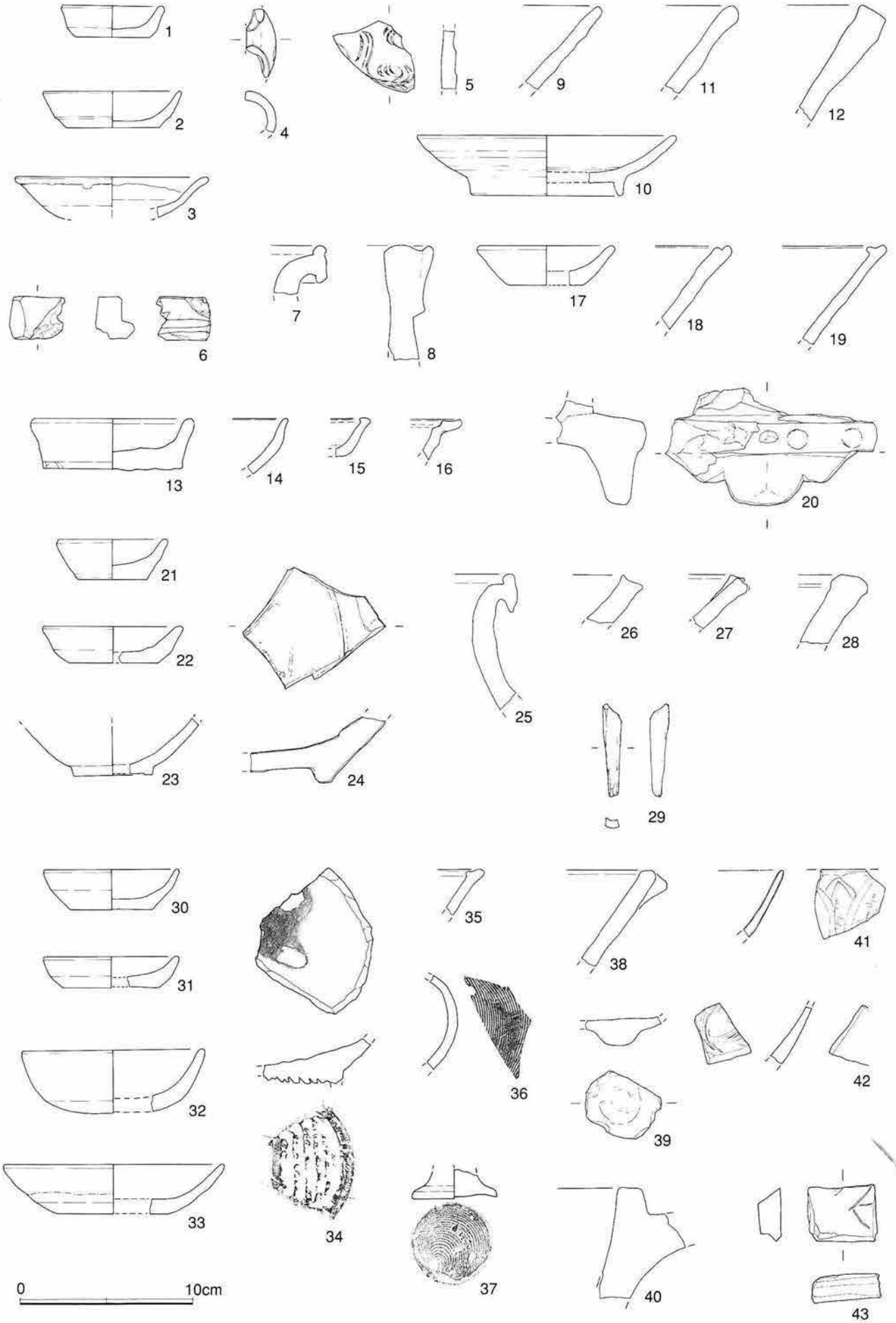


図4　Ⅰ・Ⅱ区包含層・1面の遺物

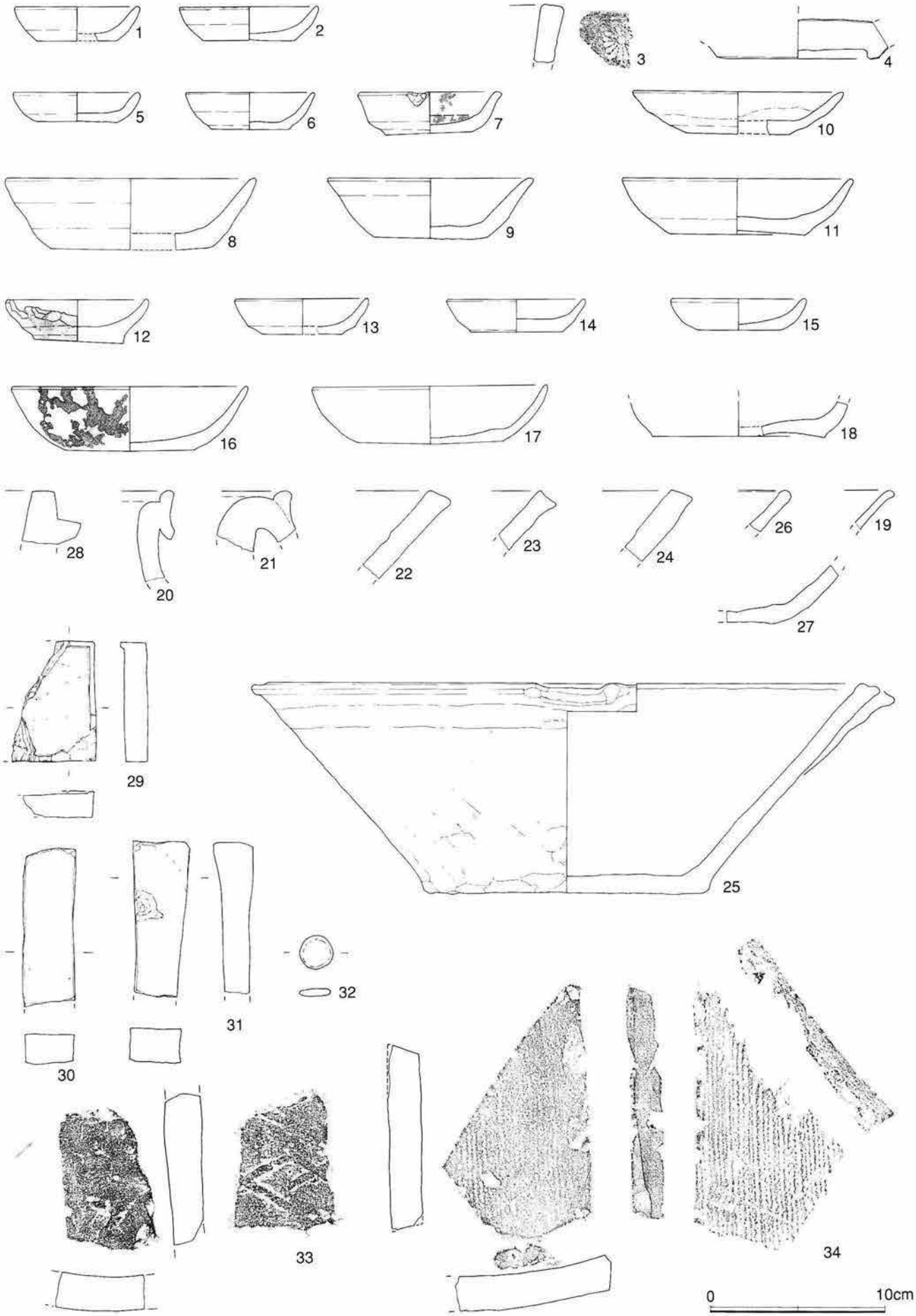


図5　Ⅱ区1面遺構・2面までの遺物

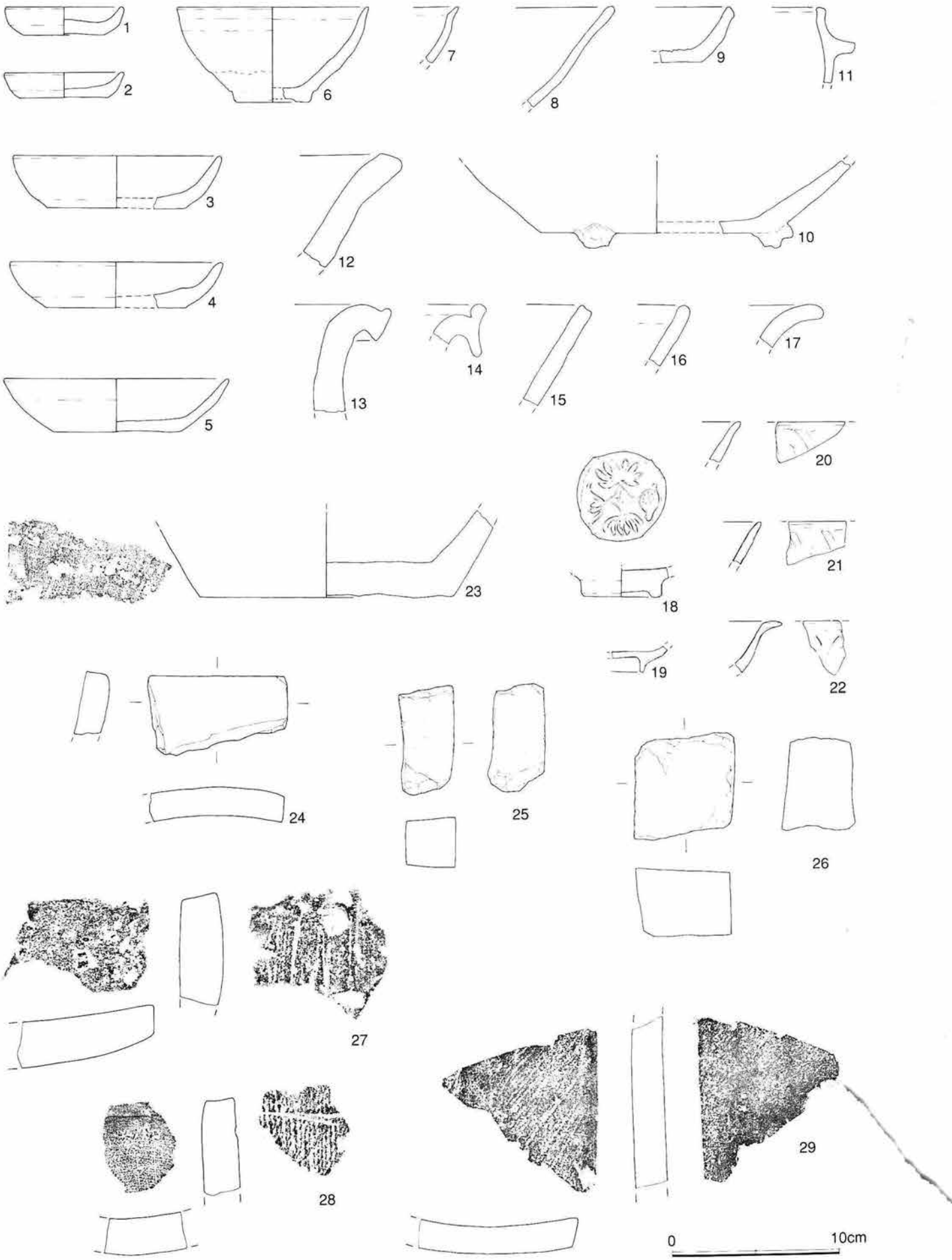


図6　Ⅱ区北トレンチ内の遺物

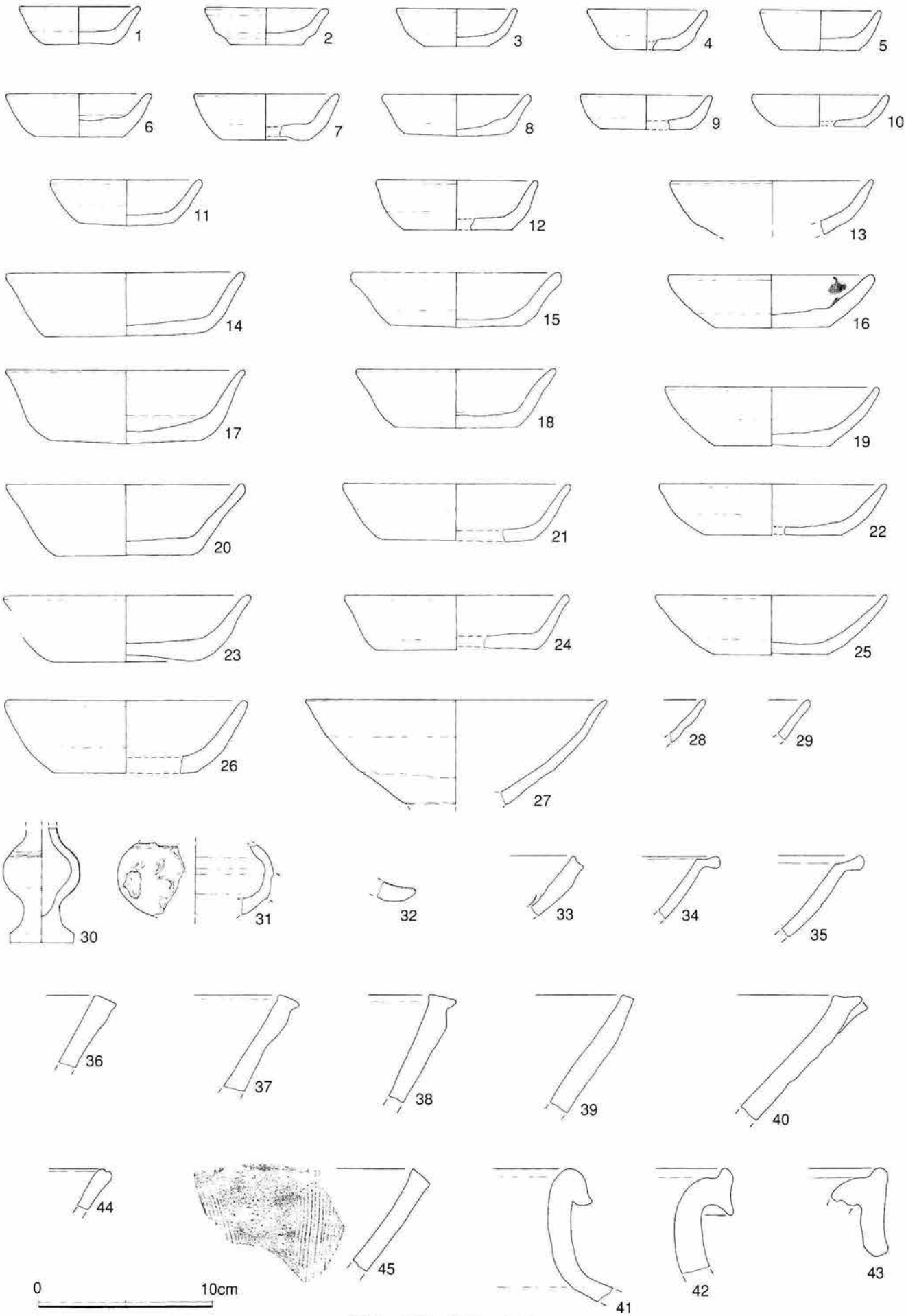

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
44
45
41
42
43
0
10cm

図7　Ⅱ区1溝新の遺物

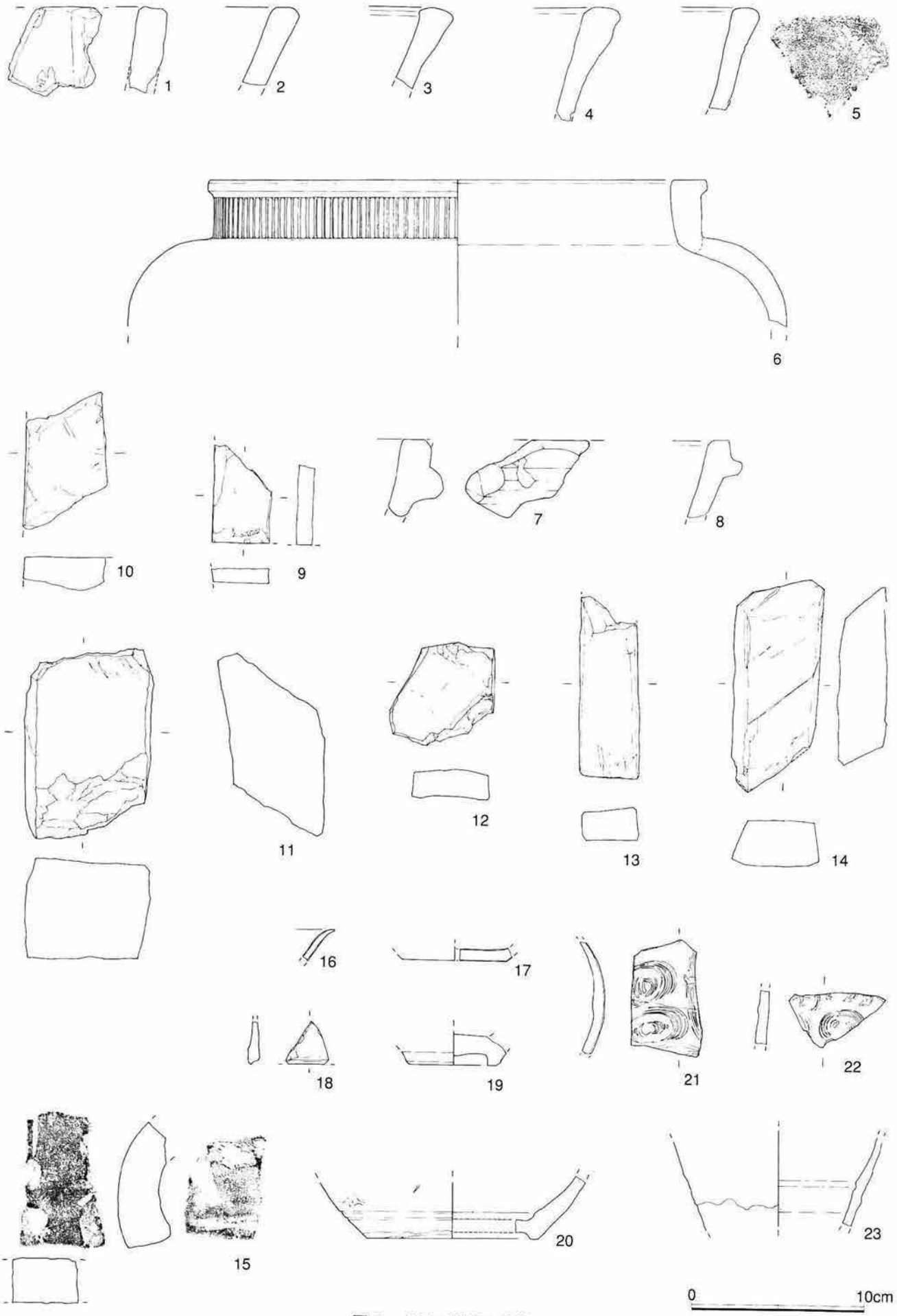


図8　Ⅱ区1溝新の遺物

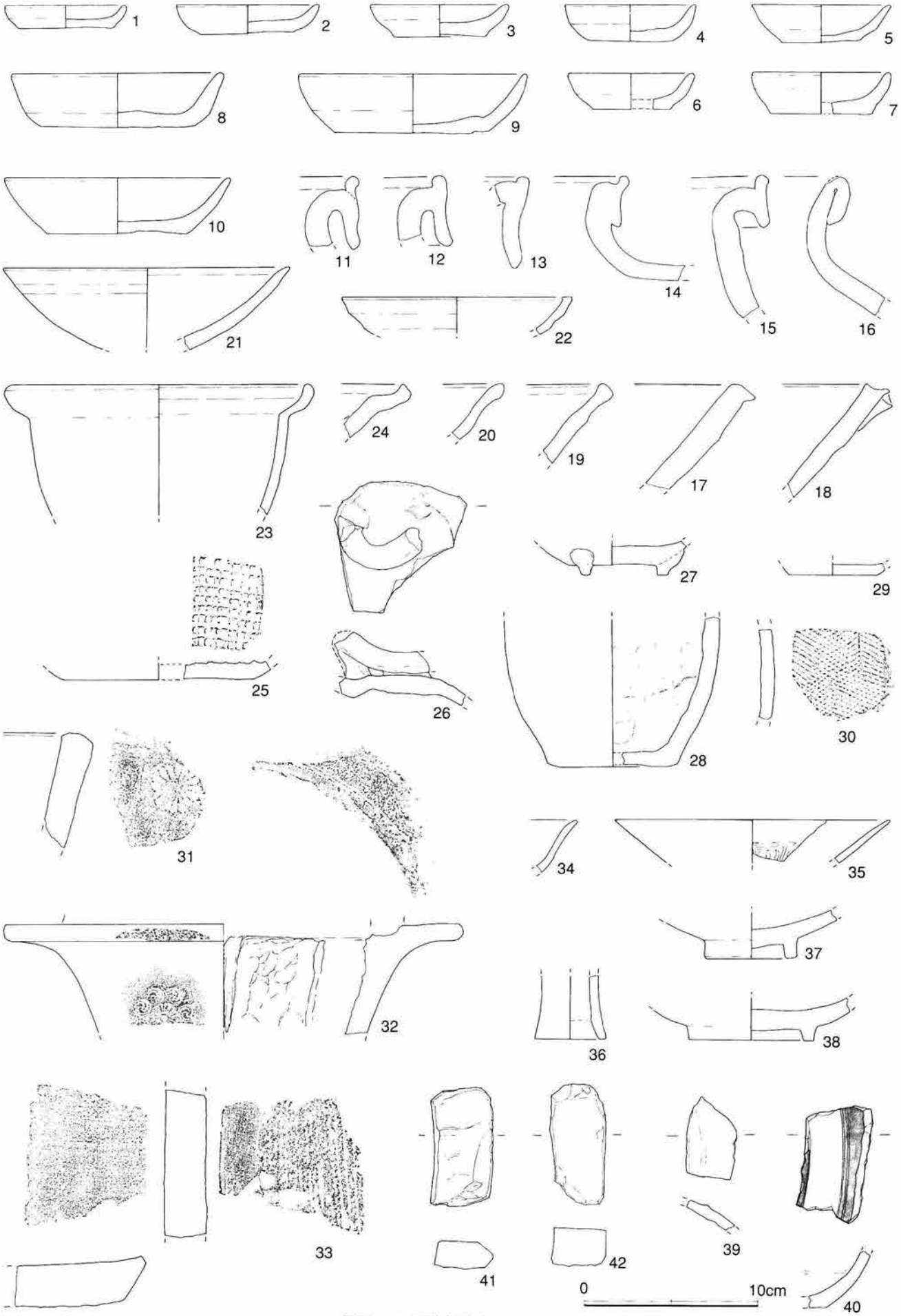


図9　Ⅱ区溝新底部の遺物

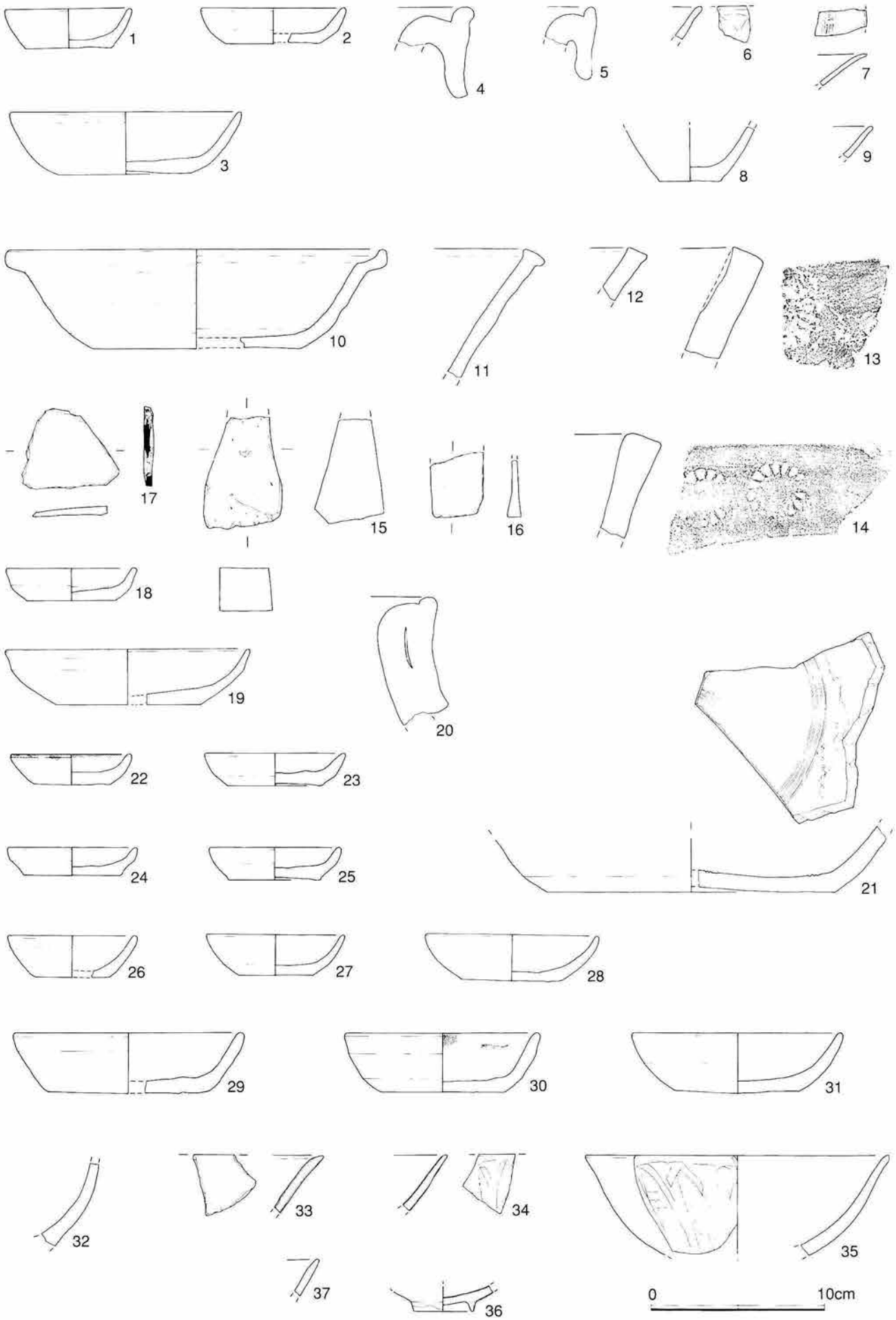

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
10cm

図10　Ⅱ区１溝の遺物

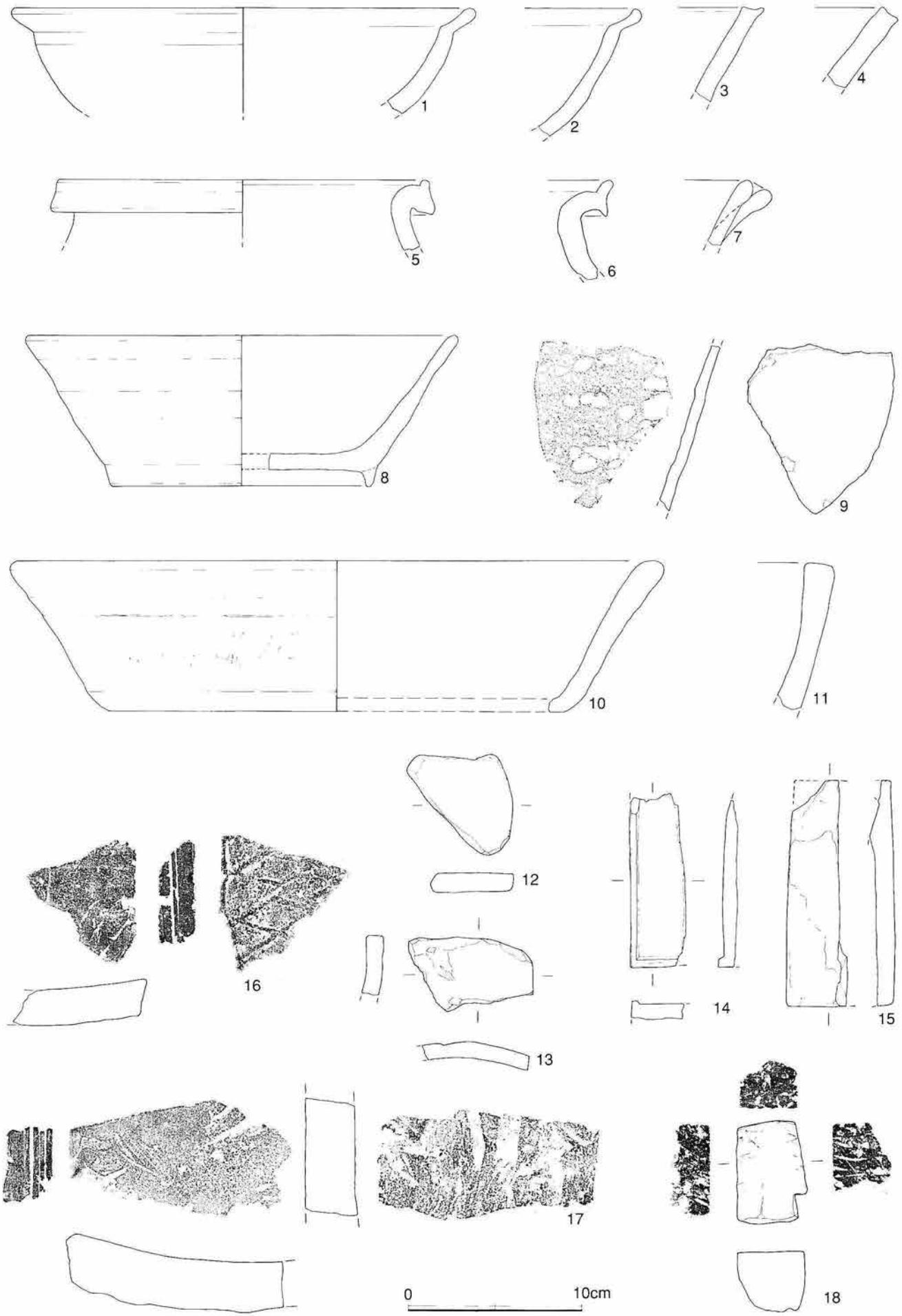
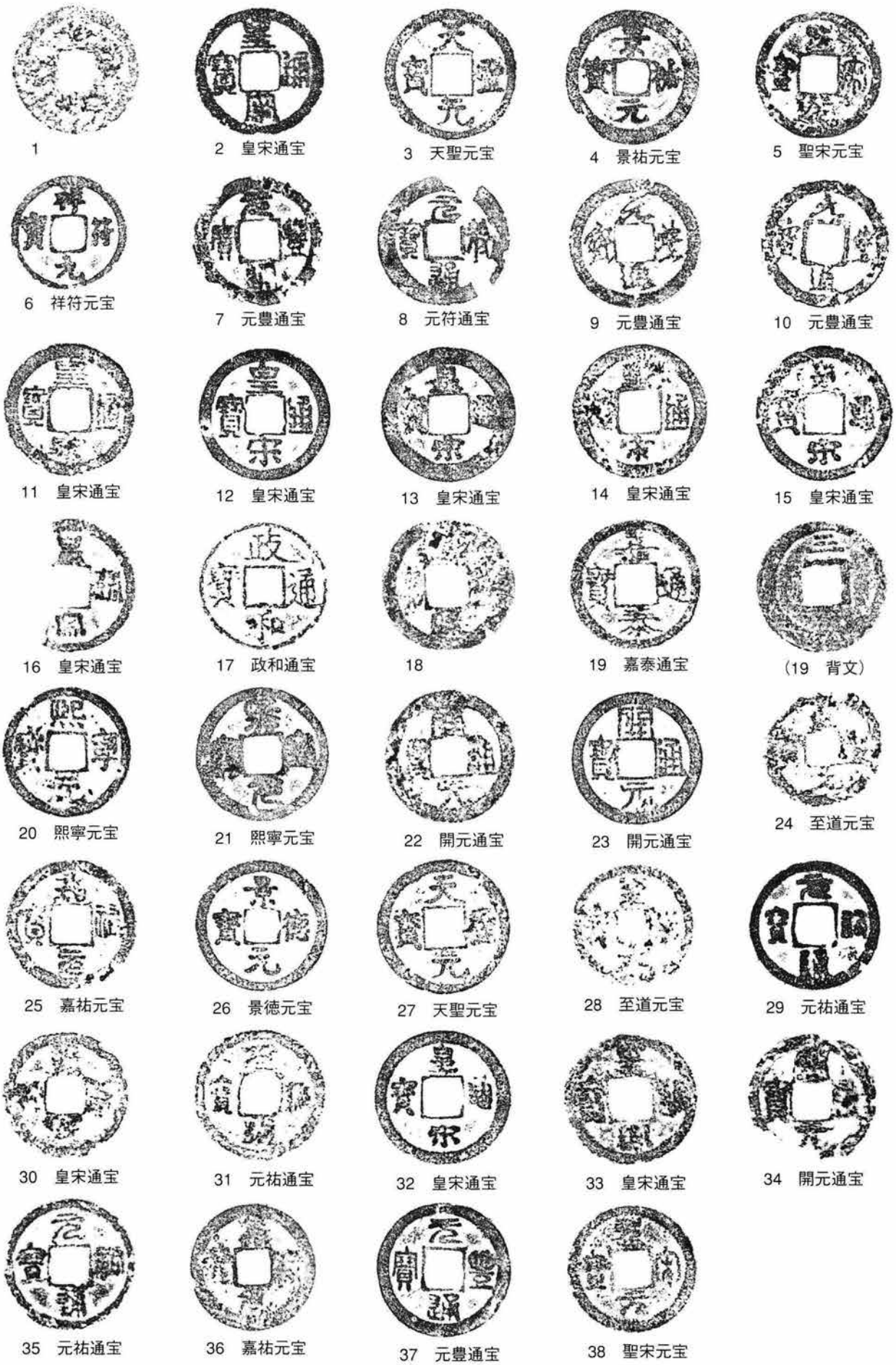


図11　Ⅱ区３面板溝の遺物



1
2 皇宋通宝
3 天聖元宝
4 景祐元宝
5 聖宋元宝
6 祥符元宝
7 元豊通宝
8 元符通宝
9 元豊通宝
10 元豊通宝
11 皇宋通宝
12 皇宋通宝
13 皇宋通宝
14 皇宋通宝
15 皇宋通宝
16 皇宋通宝
17 政和通宝
18
19 嘉泰通宝
(19 背文)
20 熙寧元宝
21 熙寧元宝
22 開元通宝
23 開元通宝
24 至道元宝
25 嘉祐元宝
26 景徳元宝
27 天聖元宝
28 至道元宝
29 元祐通宝
30 皇宋通宝
31 元祐通宝
32 皇宋通宝
33 皇宋通宝
34 開元通宝
35 元祐通宝
36 嘉祐元宝
37 元豊通宝
38 聖宋元宝

図12 銭

板を支える束柱の上下にホゾを穿った基礎の材木を溝幅に沿わせ、その上に束柱を立て梁を入れたり引きを取ったりする手間のかかる工法を採用している。溝１に見られる工法はもっと簡便な工法で、側壁を支える束柱は直接打ち込まれている。裏込めの跡が確認されることから溝を作る際、一旦素掘りの大きめの溝を掘り、溝幅に合わせて側板を並べ束柱を側板の長さに合わせ打ち込み、裏込めを戻していったと考えられる。おそらく溝の上部には内側に倒れ込まないように梁を入れたり引きを取ったものと思われる。溝底には扁平な土丹を敷き並べていたようである。板の重なり、束柱の間隔から何度かに渡り修理が行われていると思われる。

この土留めに板材を用いた板溝内で出土した遺物から３面の時期は14世紀前半代と考えられる。

３面下

３面の下約30㎝、海抜約９ｍで地山の上に被る黒灰色粘質土層の４面を北トレンチ深掘り内の土層断面で確認した。しかし宅地造成時の根切り（壊される深さ）を越えていたために面的な調査は行わなかった。更に３面の下約40㎝で地山面を確認した。地山面の海抜は約8.8m。南に向かい平坦面が広がっている様であるが詳細は不明。

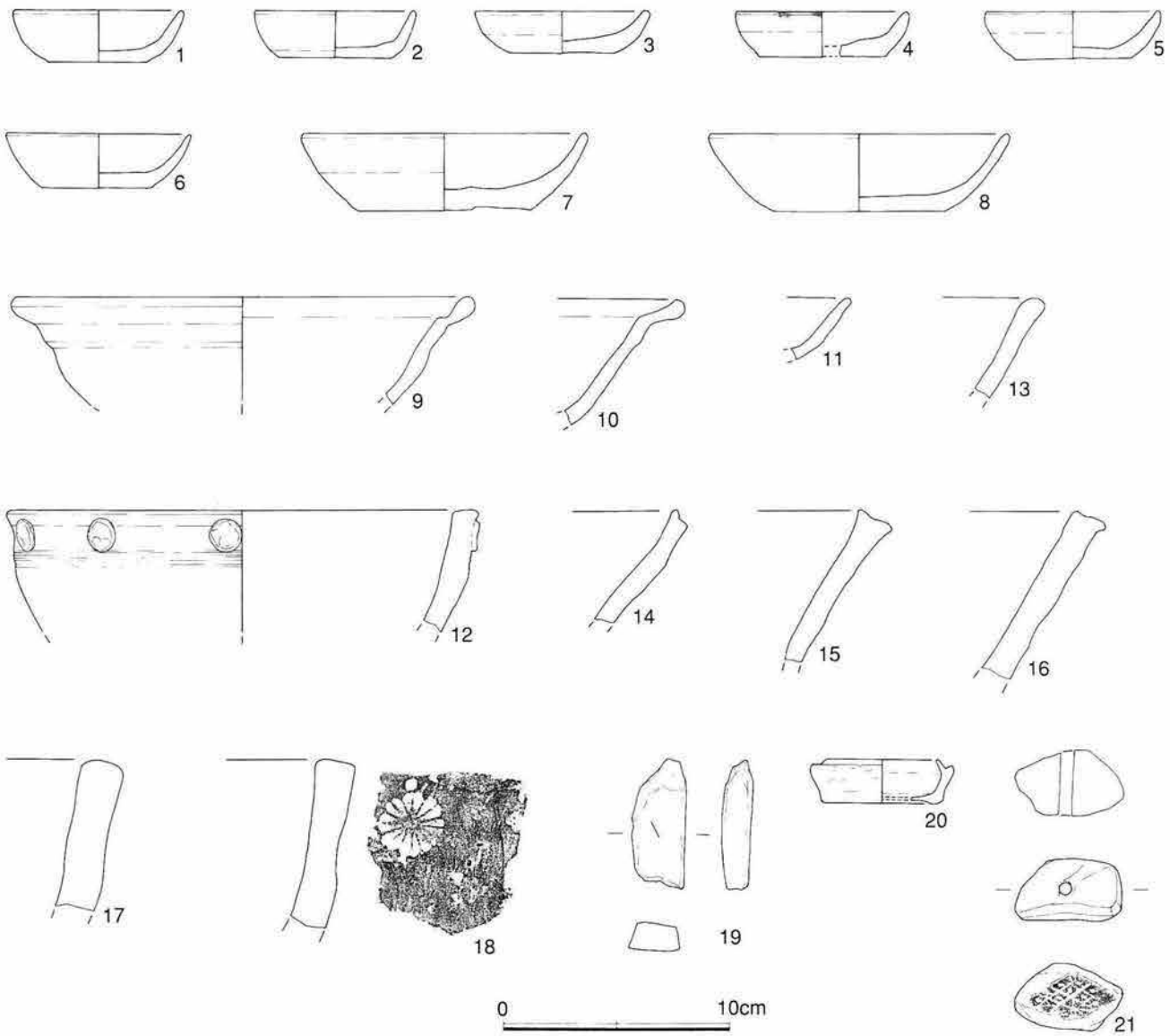


図13　Ⅱ区３面までの遺物

第4章　まとめ

妙本寺創建以前の比企ヶ谷の記録を見ると『吾妻鏡』寿永元年七月十二日条、北条政子が産気で頼朝の乳母、比企禅尼宅（比企ヶ谷の地名の由来）へ入ったことが挙げられる。後にこの地が比企能員以下一族の居館となる。比企能員は頼朝挙兵以来の功臣。妻が頼家の乳母となり、娘の若狭局が頼家の室となり一幡を生む。一幡が生まれたことにより将軍の舅として権力を増し北条氏と対立して行くことになる。建仁三（1203）年九月、頼家の病気のさいにその後継をめぐり北条氏と争い、北条氏討滅の企てを立てたとして比企能員は誅殺され、比企一族は一幡とともに居館があった比企ヶ谷で滅亡する。頼家は将軍を追われ伊豆に幽閉され實朝が将軍となる。比企ヶ谷の地名の初見は『吾妻鏡』建長五（1253）年12月11日条、妙本寺の創建は文応元（1260）年、比企一族滅亡から妙本寺創建まで57年間の年月が経っていることになる。この創建の年に北条正村の女が、比企ヶ谷土中にある讃岐局（比企能員の娘）の霊に惑わされた記事があるように、57年経っても比企一族滅亡の記憶が生々しく伝えられる屋地として積極的に利用されていなかったと言うことが、鎌倉時代前期・中期の遺物が少ないことから言えるのかもしれない。そして出土する遺物が14世紀以降の生活雑器を中心とした物が多いという傾向から妙本寺創建以降、境内及び周辺の土地利用が進んでいったと考えられる。

図4　Ⅰ・Ⅱ区包含層・1面の遺物

（単位：cm）

		口径	底径	器高	特徴等
【Ⅰ・Ⅱ区西側包含層】					
1	かわらけ	5.7	4.3	1.9	轆轤成形　焼成良好　橙　白針・クサリ礫混入
2	かわらけ	(7.9)	(5.3)	2.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・クサリ礫混入
3	瀬戸小皿	(11.0)			胎土：灰白色　精緻
4	青磁	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　釉：緑灰色　器形不明
5	青白磁梅瓶	体部片			胎土：灰白色　精緻　釉：水青色　二次焼成
6	滑石鍋転用品	縦2.5	横3.0	最大厚2.3	切断されスタンプ等の端材か
7	常滑甕	口縁部片			6ａ型式
8	常滑甕	口縁部片			9型式
【Ⅰ区西側包含層】					
9	瀬戸大皿	口縁部片			胎土：灰橙色　精緻　灰釉　輪花
10	瀬戸皿	(14.9)	(8.9)	3.5	胎土：灰白色　精緻　灰釉　見込みを蛇の目状に釉はぎ
11	山茶椀窯系捏鉢	口縁部片			胎土：灰色　長石粒多く含む粗胎
12	火鉢	口縁部片			土器質
【Ⅱ区西側1面】					
13	かわらけ	(9.0)	8.1	2.9	轆轤成形　胎土粗　焼成良好　にぶい橙　雲母・白針・砂混入
14	瀬戸碗	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
15	瀬戸卸皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
16	瀬戸折縁深皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
17	かわらけ	(7.6)	(4.4)	2.3	轆轤成形　焼成良好　にぶい橙　雲母・白針・クサリ礫混入
18	山茶椀窯系捏鉢	口縁部片			胎土：灰色　精緻　石灰質の石粒混入
19	瀬戸深皿	口縁部片			胎土：黄灰色　精緻　灰釉
20	火鉢	脚部片			瓦質
【Ⅰ区現代井戸掘方攪乱】					
21	かわらけ	6.1	3.9	2.3	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
22	かわらけ	(8.0)	(5.2)	2.1	轆轤成形　胎土やや粗　橙　雲母混入
23	瀬戸平碗		4.6		胎土：灰白色　精緻　灰釉
24	青磁大皿	底部片			胎土：灰白色　精緻　釉：緑灰色半透明
25	常滑甕	口縁部片			6ｂ型式
26	常滑捏鉢	口縁部片			
27	常滑捏鉢	口縁片口部分片			
28	火鉢	口縁部片			土器質
29	骨製品	長さ5.5	幅1.1	厚さ0.5	一方の先端を細く作ったもの　未製品か
【Ⅱ区1面】					
30	かわらけ	(7.6)	4.8	2.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・クサリ礫混入
31	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.8	轆轤成形　二次焼成　にぶい黄橙　雲母・砂混入
32	かわらけ	10.3	(5.6)	1.8	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・砂混入
33	瀬戸縁釉小皿	(12.6)	(6.3)	2.9	胎土：灰白色　灰釉
34	瀬戸底卸目皿	下体部片			胎土：灰白色　灰釉　内底に目痕・鉄釉
35	瀬戸黄釉深皿	口縁部片			胎土：浅黄橙
36	擂座線條文茶入	体部片			胎土：暗灰色　精緻　鉄釉擂座柳斗文小壺（茶入）赣州窯
37	瀬戸花瓶		4.9		胎土：灰白色　灰釉
38	常滑捏鉢	口縁片口部片			
39	土器	脚部片			胎土：灰白色　精緻　雲母・砂少量混入　器形不明
40	火鉢	口縁部片			瓦質　内面磨き
41	青磁蓮弁文碗	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　釉：水青色透明　釉層はうすい
42	青磁劃花文碗	体部片			胎土：灰白色　精緻　釉：灰色　水磨している
43	滑石製鍋転用品	長さ3.9	幅3.1	最大厚1.6	鍋の口縁と鍔以下を切り落とし、一部文様状の刻みを入れる　スタンプ未製品か

図5　Ⅱ区1・2面遺構・2面までの遺物

		口径	底径	器高	特徴等
【Ⅱ区1面 pit 3】					
1	かわらけ	(7.0)	(4.6)	2.0	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・砂混入
2	かわらけ	(7.8)	(5.3)	2.0	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・砂混入　口縁に煤付着
3	火鉢	口縁部片			瓦質　外体部に菊花文スタンプ
【Ⅰ区1面 pit 2】					
4	青磁大皿		(9.3)		胎土：灰白色　精緻　釉：淡緑青色透明
【Ⅱ区遺構1】					
5	かわらけ	(7.0)	(4.6)	1.7	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・砂混入
6	かわらけ	7.4	4.4	2.1	轆轤成形　焼成良好　胎土やや粗　浅黄橙　雲母・白針・クサリ礫混入
7	かわらけ	7.8	5.0	2.4	轆轤成形　焼成良好　橙　白針・クサリ礫・土丹混入
8	かわらけ	(14.1)	(9.2)	4.1	轆轤成形　胎土やや粗　焼成良好　橙　雲母・白針混入
9	かわらけ	(11.6)	(6.4)	3.5	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・砂混入
【Ⅱ区1面 pit 4】					
10	瀬戸縁釉小皿	(12.2)	(5.9)	2.5	胎土：灰白色　灰釉
11	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.2	轆轤成形　焼成良好　雲母・白針・砂混入
【Ⅱ区1面下2面まで】					
12	かわらけ	8.0	5.1	2.4	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針混入　煤付着
13	かわらけ	(7.5)	(4.5)	2.0	轆轤成形　焼成良好　浅黄橙　雲母・白針混入
14	かわらけ	(7.8)	5.3	1.9	轆轤成形　焼成良好　雲母・白針混入
15	かわらけ	7.5	4.7	1.8	轆轤成形　焼成良好　雲母・白針・砂混入
16	かわらけ	(13.3)	(7.3)	3.7	轆轤成形　焼成良好　雲母・白針・砂混入
17	かわらけ	(13.4)	(8.3)	3.8	轆轤成形　焼成良好　雲母・白針混入
18	瀬戸柄付片口		(9.9)		胎土：灰白色　精緻　灰釉
19	瀬戸皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
20	常滑甕	口縁部片			6ｂ型式

21	常滑甕	口縁部片			8型式
22	常滑捏鉢	口縁部片			
23	常滑捏鉢	口縁部片			
24	常滑捏鉢	口縁部片			
25	常滑捏鉢	34.0	16.4	12.2	8形式
26	山茶椀窯系捏鉢	口縁部片			
27	魚住鉢	下体部片			
28	滑石製鍋	口縁部片			
29	硯	長辺6.8	残存幅4.8	岡部最大厚1.9	長方硯
30	砥石	長さ8.7	幅3.0	厚さ1.6	上野産　中砥　小口は成形時加工痕が遺存　4面使用
31	砥石	長さ9.0	最大幅3.3	最大厚2.2	上野産　中砥　小口は成形時加工痕が遺存　4面使用
32	碁石	直径2.0		厚さ0.5	
33	平瓦	厚さ1.9			胎土精良　凸面斜格子叩き　永福寺Ⅱ期相当
34	平瓦	厚さ2.0			胎土精良　隅切り瓦で、焼成後に加工　凸面縄目叩き　永福寺Ⅰ期相当

図6　Ⅱ区北トレンチ内の遺物

1	かわらけ	(7.0)	(4.8)	1.7	轆轤成形　焼成良好　橙　白針・クサリ礫混入
2	かわらけ	(7.1)	(5.3)	1.5	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
3	かわらけ	(12.4)	(8.3)	3.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・砂混入
4	かわらけ	(12.6)	(8.4)	2.7	轆轤成形　やや粗胎　にぶい橙　雲母・クサリ礫・土丹・砂混入　二次焼成
5	かわらけ	(13.4)	(7.5)	3.2	轆轤成形　焼成良好　にぶい橙　雲母・白針・クサリ礫混入
6	瀬戸天目碗	(11.4)	(4.2)	5.8	胎土：灰白色　精緻　釉：黒釉　口縁部に褐釉を上掛け
7	瀬戸天目碗	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　釉：黒釉　口縁部に褐釉を上掛け
8	瀬戸大皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　釉：灰釉
9	瀬戸卸皿	体部片		3.4	胎土：灰白色　精緻　釉：灰釉
10	瀬戸折縁深皿		(14.1)		三足付き　胎土：灰黄色　チョーク状　釉：黄釉内底ハケヌリ、外体上部
11	伊勢系鍔釜				胎土：灰白色　金雲母の粗粒・砂を多く混入
12	火鉢	口縁部片			瓦質　口縁部に弱いみがきを施す
13	常滑甕	口縁部			6b型式
14	常滑甕	口縁部片			7型式
15	常滑捏鉢	口縁部片			
16	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片			
17	渥美甕	口縁部片			
18	青磁印花文碗		(4.4)		胎土：灰白色　黒色粒混入　精緻　釉：淡緑色透明
19	青磁蓮弁文皿	底部片			胎土：灰白色　精緻　釉：淡緑色半透明
20	青磁蓮弁文碗	口縁部片			胎土：灰色　精緻　釉：淡緑色透明　釉層はうすい
21	青磁蓮弁文碗	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　黒色粒混入　釉：淡緑色透明　釉層はうすい
22	青磁折縁皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　黒色粒混入　釉：淡緑色不透明　釉層は比較的うすい
23	滑石製鍋		(15.0)		
24	滑石製鍋転用品	縦4.7	横8.3	厚さ1.7	鍔を切り落とし、口縁に対してほぼ垂直に切断
25	砥石	長さ6.1	最大幅3.0	厚さ3.0	上野産　中砥　4面使用
26	砥石	長さ5.7	幅5.7	最大厚4.3	天草産　荒砥　4面使用
27	平瓦	厚さ2.7			胎土精良　凸面縄目叩き　永福寺Ⅰ期相当
28	平瓦	厚さ2.2			胎土精良　凸面縄目叩き　凹面布目痕　二次焼成　永福寺Ⅰ期相当
29	平瓦	厚さ1.8			胎土精良　焼成が強くごく堅緻　凸面なで　凹面糸切り痕　永福寺Ⅰ期相当

図7　Ⅱ区1溝新の遺物

1	かわらけ	(6.8)	(3.8)	2.1	轆轤成形　焼成良好　にぶい橙　雲母・クサリ礫・土丹粒混入
2	かわらけ	(6.9)	4.2	2.1	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針混入
3	かわらけ	(6.6)	(3.7)	3.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・土丹粒混入
4	かわらけ	(6.6)	(3.8)	2.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹粒混入
5	かわらけ	(6.8)	4.6	2.4	轆轤成形　焼成良好　にぶい橙　白針・クサリ礫・土丹混入
6	かわらけ	(8.1)	5.0	2.5	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針混入
7	かわらけ	(8.2)	(5.0)	3.7	轆轤成形　焼成良好　橙　白針・クサリ礫・土丹粒混入
8	かわらけ	(8.2)	5.8	2.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針混入
9	かわらけ	(7.4)	(5.2)	2.0	轆轤成形　焼成良好　橙　白針・クサリ礫・土丹粒混入
10	かわらけ	(7.9)	(5.3)	3.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹粒混入
11	かわらけ	(8.4)	(5.3)	2.7	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹粒混入
12	かわらけ	(9.0)	(6.4)	2.9	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
13	かわらけ	11.5			轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針混入
14	かわらけ	13.2	9.0	3.6	轆轤成形　焼成良好　橙　白針・石英・土丹粒混入
15	かわらけ	12.0	7.6	3.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
16	かわらけ	11.8	6.6	3.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
17	かわらけ	13.5	8.6	4.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・土丹粒混入
18	かわらけ	11.4	7.0	3.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・クサリ礫・土丹粒混入
19	かわらけ	(12.2)	(6.6)	3.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹粒混入
20	かわらけ	13.6	7.6	4.1	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・砂・土丹粒混入
21	かわらけ	(12.6)	(8.8)	3.3	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・混入
22	かわらけ	(13.0)	(7.8)	2.9	轆轤成形　焼成良好　にぶい橙　雲母・白針・土丹粒混入
23	かわらけ	14.0	6.9	3.8	轆轤成形　焼成良好　橙　白針・クサリ礫・混入
24	かわらけ	(12.6)	(9.2)	3.1	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・砂・クサリ礫混入
25	かわらけ	(13.2)	(6.4)	3.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹粒混入
26	かわらけ	(13.2)	(8.2)	4.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹粒混入

27	瀬戸平碗	(17.0)			胎土：黄灰色　精緻　灰釉
28	瀬戸平碗	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
29	瀬戸直縁大皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
30	瀬戸花瓶		3.6		胎土：灰白色　精緻　褐釉
31	瀬戸	体部片			胎土：灰色　精緻　灰釉　印花文　香炉・水注等の器形が考えられる
32	瀬戸酒会壺蓋	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　褐釉
33	瀬戸卸皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
34	瀬戸折縁深皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
35	瀬戸折縁深皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　灰釉
36	常滑捏鉢	口縁部片			
37	常滑捏鉢	口縁部片			
38	常滑捏鉢	口縁部片			
39	常滑捏鉢	口縁部片			
40	常滑捏鉢	口縁片口部片			
41	常滑甕	口縁部片			10型式
42	常滑甕	口縁部片			7型式
43	常滑甕	口縁部片			9型式
44	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片			
45	備前擂鉢	口縁部片			

図8　Ⅱ区1溝新の遺物

1	火鉢	口縁部片			瓦質　平面輪花
2	火鉢	口縁部片			土器質　二次焼成
3	火鉢	口縁部片			土器質
4	火鉢	口縁部片			土器質　穿孔あり
5	火鉢	口縁部片			土器質　外体部に菊花文のスタンプ
6	土風炉	(28.6)			瓦質
7	滑石製鍋	口縁部片			
8	滑石製鍋	口縁部片			
9	硯	残存長5.4	残存厚0.9		長方硯　表側欠損
10	硯	残存長6.4	残存厚1.8		長方硯　表側欠損
11	砥石	長さ10.6	幅7.4	厚さ5.8	天草産　荒砥　4面使用
12	砥石	長さ 5.9	幅6.1	最大厚1.5	鳴滝産　仕上げ砥　1面使用
13	砥石	長さ10.4	幅3.5	最大厚1.9	鳴滝産　仕上げ砥か　3面使用　煤付着
14	砥石	長さ11.7	幅5.0	厚さ2.2	上野産　中砥　3面使用　煤付着
15	丸瓦	厚さ2.6			胎土精良　永福寺Ⅰ期相当
16	白磁口兀皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　釉：透明
17	白磁口兀皿		(6.2)		胎土：灰白色　精緻　釉：透明
18	青白磁梅瓶蓋	口縁部片			胎土：灰白色　黒色粒混入　精緻　釉：水青色透明
19	青磁碗		5.0		胎土：灰白色　黒色粒混入　精緻　釉：淡緑色透明　粗い貫入あり
20	青白磁梅瓶		9.8		胎土：灰白色　黒色粒混入　精緻　釉：水青色透明　水注等とも考えられる
21	青白磁梅瓶	体部片			胎土：灰白色　黒色粒混入　精緻　釉：水青色透明
22	青白磁梅瓶	体部片			胎土：灰白色　黒色粒混入　精緻　釉：水青色透明
23	褐釉壺	体部片			胎土：灰白色　精緻　釉：暗赤褐色

図9　Ⅱ区1溝新底部の遺物

1	かわらけ	(6.8)	(5.5)	1.3	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・クサリ礫混入
2	かわらけ	8.0	5.4	1.7	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入
3	かわらけ	(8.0)	(5.2)	1.9	轆轤成形　胎土粗　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・砂混入　底部に貫通しない孔あり
4	かわらけ	(7.4)	(4.8)	2.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
5	かわらけ	8.0	4.4	2.3	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入
6	かわらけ	(7.0)	(4.4)	2.1	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
7	かわらけ	(7.7)	(5.9)	2.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
8	かわらけ	12.0	8.8	3.1	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入
9	かわらけ	14.2	9.0	3.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
10	かわらけ	12.9	8.0	3.3	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
11	常滑甕	口縁部片			8型式
12	常滑甕	口縁部片			8型式
13	常滑甕	口縁部片			8型式
14	常滑甕	口縁部片			8型式
15	常滑甕	口縁部片			7型式
16	常滑甕	口縁部片			10形式
17	常滑捏鉢	口縁部片			
18	常滑捏鉢	口縁片口部片			
19	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片			
20	山茶碗窯系捏鉢	口縁部片			
21	瀬戸平碗	(12.8)			胎土：灰白色　精緻　灰釉
22	瀬戸卸皿	(12.2)			胎土：灰黄色　精緻　灰釉
23	瀬戸柄付片口	(17.0)			胎土：灰黄色　精緻　灰釉　二次焼成
24	瀬戸折縁深皿	口縁部片			胎土：灰白色　整地　灰釉
25	瀬戸卸皿	底部片			胎土：灰白色　灰釉　二次焼成
26	瀬戸酒会壺蓋	頂部及び取手部片			胎土：灰白色　黒釉　草木文のヘラ書き
27	瀬戸香炉		(4.9)		胎土：灰白色　精緻　灰釉

28	瀬戸壺		(7.5)		胎土：灰白色　精緻　灰釉
29	瀬戸小皿		5.1		胎土：灰白色　精緻　内底に紅付着
30	魚住甕	体部片			綾杉の叩き
31	火鉢	口縁部片			瓦質　平面輪花　外体部に菊花文のスタンプ
32	火鉢	最大経（25.4）			瓦質　鍔部上面に菊花・唐草文、側面スタンプは意匠不明　下体部に菊花・巴文のスタンプ
33	平瓦	厚さ2.4			胎土精良　凸面縄目叩き　永福寺Ⅰ期相当
34	白磁口兀皿	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　釉：透明
35	青白磁皿	口縁部片			胎土：白色　精緻　釉：水青色透明　型作り　残存部内面に雷文
36	青白磁		(4.1)		胎土：白色　精緻　釉：水青色透明　帯付部釉はぎ　燭台等と考えられる
37	青磁碗		(5.3)		胎土：灰白色　黒色粒混入　精緻　釉：淡緑色不透明
38	青磁碗		7.2		胎土：灰白色　精緻　釉：水青色　見込みに蛇の目状の目痕　二次焼成
39	白磁壺	肩部片			胎土：灰白色　精緻　釉：水青色透明　凸帯の条線　水注等と考えられる
40	二彩盤	下体部片			胎土：にぶい橙　砂を多く含む粗胎　残存部は緑釉（図灰色部分）と透明釉
41	滑石製鍋転用品	長さ6.8	幅3.4	厚さ1.5	滑石製鍋の口縁・下体部を切り落としたもの　未製品か
42	砥石	長さ6.9	幅3.2	厚さ2.2	天草産　荒砥　3面使用

図10　Ⅱ区1溝の遺物

1	かわらけ	(7.2)	5.0	2.3	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入　内面及び外体上部に煤付着
2	かわらけ	(8.3)	(5.3)	2.1	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針　クサリ礫・土丹混入
3	かわらけ	(13.2)	7.5	3.6	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
4	常滑甕	口縁部片			8型式
5	常滑甕	口縁部片			8型式
6	青磁蓮弁文碗	口縁部片			胎土：灰色　精緻　釉：水青色透明
7	青白磁皿	口縁部片			胎土：白色　精緻　釉：水青色透明　内面雷文　型作り
8	小壺		3.1		産地不明陶器　内面灰釉か　二次焼成
9	美濃椀	口縁部片			胎土：白色　精緻
10	瀬戸折縁深皿	(21.4)	(11.9)	5.7	胎土：淡黄色　精緻　釉：灰釉
11	常滑捏鉢	口縁部片			
12	常滑捏鉢	口縁部片			
13	火鉢	口縁部片			瓦質　平面輪花　外体部に菊花文のスタンプ
14	火鉢	口縁部片			瓦質　外体部に菊花文のスタンプ
15	砥石	長さ6.5	最大幅5.1	最大厚4.2	天草産　荒砥　4面使用
16	砥石	長さ3.7	最大幅3.0	最大厚0.8	鳴滝産　仕上砥　2面使用
【Ⅱ区溝トレンチ内】					
17	砥石	長さ4.5	幅5.6	最大厚0.7	鳴滝産　仕上砥　2面使用　側面に漆を塗っている箇所あり
18	かわらけ	(7.4)	(5.1)	1.9	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・砂混入
19	かわらけ	(13.9)	(8.3)	3.2	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入
20	常滑甕	口縁部片			9形式
21	瀬戸折縁深皿		(16.6)		胎土：灰白色　精緻　釉：灰釉ハケヌリ　内底に蛇の目状の線掻きあり
【Ⅱ区3面溝1】					
22	かわらけ	6.8	4.2	1.8	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・砂混入　口縁に煤付着
23	かわらけ	(8.0)	5.4	1.9	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・土丹混入
24	かわらけ	7.3	5.5	1.6	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・クサリ礫混入
25	かわらけ	7.5	5.3	1.9	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入
26	かわらけ	(7.4)	(4.2)	2.4	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・クサリ礫砂混入
27	かわらけ	7.8	4.2	2.5	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・クサリ礫混入
28	かわらけ	(9.8)	5.8	2.6	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入
29	かわらけ	(13.0)	(9.3)	3.5	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
30	かわらけ	(11.0)	(7.0)	3.4	轆轤成形　焼成良好　鈍い黄橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入　内煤付着
31	かわらけ	(12.0)	(7.2)	3.5	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
32	黄釉盤	体部片			
33	青磁碗	口縁部片			胎土：白色　黒色粒混入　精緻　釉：淡緑色透明釉層は厚い　内面蓮弁文か
34	青磁蓮弁文碗	口縁部片			胎土：灰白色　精緻　釉：淡緑色透明　釉層は薄い
35	青磁蓮弁文碗	(17.4)			胎土：灰色　精緻　釉：暗緑灰色透明
36	青磁碗		3.4		胎土：灰白色　精緻　釉：水青色不透明
37	白磁口兀皿	口縁部片			胎土：白色　精緻　釉：透明

図11　Ⅱ区3面板溝の遺物

1	瀬戸折縁深皿	(26.2)			胎土：浅黄橙　精緻　灰釉
2	瀬戸折縁深皿	口縁部片			胎土：浅黄橙　精緻　灰釉
3	常滑捏鉢	口縁部片			
4	常滑捏鉢	口縁部片			
5	常滑甕	(21.0)			6ａ型式
6	常滑甕	口縁部片			6ｂ型式
7	山茶椀窯系捏鉢	口縁部片			
8	山茶椀窯系捏鉢	(24.5)	(14.2)	8.7	
9	褐釉甕	体部片			二次焼成
10	火鉢	(36.8)	(26.2)	(8.6)	土器質
11	火鉢	口縁部片			瓦質　平面輪花
12	滑石製鍋転用品				鍋の底部　体部を切り落としたもの　未製品か
13	滑石製鍋転用品				鍋の体部　未製品か
14	硯	残存長9.9	残存幅3.2	残存厚0.9	方硯　裏面欠損

15	硯	残存長13.0	残存幅3.5	残存厚1.4	方硯　長側欠損
16	平瓦	厚さ2.			胎土：精良　凸面斜格子叩き　永福寺Ⅰ期相当
17	平瓦	厚さ3.1			胎土：やや粗　凸面斜格子叩き　鶴岡八幡宮7溝相当
18	砥石	長さ5.7	最大幅4.1	最大厚3.5	天草産　荒砥　2面使用

図12　銭　　（寸法の単位はmm　重さの単位はg）

No.	銭　種	時代	初鋳	背文	字体	外縁外径	外縁幅	内部径	方穿外径	方穿内径	外縁厚	重さ	出土地点・層位
1	不　明			なし		24.2	2.8	18.4		7.4	1.4	2.3	Ⅰ区東側1面上
2	元豊通宝	北宋	1078	なし	篆書	24.2	2.6	19.8	8.0	6.9	1.3	2.5	Ⅱ区北トレンチ
3	天聖元宝	北宋	1023	なし	楷書	24.5	2.6	20.8	8.1	6.9	1.4	3.6	Ⅱ区3面まで
4	景祐元宝	北宋	1034	なし	楷書	25.0	2.8	19.6	7.7	6.1	1.1	2.7	〃
5	聖宋元宝	北宋	1101	なし	篆書	23.6	2.0	19.8	7.7	6.9	1.1	2.4	〃
6	祥府元宝	北宋	1008	なし	楷書	21.9	1.8	18.5	7.3	6.3	1.2	2.2	〃
7	元宝通宝	北宋	1078	なし	篆書	24.4	2.5	19.2	8.5	6.8	1.4	2.8	〃
8	元宝通宝	北宋	1078	なし	篆書	24.7	3.9	18.0	7.9	5.9	1.5	2.9	Ⅱ区建物覆土
9	元宝通宝	北宋	1078	なし	行書	24.4	2.9	18.9	8.1	6.9	1.1	2.4	〃
10	元宝通宝	北宋	1078	なし	行書	23.6	2.6	18.3	9.0	7.3	1.2	2.5	〃
11	皇宋通宝	北宋	1039	なし	篆書	24.5	2.8	19.3	8.7	7.2	1.1	2.4	〃
12	皇宋通宝	北宋	1039	なし	楷書	24.5	2.3	19.8	7.3	7.0	1.2	2.7	〃
13	皇宋通宝	北宋	1039	なし	楷書	25.1	3.5	17.9	7.8	7.0	1.2	3.5	〃
14	皇宋通宝	北宋	1039	なし	楷書	25.0	3.2	19.7	8.7	7.3	1.4	2.7	〃
15	皇宋通宝	北宋	1039	なし	楷書	25.1	2.9	20.2	8.4	6.8	1.3	3.4	〃
16	皇宋通宝	北宋	1039	なし	篆書	24.5	2.4	20.7	8.5	7.3	1.2	1.9	〃
17	政和通宝	北宋	1111	なし	楷書	23.7	1.0	21.8	8.3	6.3	1.6	2.7	〃
18	不　明			なし		24.4	3.2	18.7	7.4	7.5	1.0	1.9	〃
19	嘉泰通宝	南宋	1201	[illegible]	楷書	24.4	2.4	19.9	8.5	7.3	1.1	2.8	〃
20	熙寧元宝	北宋	1068	なし	楷書	24.0	2.1	20.2	8.0	6.0	1.8	5.1	〃
21	熙寧元宝	北宋	1068	なし	篆書	24.8	2.6	20.4	8.2	7.0	1.3	3.0	〃
22	開元通宝	唐	621	なし	楷書	24.3	2.6	18.2	8.0	6.6	1.4	2.8	〃
23	開元通宝	唐	621	なし	楷書	24.6	2.4	20.0	7.8	6.6	1.4	3.3	〃
24	至道元宝	北宋	995	なし	行書	23.3	2.7	18.1	7.9	6.5	1.4	1.9	〃
25	嘉祐元宝	北宋	1056	なし	篆書	24.1	2.6	19.4	8.4	6.9	1.3	3.1	〃
26	景德元宝	北宋	1004	なし	楷書	24.6	2.7	20.3	6.9	6.2	1.1	2.8	〃
27	天聖元宝	北宋	1023	なし	楷書	25.1	2.7	20.3	8.4	6.9	1.3	3.6	〃
28	至道元宝	北宋	995	なし	楷書	23.8	2.2	18.6	6.7	5.2	2.2	3.4	Ⅰ溝新～砂層
29	元祐通宝	北宋	1086	なし	篆書	24.0	2.1	20.0	8.7	7.1	1.0	2.1	〃
30	皇宋通宝	北宋	1039	なし	篆書	23.7	2.6	18.9	7.6	6.8	1.4	2.8	Ⅰ溝新底部
31	元祐通宝	北宋	1086	なし	行書	24.5	2.3	19.7	8.3	7.2	1.1	2.1	〃
32	皇宋通宝	北宋	1039	なし	楷書	25.0	2.7	19.9	8.2	7.0	1.2	2.8	Ⅱ区新溝
33	皇宋通宝	北宋	1039	なし	篆書	24.2	2.4	19.7	8.6	7.8	1.2	2.4	〃
34	開元通宝	唐	621	なし	楷書	23.8	2.4	19.2	7.5	6.9	1.3	2.4	〃
35	元祐通宝	北宋	1086	なし	篆書	24.2	2.0	20.2	7.8	6.6	1.5	3.6	〃
36	嘉祐元宝	北宋	1056	なし	篆書	23.4	2.9	17.4	7.5	6.2	1.2	3.1	板溝
37	元豊通宝	北宋	1078	なし	篆書	25.1	2.6	19.9	8.1	6.6	1.2	4.2	〃
38	聖宋元宝	北宋	1101	なし	篆書	23.4	2.4	19.6	7.9	6.5	1.3	3.3	〃

註）常滑の編年及び瀬戸器種名称は『概説中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会編1195年真陽社）による。瓦の編年は『国指定史跡永福寺跡遺物編・考察編』（平成14年鎌倉市教育委員会）による。

図13　Ⅱ区3面までの遺物

1	かわらけ	(7.3)	(4.3)	2.3	轆轤成形　焼成良好　にぶい橙　雲母・白針クサリ礫・砂混入
2	かわらけ	(7.2)	(5.0)	2.1	轆轤成形　黒色　雲母・白針・砂混入　二次焼成
3	かわらけ	(7.6)	(4.6)	1.9	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・砂混入
4	かわらけ	(7.5)	(5.7)	2.0	轆轤成形　焼成良好　にぶい橙　雲母・白針・クサリ礫・土丹混入
5	かわらけ	(7.8)	(5.2)	2.1	轆轤成形　焼成良好　にぶい黄橙　雲母・白針・クサリ礫混入
6	かわらけ	8.2	4.8	2.4	轆轤成形　焼成むらあり　橙　雲母・白針・クサリ礫土丹混入
7	かわらけ	(12.5)	7.7	3.4	轆轤成形　焼成むらあり　橙　雲母・白針・クサリ礫混入
8	かわらけ	(13.0)	(7.5)	3.4	轆轤成形　焼成良好　橙　雲母・白針・クサリ礫混入　口縁に煤付着
9	瀬戸折縁深皿	(22.1)			胎土：灰白色　精緻　灰釉
10	瀬戸折縁深皿	Ⅰ口縁部片			胎土：淡黄色　精緻　灰釉
11	瀬戸縁釉小皿	Ⅰ口縁部片			胎土：淡黄色　精緻　灰釉
12	瀬戸鉢	(18.8)			胎土：灰白色　精緻　灰釉
13	山茶椀窯系捏鉢	Ⅰ口縁部片			
14	常滑捏鉢	Ⅰ口縁部片			
15	常滑捏鉢	Ⅰ口縁部片			
16	常滑捏鉢	Ⅰ口縁部片			内面摩滅顕著　二次焼成
17	火鉢	Ⅰ口縁部片			瓦質　平面輪花
18	火鉢	Ⅰ口縁部片			瓦質　平面輪花　外体部に菊花文のスタンプ　17と同一個体か
19	砥石	長さ5.7	幅2.3	厚さ1.3	鳴滝産　仕上砥　2面使用
20	青白磁合子	(4.9)	(5.4)	(1.9)	胎土：白色　黒色粒混入　精緻　釉：水青色透明
21	滑石製スタンプ	印面4.0×2.1			割り菱文　穿孔あり

1．JR鎌倉駅方面を望む

2．1面全景

3．遺構1

4．1区土丹面

5．2区1面

6．遺構1

7．作業風景

1面の調査

図版2

1. 2区2面

2. 2区2面

3. 2区2面1溝新

4. 2区2面1溝新

5. 2区2面1溝新

6. 2区2面1溝新

7. 2区2面P1

8. 2区2面土壙1

2面の調査・1溝新の調査

1．2区2面下1溝

2．2区2面下1溝

3．2面下1溝東から

4．2面下1溝西から

5．2面下全景

6．2面下全景

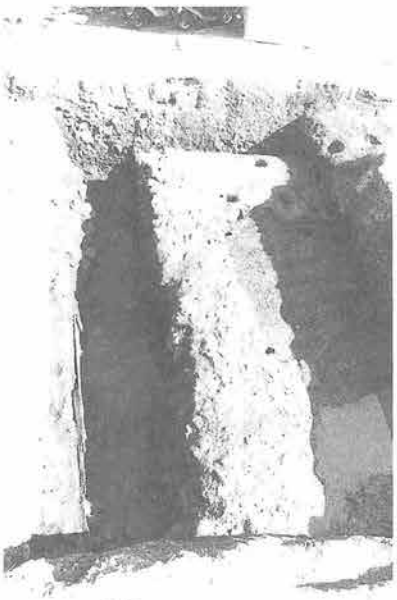
7．1溝北から

8．1溝北から

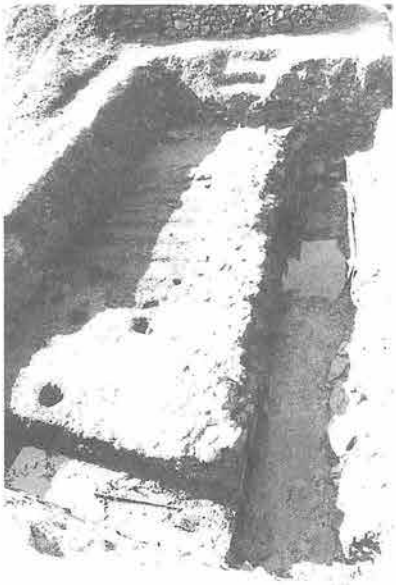
1溝古の調査

図版4

1．3面建物

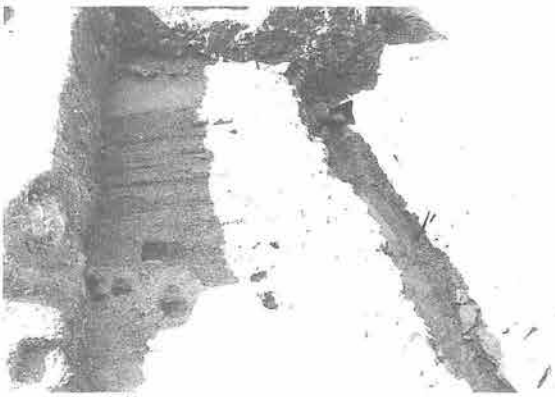


2．3面全景西から



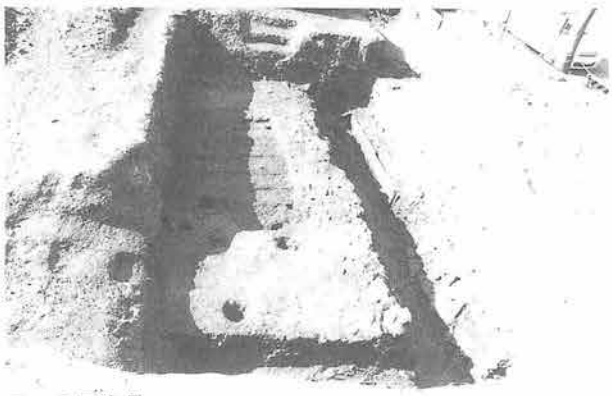
3．3面全景東から

4．建物根太の様子



5．3面建物

6．3面全景



7．3面全景

3面の調査

1．板溝断面

3．板溝側板と打ち込まれた東柱

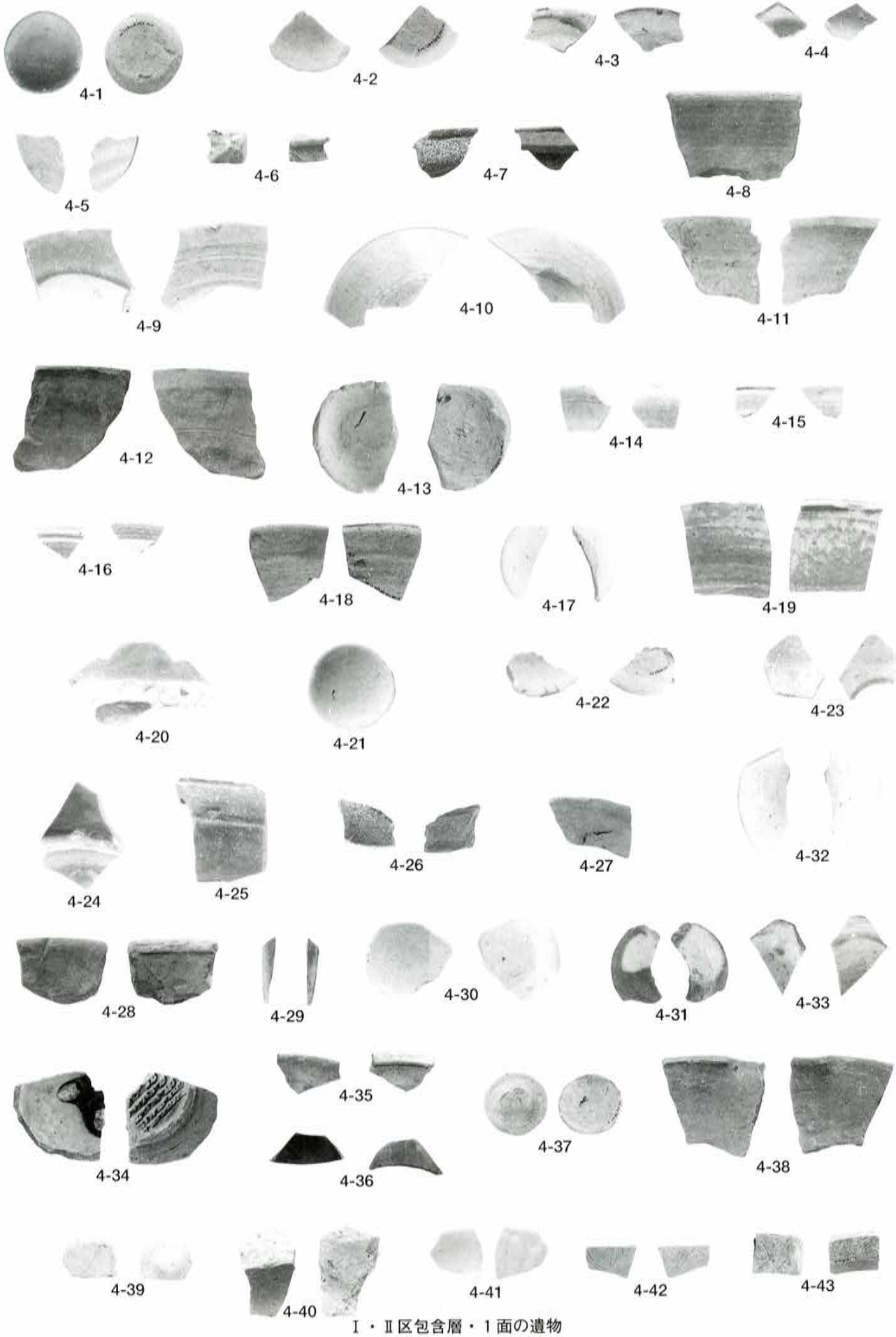
2．板溝断面

4．板溝北から

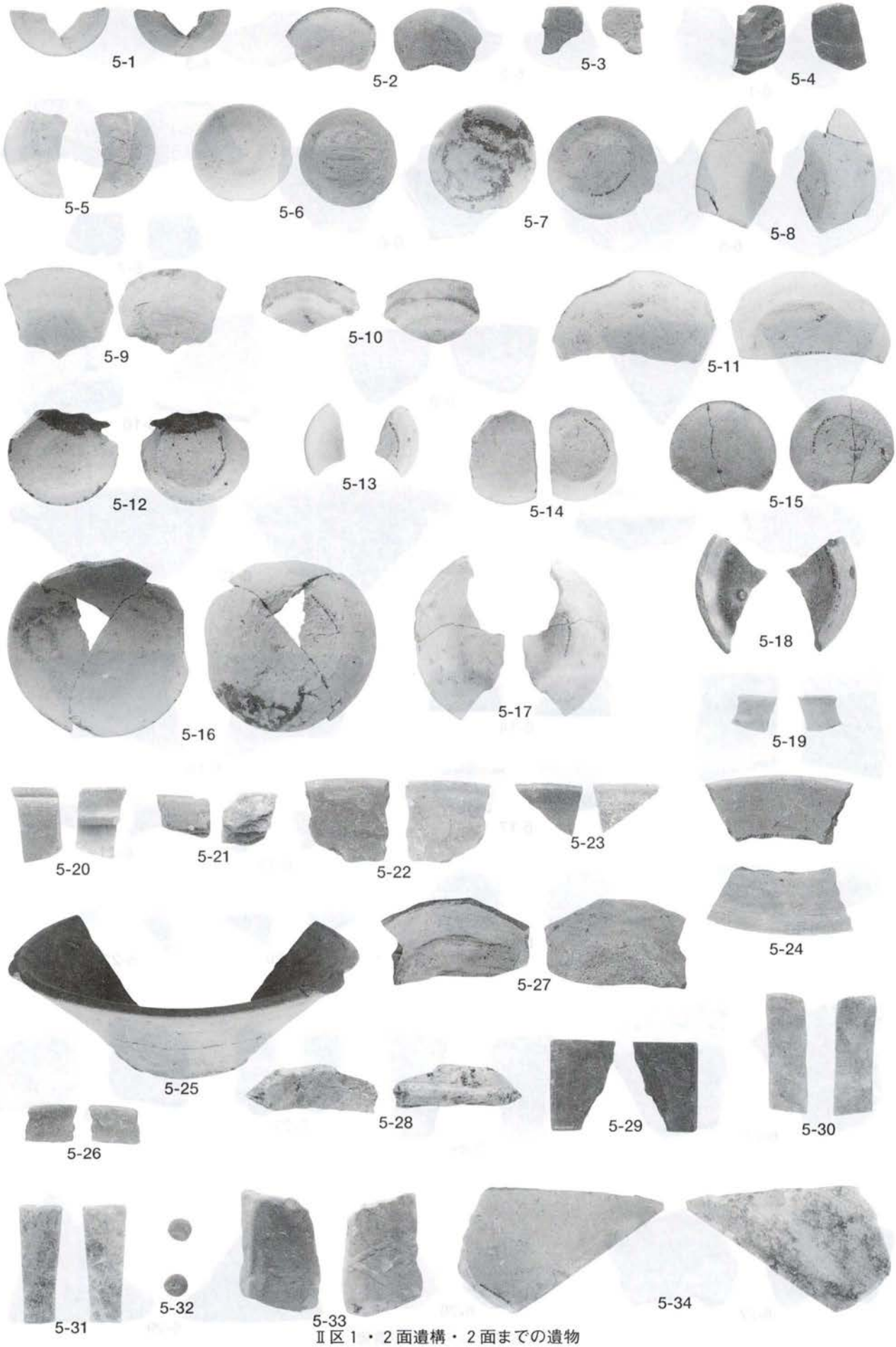
3．板溝東から

3．板溝西から

図版6

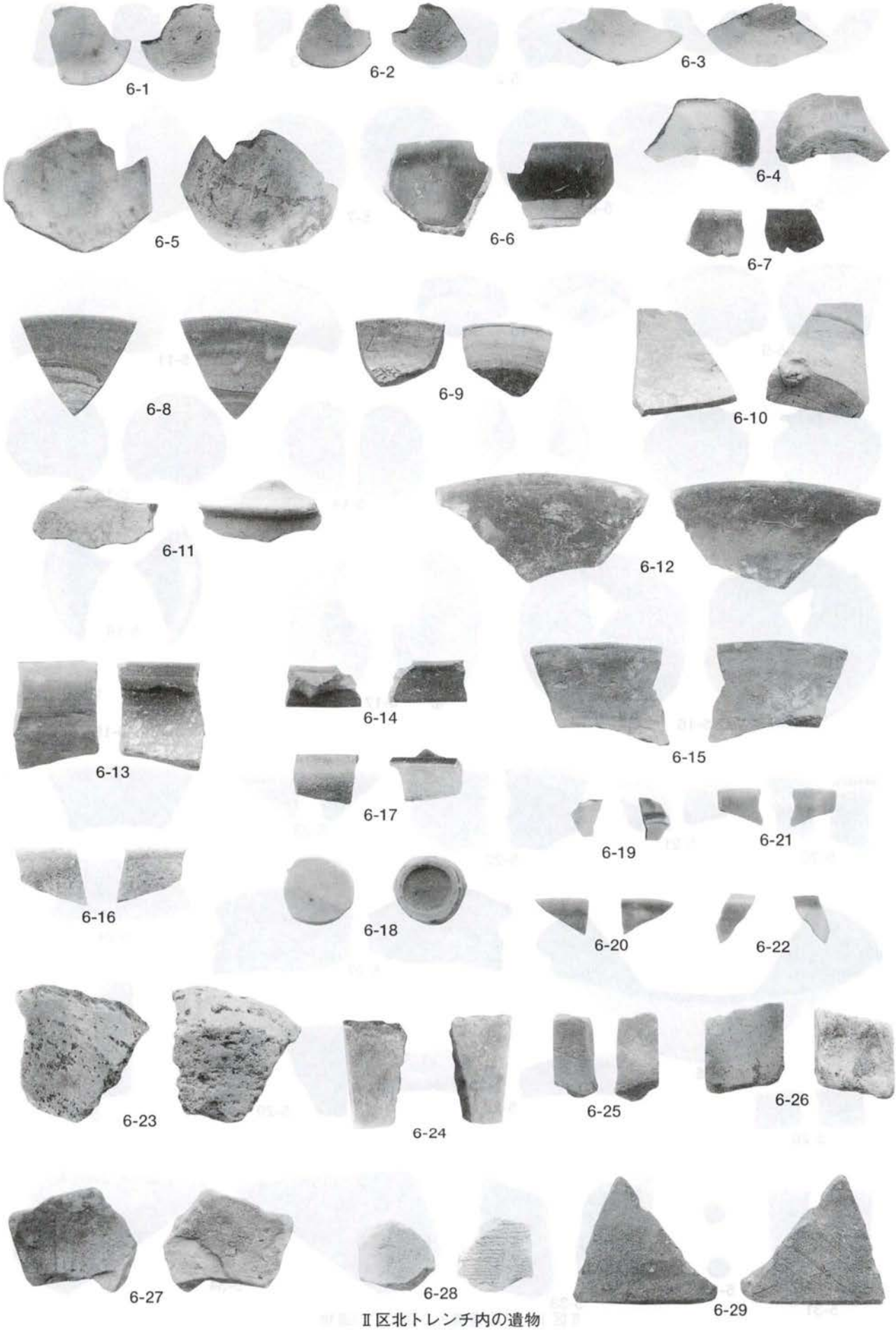


Ⅰ・Ⅱ区包含層・1面の遺物

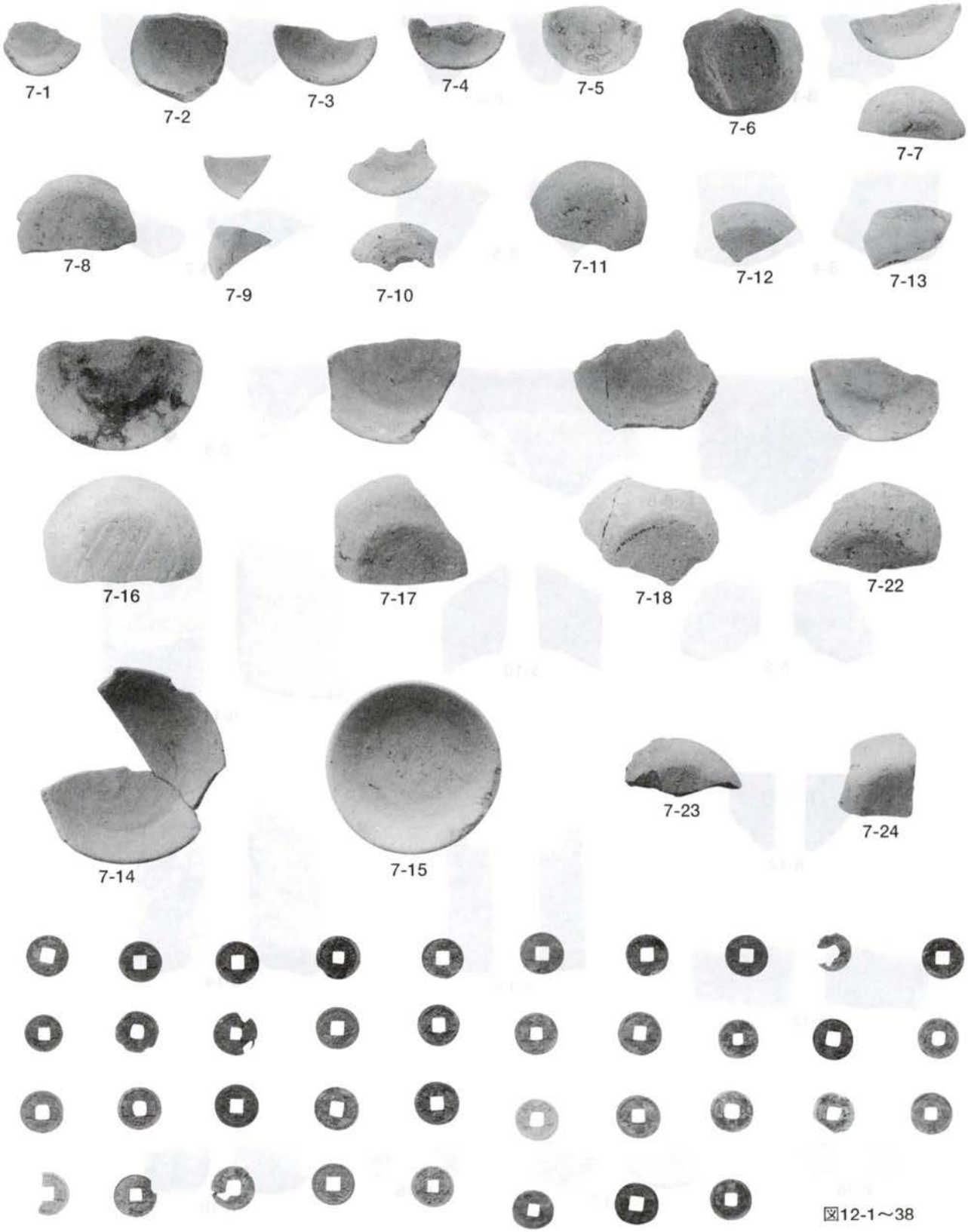


Ⅱ区１・２面遺構・２面までの遺物

図版8

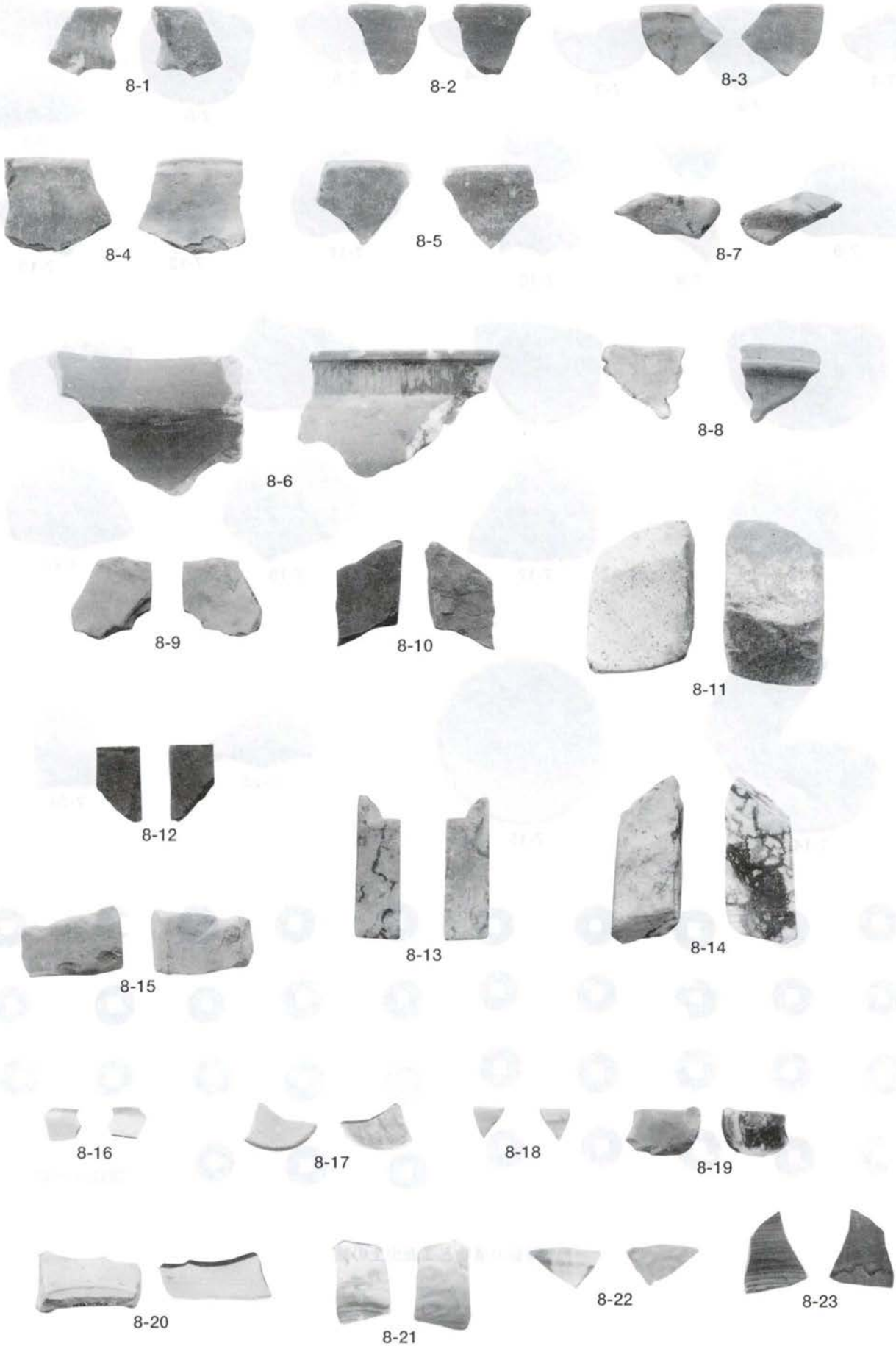


Ⅱ区北トレンチ内の遺物

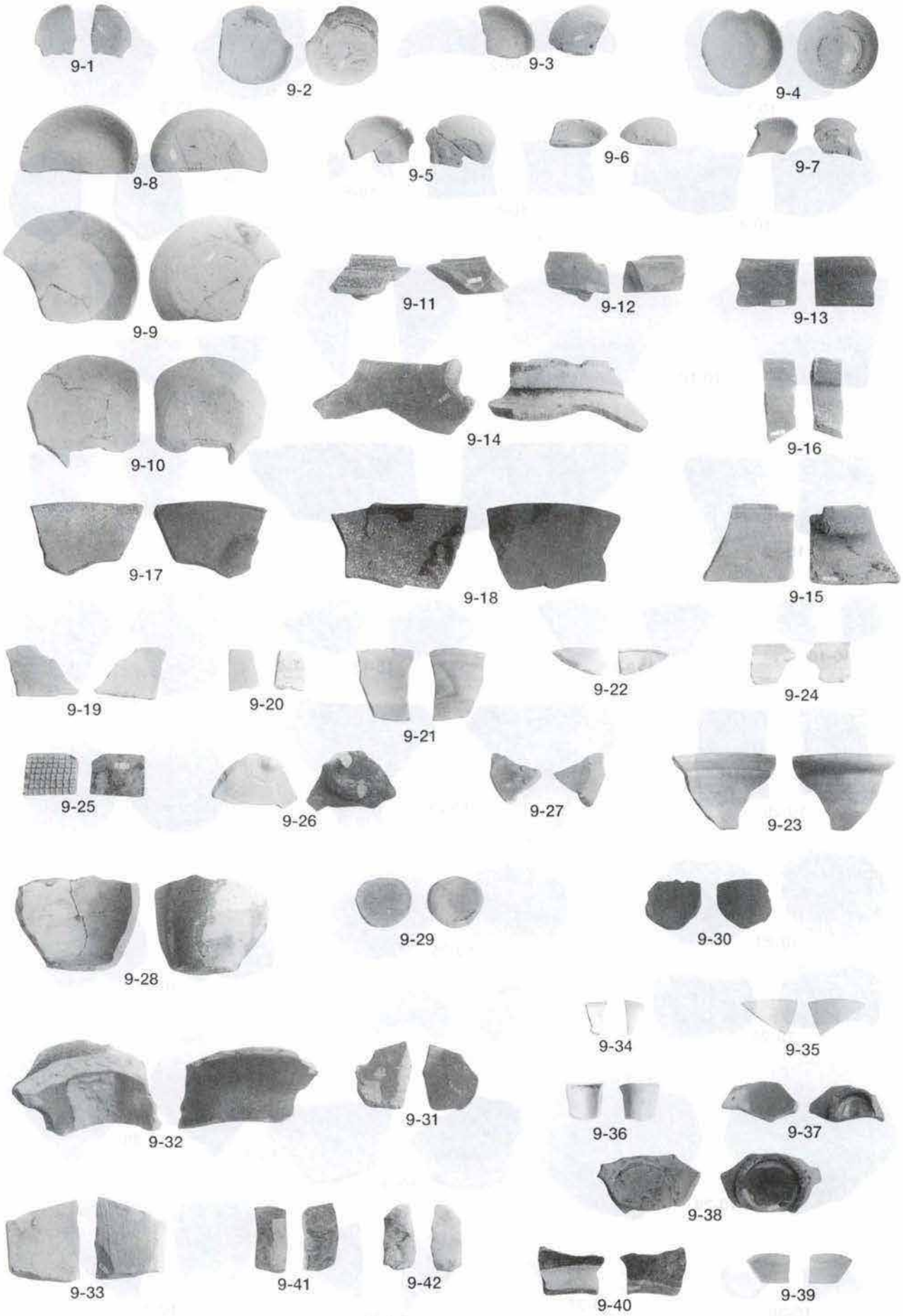


1溝新の遺物と3面出土の銭

図版10

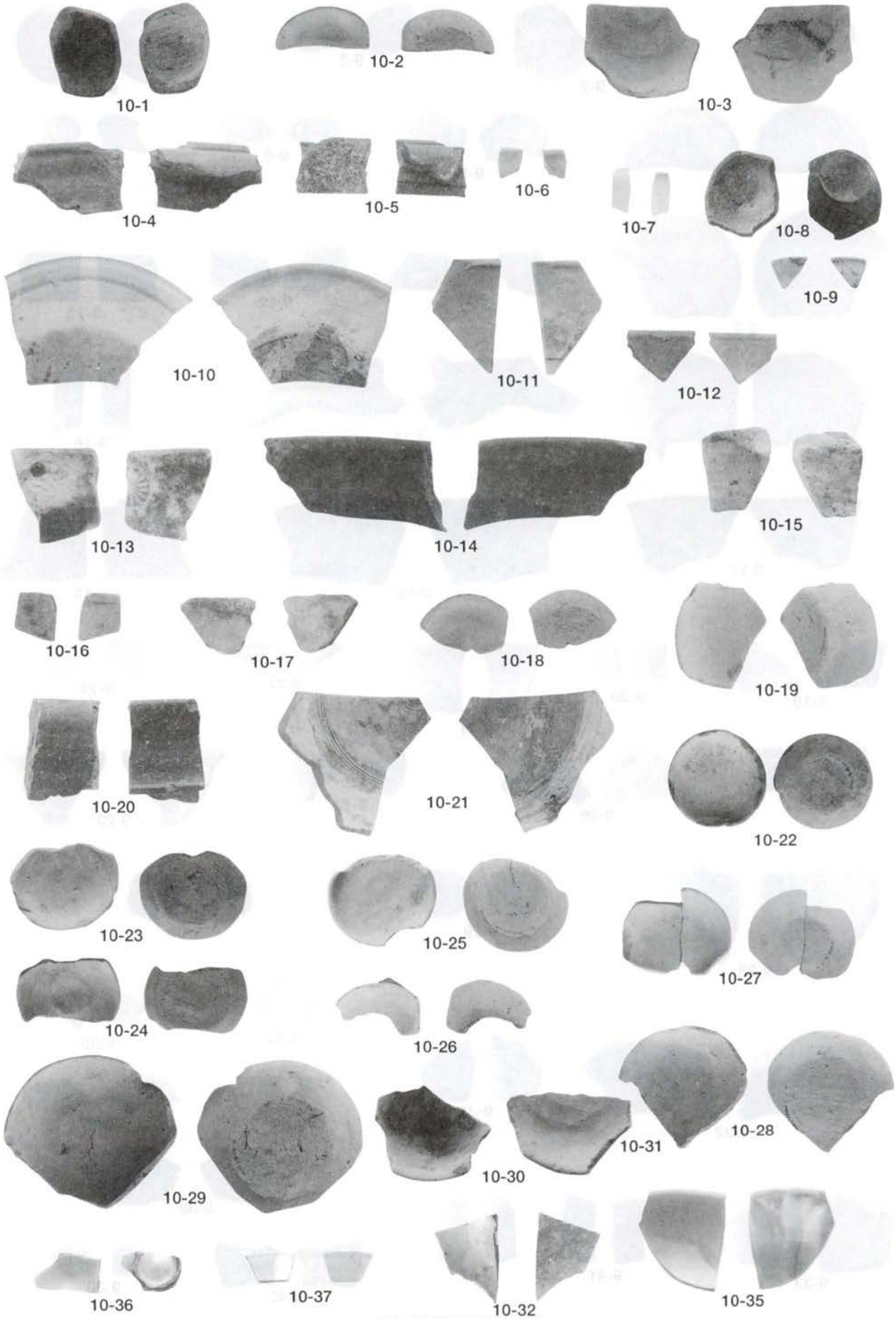


Ⅱ区１溝新～砂層の遺物

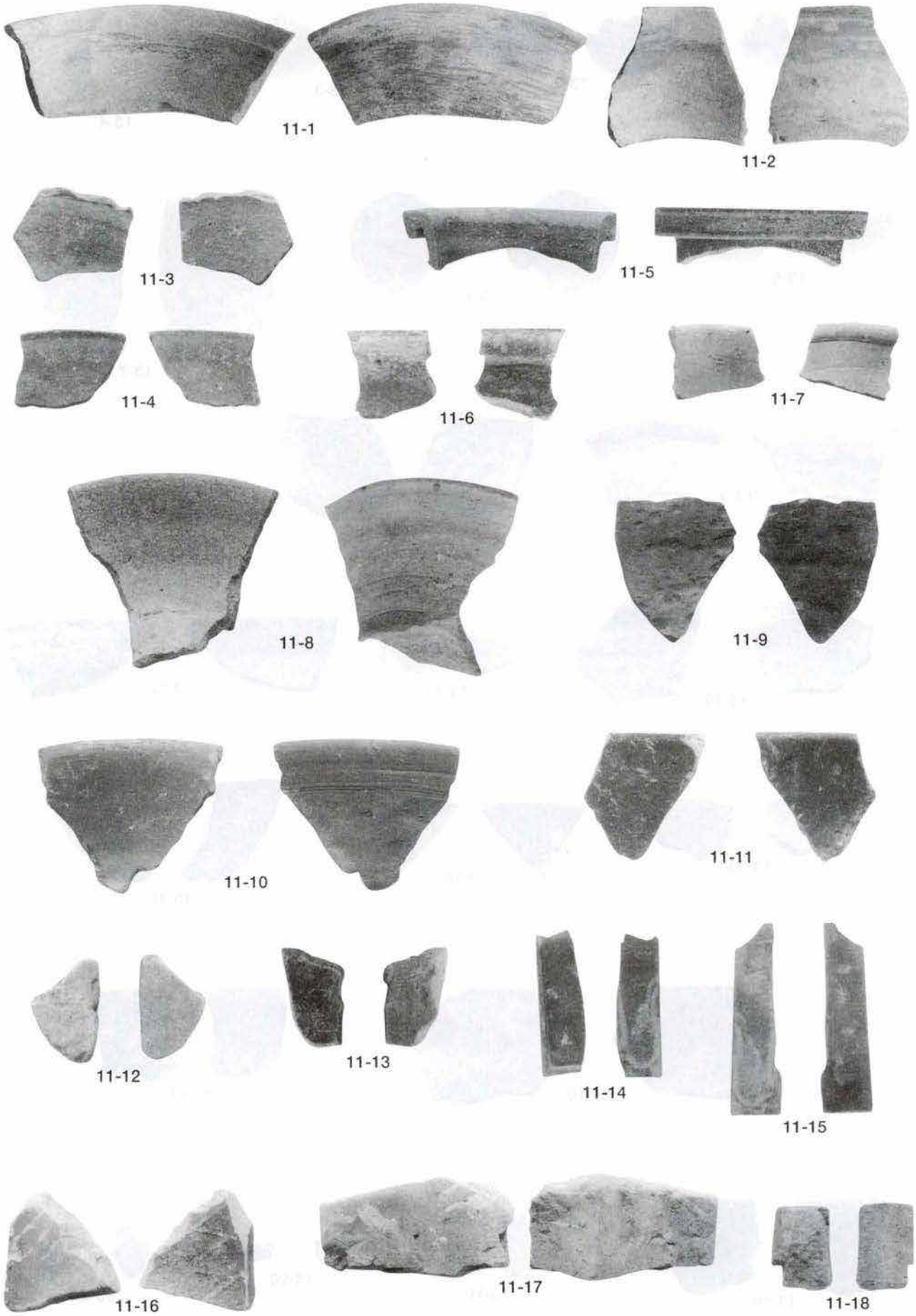

9-1
9-2
9-3
9-4
9-8
9-5
9-6
9-7
9-9
9-11
9-12
9-13
9-10
9-14
9-16
9-17
9-18
9-15
9-19
9-20
9-21
9-22
9-24
9-25
9-26
9-27
9-23
9-28
9-29
9-30
9-34
9-35
9-32
9-31
9-36
9-37
9-38
9-33
9-41
9-42
9-40
9-39

Ⅱ区１溝新底部の遺物

図版12

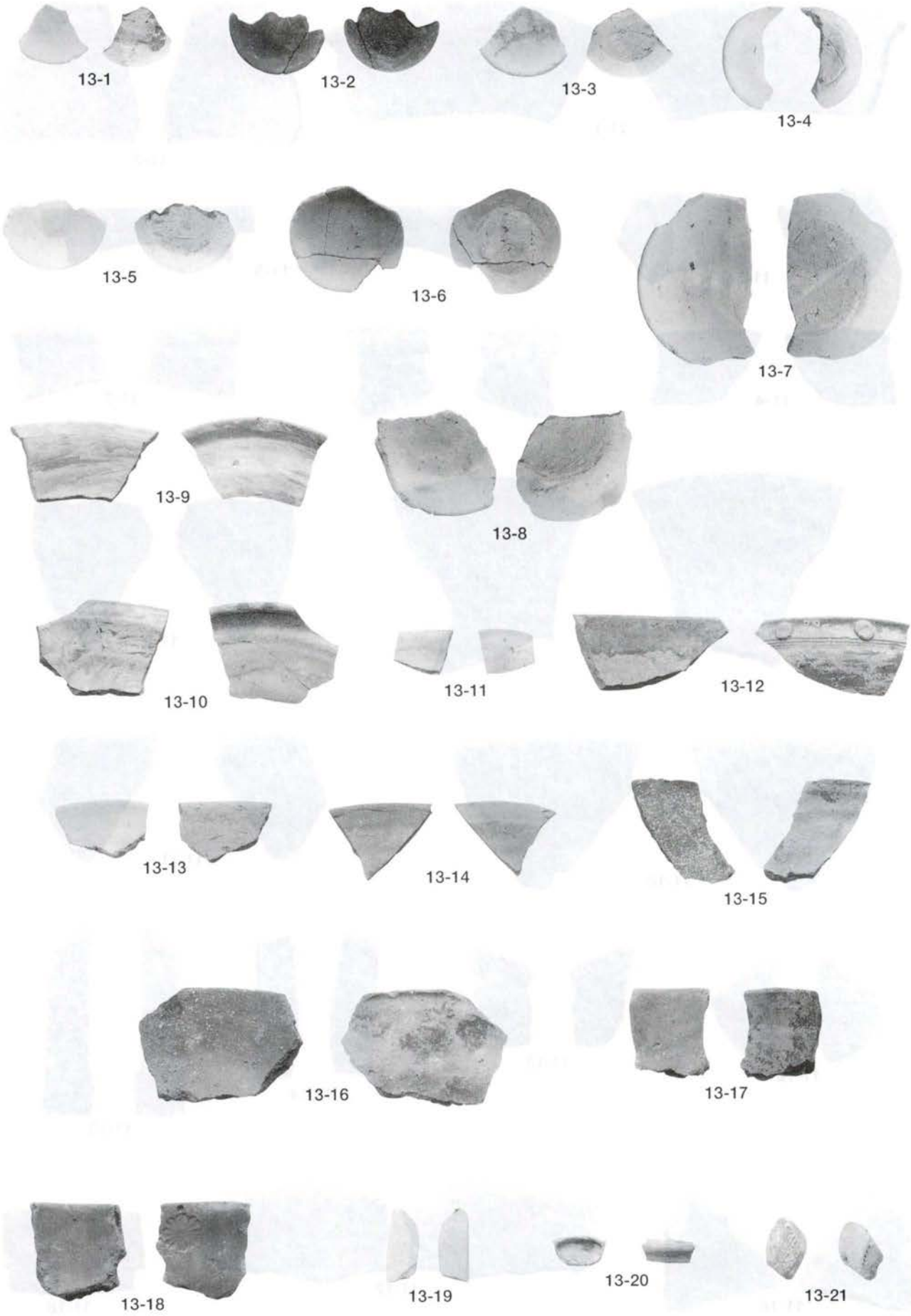


Ⅱ区３面までの遺物


11-1
11-2
11-3
11-5
11-4
11-6
11-7
11-8
11-9
11-10
11-11
11-12
11-13
11-14
11-15
11-16
11-17
11-18

Ⅱ区１溝の遺物

図版14



Ⅱ区３面板溝の遺物

妙本寺遺跡（No.232）

大町一丁目1140番２地点

例　　言

1．本報は、妙本寺遺跡（Ｎｏ.232）の所在する遺跡内の鎌倉市大町一丁目1140番２地点における個人専用住宅の新築に伴う緊急調査報告書である。

2．発掘調査は、平成14年９月17日～同年９月26日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査体制は、以下の通りである。

調査担当者：原　廣志

調　査　員：須佐直子、太田美知子、須佐仁和、早坂伸市、中川建二、栂岡渓音

調査補助員：宇都洋平・高橋拓也・野崎美帆・山口正紀（鶴見大学生）、銘苅春也、橋本和之・原　考史（国士館大学生）

調査作業員：蓑田孝善・杉浦永章・町田義一　（社）鎌倉市シルバー人材センター

協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所

4．本報の執筆は、第１章を須佐直子、第２章を原、第３章については調査員協議のもと原が稿を草した。また挿図作成には太田・早坂・中川・栂岡・宇都・野崎・山口・原（考）・橋本が行なった。

5．本報掲載の写真は、全景・個別遺構を原・須佐（直）があたり、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。

6．発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本報の凡例は、以下の通りである。

・図版縮尺　　全測図：１／80
　　遺構図：１／20、１／40
　　遺物図：１／３

・遺構図版　　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している。

・遺物図版　　－・－・－は釉薬の範囲を示す。黒塗りは燈明皿に付着した油煙煤を表現している。

8．現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略、五十音順）。

秋山哲雄、大三輪龍彦、岡　陽一郎、小野正敏、河野眞知郎、菊川　泉、小林康幸、斎藤慎一
佐藤仁彦、汐見一夫、宗臺秀明、宗臺富貴子、田代郁夫、玉林美男、塚本和弘、継　実、手塚直樹
福田　誠、松尾宣方、馬淵和雄、桃崎祐輔

目　次

例　言 ……106
目　次 ……107

本文目次

第１章　遺跡の位置と調査の経過 ……109
　１．遺跡の位置 ……109
　２．調査の経過 ……109

第２章　検出遺構と出土遺物 ……112
　１．第１トレンチの遺構・遺物 ……112
　２．第２トレンチの遺構・遺物 ……116

第３章　まとめ ……120

挿図目次

図１．調査地点周辺図 ……108
図２．調査区位置図 ……110
図３．第１トレンチ ……113
図４．第１トレンチ北壁土層堆積 ……114
図５．第１トレンチ出土遺物 ……114
図６．第２トレンチ土壙 ……117
図７．第２トレンチ出土遺物 ……118

遺物観察表

表１．第１トレンチ出土遺物観察表 ……115
２．第２トレンチ出土遺物観察表 ……119

写真図版

図版１ａ．第１トレンチ第１面（西から） …121
　ｂ．第１トレンチ第２面（西から） …121
　ｃ．第１トレンチ第２面（北から） …121
図版２ａ．第１トレンチ第３面（西から ） …122
　ｂ．第１トレンチ北壁堆積土層 ……122
　ｃ．第２トレンチ第２面（北から） …122
　ｄ．第２トレンチ第３面（北から） …122
　ｅ．第２トレンチ中世地山（北から） 122
　ｆ．第２トレンチ南壁土層堆積……122
図版３ａ．第１トレンチ出土遺物……123
　ｂ．第２トレンチ出土遺物……123

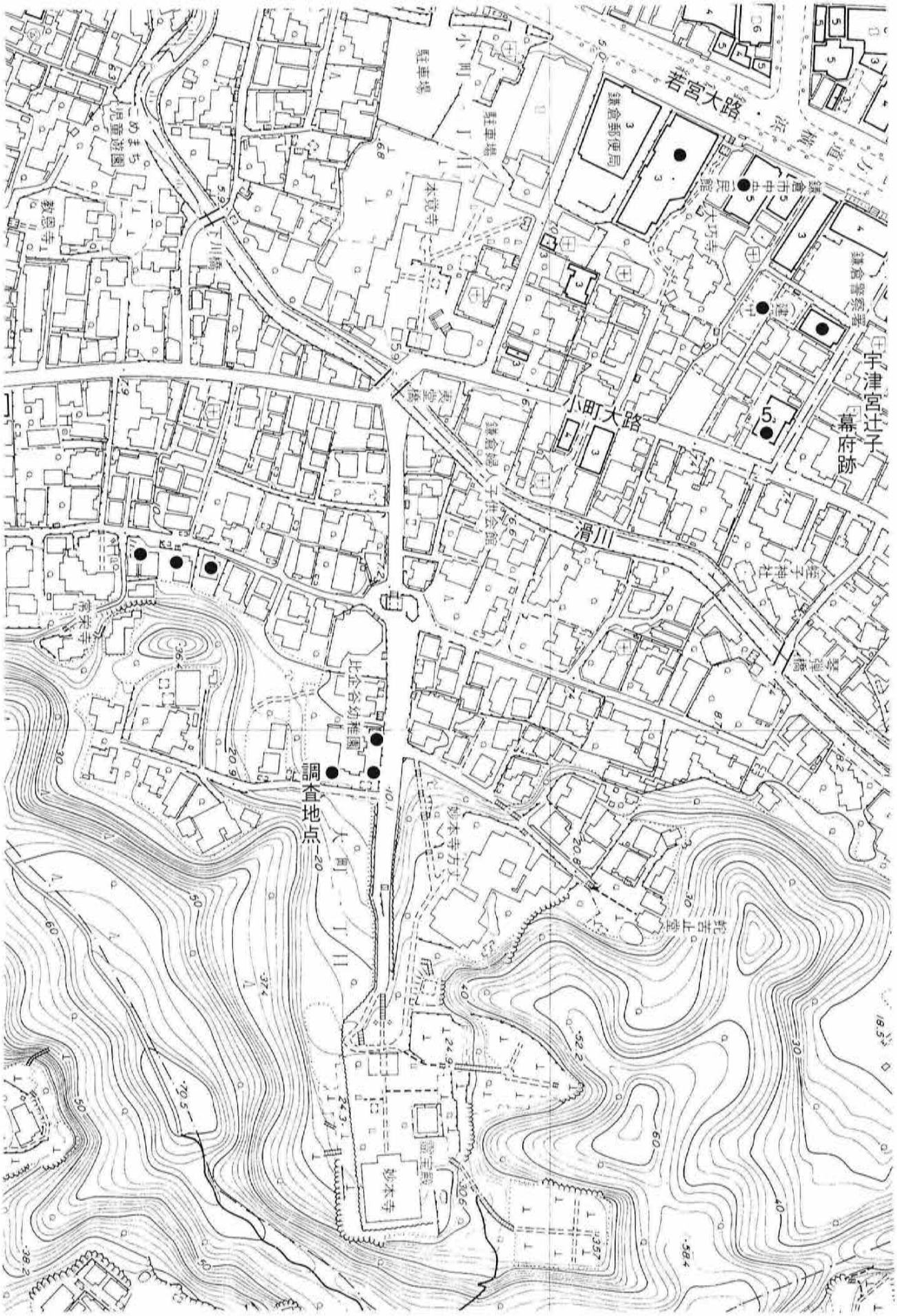

若宮大路
鎌倉郵便局
駐車場
小川
本覚寺
下川橋
児童遊園
小町大路
滑川
宇津宮辻子幕府跡
5
比企谷幼稚園
調査地点
大町一丁目
妙本寺
妙本寺女子
妙法寺
十巻寺
鎌倉書道会館
鎌倉幼子供会館
長谷寺
蓮華寺

図1　調査地点周辺図

第１章　　遺跡の位置と調査の概要

１．遺跡の位置

妙本寺遺跡は、若宮大路を中心軸として広がる鎌倉平野部の東端山裾に立地し、滑川の左岸に展開する谷戸の中の比企ヶ谷に位置し、背後に丘陵の崖面が迫っている。この丘陵は南を大町大路に限られ、東の名越へと続いている。鎌倉駅から南東方へ約500mのところにあり、西側を走る小町大路側に開口した東西に伸びる谷戸の入口近くにあたり、現在は閑静な住宅地で地番は鎌倉市大町一丁目1140番２に所在している。調査地付近の現地表面の海抜は10m前後であり、小町大路付近（同６ｍ前後）から東に向かって高くなっている。中世基盤層とされる黒渇色粘質土の上面レベルで比較すると、約200m北西に位置した地点５で6.6m前後であり、滑川左岸に形成された微高地東端部の一角を占めていることがわかる。ところで小町大路と交差した滑川に架かる夷堂橋を渡ると「おうめさま」として人々に信仰されている本覚寺（日蓮宗、山号妙厳山）がある。妙本寺の惣門前から小路を南へ進んだ左手に妙本寺の末寺として創建された常栄寺（ぼたもち寺）あり、また現在では惣門から北へ辿ると200m程で左に折れ、琴弾橋を経て小町大路に合流してしまう小路しかないが、かつては北行したまま滑川と山裾の間を抜けて宝戒寺近くまで通じていたようである。

比企ヶ谷の谷戸奥には、鎌倉時代に創建されたと伝える日蓮宗本山の長興山妙本寺があり、調査地点を含めて周辺は妙本寺の旧境内域にあたる。寺伝によると、開山は日朗、開基は比企大学三郎能本、文応元（1260）年に開創と云う。寺の前身は、地名が由来を示すようにこの一帯が比企氏の屋敷地で建仁三（1203）年九月、比企一族が滅亡した地とも伝えられている。

本地点のすぐ西を南北に走る小町大路は、南東側に展開する大町・米町・和賀江や北・東側にあたる気和飛坂（化粧坂）･須地賀江橋（筋違橋）･大倉辻などの「町屋」の多くを連結しており、鶴岡八幡宮付近の政治中枢域から貿易港和賀江（飯島津）へ至る中世からの幹線道路であり経済的動脈を成していた。

２．調査の経過

当該地は妙本寺遺跡（県遺跡台帳Ｎｏ.232）の中に位置する鎌倉市大町一丁目1140番２地点における個人専用住宅の建設を含む宅地造成工事によって創出された敷地の一角にあたる。平成14年８月に当該地において事前相談がなく地盤の改良工事が実施されていた状況が判明したため、施行業者に対して工事の一時中断を要請して急遽、建築主と施行業者と文化財保護の措置に付いて協議を行なった。その結果、ただちに文化財保護法に基づく届出手続きを行い、平成14年９月17日から現地での発掘調査を開始することになった。

調査は、建物基礎がすでに構築されていた関係から多くの困難を伴うこととなったが、建物基礎の範囲内で遺構が破壊されていない狭小な面積を対象に実施された。平成14年９月17日よりまず第１トレンチの表土を重機によって掘削することから始められ、続いて第２トレンチの調査を実施した。その結果、第１・２トレンチは共に鎌倉時代中期～末期にかけて４時期の中世生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。同年９月26日までの間に必要な記録作成を行ない、無事に現地調査を終了することができた。調査期間中の経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記すことにする。

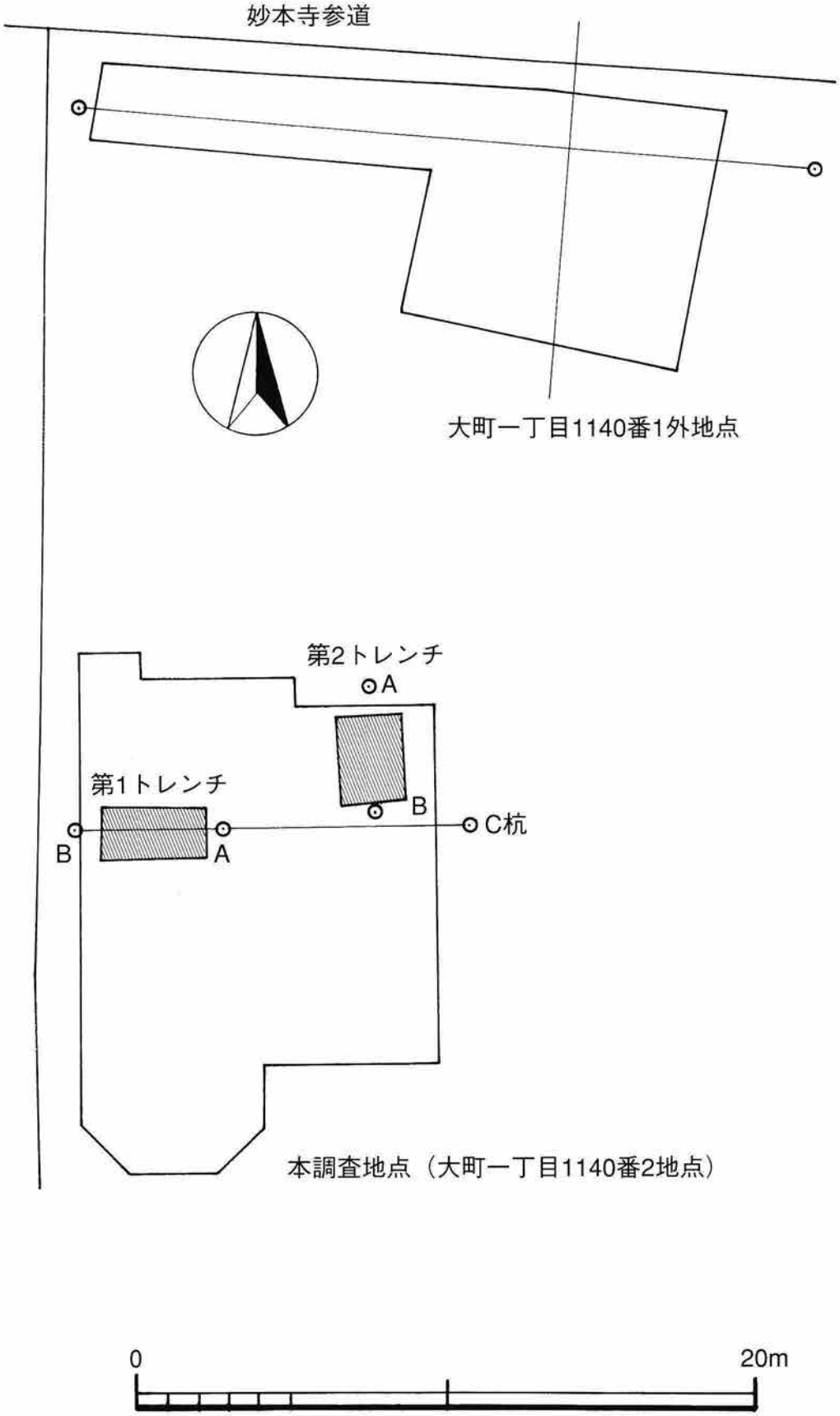

妙本寺参道
大町一丁目1140番1外地点
第2トレンチ
A
B
第1トレンチ
B
A
C杭
本調査地点（大町一丁目1140番2地点）
0
20m

図2　調査区位置図

調　査　日　誌　抄

9月17日　第1トレンチ調査開始。機材搬入。トレンチを設定し、重機による表土掘削。

19日　第1面の遺構検出及び全景写真撮影。測量用基準杭を設定、原点レベルを調査区内に移動。

20日　第2面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。

21日　第3面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。

22日　第3面下のトレンチ調査（中世地山面）を実施。写真撮影、全測図・調査区壁土層堆積図の作成。第1トレンチ調査終了。

24日　第2トレンチの重機による表土掘削。第1面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。

25日　第2面の調査終了。全景写真撮影、全測図作成。第3面の検出開始。

26日　第3面及び同面下のトレンチ調査（中世地山面）を実施。全景写真撮影、全測図・調査区壁土層堆積図の作成。現地調査終了し、関係各方面に発掘調査を終了したとの旨を連絡し、機材撤収。

調査地点の経緯は、北緯［35°18′50″］　東経［139°33′32″］である。また海抜標高の原点移動については、若宮大路段葛の二ノ鳥居近くに設けられた三角水準点（No.15637：L＝6.168m）から調査地のC杭上に仮水準点を移動した。文章中及び挿図に記載されているレベル数値は、すべてこれを基準にした海抜標高を示している。

第２章　検出遺構と出土遺物

１．第１トレンチの遺構・遺物

第１トレンチ（図２～４）は、建築範囲内の西側北寄りの位置に建物基礎を避ける形で東西3.5m×南北2.5mの規模で設定した。本トレンチの土層堆積は、図４に示したように現地表下50cm前後の表土（１層）を除去すると、小型の土丹塊を砕いて突き固めた地業（２層）が確認され、この上面を第１面とした。現地表下約1.1mで上部に暗茶褐色土を貼った厚さ35～45cm前後の地業層（４層）が表出されたので第２面とした。さらに第２面構築土を掘り下げると、現地表下約1.5mで上面に中・小土丹塊が点在した第３面が確認された。第３面以下の調査については、工事掘削深度の根切底の関係から北壁際に東西方向でトレンチを入れて確認を行なった。その結果、現地表下約1.9mで無遺物で非常に締まりある黒褐色粘質土の中世基盤層が検出された。

以上のように４時期の生活面が確認され、それに伴って各面から検出した遺構は、土壙・柱穴などがあり、出土遺物にはかわらけ・舶載磁器・瀬戸や常滑窯製品、金属製品などがみられた。

ａ．第１面（図３～５、図版１・３）

第１面は、海抜標高9.90m前後でほぼ平坦な生活面を構成しており、土壙１基、柱穴７口などの遺構を検出した。

土壙：土壙１は北西隅で確認され、大半が調査区外に拡っている。一部をＰ１に壊されている。確認された規模は、東西70cm以上・南北80cm以上・深さ35cm程を測り、円形状を呈したものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物を多く含んだ締まりのない茶褐色粘質土である。

柱穴：Ｐ１は平面が楕円形を呈し、東西径50cm・南北径40cm・深さ40cmを測る。Ｐ２はＰ１を壊して掘られたもので円形を呈し、径40cm・深さ30cmである。Ｐ３・４は調査区外に拡がり、土層観察から後者が新しい。確認された規模はＰ３が径40cm以上・深さ30cm、Ｐ４が径30cm・深さ35cmである。Ｐ５は規模が径20cm・深さ25cmで円形を呈する。Ｐ６は規模が径35cm・深さ35cmで円形を呈し、底面ほぼ平坦になる。Ｐ７はやや楕円形を呈し、規模が径30cm前後・深さ30cmである。

出土遺物は（図５－１～10、図版３上段）、１～４が面上から出土した資料である。１が青磁碗、２が角棒状の鉄製品で用途不明、３がロクロ成形かわらけ大皿、４が瀬戸四耳壷の肩部と思われるものである。５・６は土壙１から出土したもので、５がロクロ成形かわらけ小皿、６が常滑捏鉢である。７～10は柱穴から出土したもので、７（Ｐ１）が北宗銭、８（Ｐ２）が青磁折腰皿、９（Ｐ３）が常滑鳶口壷、10（Ｐ６）が瀬戸卸皿である。

ｂ．第２面（図３～５、図版１・３）

第２面は、海抜標高9.40m前後でほぼ平坦な生活面を構成しており、検出した遺構は土壙２基、柱穴１口である。

土壙：土壙１は南西隅で確認され、調査区外に拡っている。確認された規模は、東西80cm以上・南北40cm以上・深さ30cm程を測り、楕円形状を呈したものと考えられる。覆土は土丹粒・かわらけ小片・炭化物を多く含んだ締まりのない暗褐色粘質土である。土壙２は南側が調査区外に拡がっており、確認された規模は東西55cm・南北30cm以上・深さ20cm程で断面摺鉢形を呈する。

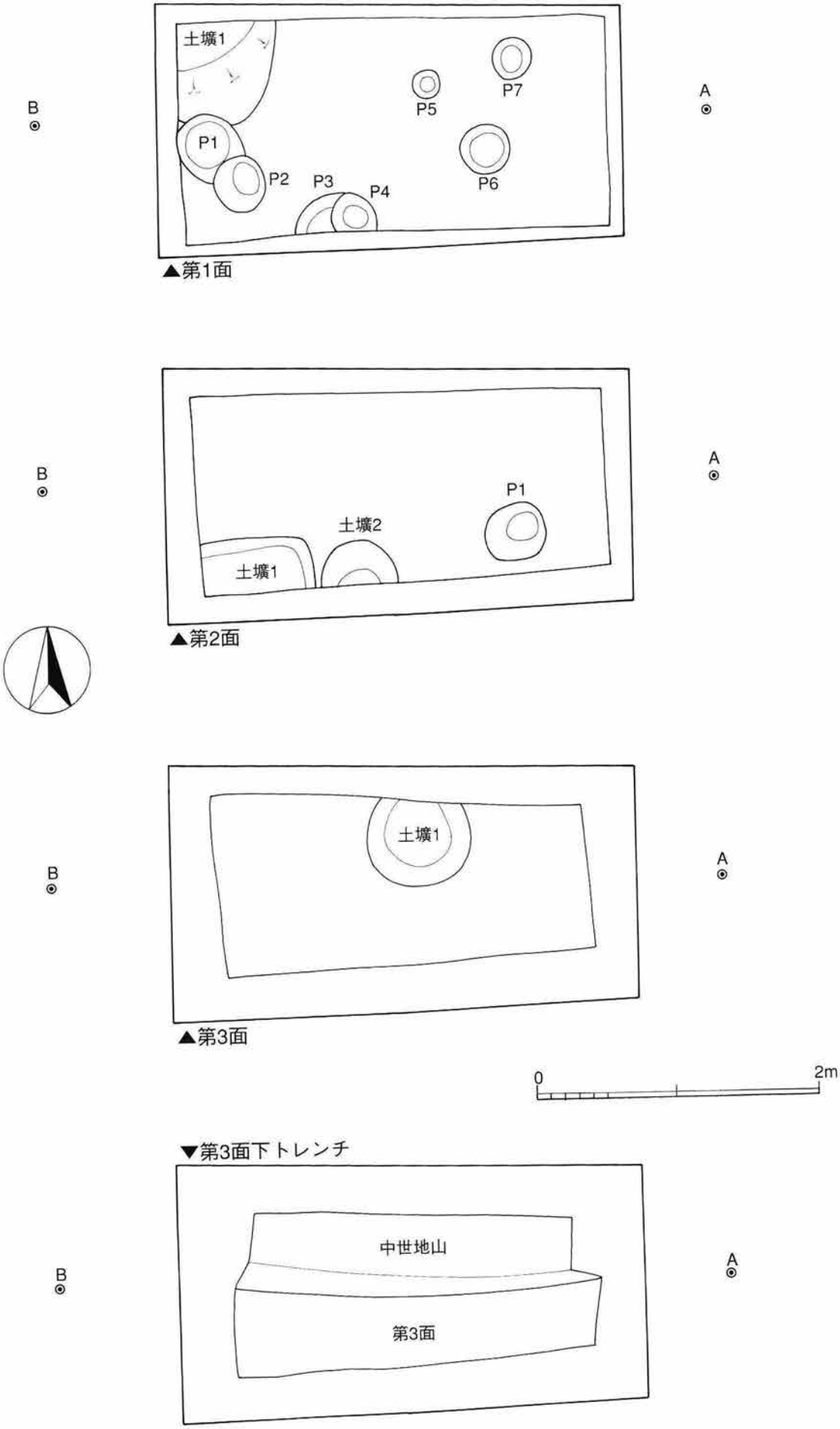
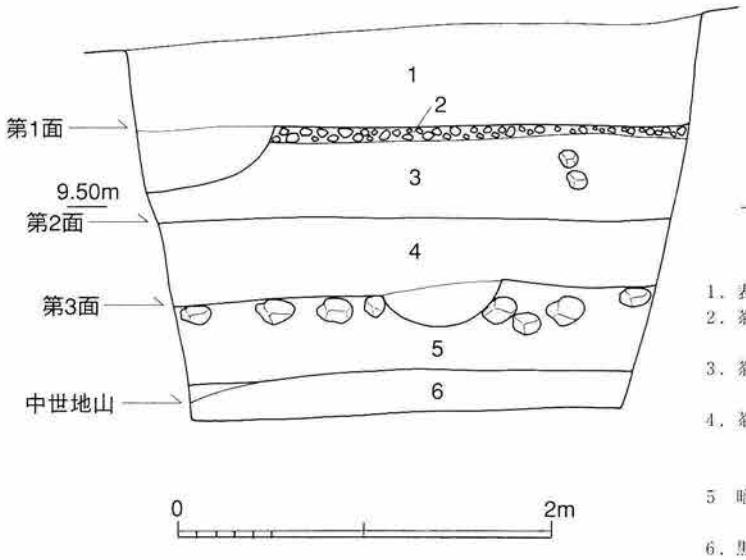

土壙1
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
A
B
▲第1面
土壙1
土壙2
P1
A
B
▲第2面
土壙1
A
B
▲第3面
0
2m
▼第3面下トレンチ
中世地山
第3面
A
B

図3　第1トレンチ



第１トレンチ北壁土層注記

1．表　　土：近・現代の客土。
2．茶褐色粘質土：小土丹塊を突き固めた締まりの強い土丹地業層、第１面構築土である。
3．茶褐色粘質土：３㎝角土丹塊・かわらけ小片を含んだ締まりのあるもの。
4．茶褐色粘質土：小土丹塊・かわらけ小片・粗砂を含んで締まりあり、上部に厚さ10㎝程の暗茶褐色粘質土を貼った地業層、上面が第２面構築土である。
5　暗褐色粘質土：大型土丹塊・炭化物を多く混入し締まりあり、第３面構築土である。
6．黒褐色粘質土：無遺物で締まりの強い中世地山層である。

図４　第１トレンチ北壁土層図

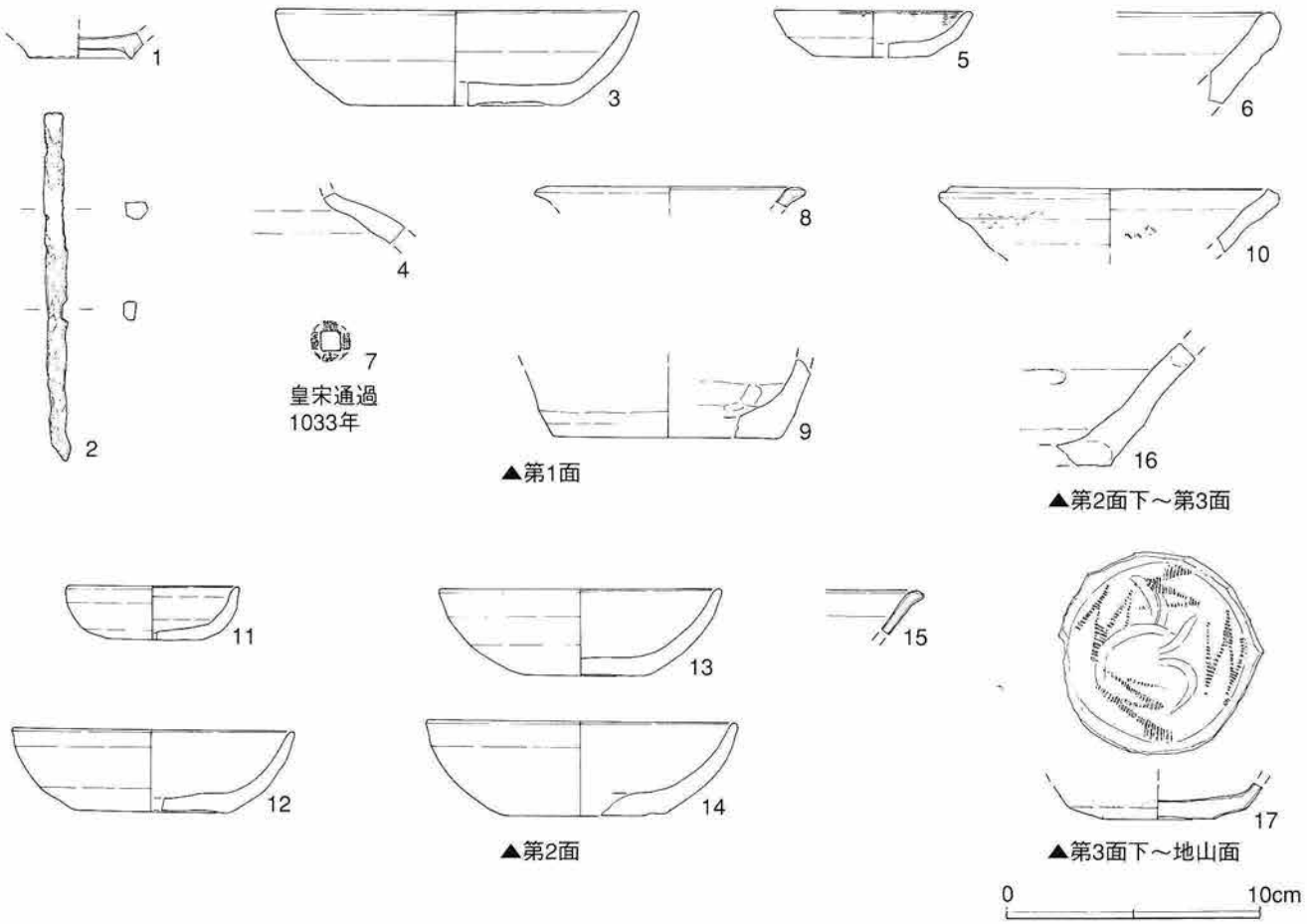


図５　第１トレンチ出土遺物

柱穴：柱穴１は円形を呈し、径30cm・深さ25cm程である。底面に腐蝕の進んだ礎板と覚しき痕跡が認められた。

出土遺物は（図５－11～15、図版３上段）、11～14が第１面下～第２面から出土した資料でロクロ成形かわらけの小・中・大皿、15が白磁端反碗である。

c．第３面（図３～５、図版１・２・10）

第３面は、海抜標高9.0m前後で東側がやや高く西に向かって緩やかに傾斜した生活面である。検出した遺構は土壙１基だけである。

土壙：土壙１は北端中央寄りで確認され、調査区外に拡っている。確認された規模は、東西径75cm・南北径65cm以上・深さ25cm程を測り、楕円形状を呈したものと考えられる。覆土は土丹粒・かわらけ小片・粗砂（鎌倉石を砕いたもの）を多く含む締まりのない茶褐色粘質土である。図示できる遺物は出土していない。

ところで第３面の調査終了した後、北壁に沿って幅60cm、深さ70cm程のトレンチを入れて中世地山を確認した。この上面の海抜標高は8.60m前後である。

表１　第１トレンチ出土遺物観察表

図・番号	種　類	法量（a：口径b：底径c：器高）	成形・特徴（文様・釉薬・胎土・素地・焼成など）	備考（遺構・その他）
5－1	青磁　碗	底部片b：4.0cm	無文　淡緑色不透明高台内施釉畳付露胎　灰白色　緻密	1面上　龍泉窯系
2	鉄製品	長さ(13.8)cm幅6-9mm厚さ7mm	断面多角形の棒状　用途不明	〃
3	かわらけ	a：14.3cm　b：8.8cm　c：3.7cm	外底糸切痕ロクロ　明黄橙色黒色微砂・雲母・赤色粒	〃
4	瀬戸　四耳壺	肩部片	輪積み技法　オーリブ灰色　灰釉　灰黄白色　緻密	〃
5	かわらけ	a：(7.7)cm　b：4.4cm　c：1.7cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・雲母・赤色粒・白針	1面　土壙1
6	常滑　捏鉢	口縁部小片	灰色砂粒・長石粒粗胎　常滑片口鉢Ⅱ類	〃
7	銅銭	皇宋通宝	北宋銭　初鋳年　1038年　周囲を摺り加工	〃P1
8	青磁　折腰皿	a：(9.9)cm	口縁部端反状　淡緑色半透明　灰白色黒色微砂緻密	〃P2　龍泉窯系
9	常滑　鳶口壺	b：(8.8)cm	輪積み技法　砂目底　灰黒色表面褐色　砂粒・長石粒やや粗胎	〃P3
10	瀬戸　卸皿	a：(12.6)cm	内面に卸目刻み　灰緑色　灰釉刷毛塗り　黄灰白色微砂堅緻	〃P6
11	かわらけ	a：6.7cm　b：3.6cm　c：2.1cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・雲母・赤色粒	1面下～2面
12	かわらけ	a：11.2cm　b：6.0cm　c：3.4cm	外底糸切痕ロクロ　橙灰色黒色微砂・雲母・赤色粒	〃
13	かわらけ	a：11.3cm　b：5.2cm　c：3.5cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・赤色粒・白針・土丹粒	〃
14	かわらけ	a：12.3cm　b：6.4cm　c：3.7cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・赤色粒・白針・土丹粒	〃
15	白磁　碗	口縁部片	端反口縁　灰白色透明灰白色緻密	2面　土壙1
16	常滑　捏鉢	底部片	内面摩滅痕　暗灰色粗砂粒・石粒　常滑片口鉢　類	2面下～3面
17	青磁　皿	b：4.4cm	内面櫛描文・劃花文　緑灰色透明　外底露胎　灰色堅緻　同安窯系	3面下～地山面

2．第2トレンチの遺構・遺物

第2トレンチ（図6・7）は、建築範囲内の東隅寄りの位置に建物基礎を避ける形で南北約3.0m×東西約2.5mの規模で設定した。本トレンチの土層堆積は、図6に示したように現地表下40cm前後の表土（1層）を除去すると、第1トレンチでは確認できなかった拳大の土丹と中世かわらけの細片を交えた締まりのない茶褐色粘質土が堆積していた（2層）。その下の3層も同様に拳大の土丹塊を多量に交えた茶褐色粘質土あるが締まりの強い地業層であった。この状況より、3層上面を第1面として捉えられた。現地表下約1.1mにおいて厚さ10～15cm前後で暗褐色粘質土の地業層（5層）が表出されたので第2面とした。さらに第2面構築土を掘り下げると、現地表下約1.3mで殆んど間層を挟まずに確認されたのが第3面（6層）である。6層の上面では土丹塊を突き固めた地業が一部で確認された。

第3面以下の調査については、工事掘削深度の根切底の関係から南壁際に東西方向でトレンチを入れて確認を行なった。その結果、現地表下約1.5mで無遺物で非常に締まりある黒褐色粘質土の中世基盤層を検出した。

以上のように4時期の生活面が確認され、それに伴って各面から検出した遺構は土壙、柱穴、鎌倉石切石などがある。出土遺物にはかわらけ、舶載磁器、瀬戸・常滑窯製品、土・石製品などがみられた。

a．第1面（図6～7、図版2・3）

第1面は、海抜標高9.85m前後でほぼ平坦な生活面に整地しているが、南半部の上面には土丹が突き固めたられ版築層が確認され丁寧な生活面の作出が行なわれていた。この面で検出した遺構は土壙1基、柱穴4口などである。

土壙：土壙2は北西隅で確認され、調査区外に拡っており、一部をＰ８により壊されている。確認された規模は、東西径100cm以上・南北径90cm以上・深さ40cm程を測り、楕円形状を呈したものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物を多く交えた締まりのない茶褐色粘質土である。土壙3は西壁調査区外に拡がっており、確認された規模は南北径75cm・東西径45cm以上・深さ約30cmで楕円形を呈するものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物が多く、2cm角土丹を少量交えた締まりない茶褐色弱粘質土である。

柱穴：Ｐ８は平面がほぼ円形を呈し、径50cm・深さ約40cmを測る。Ｐ９は円形を呈し、径40cm・深さ15cmと浅い掘り方もつ。Ｐ10は楕円形を呈し、径35cm・深さ35cmである。この他、トレンチ南半部の範囲で確認された破砕土丹を突き固めた版築面上にやや偏平な土丹塊が不規則に集合した様子が認められたが、現状ではどのような性格をもつかは把握することができなかった。

出土遺物は（図7－1～8、図版3下段）、この面の遺構に伴う図示可能なものは認められず、遺物包含層及び面上から出土した資料だけである。1～3はロクロ成形かわらけ大・小皿、4が白かわらけ、5が瀬戸入子、6が常滑捏鉢、7・8が砥石と火打石である。

b．第2面（図6・7～24、図版2・3）

第2面は、海抜標高9.35m前後でほぼ平坦な生活面に整地が行なわれていた。この面で検出した遺構は土壙2基、柱穴3口である。

土壙：土壙2は東壁調査区外に拡っており、一部をＰ２により壊されている。確認された規模は、東西径70cm以上・南北径70cm・深さ15cm程であり、断面が浅い皿状を呈した楕円形のものと考えられる。

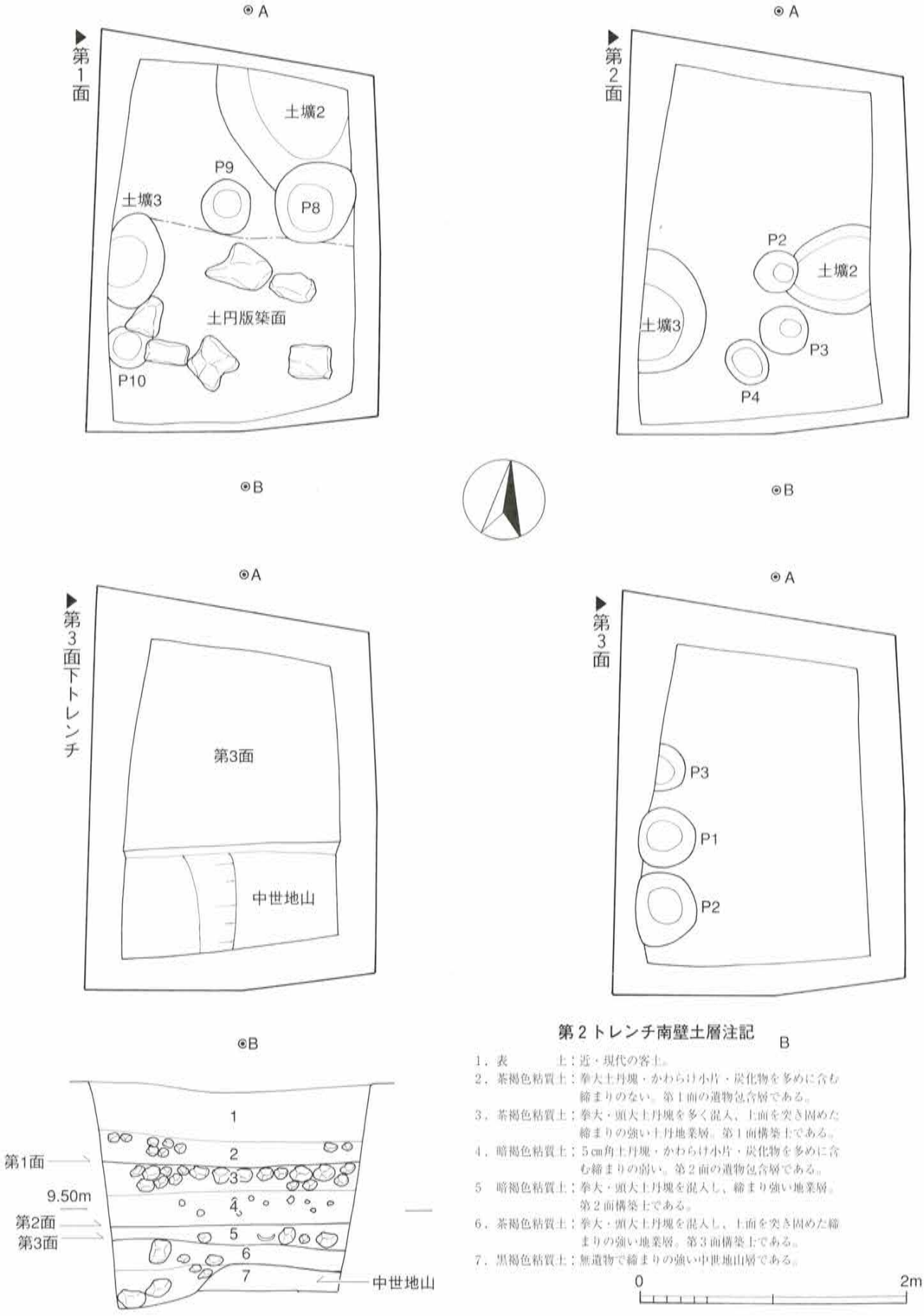

A
第1面
土壙2
P9
土壙3
P8
土円版築面
P10
B
A
第2面
P2
土壙2
土壙3
P3
P4
B
A
第3面下トレンチ
第3面
中世地山
B
A
第3面
P3
P1
P2
B
1
2
3
4
5
6
7
第1面
9.50m
第2面
第3面
中世地山
第2トレンチ南壁土層注記
1．表　　土：近・現代の客土。
2．茶褐色粘質土：拳大土丹塊・かわらけ小片・炭化物を多めに含む締まりのない。第1面の遺物包含層である。
3．茶褐色粘質土：拳大・頭大土丹塊を多く混入、上面を突き固めた締まりの強い土丹地業層。第1面構築土である。
4．暗褐色粘質土：5㎝角土丹塊・かわらけ小片・炭化物を多めに含む締まりの弱い。第2面の遺物包含層である。
5　暗褐色粘質土：拳大・頭大土丹塊を混入し、締まり強い地業層。第2面構築土である。
6．茶褐色粘質土：拳大・頭大土丹塊を混入し、上面を突き固めた締まりの強い地業層。第3面構築土である。
7．黒褐色粘質土：無遺物で締まりの強い中世地山層である。
0
2m

図6　第2トレンチ

覆土はかわらけ小片・炭化物を多く交えた締まりのない暗褐色弱粘質土である。土壙３は西壁調査区外に拡がっており、確認された規模は南北径95cm・東西径50cm以上・深さ約20cmで楕円形を呈するものと考えられる。覆土はかわらけ小片・炭化物が多く交えた締まりない茶褐色弱粘質土である。

柱穴：Ｐ２は円形を呈し、径30cm・深さ約35cmである。Ｐ９も円形を呈し、径40cm・深さ25cmと浅い掘り方もつ。Ｐ４はやや楕円形を呈し、径35cm・深さ30cmで底面に腐蝕した礎板の痕跡が認められた。

出土遺物は（図７－９～19、図版３下段）、９～16は面上から出土した資料である。９～11がロクロ成形かわらけ小皿、12が青磁碗、13が白磁碗、14・16が常滑捏鉢、15がかわらけ加工の土製円盤である。17・19がロクロ成形かわらけ小皿（土壙２・Ｐ４）、18が青白磁梅瓶（Ｐ３）である。

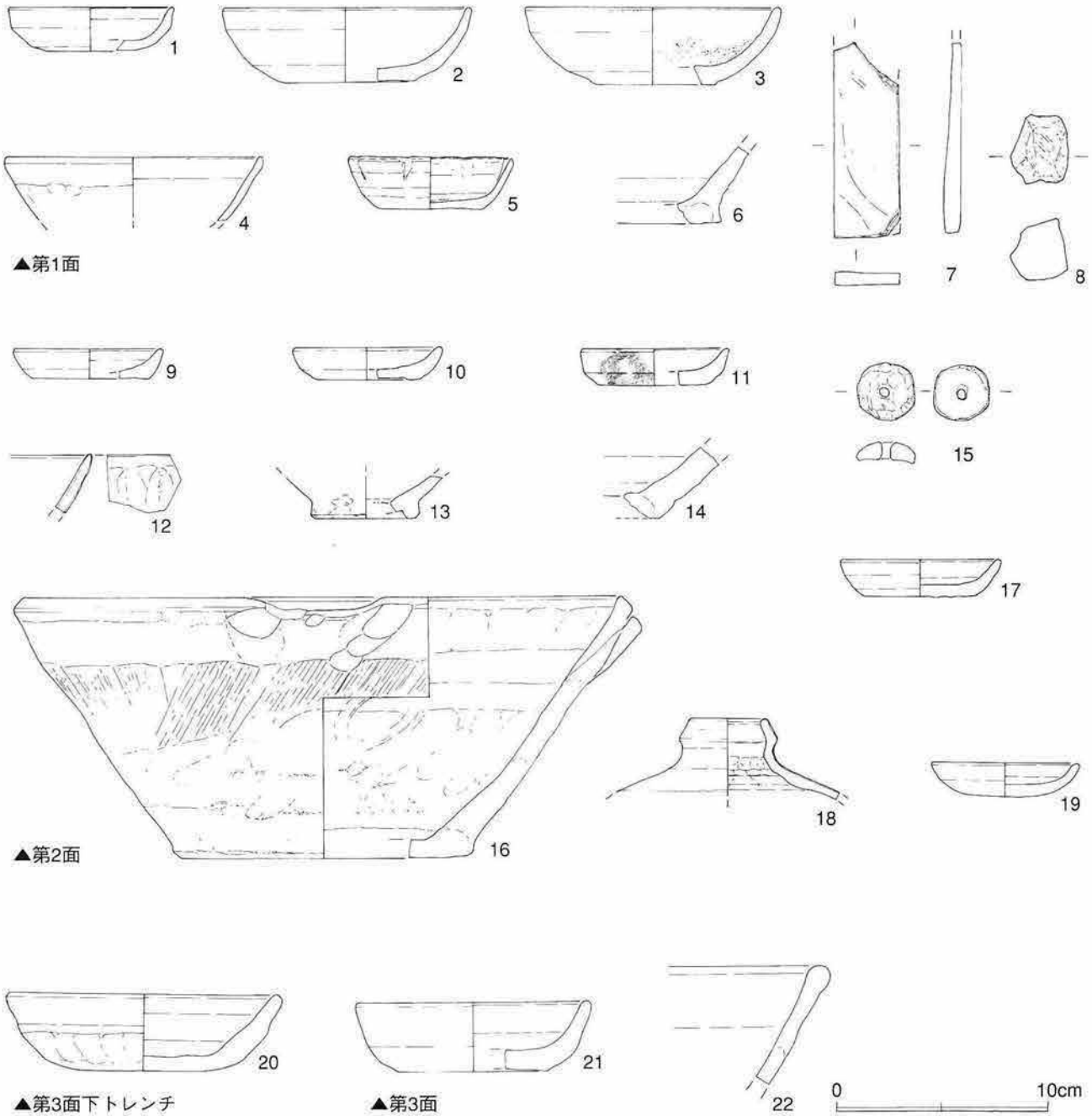


図７　第２トレンチ出土遺物

c．第３面（図６・７、図版２・３）

第３面は、海抜標高9.0m前後で東側がやや高く西に向かって緩やかに傾斜した生活面である。検出した遺構は柱穴３口だけである。

柱穴：柱穴は西端調査壁沿いで確認され、一部調査区外に拡っている。確認された柱穴１～３は、東西径30～50cm・南北径40～55cm以上・深さ25cm前後を測り、楕円形状を呈したものである。覆土は土丹粒・かわらけ小片・粗砂（鎌倉石を砕いたもの）を多く含む締まりのない茶褐色粘質土である。図示できる遺物は出土していない。

出土遺物は（図７－20～22、図版３下段）、21・22は３面上から出土したロクロ成形かわらけ・常滑捏鉢である。20は手捏ね成形のかわらけ大皿である。

ところで第３面の調査終了した後、南壁に沿って幅80cm、深さ30～50cmのトレンチを入れて中世地山を確認した。この上面の海抜標高は8.75m前後であり、トレンチ西半部に土壙状の落ち込みを確認した。

表２　第２トレンチ出土遺物観察表

図・番号	種　類	法量（a：口径b：底径c：器高）	成形・特徴（文様・釉薬・胎土・素地・焼成など）	備考（遺構・その他）
7－1	かわらけ	a：7.8cm　b：3.9cm　c：2.4cm	外底糸切痕ロクロ　暗黄橙色黒色微砂・白針	1面上
2	かわらけ	a：(11.6)cm　b：6.0cm　c：3.5cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・雲母・白針	〃
3	かわらけ	a：11.8cm　b：5.7cm　c：3.7cm	外底糸切痕ロクロ　暗灰橙色黒色微砂・白針・土丹粒　るつぼか	〃
4	白かわらけ	a：12.0cm	外面指頭痕明灰白色微砂緻密	〃
5	瀬戸　入子	a：7.6cm　b：4.8cm　c：2.4cm	口縁八弁輪花　外底ヘラ削り　口縁部に降灰釉　灰白色微砂堅緻	〃
6	常滑　捏鉢	底部片	内面摩滅痕　暗灰色粗砂粒・石粒　常滑片口鉢　類	〃
7	砥石	長さ(9.1)cm 幅3.0cm 厚さ0.8cm	仕上砥　鳴滝産　粘板岩製　両砥面に刃物痕有り　浅黄橙色	〃
8	火打石	長さ3.1cm　幅2.7cm厚さ　2.8cm	チャート系　各面に打撃痕有り　暗灰～灰褐色　一部再火の痕跡	〃
9	かわらけ	a：(7.0)cm　b：5.5cm　c：1.4cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・雲母・赤色粒	1面下～2面
10	かわらけ	a：6.9cm　b：5.0cm　c：1.4cm	外底糸切痕ロクロ　明黄褐灰色黒色微砂・白針	〃
11	かわらけ	a：(6.9)cm　b：5.2cm　c：1.7cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・白針・赤色粒　燈明皿	〃
12	青磁　碗	口縁部片	外面鎬蓮弁文　明緑色半透明厚手に施釉明灰白色黒色微砂緻密	〃
13	白磁　碗	b：(4.5)cm	口兀碗　断面四角高台　灰白色不透明畳付～高台内露胎　灰白色緻密	〃
14	常滑　捏鉢	底部片	内面摩滅痕　茶灰色粗砂粒　内面降灰釉　常滑片口鉢　類	〃
15	土製　円盤	径2.8cm　厚さ８mm　孔径５mm	かわらけ体部を円盤状に加工中央小孔　橙色黒色微砂・白針・赤色粒	〃
16	常滑　捏鉢	a：29.2cm　b：13.6cm　c：12.3cm	片口外底砂目底輪積技法　橙色　黒色微砂・長石粒粗胎	〃
17	かわらけ	a：7.5cm　b：5.4cm　c：1.7cm	外底糸切痕ロクロ　黄橙色黒色微砂・雲母・白針	2面　土壙2
18	青白磁　梅瓶	a：3.6cm	口縁～肩部片　水青色透明薄手の施釉　白色黒色微砂堅緻	〃　P3
19	かわらけ	a：6.9cm　b：3.5cm　c：1.6cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・雲母・白針	〃　P4
20	かわらけ	a：12.7cm　b：11.6cm　c：3.6cm	手捏成形　橙色　黒色微砂・雲母・白針・赤色粒	2面下～3面
21	かわらけ	a：11.2cm　b：7.1cm　c：3.1cm	外底糸切痕ロクロ　橙色黒色微砂・雲母・白針・赤色粒	3面上
22	常滑　捏鉢	口縁部片	明褐灰色砂粒・長石粒粗胎　常滑片口鉢Ⅰ類	〃

第3章　まとめ

今回の現地調査は、既に建物基礎工事が完成した状況で実施された為、建物基礎から安全な後退距離を確保しつつ、調査区の設定位置や調査によって発生する排土の処理問題を考慮して作業を進めなければならなかった。さらに高い建物基礎を避けながらの作業は危険を伴う点など多くの困難を抱えての現地調査でもあった。従って、ごく限られた面積の中の調査であったため、調査成果から得られた情報はおのずと限られたものである。ここでは各面の年代観について若干述べてまとめとしたい。

本調査地点は、比企氏の屋敷と伝えられる跡地に建立された妙本寺の旧境内地と推定され、比企ヶ谷戸内の開口部に位置している。先に発掘調査が実施されていた本地点北で妙本寺参道側にあたる大町一丁目1140外地点（図２）の調査成果から予想では比企一族に係る屋敷跡や妙本寺に関連する遺構の検出が期待された。しかしながら、上記のような事情により調査区は極めて狭小な範囲にならざるを得ず平面的な遺構の拡がりを確認することは難しいので第１・２トレンチの調査において検出された中世生活面の概要を以下に記すことにしたい。

第１面：この面ほ海抜標高9.90mで土丹版築を施してほぼ平坦な生活面に整地され、土壙・柱穴などの遺構が検出された。遺構や面上包含層に伴う遺物は、かわらけがロクロ成形の薄手丸深型が主体で概ね14世紀中頃までに納まるものと考えられる。

第２面：この面は海抜標高9.40m前後で弱い地業によりほぼ平坦な生活面に整地され、土壙・柱穴などの遺構が検出された。遺構や面上包含層に伴う遺物は、出土遺物の組成から概ね13世紀末葉頃と考えられる。

第３面：この面は海抜標高9.00m前後で上面に鎌倉石の破砕粒を敷いて生活面であり、土壙・柱穴などの遺構が検出された。出土遺物の組成から概ね13世紀中～後葉頃と考えられる。

第３面下（中世地山）：第３面で調査時で工事掘削深度の根切底に達していたので、トレンチを入れて中世地山の確認を実施した。中世地山は海抜標高8.65m前後で検出され、第２トレンチから土壙の落ち込みが検出された。遺構や面上包含層に伴う遺物は、出土遺物の組成から概ね13世紀前半頃と考えられる。

【引用・参考文献】

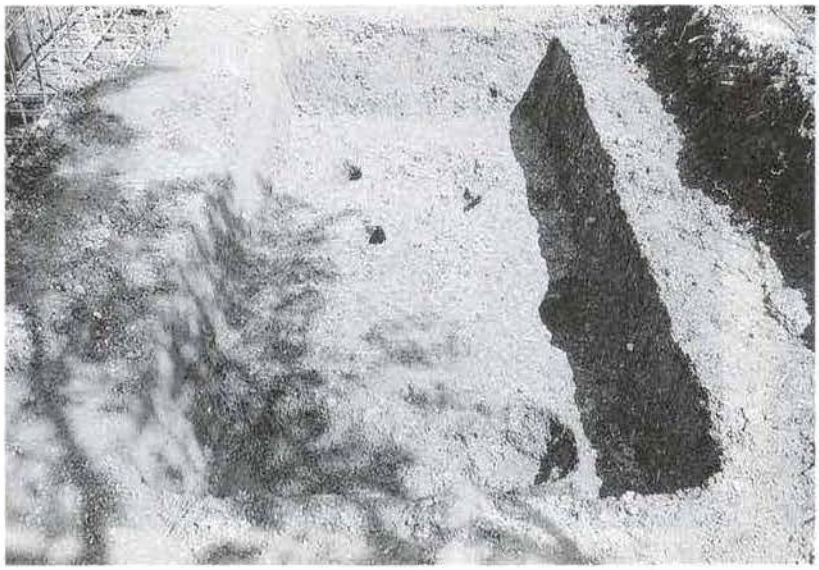
宗臺秀明　1998「中世都市鎌倉の初期かわらけ」『中近世土器の基礎研究　Ⅷ』日本中世土器研究会

宗臺秀明　2002「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」『かながわの中世 ～鎌倉から小田原へ～ 一土器様相を中心として－』神奈川考古学会　平成13年度考古学講座

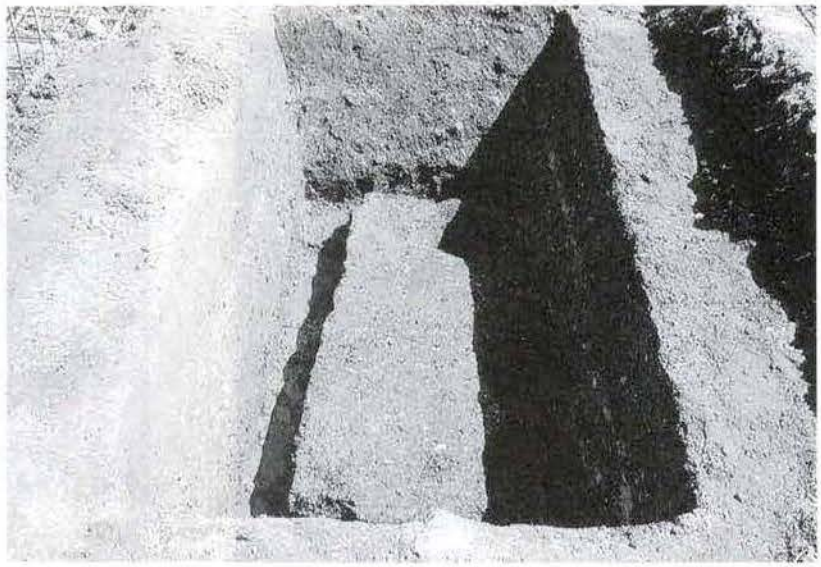
宗臺富貴子　1996「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校）の瀬戸窯製品について一古瀬戸前期から後期までの出土様相－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要　第４輯』

服部実喜　1994「南武蔵・相模における中世の食器類（２）－中世前期の様相－」『神奈川考古第30号』神奈川考古同人会

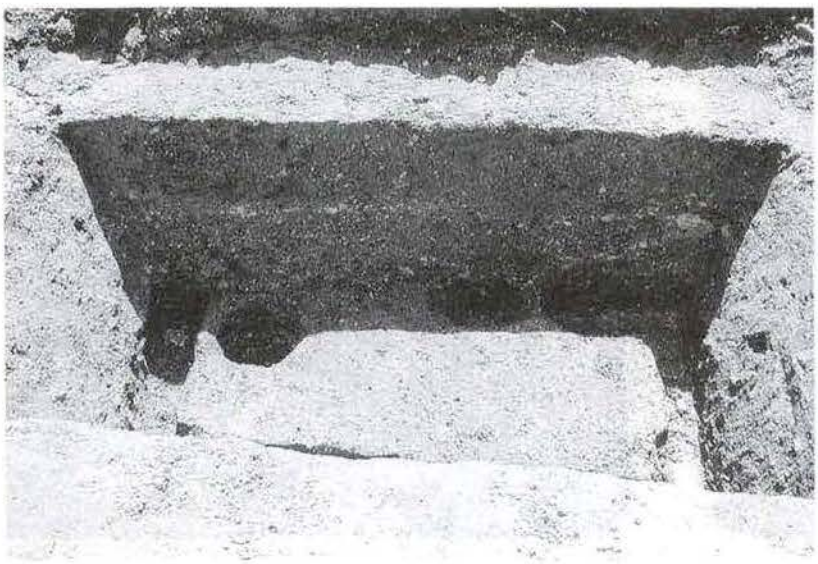
松尾剛次　1993「中世都市鎌倉の風景」吉川弘文館



◀a．第1トレンチ第1面（西から）



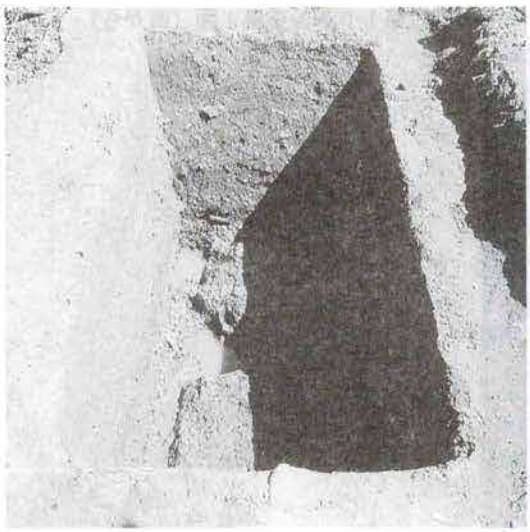
▶b．第1トレンチ第2面（西から）



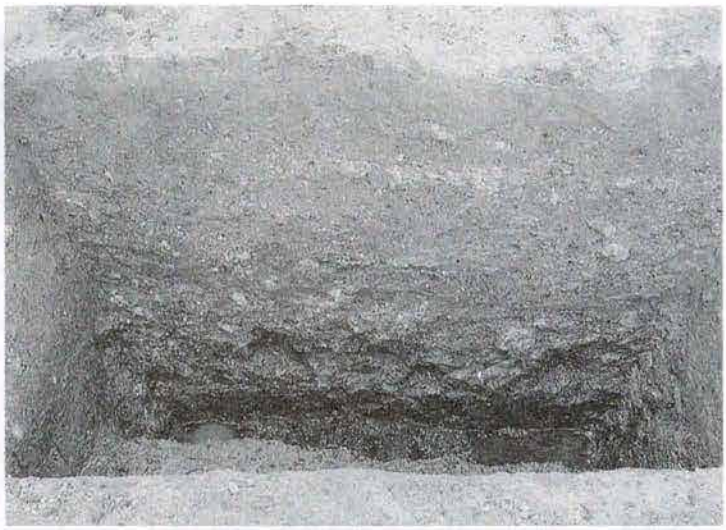
◀c．第1トレンチ第2面（北から）

妙本寺第1トレンチ

図版2

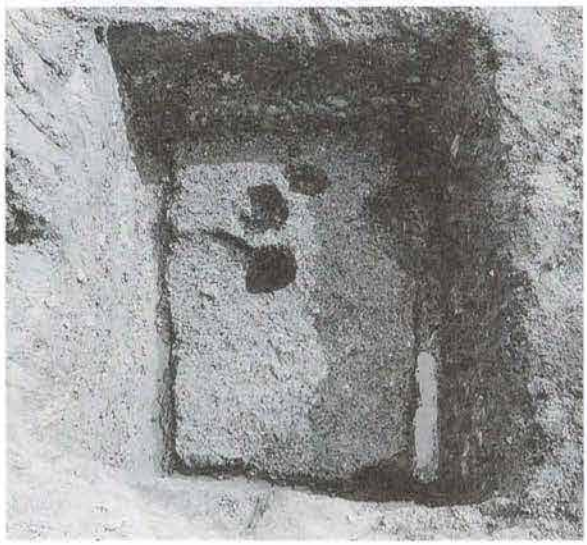


▲a．第1トレンチ第3面（西から）

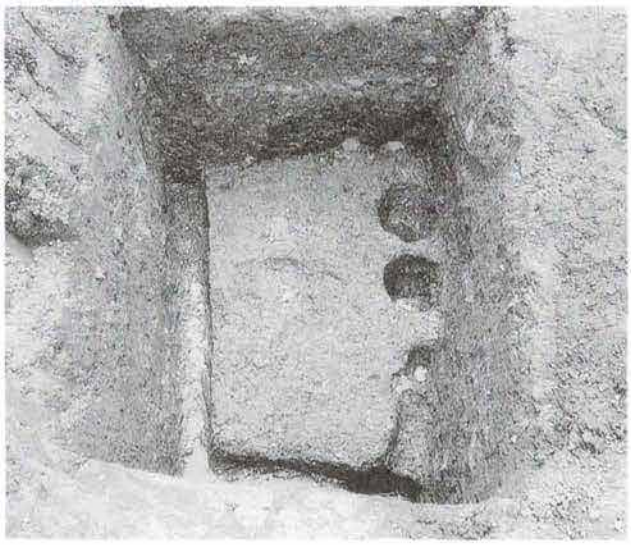


▲b．第1トレンチ北壁土層堆積

▼c．第2トレンチ第2面（北から）

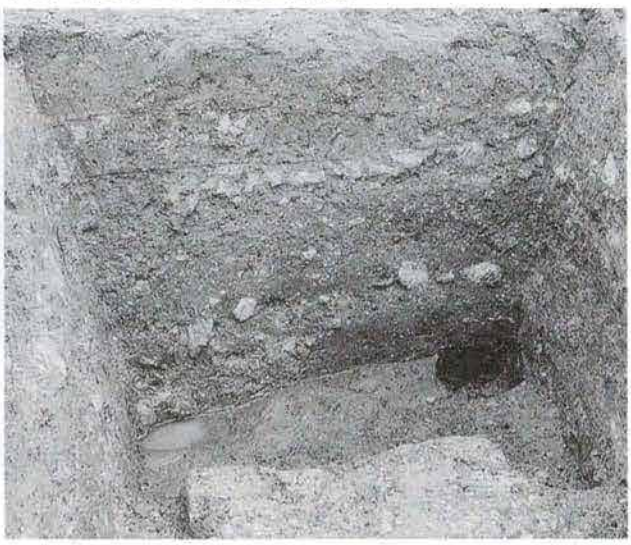


▼d．第2トレンチ第3面（北から）

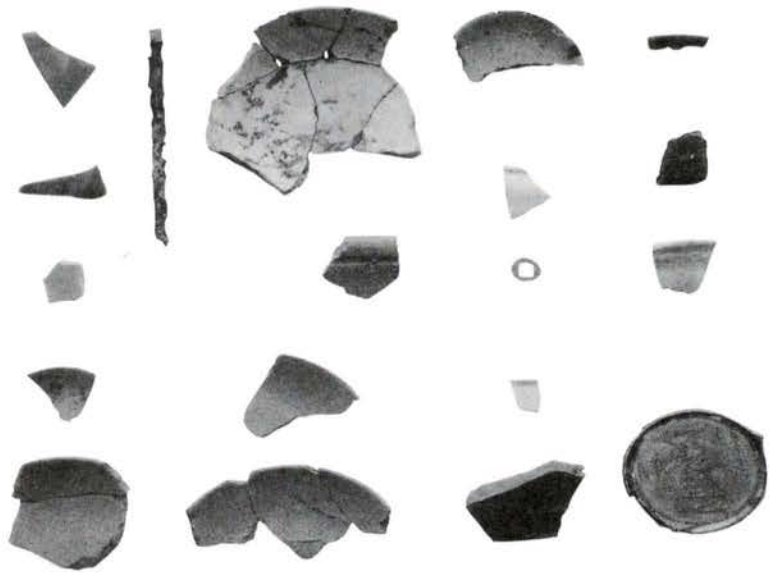


▼e．第2トレンチ地山トレンチ（北から）

▼f．第2トレンチ南壁土層堆積



妙本寺第1～第2トレンチ



▲a．第1トレンチ出土遺物

▲b．第2トレンチ出土遺物

新善光寺跡（No.279）

材木座四丁目573番１外地点

例　　言

1．本報は鎌倉市材木座四丁目573番１外地点に所在する個人専用住宅の新築に先だち行われた、新善光寺跡（県遺跡台帳№279）の発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は平成14年１月７日から同年２月２日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3．本報使用の遺構図及び遺物実測図・観察表は調査員が分担し、原稿執筆・編集は福田が行った。
4．本報に使用した遺構全景写真・個別遺構写真・出土遺物写真は福田が撮影を行った。
5．発掘調査・整理の体制は以下の通りである。
　主任調査員　福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託）　原廣志（鎌倉市教育委員会嘱託）
　調　査　員　石元道子　本城裕
　調査補助員　猿田功一　阿部潤（鶴見大学）
　作　業　員　（社）鎌倉市シルバー人材センター
6．発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……128
第２章　調査の経過と層序 ……131
第３章　検出した遺構と遺物 ……132
第４章　まとめ ……132

図１　遺跡地点位置図 ……128
図２　第１面・第２面全測図 ……129
図３　第３面全測図と北壁土層断面図 ……130
図４　第１・第２面出土遺物 ……133
図５　第２面～第３面出土遺物 ……134
図６　第２面～第３面出土遺物 ……135
図７　第２面～第３面出土遺物 ……136
図８　第２面～第３面出土遺物 ……137
図９　第３面瓦溜り出土遺物 ……138
図10　第３面瓦溜り出土遺物 ……139
図11　第３面・トレンチ出土遺物 ……140

表１　遺物観察表

図版１　遺跡遠景と第１面・第２面 ……145
図版２　第２面・第３面 ……146
図版３　第３面と瓦出土状況 ……147
図版４　出土した遺物 ……148
図版５　出土した遺物 ……149

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は相模湾に面した鎌倉の沖積平野を取り囲む標高100m前後の丘陵の東方、辨ヶ谷に位置する。この谷は約600万年前の新生代第三紀に形成された凝灰砂岩と泥岩が浸食作用で削られ形作られたものである。縄文時代前期の海進期（約5,000～6,000年前）には、海面が現在より約10m近く上昇し入り込んだ海水により鎌倉湾が形成され、現在の鶴岡八幡宮付近まで海岸線が迫っていたと考えられる。縄文時代後期の海退期（約4,000年前）よりしだいに平野部分の陸地化が進み、弥生時代（約2,000年前）にはさらに乾燥がすすみ、海岸線付近では堆積した砂によって砂丘が形成されていった。砂丘の背後（北側）にはラグーン（後背湿地）が形成され、旧市内を流れる最大の河川である滑川をはじめ逆川、二階堂川、扇川、佐助川などが流れ込んでいた。このころから砂丘や河川によって作られた自然堤防上に点々と人々が居住を始めたと考えられている。奈良時代には鎌倉郡の郡衙（郡役所）が置かれ、政治経済の重要な位置を占めていたと考えられる。平安期の鎌倉は、源頼義が石清水八幡宮を勧請した元八幡宮、八幡太郎義家の生まれた甘縄の館、亀ヶ谷の義朝の居館等の存在が知られ、源頼朝が鎌倉に入る1180年以前から源氏相伝の地であった。

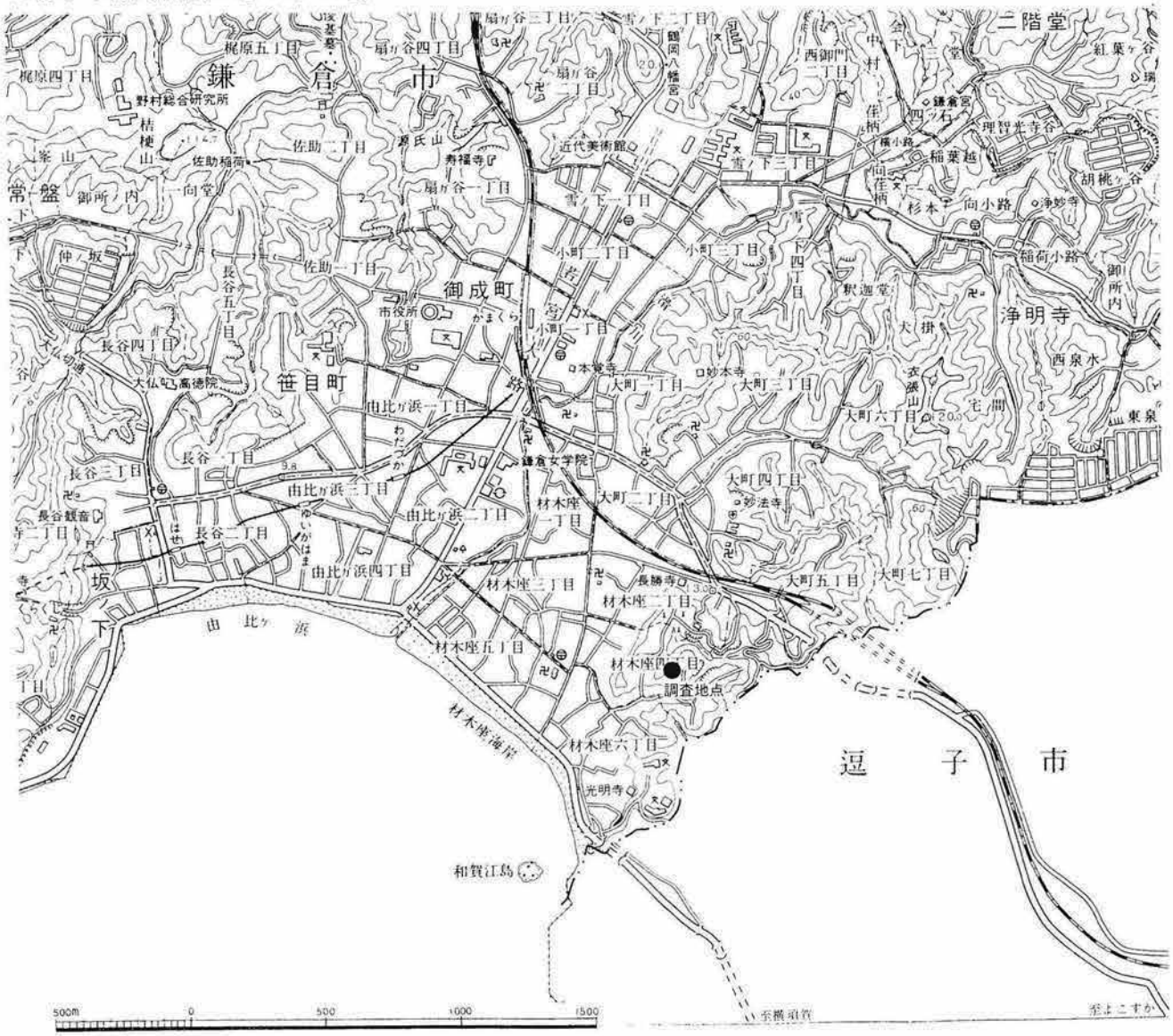
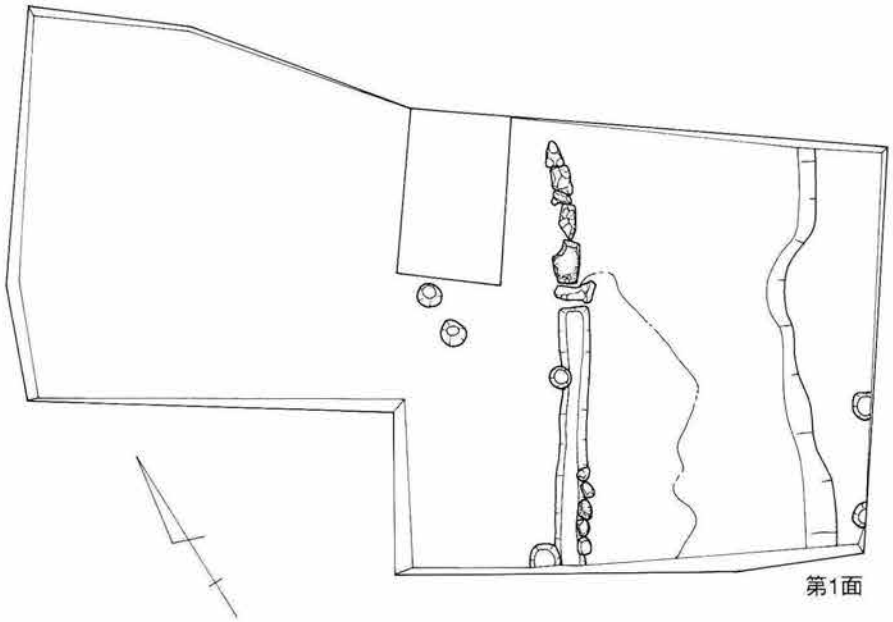


図１　遺跡地点位置図



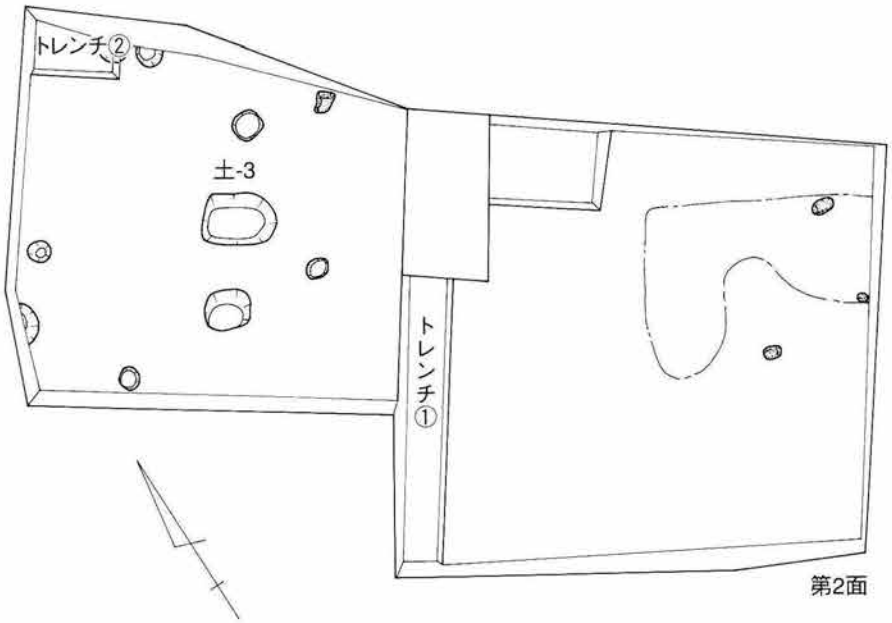
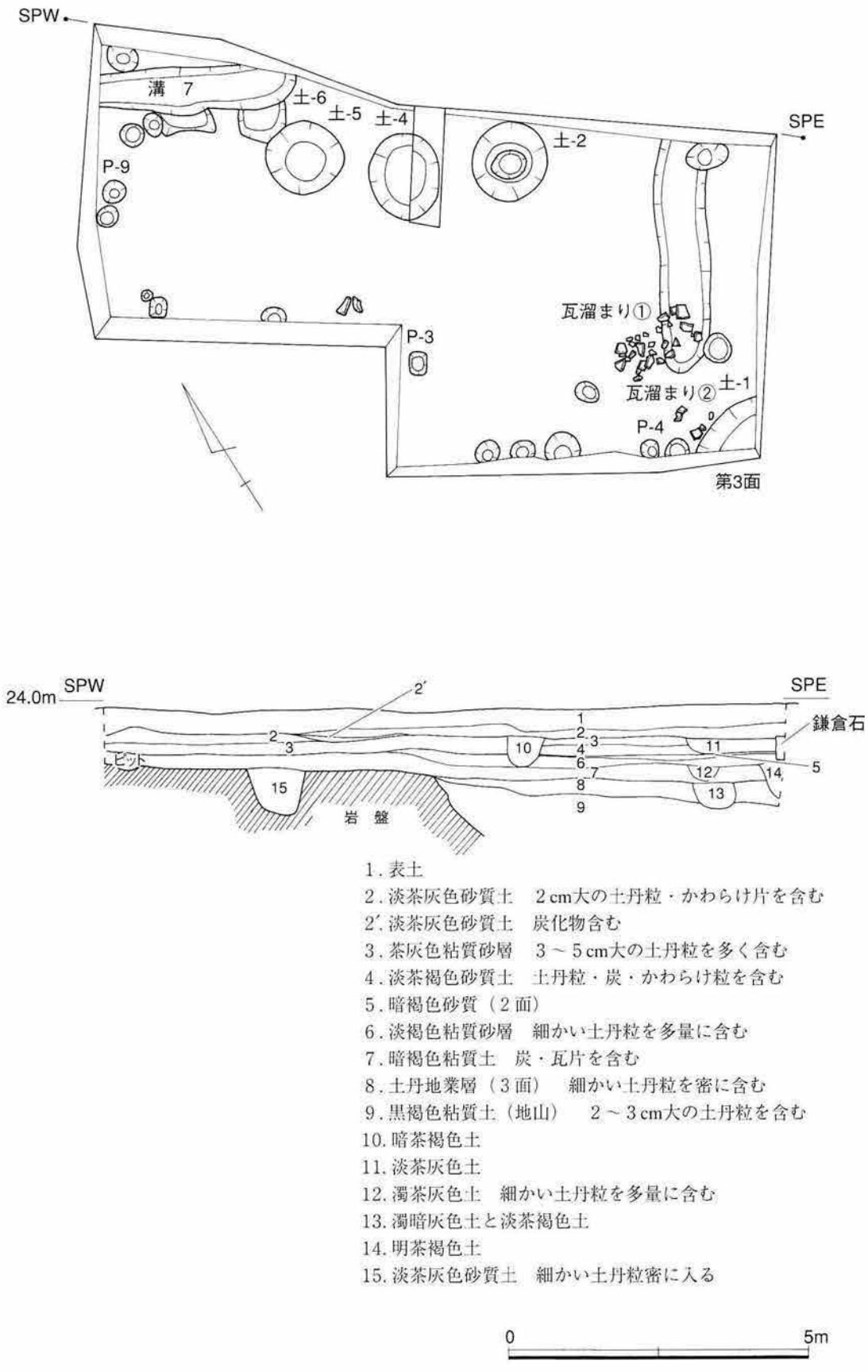


図2　第1面、第2面全測図



1. 表土
2. 淡茶灰色砂質土　2cm大の土丹粒・かわらけ片を含む
2′. 淡茶灰色砂質土　炭化物含む
3. 茶灰色粘質砂層　3～5cm大の土丹粒を多く含む
4. 淡茶褐色砂質土　土丹粒・炭・かわらけ粒を含む
5. 暗褐色砂質（2面）
6. 淡褐色粘質砂層　細かい土丹粒を多量に含む
7. 暗褐色粘質土　炭・瓦片を含む
8. 土丹地業層（3面）　細かい土丹粒を密に含む
9. 黒褐色粘質土（地山）　2～3cm大の土丹粒を含む
10. 暗茶褐色土
11. 淡茶灰色土
12. 濁茶灰色土　細かい土丹粒を多量に含む
13. 濁暗灰色土と淡茶褐色土
14. 明茶褐色土
15. 淡茶灰色砂質土　細かい土丹粒密に入る

図3　第3面全測図と北壁土層断面図

調査地点は辨ヶ谷（べんがやつ）、材木座四丁目に所在し谷間奥には枝分かれした小さな支谷が開けている。遺跡名の新善光寺はこの谷にあったと伝えられている三つの寺院（最宝寺№248、崇寿寺№284、新善光寺№279）の一つを遺跡名としている。最宝寺は谷の入口付近、高御蔵にあったと伝えられている。現在横須賀市野比にある最宝寺の寺伝によると、源頼朝が扇ガ谷に創建したものを建久六年（1195）辨ヶ谷に遷したものという。享徳年間まで辨ヶ谷にあり、後に野比に移ったと考えられている。崇寿寺は元享元年（1321）北条高時の創建、開山は南山士雲。應永三十一年（1424）まで存在していたが位置は不明である。新善光寺は調査地点のある谷戸が新善光寺跡と伝えられ、現在葉山町上山口にある新善光寺はこれが遷ったものと考えられる。初めて新善光寺の名前が見えるのは、仁治三年（1242）六月十五日亥刻、執権北条泰時が六十歳で亡くなった時で、新善光寺智導上人が念仏を勤めたとある。葉山に遷った時期は『風土記稿』によると天正十八年（1590）頃と考えられている。

今回の調査地点は新善光寺跡と伝えられる一角で、周辺では急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査が数カ所で行われている。

（福田　誠）

崇 寿 寺　山号金剛、禅宗。元享元年（1321）北条高時開創、開山は南山士雲。

最 宝 寺　現横須賀野比『風土記稿』に山号五明山高御蔵　浄土真宗　京西六条本願寺末といい、寺伝では「建久六年弁ヶ谷鎌倉材木座村属に寺を移し、薬師を本尊となす、此頃は天台宗なり」

新善光寺　宗旨未詳　現葉山町上山口　『北条九代記』北条泰時が死んだとき、新善光寺智導上人が念仏を勤めている。

参考文献

『鎌倉廃寺事典』　貫達人・河副武胤編　有隣堂　1980年
『鎌倉市史』「社寺編」　鎌倉市教育委員会　吉川弘文館　1959年

第２章　調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、住宅の建設に先立って平成14年１月８日から表土掘削及び機材の搬入を開始し、同年２月２日まで行われた。調査面積は45.00㎡である。確認調査の結果を基に、重機で表土を約40～50cm掘り下げ第１面を検出した。グリッドは、建築予定範囲の東西軸方向にあわせて設定した。グリットは市内４級基準点の内C001（X＝－77,270.231　Y＝－24,925.990）と、C002（X＝－77,271.606　Y＝－24,954.148）を基準に、調査基準原点１（X＝－76,166.946　Y＝－24,846.141）、原点２（X＝－76,162.128　Y＝－24,853.348）を設定したものである。

使用した仮水準点は、市内３級基準点№53412（海抜5.699m）から移動したもので海抜は24.078mである。南北グリッドラインより西に32°36′50″が真北である。

調査は調査範囲を２分割した片側（１区）から表土を重機で掘削し、排土は敷地内（２区）に山積みにした。２区の調査時には１区を埋め立て更に余った分を上に山積みにしたものである。調査地は南に向かって開口する弁ヶ谷の新善光寺推定地内に位置する。２月２日に埋め戻しおよび器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

東西に細長い調査区の中央から西側では地表面から約80cmで岩盤面となる。東側では地山面が緩やかに谷中央に向かい落ち込んでゆく。このため西側では２面、東側では３面の調査となった。西側の２面（岩盤面）は東側の２～３面になる。

第３章　検出した遺構と遺物

第１面

海抜は西端23.60～東端23.30m。地表から－20～50㎝。西から東、谷戸中央に向かい緩やかに落ち込んでいる。調査区東端から西に約３m地点、土丹と鎌倉石切石を南北方向に据えた列とこれの抜き跡と見られる幅30㎝、長さ３m程の溝を検出した。調査区のほぼ中央から西側では２面と同一面を使用している。

第２面

海抜は23.20m。地表から－64㎝。調査区東端から約３m、１面で確認した土丹と鎌倉石列、抜き取り溝の範囲で東側に玉砂利面が広がることが確認された。土壙１穴と柱穴８を検出している。

第３面

海抜は23.15～22.90m。地表から－94㎝。西側は岩盤面となっている。土壙４と柱穴17、溝状の落ち込みを２本検出している。３つの土壙はいずれも直径約１m、深さ50～70㎝の素掘りの遺構である。調査区東端近くで瓦溜りを検出した。男瓦・女瓦が比較的まとまって出土したものである。

第４章　まとめ

明確な建物跡は検出されなかったが、土丹と鎌倉石の石列を境に広がる玉砂利面や瓦溜りの検出から、この場所が新善光寺境内で近くに瓦葺きの建物があったと推測される。瓦は鎌倉Ⅱ期からⅢ期にあたるもので、創建年代がわからない新善光寺が初めて記録に現れる仁治三年（1242）を考えると範疇に収まっている。

谷戸を取り囲む山際にはやぐらが多く穿たれており、急傾斜地の防災工事で調査が行われている。中でも昭和62年度に行われた発掘調査でやぐらとは異なり、山裾をコの字状に掘り窪め宝篋印塔を主体とした石塔群や写経石・白磁四耳壺を伴う火葬墓が発見されている。この火葬墓は幅3.7m、奥行1.7mの範囲で写経石が敷き詰められ、その直下から２間×１間の玉垣状の遺構と元代の白磁四耳壺が出土している。年代は併せて出土しているかわらけから14世紀中頃と考えられた。この火葬墓の構造は格式ある火葬礼式に則ったものであることが推測されることから、この谷戸内にそれ相応の寺院の存在をうかがい知ることが出来よう。瓦葺きの建物の存在が推測されたことは一定の成果である。

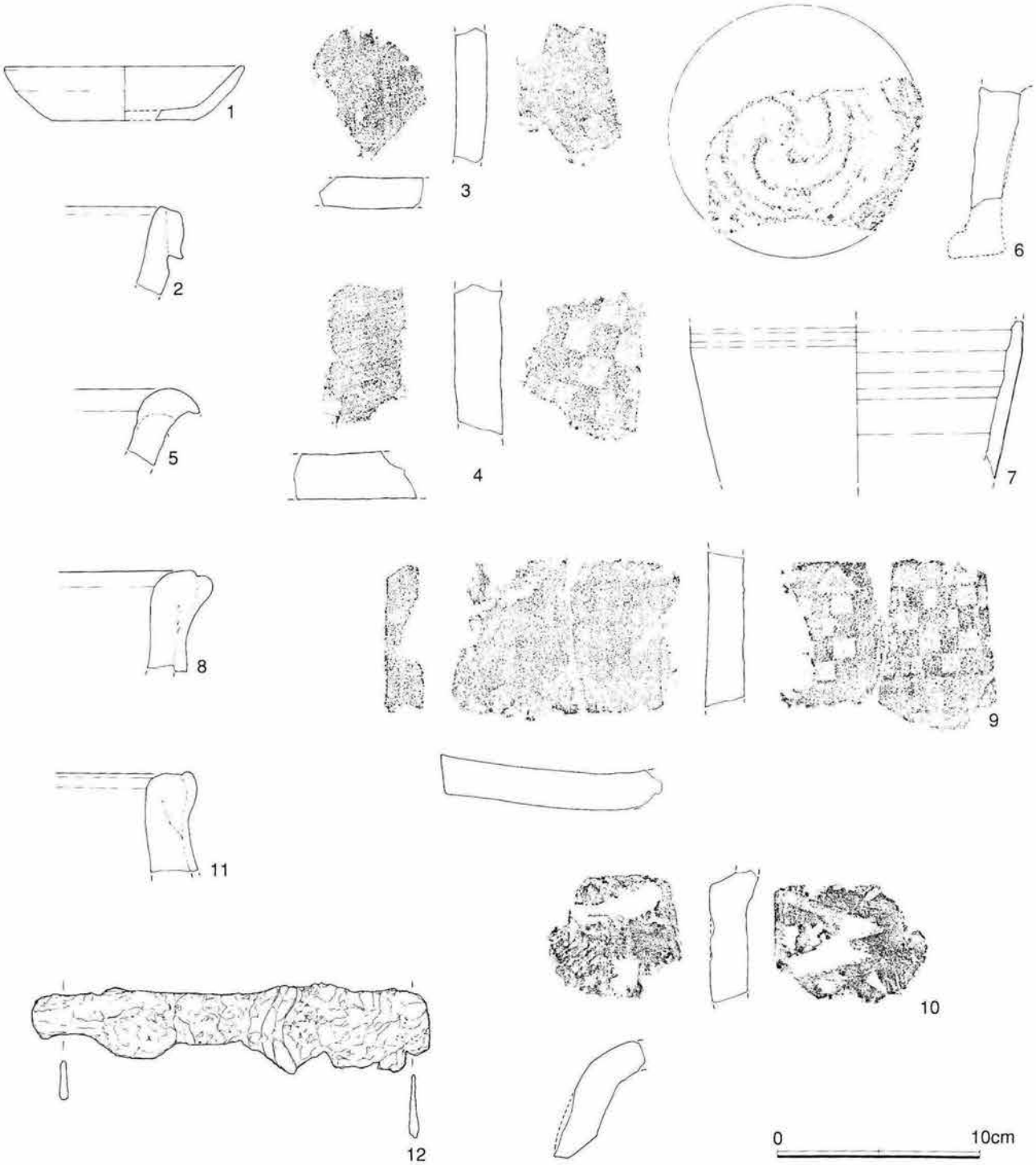


図4　第1面・第2面出土遺物

図5　第2面～第3面出土遺物

図6　第2面～第3面出土遺物

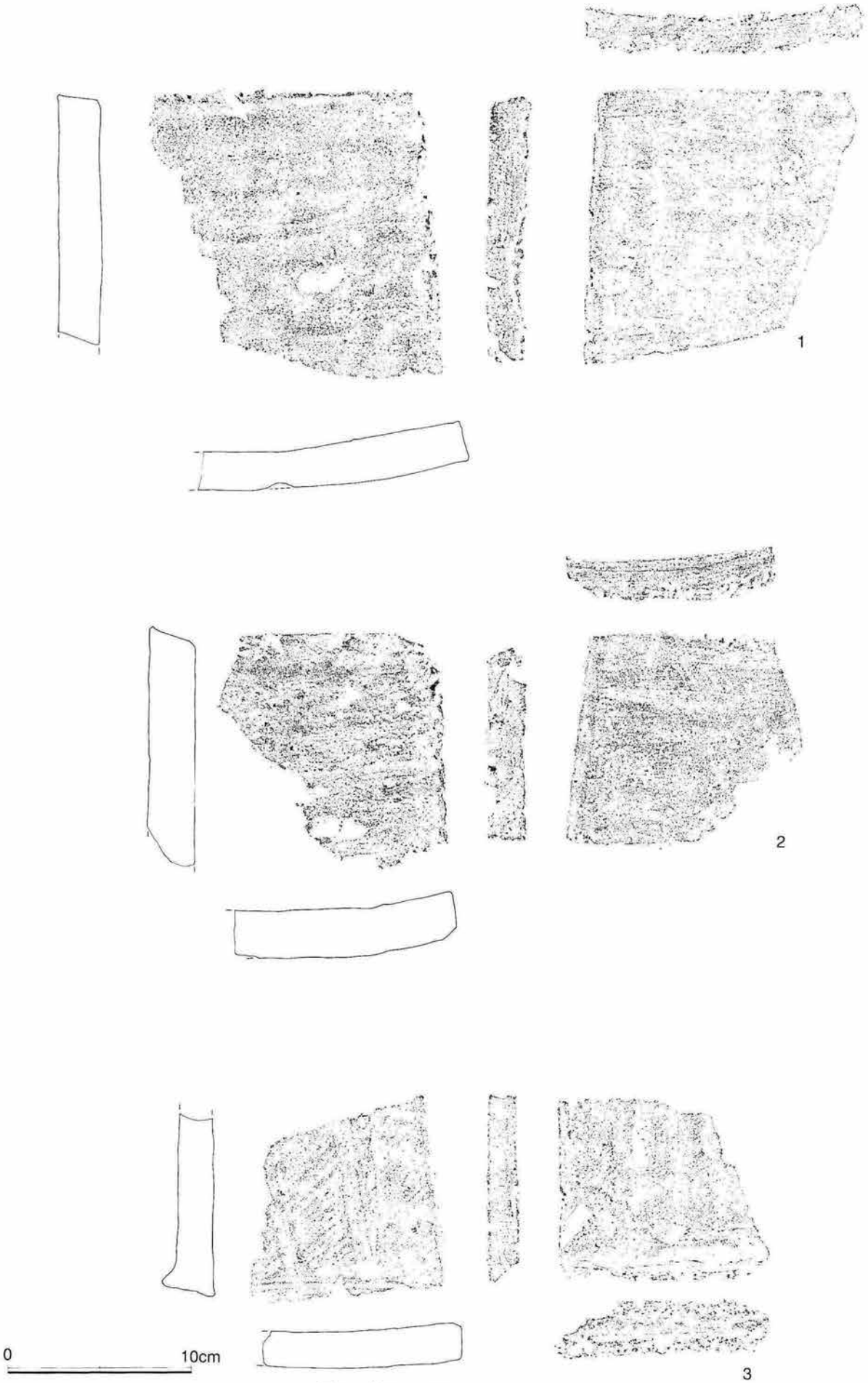


図7　第2～第3面出土遺物

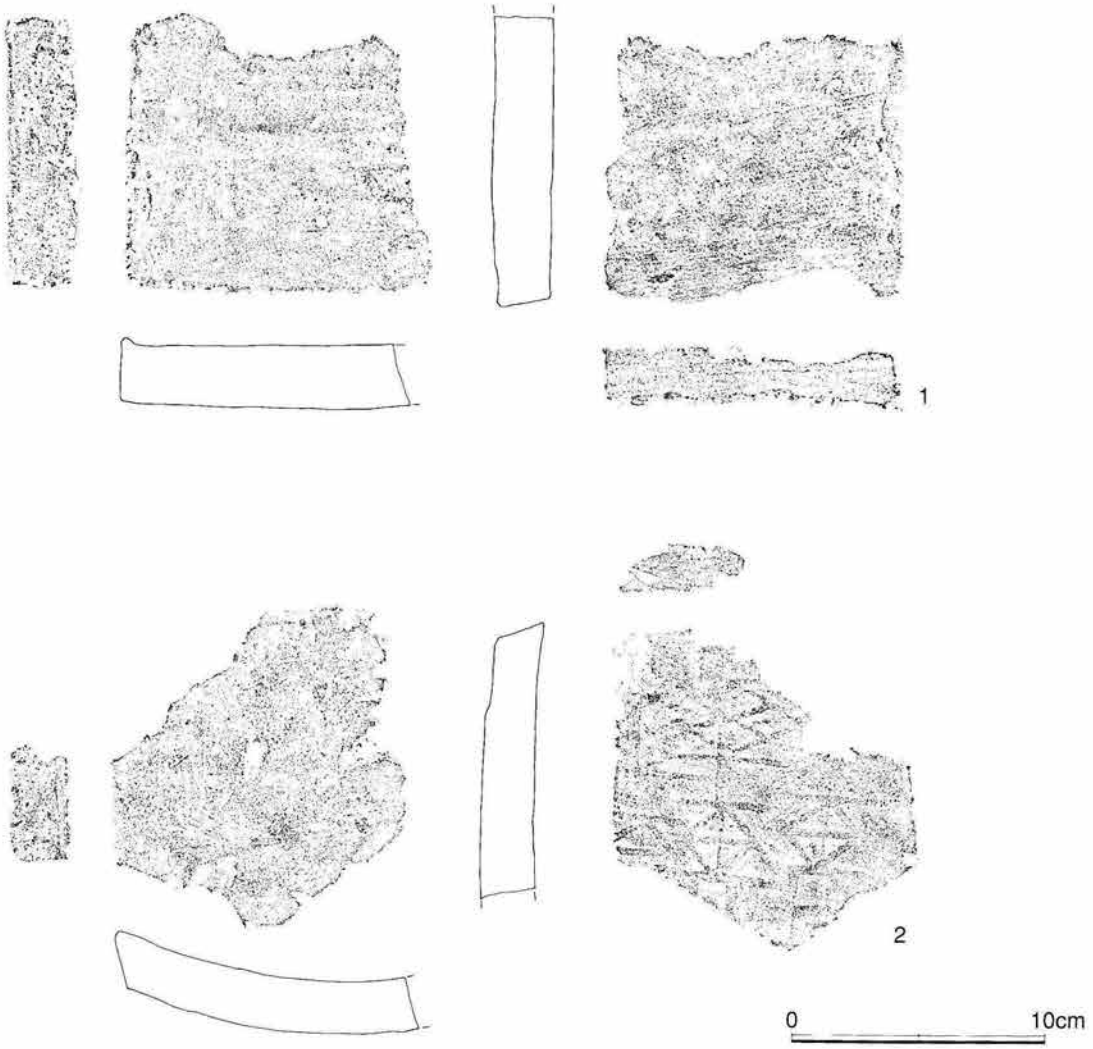


図8　第2面～第3面出土遺物

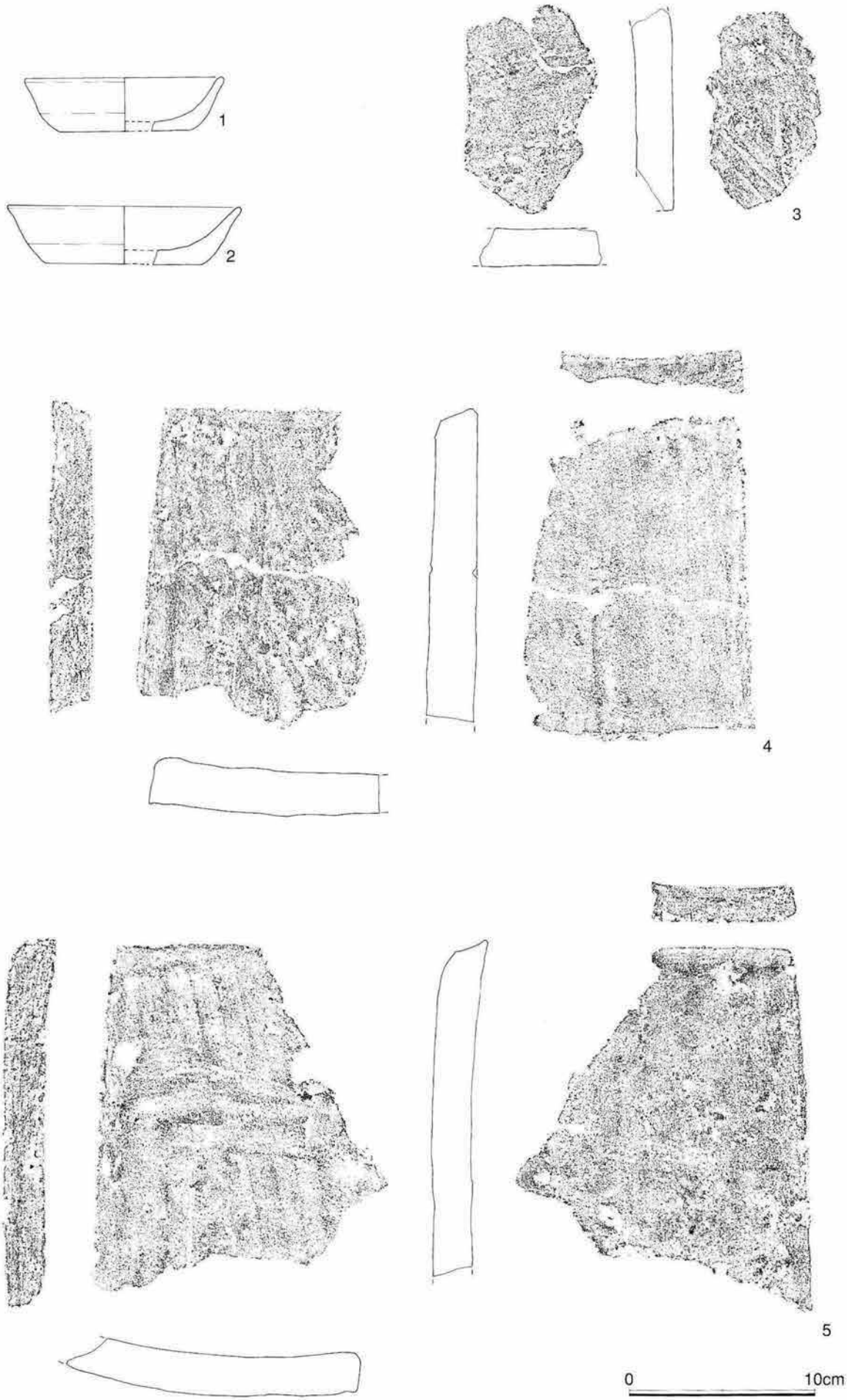


図9　第3面瓦溜り出土遺物

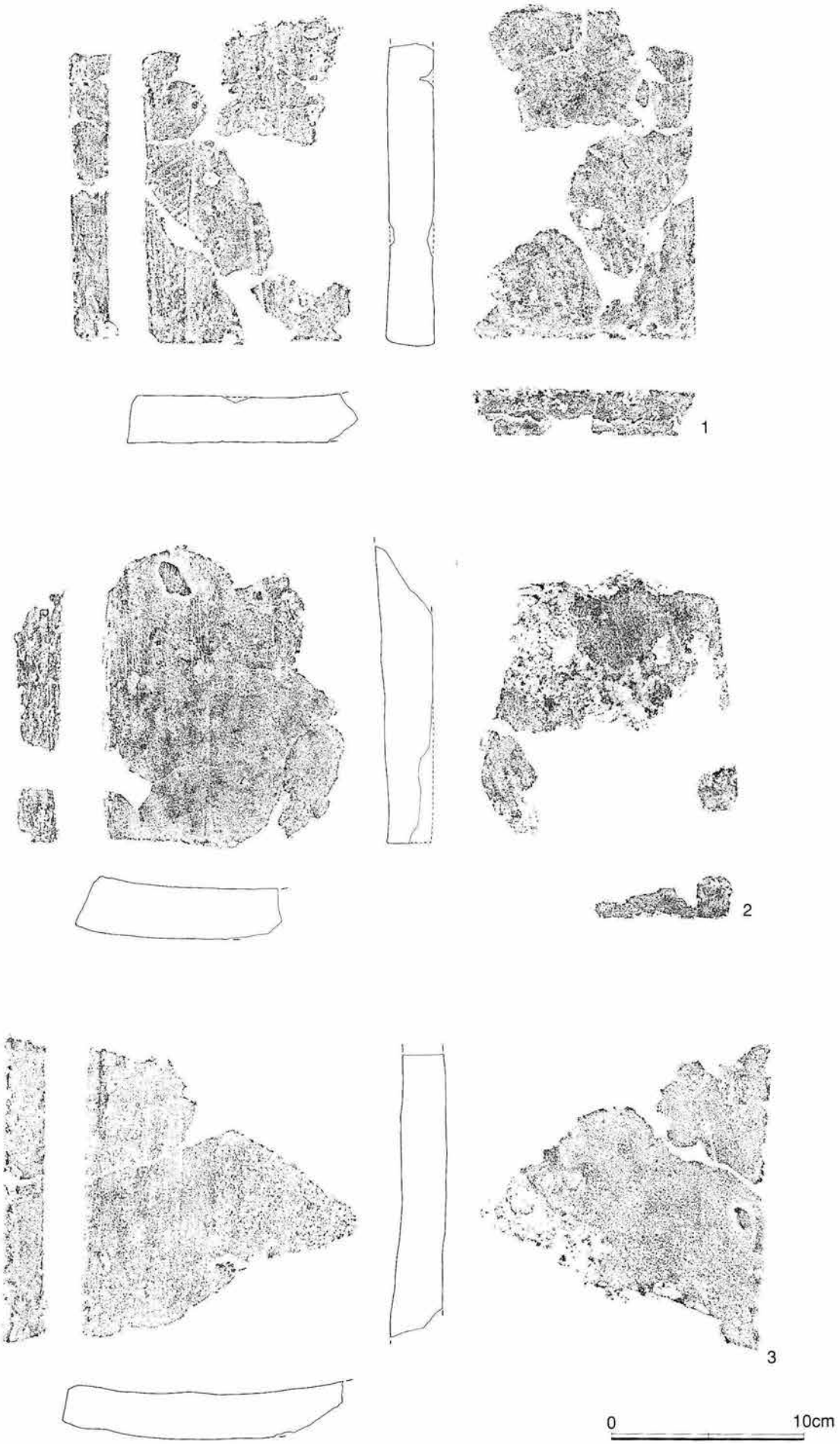


図10　第３面瓦溜り出土遺物

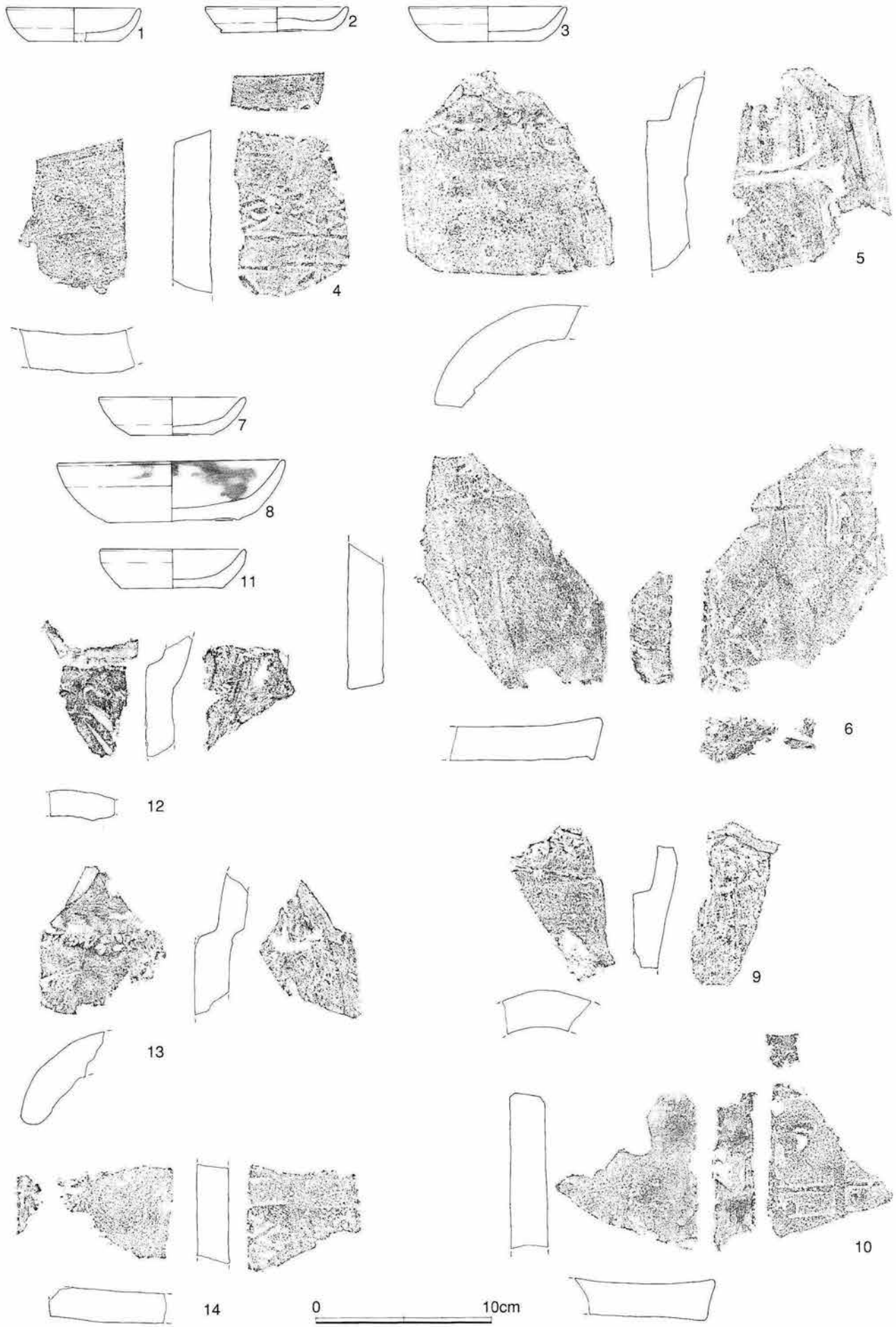


図11　第３面・トレンチ出土遺物

遺物観察表

図4

単位はcm　（　）は推定値

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	かわらけ	(11.8)	(7.0)	2.7	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区1面
2	常滑甕	—	—	—	胎土は精良、色は灰色で焼き締まる、縁帯部	Ⅰ区1面
3	女瓦	厚1.6、残幅5.2、残長5.8			胎土は精良1㎜大の砂粒含み色は灰白色、叩き目は市松	Ⅰ区1面
4	女瓦	厚2.9、残幅5.5、残長7.5			胎土は3㎜大の石粒を含み割れ口はザックリし、色は淡橙色　叩き目は市松	Ⅰ区1面～2面
5	常滑甕	—	—	—	胎土は精良、色は暗灰色で焼き締まる、縁帯部	Ⅰ区1面～2面
6	鐙瓦	瓦当径（13.0）内区径18.2			胎土は1㎜大の砂粒を多く含み、我口はザックリし、色は灰白色　瓦当文様は圏線を伴う左回りの巴文　珠文は21個	Ⅰ区1面～2面
7	瀬戸	—	—	—	胎土は精良で灰白色　四耳壺胴部　釉は暗緑色	Ⅱ区2面
8	常滑甕				胎土は精良で長石を多く含む　縁帯部	Ⅱ区2面
9	女瓦	厚1.9、残幅10.8、残長8.0			胎土は精良、白粒を含み色は赤灰色　叩き目は市松	Ⅱ区2面
10	男瓦	厚1.8、残幅6.5			胎土は精良で1㎜大の砂粒、白粒を含み色は灰白色　側面の面取り幅が広い	Ⅱ区2面
11	常滑甕	—	—	—	胎土は精良で長石を多く含み暗灰色　縁帯部	Ⅱ区2面 土壙3
12	鉄製刀子	残長19.6、幅3.1、残厚0.4				

図5

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	かわらけ	(11.8)	(7.0)	2.8	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区2～3面
2	かわらけ	(11.2)	(6.4)	3.4	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区2～3面
3	かわらけ	(12.2)	(7.0)	3.3	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区2～3面
4	かわらけ	(13.0)	(6.6)	2.9	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区2～3面
5	瓦質香炉	(12.0)	—	—	外面及び内面内側まで器表面は炭素吸着・磨き　胎土は精良、灰白色	Ⅰ区2～3面

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
6	宇瓦	内区幅2.5、上外区幅0.9、下外区幅0.8、顎面幅3.1			陽刻上向剣頭文、胎土は3㎜大の小石粒、白粒多く割れ口はザックリ　色は黄橙色	Ⅰ区2～3面
7	宇瓦	内区幅1.9、上外区幅0.6、下外区幅0.5、顎面幅2.7			陽刻上向剣頭文、胎土は1㎜大の小石粒を多く含む　色は灰白色　表面は黒灰色	Ⅰ区2～3面
8	鬼瓦	厚2.8、残幅8.0、残長10.1			胎土は精良で1㎜大の砂粒を多く含む　色は灰白色　表面は黒灰色　裏面は箆ナデ	Ⅰ区2～3面
9	男瓦	厚2、残幅8、玉縁長2.6			胎土は2～5㎜大の石粒を多く含む　色は浅黄橙色　表面は黒灰色	Ⅰ区2～3面
10	男瓦	径(13.4)、厚2.1、残長20.4、玉縁長2.9			胎土は5㎜大の石粒を多く含む　色は浅黄橙色　表面は黒灰色	Ⅰ区2～3面
11	男瓦	径(12.5)、厚2、残 長24.2、玉縁長2.7			胎土は5㎜大の石粒を多く含む　色は灰白色　表面は黒灰色	Ⅰ区2～3面

図6

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	女瓦	厚2.3、残幅11.8、長28.3			胎土は5㎜大の石粒多く含み割れ口はザックリ　色は明黄灰色　側面は丸く仕上げる	Ⅰ区2～3面
2	女瓦	厚1.8、残幅10.5、残長9.0			胎土は1㎜大の砂粒を多く含み焼き締まる色は淡赤橙色	Ⅰ区2～3面
3	女瓦	厚1.9、残幅5.7、残長5.3			胎土は1㎜大の砂粒を多く含み焼き締まる色は灰白色　表面は灰色	Ⅰ区2～3面

図7

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	女瓦	厚2.3、残幅15.0、長14.5			胎土は5㎜大の石粒多く含み割れ口はザックリ　色は灰白色　側面端は丸く仕上げる	Ⅰ区2～3面
2	女瓦	厚2.6、残幅11.5、残長12.5			胎土は5㎜大の石粒を多く含みザックリ色は灰白色　側面端は丸く仕上げる	Ⅰ区2～3面
3	女瓦	厚2.0、残幅11.0、残長10.5			胎土は3㎜大の石粒を多く含みザックリ色は黄橙色　側面端は丸く仕上げる	Ⅰ区2～3面

図8

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	女瓦	厚2.3、残幅10.5、長12.0			胎土は5㎜大の石粒多く含み割れ口はザックリ　色は灰白色　側面端は丸く仕上げる	Ⅰ区2～3面
2	女瓦	厚2.1、残幅10.0、残長10.9			胎土は1㎜大の砂粒を多く含み焼き締まる色は灰色　側面端は丸く仕上げる　叩きは斜め格子に「┬」	Ⅰ区2～3面

図9

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	かわらけ	(10.4)	(7.0)	2.9	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区3面 瓦溜まり
2	かわらけ	(12.4)	(8.4)	3.1	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区3面 瓦溜まり
3	女瓦	厚2.4、残幅11.2、残長7.5			胎土は1㎝大の小石を含み、割れ口はザックリ　色は灰白色　表面は淡黄色	Ⅰ区3面 瓦溜まり
4	女瓦	厚2.4、残幅12.2、残長17.5			胎土は3㎜大の小石を多く含み割れ口はザックリ　色は黄橙色　表面灰黄橙色	Ⅰ区3面 瓦溜まり
5	女瓦	厚2.1、残幅15.8、残長18.5			胎土は5㎜大の小石を多く含み割れ口はザックリ　色は浅黄橙色　表面黒褐色	Ⅰ区3面 瓦溜まり

図10

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	女瓦	厚2.1、残幅15.5、長11.5			胎土は3㎜大の石粒多く含み割れ口はザックリ　色は黄橙色　側面端は丸く仕上げる	Ⅰ区3面 瓦溜まり
2	女瓦	厚2.7、残幅12.6、残長15.5			胎土は5㎜大の石粒を多く含みザックリ 色は浅黄橙色　側面端は丸く仕上げる	Ⅰ区3面 瓦溜まり
3	女瓦	厚2.2、残幅14.2、残長15.5			胎土は3㎜大の石粒を多く含みザックリ 色は明黄褐色　側面端は丸く仕上げる	Ⅰ区3面 瓦溜まり

図11

No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
1	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.9	轆轤成形、色は橙色、胎土は精良、雲母・白針含む	Ⅰ区3面 土壙2
2	かわらけ	8.0	6.4	1.4	轆轤成形、胎土は精良、雲母・白針と5㎜大の小石粒混じる　色は橙色	Ⅰ区3面 土壙2
3	かわらけ	(8.8)	5.8	2.0	轆轤成形、胎土は精良雲母・白針を含む 色は橙色	Ⅱ区3面 土壙5
4	女瓦	厚2.2、残幅6.2、残長9.1			胎土は5㎜大の石粒を含み割れ口はザックリし、色は淡赤橙色　叩き目は不明	Ⅱ区3面 土壙5
5	男瓦	厚2.1、残幅8.5、残長11.1			胎土は1㎜大の小石粒を含み焼き締まる、色は淡橙色　側面の面取り幅が広い	Ⅱ区3面 土壙5
6	女瓦	厚2.0、残幅8.5、残長14.0			胎土は1㎜大の砂粒を多く含み、割れ口はザックリし、色は灰白色　側面端は丸く仕上げる　叩き目は斜め格子	Ⅱ区3面 土壙5
7	かわらけ	(8.2)	4.6	(2.1)	轆轤成形　胎土は精良で雲母・白針を含む 色は橙色	Ⅱ区3面 土壙6
8	かわらけ	12.8	7.4	3.4	轆轤成形　胎土は精良で雲母・白針を含む 色は橙色	Ⅱ区3面 ピット

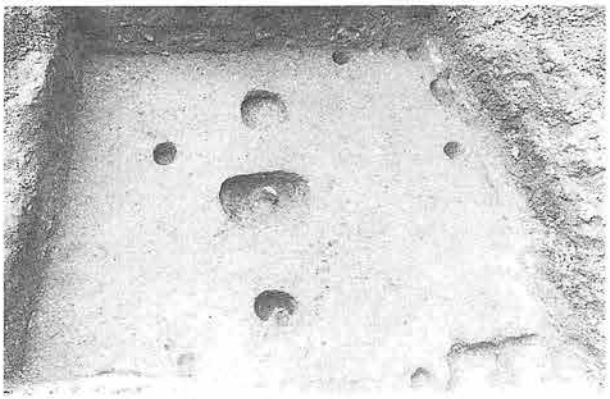
No.	器種・種別	口径	底径	器高	成形・特徴	出土地点・層位
9	男瓦	残長8.8、玉縁長2.7			胎土は5㎜大の小石粒を含み割れ口はザックリ、色は灰白色　表面は明黄褐色	Ⅰ区2～3面 トレンチ1
10	女瓦	厚2.1、残幅8.2、残長8.6			胎土は精良で1㎜大の砂粒、色は灰白色 叩き目は正格子	Ⅰ区2～3面 トレンチ1
11	かわらけ	8.2	5.6	2.2	轆轤成形　胎土は精良で雲母・白針を含む 色は橙色	Ⅱ区2～3面 トレンチ2
12	男瓦	厚1.5、残長6.8			胎土は精良で1㎜大の砂粒を含む　色は灰色　表面は黒灰色	Ⅱ区2～3面 トレンチ2
13	男瓦	厚2.0、残長8.5			胎土は1㎜大の砂粒を多く含む　色は灰白色　表面は灰色	Ⅱ区2～3面 トレンチ2
14	女瓦	厚1.8、残幅6.3、残長5.2			胎土は5㎜大の砂粒を多く含む、割れ口はザックリし、色は灰白色表面は黒灰色	Ⅱ区2～3面 トレンチ2

調査地点付近　S62年度調査地点を望む

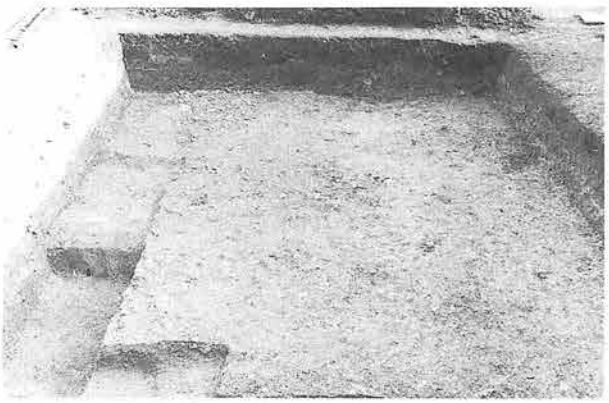
調査地点近景（西から）

Ⅰ区第１面全景（北から）

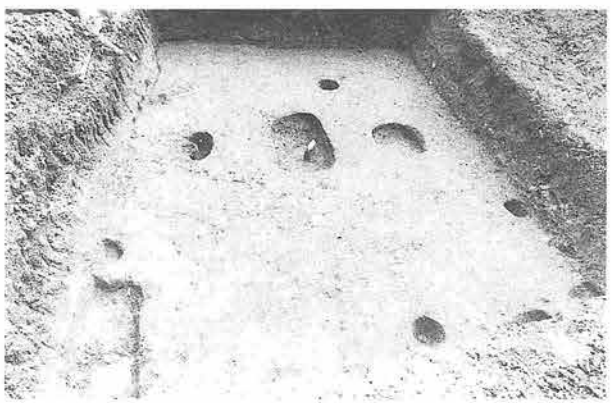
Ⅰ区第２面全景（北から）



Ⅱ区第２面全景（北から）



Ⅰ区第２面全景（西から）



Ⅱ区第２面全景（西から）

遺跡遠景と第１面・第２面

図版2

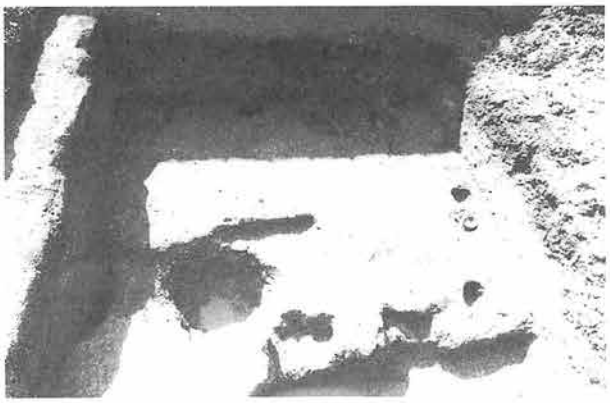
Ⅰ区第2面出土　鎌倉石と常滑甕破片（東から）

Ⅰ区第2面全景（南から）

Ⅰ区第3面　土壙2（北から）

Ⅰ区最終トレンチ（西から）

Ⅱ区第3面全景（北から）



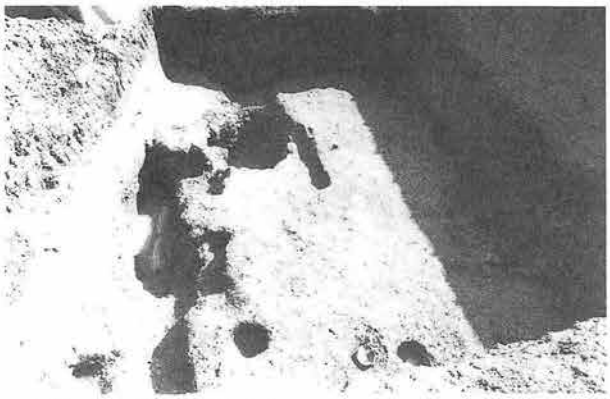
Ⅱ区第3面全景（西から）

Ⅰ区第3面全景（西から）

第2面・第3面

Ⅰ区　北壁土層断面（南から）

Ⅰ区第３面　瓦溜まり２と土壙１（南から）



Ⅱ区第３面全景（西から）

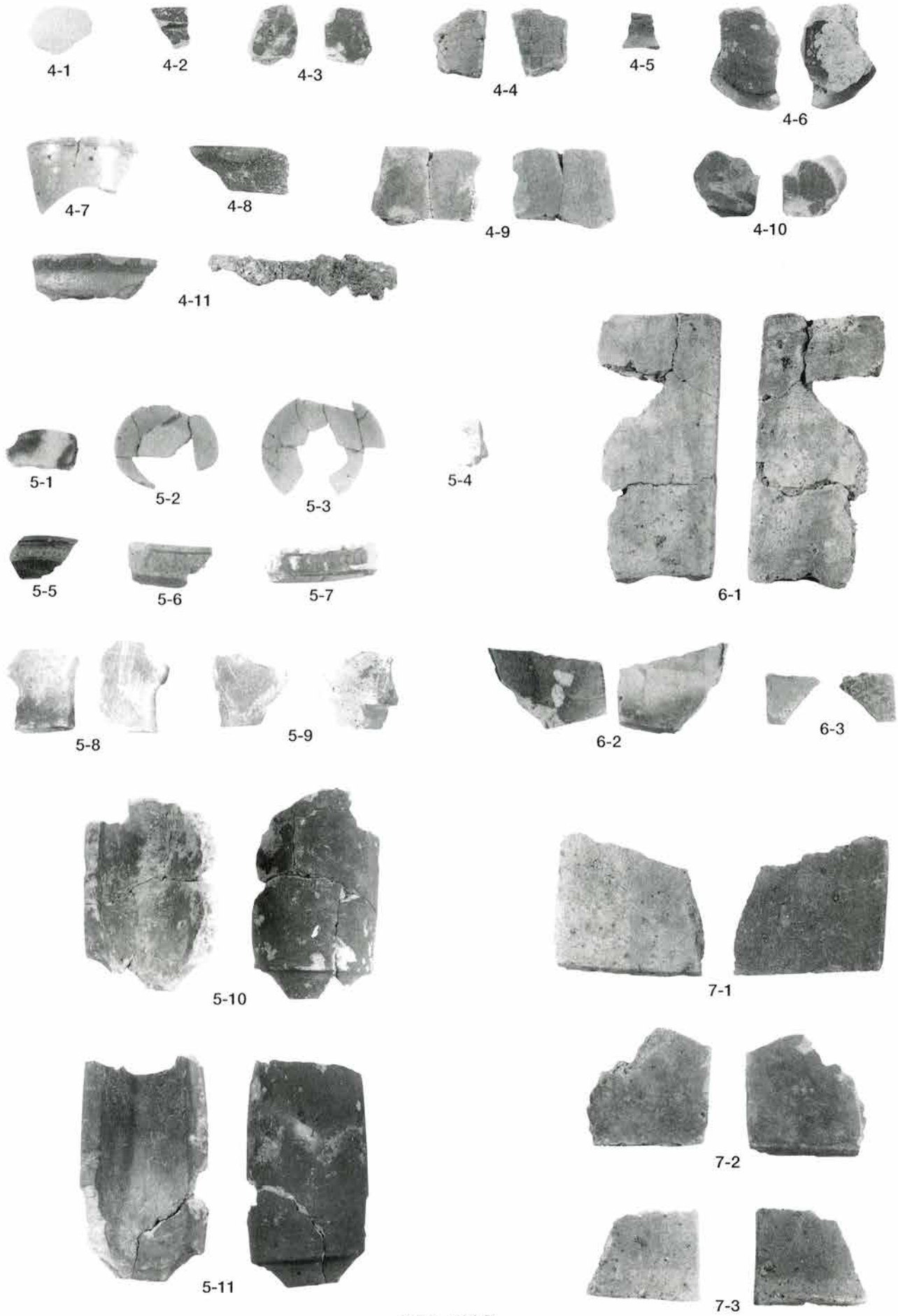
Ⅰ区第３面　瓦溜まり１（南から）

Ⅱ区第３面全景（西から）

Ⅰ区第３面　瓦溜まり１（南から）

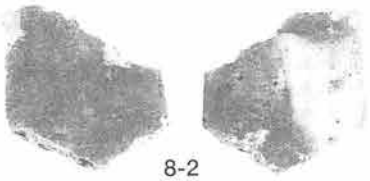
第３面と瓦出土状況

図版4

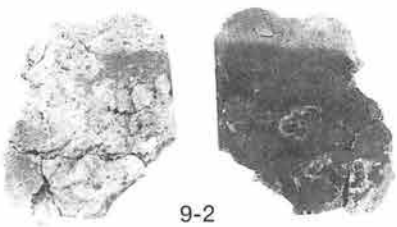

4-1
4-2
4-3
4-4
4-5
4-6
4-7
4-8
4-9
4-10
4-11
5-1
5-2
5-3
5-4
5-5
5-6
5-7
6-1
5-8
5-9
6-2
6-3
5-10
7-1
7-2
5-11
7-3

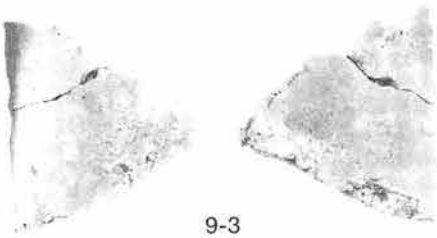
出土した遺物

8-1


8-2

9-1


9-2


9-3

10-1

10-2

10-3

10-4

10-5

11-1

11-2

11-3

11-4

11-5

11-6

11-7

11-8

11-9

11-10

11-11

11-12

11-13

11-14

出土した遺物

台山遺跡（No.29）

だいやま いせき

鎌倉市山ノ内字宮下小路819番１外地点

例　　言

1　本報は、台山遺跡（№29）に所在する鎌倉市山ノ内字宮下小路819番１外地点における個人専用住宅（擁壁及び車庫）の建設に伴う緊急調査報告書である。

2　発掘調査は平成14年４月１日から同年４月19日にかけて実施された。

3　調査体制は以下の通りである。
調査担当者　　原　廣志
調　査　員　　伊丹まどか・松原康子・須佐仁和・早坂伸市
調査作業員　　山崎一男・清水光一・安斎三男

4　本報の執筆、編集は調査担当者の指導の下に伊丹が行なった。

5　本報掲載の写真は遺構を原が、遺物を伊丹が撮影した。測量軸の設定は須佐・早坂が行なった。

6　本報の凡例は以下の通りである。
・図版縮尺　　全側図：１／80　　個別遺構図：１／60　　遺物：１／３
・遺構図版　　遺構図に示したレベル数値は海抜標高の数値を表す。
・本文中で報告している各遺物の法量の単位はcm。（　）で示した数値は復元実測の数値。

7　出土遺物のうち、古代の遺物は菊川英政氏（鎌倉考古学研究所）にご教授を賜った。

8　発掘調査および出土品整理にあたっては、以下の諸氏・機関にご教授・ご協力を賜った。
馬淵和雄・石元道子・鎌倉考古学研究所・（社）鎌倉市シルバー人材センター（順不同・敬称略）

9　発掘調査における出土遺物・図面などの調査資料は、一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……154
第２章　調査の概要 ……157
第３章　検出遺構と出土遺物 ……159
第４章　まとめ ……165

挿図目次

図１　遺跡地周辺図 ……156
図２　調査区設定図 ……157
図３　第１・２・３面遺構全測図・調査区壁堆積土層図 ……158
図４　第１面ピット列個別遺構図・遺構出土遺物 ……160
図５　第１面構成土出土遺物 ……162
図６　第２面ピット列個別遺構図・遺構出土遺物 ……162
図７　第２面構成土出土遺物 ……163
図８　第３面遺構出土遺物 ……163
図９　表土出土遺物 ……164

図版目次

図版１　調査地全景（第１面～第３面） ……166
図版２　出土遺物 ……167

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡地は、ＪＲ横須賀線北鎌倉駅の北西約500mの鎌倉市山ノ内819番１・２地点に所在する。鎌倉市域は発達した丘陵地形によって、滑川水系の旧鎌倉地域、神戸川水系の津・腰越地域、柏尾川水系の大船・梶原地域に分けられるが、本調査地点は柏尾川流域に属しその支流の小袋川によって形成された小袋谷戸に面した台山の北東斜面に位置する。地質的には新第三紀浦郷層を基盤とし、上部には関東ローム層が堆積している。調査地北側、谷戸中央を小袋谷川に平行して山ノ内道（現在の主要地方道横浜鎌倉線）が走っている。この山ノ内道は武蔵から鎌倉市域に入る主要な道であり、谷戸奥には鎌倉七口の内、鶴岡八幡宮上方に通じる巨福呂坂・武蔵大路及び今小路に通ずる亀谷坂が配される。調査地の北東には尾根の両側を切り落とし、塁壁状を呈する個所があり防塁であったと推され、調査地南に位置する光照寺辺は弘安５年（1282）に鎌倉に入ろうとした一遍が、北条時宗の命により制止され、野宿をして布教活動を行なったとされる地である。中世前期において、調査地を含む山ノ内は鎌倉の外縁であるとともに北の境界域として重要な性格を持っていた地であったと考えられる。また、建保元年（1213）に北条義時の所領となり、幕府滅亡に至まで北条氏の私領であった事も山ノ内が鎌倉の防衛上の需要な拠点であった事を物語っている。中世後期には山ノ内上杉の居館が所在した。

又、山ノ内には多くの寺院が建立されている。現存する寺としては、建長寺・長寿寺・浄智寺・東慶寺・円覚寺・光照寺があるが、現在は廃寺になってしまった寺には心平寺・保寧寺・安国寺・徳泉寺・正法寺・禅興寺・最明寺・国恩寺・正観寺・長勝寺・十王堂・東渓院がある。

本遺跡地の南に近接する光照寺・東渓院について簡単に述べる。光照寺は、時宗。開山は一向、開基不祥。本尊阿弥陀如来像は正長二年（1429）以前の造立といわれる。もと清浄光寺末。境内に正中二年（1325）銘の板碑がある。現在は本堂・庫裏・日限地蔵堂・山門等がある。かっては明和七年（1770）当寺二十五世洞雲院弥阿了岳代に造られた小鐘があった。東渓院は延宝八年（1680）、豊後国大野郡原城主中川久清が娘のためにたてた位牌堂だったが、明治五年に廃絶。かっての東渓院の本尊・山門は光照寺に移されている。

台山遺跡ではこれまでに11件の発掘調査が実施され、縄文から中世・近世初期に至までの遺構・遺物が発見されている。

地点２は中世以降と考えられる溝２条が検出されている。地点３は中世の遺構とともに古墳時代から平安時代・中近世の遺物が出土している。地点４は弥生時代後期の竪穴住居址１軒と時期不明の竪穴住居址１軒が検出されている。地点５は弥生後期の竪穴住居址１軒と時期不明の竪穴住居址５軒が検出された。地点６では弥生後期の遺構が発見されている。地点７は東京大学文化人類学教室が学術調査として調査した。弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴住居址を１軒ずつ検出している。地点８は弥生時代後期の竪穴住居址４軒と古墳時代前期の竪穴住居址１軒、中期土坑、後期竪穴住居址２軒、掘立柱建物址１棟。奈良時代竪穴住居址１軒が検出され、遺物は縄文時代から中世期に至までの遺物が確認されている。地点９は古墳時代のピット２穴を検出し、弥生時代から中世期にいたる遺物を確認している。地点10～12（付近の字名を加えて「台山藤源治遺跡」としている）は、北鎌倉女子学園の校舎建設に伴い、三次にわたる調査が行なわれた。地山はハードロームであるが、中世期の削平によってそれ以前の時期の遺構はかなり削られていた。地点10は第１次調査である。中世期の造成によって、大きく削平を受けていたが、縄文時代の土坑（陥し穴）、弥生時代の竪穴住居址18軒（中期２軒・後期11軒・時期不明５軒）、古墳時代の竪穴住居址13軒（前期４軒・中期１軒・後期４軒・時期不明４軒）、土坑、ピット。平

安時代の竪穴住居址５軒、溝１条、土坑、ピット。中世では道路状遺構と、14～16世紀に比定される遺物が発見されている。第１次調査では中世以前、弥生時代中期後半に出現した集落が奈良時代の空白期を挟み平安時代まで存続する事を確認した。中世以降は遺物の出土量は僅かとなり衰退していく。地点11は第２次調査である。調査面積が狭かった事や、後世に削平を受けていたために遺存状態は良好ではなかった。縄文時代では早期～前期と考えられる陥し穴が２基、弥生時代後期の竪穴住居址１軒、古代の竪穴住居址１軒（８世紀後葉～９世紀）が検出された。中世では、遺構の検出は出来なかったが、14～16世紀に比定される遺物が出土している。遺物は縄文時代から江戸時代後半にいたるまでの遺物を確認している。地点12は第３次調査である。第１次調査の北東に近接する。上下２段の平坦面からなり、下段の段築は中世期の造成である。弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居址１軒、古墳時代中期後半の竪穴住居址２軒、後期の竪穴住居址２軒、平安時代前期の竪穴住居址１軒、時期不明の竪穴住居址１軒が検出された。中世では、切岸を伴う段築・柵列・ピットを検出し、14～15世紀代に比定される遺物が出土している。

発掘調査の成果から、小袋谷戸の東側丘陵上、及び丘陵斜面に縄文時代から、古代にかけての集落の形成されていった状況が明らかになっているが、中世以降の谷戸内の様相は捉えられていない。建長寺・円覚寺・東慶寺といった寺社内の発掘調査以外では、山ノ内道沿いの調査例は少なく、報告もなされていないため、具体的な状況は明らかになっていない。

参考文献

『鎌倉市史』考古編　赤星直忠1953年　吉川弘文館
『鎌倉市史』社寺編　貫達人他1953年　吉川弘文館
『鎌倉事典』白井永二編1976年　東京堂出版
『鎌倉廃寺事典』貫達人・川副武胤1980年　有隣堂
『日本歴史地名大系』第14巻「神奈川県の地名」鈴木棠三・鈴木良一監修　1984年　平凡社
『鎌倉市文化財総合目録』　地質・動物・植物編1986年
「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書１』斎木秀雄他昭和60年　鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４』玉林美男他昭和63年　鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』大上周三平成４年　鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13第１分冊』野本賢二平成９年　鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」若松美智子他平成10年　台山遺跡発掘調査団
「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15第２分冊』若松美智子他平成11年　鎌倉市教育委員会
「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17第２分冊』継実平成13年　鎌倉市教育委員会
「山ノ内清明井戸」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ1983年鎌倉市教育委員会
『としよりのはなし』1971年　鎌倉市教育委員会

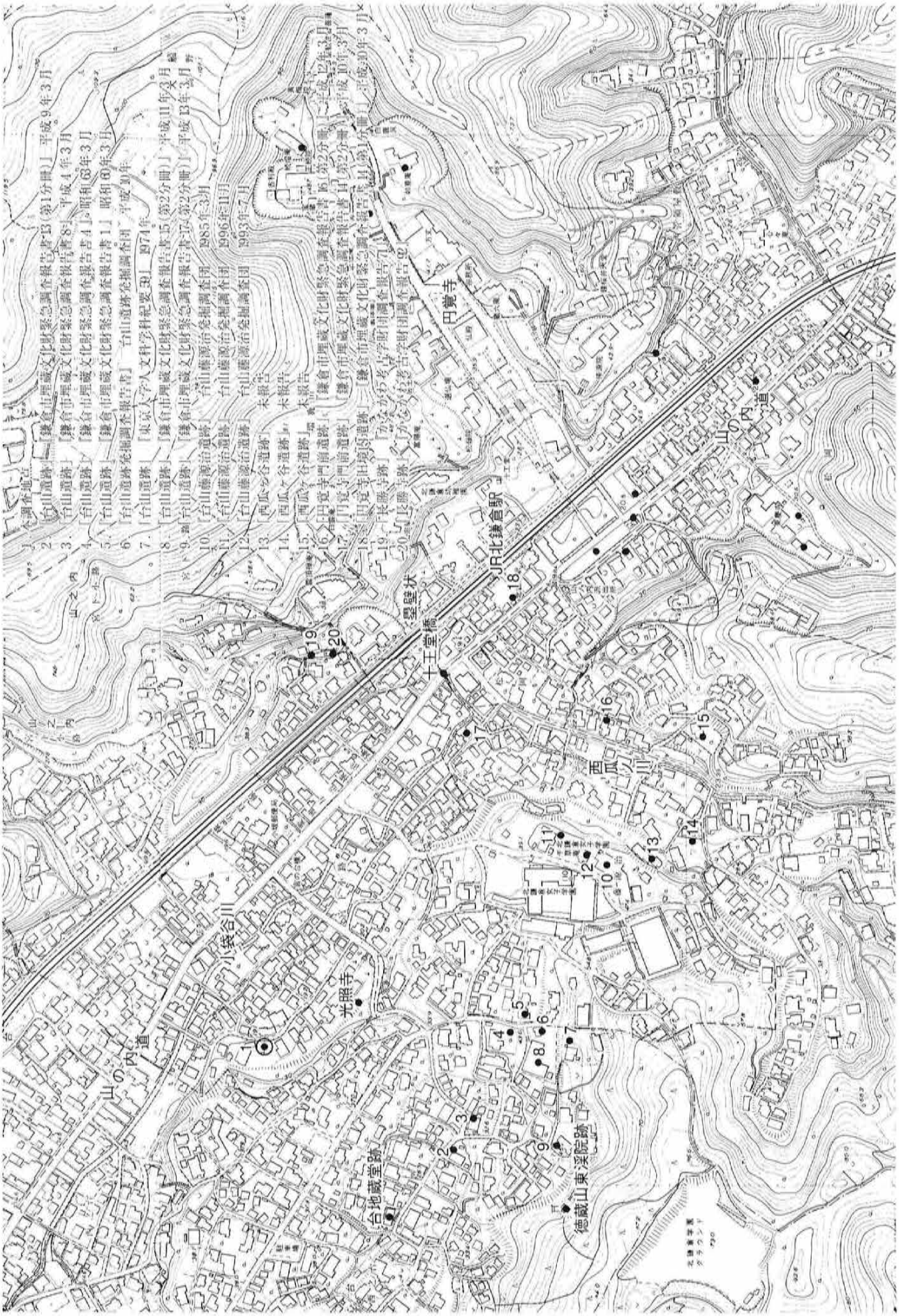

1. 台山遺跡「台山遺跡緊急調査報告書13（第1分冊）」平成9年3月
2. 台山遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8」平成4年3月
3. 台山遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4」昭和63年3月
4. 台山遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1」昭和60年3月
5. 台山遺跡「台山道跡発掘調査報告」台山道跡発掘調査団「平成10年」
6. 台山遺跡「東京大学人文科学科紀要39」1974年
7. 台山遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15（第2分冊）」平成11年3月
8. 台山遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17（第2分冊）」平成13年3月
9. 台山遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」
10. 台山遺跡「台山遺跡発掘調査団」1985年3月
11. 台山遺跡「台山遺跡発掘調査団」1996年11月
12. 台山遺跡「台山遺跡発掘調査団」1993年7月
13. 西瓜ヶ谷遺跡「未報告」
14. 西瓜ヶ谷遺跡「未報告」
15. 「西瓜ヶ谷遺跡」
16. 円覚寺門前遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15（第2分冊）」平成12年3月
17. 円覚寺門前遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第2分冊）」平成10年3月
18. 円覚寺田端遺跡「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第1分冊）」平成10年3月
19. 「長勝寺跡」「かながわ考古学財団調査報告92」
20. 「長勝寺跡」「かながわ考古学財団調査報告92」
山ノ内
JR北鎌倉駅
十王堂橋
巨福呂坂
円覚寺
山ノ内道
西瓜ヶ谷
小袋谷川
光照寺
台地蔵堂跡
徳蔵山東渓院跡

図1　遺跡地周辺図

第２章　調査の概要

１　調査の経過

本調査は個人専用住宅建設にあたり、擁壁及び車庫が建設される部分について発掘調査を実施した。調査地は西に丘陵を背負って現在の住居が建設されている。住居の東側には一段下がって細い小道が走っている。住居と道路の標高差は約250cmであった。事前の確認調査の成果から、地表下約240cmに至るまでは現代の埋土、および耕作土であることを確認していたため施工業者によって、重機による表土掘削を行なった。その後、手堀りで調査を進めた。調査地内で排土を処理する都合から調査地の約2/3を調査区とし、残り1/3を排土置場とした。調査地は湧水量が多いため、土砂の流失を危惧して四方を犬走り状に残し、長軸約750cm、短軸約260cmに調査区を設定した。調査区内には、側溝・水抜き壙を設け、調査区内の冠水を防いだ。現代埋土を除去した調査開始前の地表レベルは19,0mであり、調査地前の東側を走る道路とほぼ同レベルである。調査期間は平成14年４月１日から同年４月19日。調査対象面積は12.00㎡である。

２　測量軸の設定（図２）

検出遺構の記録は、鎌倉市道路管理課が設置した３級基準点・４級基準点を基点にして設定した。４級基準点＜K143＞と＜K144＞を結ぶ延長線上に任意の点Ｐ１を設定し、調査区の東西方向に、ほぼ平行になるように任意の点Ｐ２を設定した。Ｐ１からＰ２方向に１mの点ａを起点にＰ１・Ｐ２を結ぶラインに直行するように軸線を延ばし、軸線の延長上に点Ｐ３・Ｐ４を設定し測量の基本軸とした。測量点と鎌倉市４級基準点との関係は図２に示した通りである。またそれぞれの国土座標値についても図２を参照して頂きたい。挿図上の方位はすべて真北を示している。

レベル原点は鎌倉市３級基準点43303（標高35.325m）を調査区内に移動した。従って、文章中および挿図のレベル数値はすべて海抜高で示している。

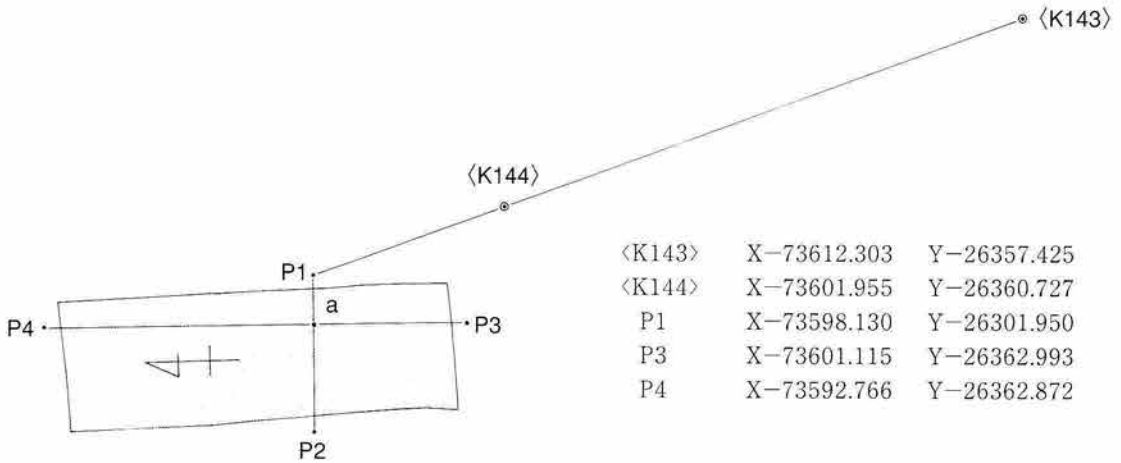
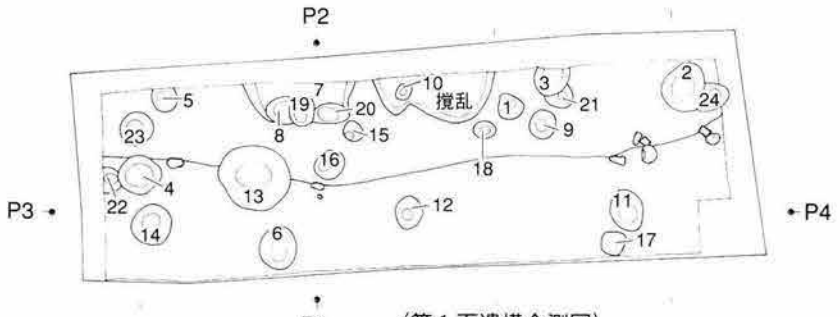
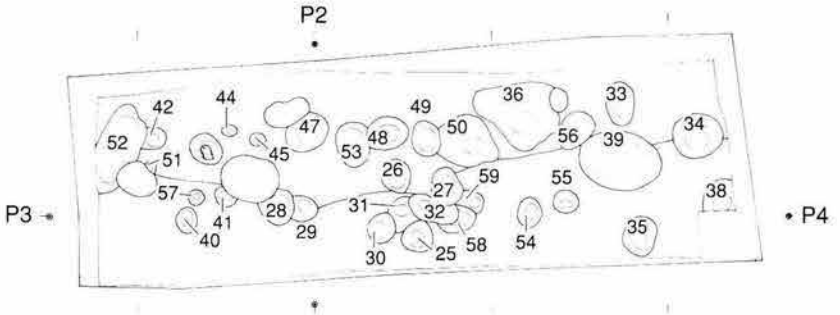


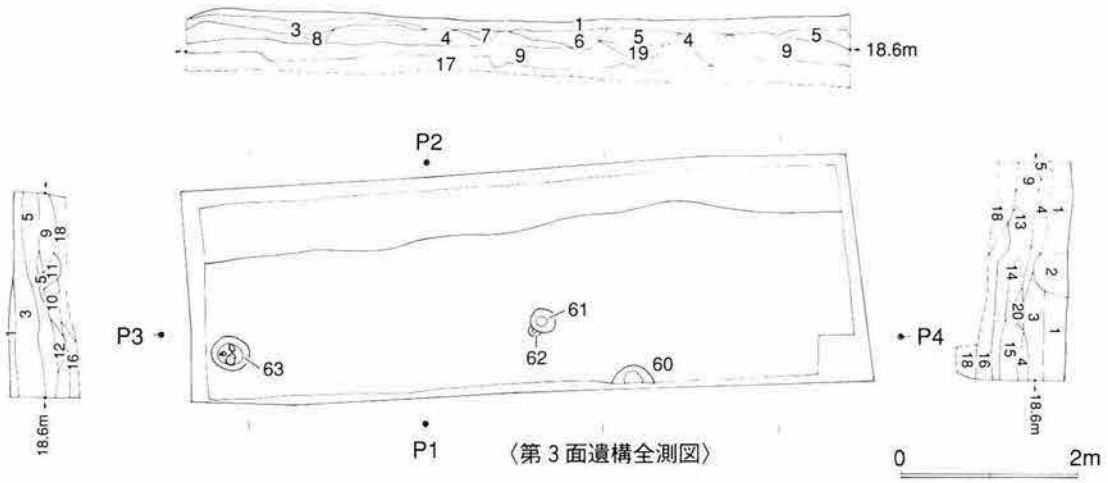
図２調査区設定図



〈第１面遺構全測図〉



〈第２面遺構全測図〉



〈第３面遺構全測図〉

1. 褐色土　粘性あり。炭化物・軽石含む。中世遺物包含層。
2. 褐色土　炭化物･土丹含む。遺構含土。
3. 褐色土　土丹地業面
4. 褐色弱粘質土　炭化物･小土丹･軽石を含む。硬くしまる。
5. 褐色弱粘質土　褐鉄を含む。硬くしまった含土。
6. 褐色弱粘質土　しまりない。遺構含土。
7. 褐色弱粘質土　しまりない。遺構含土。
8. 褐色弱粘質土　しまりない。遺構含土。
9. 明褐色粘質土　硬くしまる。
10. 明褐色粘質土　砂質土混入。しまり弱い。
11. 暗褐色弱粘質土　土丹粒･砂質土を含む。
12. 明褐色粘土　しまりない。遺構含土。
13. 明褐色弱粘質土　褐鉄･炭化物･土丹粒を含む。
14. 暗褐色弱粘質土　炭化物少量含む。しまりない。
15. 褐色弱粘質土　砂質土･玉砂･炭化物･褐鉄を含む。
16. 暗褐色粘質土　有機質土混入。
17. 暗褐色弱粘質土　砂質土･土丹粒を含む。ややしまりあり。
18. 黄褐色土　褐鉄が全体に含まれ、硬くしまる。
19. 褐色弱粘質土　砂質土を含む。遺構含土。
20. 暗褐色弱粘質土　砂質土･炭化物を含む。

図３　第１・２・３面遺構全測図・調査区壁堆積土層図

第３章　検出遺構と出土遺物

調査区は、現在建物の建っている敷地東側に一段下がった調査地前の道路とほぼ同レベルである。本調査と並行して行なわれた敷地内の庭園造営作業中に、現地表レベルから約0.5m下で、岩盤が検出されている。狭小な面積での調査ではあったが、３面にわたる遺構面を検出した。

本調査で発見した遺構の遺構番号は、遺構発見時のプランに対して付してあり、必ずしも番号の新旧が遺構の新旧を表すものではない。以下、発見した順に遺構・遺物の説明を加える。

１　第１面の遺構と出土遺物（図３・４）

第１面は、重機によって現代埋土・耕作土を除去した後、海抜約18.80mで検出した。発見した遺構は土坑２基・ピット22穴である。第１面で検出した遺構は含土を観察すると２時期に分けられる。第１面上層の遺構と考えられる遺構は含土内に炭化物を多く含む。また、第１面の遺構含土には褐鉄が多く含まれる。しかし、同一面上で検出し、出土遺物が少ないために時期差が不明なため、２時期に分けて遺構を提示していない。

第１面の構成土は炭化物を含む褐色弱粘質土。図３に示した全測図で、点線で示したラインから西側は、調査区上面が褐鉄を含んで硬化していた。点線の東側は、緩やかな傾斜を示していた。このラインに沿って、不整形な砂質凝灰岩を数個検出しており土留めであった可能性も考えられる。また、ピット列をこのラインに沿って検出している。実測遺物が出土した遺構と、ピット列のみ個別に報告した。

出土遺物は実測できた遺物の他に、破片で青磁華瓶１点・青磁蓮弁文碗３点・白磁水滴１点・白磁皿３点・褐釉壷１点・瀬戸四耳壷１点・瀬戸碗１点・瀬戸折縁皿２点・瀬戸縁釉小皿１点・瀬戸褐釉碗１点・瀬戸白磁碗１点・瀬戸擂鉢１点・瀬戸卸皿２点・常滑甕20点・ロクロ成型かわらけ（大）８点・ロクロ成型かわらけ（小）131点・手焙り１点・用途不明鉄製品１点・砥石１点・チャート１点・土師器甕17点・土師器高杯１点・須恵器器形不明３点が出土している。

遺構10（図３）

ピットである。平面で幅17cm×18cm、深さ７cmを測る。含土は褐色弱粘質土。砂質土、褐鉄を含む。第１面上層の遺構である。

出土遺物（図４）

１は弥生壷、胴部片。器壁が厚く、やや大振りな器形になると思われる。色調は淡橙色を呈し、砂粒を含む精緻な胎土。外面横方向の櫛描き。竪位の線刻が残る。内面ハケメ。

遺構23（図３）

ピットである。平面で幅37cm×36cm、深さ33cmを測る。含土は暗褐色弱粘質土。褐鉄、微量の炭化物を含む。第１面上層の遺構である。

出土遺物（図４）

２は青磁無文碗。内面、口縁部口づくり以下は施釉されていない。外面口縁部下1.5cmで、段が整形される。胎土は灰色を呈し堅緻。

ピット列<遺構２・遺構16・遺構18>（図４）

ピット間の芯芯距離は245cm・292cmを測り規則性は感じられないが、調査区西側、硬化した面上に点線で示したラインに沿って検出したピットであるため、列として提示した。それぞれのピットは同様の含土を示す。暗褐色弱粘質土。褐鉄・砂質土・微量の炭化物を含む。第１面上層の遺構である。出土遺物はない。

ピット列<遺構11・遺構12・遺構14>（図４）

ピット間の芯芯距離は230cm・185cmを測る。上記のピット列同様に規則性は感じられないが、調査区東側、点線で示したラインに沿った緩やかな傾斜面で検出したピット列であるため、列として提示した。それぞれの遺構は同様の含土を示す。茶褐色弱粘質土。砂質土・微量の炭化物を含む。第１面の遺構である。出土遺物はない。

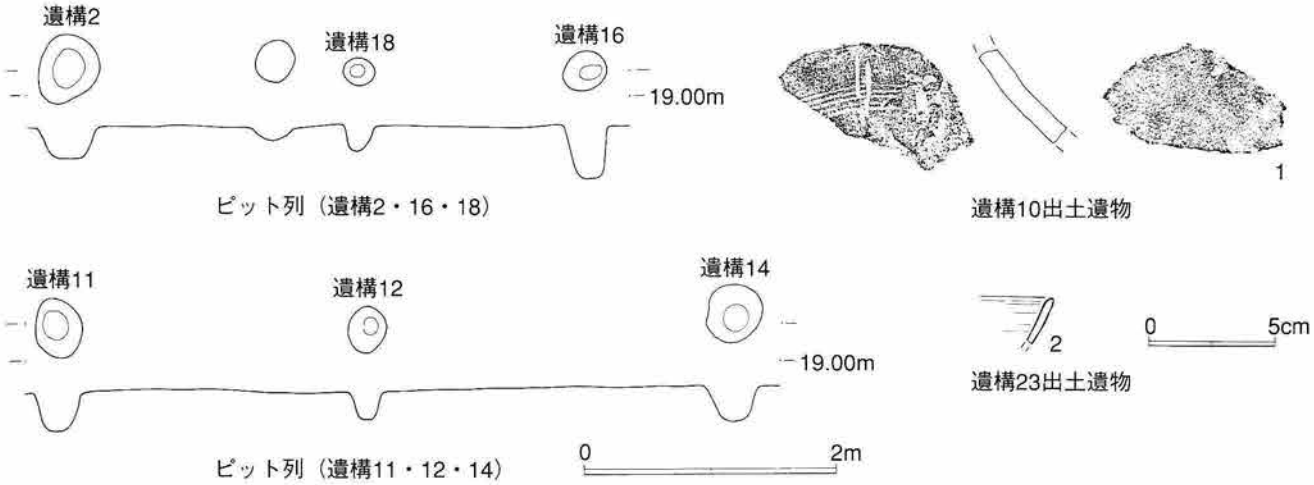


図４第１面ピット列個別遺構図・遺構出土遺物

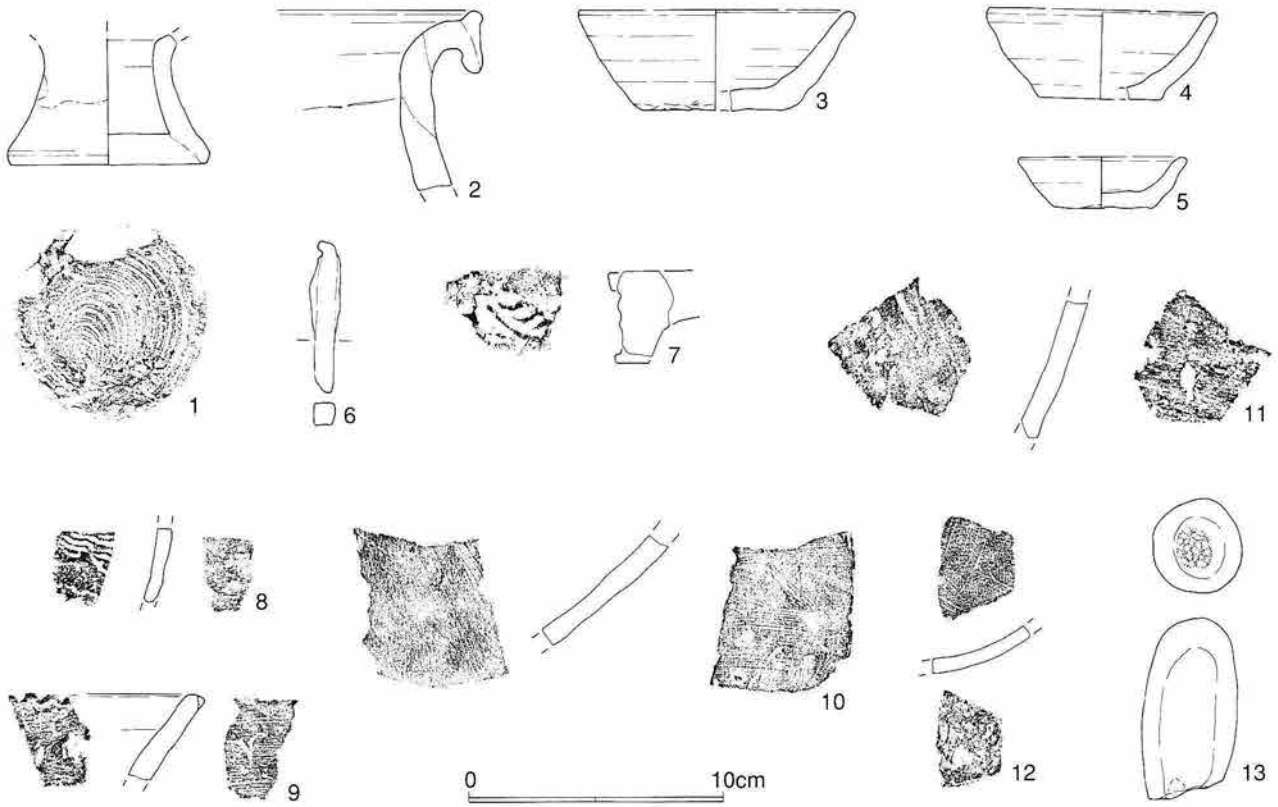


図５　第１面構成土出土遺物

第１面構成土出土遺物（図５）

第１面構成土は褐色粘質土。炭化物・小土丹・軽石・褐鉄が含まれ、硬く締まる。以下は第１面遺構検出後、第２面に至までに出土した遺物である。

１は瀬戸華瓶。中期Ⅲ。底部回転糸切り。底径7.8cm。２は常滑甕口縁部片。胎土、小石粒が混じり粘性低い。３～５はロクロ成型かわらけ。３は底部回転糸きり、スノコ痕あり。内底ナデあり。胎土橙色を呈し、小石粒が混じる。口径（10.9）cm・底径（6.6）cm・器高（3.9）cm。４は底部回転糸きり、スノコ痕あり。内底ナデあり。胎土橙色を呈し貝状骨針、雲母を含む。口径（9.0）cm・底径（4.8）cm・器高（3.5）cm。５は底部回転糸切り、スノコ痕あり。内底ナデあり。胎土橙色を呈し、貝状骨針、雲母を含む。口径6.4cm・底径4.0cm・器高2.0cm。６は鉄製品釘。長さ（5.4）cm・幅（0.8）cm・厚さ（0.8）cm。７は宇瓦。白色粒の混入しない精緻な胎土。瓦頭、内区の文様は宝相華文か？８は弥生壷。傾き不明。９は弥生甕。内外面ナデ。口唇部に刻みが入る。10は土師器甕。内外面ハケメ。胎土淡褐色を呈し、雲母含む。古墳前期。11は土師器甕。外面・内面ともにヘラ削り。古墳後期。12は土師器杯、底部。外面ヘラ削り。赤彩の可能性あり。13は敲石。片端面敲き痕。7.2cm×3.7cm×3.7cm。

２　第２面の遺構と出土遺物（図３・６）

第２面は海抜約18、８ｍで検出した。発見した遺構は土坑２基・ピット30穴である。遺構は狭い範囲ながら、密に切りあって検出された。第２面上面は、第１面上面よりも硬化した面であった。また、第１面同様に点線で示したラインから東側に緩やかな傾斜が始まる。第１面同様に分けて報告はしていないが、第２面で検出した遺構も凡そ２時期に分けられる。砂質土を多く含み、褐鉄を含む含土を持つ遺構がやや新しく、粘性の強い炭化物を含む含土を持つ遺構がやや古くなるようである。第２面の構成土は明褐色弱粘質土。粘性は弱く、砂質土・土丹粒・微量の褐鉄・炭化物を含む。

出土遺物は実測した遺物の他に、破片で青磁皿１点・白磁口兀皿１点・白磁碗３点・瀬戸褐釉１点・瀬戸皿１点・瀬戸鉢３点・瀬戸擂鉢１点・常滑甕17点・常滑Ⅱ類鉢１点・手焙り２点・ロクロ成型かわらけ（大）23点・ロクロ成型かわらけ（小）64点・器厚の厚い、内外面に炭素吸着の黒彩の甕１点・長胴系の甕１点を含む土師器甕５点・外面赤彩の土師器杯１点・土師器高杯２点・土師器器形不明１点・弥生甕１点・馬遺体の歯１点。

遺構34（図３）

ピットである。平面で51cm×56cm、深さ30cmを測る。暗褐色弱粘質土。炭化物を含み、粘性の強い含土。

出土遺物（図６）

１はロクロ成型のかわらけ。底部回転糸切り・スノコ痕あり。内底横ナデの後、見込みにナデ赤褐色を呈し、貝状骨針・雲母・小石粒を含む。口径（7.2）cm・底径4.0cm・器高2.2cm。

２・３は銭。２は祥符通寳（北宋　初鋳1009年）。３は咸平元寳（北宋　初鋳998年）。

遺構36（図３）

不整形の土坑である。平面で長軸102cm、短軸87cm、深さ42cmを測る。暗褐色弱粘質土。多量の炭化物・褐鉄・砂質土を含む。

出土遺物（図６）

４はロクロ成形かわらけ。底部回転糸切り・スノコ痕あり。内底ナデ有り。胎土橙色を呈し貝状骨針を含む。口径（7.4）cm・底径（3.6）cm・器高（2.5）cm。

遺構38（図３）

楕円形を呈するピットである。50cm×31cm、深さ19cmを測る。暗褐色弱粘質土。砂質土・微量の炭化物を含む。

出土遺物（図６）

５は土師器甕口縁部片。外面縦位のハケナデが残る。内面横位のハケナデ。

遺構50（図３）

円形を呈する土坑である。平面で57cm×68cm、深さ26cmを測る。暗褐色弱粘質土。炭化物・砂質土を含む。

出土遺物（図６）

６はロクロ成形かわらけ。底部回転糸切り・スノコ痕あり。内底ナデ不明。口唇部、内外面に油煤痕あり。胎土褐色を呈する。口径（9.8）cm・底径（7.0）cm・器高（2.5）cm。

ピット列<遺構43・遺構48・遺構56>（図６）

調査区東側点線で示したラインに沿って検出した。遺構43には砂質凝灰岩の礎石が遺存していた。それぞれの遺構含土は暗褐色弱粘質土。砂質土・炭化物・褐鉄を含む。遺物は出土していない。

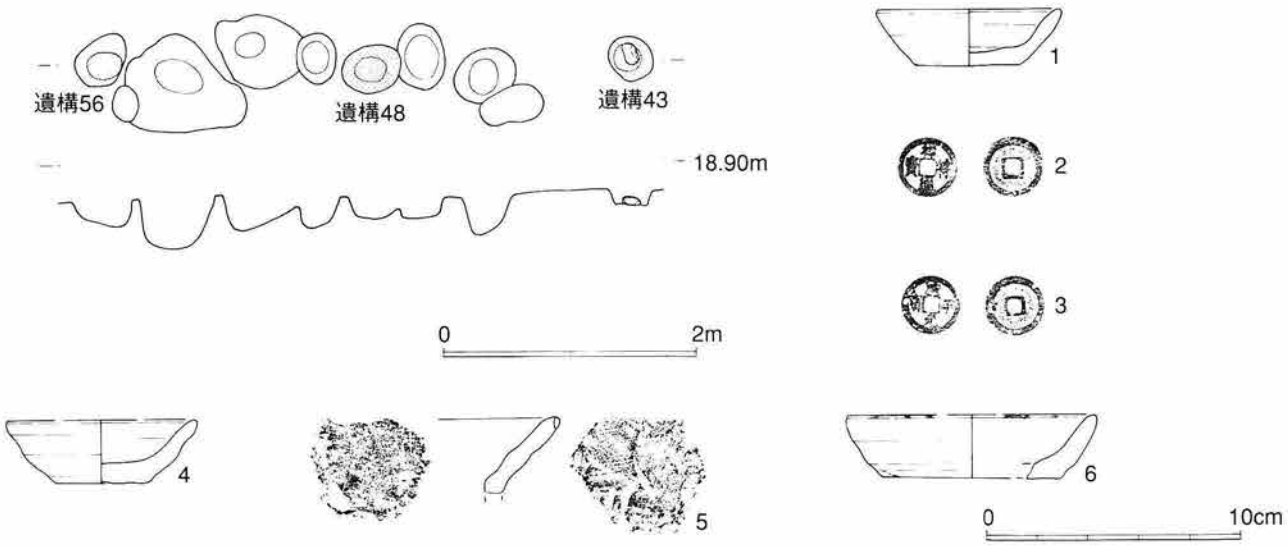


図６　第２面ピット列個別遺構図・出土遺物

第２面構成土出土遺物（図７）

１は青磁蓮弁文碗。外側面・内側面に線刻で蓮弁文。内面蓮華文の型押し。見込みに浅い沈線が巡る。底径（6.2）cm。胎土灰白色を呈する。２・３はロクロ成形かわらけ。２は底部回転糸切り。内底ナデあり。口唇部、内外面ともに油煤痕残る。胎土、黄褐色を呈し小石粒を含む。口径7.6cm・底径3.2cm・器高2.1cm。３は底部回転糸切り。内底ナデあり。胎土黄褐色を呈し雲母・小石粒を含む。口径(11.2)cm・底径（7.2）cm・器高（3.1）cm。４・５は石製品・鳴滝産系砥石。４は残存長（7.2）cm・幅2.4cm

・厚さ1.4cm。５は小口に切り出し痕残る。残存長（6.2）cm・幅（2.7）cm・厚さ（1.0）cm。６は土師器甕。傾き不明。７は土師器杯、底部。外面ヘラ削り。内面ナデ。古墳後期。８は弥生甕。弥生後期。９は弥生甕。外面竪位のハケメ。内面横位のハケメ。口唇部ヘラ状工具による刻みが入る。胎土褐色を呈し、密である。10は弥生甕。弥生後期。

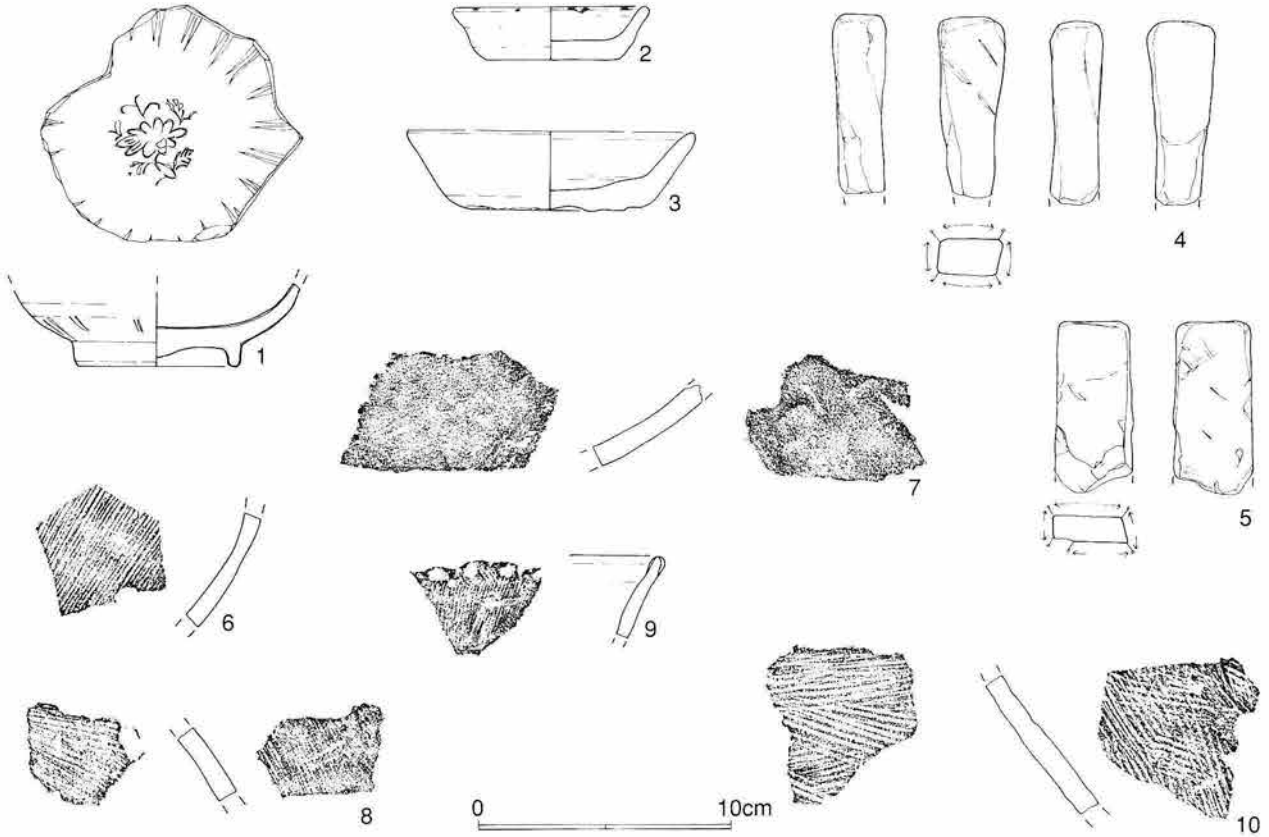


図７　第２面構成土出土遺物

３　第３面の遺構と出土遺物（図３・８）

第３面で検出した遺構はピット３穴である。第３面構成土は暗褐色粘質土。砂質土がわずかに混入する箇所もあるが、全体に粘性は高い。調査区西側の第３面構成土上層には微量ではあるが、小粒の砂質凝灰岩と軽石が平面的に堆積していた。点線で示したラインから東に向かって緩やかな傾斜を呈する点では、第１面からこのラインが踏襲されているが、若干東にずれる。

出土遺物は実測した遺物の他に、破片で青磁蓮弁文碗２点・常滑甕１点が出土している。第３面以下は、掘削進度の規制により掘り下げていないため、以下で提示した遺物以外の発見はなかった。調査区北でやや深く掘削した水抜き坑の土層堆積を観察すると、第３面は中世の地山層であると考えられる。

遺構63（図３）

円形を呈するピットである。ピット底面には常滑胴部片・安山岩・砂質凝灰岩片が遺存していた。平面で43cm×46cm、深さ16cmを測る。含土は暗褐色粘質土。土丹粒を含み粘性高い。

出土遺物（図８）

常滑Ⅱ類鉢、口縁部片。胎土は粘性弱く、小石粒混入。内面磨耗不明。

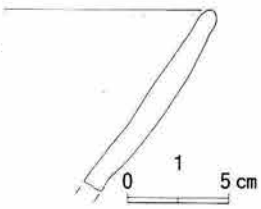


図８　第３面遺構出土遺物

表土出土遺物（図９）

重機による表土掘削時に出土した遺物である。

１は青磁蓮弁文碗。内底に不鮮明だが蓮弁文の型押し。外底、畳み付けまで施釉される。外側面、蓮弁文は線刻である。底径（5.0）cm。２は瀬戸入れ子。ロクロ成型。底部ヘラ整形。内底ナデなし。胎土は黄褐色を呈し、均質で精良。底径（4.4）cm。３はロクロ成型かわらけ。底部回転糸切り。内底ナデあり。外側面口唇部辺が一部剥離している。胎土黄褐色を呈し雲母・小石粒を含む。口径（9.0）cm・底径（5.6）cm・器高（2.6）cm。４・５は銭。４は紹聖元寳（北宋　初鋳1094年）。５は寛永通寳（初鋳1636年）。６は瀬戸擂鉢。条痕単位不明。底部回転糸切りの後、ヘラによる成型。内面火熱のためか剥離。底径（8.4）cm。７は石製品砥石。側面に切り出し痕残る。残存長（4.3）cm・幅（2.7）cm・厚さ（2.4）cm。８は石製品硯。陸部が一部遺存する。残存長（8.0）cm・残存幅（3.0）cm・厚さ（1.5）cm。９は鉄製品釘。残存長（3.0）cm・幅（0.4）cm・厚さ（0.4）cm。10は弥生甕か。胎土明褐色を呈し金雲母含む。傾き、器形不明。11は弥生甕。二段の沈線区画の中にＬＲ縄文を配す。弥生後期。

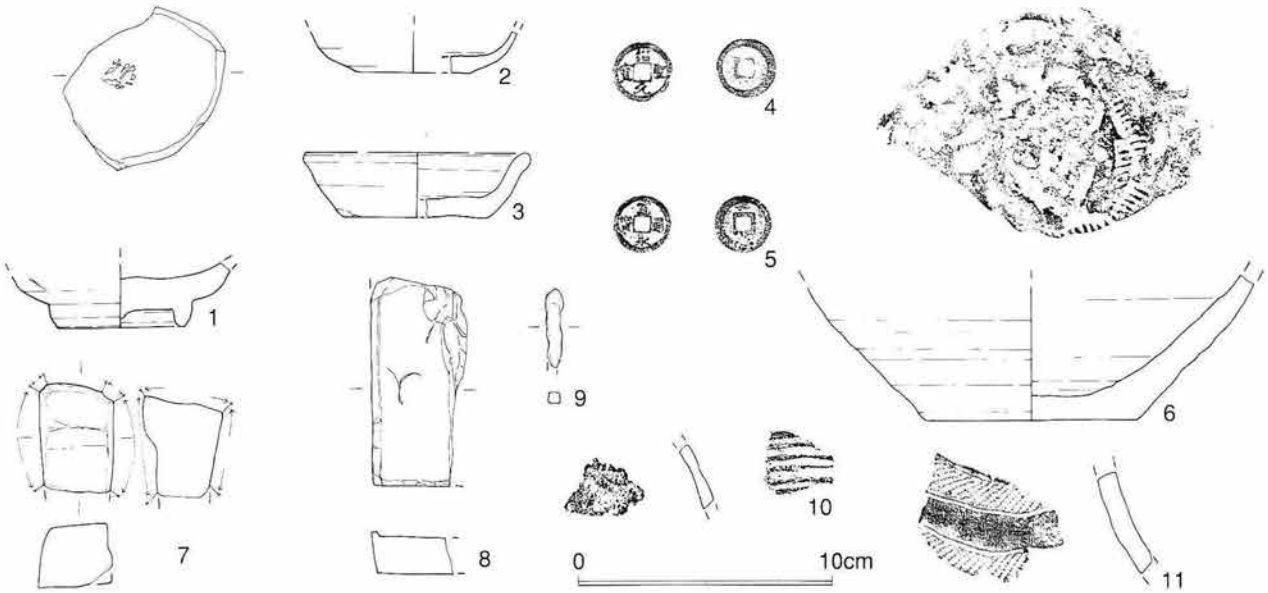


図９表土・撹乱出土遺物

第４章　まとめ

本遺跡地の所在する台山遺跡では、これまでに11地点（図１）の発掘調査が実施され、調査地南の丘陵の緩斜面では、弥生・古墳・中世の遺構と遺物が発見されている。又、調査地南西の「台山藤源治遺跡」(図１地点10～12）では縄文から中世にかけての遺構・遺物が発見され、特に弥生時代から平安時代にかけて台地上に集落が形成され、濃密に遺跡が分布することを確認している。本調査地は通称「台山」と呼ばれる丘陵の北東斜面に位置する。

今回の調査では、３面にわたる遺構面と、土坑・ピット・ピット列等の遺構を検出した。検出した遺構それぞれの関係および、建物等の建造物を狭小な面積の調査区内で推定することは難しく、遺跡の規模などを確認することは出来なかった。しかし、出土した遺物から15世紀中葉から15世紀後葉にかけて調査地点で生活が営まれていたと考えられる。また、これまでの発掘調査成果で明らかなように調査地南の丘陵上及び丘陵斜面に弥生時代から、平安時代にかけての集落が形成されていたことを裏付けると思われる、弥生時代前期から中世後期にかけての遺物が破片ではあるが出土している。

調査区の約2.5m上方の敷地には現在も建物が建っており、雛壇状に造成されている。敷地西は丘陵の斜面となる。時代的なものは不明であるが、斜面にはやぐら状の横穴と斜面岩盤面を掘りぬいた横穴式の井戸が残存していた。調査中に敷地内、庭園造成時に調査者が実見したところ、現在の敷地標高より約0.5m下で岩盤が露出し、造成痕を観察している。雛壇上の段幅は、調査区設定時に段の立ち上がりを確認できなかったことから、現在の幅よりも若干狭くなると考えられる。遺跡地から約100m南に現在も残る、調査地と同一の壇上に所在する「光照寺」の敷地内にはやぐらが数基遺存し、やぐら内には墓所を整理したときに、やぐら及び周辺に散在していた五輪塔が集められている。「光照寺」造営時には雛壇の造営が成されていたのではないかと考えられ、同一壇上の調査地は寺領の内であったのかもしれない。

調査地の北に走る山ノ内道と調査地の標高差は約６ｍある。前述したように調査地は雛壇状に形成され、壇上と壇下の標高差は約2.5mである。小道が壇下に沿って走っているが、この小道から北に約１ｍ下がって現在の住宅が建築され、調査地と同様に壇が形成される。現況では調査地を上段にして、山ノ内道まで概ね３段の壇が形成されていることを確認した。遺跡地の所在する小袋谷戸では中世以降の谷戸内の様相は、調査例も少ないために具体的な状況は明らかになっていないが、中世後期には、調査地辺は山ノ内道に沿って、雛壇状に造成した土地利用をしていたと考えられる。

参考文献

『日本歴史大系第14巻』　「神奈川県の地名」1984年　平凡社刊

『鎌倉廃寺事典』1980年　有隣堂

『鎌倉市史』「考古編」1953年　吉川弘文館

『鎌倉市史』「社寺編」1953年　吉川弘文館

図版1

▲調査開始前状況

▲第１面全景

▲第２面全景

▲第３面全景

調査地全景（第１面～第３面）

出土遺物

笹目遺跡（No.207）

笹目町330番11外地点

例　　言

1．本報は、笹目遺跡（№207）の所在する遺跡内の鎌倉市笹目町330番11外における個人専用住宅の新築に伴う緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、地盤の柱状改良部分となる調査面積43.50㎡を対象に平成14年4月1日から同年4月22日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査体制は以下のとおりである。

調査担当者　原　廣志

調　査　員　須佐直子・須佐仁和・早坂伸市・中川建二・久保田裕美

調査補助員　宇都洋平（鶴見大学）・原考史・橋本和之（以上国士舘大学）

協力機関名　㈱鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所

調査協力者　石井清司・多田徳蔵・藤枝正義・吉本脩三（鎌倉市高齢者事業団シルバーセンター）

4．本報の執筆は、第1章・第2章・第3章を久保田、第4章を原が分担執筆し、編集も行った。資料整理作業は執筆者の他、太田・須佐（仁）・早坂・中川があたった。

5．本報掲載の写真は、遺構を須佐（仁）・原・久保田が、遺物を須佐（仁）・久保田が撮影した。

6．発掘調査における出土遺物・図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本報の凡例は以下の通りである。

・挿図縮尺　　全測図　1／50
　　遺構個別　1／40
　　出土遺物　1／3

・遺構図版　　遺構のレベルは海抜標高の数値を示す。

・遺物図版　　－・－は釉薬の範囲を示し、黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤、また漆器椀・皿類では、文様を朱漆で表現した部分である。

8．現地調査及び資料整理を通じて、多くの方々や機関からご助言並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略・五十音順）。

大三輪龍彦・岡　陽一郎・小野正敏・河野眞知郎・小林康幸・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・玉林美男・継　実・手塚直樹・福田　誠・松方宣方・馬淵和雄

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……172
　１．遺跡の位置 ……172
　２．歴史的環境 ……172
第２章　調査の概要 ……176
　１．調査の経過 ……176
　２．測量軸の設定 ……176
　３．層序と生活面 ……177
第３章　検出遺構と出土遺物 ……179
　１．検出遺構と共伴遺物 ……179
　　ａ）中世第１面 ……179
　　ｂ）中世第２面 ……180
　　ｃ）中世第３面 ……183
　　ｄ）中世第４面 ……187
　２．面上及び包含層出土遺物 ……187
第４章　まとめ ……190

挿図・表目次

図１　調査地点周辺図……173
図２　グリット配置図……177
図３　土層堆積模式図……178
図４　第１面全測図……179
図５　第１面ピット……180
図６　第２面全測図……181
図７　第２面建物１……182
図８　第３面全測図……183
図９　第３面建物１……184
図10　出土遺物（１）……185
図11　出土遺物（２）……186
表１　出土遺物観察表……188

図　版　目　次

図版１　第１面全景（北から・東から）・第１面検出ピット ……191
図版２　第１面ピット２・第１面かわらけ出土状況・第１面金環出土状況 ……192
図版３　第２面全景（北から・東から）・第２面土廣１ ……193
図版４　第２面建物１柱穴（建物１－２～５） ……194
図版５　第３面全景（北から・東から） ……195
図版６　第３面建物１柱穴（建物１－１・２）・第３面土廣１・第３面土廣２ ……196
図版７　調査区北側崩落状況・調査区東壁セクション ……197
図版８　出土遺物 ……198

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

笹目遺跡は、鎌倉市街の南西寄り、市内中心部を東西に貫く長谷小路（現国道134号線）から北側に位置し、桔梗山から派生する尾根によって形成された南北に細長くのびる支谷に位置する。笹目ヶ谷（佐々目谷）と呼ばれるこの谷は比較的大きな支谷であり、『玉船和尚鎌倉記』では、鎌倉七谷の一つとして数えられている。谷戸内では、中世に行われたと思われる尾根裾の掘削、造成の痕跡が観察できる。

調査地点は、この笹目遺跡の遺跡包蔵地内、笹目ヶ谷の開口部中央に位置し、ＪＲ鎌倉駅からは南西に約800m、由比ガ浜の海岸線より北方約750mの距離にある。本調査地点の西隣には島津邸遺跡があり（図１－２）、佐々目ヶ谷奥の西側山腹には佐々目ヶ谷榎並邸内横穴、佐々目ヶ谷斉藤邸内横穴群（一部やぐらにも転用）が知られており、ほか周辺にもやぐら群と横穴群が広く分布している（註１）。

２．歴史的環境

本遺跡の南方約250mを走る長谷小路は、鎌倉の中央部を南北にはしる若宮大路の下馬から、長谷観音・大仏を経て藤沢方面に東西に抜けている。長谷小路の南側周辺（長谷小路周辺遺跡）は、由比ヶ浜の後背地に形成された砂丘帯の北際に立地し、古代・中世の遺構・遺物が多く検出・確認され、平安期には葬送の地であった様相が、中世期に入ると、葬送の地としての性格を引き継ぎつつも、道路で区画された敷地内に方形竪穴建築址が建ち並び、坩堝、とりべ、鋳型、鞴の羽口、加工途中の骨製品等の出土から鋳物師等の工人の存在などについて広く言及されている（註２）。

長谷小路の北側に位置する伝安達泰盛邸跡では、屋敷を区画すると思われる木組みの大溝や舶載・国産の大甕を埋置した遺構などの他、多様な遺物・遺構が発見されている（註３）。甘縄神明社付近の長谷小路の北側一帯は、安達盛長以降安達氏一族の屋敷があったとされ（註４）、さらに広く長谷小路の北側（道路沿いを除く）には安達氏を含め御家人の屋敷の存在していたものと思われる（註５）。

「笹目（佐々目）」という地名は、『吾妻鏡』や『金沢文庫古文書』中の鎌倉期の文書などに見られ、古くからの名称である。中世期では「佐々目」と記され、近世期では「佐々目」と「笹目」が併用され、現在の行政上の名称は「笹目」に統一されている。現在の谷戸内は住宅地が広がっているが、中世には遺身院・長楽寺などの寺院があったとされる（註６）。

遺身院の名は、『金沢文庫文書』に「佐々目遺身院」とみえている。遺身院は鶴岡八幡宮の別当寺で、仁和寺の頼助・益助・益性らが住した寺院であったという（註７）。また聖教類の奥書に名を記したものが多いことから学問所であったとも言われ（註８）、『随文私記』に永仁五年（1297）閏十月七日に聖教等を運び出して焼失したとある甘縄宿坊との関係も示唆される。

本調査地点の西隣では、島津邸遺跡の発掘調査が昭和63年に実施されている。礎石建物や溝などの遺構が確認され、遺身院との関連が示唆された（註９）。

長楽寺は『新編鎌倉志』(巻之五）佐佐目谷の項に「此谷に昔し寺有、長楽寺と号す。法然の弟子隆観住せしとなり」と見え、『鎌倉攬勝考』(巻之七）長楽寺跡の項では「佐々目谷にあり。浄土宗。法然上人の弟子隆観といふ僧住せし由。正元２年４月29日焼亡の事『東鏡』に見へ、此寺の門前より亀谷の人家に至るまで、悉く焼失とあり。其後何の年にか廃跡となれり。此寺もとは北条経時が為に建立せし寺

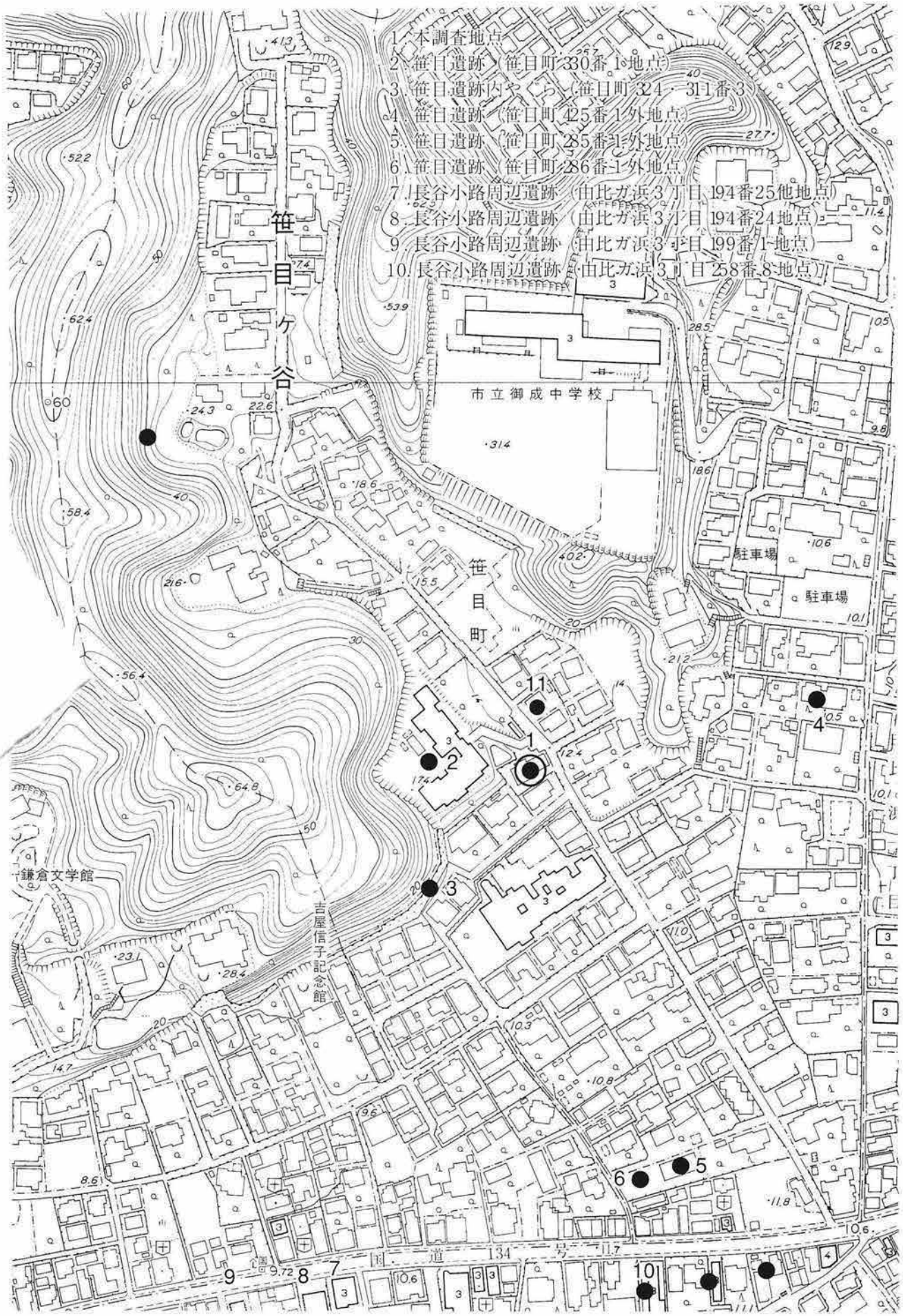

1. 本調査地点
2. 笹目遺跡（笹目町330番1地点）
3. 笹目遺跡内やぐら（笹目町324・311番3）
4. 笹目遺跡（笹目町425番1外地点）
5. 笹目遺跡（笹目町285番1外地点）
6. 笹目遺跡（笹目町286番1外地点）
7. 長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜3丁目194番25他地点）
8. 長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜3丁目194番24地点）
9. 長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜3丁目199番1地点）
10. 長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜3丁目258番8地点）
笹目ヶ谷
市立御成中学校
駐車場
駐車場
笹目町
鎌倉文学館
吉屋信子記念館
国道134号

図1　調査区地点周辺図

なり」と記される。以上の2点の近世地誌では長楽寺は佐々目谷にあったとされる。また享保3年（1718）の『諸嗣宗脈記』には「鎌倉住佐佐目谷有律師」とあり、これも「笹目ヶ谷」にあったことを示唆している（註10）。ただし、現在「長楽寺ヶ谷」と伝えられる場所は佐々目谷の一つ西側に位置する鎌倉文学館のある谷戸であり、現在では「長楽寺ヶ谷」所在を採用する意見が多い（註11）。長楽寺の名は中世期の史料では、「北条貞顕書状」(文暦2年（1235))(註12)・『日蓮聖人御遺文』・『日蓮聖人註画讃』に見え、また『吾妻鏡』文応元年（1260）4月29日条に「丑尅。鎌倉中大焼亡。自長楽寺前。至亀谷人屋」と記される。開創は法然の弟子隆観とされるが、さらにその弟子の智慶が京都長楽寺に学んだ後、鎌倉で長楽寺を開創したとも伝えられる（註13）。存続年代は不明。

（註1）　赤星直忠　1966「古代の鎌倉」『鎌倉市史』考古編

（註2）　斉木秀雄他　1986『長谷小路南遺跡』長谷小路南遺跡発掘調査団
馬淵和雄　1994「長谷小路周辺遺跡－由比ガ浜三丁目1175番2外地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報書』10　鎌倉市教育委員会
宗臺秀明　1994『長谷小路周辺遺跡－由比ガ浜三丁目228・229番他（No.236）』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
ほか多数。

（註3）　松尾宣方　1983「伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅰ

（註4）　白井永二編　1976『鎌倉事典』東京堂出版より「安達盛長」・「甘縄」・「甘縄神明神社」の項。

（註5）　『見聞私記』に「永仁五年（1297）閏十月七日未時、自佐々目谷口火出来、甘縄等焼亡、千葉（胤宗カ）屋形已
下兵部大輔（甘縄顕実）、駿河守（北条政長）、近江守（？）等屋形悉焼了」の記載がある。

（註6）　1987『日本歴史地名大系・神奈川県の地名』平凡社より。

（註7）　1988『鎌倉の寺院図』神奈川県金沢文庫
1988『金沢文庫史料全書』第9巻　寺院指図篇　神奈川県立金沢文庫

（註8）　貫達人・川副武胤　1989『鎌倉廃寺事典』有隣堂より「はじめに（第三部）」の項。

（註9）　大河内勉　1991「笹目遺跡発掘調査団報告書」－鎌倉市笹目町330番－1地点－笹目遺跡発掘調査団

（註10）　前掲『日本歴史地名大系・神奈川県の地名』「長楽寺跡」の項。

（註11）　前掲『鎌倉廃寺事典』「長楽寺」「鎌倉廃寺図」・前掲『日本歴史地名大系・神奈川県の地名』「長楽寺跡」・原廣志・田代郁夫　1990「笹目遺跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』

（註12）　『金沢文庫文書』(1964) 神奈川県立金沢文庫　所収。

（註13）　（註10）に同じ。

［参考・引用文献］

田代郁夫　1994「笹目遺跡（No.207）笹目町425番１外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10（第２分冊）

伊丹まどか　2001「笹目遺跡（No.207）笹目町285番１外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17（第２分冊）

大河内勉　1991「笹目遺跡発掘調査団報告書」－鎌倉市笹目町330番－１地点－笹目遺跡発掘調査団

原廣志・田代郁夫　1990「笹目遺跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』

天保３年（1832）「扇ヶ谷村絵図」（1969『鎌倉の古絵図』２（鎌倉国宝館図録16）所収）

第２章　調査の概要

１．調査の経過

本調査地点は、市内中心部南西寄りにあたり、笹目遺跡（県遺跡台帳№207）の一角に位置する鎌倉市笹目町330番11地点における個人専用住宅で実施された。

平成13年12月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、工事計画が地盤の柱状改良を伴うものであったため、確認調査を実施した。この調査で現地表下180cm以下に中世遺物包含層及び遺構面の存在が確認され、当該土木工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことが判明した。これにより発掘調査の実施について事業主との数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法第57条の２に基づく届け出手続きを行ない、現地調査の実施方法などの話し合いを経て、平成14年４月１日から調査面積43.50㎡を対象として発掘調査を実施した。

調査地の現在の海抜高は12.5m前後を測り、調査前の確認調査の結果から現地表下約180cmは近現代の遺物を含む客土層であることを確認していたため、重機による表土掘削を行ない、その後人力による掘削、遺構の検出、記録保存、写真撮影を行なった。

当調査地点は谷戸部という立地条件のために湧水が非常に多く、排水作業を行ないつつ安全に留意しながら調査を行なったが、同年４月22日、大雨によって調査区壁面が崩落し、これ以上の調査は危険と判断し、調査を中止した。

調査の結果、鎌倉時代後期～南北朝時代にかけて、４時期の中世生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。第４面については精査前に現場が崩落したため、土丹地業による生活面の広がりは確認したが、遺構については未調査である。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記しておく。

調　査　日　誌　抄

４月１日　小屋設営。第１面の遺構検出へ向けての調査開始。鎌倉市４級基準点を基に測量用方眼杭設定、原点・レベル移動。

４月９日　第１面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。

４月13日　第２面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。

４月19日　第３面の調査終了。全景・個別遺構などの写真撮影、全測図作成。
第４面に向けての調査開始。第４面からは崩落の危険があるため、調査区はこれまでの北側半分のみとなる。

４月22日　現場雨のため崩落。危険なため調査中止。かろうじて残った調査区東壁一部のセクション図を実測・写真撮影。現場崩落状況を撮影。各方面に連絡ののち、完全撤収。

２．測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定は図２に図示したように国土座標を用いて実施した。調査地東側を南北に走る道路上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点D205及びD206が確認されたので、この２点を基準として国土座標を測定、調査敷地内にD－５杭を設置した。ここから調査区の東辺に沿って４m北の方向へ延ばした位置にB－５杭を設置した。これを調査基準点としてD－５杭とB－５杭を結ぶ直線と90°の角度で西に８mの位置に見返りとなるB－１杭を設置した。その後、図２のように東西軸にアルファベットを北からA～D、南北軸に算用数字を西から１～５を附し、それぞれ２m

方眼によりグリット設定を行なった。

市４級基準点（D205・D206）及びＢ－１・Ｂ－５・Ｄ－５杭の国土座標の数値は、以下の通りである。

D205：〔X＝−76.182.150：Y＝−26.189.765〕

D206：〔X＝−76.211.489：Y＝−26.176.260〕

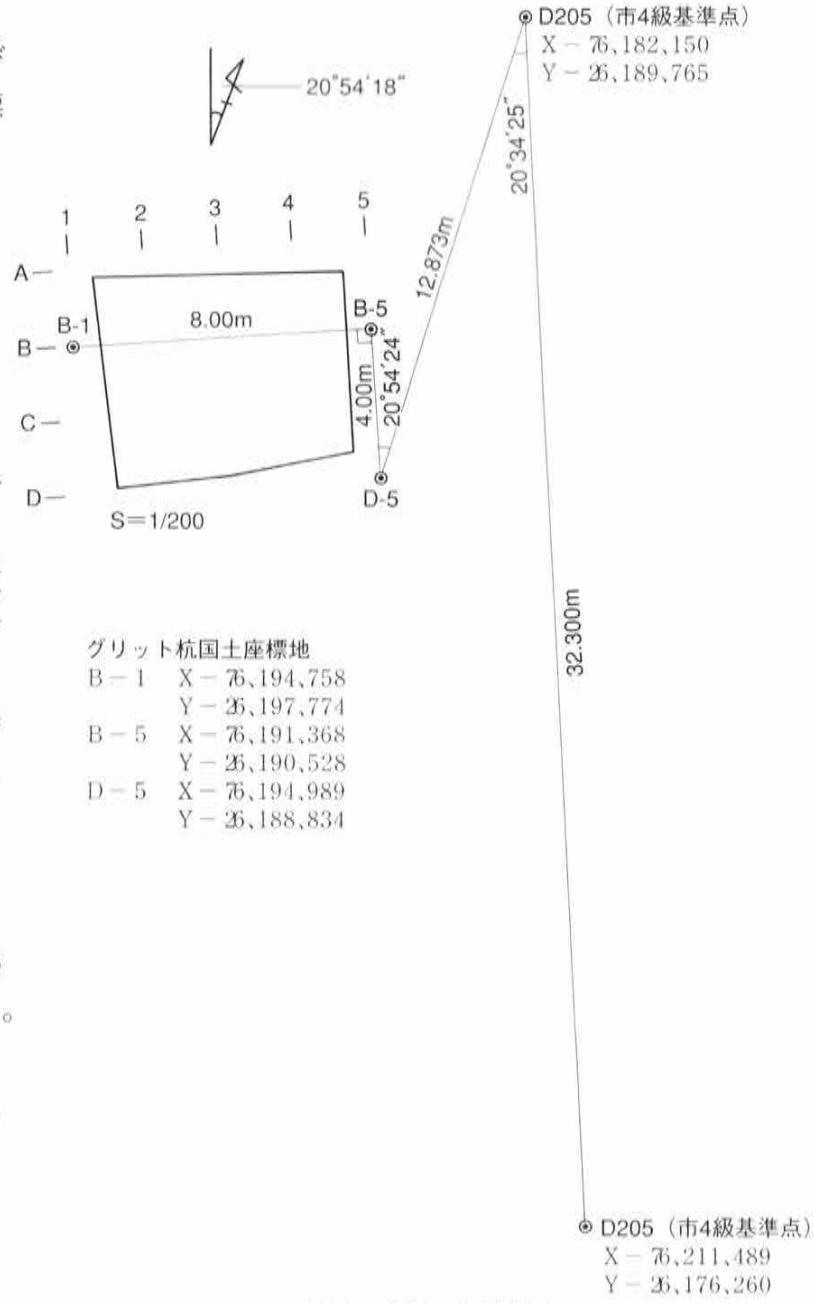
B-1：〔X＝−76.194.758：Y＝−26.197.774〕

B-5：〔X＝−76.191.368：Y＝−26.190.528〕

D-5：〔X＝−76.194.989：Y＝−26.188.834〕

方位はすべて真北を使用しており、南北軸方位はＮ－20°54′18″－Ｅである。

標高については、調査地点より南東約300ｍの国道134号線上にある鎌倉市３級基準点（Ｎｏ.53123＝10.73ｍ）を調査区内に移動した。文章中及び挿図の数値はすべてその海抜標高で示している。



グリット杭国土座標地

Ｂ－１	Ｘ－76,194,758	
	Ｙ－26,197,774	
Ｂ－５	Ｘ－76,191,368	
	Ｙ－26,190,528	
Ｄ－５	Ｘ－76,194,989	
	Ｙ－26,188,834	

図２　グリッド設定図

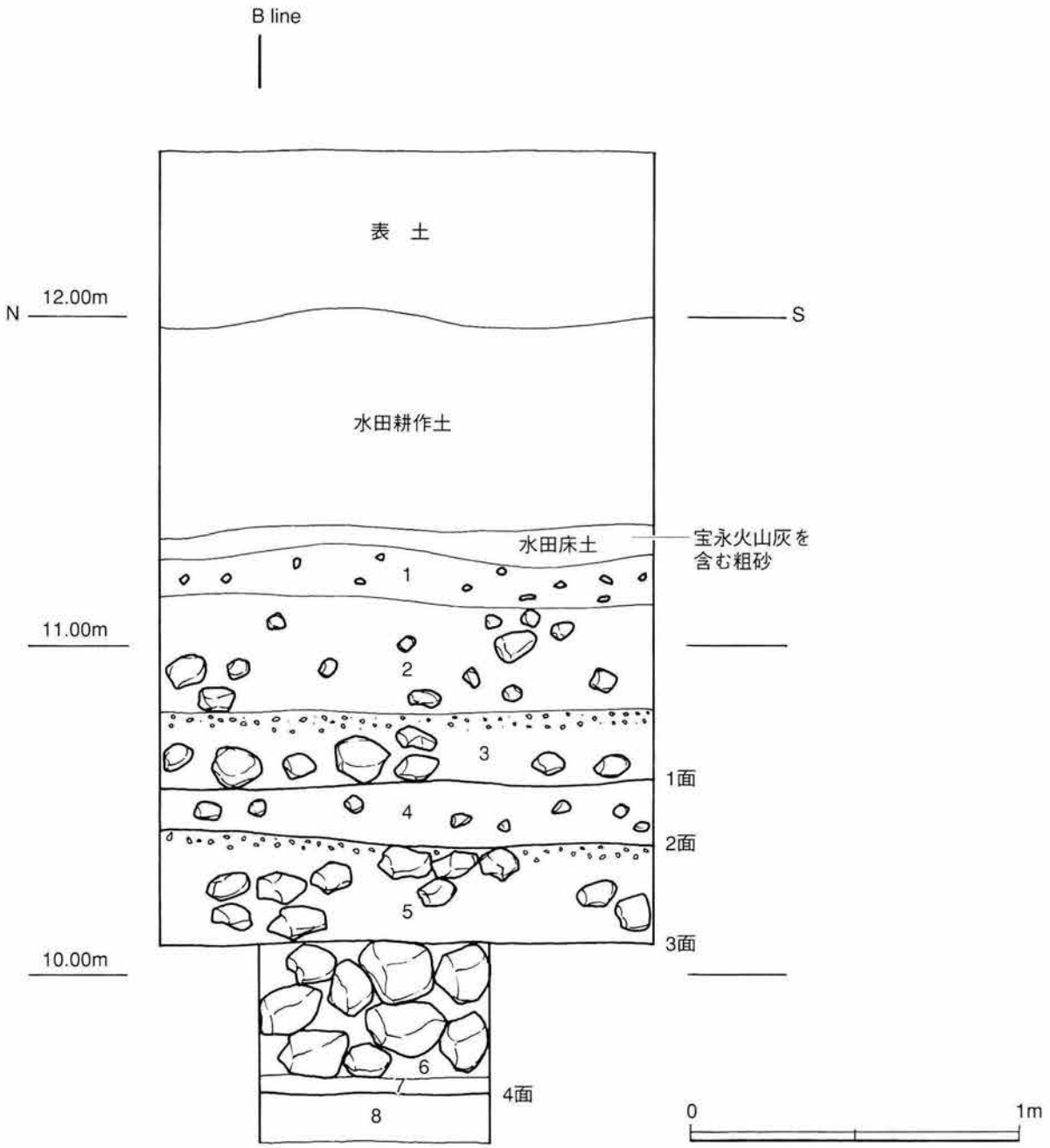
３．層序と生活面

調査地点は現地表の海抜標高約12.5ｍに位置した平坦な宅地となっている。表土は現代の撹乱が50cm程堆積し、その下に近代の水田耕作土が厚く70cm程堆積している。水田耕作土の底面には宝永の火山灰（宝永４年（1707）11月に起こった富士山の噴火により発生した火山灰）を含む粗砂が堆積し、その下に10～15cmの厚さで中世遺物包含層がある。さらにその下、海抜標高10.8ｍ前後で細かい土丹を突き固めて整地した地業層があり、この地業層を構成する厚さ約20cmの整地層と遺物包含層を除去すると、現地表下約190cm、海抜標高10.6ｍ前後で第１面の地業層の広がりが確認された。この層は厚さ約20cm程あり、土丹粒・炭化物などを含んだ暗茶褐色粘質土によって構築されている。

第２面は海抜標高10.45ｍ前後で確認された。この層は厚さ30cm程あり、人頭大・拳大土丹による基礎地業で上面には細かい土丹版築が施されている。

第３面は、人頭大の大型土丹を投げ入れて構築された、厚さ約40cmの粗い地業で、海抜標高は10.10ｍ前後である。

第４面は、厚さ約５cmの粘性が強く遺物を多く含む暗灰褐色土の下から表れた非常にしまった細かい土丹版築の面で、海抜標高は10.65ｍ前後である。炭化物・木器を含み、貝砂が混じる。



土層注記

1．茶灰色粘質土　しまりやや有、土丹・炭粒多く含む（遺物包含層）

2．暗茶灰色粘質土　人頭大・拳大・土丹・炭、まばらに含む
非常にしまり有
北壁側では厚さ 10～20cm程の炭層がこの上で確認された

3．暗茶灰色粘質土　上部は細かい土丹で版築
下部は人頭大、拳大土丹で粗い基礎地業

4．暗茶褐色粘質土　土丹・炭をやや多めに含む
２面の包含層か？

5．暗茶褐色粘質土　上部は細かい土丹で版築
下部は人頭大、拳大土丹による基礎地業

6．暗茶褐色粘質土　大型土丹塊による粗い地業（多量に入る）

7．暗灰褐色粘質土　４面上遺物包含層

8．暗茶褐色粘質土　炭化物、木器、貝砂混じる
上面は細かい土丹版築
非常にしまり有

図３　土層堆積模式図

第３章　検出遺構と出土遺物

１．検出遺構と共伴遺物

ａ）第１面（図４・５、図版１・２）

現地表下約190cm、海抜標高10.6m前後で土丹粒・炭化物などを含んだ暗茶褐色粘質土を突き固めて整地した地業層が確認されたので、この生活面を第１面として調査を実施した。この面で検出した遺構は、土壙２基、柱穴11口などである。遺物は面上から、かわらけ、舶載陶磁器、手焙り、銅製品、北宋銭などが出土したが、土壙内・柱穴内など遺構に伴う形では出土しなかった。

土壙（図４、図版１）

土壙１

調査区南西角の壁際（Ｄ－２グリット）で検出され、西側南側は調査区外に拡がる。平面はほぼ円形を呈し、確認できた規模は南北軸46cm、東西軸40cm、深さ35cm、断面が逆台形状の土壙である。覆土は人頭大・拳大の土丹、炭をまばらに含む、しまりのやや弱い暗茶灰色粘質土である。

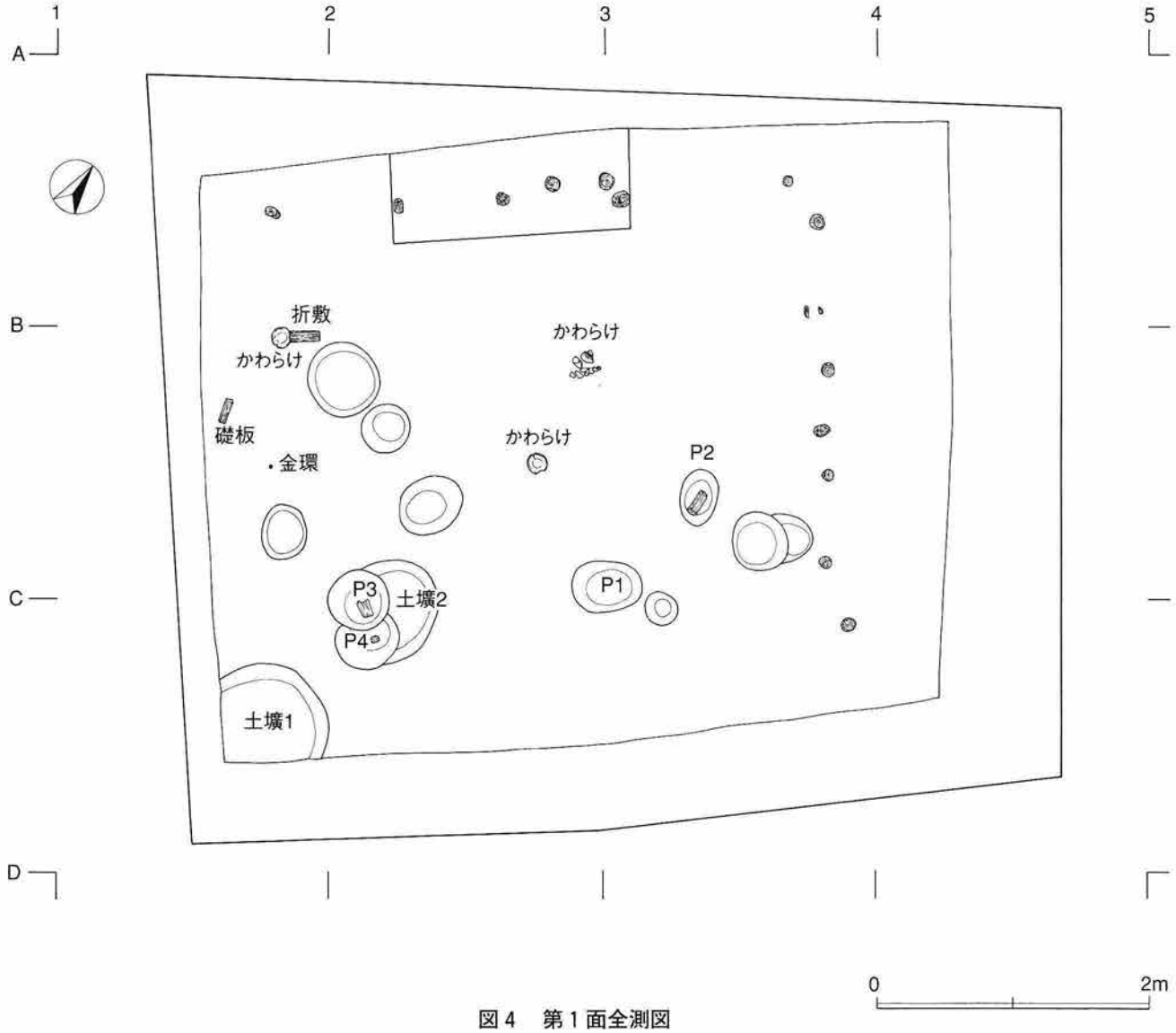


図４　第１面全測図

土壙２

Ｃ－２杭からやや東寄りの地点で検出され、西側を柱穴３・４に切られている。平面は円形を呈し、直径36cm、深さ12cmの浅い土壙である。覆土は、小土丹塊・炭粒を多く含み、しまりのない暗茶灰色粘質土である。

柱穴（図５、図版１・２）

柱穴１

Ｃ－３杭地点に位置する。形状は楕円形で、大きさは長径52cm、短径38cm、深さ11cmの浅い柱穴で、断面が逆台形を呈する。覆土は炭化物、拳大土丹を多めに含んだしまりのない暗茶灰色粘質土である。

柱穴２

Ｃ－４グリットに位置する。形状は楕円形で、大きさは長径42cm、短径28cm、深さ26cm、断面が逆台形の掘方をもつ。覆土は炭化物、拳大土丹を多めに含んだしまりのない暗茶灰色粘質土である。底部に縦18cm、横７cm、厚さ５cmの礎板を伴う。

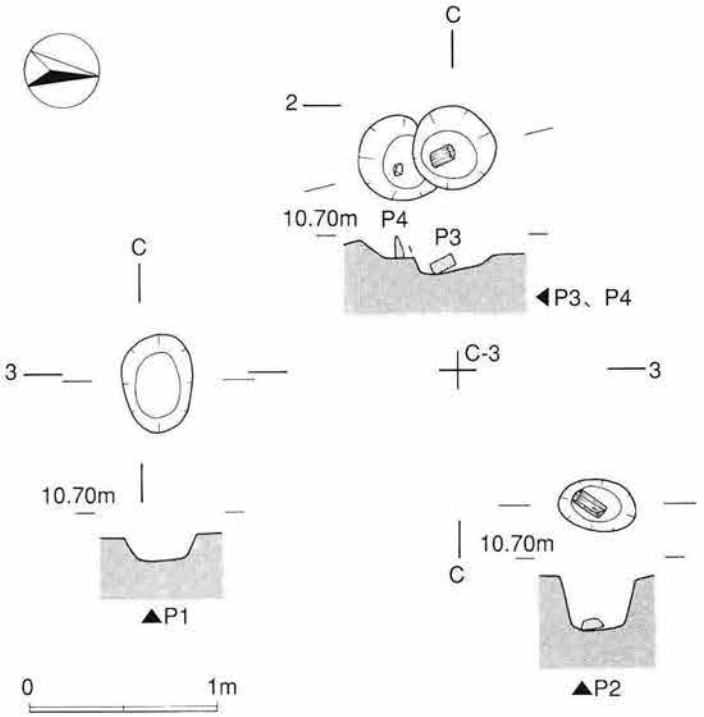


図５　第１面ピット

柱穴３

Ｃ－２杭付近に位置する。形状は円形で、大きさは直径45cm、深さ５cmの浅い柱穴である。覆土は炭化物、小土丹塊をまばらに含んだしまりのやや弱い暗茶灰色粘質土である。底部に縦12cm、横８cm、厚さ６cmの礎板を伴う。

柱穴４

Ｃ－２杭付近に位置する。形状は円形で、大きさは直径45cm、深さ８cmの浅い柱穴である。覆土は炭化物、拳大土丹を多めに含んだしまりのない暗茶灰色粘質土である。中央に木杭が刺さる。北側部分を柱穴３に切られる。

ｂ）第２面（図６・７、図版３・４）

第１面を構成する厚さ約20cmの整地層と遺物包含層を除去すると、海抜標高10.45m前後で細かい土丹版築を施した面の広がりが確認された。断面で確認すると、人頭大・拳大土丹による厚さ30cm程の基礎地業の上面であることが分かり、これが第２面である。この生活面で検出した遺構は、掘立柱建物１軒、土壙２基、柱穴18口である。出土遺物はわずかに面上及び土壙より、かわらけが数点みられた。

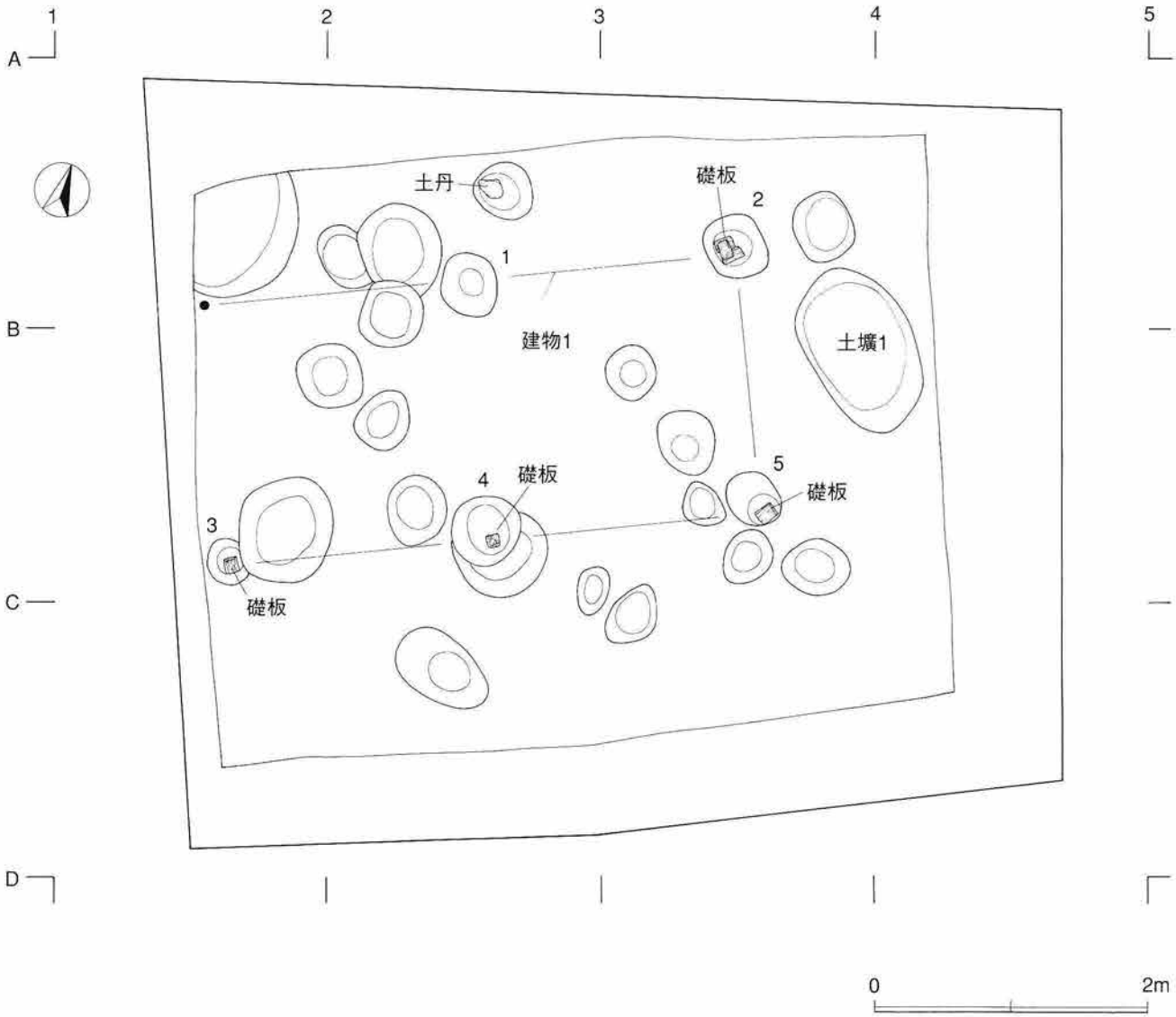


図6　第2面全測図

掘立柱建物

建物1（図7、図版3・4）

調査区中央よりやや北西寄りに位置する。B・C－2～4グリットの範囲で東西2間＝3.9m、南北1間＝1.95mが検出され、柱間寸法は東西・南北ともに195cm（6.5尺）を測る。調査区内に湧水が多く、周囲に排水のための側溝を巡らせていたため、北西隅の柱穴掘方が確認されなかったが、南西隅にて礎板を伴う柱穴が、同じ柱間距離で検出されたため、東西2間と判断した。この建物が東西南北にさらに延びるか否かは、それぞれ調査区外となるため確認できていない。南北の柱並びの軸方位はN－13°－Eを示している。

各柱穴の掘方は、平面形状が円形または隅丸方形を呈し、径34～50cm程、断面形状は逆台形を呈し、確認面からの深さ約40～50cmである。柱穴1（図7）を除く、ほかすべての柱穴底面に、礎板が据えられていた。礎板は平面形状がおおむね正方形で、厚さ2～4cmと比較的薄く、柱穴2では厚さ2cmの薄い礎板を2枚並べた上に、もう一枚2cmのものを重ねて据えられていた。

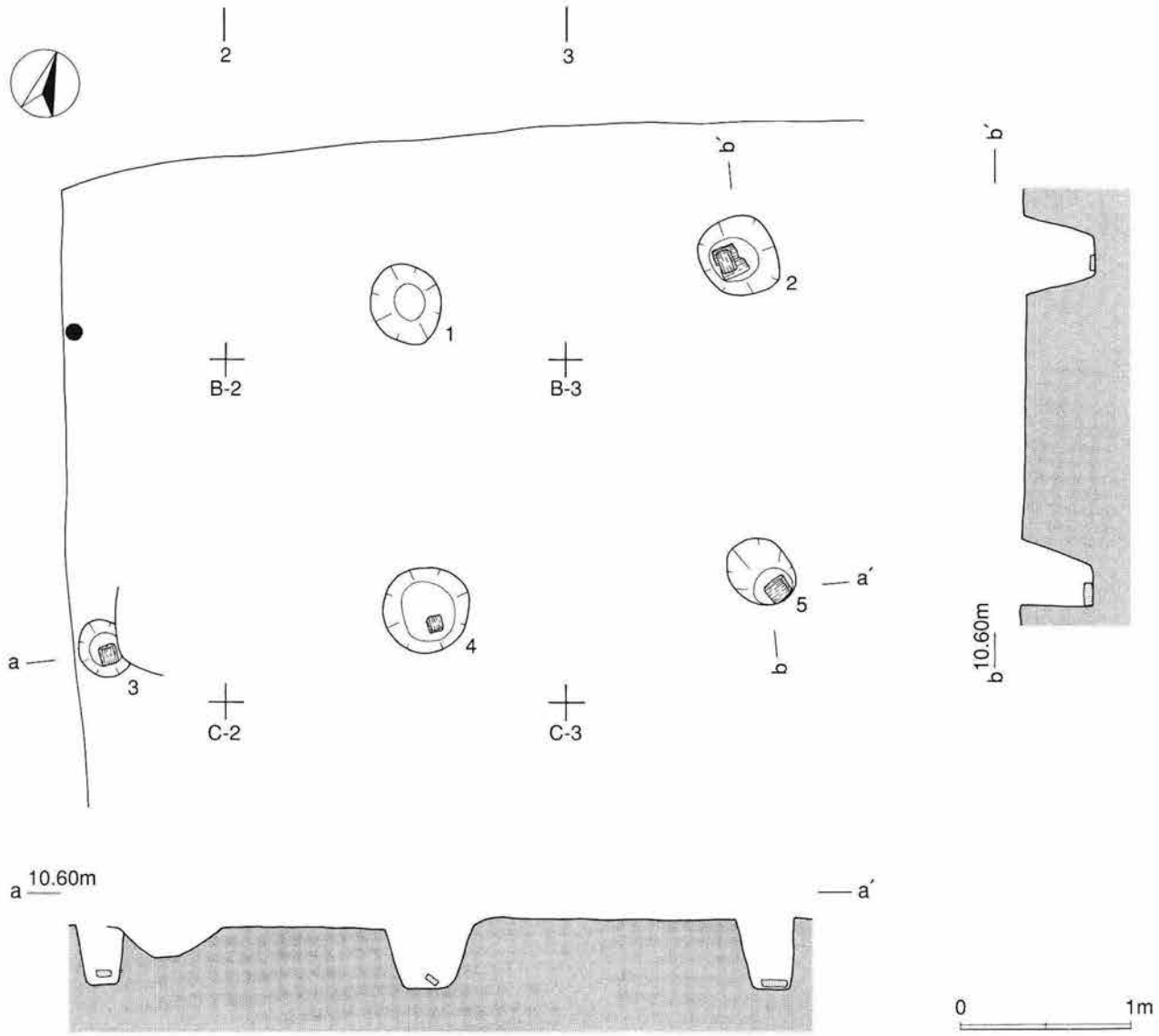


図7　第2面建物1

土壙

土壙1（図6、図版3）

調査区東端のB－4杭地点で検出され、平面形状は楕円形を呈し、長軸約120cm、短軸約80cm、掘方は逆台形を呈し、深さ28cmである。覆土は土丹塊・炭粒をやや多めに含む、しまりのない暗茶褐色粘質土である。

出土遺物は（図10－26・27）、ろくろ成形の大小かわらけが各1点であった。

c）第3面（図８・９、図版５・６）

第３面は、人頭大の大型土丹を投げ入れて構築された、厚さ約40cmの粗い地業土の上面であり、海抜標高は10.10m前後である。

この生活面で検出された遺構は、掘立柱建物１軒、土壙５基、柱穴９口である。出土遺物は、かわらけをはじめ、舶載陶磁器、常滑捏鉢、鉄製品、木製品などがみられた。

掘立柱建物

建物１（図９、図版５・６）

西端（Ｂ～Ｄ－２グリット）に位置し、調査区西壁に沿って南北に３口の柱穴列が検出された。そのうち２口の底部には礎板が据えられ、柱間の距離からみて掘立柱建物の一部を構成した柱穴列と推定される。これを建物１とした。柱間寸法は、柱穴１～３が芯々距離1.90m、1.80mをそれぞれ測り、南北の柱並びの軸線方向はＮ－16°－Ｅを示す。調査区西際での検出のため、建物の規模等の性格は不明である。各柱穴の掘方は、平面形状が円形を呈し、径42～56cm程、断面形状は逆台形を呈し、確認面からの深さ約36～45cmである。柱穴１・２（図９）は底面に礎板が据えられていた。礎板は平面形状が長方

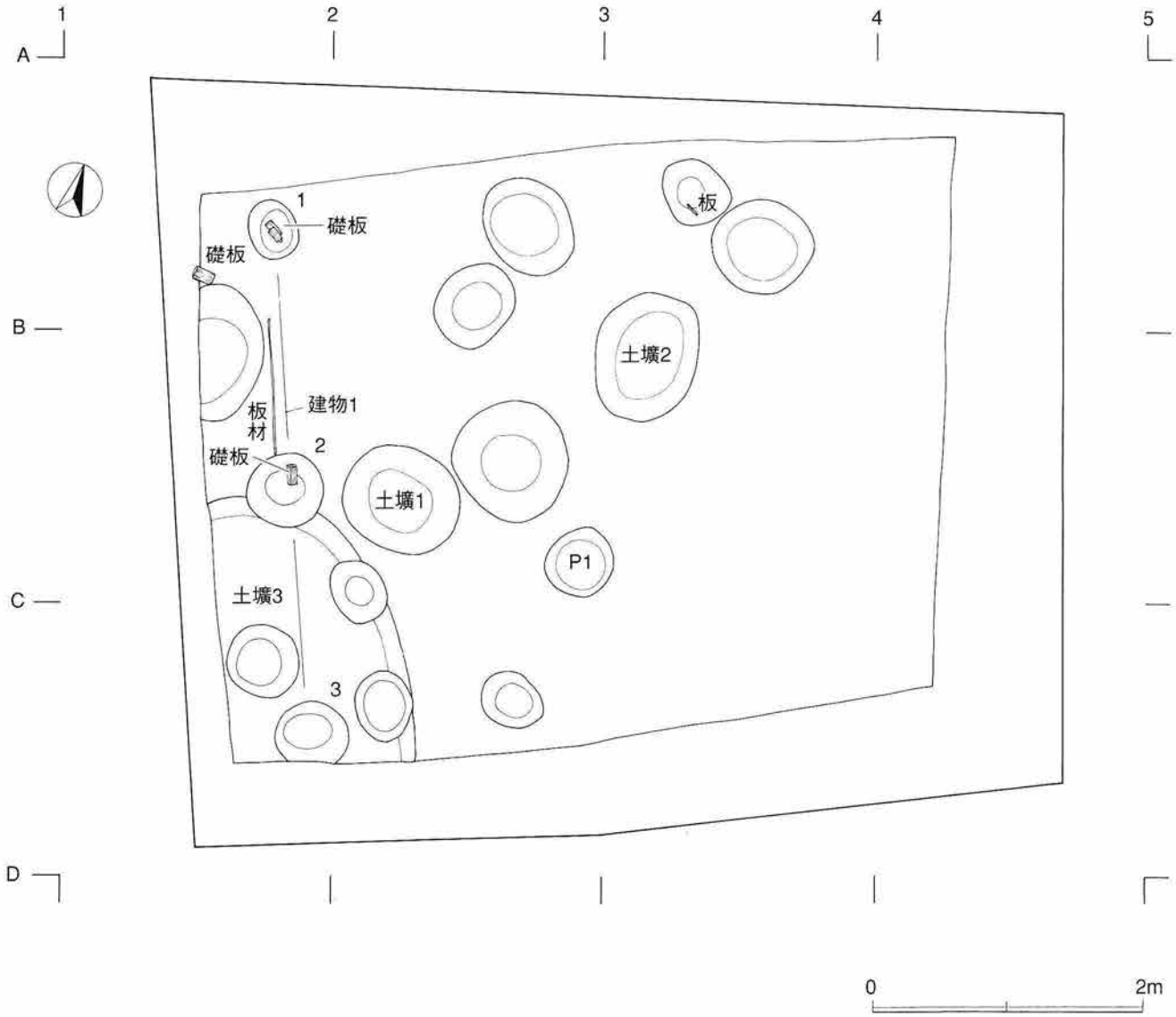


図８　第３面全測図

形、厚さは4～5㎝程である。柱穴2では厚さ4㎝の礎板の上に、厚さ3㎝の礎板が重ねて据えられていた。上の礎板は、短辺の側面が凸字状に加工されており、束材を再利用したものであろうか。2面・3面の両生活面において、建物は各面わずか1軒ずつの検出であり、点数も少ないが、2面と3面では礎板の形態に違いがみられた。

出土遺物は（図11－34・35）、図11－34がろくろ成形のかわらけの小皿、図11－35が用途不明の木製品で、ともに建物1－1（図9）覆土より出土。

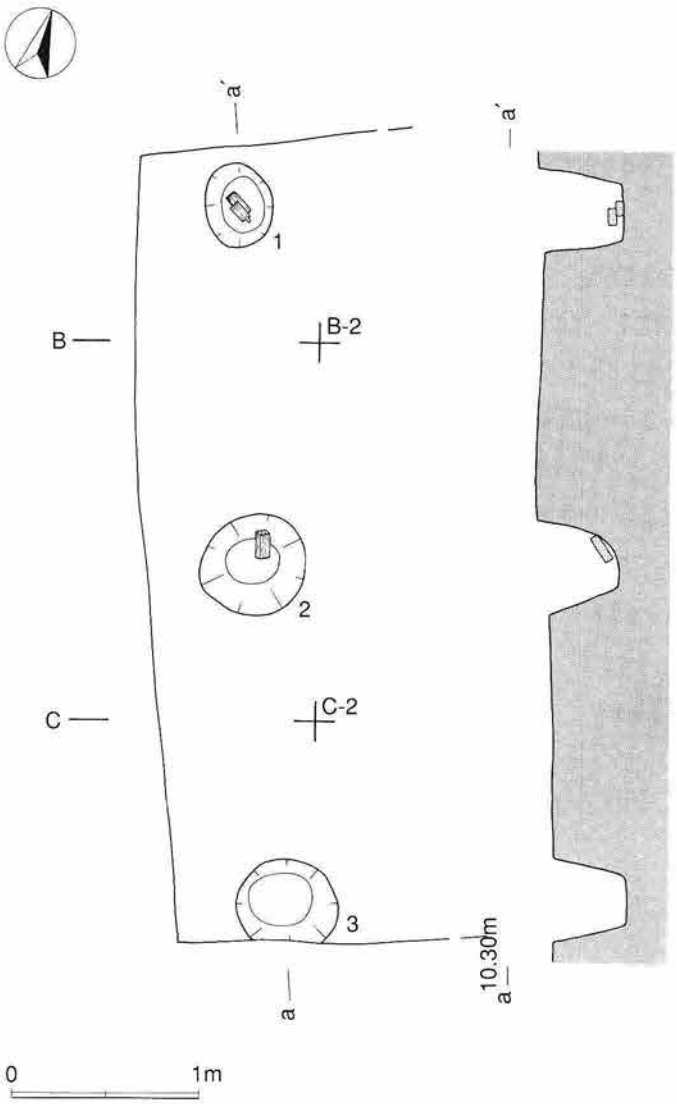


図9　第3面建物1

土壙（図8、図版6）

土壙1（図版5・6）

C－3グリットに位置する。平面形状は円形を呈し、直径約80㎝、掘方の断面は楕円形を呈し、深さ39㎝である。覆土は拳～人頭大土丹で、間に粘質土が入り、底部は砂質土。

出土遺物は（図11－36）、ろくろ成形の大型のかわらけが1点出土している。

土壙2（図版5・6）

C－4グリットに位置する。平面形状は楕円形を呈し、長軸95㎝、短軸76㎝を測る。掘方断面は逆台形状を呈し、深さ47㎝である。覆土は拳～人頭大土丹で、間に粘質土が入り、底部は砂質土。

出土遺物は（図11－37）、舶載陶磁器（龍泉窯系青磁蓮弁文碗）1点。

土壙3（図版5）

調査区の南西隅で検出され、グリットはC・D－2・3に位置する。南側・西側が調査区外に拡がっており、全体の規模や平面形態は不明である。確認できた規模は南北軸2m、東西軸1.36m、確認面からの深さ約4㎝で断面が浅い皿状を呈する。

出土遺物は（図11－38・39）、鉄製の平根鏃1点と、漆塗りの木製品（たて櫛）1点である。たて櫛は頭部丸く、全体を丁寧に削り、黒漆を厚く塗ったもので、頂部に穴が開いていたかは不明である。

柱穴

柱穴1（図8、図版5）

C－3グリットに位置する。平面形状は円形を呈し直径50㎝、掘方断面は逆台形状を呈し、深さ35㎝を測る。覆土は拳～人頭大土丹で、間に粘質土が入り、底部は砂質土。

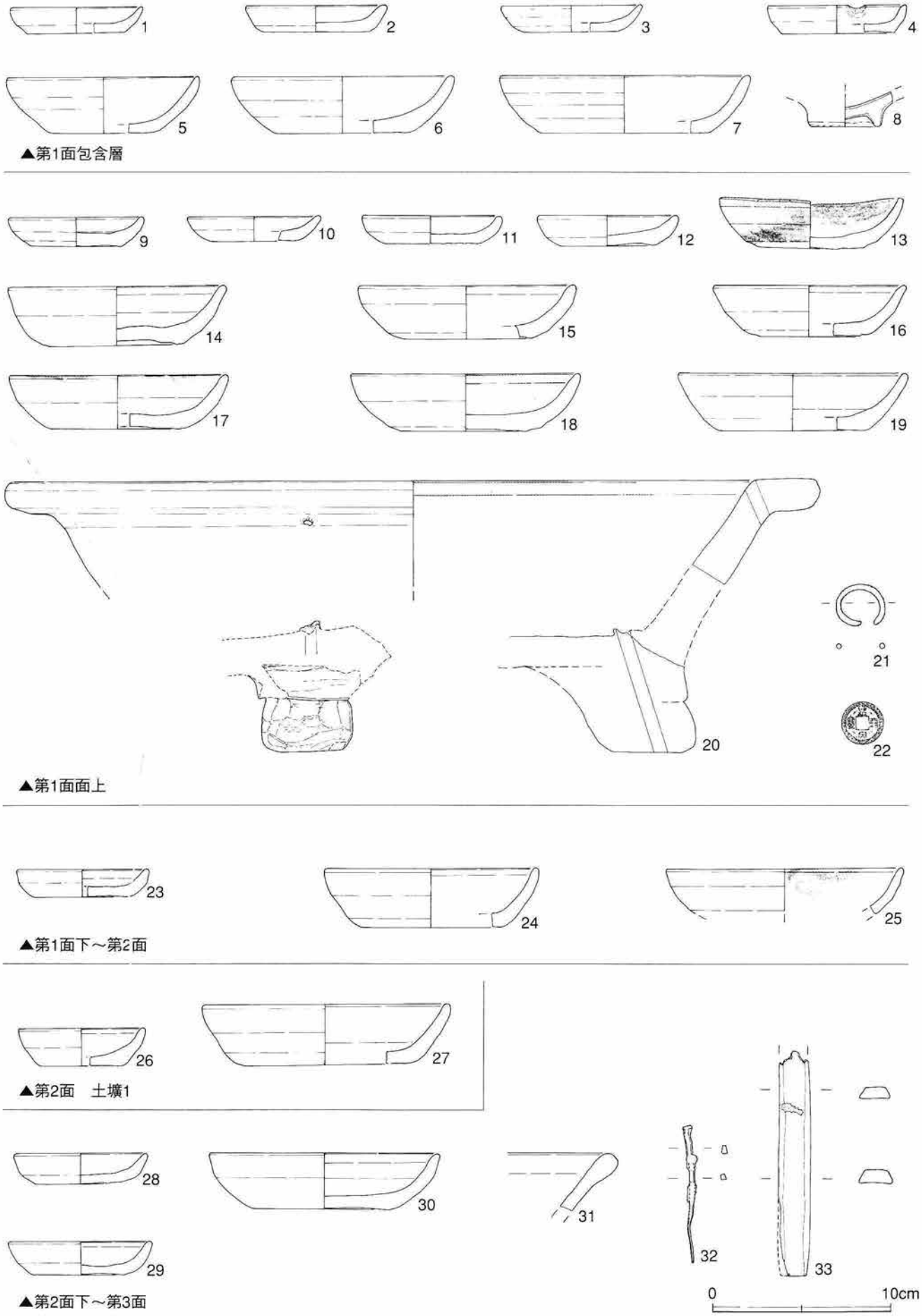


図10　笹目遺跡出土遺物（1）

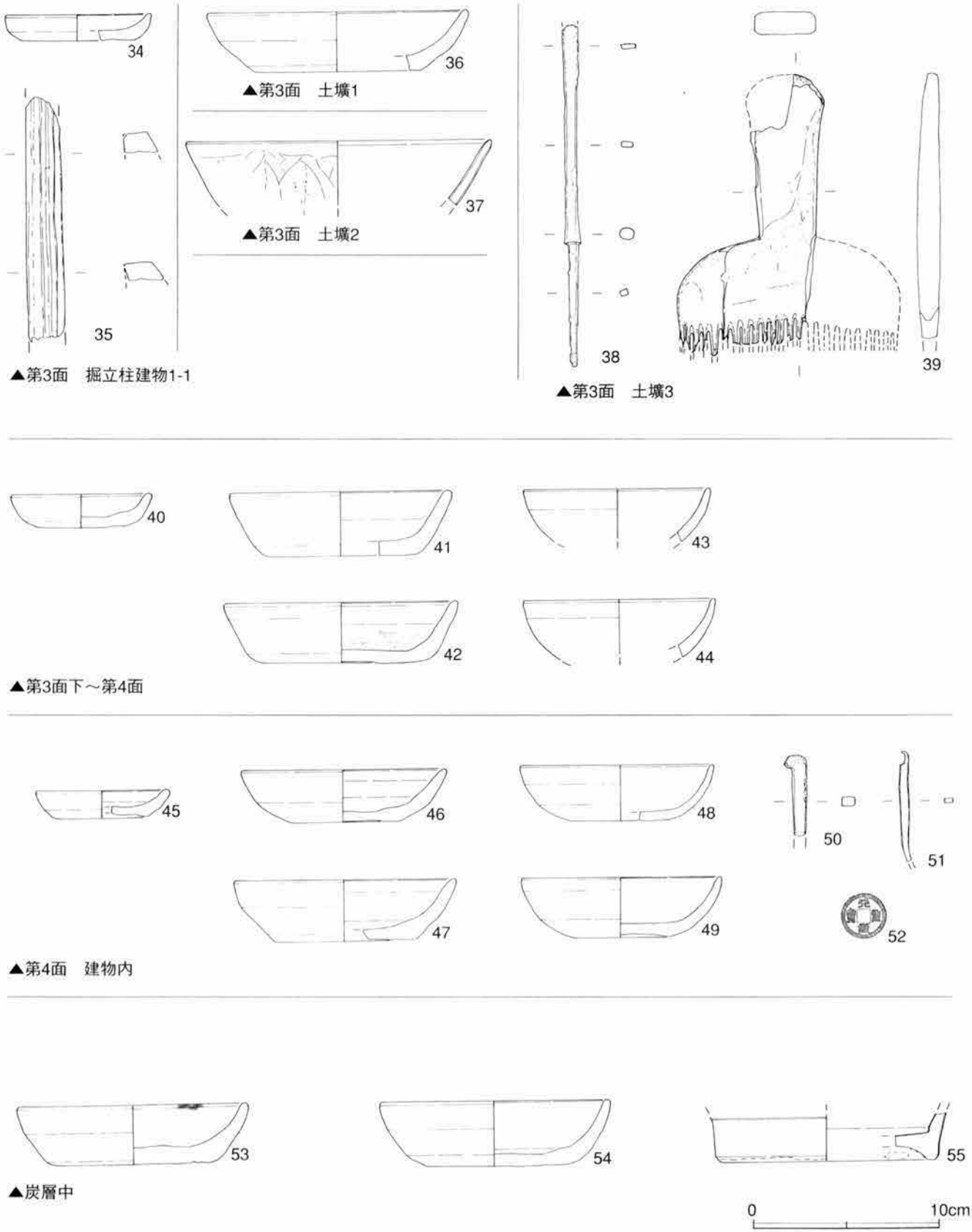


図11　笹目遺跡出土遺物（2）

d）第４面

第４面からは、掘削深度が深く、湧水が非常に多いため、調査区の面積をこれまでの北半分とし、調査を行なった。第３面を構築していた大型土丹の地業層を掘り下げると、厚さ約５cmの粘性が強く遺物を含む暗灰褐色土の下から非常にしまった細かい土丹版築の面が現れ、これを第４面として調査を開始した。この面では木製品が良好に残り、前面までと比べて多くの遺構プランを検出し、遺物も出土していたが、大雨と湧水によって調査区の壁が崩落し、危険のため調査は中止となったため、精査・測量・全景写真撮影にまで至らなかった。ここでは、それまでに取り上げた遺物のみの記述となることをご了承いただきたい。出土遺物には、かわらけをはじめ、鉄製品・宋銭などがある。

建物

調査区西壁付近にて、建物に伴うと思われる束材と、柱穴のプランが検出された。遺構について詳しいことが分かっていないが、その上面から出土した遺物（図11－45～52）は、45～49がろくろ成形の大小かわらけである。50・51は鉄製の角釘、52は北宋銭（天聖元寶）である。

２．面上及び包含層出土遺物（詳細は観察表を参照のこと）

a）**第１面及び包含層出土遺物**（図10－１～22、図版８）

第１面包含層（図10－１～８）

１～７は、ろくろ成形のかわらけ。４は口縁部に片口が付く。８は竜泉窯系の青磁無紋碗。

第１面面上（図10－９～22）

９～19は、ろくろ成形のかわらけ。13は灯明皿で、胎土は紛質の精良土。口縁部から体部にかけ、煤が厚く付着している。20は手焙りである。21は金銅製品で輪形を呈する。22は北宋銭（皇宋通寶）である。

b）**第２面及び包含層出土遺物**（図10－23～25、図版８）

23～25は、ろくろ成形の大小かわらけで、25は口縁部に煤が付着している。

c）**第３面及び包含層出土遺物**（図10－28～33、図版８）

28～30は、ろくろ成形の大小かわらけ。31は常滑こね鉢（Ⅰ類）の口縁部片。32は鉄製の角釘。33は漆塗の木製品である。断面が台形状で、長い棒状を呈する。表と思われる３面に黒漆が塗られ、裏の１面は生地のままである。部材か。

d）**第４面及び包含層出土遺物**（図11－40～44、図版８）

40～44は、ろくろ成形の大小かわらけである。稜線のやや強いものと、薄手で丸深のものに分かれる。

挿図番号	出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
図10－1	第1面包含層	かわらけ	(7.5)	(5.5)	1.5	胎土は微砂・雲母・白針を含む　橙色　ロクロ成形
2	第1面包含層	かわらけ	(7.9)	(6.1)	1.5	胎土は微砂・雲母・白針を含む　にぶい橙色　ロクロ成形
3	第1面包含層	かわらけ	(8.0)	(5.3)	1.5	胎土は微砂・雲母・白針を含む　にぶい橙色　ロクロ成形
4	第1面包含層	かわらけ	(7.7)	(6.3)	1.6	胎土は微砂・白針を含む　にぶい橙色　ロクロ成形　片口が付く
5	第1面包含層	かわらけ	(10.7)	(5.8)	3.2	胎土は微砂・雲母・白針を含む　にぶい橙色　ロクロ成形
6	第1面包含層	かわらけ	(12.2)	(7.7)	3.3	胎土は微砂・雲母・白針を含む　にぶい橙色　ロクロ成形
7	第1面包含層	かわらけ	(14.0)	(9.7)	3.3	胎土は微砂・雲母・白針を含む　橙色　ロクロ成形
8	第1面包含層	青磁　無文碗	／	(4.0)	／	素地は黒色微粒を含む灰色良土　焼成堅緻・硬質　釉薬は緑灰色半透明で厚く施釉　貫入あり　内外面施釉　龍泉窯系
9	第1面面上	かわらけ	(7.4)	(5.0)	(1.7)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒を含む　明褐灰色　ロクロ成形
10	第1面面上	かわらけ	(7.4)	(4.8)	(1.4)	胎土は微砂・金雲母・赤色粒・小石を含む　明黄褐色　ロクロ成形
11	第1面面上	かわらけ	(7.6)	(5.4)	(1.6)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む　明褐灰色　ロクロ成形
12	第1面面上	かわらけ	(7.8)	(5.2)	(1.7)	胎土は微砂・白針・土丹粒・小石・輝砂を含む　明褐灰色　ロクロ成形
13	第1面面上	かわらけ　灯明皿	／	6.0	(2.9)	胎土は微砂・雲母・白針を含む明肌色弱紛質精良土　口縁～体部にかけ内外両面に厚く煤付着
14	第1面面上	かわらけ	12.2	7.6	3.4	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む　橙色　ロクロ成形
15	第1面面上	かわらけ	(12.1)	(7.0)	(3.0)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む　橙色　ロクロ成形
16	第1面面上	かわらけ	(10.8)	(5.7)	(2.9)	胎土は微砂・白針・赤色粒を含む　橙色　精良土　ロクロ成形
17	第1面面上	かわらけ	(12.2)	(7.4)	(3.1)	胎土は微砂・雲母・白針・赤色粒・小石を含む　橙色　ロクロ成形　口縁部に煤付着
18	第1面面上	かわらけ	(12.8)	(7.0)	(3.2)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒を含む　明橙色　ロクロ成形
19	第1面面上	かわらけ	(12.7)	(8.0)	(3.2)	胎土は微砂・白針・土丹粒・小石を含む　褐灰色　ロクロ成形
20	第1面面上	土器質火鉢	(45.0)	／	／	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒を含む精良土　胎芯が灰黒色を、器表は灰黄褐色を呈す　体部に脚部を張り付けた後、0.6～0.7cmの径をもつ刺突孔を脚底から器底に貫通　脚はヘラで丸みをつける　口縁部に煤付着
21	第1面面上	銅製　輪状製品	太さ0.25	径2.5		輪状を伸ばして直線にすると8.8cm
22	第1面面上	銭				「皇宋通寶」　北宋　1038年初鋳　篆書
23	第1面下～第2面	かわらけ	(7.2)	(5.2)	(1.5)	胎土は微砂・金雲母・白針・赤色粒・土丹粒を含む　橙色　ロクロ成形
24	第1面下～第2面	かわらけ	(12.0)	(8.0)	(3.3)	胎土は微砂・白針・赤色粒・小石を含む　明褐灰色　ロクロ成形
25	第1面下～第2面	かわらけ	(13.6)	／	／	胎土は微砂・雲母・赤色粒・小石を含む　灰黄褐色　ロクロ成形　口縁部に煤付着
26	第2面土廣1	かわらけ	(7.0)	(4.6)	(2.1)	胎土は微砂・白針・土丹粒を含む精良土　橙色　ロクロ成形
27	第2面土廣1	かわらけ	(13.8)	(9.0)	(3.5)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒を含む　橙色　ロクロ成形
28	第2面下～第3面	かわらけ	7.4	5.0	1.7	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒を含む　橙色　ロクロ成形
29	第2面下～第3面	かわらけ	7.3	5.4	1.9	胎土は微砂・白針・赤色粒を含む　橙色　ロクロ成形
30	第2面下～第3面	かわらけ	(13.0)	(8.0)	(3.1)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒を含む　橙色　ロクロ成形　口縁部に煤付着
31	第2面下～第3面	常滑　捏鉢　I類	／	／	／	胎土は微砂を含む精良土　灰色　口縁部小片
32	第2面下～第3面	鉄釘	長8.0×幅0.3×厚0.4			角釘
33	第2面下～第3面	漆塗り木製品	残存長12.7×幅1.8×厚0.7			部材？
図11－34	第3面掘建柱建物1－1	かわらけ	(7.8)	(6.0)	(1.4)	胎土は微砂・赤色粒を含む　灰褐色　ロクロ成形
35	第3面掘建柱建物1－1	用途不明木製品	残存長13.2×幅2.0×厚1.1			
36	第3面土廣1	かわらけ	(14.0)	(8.8)	(3.2)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒を含む　橙色　ロクロ成形
37	第3面土廣2	青磁　鎬蓮弁文碗	(16.4)	／	／	素地は微砂を含む灰色強粘質土　微気孔あり　焼成堅緻・硬質　釉薬はオリーブ灰色の灰釉　半透明で微気泡あるが良い発色　やや厚く内外面施釉　口縁部小片　龍泉窯系
38	第3面土廣3	鉄鏃	残存長18.7×幅2.0×厚1.1			平根鏃　鏃身部は尖端欠損のため詳細不明　頸部有　頸部は直線状を呈し台形関　茎部は断面方形を呈す
39	第3面土廣3	たて櫛	残存長14.6×最大幅(7.1)×厚1.3			漆塗り木製品　頭部丸く、全体を丁寧に削り、黒漆を厚く塗る
40	第3面下～第4面	かわらけ	(7.4)	(4.4)	(1.3)	胎土は微砂・白針・土丹粒を含む精良土　灰褐色　ロクロ成形
41	第3面下～第4面	かわらけ	(11.8)	(8.0)	(3.5)	胎土は微砂・白針・赤色粒・小石を含む　明褐灰色　ロクロ成形
42	第3面下～第4面	かわらけ	(12.4)	(9.4)	(3.3)	胎土は微砂・白針・小石を含む精良土　明褐灰色　ロクロ成形　煤付着
43	第3面下～第4面	かわらけ	(10.1)	／	／	胎土は微砂・金雲母・白針を含む精良土　にぶい橙色　ロクロ成形
44	第3面下～第4面	かわらけ	(10.2)	／	／	胎土は微砂・雲母・白針・赤色粒を含む精良土　明橙色　ロクロ成形

挿図番号	出土地	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土色調・成形・整形・備考
図11－45	第4面建物内	かわらけ	(7.0)	(5.0)	(1.5)	胎土は微砂・白針を含む精良土　灰褐色　ロクロ成形
46	第4面建物内	かわらけ	(11.0)	(5.8)	(2.8)	胎土は微砂・金雲母・白針を含む　灰褐色　ロクロ成形
47	第4面建物内	かわらけ	(11.8)	(7.6)	(3.3)	胎土は微砂・雲母・白針・土丹粒・粘土ブロックを含む　明黄褐色　ロクロ成形
48	第4面建物内	かわらけ	(10.2)	(5.4)	(3.0)	胎土は微砂・白針を含む精良土　橙色　ロクロ成形
49	第4面建物内	かわらけ	(10.8)	(5.5)	(3.2)	胎土は微砂・雲母・赤色粒を含む精良土　橙色　ロクロ成形
50	第4面建物内	鉄釘	残存長4.3×幅0.7×厚0.45			角釘
51	第4面建物内	鉄釘	残存長6.0×幅0.45×厚0.2			角釘
52	第4面建物内	銭				「天聖元寳」　北宋　1023年初鋳　篆書
53	炭層中	かわらけ	(12.4)	(9.0)	(3.2)	胎土は微砂・白針・赤色粒・土丹粒・小石を含む　明褐灰色　ロクロ成形口縁部に煤付着
54	炭層中	かわらけ	(12.2)	(7.4)	(3.5)	胎土は微砂・雲母・白針・赤色粒・土丹粒を含む　明灰褐色　ロクロ成形
55	炭層中	青白磁　梅瓶	／	(11.5)	／	素地は黒色微粒を含む白色精良土　焼成堅緻・硬質　釉薬は水青色で微気泡により半透明の灰釉　内外面施釉　高台内無釉で若干の砂・粘土・釉薬付着　外部下位に0.1～0.2ｃｍ幅の周回する沈線を施す　底部片

第4章　ま　と　め

調査の結果、鎌倉時代後期～南北朝時代にかけて少なくとも4時期の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。第4面については、面上の精査前に大雨と多量の湧水によって調査区壁が崩落したため、早速関係各機関と協議を行なった。その結果、調査続行は危険と判断されたので調査を中止することになった。従って、この面では土丹版築による地業層の生活面の拡がりと遺構プランの一部を確認しただけで残念ながら未発掘である。

本調査地点は、笹目遺跡地内の笹目ヶ谷（佐々目ケ谷）の開口部に位置しており、現在の谷戸内は住宅地が広がっているが、中世には遺身院・長薬寺などの寺院があったことが知られ、また周辺にはやぐら群が存在しおり、中世以前に遡る横穴墓群や弥生時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物も発見されている。以下、調査成果から得られた各面の年代観について若干述べてまとめとしたい。

第1面：この面は海抜標高10.60mで暗茶褐色粘質土を突き固めた整地した生活面で土壙・柱穴などの遺構を検出した。面上及び包含層に伴う遺物でロクロ成形かわらけの特徴は、薄手丸深型とやや厚手浅めの器形で体部上方に弱い屈曲をもつもので概ね14世紀中頃までに納まるものと考えられる。

第2面：この面は海抜標高10.45m前後で上面に細かい土丹版築を施して整地した生活面で掘立柱建物・土壙・柱穴などの遺構が検出された。出土遺物の組成から概ね13世紀末葉～14世紀前葉頃と考えられる。

第3面：この面は海抜標高10.10m前後で人頭大の大型土丹塊により構築された生活面で穎立柱建物・土壌・柱穴などの遺構が検出された。出土遺物の組成から第2面に近い時期が推定され、概ね13世紀末葉頃と考えられる。

第4面：この面は海抜標高9.65m前後で検出された細かい土丹版築の地業を施した堅牢な生活面である。遺構や面上包含層に伴う遺物は、その組成から概ね13世紀後葉と考えられる。

ところで平成15年11月に調査を実施した図1－11地点では本調査地点の北側を走る道路面（海抜標高約12.60m）とほぼ同じ高さで14世紀代の堅牢な土丹版築による生活面が検出され、本調査地点とは顕著な標高差が認められる。生活面にそれ程の時間的な隔たりがないにも係わらず著しい比高差が生じている点は疑問を残しており、今後の周辺調査成果が待たれるところである。

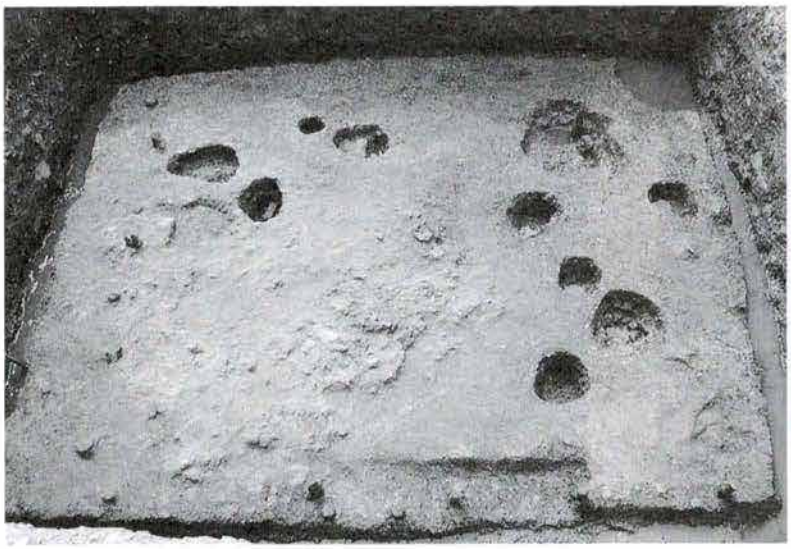
【引用・参考文献】

大河内　勉　1991「笹目遺跡発掘調査報告書－鎌倉市笹目町330番1地点－」笹目遺跡発掘調査団

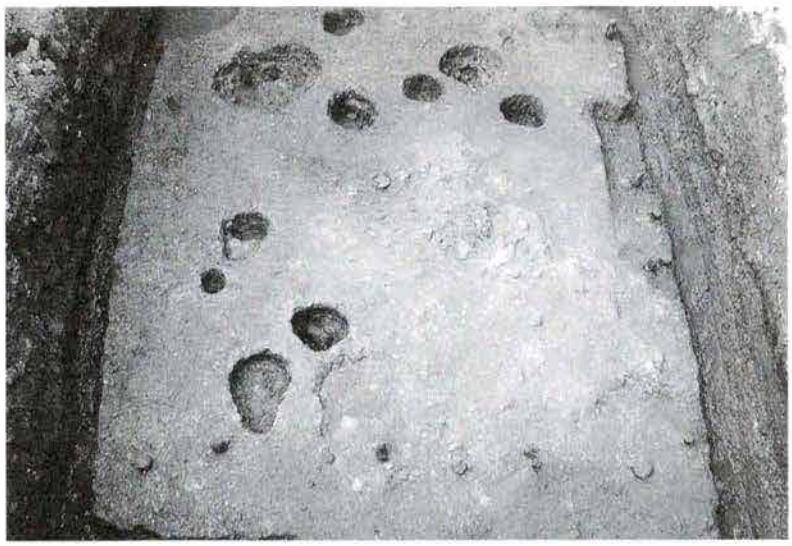
木村美代治・佐藤仁彦ほか　1995「甘縄神社遺跡群発掘調査報告書　鎌倉消防署・長谷出張所改築に伴う緊急調査報告書一鎌倉市長谷一丁目271番10－」甘縄神社遺跡群発掘調査団

宗臺秀明　2002「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」『かながわの中世　～鎌倉から小田原へ～　一土器様相を中心として－』神奈川考古学会　平成13年度考古学講座

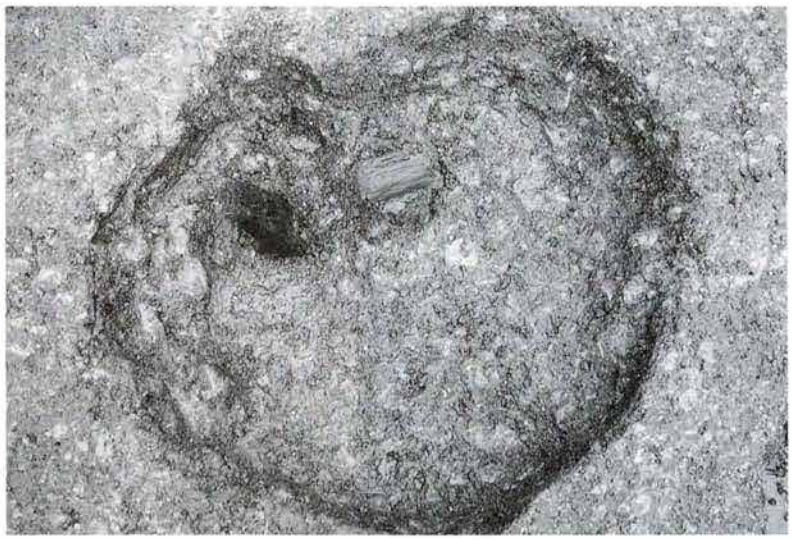
田代郁夫・原　廣志　1990「笹目遺跡内やぐら」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』笹目遺跡内やぐら発掘調査団編



◀第1面全景（北から）

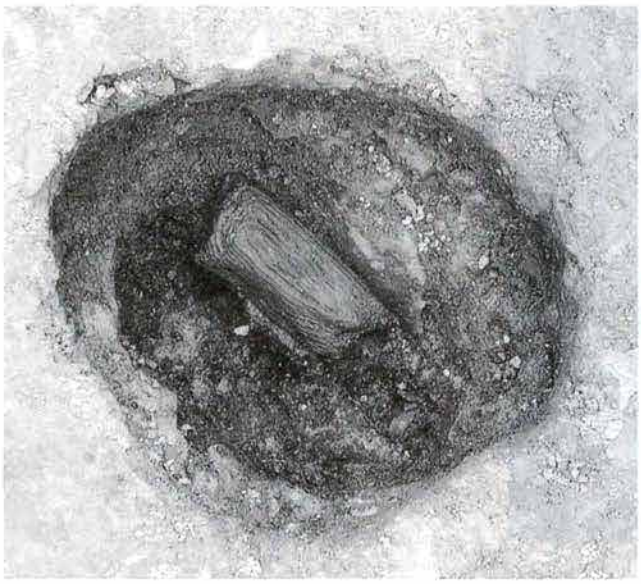


◀同上（東から）



▶第1面D-3グリッドPit（東から）

図版2



▲第１面 Pit2（東南から）

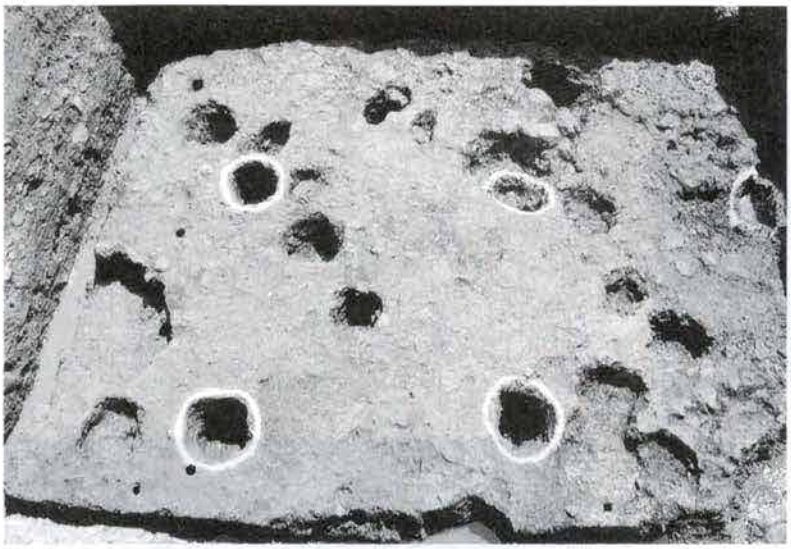
▲第１面上かわらけ出土状況（東から）

◀第１面上かわらけ出土状況（東から）

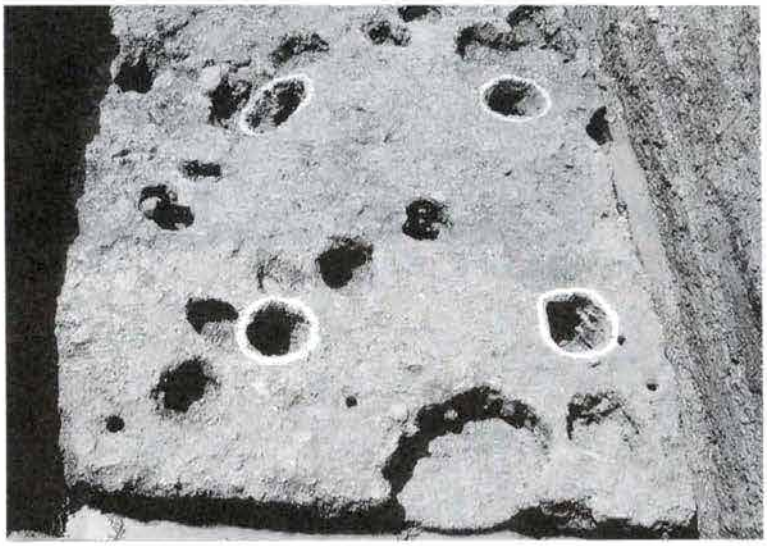
◀同上（手前は折敷）（東から）

▲第１面上かわらけ出土状況（東から）

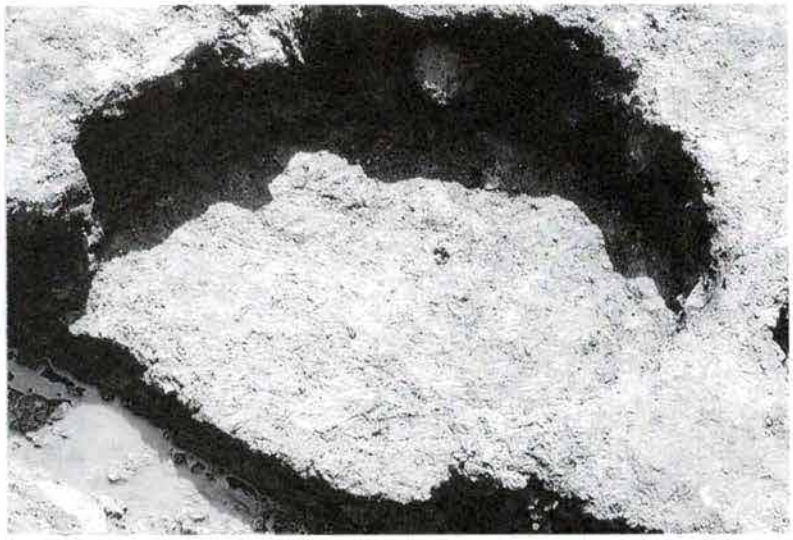
▶第１面金環出土状況（北から）



◀第2面全景（北から）

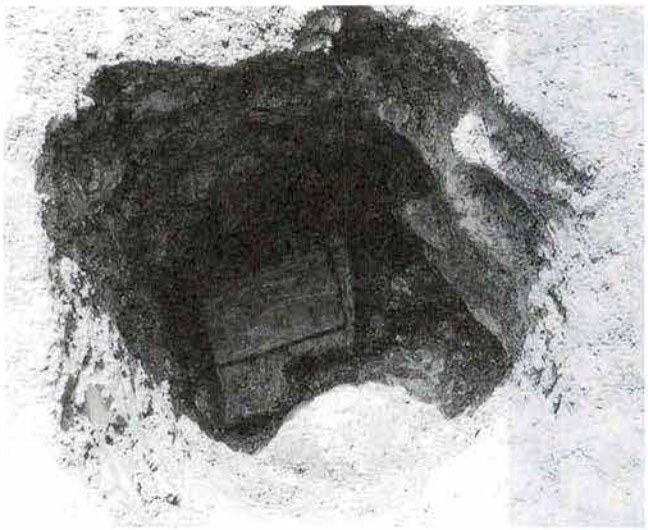


◀同上（東から）

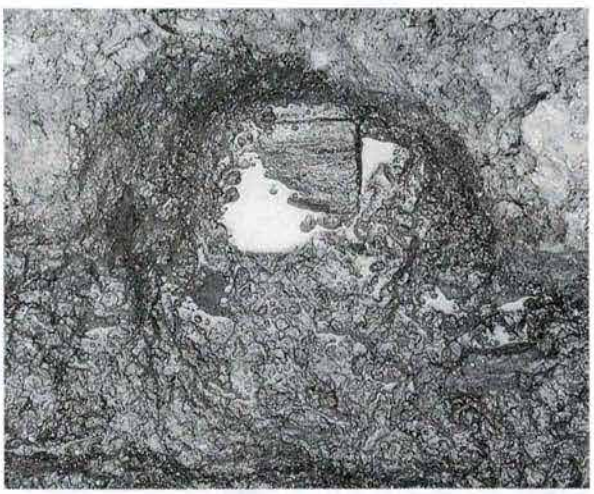


▶第2面土壙1（北東から）

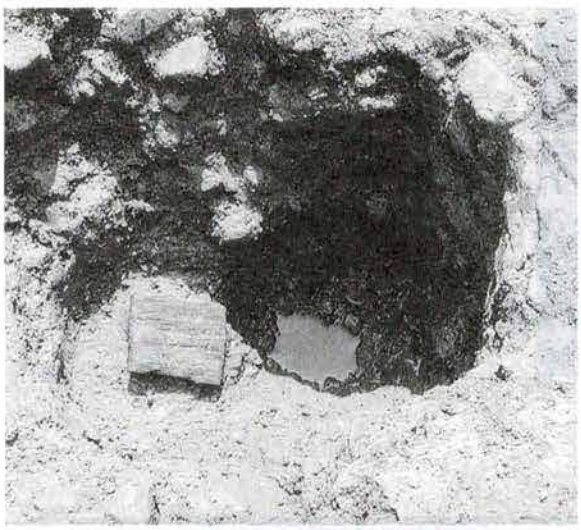
図版4



▲第２面建物１－２（東から）

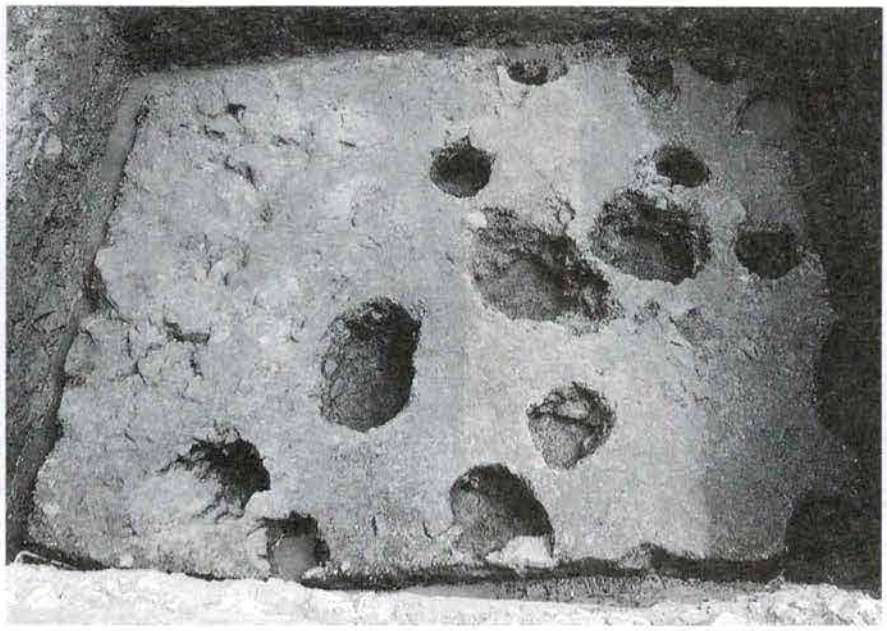


▲同左上－３（西から）



▲同上－４（東から）

▲同上－５（東から）

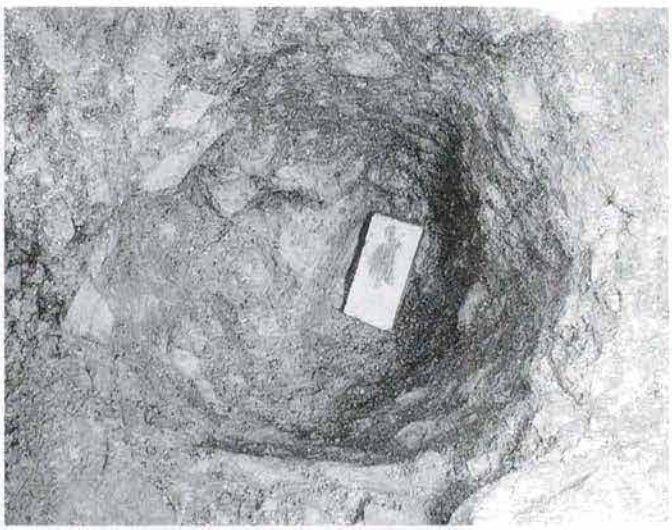


▲第3面全景（北から）

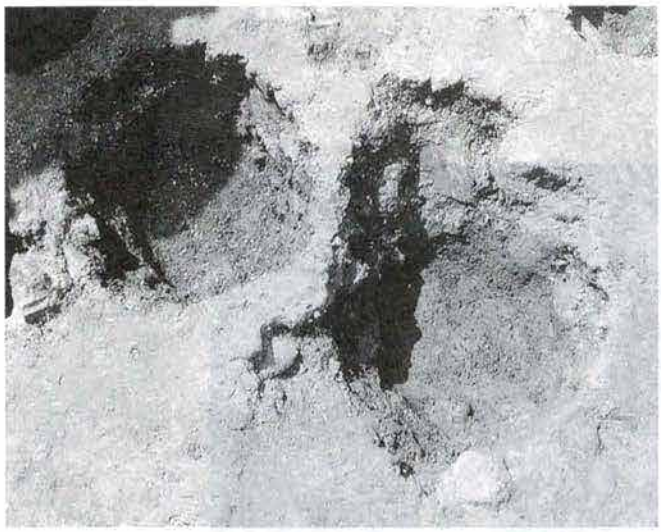
▲同上（東から）

図版6

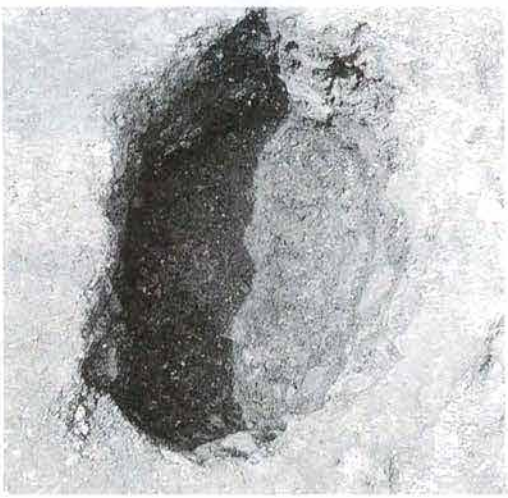
▲第３面建物１－１（南から）



▲同左－２（南から）

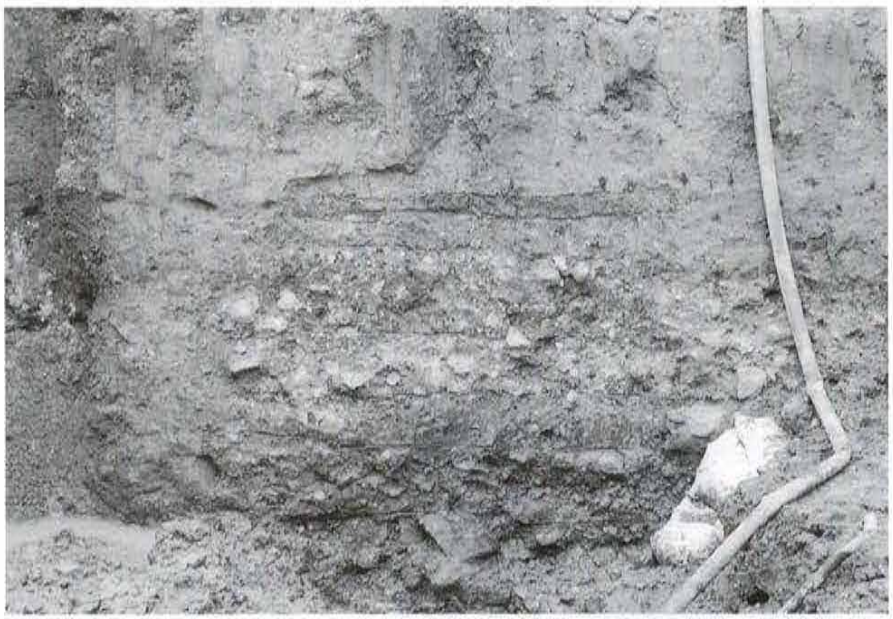


◀第３面土壙１（左）（南から）



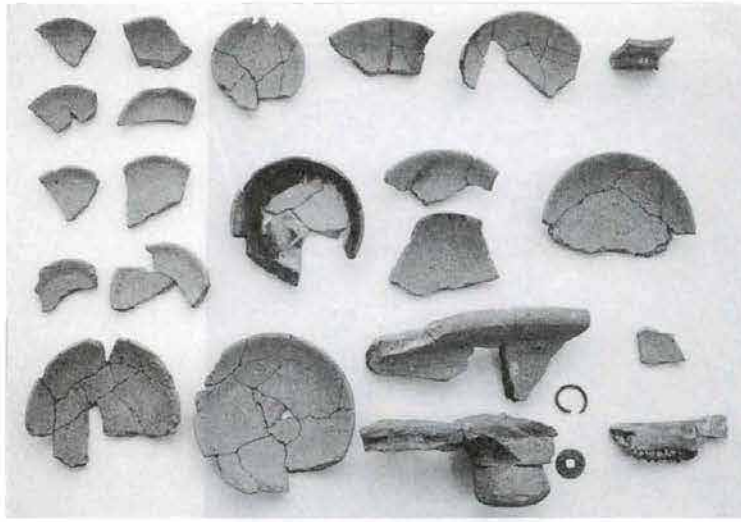
▶第３面土壙２（南から）

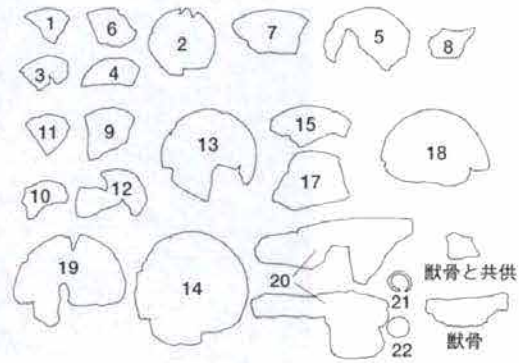
▲調査区北側崩落状況（南から）



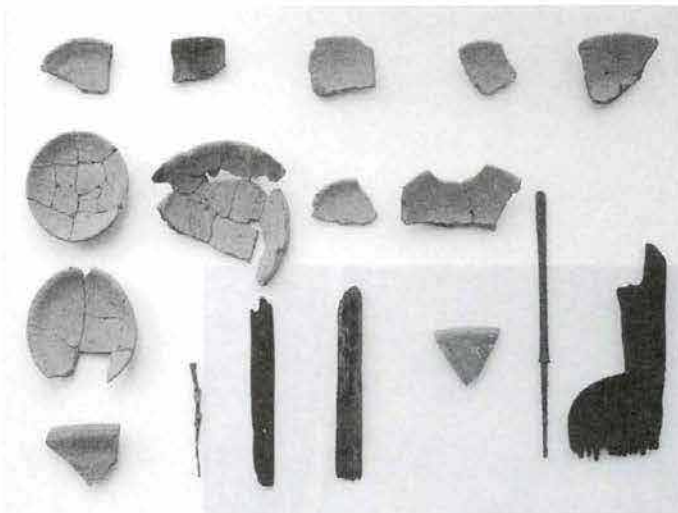
▲調査区東壁セクション（西から）

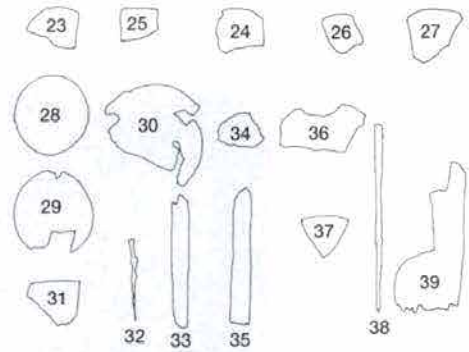
図版8



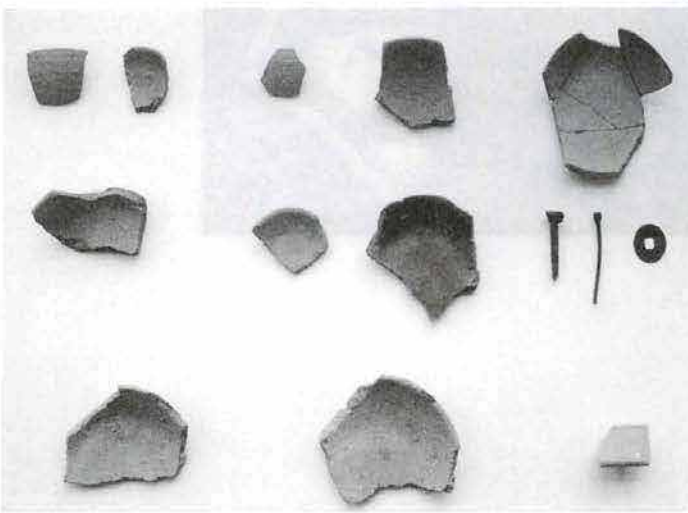


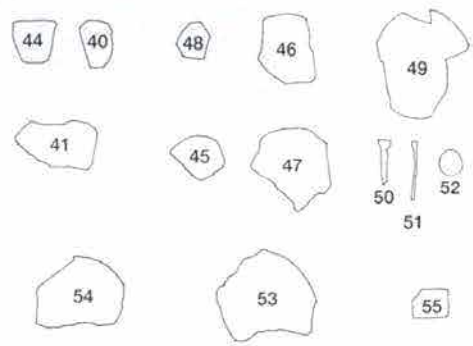
▲第1面





▲第2面、第3面





▲第4面、灰層

（番号は出土遺物実測図及び観察表の番号と対応）

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

おおくらばくふしゅうへんいせきぐん

雪ノ下四丁目567番７地点

例　　言

1．本報は大倉幕府周辺遺跡群（No.49）内、雪ノ下四丁目567番７地点における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査期間　　平成14年６月25日～同年７月22日

3．調査面積　　25m²

4．調査体制

担　当　者　　馬淵和雄

調　査　員　　伊丹まどか・鍛治屋勝二（資料整理）

調査補助員　　石元道子・沖元道・松原康子（資料整理）・吉田智哉（同）

作　業　員　　宮崎明・柴崎英輔・沼上三代治

5．本報作成分担

遺構図整理　　伊丹・鍛治屋・松原

遺物実測・図版作成　　松原・沖元・吉田

遺物写真撮影　　沖元・吉田

原稿執筆・編集・総括　　馬淵

6．報文中の「（土師器）Ｔ種」・「（同）Ｒ種」は、手づくね成形種・ロクロ成形種の略である。

目　　次

第１章　調査地点について ……201

第２章　調査概要 ……204

第３章　調査成果 ……206

１．近世 ……206

２．鎌倉時代前期 ……206

３．古代～平安時代末期 ……207

４．弥生時代 ……207

第４章まとめ ……207

挿図目次

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 ……202

図２　調査区設定図 ……204

図３　土層図 ……205

図４　遺構全図 ……206

図５　溝状遺構 ……207

図６　河道１出土遺物 ……208

図７　中世以前・遺構外採集遺物 ……209

表　目　次

表１　河道１出土遺物観察表（１） ……209

表２　河道１出土遺物観察表（２） ……210

表３　河道２および遺構外出土遺物観察表 …210

表４　土師器技法別構成 ……210

表５　器種別構成 ……211

表６　産地別構成 ……211

図版目次

図版１－１　調査地点鳥瞰 ……212

１－２　調査地点近景 ……212

１－３　調査区西壁土層断面 ……212

図版２－１　調査区東壁土層断面 ……213

図版２－２　河道（西から） ……213

２－３　調査区全景（西から） ……213

図版３　出土遺物 ……214

第１章　調査地点について

位　置　大倉幕府跡は、六浦道（県道金沢鎌倉線）が鶴岡八幡宮東の筋違橋交差点から旧「岐れ道」交差点（関取橋）まで約350m直線をなす、その北側一帯とされる。神奈川県遺跡台帳に「大倉幕府周辺遺跡群（№49）」とされているのは、「大倉幕府跡」に指定された場所の東・西・南側の一帯である。調査地点は幕府跡東南角から20～30mという至近の位置にあり、六浦道南側に面している。地番は鎌倉市雪ノ下四丁目567番７。なお、県遺跡台帳で大倉幕府西限が横浜国大付属小学校校庭の東縁になっているのは、『鎌倉市史　総説編』(高柳1959) 以来の明白な間違いである。これは明治時代の師範学校設置時に敷設された道であり、それ以前に存在した筋違橋から北上する道が幕府西限を示す。

地　勢　一帯は滑川右岸の崖線上にあり、現況の河岸までの距離12～13mという至近の場所に位置する。地勢上からみれば、この付近は朝比奈峠から下ってきた川が狭い谷間を抜け、それにいくつかの支流が合流して市内中心部の沖積平野を形成し始めるあたりである。調査地点の東180mで北から二階堂川が、同じく東60mで南から大御堂川が流れ込み、さらにすぐ西側で、北から東御門川が流れ込む。調査地点の現地表標高は10.2m前後で、前面の六浦道の現況路面より30ｃｍほど高い。また、この付近の滑川の河床が5.2m程度なので、５ｍ前後の比高差があることになる。

歴史的環境　近在の崖線上には弥生時代中期後半～後期の大きな集落があり（地点７ほか，馬淵1998・同1999)、また律令期の集落も指呼の距離で発見されている（地点58・5,馬淵ほか1985・馬淵1993)。縄文時代の遺物も、若干高い場所になる荏柄天神社の前面で採集されている（赤星1959)。

鎌倉時代に入ると、この付近は鎌倉の中心となる。治承四年（1180）年、源頼朝の「新亭」が大倉の地に造られ、以後「大倉幕府」と呼ばれた。南北朝時代の歴史書『保暦間記』は、そこは先祖の頼義がはじめて鎌倉に居宅をかまえたところだといっているが、真偽は不明である。幕府が若宮大路の東側に移転した鎌倉時代中期以後は記事が減るが、大倉幕府東南角は、本来の二階堂大路が六浦道から分岐する地点でもあり（現在の大塔宮行きのバス通りは明治にできた道)、かつて「大倉辻」と呼ばれた場所であった可能性がある。「大倉辻」とは、鎌倉幕府が『吾妻鏡』建長三年（1251）12月３日・同文永二年（1265）３月５日の二度、「鎌倉中」の商業地区を指定したときに現れる地名である（『吾妻鏡』同日条)。鎌倉後期に調査地点一帯がかなり繁華な場所であったことがうかがえる。

また、滑川をはさんだ調査区東南の谷には、頼朝が父義朝および義朝と同時に死んだ鎌田正清追福のために建立した勝長寿院があった。谷の名称はそれにちなんで「大御堂ガ谷」という。大倉御所の南にあるので、「南御堂」ともいう。寺の造営は元暦元年（1184）11月26日に「地曳始」がおこなわれて始まり、文治元年（1185）10月24日の「供養」で完成をみている（『吾妻鏡』同日条)。廃絶時期についてはよくわかっていないが、『快元僧都記』天文九年（1540）９月23日条に、遷宮のときの「簾中方の社参のこと、勝長寿院に尋ねられ」とあるのを最後に健在を示す記事は見当たらなくなる。調査区のすぐ東の滑川にかかる橋を「大御堂橋」という。

大倉幕府東南角の関取橋西詰には、天文十七年（1548)、北条氏康により荏柄社造営料徴収のための関所が置かれた（「荏柄天神社造営関定書案」『神奈川県史　資料編』３－6863)。以来この地には「関取場」の名がついた。賦課の対象は「商人方」と「道者方」に分けられ、荷物や馬に関銭がかけられている。また他国への飛脚からも徴収しているが、往来の道俗や地元民には課していない。関取場については、発掘調査でもそれらしき礎石建物が発見されている（地点18,馬淵ほか1990)。

その他近辺の発掘調査地点については、図１を参照してほしい。

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡（網目内が大倉幕府周辺遺跡群）

図１調査地点名

調査地点名の「地点」「遺跡」は省略。発行者が鎌倉市教育委員会の場合はこれを省略。調査団の名称が遺跡名と同じ場合は「調査団」とのみ記す

略称はつぎのとおり

『市緊急報告書』―『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』

『急傾斜地報告書』―『鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』

大倉幕府周辺遺跡群（No.49） １．雪ノ下四丁目567番７（本地点） ２．雪ノ下字大倉耕地562番16（菊川泉2001『市緊急報告書』17－２） ３．雪ノ下字天神前562番29（福田ほか1996『市緊急報告書』12－１） ４．雪ノ下字大倉耕地565番４（菊川英1991『市緊急報告書』７） ５．二階堂字荏柄38番１（馬淵1993,『市緊急報告書』９－２） ６．二階堂字荏柄58番４（原ほか2002,『市緊急報告書』18－１） ７．雪ノ下四丁目２－23（1980・1981年調査，未報告） ８．雪ノ下四丁目620番５（馬淵1998『市緊急報告書』14－２／同1999『大倉幕府周辺遺跡群 ―雪ノ下四丁目620番５地点―』，調査団） ９．大倉南御門（1980年河野真知郎調査，未報告） 10．雪ノ下四丁目620番４（1984年市教委立会い調査，未報告） 11．大倉南御門Ｂ（1983年市教委立会い調査，未報告） 12．雪ノ下四丁目610番２（1983・1984年玉林美男調査，未報告） 13．大倉南御門（1980年手塚直樹調査，未報告） 14．雪ノ下三丁目606番１（菊川英1993『市緊急報告書』９－３） 15．雪ノ下三丁目607番ほか（菊川英1994『市緊急報告書』10－１） 15ｂ．雪ノ下四丁目580番10ほか（原ほか2001『市緊急報告書』17－２）

大倉幕府跡（No.253） 16．雪ノ下三丁目618番４（汐見ほか2002『市緊急報告書』18－１） 17．雪ノ下三丁目651番８ほか（汐見1999『市緊急報告書』15－２） 18．雪ノ下字大倉耕地569番１（馬淵ほか1990『大倉幕府周辺遺跡群―雪ノ下字大倉耕地569番１地点―』，調査団） 19．雪ノ下四丁目707番１（1990年宮田真調査，未報告）

政所跡（No.247） 20．雪ノ下三丁目965番１（瀬田1992『市緊急報告書』８） 21．雪ノ下三丁目966番１（瀬田1992『市緊急報告書』８） 22．雪ノ下三丁目970番２（1991年手塚直樹調査，未報告） 23．雪ノ下三丁目970番２ほか（野本1999『市緊急報告書』15－２） 24．雪ノ下三丁目987番１・２（手塚ほか1991,調査団） 25．雪ノ下三丁目987番（手塚ほか1993『市緊急報告書』９－３） 26．雪ノ下三丁目989番４（宗臺秀ほか2001『市緊急報告書』17－１）

鶴岡八幡宮旧境内（No.56） 27．宿泊棟用地（1991年斉木秀雄調査，未報告） 28．研修道場用地（斉木ほか1983,調査団） 29．直会殿用地（斉木ほか1983,調査団） 30．国宝館収蔵庫用地（松尾ほか1985）

北条小町邸跡（No.282） 31．雪ノ下一丁目395番ほか（菊川英1989『市緊急報告書』５） 32．雪ノ下一丁目401番５（馬淵ほか2003『市緊急報告書』19） 33．雪ノ下一丁目400番１（馬淵ほか2002『市緊急報告書』18－２） 34．雪ノ下一丁目432番２（菊川英1989『市緊急報告書』５）

北条高時邸跡（No.281） 35．小町三丁目426番３（原ほか1996『市緊急報告書』12－１）

東勝寺跡（No.246） 36．小町三丁目468番10（宮田2002『市緊急報告書』18－１） 37．第１・２次調査（赤星ほか1977『東勝寺跡』，調査団） 38～40．第３次調査（菊川英ほか1998『東勝寺跡』） 41．小町三丁目523番14（汐見ほか2001『市緊急報告書』17－２）

田楽辻子周辺遺跡（No.33） 42．浄明寺字釈迦堂621番ほか（手塚ほか1989『浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡』調査団） 43．釈迦堂ヶ谷（1970年奥田直栄調査，未報告） 44．浄明寺田楽辻子遺跡（手塚ほか1990『釈迦堂田楽辻子遺跡―浄明寺釈迦堂658番地点―』調査団） 45．浄明寺一丁目661番ほか（森2000『市緊急報告書』16－１） 46．浄明寺字宅間562番33（大上1992『市緊急報告書』８）

浄妙寺旧境内遺跡（No.408） 47．浄明寺三丁目６番３ほか地点（大河内1996『市緊急報告書』12－２） 48．浄明寺三丁目16番１地点（宗臺秀2002『市緊急報告書』18－２）

杉本寺周辺遺跡（No.158） 49．杉本寺前ポンプ場（1985年市教委立会い調査，未報告） 50．二階堂字杉本912番１ほか地点（馬淵ほか2002『杉本寺周辺遺跡』） 51．杉本寺境内（未報告） 52．杉本寺周辺遺跡内やぐら（田代1988ａ『昭和62年度急傾斜地報告書』調査団） 53．杉本寺周辺遺跡内やぐら（田代ほか1996『平成６年度急傾斜地報告書』調査団） 54．杉本城跡内やぐら（継ほか1991『平成元年度急傾斜地報告書』調査団）

横小路周辺遺跡（No.259） 55．二階堂字荏柄９番１（菊川英1990『市緊急報告書』６） 56．二階堂字荏柄10番６ほか（福田ほか2000『市緊急報告書』16－２） 57．雪ノ下五丁目557番１地点（野本1998『市緊急報告書』14－２） 58．向荏柄遺跡（馬淵ほか1985『向荏柄遺跡発掘調査報告書』） 59．向荏柄遺跡第２地点（馬淵ほか1985『向荏柄遺跡発掘調査報告書』） 60．二階堂字横小路110番３地点（宗臺秀ほか1996『横小路周辺遺跡―永福寺関連遺跡の調査―』調査団） 61．二階堂字横小路93番11地点（野本ほか1999『市緊急報告書』15－２）

理智光寺跡（No.265） 62．二階堂字稲葉越802番７地点（大河内ほか1991『市緊急報告書』７）

報国寺境内（No.） 63．報国寺境内やぐら（田代1988『昭和62年度急傾斜地報告書』調査団） 64．報国寺境内やぐら（田代1994『平成５年度急傾斜地報告書』調査団） 報国寺旧境内（1979年斉木秀雄調査，未報告）

第１章引用・参考文献（上記以外）

赤星直忠1959 『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館

高柳光寿1959 『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館

第２章　調査概要

調査にいたる経緯　平成14年４月、個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、基礎工事に際して地盤の柱状改良をおこなうものであったため確認調査を実施したところ、現地表下40ｃｍ以下に中世遺物包含層および遺構面の存在が確認され、これにより当該土木工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことが判明した。建築主との協議において工事計画の変更は困難との意向が示されたため、文化財保護法第57条の２の届出手続きを行い、施工者との工程調整および発掘調査の準備が整った平成14年６月25日から７月22日まで現地での発掘調査を実施した。

測量方眼の設定　基準線は測量の便宜を優先し、調査区壁方向に平行または直交させた。まず調査区外北西の任意点を基準１－Ａとし、そこから東に算用数字を付した南北軸を、南にアルファベットを付した東西軸を５ｍおきに派生させた。ただし調査区が狭いため、実際に中を通過するのは２軸とＢ軸のみである。交点２－Ｂの座標成果はつぎのとおり。

〔ＡＲＥＡ９〕　Ｘ－75　407.800　　Ｙ－24324.900　（鎌倉市４級　№176・183を使用）

Ｘ系と２軸の偏差　Ｎ－36°52′－Ｅ

調査経過　調査は平成14年６月25日から７月22日まで実施した。その間のおもな経過はつぎのとおり。

６月25日　作業開始
７月２日　河道掘削開始
７月６日　中世河道写真撮影と平面実測
７月10日　台風
７月15日　中世以前河道写真撮影
７月16日　台風
７月18日　全景写真撮影と深掘り
７月22日　機材撤収

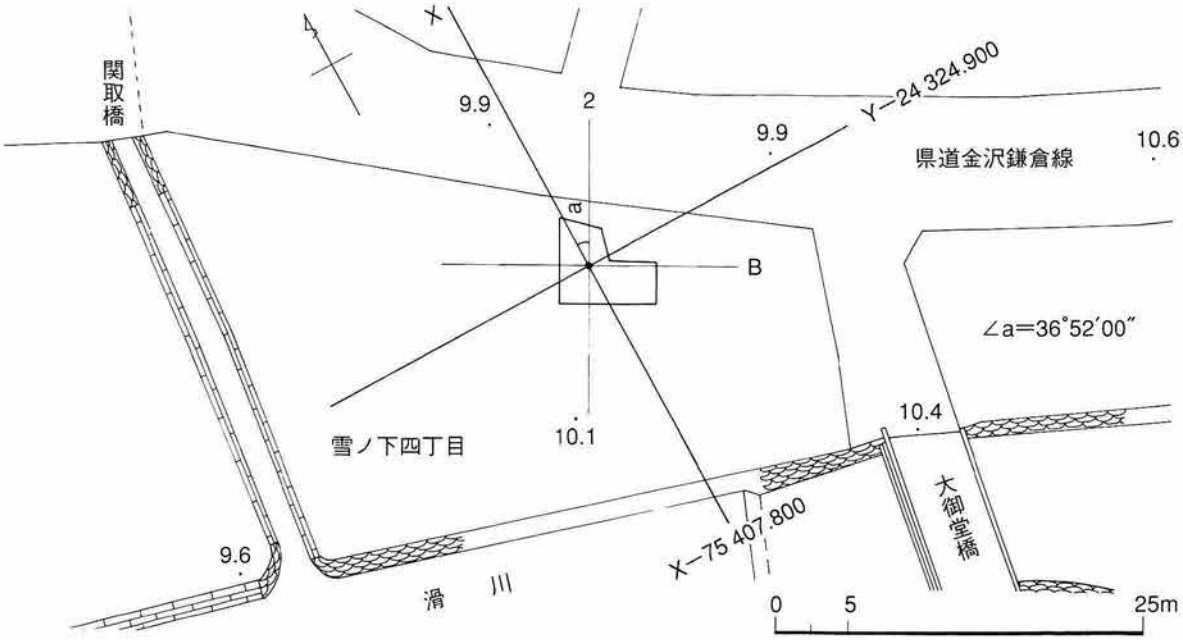
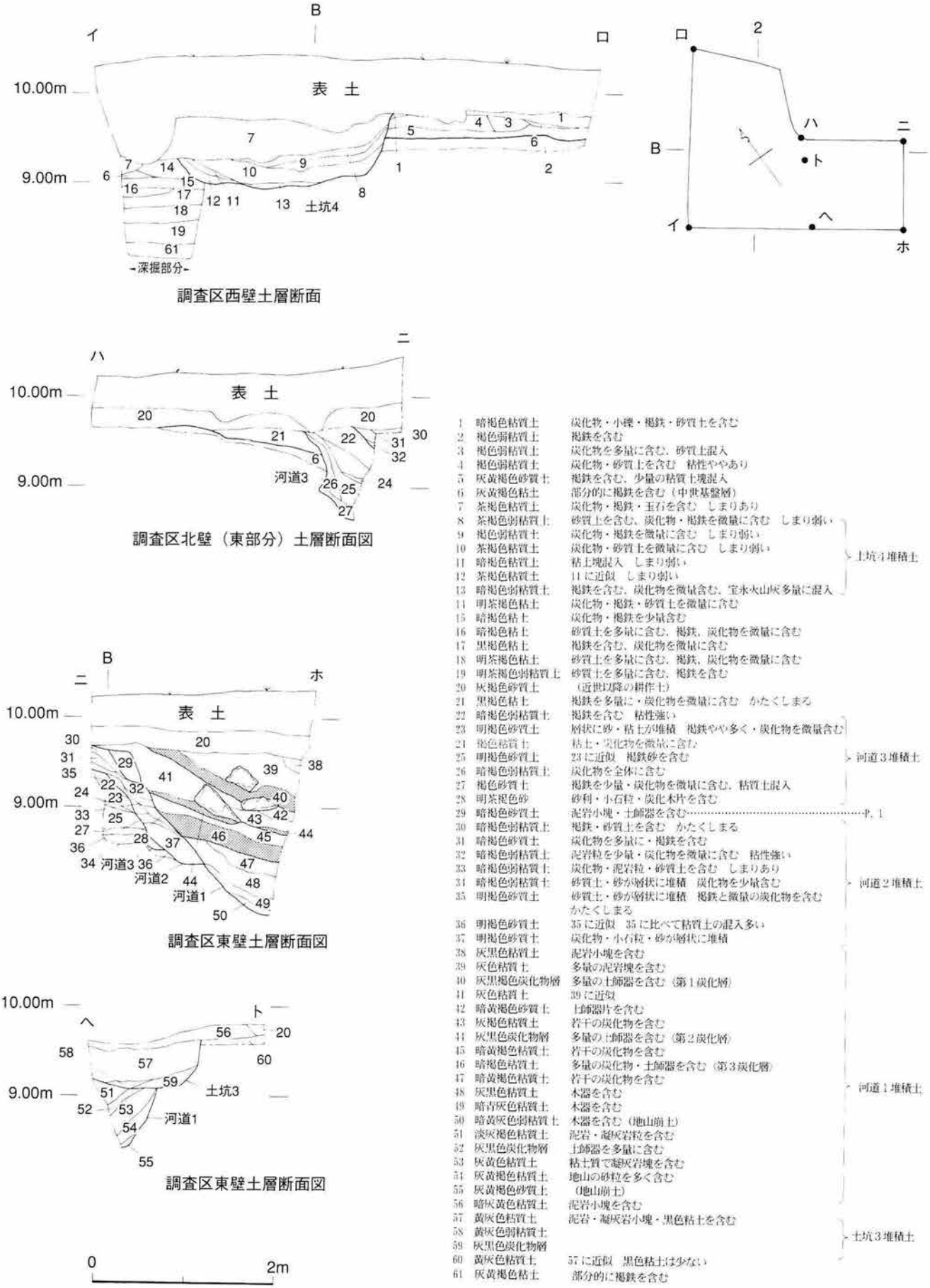


図２　調査区設定図



調査区西壁土層断面

調査区北壁（東部分）土層断面図

調査区東壁土層断面図

調査区東壁土層断面図

1	暗褐色粘質土	炭化物・小礫・褐鉄・砂質土を含む	
2	褐色弱粘質土	褐鉄を含む	
3	褐色弱粘質土	炭化物を多量に含む，砂質土混入	
4	褐色弱粘質土	炭化物・砂質土を含む　粘性ややあり	
5	灰黄褐色砂質土	褐鉄を含む，少量の粘質土塊混入	
6	灰黄褐色粘土	部分的に褐鉄を含む（中世基盤層）	
7	茶褐色粘質土	炭化物・褐鉄・玉石を含む　しまりあり	
8	茶褐色弱粘質土	砂質土を含む，炭化物・褐鉄を微量に含む　しまり弱い	土坑4堆積土
9	褐色弱粘質土	炭化物・褐鉄を微量に含む　しまり弱い	土坑4堆積土
10	茶褐色粘質土	炭化物・砂質土を微量に含む　しまり弱い	土坑4堆積土
11	暗褐色粘質土	粘土塊混入　しまり弱い	土坑4堆積土
12	茶褐色粘質土	11に近似　しまり弱い	土坑4堆積土
13	暗褐色弱粘質土	褐鉄を含む，炭化物を微量含む，宝永火山灰多量に混入	土坑4堆積土
14	明茶褐色粘土	炭化物・褐鉄・砂質土を微量に含む	
15	暗褐色粘土	炭化物・褐鉄を少量含む	
16	暗褐色粘土	砂質土を多量に含む，褐鉄，炭化物を微量に含む	
17	黒褐色粘土	褐鉄を含む，炭化物を微量に含む	
18	明茶褐色粘土	砂質土を多量に含む，褐鉄，炭化物を微量に含む	
19	明茶褐色弱粘質土	砂質土を多量に含む，褐鉄を含む	
20	灰褐色砂質土	（近世以降の耕作土）	
21	黒褐色粘土	褐鉄を多量に・炭化物を微量に含む　かたくしまる	
22	暗褐色弱粘質土	褐鉄を含む　粘性強い	
23	明褐色砂質土	層状に砂・粘土が堆積　褐鉄やや多く・炭化物を微量含む	
24	褐色粘質土	粘土・炭化物を微量に含む	
25	明褐色砂質土	23に近似　褐鉄砂を含む	河道3堆積土
26	暗褐色弱粘質土	炭化物を全体に含む	河道3堆積土
27	褐色砂質土	褐鉄を少量・炭化物を微量に含む，粘質土混入	河道3堆積土
28	明茶褐色砂	砂利・小石粒・炭化木片を含む	河道3堆積土
29	暗褐色砂質土	泥岩小塊・土師器を含む……P. 1	
30	暗褐色弱粘質土	褐鉄・砂質土を含む　かたくしまる	河道2堆積土
31	暗褐色砂質土	炭化物を多量に・褐鉄を含む	河道2堆積土
32	暗褐色弱粘質土	泥岩粒を少量・炭化物を微量に含む　粘性強い	河道2堆積土
33	暗褐色弱粘質土	炭化物・泥岩粒・砂質土を含む　しまりあり	河道2堆積土
34	暗褐色弱粘質土	砂質土・砂が層状に堆積　炭化物を少量含む	河道2堆積土
35	明褐色砂質土	砂質土・砂が層状に堆積　褐鉄と微量の炭化物を含む　かたくしまる	河道2堆積土
36	明褐色砂質土	35に近似　35に比べて粘質土の混入多い	河道2堆積土
37	明褐色砂質土	炭化物・小石粒・砂が層状に堆積	河道2堆積土
38	灰黒色粘質土	泥岩小塊を含む	河道1堆積土
39	灰色粘質土	多量の泥岩塊を含む	河道1堆積土
40	灰黒褐色炭化物層	多量の土師器を含む（第1炭化層）	河道1堆積土
41	灰色粘質土	39に近似	河道1堆積土
42	暗黄褐色砂質土	土師器片を含む	河道1堆積土
43	灰褐色粘質土	若干の炭化物を含む	河道1堆積土
44	灰黒色炭化物層	多量の土師器を含む（第2炭化層）	河道1堆積土
45	暗黄褐色粘質土	若干の炭化物を含む	河道1堆積土
46	暗褐色粘質土	多量の炭化物・土師器を含む（第3炭化層）	河道1堆積土
47	暗黄褐色粘質土	若干の炭化物を含む	河道1堆積土
48	灰黒色粘質土	木器を含む	河道1堆積土
49	暗青灰色粘質土	木器を含む	河道1堆積土
50	暗黄灰色弱粘質土	木器を含む（地山崩土）	河道1堆積土
51	淡灰褐色粘質土	泥岩・凝灰岩粒を含む	河道1堆積土
52	灰黒色炭化物層	土師器を多量に含む	河道1堆積土
53	灰黄色粘質土	粘土質で凝灰岩塊を含む	河道1堆積土
54	灰黄褐色粘質土	地山の砂粒を多く含む	河道1堆積土
55	灰黄褐色砂質土	（地山崩土）	河道1堆積土
56	暗灰黄色粘質土	泥岩小塊を含む	河道1堆積土
57	黄灰色粘質土	泥岩・凝灰岩小塊・黒色粘土を含む	土坑3堆積土
58	黄灰色弱粘質土		土坑3堆積土
59	灰黒色炭化物層		土坑3堆積土
60	黄灰色粘質土	57に近似　黒色粘土は少ない	土坑3堆積土
61	灰黄褐色粘土	部分的に褐鉄を含む	

図3　土層図

第３章　調査成果

１．近世

表土は50～70cmの厚みがあり、それを除くと近世面がある。この面は暗褐色粘質土または灰褐色砂質土で構成され、西半部が一段落ちる。この落ちの線以西の１・２-Ｂに、円形土坑２基（土坑３・４）が検出された。なお土坑１・２は近・現代の攪乱坑であり、省略した。

土坑３（図３調査区中央部南北土層断面および図４近世遺構全図参照，個別図は省略）

位置：１・２-Ｂ　　大きさ：直径３ｍ(推計)・深さ52cm
平面形：円形　　断面形：逆台形　　主軸方位：不明
充塡土：図３参照　　出土遺物：なし

土坑４（図３調査区西壁土層断面および図４近世遺構全図参照，個別図は省略）

位置：１-Ａ・Ｂ　　大きさ：直径2.22ｍ・深さ80cm
平面形：円形　　断面形：逆台形　　主軸方位：不明
充塡土：図３参照　　出土遺物：なし

２．鎌倉時代前期

近世層は20～25cmの厚みがあり、その直下に中世基盤層の灰黄褐色粘土がはやくも現れる。このことは、調査地点が近世に基盤層まで削り取られたことを示すものだろう。この層からは、調査区東南部の２－Ｂで急傾斜の壁を持つ東西方向の大型の落込みを、また、西南角の１－Ｂで溝状の遺構を検出した。前者は、位置からみて旧滑川の岸（右岸）の可能性が高い。

河道１（図３調査区北・東・中央部南北土層断面図および図４鎌倉時代前期遺構全図参照，個別図は省略）

位置：２－Ｂ　　規模：幅1.5ｍ（調査区内現況）以上・深さ1.9ｍ（同前）以上　　平面形：やや西南方向に曲がり、非直線的　　主軸方位：Ｎ－80°－Ｗ（上流からみて）前後　　充塡土：図３参照　　出土遺物：図６・表１・２参照

特記事項：堆積土中に３枚の厚い炭化層があり、それぞれが一時期の川床だったとみられる。底面を入れると４期の変遷がたどれる。いずれの炭化層にも相当量の遺物が含まれていたが、いずれも手づくねの京都系土師器皿が多くみられ、鎌倉時代前期までにおさまるとみてよい。

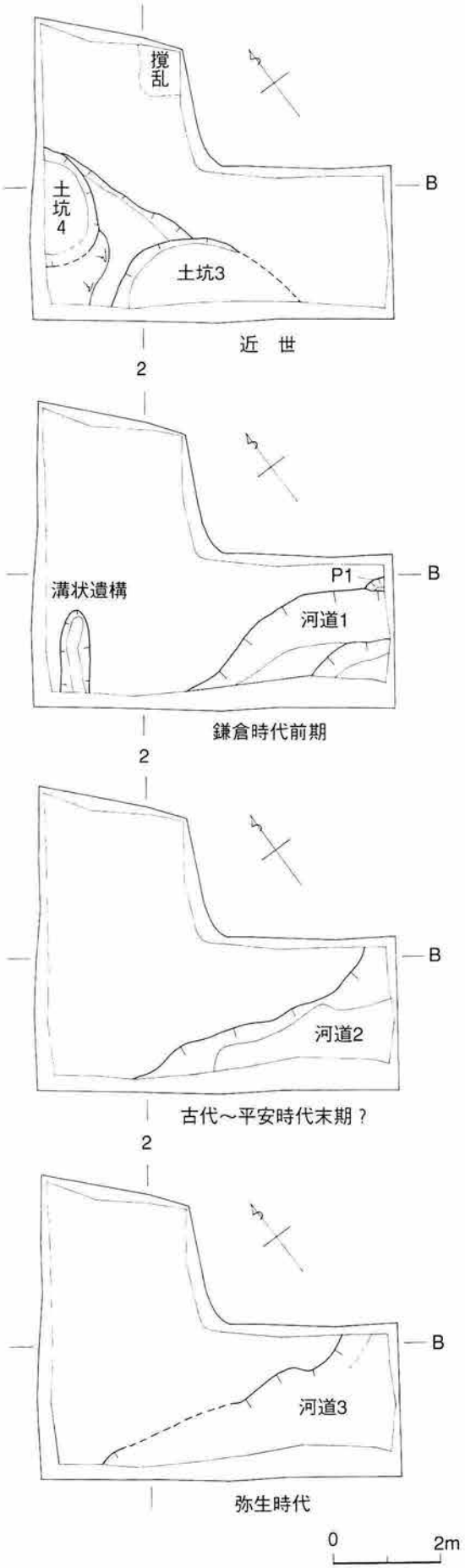


図４　遺構全図

3．古代～平安時代末期

河道１を除くと、下にあらたな落込みが出現する。これもまた河岸だと考えられる。

河道２（図３調査区北・東土層断面図および図４古代～平安時代末期遺構全図参照，個別図は省略）
位置：２－Ｂ　　規模：幅1.8m（調査区内現況）以上・深さ0.98m（同前）以上　平面形：やや北東方向に曲がり、非直線的　主軸方位：Ｎ－85°－Ｗ（上流からみて）前後　充塡土：図３参照　出土遺物：図７・表３参照
特記事項：河道１に切られる。詳細な年代は不明だが、古代かもしくは平安時代末期の中世に属する遺構であろう。図７－１は弥生時代中期後半～後期の高坏。

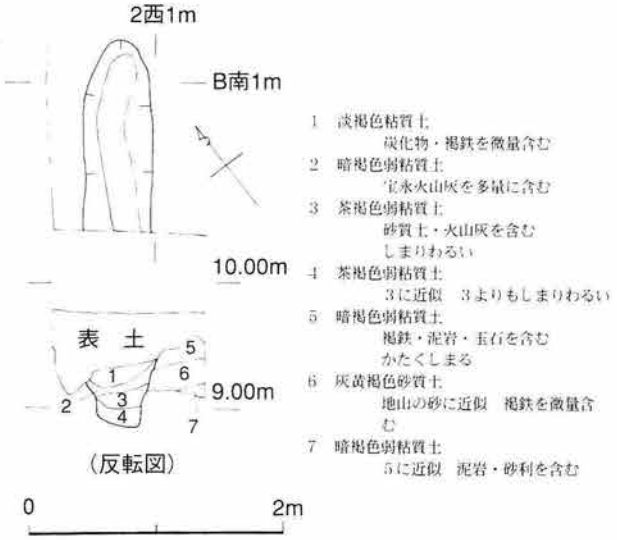


図５　溝状遺構

4．弥生時代

河道らしき落込みを検出した。位置は上記２条の河道とさほど変わらない。

河道３（図３調査区北・東土層断面図および図４弥生時代遺構全図参照，個別図は省略）
位置：１・２－Ｂ　　規模：幅２ｍ（調査区内現況）以上・深さ0.9m（同前）以上　　平面形：やや北東方向に曲がり、非直線的　　主軸方位：Ｎ－82°－Ｗ（上流からみて）前後　　充塡土：図３参照
出土遺物：図化可能なものなし
特記事項：図化し得なかったが、出土遺物には弥生時代中期後半～後期のものがみられる。当該期の集落は調査地点の西側に広く確認されている。

第４章　まとめ

滑川旧流路について簡単に触れておきたい。

調査区東南部を斜めによぎる急傾斜の大きな落込みが検出された。第３章でも指摘したとおり、位置からいってまず滑川の古い右岸とみてよい。弥生時代中期後半に始まり、鎌倉時代前期まではほぼ同じ場所にあった。以後はこの地から現在の滑川により近い方向（南）に移っていったのだろう。いずれの時代にも護岸らしき施設はない。

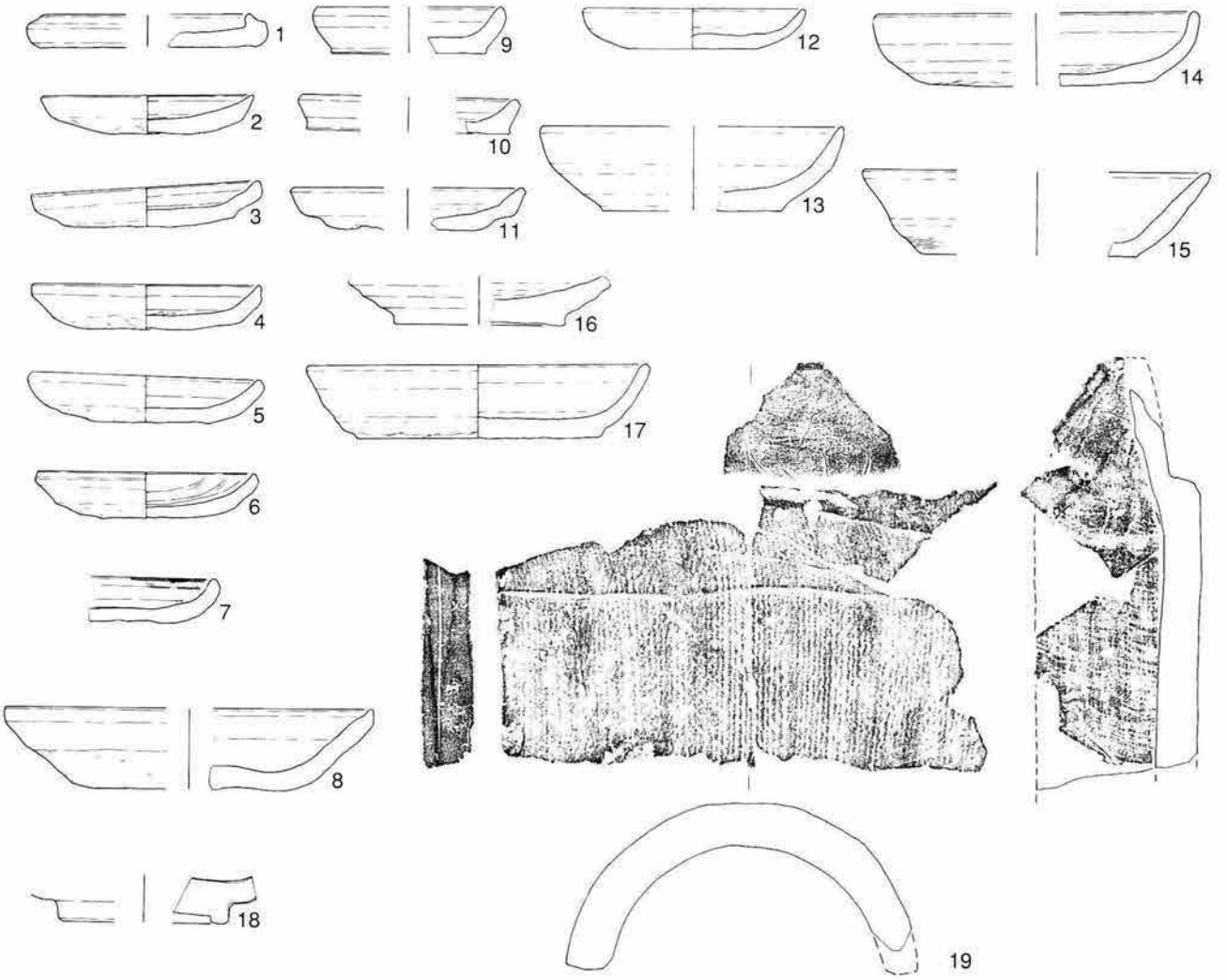
鎌倉時代前期の流路は、この時代のみでも４時期に分かれ、底面を除く３時期に炭化層が堆積していた。中期以後現況河川寄りに移行する契機として何らかの人為を想定するしかないが、あるいは北条泰時がおこなったという朝比奈切通し開鑿（実際には改良か＝石井1986・馬淵1994など）にともなう六浦道整備があったのかもしれない。

この地は近世に、中世遺構がほとんど残らないほど削り取られている。天文十七年（1548）の北条氏康による関取場造営に関連しているのだろうか。

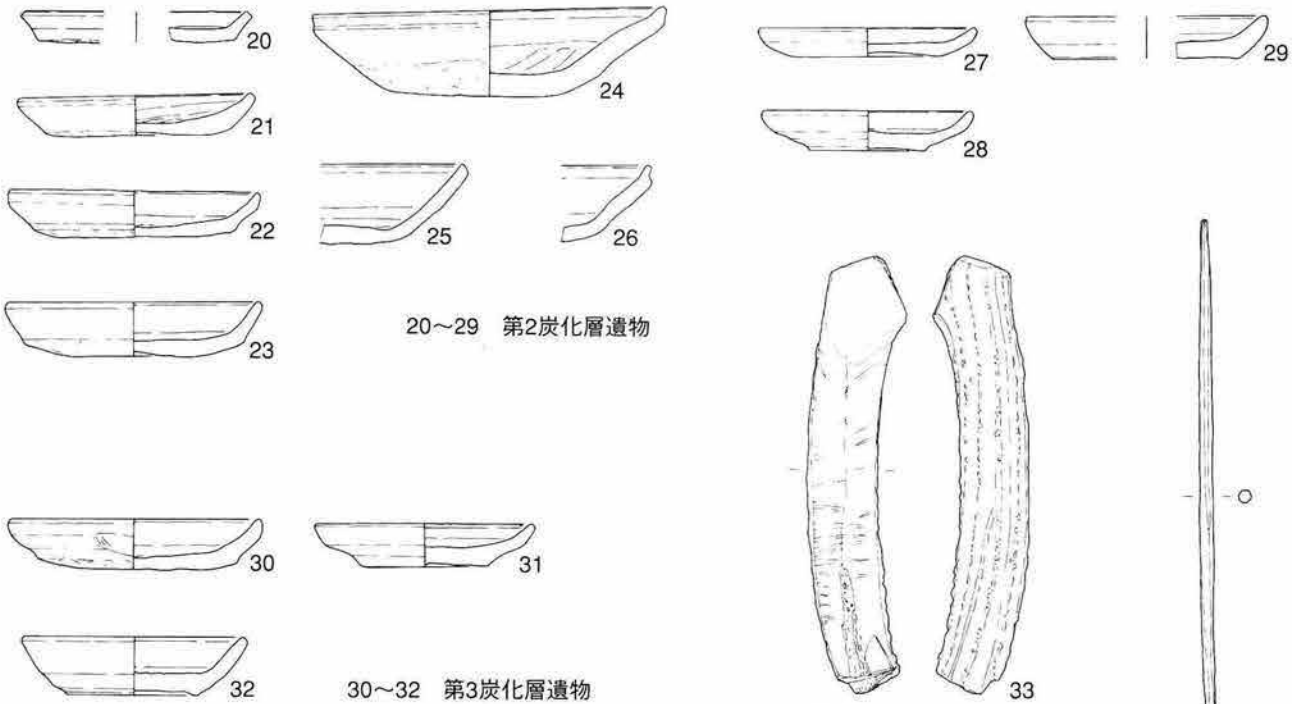
注

石井進1986「中世六浦の歴史」『三浦古文化』第40号　三浦古文化研究会

馬淵和雄1994「武士の都鎌倉　―その成立と構想をめぐって―」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社



1～19　第1炭化層遺物



20～29　第2炭化層遺物

30～32　第3炭化層遺物

33・34　最下層遺物

図6　河道1出土遺物

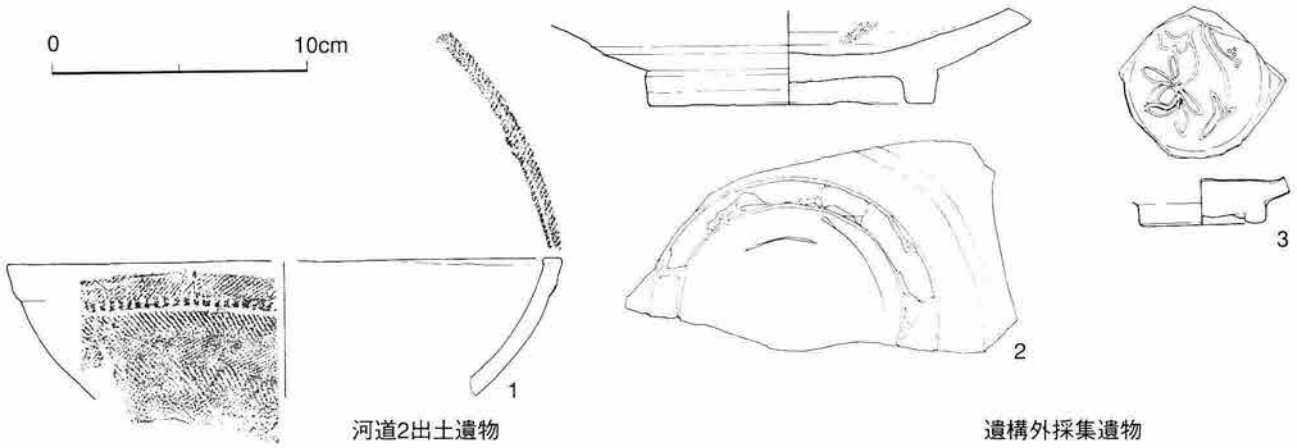


図７　中世以前・遺構外採集遺物

	番号	種　別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
第1炭化層	図6 1	土師器皿 T種内折小型	口径（10.2cm）底径（9.2cm）　器高1.4cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	2	土師器皿 T種小型	口径8.8cm　底径3.4cm　器高1.65cm　手づくね後内底部口縁部ナデ　外底面に擦痕あり 胎土は淡橙色（表面）～灰黒色（胎芯）で白色針状物質を含む　焼成きわめて良好
	3	土師器皿 T種小型	口径9.5cm　底径4.1cm　器高1.7cm　手づくね後内底部口縁部ナデ　外底面板状圧痕 胎土は淡橙色（表面）～灰黒色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	4	土師器皿 T種小型	口径9.5cm　底径4.4cm　器高1.9cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色（表面）～灰褐色（胎芯）で黒雲母細片を含む　焼成きわめて良好
	5	土師器皿 T種小型	口径（9.5cm）　底径（4.2cm）　器高2.0cm　手づくね後内底部口縁部ナデ　外底面に擦痕あり 胎土は淡橙色（表面）～灰褐色（外底面）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	6	土師器皿 T種小型	口径9.15cm　底径3.9cm　器高1.95cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は赤橙色（表面）～灰褐色（胎芯）で黒色粒子を含む　焼成きわめて良好
	7	土師器皿 T種小型	手づくね後内底部口縁部ナデ　口縁と内底面中央に油媒付着 胎土は淡橙色（表面）～灰褐色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	8	土師器皿 T種大型	口径（15.6cm）　底径（7.6cm）　器高3.4cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡褐色（表面）～暗灰色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	9	土師器皿 R種小型	口径（7.8cm）　底径（6.4cm）　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	10	土師器皿 R種小型	口径（9・0cm）　底径（8.4cm）　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ確認できず 胎土は淡橙色で白色針状物質を含む　焼成良好
	11	土師器皿 R種小型	口径（9.6cm）　底径（5.7cm）　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ　外底面板状圧痕 板状圧痕により底面がゆがむ　中心部の穴は穿孔によるものか 胎土は淡橙色（表面）～灰褐色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	12	土師器皿 R種小型	口径（9.1cm）　底径（5.4cm）　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ　外底面板状圧痕 胎土は淡褐色（表面）～灰黒色（内底部中央）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	13	土師器皿 R種大型	口径（12.6cm）　底径（7.6cm）　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ　外底面板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む
	14	土師器皿 R種大型	口径（13.4cm）　底径（9.1cm）　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ　外底面板状圧痕 胎土は淡褐色で黒雲母、白色針状物質を含む
	15	土師器皿 R種大型	口径（14.4cm）　底径（8.9cm）　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ確認できず 胎土は淡橙色（表面）～灰褐色（胎芯）で黒雲母細片、赤色粒子、白色針状物質を含む　焼成良好
	16	土師器皿 R種大型	底径（7.2cm）　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデなし 胎土は明淡橙色で黒雲母細片、赤色粒子を含む　焼成きわめて良好
	17	土師器皿 R種大型	口径（14.3cm）　底径（10.1cm）　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ　外底面板状圧痕 胎土は淡褐色（表面）～赤橙色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成良好
	18	竜泉窯青磁碗	底径（6.8cm）　ロクロ成形　削り出し高台 胎土は灰色で緻密　釉薬は灰緑色で透明　外底面は露胎
	19	丸瓦	残長18.2cm　巾（14.8cm）　高さ7.1cm　最大厚1.9cm　凸面縄目　凹面布目　側面ヘラ削り 胎土は灰褐色（表面）～明褐色（胎芯）で黒雲母細片、小石片を含む

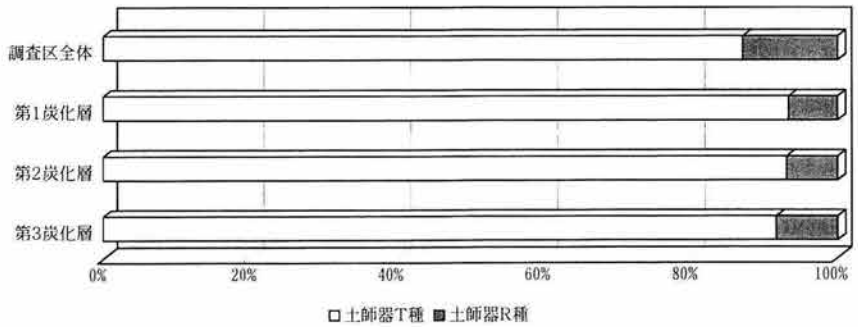
表１　河道１出土遺物観察表（１）

	番号	種　別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
第2炭化層	図6 20	土師器皿 T種小型	口径（8.8cm）　底径（5.2cm）　器高1.25cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡褐色（表面）～明褐色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む
	21	土師器皿 T種小型	口径9.2cm　底径6.0cm　器高1.6cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色（表面）～灰褐色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成きわめて良好
	22	土師器皿 T種小型	口径9.8cm　底径6.0cm　器高1.8cm　手づくね後内底部口縁部ナデ　外底面板状圧痕 胎土は明橙色（表面）～灰褐色（胎芯）　焼成きわめて良好
	23	土師器皿 T種小型	口径9.9cm　底径5.0cm　器高2.15cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は明淡褐色（表面）～灰褐色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成きわめて良好
	24	土師器皿 T種大型	口径（13.8cm）　底径4.2cm　器高（3.4cm）　手づくね後内底部口縁部ナデ　外底面板状圧痕 胎土は淡褐色（表面）～明灰褐色（胎芯）で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成きわめて良好
	25	土師器皿 T種大型	手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は明淡橙色で黒雲母細片を含む　焼成きわめて良好
	26	土師器皿 T種大型	手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は明淡褐色（表面）～明灰褐色（胎芯）で黒雲母細片を含む　焼成きわめて良好
	27	土師器皿 R種小型	口径（8.4cm）　底径（5.8cm）　器高1.65cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデなし 胎土は明淡褐色で黒雲母細片を含む　焼成きわめて良好
	28	土師器皿 R種小型	口径（8.1cm）　底径（4.6cm）　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデなし 胎土は淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成きわめて良好
	29	土師器皿 R種小型	口径（9.4cm）　底径（7.4cm）　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデ 胎土は明淡褐色で黒雲母細片を含む　焼成良好
第3炭化層	30	土師器皿 T種小型	口径9.8cm　底径4.3cm　器高2.0cm　手づくね後内底部口縁部ナデ　外底面に擦痕あり 胎土は明淡褐色で黒雲母細片、白色針状物質を含む　焼成きわめて良好
	31	土師器皿 R種小型	口径（8.5cm）　底径5.0cm　器高（1.7cm）　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデなし　口縁部に油煤付着 胎土は明褐色で黒雲母細片、赤色粒子、白色針状物質を含む　焼成きわめて良好
	32	土師器皿 R種小型	口径（8.6cm）　底径（5.2cm）　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部回転糸きり　内底部ナデなし 胎土は明淡橙色で小石片を含む　焼成は良好
河道1 最下層	33	鹿角未製品	長さ17.8cm　最大幅2.2cm　最大厚2.8cm　両端及び平坦な面にノコギリ痕
	34	箸	残長21.4cm　幅0.5cm　厚さ0.5cm　両口　ほぼ完形

表2　河道1出土遺物観察表（2）

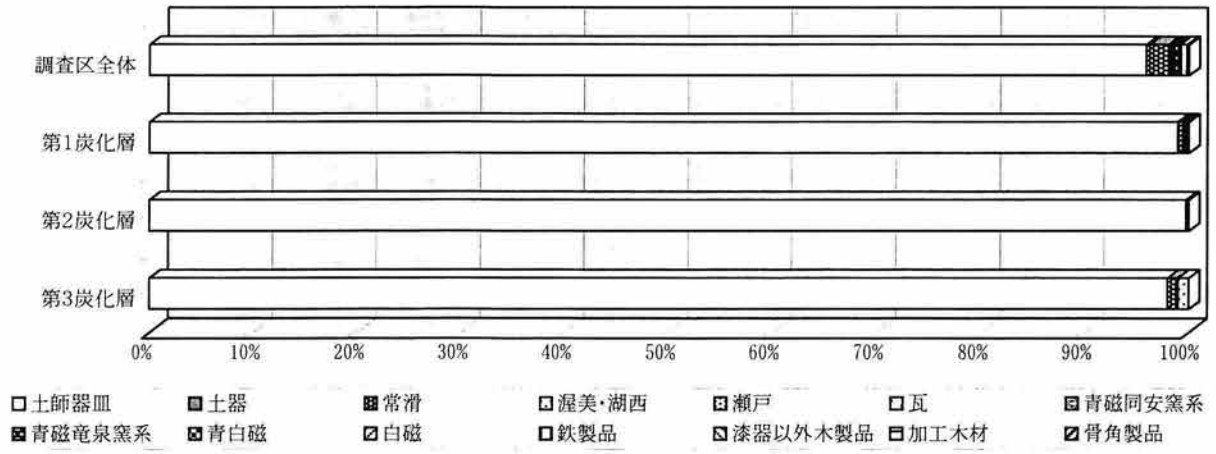
	番号	種　別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
河道2	図7 1	弥生土器 高坏	口径（22.0cm）　外面及び口縁部に羽状縄文　内面はミガキのち赤彩 胎土は明淡褐色で黒雲母細片、赤色粒子、小石片を含む
遺構外	2	唐津 鉢	底径（11.1cm）　左ロクロ回転　削り出し高台　高台に砂目積みによる剥離が4ヶ所　内面にも4ヶ所の砂目積みの痕跡 胎土は淡茶褐色で緻密　焼成良好　1610～17世紀第3四半期　二彩手唐津
	3	竜泉窯青磁 画花文碗	底径4.6cm　ロクロ成形　削り出し高台 胎土は明灰色で緻密　釉薬は灰緑色で透明　外底面露胎　高台内に窯クソ付着　内底面に蓮華唐草文

表3　河道2および遺構外出土遺物観察表



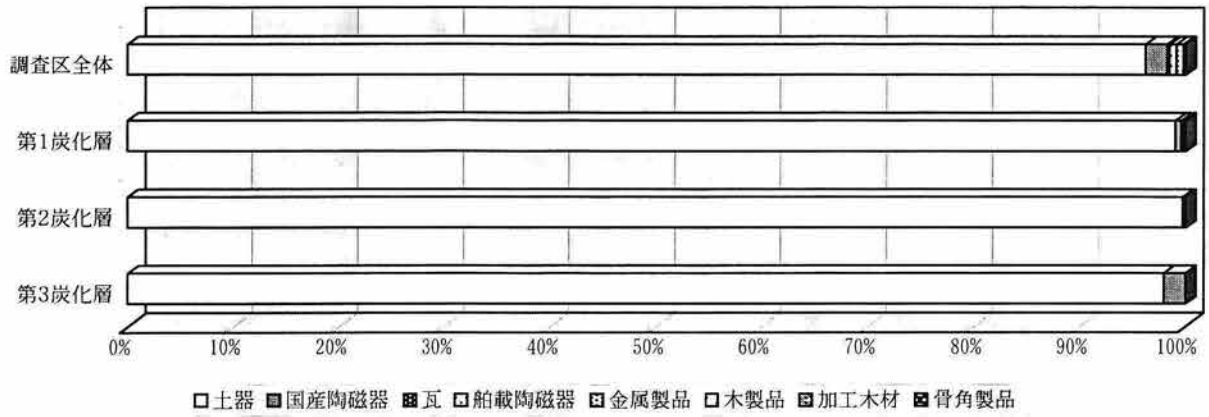
	土師器T種		土師器R種		総計
調査区全体	1999	87.06%	297	12.94%	2296
第1炭化層	1348	93.29%	97	6.71%	1445
第2炭化層	345	92.99%	26	7.01%	371
第3炭化層	87	91.58%	8	8.42%	95

表4　土師器技法別構成



	Ⅰ面上層		Ⅰ面下層		Ⅱ面		調査区全体	
土師器皿	1445	98.90%	371	99.73%	95	97.94%	2296	95.87%
土器	2	0.14%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.33%
常滑	7	0.48%	0	0.00%	1	1.03%	43	1.80%
渥美・湖西	1	0.07%	0	0.00%	1	1.03%	5	0.21%
瀬戸	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%
瓦	3	0.21%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.25%
青磁同安窯系	1	0.07%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.13%
青磁竜泉窯系	1	0.07%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.33%
青白磁	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.08%
白磁	1	0.07%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.08%
鉄製品	0	0.00%	1	0.27%	0	0.00%	16	0.67%
漆器以外木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.13%
加工木材	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%
総計	1461	100%	372	100%	97	100.00%	2395	100%

表5　産地別構成



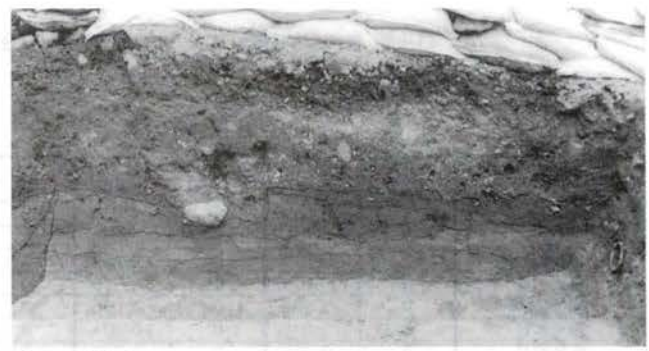
	Ⅰ面上層		Ⅰ面下層		Ⅱ面		調査区全体	
土器	1447	99.04%	371	99.73%	95	97.94%	2304	96.20%
国産陶磁器	8	0.55%	0	0.00%	2	2.06%	49	2.05%
瓦	3	0.21%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.25%
舶載陶磁器	3	0.21%	0	0.00%	0	0.00%	15	0.63%
金属製品	0	0.00%	1	0.27%	0	0.00%	16	0.67%
木製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.13%
加工木材	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%
総計	1461	100%	372	100%	97	100%	2395	100%

表6　器種別構成

図版1

1．調査地点鳥瞰（白い丸印）

2．調査地点近景（手前の道路が六浦道）



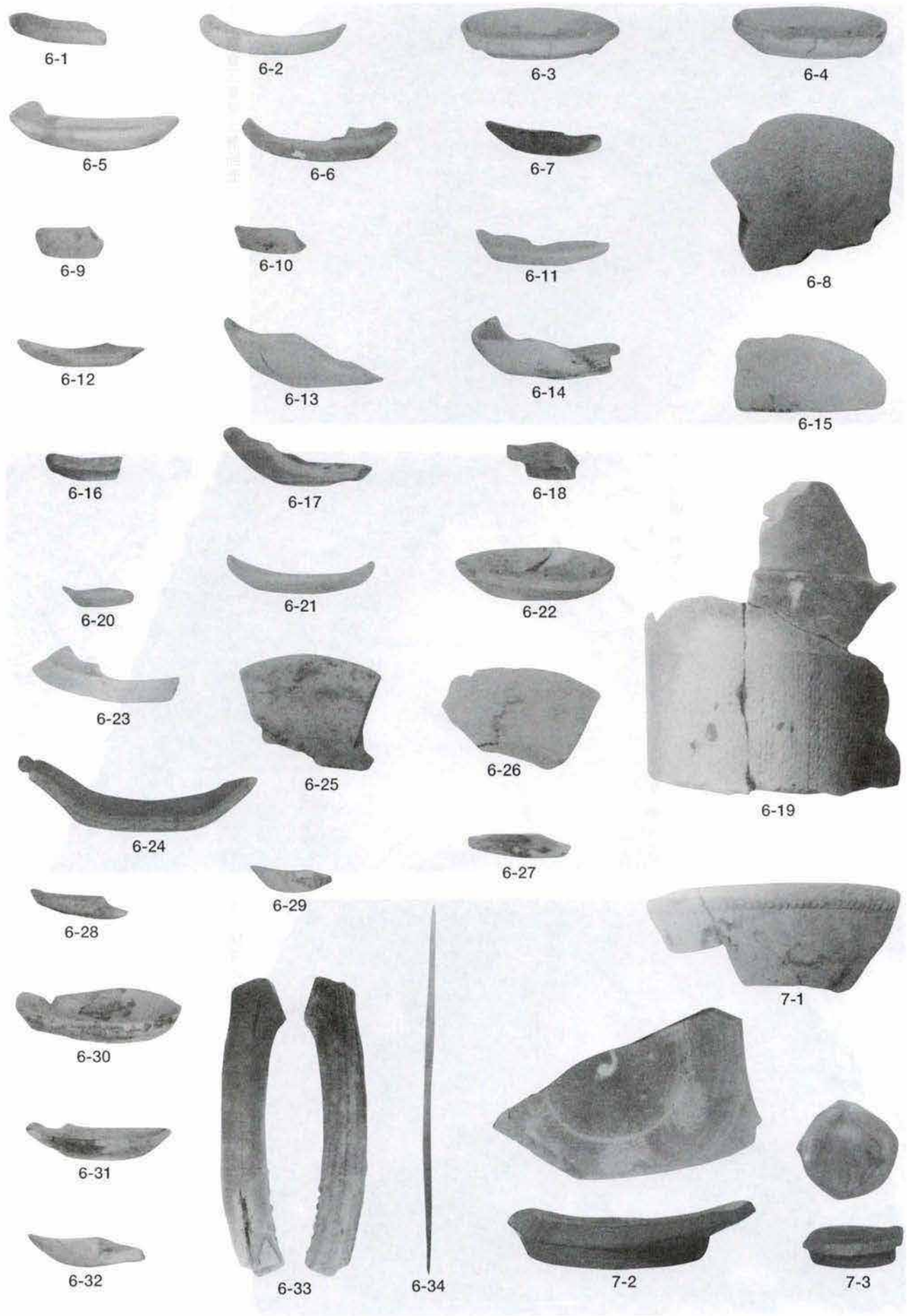
3．調査区西壁土層断面

1．調査区東壁土層断面

2．河道（西から）

3．調査区全景（西から）

図版3


6-1
6-2
6-3
6-4
6-5
6-6
6-7
6-8
6-9
6-10
6-11
6-12
6-13
6-14
6-15
6-16
6-17
6-18
6-19
6-20
6-21
6-22
6-23
6-24
6-25
6-26
6-27
6-28
6-29
6-30
6-31
6-32
6-33
6-34
7-1
7-2
7-3

長谷小路周辺遺跡（No.236）

由比ガ浜三丁目194番50地点

例　　言

1．本報文は、長谷小路周辺遺跡（神奈川県遺跡台帳№236）内、鎌倉市由比ガ浜三丁目194番50地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．発掘調査は、個人専用住宅建設に先立ち平成14年７月１日から７月25日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は51.75㎡。

3．調査体制は以下の通り。

調　査　員　汐見　一夫　鍛治屋勝二　松原　康子

調査補助員　沖元　　道　鈴木　弘太

調査協力者　中須　洋二　町田　義一　渡邊　輝彦

4．本報文の整理作業は、主に遺構図の整理を汐見が、遺物の実測及び全挿図のトレースと版組みを小泉衣理が行った。中世以前の遺物は、実測から原稿に至るまでの全てを押木弘巳氏（鎌倉遺跡調査会）が行った。原稿執筆は第１章・第２章・第３章の遺構を汐見が、第３章の１・２の遺物は小泉が、第３章の３は押木が、第４章は執筆者討議の上汐見が文責を負い全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構関係を汐見と鍛治屋が、遺物を小泉・押木が撮影した。

5．発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。

㈳鎌倉市シルバー人材センター　鎌倉考古学研究所　東国歴史考古学研究所

6．本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　環境と立地 ……218
第２章　調査の概要 ……222
第３章　遺構と遺物 ……224
　１．1面の遺構と遺物……225
　２．2面の遺構と遺物……227
　３．中世以前の遺物 ……229
第４章　調査成果 ……233

挿図・表目次

図１　長谷小路周辺遺跡と調査地点 ……218
図２　国土座標とグリッド配置 ……222
図３　グリッド配置と堆積土層 ……223
図４　１面の遺構 ……224
図５　１面出土遺物 ……226
図６　２面の遺構 ……227
図７　２面の出土遺物 ……228
図８　採集遺物 ……228
図９　中世以前の出土遺物 ……230
図10　周辺の遺構軸方向 ……233
表１　出土銅銭一覧１ ……234
表２　出土銅銭一覧２ ……235
表３　出土銅銭一覧３ ……236
表４　出土銅銭一覧４ ……237
表５　出土銅銭一覧５ ……238
表６　出土銅銭一覧６ ……239
表７　出土銅銭一覧７ ……240
表８　出土遺物計測表 ……241
表９　出土遺物数 ……242

写真図版目次

図版１　遺構写真１ ……243
図版２　遺構写真２ ……244
図版３　遺構写真（中世） ……245
図版４　遺構写真（中世以前） ……246

第１章　環境と立地

長谷小路周辺遺跡は鎌倉市の南縁、現六地蔵交差点から長谷観音交差点に至る国道134号線に沿った東西に広い範囲が呼称されている。本遺跡範囲内ではこれまでに本調査地点を含めて23地点で調査が行われており（図１）、その成果から、遺跡地北側の丘陵と海岸線との間には弥生？古墳時代以降に形成された砂丘が少なくとも３列東西方向に横たわり、砂丘間には海退時の名残と考えられる低湿地状の弱粘質砂が不規則に堆積している。国道134号線は北側の砂丘列のほぼ頂部を通り、現車道に面した南側の調査地点では中世飛砂下層にこの弱粘質砂が地点により厚く堆積し、下層には中世以前の遺構・遺物を内包する。中世期の遺構群は方形竪穴と土坑が主体で、地点に依り井戸・溝状土坑・墓址が複雑に重複して発見されることが多い。方形竪穴の構造は、堆積土が乾燥した砂層の為に木質が遺存せず不明な点が多いと言わざるを得ないが、土台に鎌倉石や伊豆石を利用するもの、柱穴建てのもの、杭で壁板を支える簡易なもの等多種多様である。溝状土坑や通路状の空閑地からはある程度の街区が看取され、方形竪穴の主軸は現車道に直交するように発見されているが、道路面は顕著に発見されていない（図10）。一方、現況及び中世遺構面の検出レベルが２ｍ程低い地点７・12では中世期の硬化面が発見され、地点15・16及び本調査地点の遺構軸方向はこの硬化面を意識しており、国道134号線から分岐した現小車道が中世の道路面を踏襲していると思われる。由比ヶ浜中世集団墓地遺跡内地点29の調査区北端の遺構軸は地点28・30で発見された中世道路面を意識し、この道路面は地点15・16の硬化面とほぼ同軸であることから観ても、この地域では中世鎌倉中心部の若宮大路に中心とする街区割とは異なり、鎌倉期以前から形成されてきた砂丘や海岸線等の自然地形に沿う様に道路が通され、街区が定っていったのであろう。

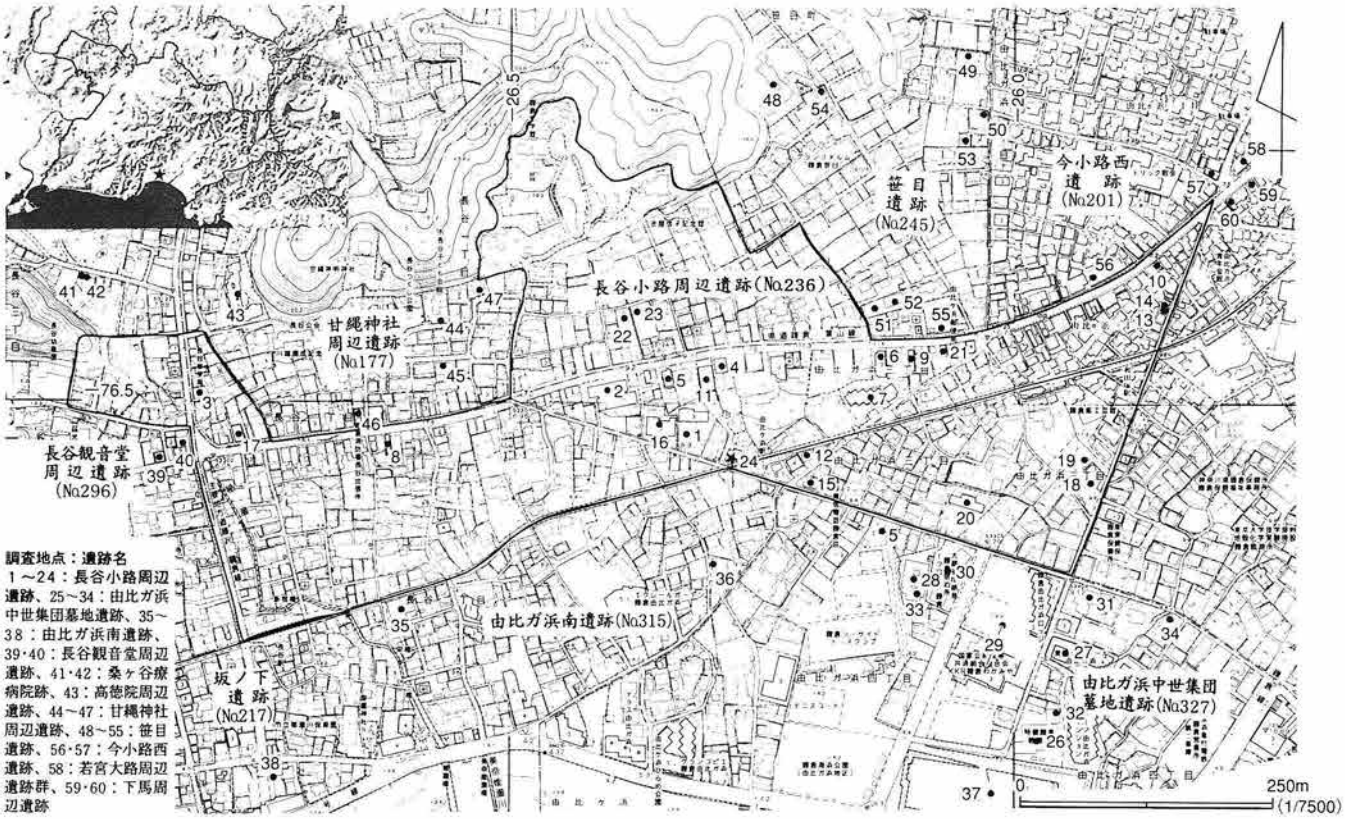


図１　長谷小路周辺遺跡と調査地点

引用・参考文献

高柳光寿『鎌倉市史　総説編』　1959年　吉川弘文館
赤星直忠『鎌倉市史　考古編』　1959年　吉川弘文館
高柳光寿・貫達人他『鎌倉市史　社寺編』　1959年　吉川弘文館
貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』　1980年　有燐堂
白井永二『鎌倉事典』　1976年　東京堂出版
「神奈川県の地名」『日本歴史地名体系14』　平凡社

長谷小路周辺遺跡（No.236）

1．由比ガ浜三丁目　1978年調査　未報告
2．由比ガ浜三丁目202番２地点　1984年調査『長谷小路南遺跡　鎌倉市由比ガ浜３丁目202番２外所在遺跡の発掘調査報告書』1992年２月　長谷小路南遺跡発掘調査団
3．長谷一丁目284番１地点　1987年調査「長谷小路周辺遺跡（長谷一丁目284番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書４　昭和62年度発掘調査報告』1998年３月　鎌倉市教育委員会
4．由比ガ浜三丁目194番25他地点　1987年調査「長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目194番25他地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５　昭和63年度発掘調査報告』1989年３月　鎌倉市教育委員会／『由比ヶ浜三丁目194番25外遺跡調査報告　長谷小路周辺遺跡群内、秋山ビル建設に伴う緊急発掘調査』1990年３月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団
5．由比ガ浜三丁目199番１地点　1987年調査『由比ガ浜三丁目199番１地点遺跡調査報告　長谷小路周辺遺跡群内、福地ビル建設に伴う緊急発掘調査』1990年７月　由比ガ浜三丁目199番１地点所在遺跡発掘調査団
6．由比ガ浜三丁目258番８地点　1987年調査「長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目258番８）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６　平成元年度発掘調査報告』1990年３月　鎌倉市教育委員会
7．由比ガ浜三丁目258番８地点　1987年調査『長谷小路周辺遺跡　由比ケ浜三丁目258番１地点』1995年６月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団
8．長谷二丁目252番１地点　1989年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)(長谷二丁目252番１地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』1991年３月　鎌倉市教育委員会
9．由比ガ浜三丁目254番25地点　1988年調査　未報告
10．由比ガ浜三丁目223番11地点　1989年調査　未報告
11．由比ガ浜三丁目194番24地点　1989年調査「長谷小路周辺遺跡（No.236)(由比ガ浜三丁目194番24地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』1991年３月　鎌倉市教育委員会
12．由比ガ浜三丁目194番40地点　1990年調査『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書　由比ヶ浜三丁目194番40地点』1997年６月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団
13．由比ガ浜三丁目229番他地点　1991年調査「長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目229番外)(No.236)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９　平成４年度発掘調査報告（第２分冊)』1993年３月　鎌倉市教育委員会／『長谷小路周辺遺跡　由比ケ浜三丁目228・229番外（No.236）中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査』1994年７月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団
14．由比ガ浜三丁目228番２地点　1996年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)由比ガ浜三丁目228番２の一部外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成９年度発掘調査報告（第２分冊)』1998年３月　鎌倉市教育委員会
15．由比ガ浜三丁目1175番２地点　1992年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)(由比ガ浜三丁目1175番２外地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10　平成５年度発掘調査報告（第２分冊)』1994年３月　鎌倉市教育委員会
16．由比ガ浜三丁目２番200地点　1995年調査『長谷小路周辺遺跡群発掘調査報告書　―由比ヶ浜３丁目２番200地点(No.236)―』1997年９月　長谷小路周辺遺跡群発掘調査団
17．長谷一丁目33番３地点　1997年調査「長谷小路周辺遺跡(No.236)長谷一丁目33番３外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　平成10年度発掘調査報告（第２分冊)』1999年３月　鎌倉市教育委員会　／『長谷小路周辺遺跡13　長谷１－33－３地点発掘調査報告書』1998年８月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団／鎌倉遺跡調査会
18．由比ガ浜三丁目1262番２外地点　1998年調査『東国歴史考古学研究所調査研究報告第31集　長谷小路周辺遺跡(No.236)由比ガ浜三丁目1262番２、1251番１・２地点発掘調査報告書　―弥生中期～平安時代葬送地から中世方形竪穴建物群地域へ―』2002年７月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団／　東国歴史考古学研究所

19. 由比ガ浜三丁目1262番６地点　1999年調査『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書　―鎌倉市由比ガ浜三丁目1262番６外地点（No.236）―』2000年６月　長谷小路周辺遺跡発掘調査団／　宮田事務所
20. 由比ガ浜三丁目1173番３地点　1999年調査『鎌倉遺跡調査会調査報告第21集　長谷小路周辺遺跡　－第20地点発掘調査報告－』　2001年３月　鎌倉市長谷小路周辺遺跡発掘調査団／　鎌倉遺跡調査会
21. 由比ガ浜三丁目254番15地点　1999年調査　「長谷小路周辺遺跡（No.236）由比ガ浜三丁目254番15外２筆地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第１分冊）』2001年３月　鎌倉市教育委員会
22. 長谷一丁目205番12地点　2000年調査　「長谷小路周辺遺跡（No.236）長谷一丁目205番12地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成12年度発掘調査報告（第２分冊）』　2002年３月　鎌倉市教育委員会
23. 長谷一丁目204番外地点　2000年調査　未報告
24. 本調査地点

由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）

25. 由比ガ浜四丁目1181番地点　1977年調査「38.材木座中世集団墓地遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983年３月　鎌倉市教育委員会
26. 由比ガ浜四丁目1142番１地点　1982年調査『鎌倉市由比ガ浜四丁目由比ガ浜中世集団墓地遺跡（特殊養護老人ホーム鎌倉静養館建設予定地）発掘調査報告書』1984年３月　鎌倉静養館建設予定地内所在遺跡発掘調査団／鎌倉市教育委員会
27. 由比ガ浜四丁目1134番１地点　1986年調査『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書（第１分冊・古代編）鎌倉市由比ヶ浜四丁目1134番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告』1996年11月　由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
28. 由比ガ浜四丁目1171番３地点　1986年調査『鎌倉遺跡調査会調査報告第22集　由比ヶ浜中世集団墓地遺跡－第５地点１次・２次発掘調査－』2001年５月　由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団／鎌倉遺跡調査会
29. 由比ガ浜四丁目1136番11地点　1991～92年調査　『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書　由比が浜四丁目1136番地点（ＫＫＲ鎌倉若宮荘）』　1997年２月　由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
30. 由比ガ浜四丁目1170番１地点　1992年調査『由比ガ浜４―６―９地点発掘調査報告書　大蔵省印刷局鎌倉宿泊所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　1994年３月　由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
31. 由比ガ浜四丁目1130ロ外地点　1993年調査『貿易陶磁研究集会鎌倉大会資料集―相模国・鎌倉市街地における中世前期の貿易陶磁の出土様相―』1999年６月　貿易陶磁研究会／鎌倉市教育委員会／鎌倉考古学研究所
32. 由比ガ浜四丁目1142番12地点　1994～95年調査『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書　由比ガ浜四丁目４番地30号地点』　1996年11月　由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
33. 由比ガ浜四丁目1015番23地点　2000年調査「由比ガ浜中世集団墓地遺跡の調査」『第12回鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』　2002年８月　鎌倉考古学研究所
34. 由比ガ浜四丁目1133番地点　2002年調査　未報告

由比ヶ浜南遺跡（No.315）

35. 長谷二丁目122番９、10地点　1989年調査　未報告。
36. 長谷二丁目118番２地点　1994年調査「由比ケ浜南遺跡（長谷二丁目118番２外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第１分冊）』1995年３月　鎌倉市教育委員会
37. 由比ガ浜四丁目1102番２外地点　1995－97年調査『由比ヶ浜南遺跡』2002年３月　由比ヶ浜南遺跡発掘調査団／鎌倉遺跡調査会
38. 長谷二丁目　2002～03調査　未報告。

長谷観音堂周辺遺跡（No.296）

39. 長谷三丁目41番イ地点　1992年調査「長谷観音堂周辺遺跡（No.296）（長谷三丁目41番イ地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10　平成５年度発掘調査報告（第２分冊）』　1994年３月　鎌倉市教育委員会
40. 長谷三丁目97番４地点　1993年調査「長谷観音堂周辺遺跡（長谷三丁目97番４地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第２分冊）』1995年３月　鎌倉市教育委員会

桑ヶ谷療病院跡（No.294）

41. 長谷三丁目630番１地点　1990年調査「桑ヶ谷療病院跡（No.294）（長谷三丁目630番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』1991年３月　鎌倉市教育委員会
42. 長谷三丁目630番17地点　1990年調査「桑ヶ谷療病院跡（No.294）（長谷三丁目630番17地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７　平成２年度発掘調査報告』1991年３月　鎌倉市教育委員会

高徳院周辺遺跡（No.327）

43. 長谷一丁目290番１地点　1988年調査『長谷一丁目190－１地点遺跡　高徳院周辺遺跡群内、グランフォルム　鎌倉建設に伴う中世遺跡の発掘調査報告書』　1989年12月　高徳院周辺遺跡発掘調査団

甘縄神社周辺遺跡（No.177）

44. 長谷一丁目227番地点　1978年調査「43.伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』1983年３月　鎌倉市教育委員会
45. 長谷一丁目236番１地点　1991年調査　未報告。
46. 長谷一丁目271番10地点　1992年調査　『甘縄神社遺跡群発掘調査報告書　鎌倉消防署・長谷出張所改築に伴う　緊急調査報告書　鎌倉市長谷一丁目271番10』　1995年７月　甘縄神社遺跡群発掘調査団
47. 長谷一丁目　2003年調査　未報告。

笹目遺跡（No.207）

48. 笹目町330番１地点　1988年調査「笹目遺跡（笹目町330番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６　平成元年度発掘調査報告』　1990年３月　鎌倉市教育委員会／『笹目遺跡発掘調査報告書　鎌倉市笹目町330番―１地点』　1991年７月　笹目遺跡発掘調査団
49. 笹目425番１地点　1993年調査　「笹目遺跡（No.207）（笹目町425番１外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査　報告書10　平成５年度発掘調査報告（第２分冊）』1994年３月　鎌倉市教育委員会
50. 笹目302番５地点　1993年調査　「笹目遺跡（No.207）（笹目町302番５地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第１分冊）』1995年３月　鎌倉市教育委員会
51. 笹目町285番１地点　1999年調査　「笹目遺跡（No.207）笹目町285番１外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査　報告書17　平成12年度発掘調査報告（第２分冊）』2001年３月　鎌倉市教育委員会
52. 笹目町286番１外地点　1999年調査　「笹目遺跡（No.207）笹目町286番１外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告（第２分冊）』2001年３月　鎌倉市教育委員会
53. 笹目町302番11地点　2000年調査　「笹目遺跡（No.207）笹目町302番11外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第２分冊）』2002年３月　鎌倉市教育委員会
54. 笹目町　2002年調査　未報告（原・国庫）
55. 笹目町　2003年調査　未報告（旧代・民間）

今小路西遺跡（No.201）

56. 由比ガ浜一丁目213番３地点　1991年調査『今小路西遺跡　由比ガ浜一丁目213番３地点』1993年７月　今小路西遺跡発掘調査団
57. 由比ガ浜一丁目183番１地点　2000年調査「今小路西遺跡（No.201）由比ガ浜一丁目183番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第２分冊）』2002年３月　鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

58. 由比ガ浜一丁目129番５地点　1993年調査『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　由比ケ浜一丁目129番５地点』1995年５月　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

下馬周辺遺跡（No.200）

59. 由比ガ浜二丁目107番１地点　1995年調査「下馬周辺遺跡（No.200）（由比ガ浜二丁目107番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13　平成８年度発掘調査報告（第２分冊）』1997年３月　鎌倉市教育委員会
60. 由比ガ浜二丁目106番６、７外地点　2000年調査「下馬周辺遺跡（No.200）由比ガ浜二丁目106番６、７地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第１分冊）』2002年３月　鎌倉市教育委員会

註　・各調査地点・報告書は、長谷小路周辺遺跡（No.236）は全ての、他の遺跡は図１の範囲内の調査地点を、各遺跡毎に調査年順に番号を付した。
・報告書は2003年８月末現在。
・小泉衣理と渡邊美佐子の協力に拠り筆者調べに拠る。

第２章　調査の概要

・調査経緯から結果に至る概要

本調査は個人専用住宅の建設にあたり、建物基礎設置範囲を対象として確認調査と諸協議を経て実施された。調査区は２箇所に分れ、東側をⅠ区、西側をⅡ区とした。Ⅱ区の南端は表土掘削時に現地表下２ｍ以上が近現代に撹乱されているのが確認された為、掘り上げ後の調査区壁の安全上、又、敷地内で処理する残土量の問題等を考え併せ調査区外と見なした。

調査では、遺構面の整合を考えⅠ・Ⅱ区を平行して進めるべく予定したが、Ⅰ区の上層は広範囲に撹乱されていた事と調査に伴う残土置場に難渋した事から､2面までは平行して調査した後､Ⅰ区を無遺物層まで先行して掘り上げて記録保存し、Ⅱ区の下層を調査した残土でⅠ区を埋め戻す方法を採らざるを得なかった。期間中台風の直撃を受け､調査区壁を養生しながら酷暑の中で作業を進め､遺構面３時期を併せて方形竪穴４基・土坑40基を発見し、一括性は低いものの銅銭60余枚等多くの遺物が出土し成果を得られた。全ての記録保存終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と諸器材を撤収し調査終了とした。

・グリッド配置（図２）

調査に際しては国土座標から座評点を移動し調査区内のグリッドを設定することを試みたが、調査地付近の基準点は多くが遺存しておらず、やむを得ずⅠ・Ⅱ区を囲む２ｍグリッドを調査区の方向と形状に合わせ任意に設定し、Ⅰ区を南北に通る主軸４ラインと４級基準点Ｅ108（Ｘ：－76595.539　Ｙ：－26239.337）から光波測定器を用い計測した。主軸４ラインは磁北に対してＮ－27°40′－Ｅである。Ｅ146は現地に鋲は遺存するが、座標点位置図データとは合致しない。参考までに示した。

・堆積土層

図３には調査時に設定したグリッド配置と、下層堆積土確認の為に掘り下げたⅠ・Ⅱ区のトレンチ位置図を含めた調査終了時の最終状況を示した。Ⅱ区の確認調査壙の範囲は、本調査の際に崩落した部分を法面をつけて再度土層観察を行った結果を図示している。

０層は近世以降の堆積土で、Ⅱ区では部分的に現地表下２ｍ以上、遺構面・遺構覆土を撹乱している。

１層は土壌化した暗茶褐色砂質土で、土丹粒・土器粒・年度粒を含む中世遺物包含層。

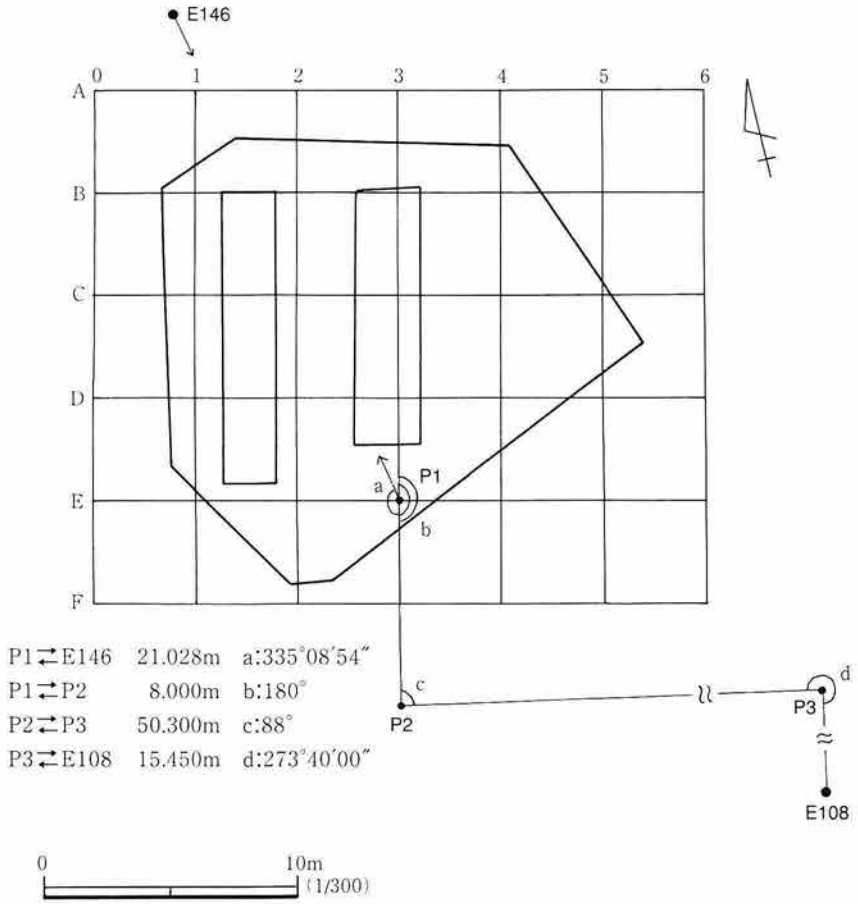


図２　国土座標とグリッド配置

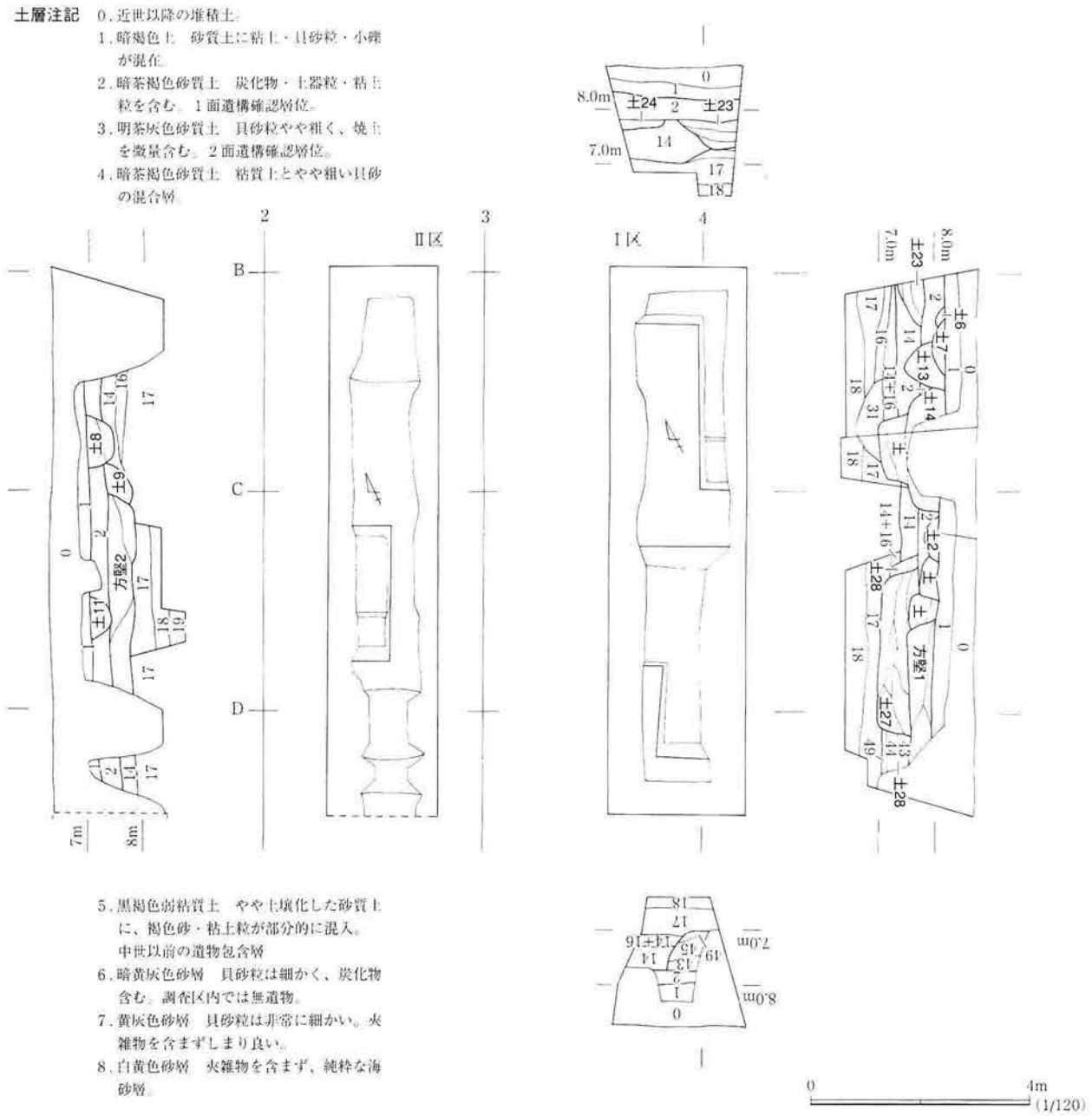


図3　グリッド配置と堆積土層

2層は調査開始面で、若干土壌化した暗褐色砂質土。市街地遺跡の遺構面の様に版築・整地されてはいないが、遺構確認面でありこの2層上面を1面とした。3層は灰褐色砂質土。貝粒子が全体に多量含まれしまりは良い。1面の遺構との重複関係等からこの3層上面を2面とした。

4層は、上層3層から下層5層への漸移層で砂粒・貝粒子共にやや粗いが、若干粘性がある。5層は細砂がかなり土壌化した黒褐色弱粘質砂層。微かな観察範囲ではあるが地点4・5・10に顕著な砂丘間低地に堆積する湿地状の堆積土と判断した。6層・7層は微細貝粒子と極細砂から成る砂層で、付近の調査成果と披見して中世飛砂と思われる。6層は暗黄灰色で微かに炭化物粒が観られるが本調査範囲内では無遺物、7層は黄灰色で部分的に粗い貝粒子が混交し、本調査範囲内では無遺物。同様な堆積土中から、地点2・6・7他では奈良・平安期の遺構と遺物が、地点18では弥生期の墓址が遺物を伴って発見されているが、本調査範囲内では遺構は確認されず、遺物も全く出土しなかった。9層は、著しい湧水の為部分的な観察ではあるが、夾雑物を全く含まない黄灰色の砂層。

第３章　遺構と遺物

調査では確認調査の成果を基に、Ⅰ・Ⅱ区共に現地表下70ｃｍまでの表土と近現代の埋め土である攪乱坑を重機に拠り掘削した。その後人力で遺構面及び遺構を掘り下げ、最終的には現地表下約２ｍ、海抜6.0mの無遺物自然堆積層まで確認した。以下、調査順通り上層の遺構と遺物から述べていく。尚、本調査では遺構内外から多量の銅銭が出土しいる。何れも一括廃棄とは考え難く、儀礼の如く埋置・埋納した様相もない為、第４章末に原寸の拓本で図示し表形式に纏めた。又、本調査では中世以前の遺構面は顕著には把えられなかったが、中世層中に多量の古墳期～古代の遺物が出土している。これらは各出土層位遺構から切離し、中世層出土の古代遺物として本章末に纏めた。

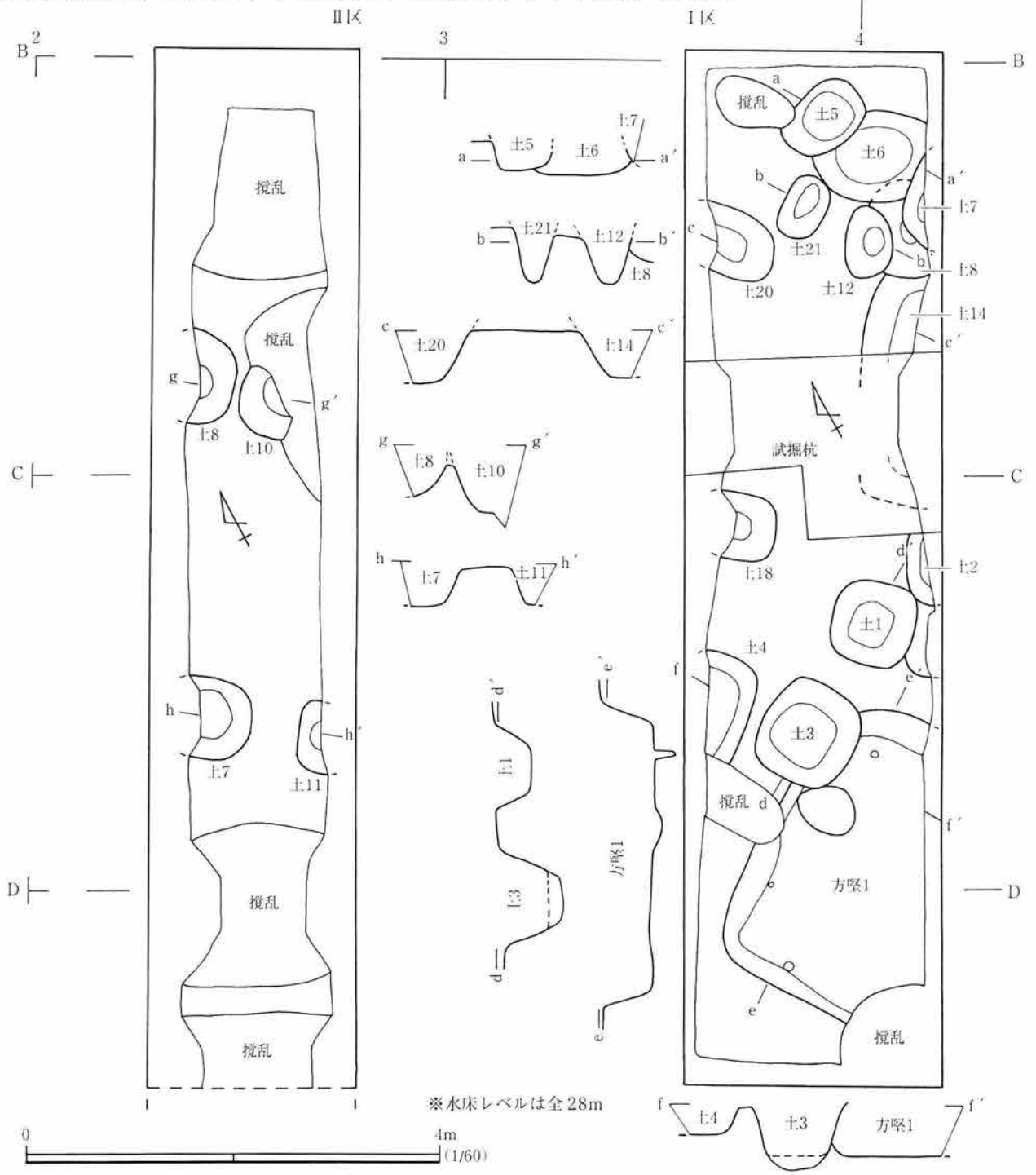


図４　１面の遺構

1面の遺構（図4）

図4にはⅠ・Ⅱ区の1面全測図。平面図は設定された調査区の位置関係そのままに、断面図は基準レベル全て8.0mで図示している。現地表下約50～70cmの海抜8.1m前後、図3の2層上面を1面とした。発見された遺構は、方形竪穴1軒・土坑18基である。Ⅰ・Ⅱ区に跨る遺構はないと判断している。Ⅱ区は攪乱が広範囲に及んでいる事もあるが遺構は希薄、Ⅰ区では確認調査壙の壁が崩落し結果的に土坑1基の範囲を想定線で示した。

方形竪穴はⅠ区の南寄りで発見された。覆土は土丹粒・炭化物粒を混交するしまりの悪い茶褐色砂質土。確認された規模は南北2.1m×東西2.9m、壁高最大値60cm、底面はほぼ平坦、底面の遺構は各壁直下に径10～20cmで深さ20cmの杭穴が1ヶ所ずつと、北壁下に微かな窪みがあるだけで、出土遺物の様相を観ても構造や用途は不明である。確認範囲から観る遺構軸はN－35°前後－Wで、地点7・12で発見された道路状の硬化面と直交に近い方向。方形竪穴周囲で発見された平面形方形に近い土坑1・3・4や、Ⅰ区北端で発見された土坑群の軸方向や並びもほぼ同軸である。

土坑1・3の覆土は、部分的に白色砂・炭化物粒・土丹粒の混じる暗茶褐色土。土坑3は検出の際に底面を掘り過ぎており、第4章末に図示した銅銭は2面土坑17最上層の可能性もある。北寄りの土坑群の覆土は概ね炭化物粒を含みしまりのない暗茶褐色砂質土。確認調査壙壁の崩落により、範囲不明瞭となった土坑14は方形竪穴の可能性がある。

1面出土遺物（図5）

1～6は1面上、概ね図3の1層中の出土遺物。1は大型糸切り底かわらけで器壁が薄く、やや内湾する。胎土は肌色を呈する弱粉質土だが、二次焼成により全体的に若干黒く変色している。2は瀬戸窯折縁深皿口縁部片。胎土はやや粘性の欠ける淡黄味灰白色を呈する。淡灰緑色の釉が全体的に薄く刷毛塗りされるが、二次焼成により内外面とも部分的に剥落する。中Ⅱ期の製品。3～5は常滑窯諸製品。3～4は片口鉢Ⅱ類口縁部片。器表・胎土共に3は暗茶褐色土、4は焼成不良な暗茶色土を呈し、夾雑物を多く含む。4は内面体部の指頭痕、外面上位のナデや下位のハケ調整が明瞭に残る。ともに第6～7型式の製品。5は甕胴部片の拓影。格子文の押印が捺される。6は加工痕が残る鹿の角。表採より出土している鹿の角と対になるのだろうか。

7～22は遺構内出土遺物。7・15・18・21～22は土壙21、8は土壙2、9は土壙12、10～11・13～14は土壙1、12・16・19～20は方竪1、17は土壙18出土。

7～11は小型、12～15は大型糸切り底かわらけ。小型は外面体部中位に稜をもち、開きながら立ち上るものと器壁が薄く、碗型に近い形状のものが混じる。大型は外面体部中位に稜をもち、器壁が薄く口縁が開きながら立ち上るものが多い。概ね肌色～淡橙色を呈する弱粉質土。16は瀬戸窯瓶子肩部片。胎土はやや粘性の欠ける淡黄味灰白色を呈し、灰緑色の釉が全体的に薄く刷毛塗りされる。器壁が非常に薄い。中期後半～後期の製品。

17～20は常滑窯諸製品。17は山茶碗底部片。胎土は夾雑物を多く含む灰褐色土。内面に摩滅痕はみられない。高台のつかない第8型式の製品。18～19は片口鉢Ⅱ類口縁部片。胎土・器表ともに暗茶褐色～黒褐色を呈し、夾雑物を多く含む。第7～8型式の製品。20は甕口縁部片。断面N字状の口縁部形態をとる。胎土は夾雑物を多く含む灰色土、器表は茶褐色を呈し、口縁部に降灰がかかる。第8型式の製品。21は瓦器質火鉢Ⅲ類。輪花状を呈し、外面体部上位に菊花文スタンプを配する。器表は黒色処理され、内面体部の口唇部や下位のナデ調整以外は内外面共に縦方向の磨き、外底面は砂底。

22は鹿の骨。加工の際の刃物痕が残る。

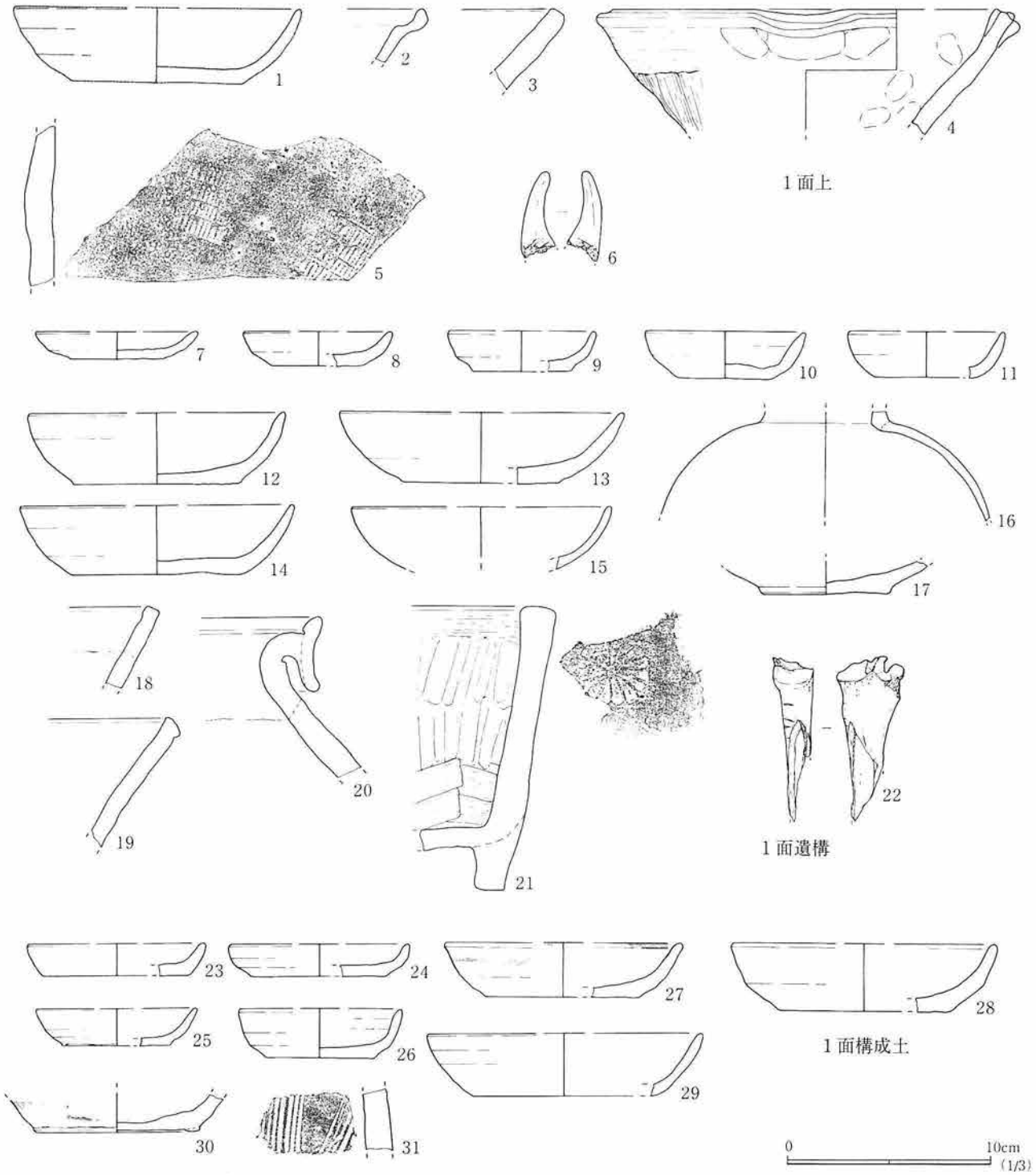


図5　1面出土遺物

23～31は1面構成土出土遺物。23～26は小型、27～29は大型糸切り底かわらけ。概ね肌色～淡橙色を呈する弱粉質土。小型は口径底径比が小さく、器壁がやや内湾するものと器壁が薄く、器高の高い碗に近い形状のものが混じる。大型は体部中位に稜をもち、器壁が直線的に立ち上るものが多い。

30は常滑窯山茶碗底部片。胎土は夾雑物を多く含む灰褐色土。つけ高台はあるものの非常に貧弱なため、摩滅した可能性も考えられる。内面に摩滅痕はみられない。第7型式の製品。31は備前窯捏鉢胴部片。拓本で確認できる範囲では条線は7本以上。

土坑3及び上記層位から出土した銅銭は第4章末に、土坑8・9・10及び上記層位から出土した土師器は本章末に図示した。

2面の遺構（図6）

図6はⅠ・Ⅱ区の2面全測図。平面図は設定された調査区の位置関係そのままに、断面図は基準レベル全て8.0mで図示している。現地表下約100cmの海抜7.8m前後、図3の3層上面を1面とした。発見された遺構は、方形竪穴2軒・土坑8基である。土坑8基の内2基（土坑27・28）は平面形状及び遺構断面の観察から方形竪穴の可能性があるものの、調査中に台風が来襲し確認前に崩落し想定線で示している。

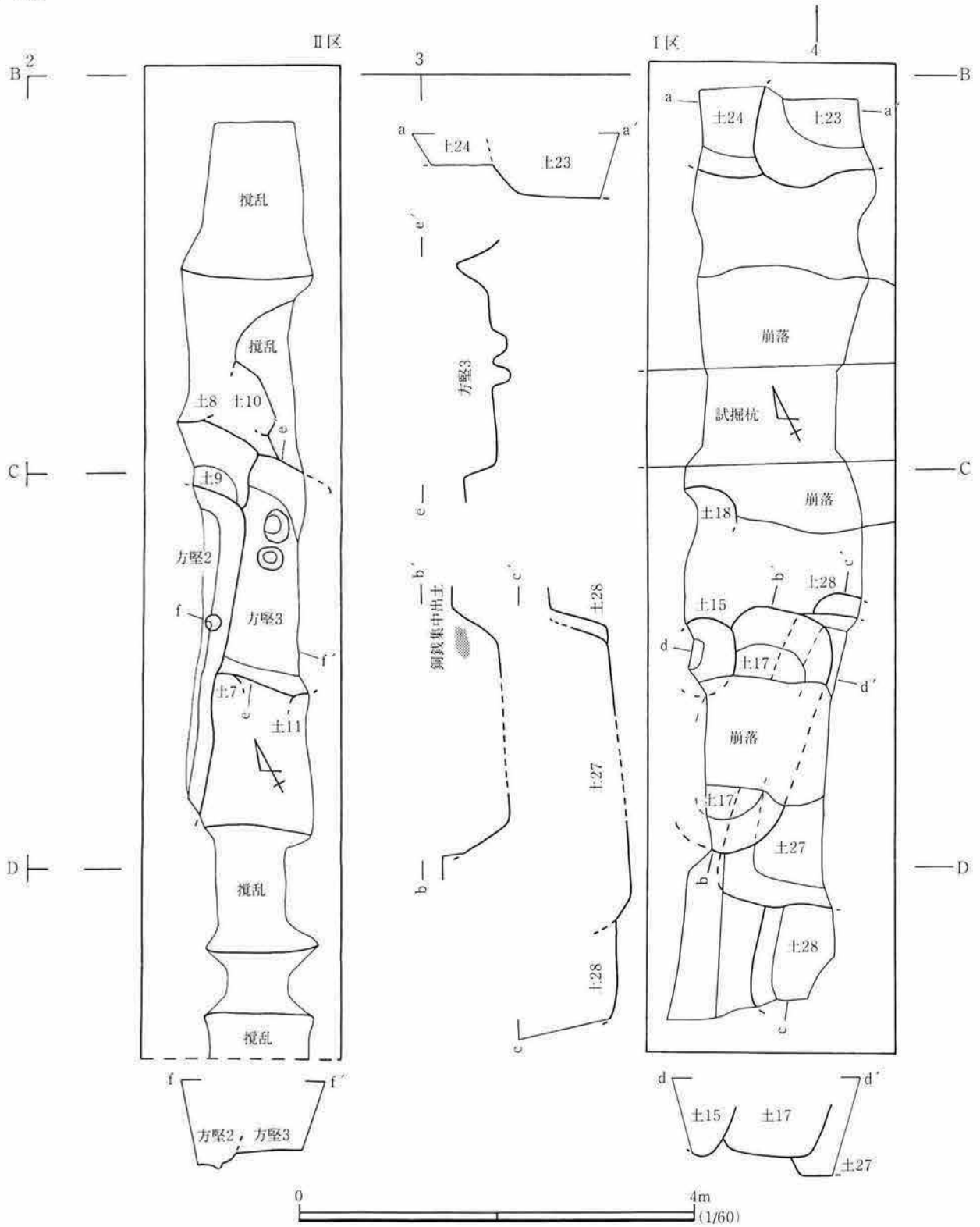


図6　2面の遺構

方形竪穴はⅡ区で２基発見された。方形竪穴３は遺構下場の検出様相から調査区東壁付近で回り込むと思われる。覆土は炭化物粒の混じる茶褐色砂層。確認された規模は南北0.8m×東西2.2m、壁高最大値40cm、底面はほぼ平坦、底面の遺構は東壁下に径20～30cmで深さ約20cmのピットが２箇所。出土遺物を併せ観ても構造・用途は不明。この方形竪穴３と重複しより新しい方形竪穴２は、確認された規模は南北0.5m×東西3.2m、壁高は調査区壁の断面から約40cm、底面はほぼ平坦でピットが１口発見されたが、出土遺物を併せ観ても構造・用途は不明。又、遺構平面検出時には土坑番号を付したが、その後土層断面の観察や完掘後の様相から土坑27・28も方形竪穴と思われる。覆土は何れも炭化物・土丹粒を多く含む暗茶褐色砂質土。この土坑27より新しい土坑17は、東西に長い不整長方形で、覆土は粘土粒・炭化物粒・焼土粒を含む茶褐色砂質土。東寄りの覆土上層から多量の銅銭が出土している。

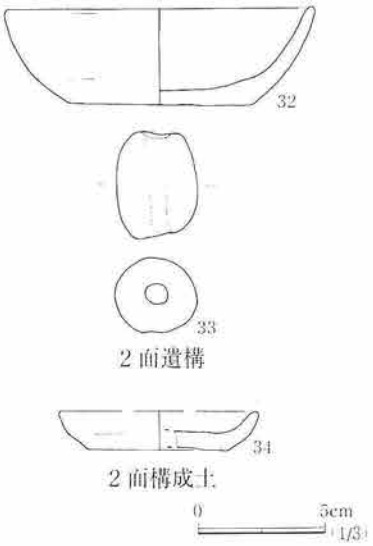


図７　２面出土遺物

２面出土遺物（図７）

32～33は遺構内出土遺物。32は土壙15出土の大型糸切り底かわらけ。器壁が薄く、器高の高い碗に近い形状を呈する。胎土は肌色を呈する弱粉質土。33は土壙16・17出土の土錘。

34は２面構成土、概ね図３の14層中の出土遺物。34は小型糸切り底かわらけ。外面体部中位に稜を持ち、器壁が外側に開く。胎土は肌色を呈する弱粉質土。土坑15・16・17及び上記層位から出土した銅銭は第４章末に、方形竪穴２・３及び上記層位から出土した土師器・須恵器は本章末に図示した。

表採（図８）

35～37は舶載品。35は同安窯系青磁櫛掻文碗底部片。逆台形状の厚い削り出し高台を有し、内面に櫛掻文が施される。素地は粘性が強く、堅密な淡黄灰色を呈する。黄色味緑色の釉が外面体部下位を除いて薄く施される。底部はヘラ切り。36は龍泉窯系青磁碗底部片。素地はやや粘性の欠けた灰色を呈する。不透明な灰青緑色の釉を全面に施した後に高台端部周辺の釉を掻き取り、その露胎部分が赤く発色する。37は白磁口兀皿底部片。素地は灰白色緻密土、釉調は乳白色を呈し、外面体部下位から底部にかけて施釉されていない。38～40は常滑窯諸製品で、38は片口鉢Ⅱ類口縁部片、39は甕口縁部片。断面N字状の口縁部形態をとる。胎土・器表ともに暗茶褐色～黒褐色を呈し、夾雑物を多く含む。口縁部に降灰がかかる。38は内面に指頭痕、外面にハケ調整が明瞭に残る。ともに第７型式の製品。40は甕胴部片の拓影。格子に斜線文の押印が捺される。41～42は土製品。41は土製円板。42は蓋。両方ともかわらけ質で、端部が精巧に磨かれている。43は鹿の角。１面上より出土している鹿の角のような加工痕はみられない。

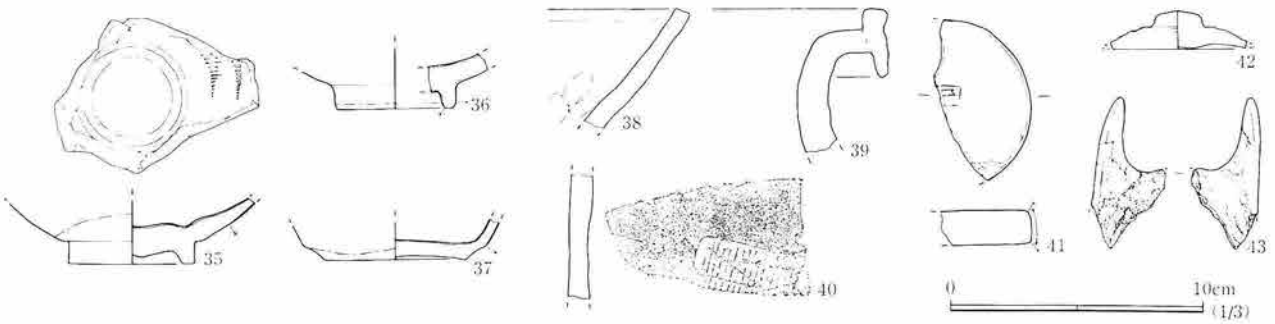


図８　採集遺物

3．中世以前の出土遺物

本地点では中世以前に遡る遺物として、整理箱約１箱分が出土し、このうち実測可能なものは27点を数えた。時期的に主体となるのは奈良・平安時代の土器類で、これより一段階以前の、古墳時代末期の土器も認められた。また、図示には至らなかったが、外器面にヘラミガキを施した古墳時代前期頃の所産と見られる壺もしくは鉢形土器の胴部片なども若干量が出土している。

今回の調査ではこれら遺物の所産時期に属する遺構は検出しておらず、出土状況としては中世遺構への混入品、或いは中世砂層下の包含層出土として捉えられたもののみとなる。以下、各出土遺物について説明を加える。

１～８は土師器坏。１は有稜坏の系譜を引き、扁平気味の丸底を呈すると見られる。古墳末～奈良初頭、７世紀末葉～８世紀初頭の所産か。２も有稜坏の名残を僅かながら留めているが、かなり扁平な作りとなっている。ヘラケズリ方向の差による体・底部の作り分けは不十分で、相模型坏成立の直前段階に位置付けられようか。奈良時代初頭、８世紀前葉頃の所産か。

３～５は相模型坏。体部は横方向のヘラケズリ、底部は定方向のヘラケズリによって仕上げられる。３・４は口径が大きく丸底気味の形態を呈しており、相模型でも成立段階の資料となろう。胎土は淡黄褐色を呈し、金雲母を少量含み精良。３は内外面ともやや摩滅・剥離し、器面の調整痕は不明瞭である。４の内外面には赤彩が薄く残る。５は明確な平底化、法量値の減少といった点で前二者より後出的な様相を備えている。胎土は淡橙褐色を呈し、金雲母を少量含み精良。相模編年では・期に主体となる形式で、８世紀末～９世紀初頭前後の所産かと考えられる。

６は体部横ヘラケズリであるが、胎土は相模型坏とは異なり、どちらかというと後述する武蔵型甕に近い印象を受ける。外面に黒色処理を施している。

７は甲斐型坏の口縁部小片。体部外面斜め方向のヘラケズリ、内面の口縁部から体部にかけて山形状の暗文が施される。胎土は赤褐色を呈し、白色微砂粒を含み精良である。８も甲斐、もしくは駿東方面の坏であろうか。底部のみの小片で、内面に放射状暗文が施され、外面の体部から底部にかけて黒色処理が施される。外面の体部は横ナデ、底部はヘラケズリ調整。胎土は淡赤褐色を呈し、白色微砂粒少量を含み精良。

９～21は土師器甕。９のみ古墳時代後期の所産で、他は奈良・平安時代の所産。９は胴部外面が縦方向のヘラナデ・ヘラケズリ調整、内面横ヘラナデ調整。６世紀後半頃の所産か。10は相模型甕。口縁部内外面横ナデ、胴部内外面ナデによって丁寧に仕上げられる。外面頸部には、ヘラ状工具による刺突痕数ヶ所が見て取れる。胎土には細砂粒がやや多く、金雲母と白色針状物が少量含まれる。

11～17は在地産の短頸甕で、「三浦型甕」との仮称もある。砕片化した資料のみで、法量等を復元しうる個体はなかった。ここでは同型式の特徴を端的に示す口縁部のみを掲げたが、底部資料については相模型甕も含め、本調査での出土例は皆無であった。全体の特徴としては口頸部が短く、口縁端部が面取りされることが言える。面取りの顕著なものには、粘土の内・外方へのはみ出しが看取される（11・16）。口頸部は直立もしくは内傾気味となるもの（11・12・16）と、外傾するもの（13～15）とがある。16のように極端に短い口頸部を持つものもあるが、より短いものが年代的に下るとされ、年代判別の一指標となっている。総体としては、９・10世紀代の所産となろう。胎土に多くの粗砂粒・角閃石粒を含み、相模型より全体的にざらついた感がある。器面調整は内外面ともハケもしくはナデ（ハケ後）を基調とする。概して被熱により黒変し、器面が剥離するもの（13・17）もある。17は外反する口縁部で端部の面取りはないが、胎土の特徴から本型式に含めた。18・19は武蔵型甕で、台付きになるものであろう。口縁部内外面横ナデ、胴部外面横ケズリ調整。いずれも内面口縁部に煤が付着している。胎土は赤褐色

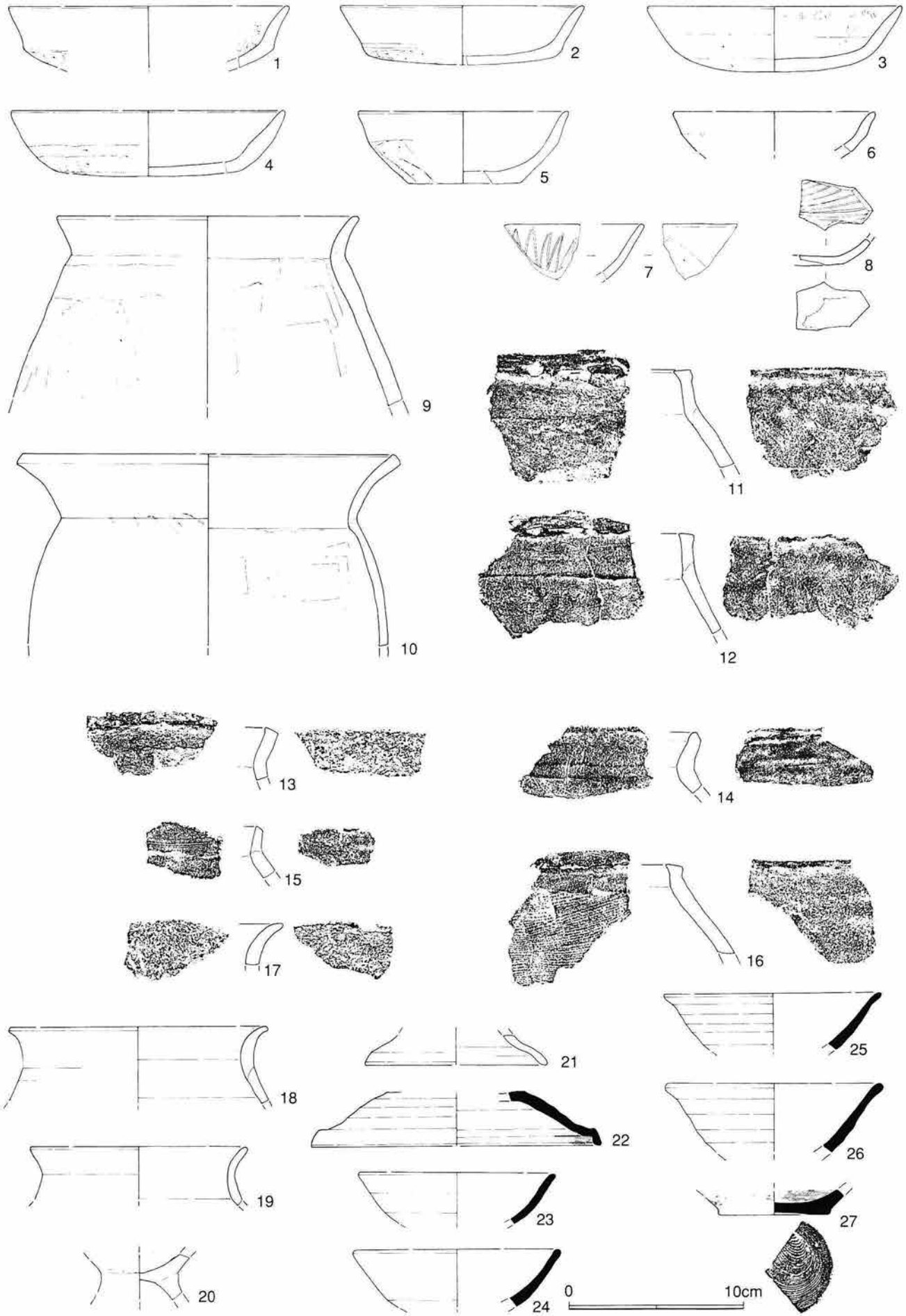


図9　中世以前の出土遺物

を呈し、精良である。20・21は台付甕の脚部。武蔵型であろう。20は脚基部。21は脚端部が内碗気味に開く。胎土・色調は18・19と同質。

22～27は須恵器。22は蓋。天井部は平坦で端部が下方に強く屈曲・垂下する。胎土には白色針状物の混入が目立つ。23～26は坏口縁部の小片。口縁端部の形状がそれぞれ異なり、直線気味に外傾するもの（23・24）、外反するもの（25）、やや肥厚するもの（26）があり、年代的なばらつきが見られる。27も坏で底部片。外底面回転糸切り後無調整。坏類に関しては、全体の形状・法量が把握できる個体がなかったため詳細は明らかでないが、概ね御殿山59号窯～同25号窯式の範疇で捉えられるものと見ている。従って、年代としては9世紀中葉～10世紀初頭前後の資料が主体となろう。

以上のように、本地点出土の古代遺物は7世紀末から10世紀代までの時間幅を持つもので、これは由比ヶ浜砂丘一帯における集落の消長期間の中で捉えられるものである。その意味では、周辺調査地での遺物の出土傾向と同様の在り方を示しているといえるだろう。

「三浦型甕」については、近年報告された葉山町三ヶ岡遺跡における立地や出土状況などから、製塩土器として使用された蓋然性が示されている。一方で、海浜部以外の遺跡から出土する例も少なくない点から、使用法に限定性を持たない煮沸具としての見方もある。本地点ではよく焼けた小片のみの出土であったが、図3－地点9・10では遺存率の高い個体も多くあり、被熱度・破砕度の差異といった点も用途の多様性を示唆しているのかもしれない。更に、上記の二地点では口縁端部への面取りを施さない8世紀後半代の短頸甕も出土しており、三浦型甕の祖形となる可能性が指摘されている（大河内1996、大河内・菊川他1997）。これと似た資料は、横須賀市北西部の久留和遺跡で7世紀末～8世紀代の竪穴状遺構から出土しており、系譜上、三浦半島の相模湾岸北西部において相模型甕の製作技法をもとに短頸甕の成立があり、次いで半島全域に定型化した「三浦型甕」の展開があったとの見解も示されている（中三川他2003）。中三川氏の指摘にあるように、その出現から展開、そして消費形態の上でも結論を見ない遺物であり、今後も詳細な検討が必要であろう。

今回の調査では、標高7.25mで古代の遺物包含層が検出され、層厚は30cmほどを持つものであった。その下位の砂層では遺物の出土はなく、この無遺物層が古代遺構の掘り込み層となる可能性も考えられる。ただし、本地点の東方60mに位置する地点20では、標高8～8.5mで9世紀代の竪穴住居址が検出しているし、同様に西方50mの地点16でもこれよりやや高いレベルで古代遺構が確認されている。こうした点を考えた場合、本地点における古代包含層の検出レベルはいかにも低く、その意味付けには注意が必要である。上本進二氏は鎌倉・逗子市域における地形発達史について、様々なデータをもとに検討を試みているが、古墳時代後期～奈良・平安時代の復元図では、本地点付近からちょうど江ノ電線に沿った形で砂丘間低地の延びる様子が示されている（上本2000）。中世段階にはこの低地帯も飛砂によって覆われ、現在では殆ど起伏を感じることのない状態にまで至っている。これには、中世を中心とする大規模な人為的土地改変もあったことは述べるまでもないが、中世以前には現在目にする以上に地形の起伏が顕著であり、それに伴う土地利用の制限があったことも想像される。本地点における古代包含層の在り方も古代の微地形を窺わせる好例といえるかもしれないが、如何せん狭い中での検出であるため、ここではその可能性を提示するに留めておきたい。

引用文献

・大河内勉　1996『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書―鎌倉市由比ヶ浜四丁目1134番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告―（第１分冊・古代編）』由比ヶ浜集団墓地遺跡発掘調査団

・大河内勉・菊川英政・小林康幸・汐見一夫　1997『由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書―由比が浜四丁目1136番地点（ＫＫＲ若宮荘）―＜第１次調査＞（第１分冊・古代編）』由比が浜中世集団墓地遺跡発掘調査団

・大河内勉　1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書―由比ヶ浜三丁目194番40地点―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団

・宮田真・森孝子　1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書―由比ヶ浜３丁目２番200地点（No.236）―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団

・上本進二　2000　「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子桟敷戸遺跡（逗子市No.100）』（仮称）医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所

・長谷川厚・櫻井真貴・林原利明　2001『三ヶ岡遺跡Ⅰ―県立近代美術館建設にともなう発掘調査―』財団法人かながわ考古学財団

・長谷川厚・林原利明・宮井　香　2001『三ヶ岡遺跡Ⅱ―県立近代美術館建設にともなう発掘調査―』財団法人かながわ考古学財団

・中三川昇・岩楯英子　2003『久留和遺跡発掘調査報告――店舗兼共同住宅建築工事に埋蔵文化財発掘調査』横須賀市教育委員会

第４章　調査成果

遺物まとめ

遺物はかわらけが半分以上を占め、その他に舶載品や常滑、瀬戸、渥美、備前等の国内産諸窯製品、火鉢、土製品、鉄製品、石製品、自然遺物などが出土している（図　参照）。層位的な時期的変化はほとんどみられず、かわらけは精良胎土が出土する以前の器壁が薄く、碗型に近い形状のタイプが主体となる。その他の常滑窯諸製品は第７～８型式、瀬戸窯諸製品は中・期以降など概ね13世紀後葉～14世紀前葉の年代と考える。

本調査地点周辺の長谷小路周辺遺跡群では、これまでの調査成果からは鋳造・鍛冶関連品や骨角製品が多く出土し、13世紀中頃～15世紀初頭には職能集団が活動していた地域であったと考えられる。本調査では、浜地の特徴でもある自然遺物（表９）の比率は高いものの、この地域に集住していたであろう職商人に直接関係するような遺物はほとんど出土していない。これとは別に注目されるのが、銅銭の出土である。銅銭は遺構・層位内より24種類66枚が出土した。銅銭の出土状況としては半数に近い29枚が土坑17、10枚が土坑１より出土しているものの、その出土状況は遺構内に埋納或は一括廃棄とは言い難い。そのため出土場所ではなく、初鋳年・書体の順に一覧表として示した（図　参照）。今回の調査面積は　から単位面積あたりの胴銭出土枚数は　となり、非常に密な印象をうける。単に落し物やゴミとしての廃棄とは片付けられない出土数と思われる。長谷小路（現国道134号線）を挟んだ今小路西遺跡（由比ヶ浜一丁目213番３地点）では鎌倉が都市機能を失い始める15世紀初頭に位置付けられる井戸の底から、摸鋳銭鋳造失敗品とその鋳型などが発見されている。調査地内に鋳造施設等は発見されていないものの、職能集団が活動していた地域という点をふまえると両者の遺跡地は非常に密接な関係であり、このことからも胴銭の出土が多いのも理解できる。

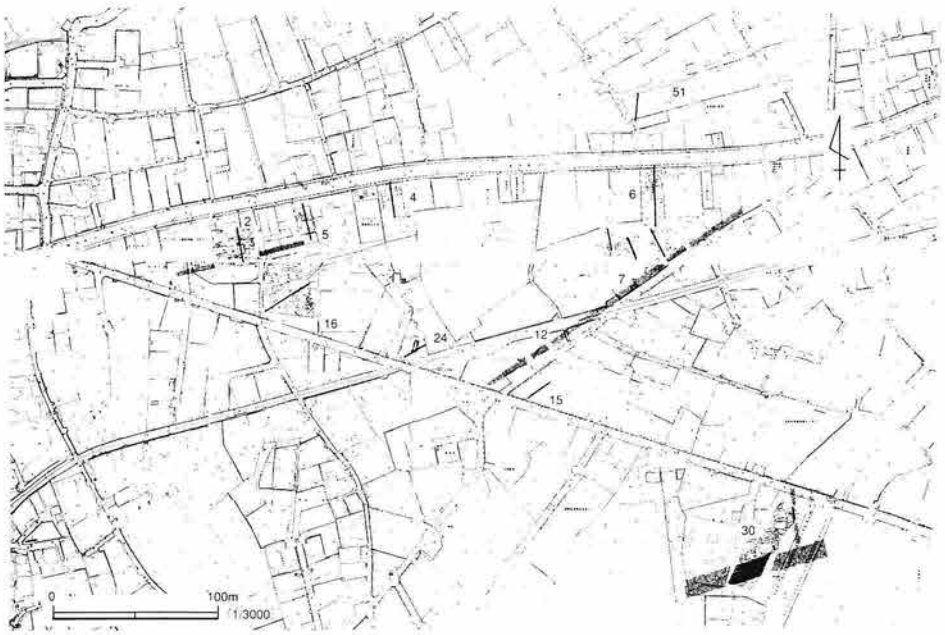
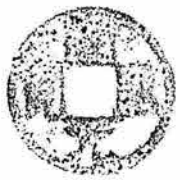


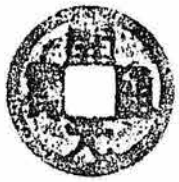
表1　出土銅銭一覧－1

1



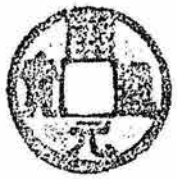
銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	621年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	23.1㎜	厚さ	1.1㎜
備考	表面擦り		

2



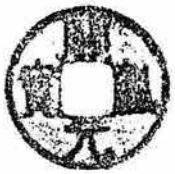
銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	621年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	23.1㎜	厚さ	1.1㎜
備考			

3



銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	621年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	22.7㎜	厚さ	1.0㎜
備考			

4

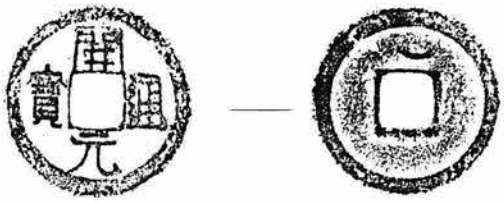


銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	621年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	22.4㎜	厚さ	1.0㎜
備考	縁擦り		

5

銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	621年		
書体	楷書		
背文	右上月		
出土地点	土坑17上層		
径	25.5㎜	厚さ	1.5㎜
備考	罅・歪む		

6



銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	621年		
書体	楷書		
背文	上月		
出土地点	1面上		
径	23.5㎜	厚さ	1.5㎜
備考	罅		

7

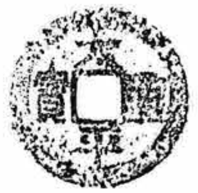
銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	621年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	表採		
径	24.6㎜	厚さ	1.1㎜
備考	孔欠け・罅		

8

銭種	開元通寶		
国名	唐		
初鋳年	845年		
書体	楷書		
背文	上月　藍か？		
出土地点	1面下		
径	23.5㎜	厚さ	1.5㎜
備考	会昌開元銭		

表2　出土銅銭一覧－2

9

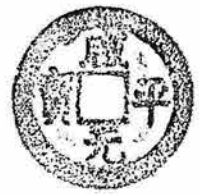


銭種	太平通寶		
国名	北宋		
初鋳年	976年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑3		
径	24.6mm	厚さ	1.5mm
備考			

10

銭種	淳化元寶		
国名	北宋		
初鋳年	990年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	1面下		
径	24.8mm	厚さ	1.3mm
備考			

11

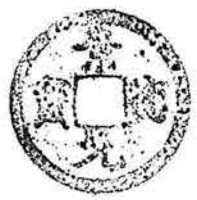


銭種	咸平元寶		
国名	北宋		
初鋳年	998年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.9mm	厚さ	1.3mm
備考			

12

銭種	咸平元寶		
国名	北宋		
初鋳年	998年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	1面下		
径	25.0mm	厚さ	1.4mm
備考	小孔空く		

13



銭種	景徳元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1004年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑1		
径	25.0mm	厚さ	1.3mm
備考			

14

銭種	祥符元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1009年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	25.3mm	厚さ	1.2mm
備考			

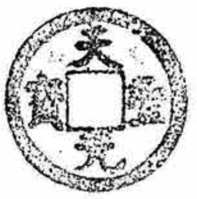
15

銭種	天聖元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1023年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	25.3mm	厚さ	1.4mm
備考			

16

銭種	天聖元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1023年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	25.3mm	厚さ	1.7mm
備考			

17



銭種	天聖元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1023年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	1面下		
径	25.2mm	厚さ	1.5mm
備考			

18

銭種	天聖元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1023年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	方形竪穴1		
径	24.9mm	厚さ	1.2mm
備考	表面擦り		

19

銭種	景祐元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1034年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	25.6mm	厚さ	1.2mm
備考			

20

銭種	景祐元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1034年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	1面下		
径	23.1mm	厚さ	1.5mm
備考	縁擦り		

表3　出土銅銭一覧－3

21		22		23		24	
銭種	景祐元寶	銭種	皇宋通寶	銭種	皇宋通寶	銭種	皇宋通寶
国名	北宋	国名	北宋	国名	北宋	国名	北宋
初鋳年	1034年	初鋳年	1038年	初鋳年	1038年	初鋳年	1038年
書体	楷書	書体	楷書	書体	楷書	書体	楷書
背文		背文		背文		背文	
出土地点	表採	出土地点	土坑1	出土地点	土坑1	出土地点	1面下
径 25.5mm	厚さ 1.0mm	径 24.1mm	厚さ 1.3mm	径 25mm	厚さ 1.2mm	径 24.4mm	厚さ 1.4mm
備考	縛	備考		備考		備考	

25		26		27		28	
銭種	皇宋通寶	銭種	皇宋通寶	銭種	皇宋通寶	銭種	皇宋通寶
国名	北宋	国名	北宋	国名	北宋	国名	北宋
初鋳年	1038年	初鋳年	1038年	初鋳年	1038年	初鋳年	1038年
書体	篆書	書体	篆書	書体	篆書	書体	篆書
背文		背文		背文		背文	
出土地点	方形竪穴1	出土地点	土坑17上層	出土地点	土坑17上層	出土地点	土坑17上層
径 23.70mm	厚さ 1.1mm	径 24.3mm	厚さ 1.3mm	径 24.9mm	厚さ 1.3mm	径 25.3mm	厚さ 1.6mm
備考		備考	孔加工	備考		備考	

29		30		31		32	
銭種	皇宋通寶	銭種	皇宋通寶	銭種	皇宋通寶	銭種	至和元寶
国名	北宋	国名	北宋	国名	北宋	国名	北宋
初鋳年	1038年	初鋳年	1038年	初鋳年	1038年	初鋳年	1054年
書体	篆書	書体	篆書	書体	篆書	書体	楷書
背文		背文		背文		背文	
出土地点	土坑17上層	出土地点	1面下	出土地点	1面下	出土地点	土坑17上層
径 25.3mm	厚さ 1.5mm	径 23.1mm	厚さ 1.4mm	径 23.3mm	厚さ 1.3mm	径 22.3mm	厚さ 1.4mm
備考	孔加工	備考		備考		備考	

表4　出土銅銭一覧－4

33

銭種	嘉祐通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1056年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑1		
径	21.8mm	厚さ	1.9mm
備考			

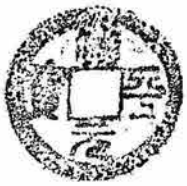
34

銭種	嘉祐通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1056年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	1面下		
径	24.0mm	厚さ	1.4mm
備考			

35

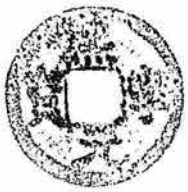
銭種	治平元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1064年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	1面下		
径	24.1mm	厚さ	1.5mm
備考			

36



銭種	治平元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1064年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	表採		
径	24.1mm	厚さ	1.4mm
備考			

37



銭種	熙寧元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1068年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑3		
径	24.5mm	厚さ	1.4mm
備考			

38

銭種	熙寧元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1068年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	23.9mm	厚さ	1.6mm
備考			

39

銭種	熙寧元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1068年		
書体	楷書		
背文			
出土地点	1面下		
径	23.8mm	厚さ	1.6mm
備考	背面錆笵		

40

銭種	熙寧元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1068年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土坑1		
径	24.0mm	厚さ	1.4mm
備考			

41

銭種	元豊通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1078年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑1		
径	24.1mm	厚さ	1.3mm
備考	背面錆笵		

42

銭種	元豊通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1078年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑1		
径	24.2mm	厚さ	1.3mm
備考			

表5　出土銅銭一覧－5

43			
錢種	元豊通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1078年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.4mm	厚さ	1.5mm
備考			

44			
錢種	元豊通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1078年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	23.7mm	厚さ	1.5mm
備考			

45			
錢種	元豊通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1078年		
書体	行書		
背文			
出土地点	表採		
径	25.7mm	厚さ	1.2mm
備考			

46			
錢種	元豊通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1078年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	1面下		
径	25.4mm	厚さ	1.3mm
備考			

47			
錢種	元祐通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1086年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.7mm	厚さ	1.3mm
備考			

48			
錢種	元祐通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1086年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.9mm	厚さ	1.4mm
備考	背面錯笵		

49			
錢種	元祐通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1086年		
書体	行書		
背文			
出土地点	表採		
径	24.4mm	厚さ	1.4mm
備考			

50			
錢種	元祐通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1086年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.8mm	厚さ	1.7mm
備考			

51			
錢種	紹聖元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1094年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.0mm	厚さ	1.6mm
備考			

52			
錢種	紹聖元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1094年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	23.1mm	厚さ	1.3mm
備考			

53			
錢種	紹聖元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1094年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	表採		
径	25.0mm	厚さ	1.3mm
備考			

表6　出土銅銭一覧－6

54

銭種	元符通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1098年		
書体	行書		
背文			
出土地点	表採		
径	23.8mm	厚さ	1.3mm
備考			

55

銭種	聖宋元寶		
国名	北宋		
初鋳年	1101年		
書体	行書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.9mm	厚さ	1.4mm
備考	孔加工		

56

銭種	政和通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1111年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.6mm	厚さ	1.4mm
備考			

57

銭種	政和通寶		
国名	北宋		
初鋳年	1111年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	1面下		
径	24.0mm	厚さ	1.2mm
備考			

58

銭種	慶元通寶		
国名	南宋		
初鋳年	1195年		
書体	楷書		
背文	五		
出土地点	土坑17上層		
径	24.5mm	厚さ	1.4mm
備考			

59

銭種	嘉定通寶		
国名	南宋		
初鋳年	1208年		
書体	楷書		
背文	十		
出土地点	1面上		
径	24.2mm	厚さ	1.1mm
備考			

60

銭種	紹定通寶		
国名	南宋		
初鋳年	1228年		
書体	楷書		
背文	元？		
出土地点	土坑17上層		
径	24.4mm	厚さ	1.4mm
備考			

61

銭種	皇宋元寶		
国名	南宋		
初鋳年	1253年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土坑1		
径	24.0mm	厚さ	1.6mm
備考			

62

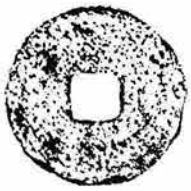
銭種	皇宋元寶		
国名	南宋		
初鋳年	1253年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土壙4		
径	24.9mm	厚さ	1.6mm
備考	孔加工		

表7　出土銅銭一覧－7

63

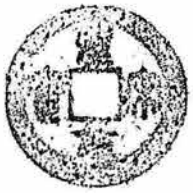
銭種	皇宋元寶		
国名	南宋		
初鋳年	1253年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土坑17上層		
径	24.0㎜	厚さ	1.6㎜
備考			

64



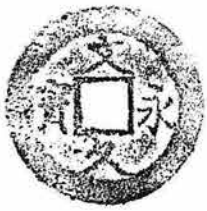
銭種	皇宋元寶		
国名	南宋		
初鋳年	1253年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	土壙17上層		
径	24.0㎜	厚さ	1.4㎜
備考	背面錆笵		

65



銭種	皇宋元寶		
国名	南宋		
初鋳年	1253年		
書体	篆書		
背文			
出土地点	1面上		
径	22.9㎜	厚さ	1.3㎜
備考			

66



銭種	文久永寶		
国名	江戸初鋳		
年	1863年		
書体	楷書		
背文	波紋		
出土地点	土坑17上層		
径	26.6㎜	厚さ	1.4㎜
備考	歪む		

表8　出土遺物計測表

図No.	遺物No.	層位	種別	計測値　単位：cm		
				口径	底径	器高
	1	1面上	土器 かわらけ・糸	(14.0)	(8.4)	3.7
	2	1面上	土師器 坏	－	－	－
	3	1面上	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	－	－	－
	4	1面上	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	(20.7)	－	－
	5	1面上	常滑窯 押印文	文様：格子		
	6	1面上	加工骨 鹿の角			
	7	土壙21	土器 かわらけ・糸	(7.9)	(4.6)	1.35
	8	土壙2	土器 かわらけ・糸	(7.2)	(4.4)	1.7
	9	土壙12	土器 かわらけ・糸	(7.2)	(4.8)	2.0
	10	土壙1	土器 かわらけ・糸	(7.8)	(4.6)	2.3
	11	土壙1	土器 かわらけ・糸	(7.6)	(5.0)	2.2
	12	方竪1	土器 かわらけ・糸	(12.5)	(8.2)	3.5
	13	土壙1	土器 かわらけ・糸	(14.0)	(7.7)	3.45
	14	土壙1	土器 かわらけ・糸	(13.4)	(8.4)	3.4
	15	土壙21	土器 かわらけ・糸	(12.6)	－	－
	16	方竪1	瀬戸窯 瓶子	－	－	－
	17	土壙18	常滑窯 山茶碗	－	(6.2)	－
	18	土壙21	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	－	－	－
	19	方竪1	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	－	－	－
	20	方竪1	常滑窯 甕	－	－	－
	21	土壙1	瓦器質 火鉢	－	－	－
	22	土壙1	加工骨 鹿			
	23	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(8.7)	(7.2)	1.6
	24	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(8.7)	(6.6)	1.6
	25	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(7.8)	(5.5)	1.85
	26	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(7.9)	(5.2)	2.4
	27	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(11.4)	(7.4)	2.7
	28	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(13.0)	(8.5)	3.3
	29	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(13.4)	(8.2)	3.1
	30	1面構成土	常滑窯 山茶碗	－	(8.0)	－
	31	1面構成土	備前 摺鉢			
	32	土壙15	土器 かわらけ・糸	12.0	7.4	3.85
	33	土壙17	土製品 土錘			
	34	2面構成土	土器 かわらけ・糸	(7.7)	(5.4)	1.5
	35	表採	舶載品 同安窯青磁碗	－	5.0	－
	36	表採	舶載品 龍泉窯青磁碗	－	(4.6)	－
	37	表採	舶載品 白磁口兀皿	－	5.6	－
	38	表採	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	－	－	－
	39	表採	常滑窯 甕	－	－	－
	40	表採	常滑窯 押印文	文様：格子に斜線		
	41	表採	土製品 円板	－	－	－
	42	表採	土製品 蓋	(6.0)		1.5
	43	表採	骨 鹿の角			
	1	1面上	土師器 坏	(15.8)	－	[3.5]
	2	土坑10	土師器 坏	(13.8)	(10.8)	3.4
	3	方竪3	土師器 坏	14.4	10.1	3.8
	4	土坑9	土師器 坏	(15.5)	(10.7)	(3.8)
	5	2面構成土	土師器 坏	(11.8)	(6.4)	4.2
	6	表採	土師器 坏	(11.2)	－	[2.3]
	7	1面上	土師器 坏	－	－	[3.2]
	8	1面構成土	土師器 坏	－	－	[1.6]
	9	土壙14	土師器 甕	(17.0)	－	[10.8]
	10	土坑23	土師器 甕	(21.3)	－	[10.9]
	11	2面構成土	土師器 甕	－	－	[5.5]
	12	古代層	土師器 甕	－	－	[5.8]
	13	2面構成土	土師器 甕	－	－	[3.0]
	14	古代層	土師器 甕	－	－	[3.5]
	15	表採	土師器 甕	－	－	[3.0]
	16	2面構成土	土師器 甕	－	－	[5.1]
	17	2面構成土	土師器 甕	－	－	[2.3]
	18	2面構成土	土師器 甕	(14.6)	－	[4.4]
	19	土坑8	土師器 甕	(12.2)	－	[3.3]
	20	2面構成土	土師器 甕	－	－	[2.6]
	21	2面構成土	土師器 甕	－	(10.3)	[1.7]
	22	古代層	須恵器 蓋	(16.4)	－	[3.1]
	23	古代層	須恵器 坏	(11.0)	－	[2.9]
	24	1面構成土	須恵器 坏	(10.6)	－	[3.3]
	25	表採	須恵器 坏	(12.2)	－	[3.2]
	26	方竪2	須恵器 坏	(12.0)	－	[3.9]
	27	2面構成土	須恵器 坏	－	(6.4)	[1.4]

表9　出土遺物数

遺物 / 層位	かわらけ	舶載品				国内産諸窯				火鉢	土製品
	糸切り	青磁	白磁	青白磁	褐釉	瀬戸	常滑	渥美	備前		
1面上	140			1		5	22			2	
1面遺構	177				1	1	20	1		1	7
1面構成土	27						18		1	1	1
2面上	3										
2面遺構	31						3				1
2面構成土	27						2				1
表採	122	2	1			3	19				3
古代層	1										
計	528	2	1	1	1	9	84	1	1	4	13
%	37.8	0.1	0.1	0.1	0.1	0.6	6.0	0.1	0.1	0.3	0.9

遺物 / 層位	鉄製品		石製品	中世以前			近世	自然遺物		計	%
	銭	釘		土師器	須恵器	灰釉陶器		骨	貝		
1面上	3	3	1	3	4	1		6	18	207	14.8
1面遺構	14	1		21	6	1		17	137	404	28.9
1面構成土	13		1	5	4			2	19	96	6.9
2面上				1	2				5	11	0.8
2面遺構		1	2	12	4			2	26	82	5.9
2面構成土	29		1	13	9			1	72	154	11.0
表採	7			5	7		1	9	25	202	14.4
古代層			2	4					3	10	0.7
計	66	5	7	64	36	2	1	37	305	1,398	100.0
%	4.7	0.4	0.5	4.6	2.6	0.1	0.1	2.6	21.8	100.0	

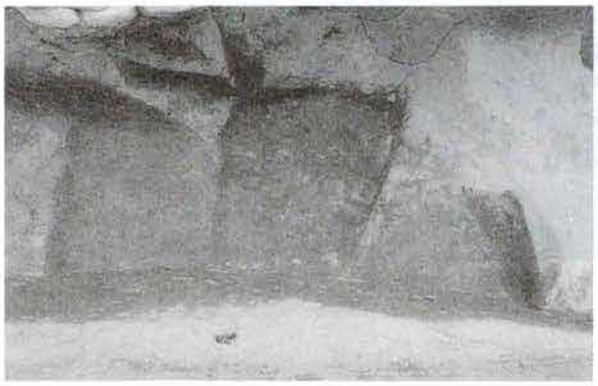
貝 / 層位	干潟群集			内湾泥底群集			内湾砂底群集		湾外砂底群集		
	アサリ	シオフキガイ	カガミガイ	アカニシ	バイガイ	イチョウトリガイ	イボキサゴ	ツメタガイ	チョウセンハマグリ	ダンベイキサゴ	ベンケイガイ
1面上			2	1	2		1	1	5	1	
1面遺構		1	1	2	4		76	4	24	6	1
1面構成土	1		2				1	1	6	1	
2面上									3		
2面遺構	3			1			1	1	5	2	
2面構成土	19	2	1	2	2		3	1	19	2	
表採	1		1		2	1		1	9	1	
古代層									3		
計	24	3	7	6	10	1	82	9	74	13	1

貝・骨 / 層位	岩礁							ほ乳類			
								ウシ			
	アワビ	イワガキ	サザエ	バテイラ	コシダカガンガラ	ツノマタナガニシ	ボウショウボラ	中足骨	歯骨	指骨	その他
1面上	1	3					1		1	1	
1面遺構	5		8	2	2		1				
1面構成土	2	3	1			1					
2面上			2								
2面遺構	2	4	6		1						
2面構成土	5	7	6	1	2						
表採	1	4	3	1				2			6
古代層											
計	16	21	26	4	5	1	2	2	1	1	6

骨 / 層位	ほ乳類						鳥類		魚類	
	ニホンシカ		イヌ		ヒト	イルカ				
	角	その他	上腕骨	指骨	頚骨	頭骨	上腕骨	その他	椎骨	その他
1面上	1					1		1	1	
1面遺構		2	1	8			1	2		3
1面構成土					2					
2面上									1	
2面遺構					1					
2面構成土							1			
表採										
古代層										
計	1	2	1	8	3	1	2	3	2	3

▲ 土坑17（南東から）

▲ 土坑23・24（北東から）



▲ 土坑27・28（南から）

▲ 方竪2・3（南から）

▲ Ⅱ区調査最終状況（南西から）

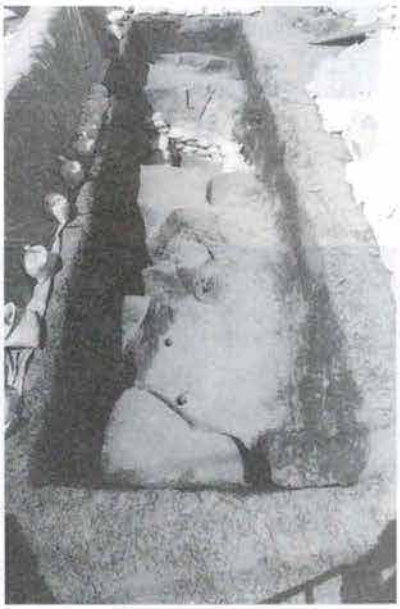
▲ Ⅰ区調査最終状況（南西から）

遺構写真　1

図版2

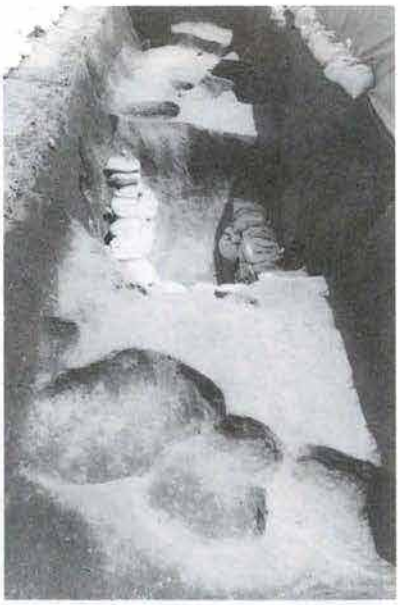
▲ 調査前現況

▲ 表土掘削終了後



▲ Ⅰ区1面全景（南西から）

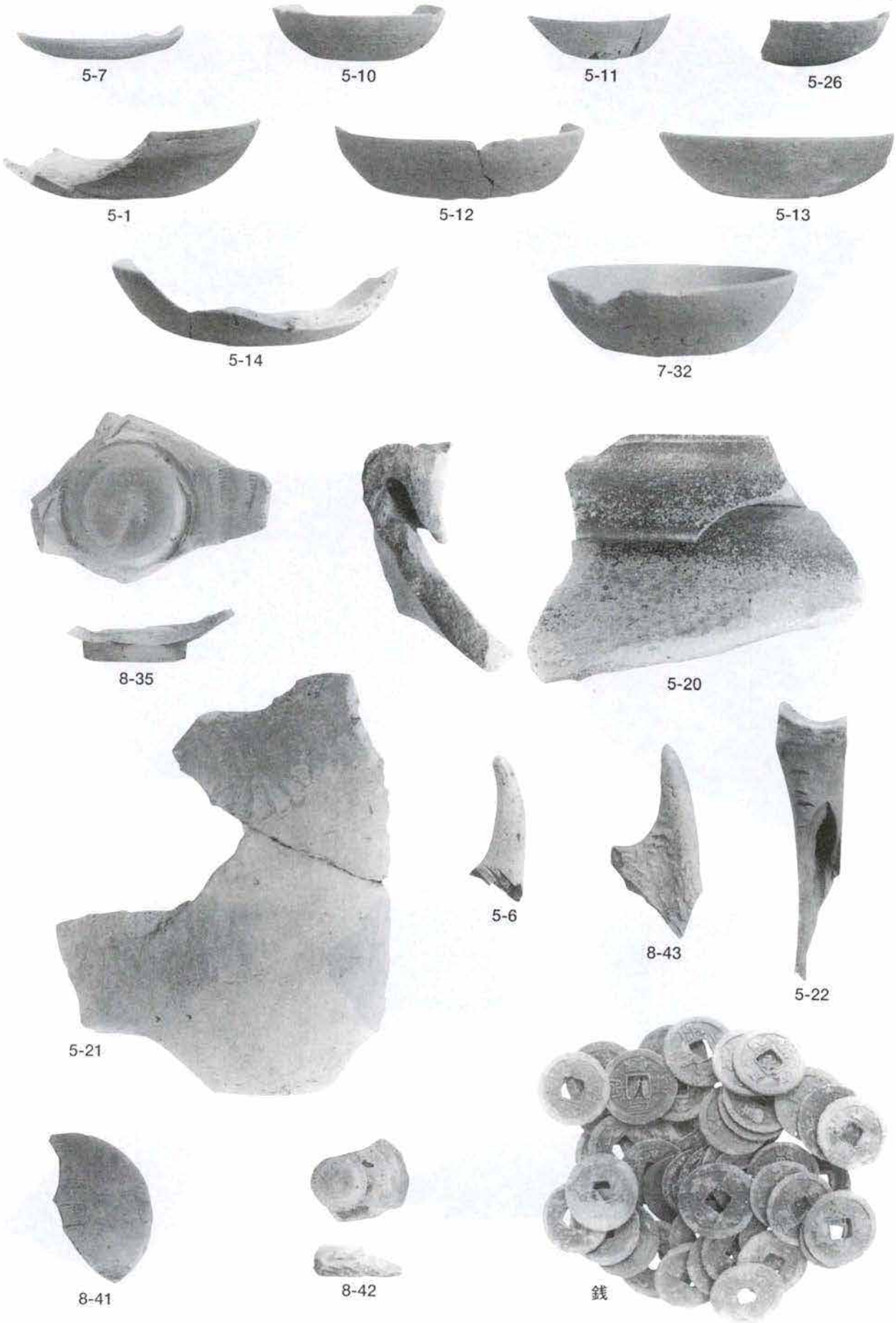
▲ Ⅰ区方竪1（南から）



▲ 土坑5・6（北東から）

▲ 土坑9・10（東から）

遺構写真 2



遺物写真（中世）

図版4

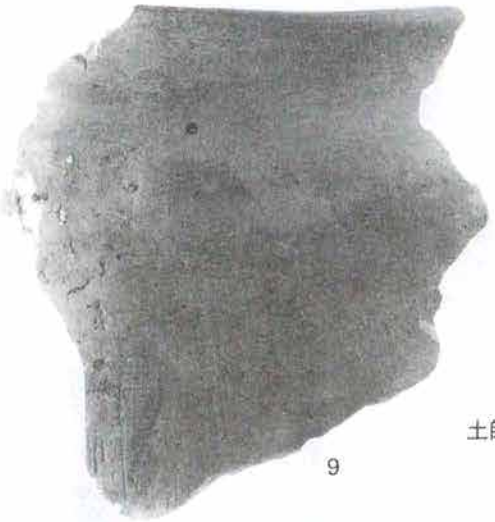
2

3

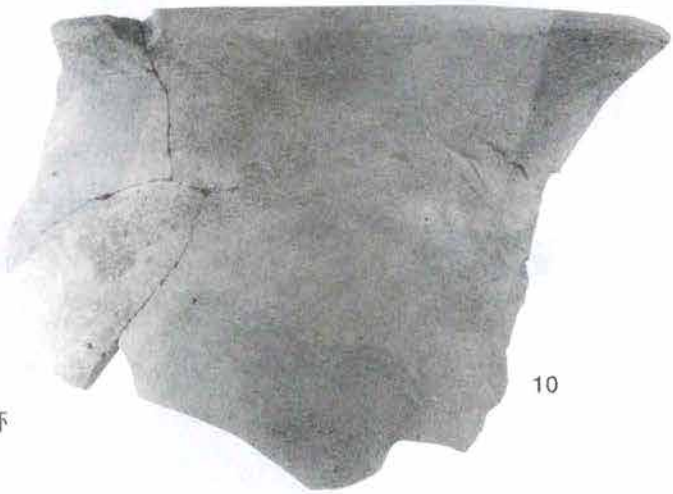
7（内面）

7（外面）

6


9

土師器　坏


10

11

12

16

土師器　甕

22

須恵器　蓋

24

土師器　坏

遺物写真（古代）

北条政村屋敷跡（No.131）

ほうじょうまさむらやしきあと

常盤字常松下1005番２地点

例　　言

1．本報は、北条政村屋敷跡（№131）内、鎌倉市常盤字常松下1005番２地点における個人専用住宅新築にともなう発掘調査の報告である。

2．調査期間　　平成14年７月23日～同年８月９日
　調査面積　　28.19㎡

3．調査体制
　担　当　者　　馬淵和雄
　調　査　員　　伊丹まどか・石元道子（現地調査）
　　鍛治屋勝二・松原康子（資料整理）
　調査補助員　　沖元道・吉田智哉
　作　業　員　　柴崎英輔・沼上三代治・宮崎明

4．本報作成分担
　図版作成　　伊丹・鍛治屋・松原・沖元
　表　作　成　　伊丹・沖元
　写真撮影　　馬淵（遺構）・伊丹（遺物）
　執筆・編集　　伊丹
　総括・補綴　　馬淵

5．発掘調査にかかわる資料は鎌倉市教育委員会が保管している
　協力機関　　（社）鎌倉市シルバー人材センター・（株）高野建設・（有）秋元組

凡　　例

1．図中の方位はすべて座標北を示す。

2．挿図縮尺は次のとおり
　遺構全図　　80分の１
　土　層　図　　60分の１
　出土遺物　　３分の１

3．遺構図の高度は海抜を示す。

4．土師器皿の呼称のうち「Ｒ種」はロクロ成形種を、「Ｔ種」は手づくね成形種を示す。

5．元号年および史料中の条文を示す日付は漢数字を、地の文中での日付は算用数字を用いた。

6．引用・参考文献は第４章末尾に一括した。

目　次

第１章　調査地点について ……250
第２章　調査の概要 ……252
　　１　調査にいたる経緯 ……252
　　２　調査の方法と経過 ……252
　　３　堆積土層 ……254
第３章　検出遺構と出土遺物 ……254
　　１　上層遺構面 ……254
　　２　下層遺構面 ……255
第４章　まとめ ……256

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡 ……251
図２　調査区設定図 ……252
図３　調査区壁土層図 ……253
図４　上層面・下層面遺構全図 ……254
図５　出土遺物 ……255

表　目　次

表１　出土遺物観察表 ……257
表２　出土遺物破片点数 ……257

図　版　目　次

図版１－１　調査地点近景 ……258
　　１－２　西壁土層断面 ……258
　　１－３　上層遺構面（北から） ……258
図版１－４　泥岩地行面（南から） ……258
　　１－５　土坑１ ……258
　　１－６　出土遺物 ……258

第１章　調査地点について

調査地点は、ＪＲ鎌倉駅から西に約1900mの、常盤と呼ばれる谷戸内に位置している。常盤は東西約900m、南北約300mを測る広い谷戸である。現在はＪＲ鎌倉駅と県道藤沢鎌倉線を結ぶ新道が谷戸内のほぼ中央を縦断しているが、中世では鎌倉市中から大仏坂切通しを西に越えた北東部、化粧坂切通しを西に越えた南西部に位置し、両切通しの監視・防衛拠点としての要地であった可能性がある。谷戸内には多くの支谷があり、調査地点は谷口（西）から一つ目の南側の、幅100m（谷口）、奥行120mの規模がある支谷の谷口部に位置する。現在の地番は鎌倉市常盤字常松下1005番２外地点。この支谷内にはかつて「仲ノ坂」という道が通じていたという。現在、南の山稜に向かって谷戸内東側の山裾を縦走する狭い道がある。この道自体は昭和の前半頃まで小川であったというが、すぐ近くを並行して旧仲ノ坂が走っていた可能性は少なくないであろう。谷尻の山上には大仏坂切通しが旧状を留めている。

谷戸内には殿入（とんのり）・御所ノ内・法華堂・一向堂・車坂・中坂（仲ノ坂）・たちん台（館の台？）等の小字名が残り、常盤は「常葉」とも記される。調査地から東に約200mの距離にある、現在「御所の内」と称される一帯の支谷には、北条泰時の弟で連署・執権を務めた北条政村の「常盤亭」があったとされる。

政村常盤亭は、「常葉ノ別業」・「常葉ノ第」・「常盤ノ御亭」・「常盤の山荘」とも記される。『吾妻鏡』によると、康元元年（1286）８月、将軍宗尊親王が「常葉別業」に赴いたと記され、歌合が行なわれた記録も残る（同月二十・二十一日条）。「金沢貞顕書状」(年月日未詳）には「さてあまなハのやけて候程ニ、ときハへうつり」とみえる（『神奈川県史　資料編』２－1623)。谷戸内には重時流北条氏の時茂（ときもち）（重時四男）から時範（ときのり）（時茂の息とも、北条義政の息ともいう）まで山荘があったと伝える（『新編鎌倉志』)。重時の息で、連署・評定衆をつとめた信濃塩田北条氏の祖、北条（塩田）義政もこの地にいた可能性がある（阿部1971)。当地一帯は北条氏一族が別邸を設けた地であったことが窺われる。また、鎌倉幕府滅亡直後の元弘三年（1333）六月三日の「政綱施行状」(『神奈川県史　資料編』２－3102）で曾我右衛門太郎入道に宛て、「曾我人々相共、常葉可警護」と命じており、鎌倉防衛の要地であったことを示している。

谷戸内に広がる複数の支谷では多くの「やぐら」の存在も確認されている。調査地の南東400m付近には、一向堂という小字名が残る。『新編相模国風土記』所載の「大谷遺跡録」には、延慶二年（1309）唯善坊が如信上人の彫像、親鸞の真影・遺骨を持し、鎌倉に下りて常盤村に居住し念仏の宣布に努めたとある。この唯善坊の草庵は、戦国期に兵火にかかり「廃庵」となった。現在では宗旨未詳とされるが、浄土真宗（一向宗）の布教所が所在していた地であろう。

谷戸内での発掘調査は、これまで次のようなものがある。

1971年に法華堂と称される支谷でおこなわれた調査では、地山を幅広く掘り切って「入り口」とした遺構を検出した（地点8, 奥田1972)。1977年には法華堂東の支谷の調査が行なわれ、鎌倉期から室町期前半にわたる三時期の遺構面を確認し、井戸・礎石建物・溝などを検出した。遺物は中世土師器（「土師器皿」）・常滑甕・舶載磁器・銭などの他に、金銅製水滴・骨製賽子・滑石製スタンプ・硯などが出土している（地点6, 未報告)。この地は、現在は国指定史跡「北条政村邸跡」となる。史跡「北条政村邸跡」の北側に広がる丘陵部は地山加工により山城の特徴が認められ、県遺跡台帳で桔梗山城と呼ばれている（№387)。調査地点と殿入川を挟んで近接する地点３・４・５では、中世の遺構・遺物とともに、奈良・平安時代の水田が検出された（斎木ほか1994)。調査地の南側、同支谷内での調査では、鎌倉時代後半の遺構・遺物とともに、９世紀中葉から後半に比定される竪穴住居や、８～10世紀に属する遺物が出土している（地点2, 馬淵1999)。

（引用・参考文献は第４章末尾に一括）

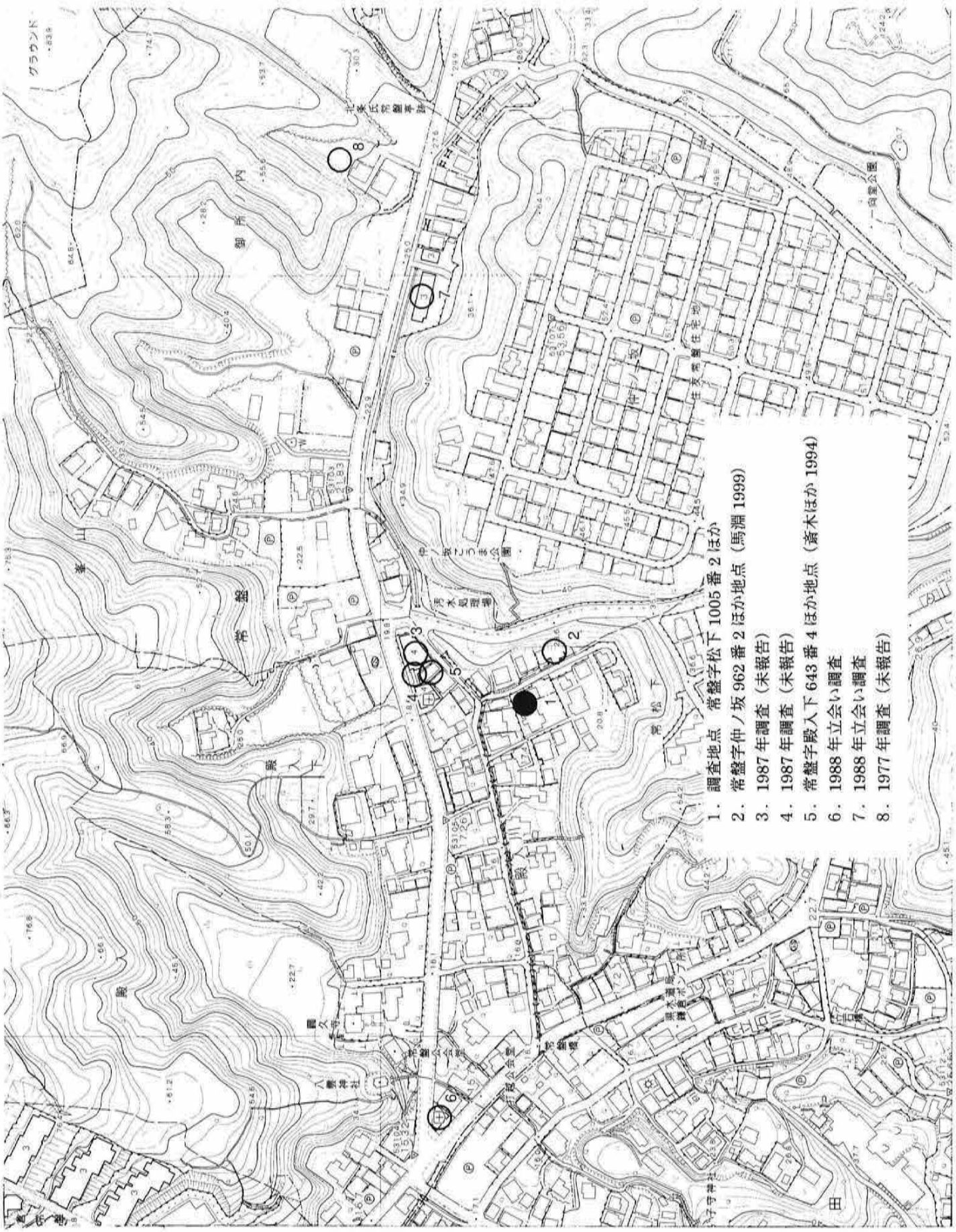


図 1　調査地点と周辺の遺跡

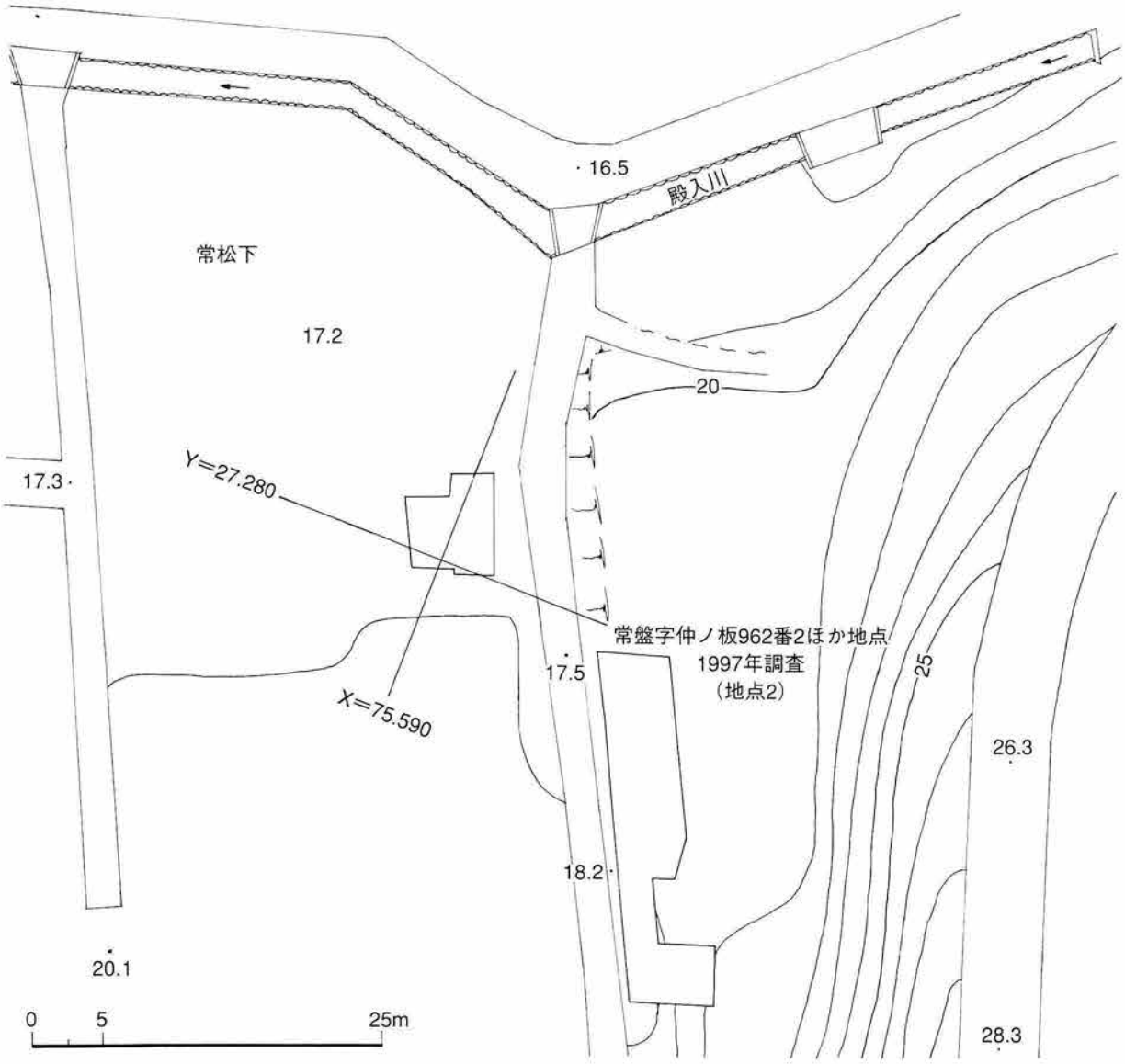


図2　調査区設定図

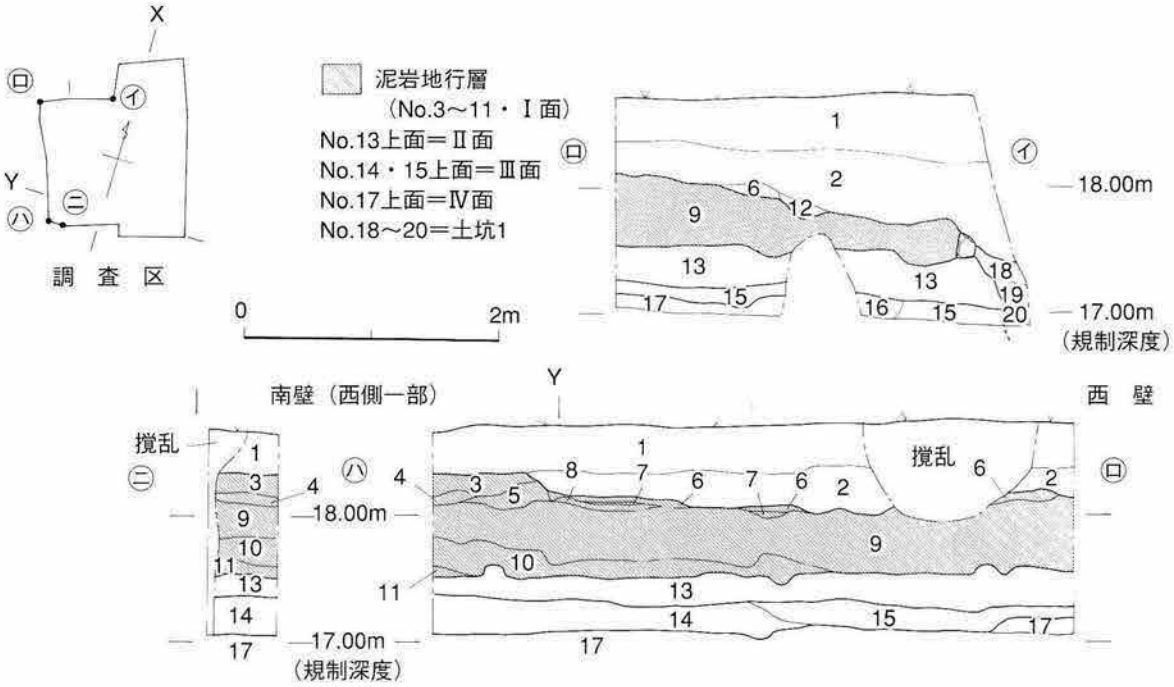
第2章　調査の概要

1．調査にいたる経緯

平成14年5月に地下室の築造を含む個人専用住宅の建設に係る事前相談がもたらされた。地下室の築造に係る掘削深度から勘案して、埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断されたため、確認調査を実施したところ、現地表下60ｃｍ以下に中世遺構面の存在が確認された。これにより事業者との協議を経て、文化財保護法第57条の2の届出手続きを行い、施工者との工程調整および発掘調査の準備が整った平成13年7月23日から8月9日まで現地での発掘調査を実施した。

2．調査の方法と経過

調査は平成14年7月22日～同年8月9日にかけて実施された。調査対象面積は28.19㎡である。
平成14年5月28日～30日に行なった確認調査の結果から、地表下60㎝までは近・現代の整地層であることが判明していたので、重機によりそれを取り除いたのち、人力で掘り下げ、遺構確認を行なった。調査区内には大きな撹乱坑があったうえ、直径80㎝のコンクリート製の基礎杭が12本埋設されていたた



1．表土
2．茶褐色弱粘質土　近世耕作土。
3．拳大の泥岩・砂質土を含む。
4．小石大の泥岩・炭化物を含んだ暗褐色粘質土。
5．拳大の泥岩・炭化物を含んだ暗褐色粘質土。
6．小石～拳大の泥岩・炭化物を含んだ暗褐色粘質土。
7．黒色粘土層
8．6と同質
9．拳大～人頭大の大型泥岩・炭化物・砂質土を含む。
10．9と同質・より緊密に泥岩が占有する。
11．拳大～半人頭大の泥岩層
12．茶褐色粘質土　2と同質。砂質土混入。
13．暗茶褐色粘質土　褐鉄を多く含む。炭化物・遺物片を多く含む。
14．暗褐色粘質土　13に比べ粘性が強く褐鉄分が少ない。
15．暗褐色粘質土　13に比べ粘性が強い。褐鉄量は13と同じく多い。
16．暗褐色粘質土　褐鉄を多く含む。粘性強。遺構覆土か？
17．黒色粘土　炭化物・遺物片を含む。褐鉄微量。
18．茶褐色弱粘質土　炭化物・遺物片含む。褐鉄微量。
19．茶褐色弱粘質土　粘性弱い。褐鉄・炭化物を含む。
20．茶褐色弱粘質土　炭化物・泥岩粒を微量に含む。

図3　調査区壁土層図

め、平面的な調査が非常に困難であった。また、調査区内に設定した測量用方眼の2軸以東は旧地表が下がっていくが、海抜17.0mまでという掘削深度規制により、以下の確認はできなかった。

測量にあたっては、調査区内の南寄りにある国土座標交点X＝－75.590.460／Y＝27.278.880（area 9）を基準とした。座標成果は調査地点北約20mにある鎌倉市4級基準点（C073）から算出した。

調査の結果、破砕泥岩による地行や土坑を検出した。出土遺物には中世のもののほか、破片ではあるがそれ以前のものも含まれている。出土遺物については、報文末に一覧表で示した。

日誌抄

7月23日　調査開始。機材搬入。調査区の設定。重機による表土掘削。
24日　標高原点移動。測量基準線を設定。試掘坑位置確認、掘り上げ。
25日　上層面検出および遺構確認。
29日　精査と並行して、全側図、個別遺構図の作成。
8月1日　上層遺構面全景写真撮影。
2日　上層遺構面で検出した、泥岩地行部分を重機によって掘り下げ開始。
3日　上層遺構面と下層遺構面の間層で精査、遺構面でないことを確認。全景写真撮影。
7日　下層遺構面確認、精査。調査区壁の土層堆積図実測。
8日　下層遺構全景写真撮影。全側図、個別遺構図の作成。機材清掃。
9日　現地調査終了。機材撤収。

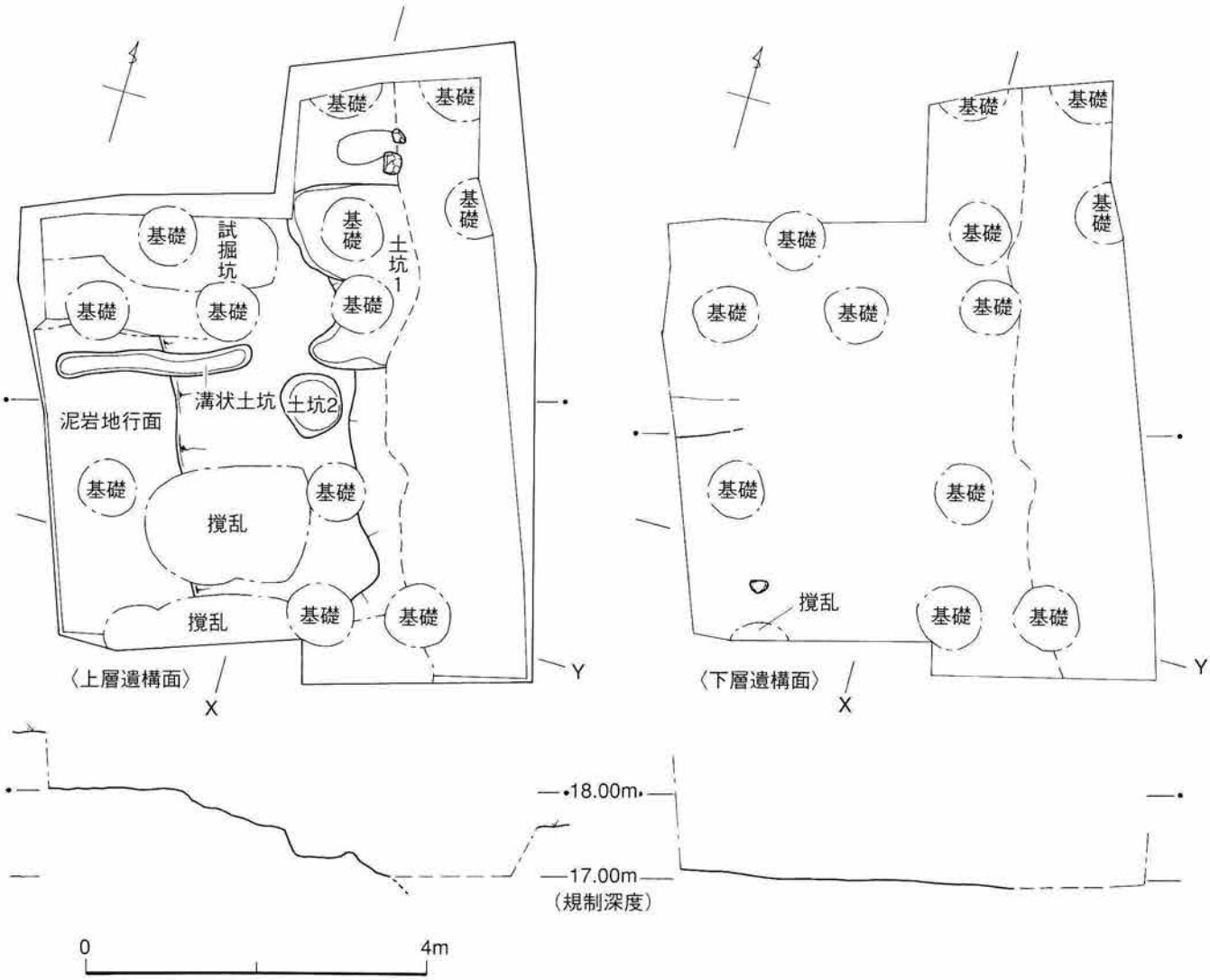


図4　上層面・下層面遺構全図

3．堆積土層

調査開始前の地表高は海抜18.7m、前面道路の標高は調査地点あたりで海抜17.2m前後なので、約1.5mの比高差がある。近・現代の層が地表下約60cmにおよんでおり、これを剥がすと直下に大・小の破砕泥岩によって構築された版築地行層が現れ、中世上層面とした。海抜高は18.1～18.3mである。この地行層は堅く突き固められ、約80cmの厚さがある。調査区西端から東に約80cmの辺りまで、壁に平行する形でひろがり、西および南北は調査区外にある。破砕泥岩による地行層下には、調査規制深度の海抜17.0mにいたるまでに、褐鉄を多く含む硬く締まった暗褐色粘質土層が、約40cmの厚さで堆積する。

中世下層とした、規制深度値以下は黒色粘土が堆積する。泥岩による地行が切れる辺りから東に向かって落ち込みが形成される。この落ち込みは、道路をはさんだ東南側で1997年に実施された調査でも、「道路に面したところが急斜面の崖となる」という報告がなされており、道路東側にあたる本調査地も同様の様相を示すと考えたが、規制深度のために崖、あるいは斜面の確認は出来なかった。

第3章　検出遺構と出土遺物

1．上層遺構面（図4）

調査区西壁沿いで、現地表下40cm、海抜18.3mで泥岩による地行面を検出した（図4）。泥岩による

地行は約80cmの厚さがあり、堅固で平坦であるが、生活面を造成した確かな痕跡を確認することはできなかった。地行の東側は、東に向かってややなだらかに傾斜するが、後世に上部が削平を受けた可能性もある。泥岩の地行は確認できた範囲で、南北に490cm、東西に380cmを測った。東西幅は傾斜面も含み、平坦な部分で幅80cmを測る。地行の北・西・南側は調査区外に延びてしまっていたため、正確な形状、範囲は不明である。この地行は「道路」ではないかと想定して作業を進めていたが、全容がうかがえずはっきりとした性格は不明であり、可能性がある、というにとどめたい。

検出した遺構は、泥岩地行のほぼ中心近くに、浅い溝状の土坑一基がある。幅30cm、長さ220cm、深さ5～18cmを測り、溝というより、浅い落ち込みといった感がある。遺物は出土していない。土坑1は不整形で、遺構埋土は褐色土。焼土、大・小泥岩、炭化物を含む。出土遺物には土師器（図5－9）がある。土坑2は円形を呈する。地行の傾斜面で検出したが、土坑上層は削平された可能性もある。埋土は茶褐色土。焼土、炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

2．下層遺構面（図4）

厚い泥岩地行を重機によって取り除くと、褐鉄を含む暗茶褐色粘質土層（図3土層番号13）が厚さ約5～20cmの堆積で広がる。その下層には、上層に比べて、粘性の高い暗褐色粘質土（図3土層番号14）の堆積が広がる。この層の上面では、調査区の西、ほぼ中央付近から北に向かって落ち込みを確認したが（図3土層番号15）、削平を受けたためか、平面的に確認する事は困難であった。この落ち込みからは、破片ではあるが遺物が多く出土した。調査区の東方に下層面遺構全図（図4）で点線で示したラインから以東は落ち込むと思われるが、掘削深度の限界があるために確認は出来なかった。

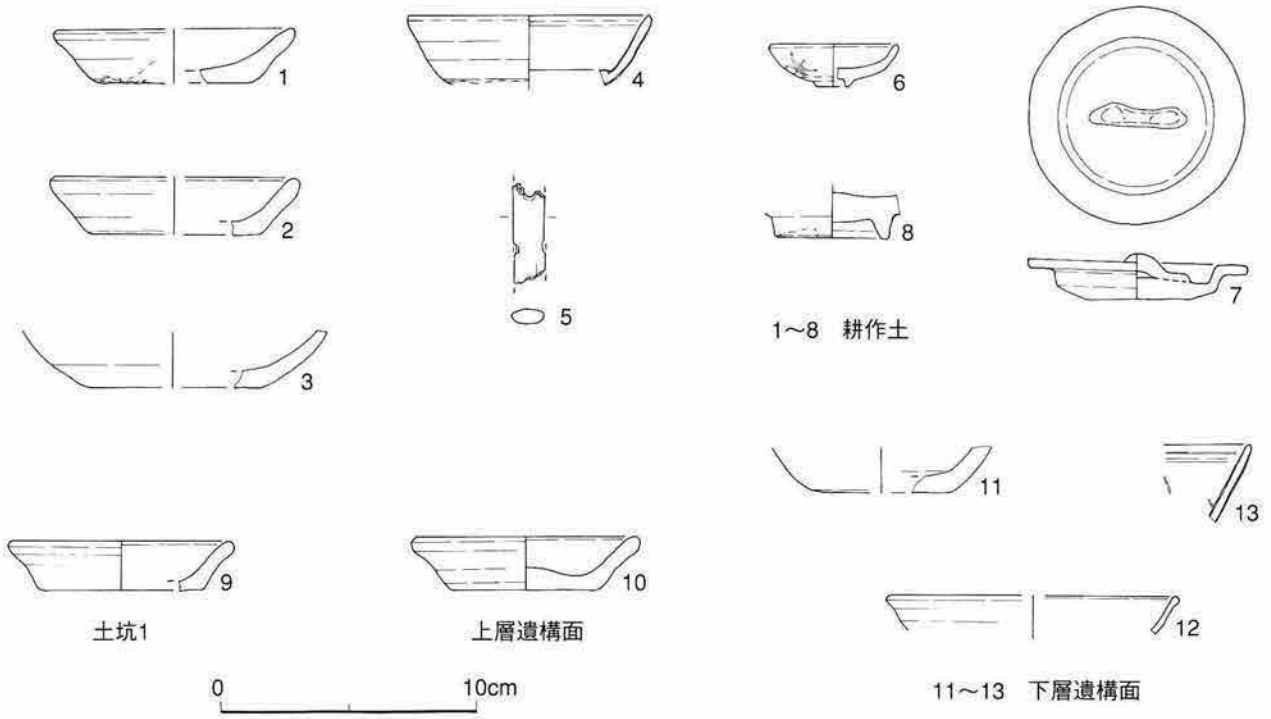


図5　出土遺物

第4章　まとめ

本調査では、調査範囲が狭く、出土遺物も少なかったために、遺構の規模、性格などを明確にすることができなかった。上層遺構面検出の泥岩版築を中心に、調査成果を簡単にまとめておきたい。

遺跡の年代について　遺物の出土量が少ないために、上層・下層とも年代比定をするのは困難であるが、遺跡全体についていえば、近隣の地点２と同様律令期にはじまり、12世紀末から15世紀の中世を中心として、近世まで続いているとみてよい。

下層遺構面は、基盤層に近いことから、大きく鎌倉時代前期以前とみておきたい。
上層遺構面については、土坑１で出土した土師器皿を指標にすれば、おおむね13世紀中葉から後半の年代が考えられる。

地形（ちけい）と泥岩地行層について　地点２の結果と合わせてみれば、調査地点東沿いにある現在の道路に向かって地形が落ち込むことになる。これは現況地形が、中世からその位置、形状を留めていることの証左となりうる。ただし第１章で触れたように、この道は昭和のある時期まで小川であったということなので、道路までが古くからのものを踏襲しているということはできない。

今回の調査の上層遺構面で検出された泥岩版築層は、現況道路の西側の一段高いところに位置し、非常に厚く、堅牢に突き固められている。存続年代については大きく中世といっておく。この遺構が何であるか、範囲が狭く簡単に決めることはできないものの、上面に柱穴等の落込みはなく、生活臭が薄い点は例えば、現況道路をはさんだ地点２上層遺構面の状況とはまったく異なる。すなわち、後者の場合、面上には建物の存在を窺わせるピットが多数検出されており、遺物にも常滑片口鉢（Ⅰ・Ⅱ類）が多く含まれるなど、生活性を強く感じさせる要素があった（馬淵1999）。このような要素と版築の強固さを勘案すれば、今回検出の泥岩地行が道路である可能性を視野に入れておく必要があろう。もしそうだとすれば、それが「仲ノ坂」である可能性もまた高いと考える。いずれにせよ、この地行層に関しては、今後も注意しておきたい。

古代その他　本調査地点では、古代の遺構を確認することは出来なかった。遺物は、別表で示した「実測遺物外出土遺物」を見て頂ければわかるように、破片ではあるが８～10世紀の土師器・須恵器等が出土している。地点２では９世紀中葉から後半と考えられる竪穴住居址が検出され、出土遺物は８～10世紀に属する遺物が発見されている。地点３・４では、中世以前の水田跡・道路・側溝・柵列が確認されているとの担当者の報告があり、地点５では遺構の確認は出来なかったが、６～11世紀の遺物が多く出土している。出土遺物だけで判断するのは困難であるが、調査地点周辺は、奈良・平安期から中世にかけて集落の存在する地であったのだろうと考えられる。

引用・参考文献（第１～４章に共通）

赤星直忠1959『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館
阿部正道1971「塩田義政とその邸跡について」『神奈川県博物館協会会報』第26号　神奈川県博物館協会
奥田直栄1972「北条政村の常盤別業について」『神奈川県文化財調査報告書』第34集　神奈川県教育委員会
貫達人・川副武胤1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
平凡社1984『日本歴史地名大系14　神奈川県の地名』
斉木秀雄ほか1994「北条政村屋敷跡　―常盤字殿入下643番４外地点―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10　鎌倉市教育委員会
馬淵和雄1999『北条政村邸跡　―常盤字仲ノ坂962番２ほか地点―』北条政村邸跡発掘調査団
岩田直樹ほか2001「第３編　大仏坂地区の調査」『『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査』(財) かながわ考古学財団ほか

	番号	種　別	大きさ　せいけい　素地・胎土　その他特徴など
近世耕作土	図5 1	土師器皿 R種　小型	口径（9.3cm）　底径（6.0cm）　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母細片、白色針状物質、赤色粒子を含む
	2	土師器皿 R種　小型	口径（9.5cm）　底径（6.9cm）　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部回転糸切り　内底部ナデ確認できず 胎土は橙色で白色針状物質、赤色粒子を含む
	3	土師器皿 R種　大型	底径（7.1cm）　右回転ロクロ　底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母細片、赤色粒子を含む
	4	白磁 口はげ皿	口径（9.5cm）　ロクロ成形　口縁部面取りにより釉をぬぐう 素地は淡灰色で砂鉄を含む　釉薬は透明
	5	骨製品 用途不明	最大長（4.0cm）　幅1.3cm　厚さ0.6cm 破損部に径約0.5cmの穿孔あり
	6	伊万里 染付　小皿	口径（5.0cm）　底径（1.2cm）　器高1.7cm　ロクロ成形　削り出し高台 素地は淡黄灰色　外面下部から高台畳み付きにかけて露胎　文様不明
	7	瀬戸・美濃 広口小壷蓋	口径8.6cm　器高1.8cm　ロクロ成形　摘み部貼り付け 素地は黄白色
	8	伊万里 白磁碗	底径（4.3cm）　ロクロ成形　削り出し高台 素地は灰白色　外底部露胎
土坑1	9	土師器皿 R種　小型	口径（8.6cm）　底径（6.5cm）　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部回転糸切り　内底部ナデ確認できず 胎土は橙色で黒雲母細片、白色針状物質、砂粒を含む
中間層	10	土師器皿 R種　小型	口径（8.6cm）　底径（5.8cm）　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部回転糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母細片、白色針状物質、赤色粒子、砂粒を含む
下層遺構	11	須恵器 坏	底径（5.6cm）　ロクロ成形　底部回転糸切り 胎土は灰褐色
	12	灰釉陶器 坏 or 皿	口径（11.3cm）　ロクロ成形　灰釉ハケ塗り 胎土は灰色
	13	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片　ロクロ成形 素地は灰白色　釉薬は青緑色　内面口縁部下に二本の沈線をめぐらす

表1　出土遺物観察表

	耕作土	上層遺構面	中間層	下層遺構面
土師器皿R種　大型	14		1	4
土師器皿R種　小型	4		1	
土師器皿T種　極小		1		
常滑甕	5			
青白磁梅瓶			1	
土師器甕		2		51
土師器坏				32
土師器高坏				1
須恵器甕			1	4
須恵器坏		1		1
須恵器坏蓋				1
灰釉陶器				1
砥石				1
伊万里白磁碗			1	
近・現代陶器	3			

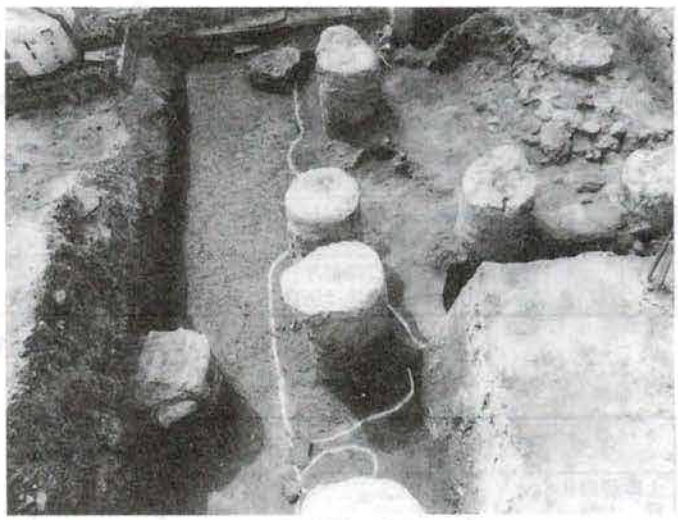
表2　出土遺物破片点数

図版1

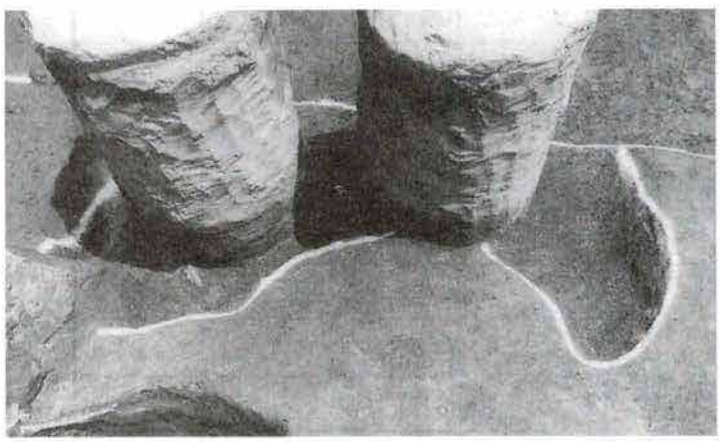
1．調査地点近景

2．西壁土層断面

4．泥岩地行面（南から）



3．上層遺構面（北から）



5．土坑1

5-4

5-6

5-5

5-7

5-9

5-10

5-12

5-13

6．出土遺物

名越ヶ谷遺跡（No.231）

大町六丁目1708番４地点

例　　言

1．本報文は、名越ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳№231）内、鎌倉市大町六丁目1708番４地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．発掘調査は、駐車場の造成に先立ち平成14年７月26日から８月20日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は27.29㎡。

3．調査体制は以下の通り。

調　査　員　汐見一夫　鍛治屋勝二　松原康子　小泉衣理

調査補助員　沖元道

調査協力者　中須洋二　町田義一　渡邊輝彦

4．整理作業は、遺構関係を主に汐見が、遺物関係を主に小泉衣理が行なった。原稿執筆は第１・２章と第３章の遺構を汐見が、第３章の遺物を小泉が、第４章は両名の討議を基に汐見が文責を負い全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構を汐見が、遺物を小泉が撮影した。

5．発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の各氏及び機関から御教示と御協力を賜った。

㈳鎌倉市シルバー人材センター　鎌倉考古学研究所　東国歴史考古学研究所

6．本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　環境と立地 ……261

第２章　調査の概要 ……264

第３章　遺構と遺物 ……266

第４章　調査成果 ……271

挿図目次

図１　名越ヶ谷遺跡の範囲と調査地点 ……261

図２　調査地点周辺図と国土座標 ……262

図３　国土座標上の位置と堆積土層 ……265

図４　中世包含層出土遺物 ……266

図５　１面の遺構と遺物 ……267

図６　２面の遺構と遺物 ……269

図７　３面の遺構と遺物 ……270

図８　４面の遺構と遺物 ……271

表　出土遺物計測表 ……272

写真図版目次

図版１　１面までの遺構 ……273

図版２　２面～４面までの遺構 ……274

図版３　調査区壁面堆積土層 ……275

図版４　出土遺物 ……276

第１章　環境と立地

名越ヶ谷遺跡（№231）は鎌倉市の南東部、大小の谷戸が複雑に入り組んだ衣張山（標高120m）の西山裾一帯で、逆川が流下する平地部分ほぼ全域に付されている。逆川が源を発する北側の釈迦堂口切通しを越えれば六浦道に至り、遺跡地の南端を限る大町大路から鎌倉七口の一つ名越切通しを越えれば三浦へと通じる。『吾妻鏡』には、建久三年（1192)「名越御館」に北条政子が赴いたとあるのをはじめとして、名越の様相を記した記事は多い。建永元年（1206）には北条義時の名越山辺りの山荘で将軍実朝の和歌会が催され、承元三年（1209)「重書并問注記以下焼失」の記事から、名越文庫を備えた問注所執事三善善信邸が焼失した事が推定される。承久元年（1219)「鎌倉中焼亡」の時に「名越山際」まで延焼し、寛喜三年（1231）の大火では「名越辺」が焼失し、「越後四郎時幸、町野加賀守康俊宿所」が被害を受けている。町野加賀守康俊は三善善信の子孫にあたる。同じく子孫の町野康持や頼朝に仕えた武田信光入道の屋敷も延応元年（1239）の記事から名越に在り、先の「名越御館」は北条時政・義時から名越氏を称した朝時・時章・公時と相伝されたことが記されている。さらに建長年間以降の火災の記事から「名越辺」や「名越山王堂」「名越高御倉」が罹災している。発掘調査に拠り礎石が発見された名越山

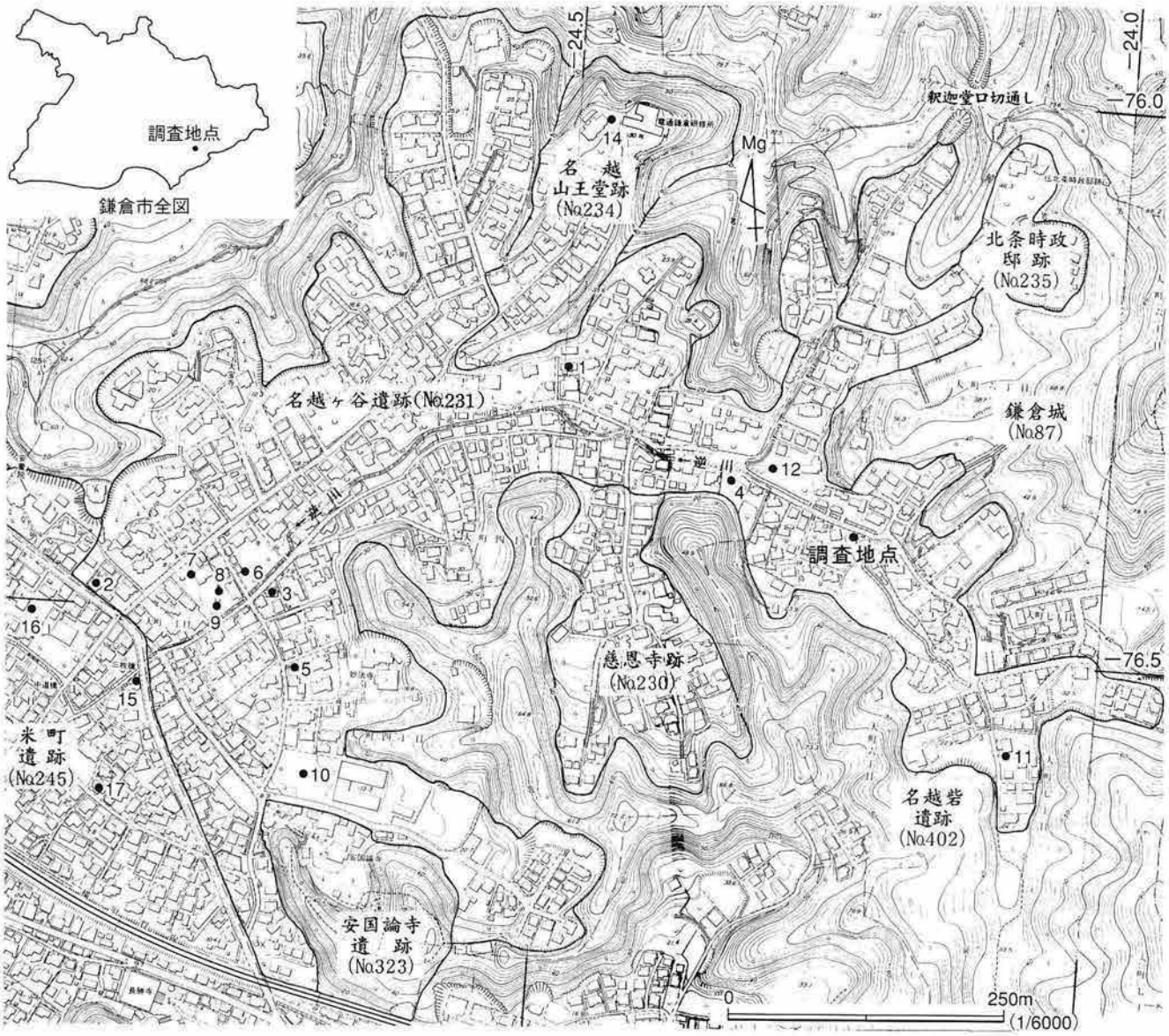


図１　名越ヶ谷遺跡の範囲と調査地点

王堂以外は、それぞれが何処に在ったかは明らかではない。名越の地は交通の要所であるばかりではなく、早くから開発され幕府の機能や要人に関わる重要な地域であった。

本遺跡内では2003年３月末日現在で、本地点を含め14地点が調査されている。大町大路に近い遺跡南縁に集中し、地点２・10を除けば調査面積は80㎡以下である。地点毎に調査し得た深度が異なり下層の様相が不明な点もあるが、発見された遺構群と出土した遺物から年代と様相を概観する。地点６では逆川旧流路と13世紀代に３回以上組み直された護岸施設、中世以前の落込みを発見している。この旧流路の延長は地点８・９でも確認され、地点７で発見された掘立柱建物はこの流路方向を意識して建てられている。この建物に係わるかわらけ溜りの年代は13世紀前半である。この４地点は、上層が近世以降に削平されているのか遺構面は２～３面と少ない。地点２では５時期以上の生活面と大町大路と軸方向を同じくする掘立柱建物・井戸・通路等が発見され、地点５でも５時期以上の土丹地業面と掘立柱建物、最下層で鎌倉初期の南北方向の落込みを発見し、両地点共に出土遺物の年代は13世紀初頭～15世紀代と幅広い。これらの成果から、付近は逆川両岸の平地を鎌倉初期には開発し利用していたことが窺える。

本地点付近では、調査面積約150㎡前後の地点４・14が調査されている。地点４は三善善信邸跡に比定され、５時期以上の生活面を確認している。調査の深度規制に因り下層までは調査されていないが、13世紀後半は庶民的居住が想定され、14世紀代以降は谷戸内を大規模に造成した一角で、時期に依り掘立柱建物やかわらけ溜りが発見されている。丘陵側に土塁を構えている事や調査地点の占地等から、寺院や幕府要人の敷地内と想定されている。地点14では現地表面ほぼ直下に数時期の土丹地業面と掘立柱建物・土坑・井戸が、釈迦堂口切通しに源を発する逆川旧流路が地点西端で発見されている。

本調査地点は地点４・14からさらに東側小支谷内を流れる小河川の左岸で、現況でも南北の山肌に露出した岩盤間は80m強しかない。宅地化されたときに流路が付け変えられ平地も削平されてはいるだろうが、現況は山裾で海抜20m、調査地は海抜16.40m前後、河川底は海抜13.60m程である。

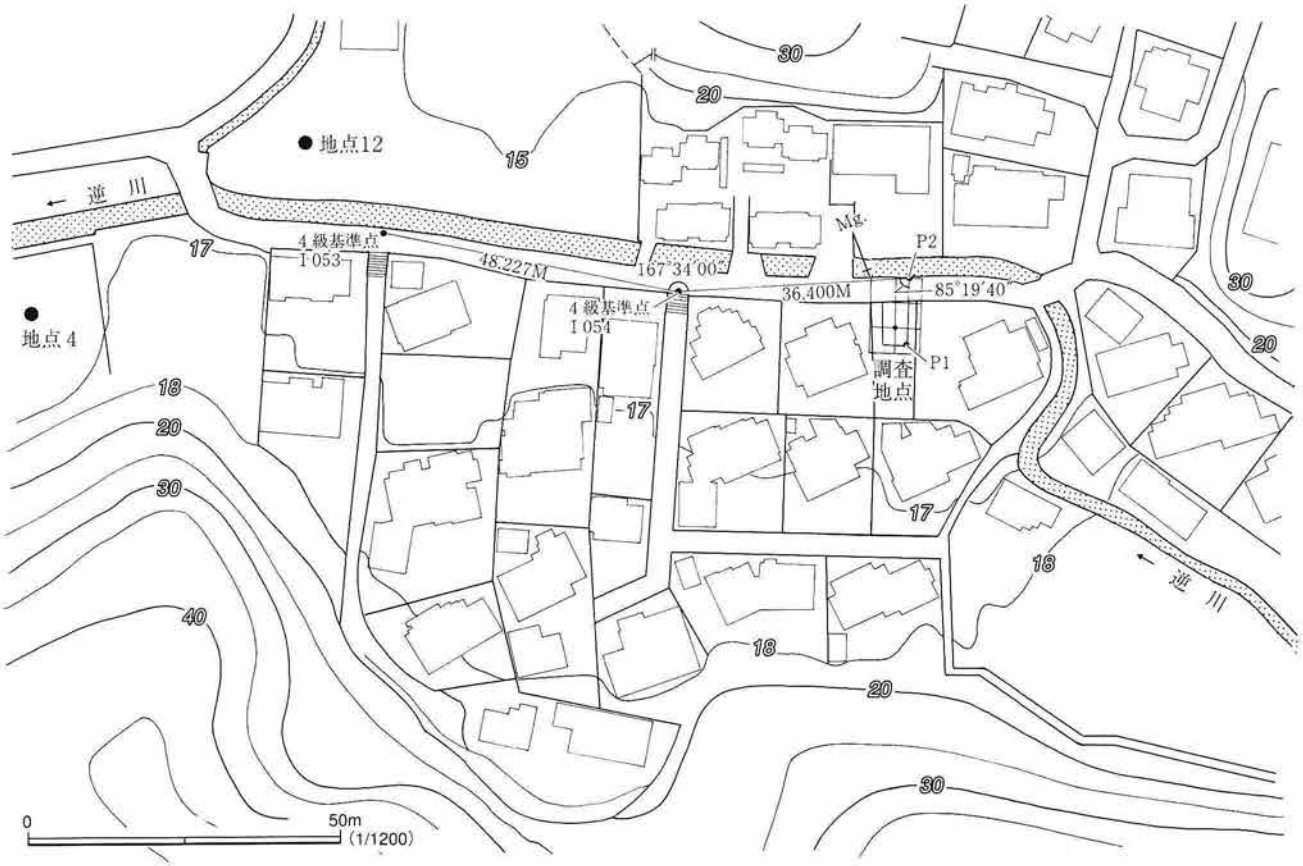


図２　調査地点周辺図と国土座標

引用・参考文献

高柳光寿『鎌倉市史　総説編』1959年　吉川弘文館

赤星直忠『鎌倉市史　考古編』1959年　吉川弘文館

高柳光寿・貫達人他『鎌倉市史　社寺編』1959年　吉川弘文館

貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』1980年　有燐堂

白井永二『鎌倉事典』1976年　東京堂出版

「神奈川県の地名」『日本歴史地名体系14』　平凡社

名越ヶ谷遺跡（No.231）

1．大町三丁目1367番４地点　1985年調査「名越ケ谷遺跡（大町三丁目1367番４地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書２　昭和60年度発掘調査報告』1986年３月　鎌倉市教育委員会
2．大町三丁目1217番１地点　1993年調査「名越ヶ谷遺跡（大町三丁目1217番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第１分冊）』1995年３月　鎌倉市教育委員会
3．大町四丁目1880番６地点　1993年調査「名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1880番６外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11　平成６年度発掘調査報告（第１分冊）』1995年３月　鎌倉市教育委員会
4．大町四丁目1736番２地点　1996年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1736番２外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成９年度発掘調査報告（第１分冊）』1998年３月　鎌倉市教育委員会
5．大町四丁目1888番地点　1998年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1888番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16　平成11年度発掘調査報告（第２分冊）』2000年３月　鎌倉市教育委員会
6．大町三丁目1826番９地点　2000年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目1826番９地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　平成13年度発掘調査報告（第２分冊）』2002年３月　鎌倉市教育委員会
7．大町三丁目2356番３地点　2000年調査
8．大町三丁目2356番11地点　2001年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目2356番11地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19　平成14年度発掘調査報告』2003年３月　鎌倉市教育委員会
9．大町三丁目2356番10地点　2001年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目2356番10地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19　平成14年度発掘調査報告』2003年３月　鎌倉市教育委員会
10．大町四丁目1901他16筆地点　2001年調査「名越ヶ谷遺跡（No.231）」『第12回鎌倉市遺跡調査・研究発表会　発表要旨』　2002年８月　鎌倉考古学研究所
11．大町六丁目1708番４地点　2001年調査
12．大町六丁目1494番１地点　2002年調査
13．本報文調査地点
14．大町四丁目2395番２の一部地点　2003年調査
15．大町三丁目1356番外地点　2003年調査

名越山王堂跡（No.234）

14．大町三丁目1340番地点　1986年調査『名越・山王堂跡発掘調査報告書　電通鎌倉研修所改築に伴う中世寺院跡の発掘調査報告』1990年３月　山王堂跡発掘調査団

米町遺跡（No.245）

15．大町二丁目2411番２地点　1988年調査「米町遺跡（大町二丁目2411番２地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５　昭和63年度発掘調査報告』1988年３月　鎌倉市教育委員会
16．大町二丁目2338番１地点　1997年調査『米町遺跡発掘調査報告書　鎌倉市大町二丁目2338番１』1999年９月　米町遺跡発掘調査団　／　宮田事務所
17．大町二丁目2404番地点　1999年調査「米町遺跡（No.245）大町二丁目2404番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16　平成11年度発掘調査報告（第２分冊）』2000年３月　鎌倉市教育委員会

註

・　名越ヶ谷遺跡（No.231）と名越山王堂跡（No.234）は全調査地点を調査年順に地点No.を、米町遺跡（No.245）は全12調査地点の内図１の範囲に含まれるものに地点No.を付した。
・　調査地点及び刊行報告書は2003年３月末日現在。渡邊美佐子協力の基、筆者調べに拠る。

第２章　調査の概要

・調査経緯から結果に至る概要

本調査は個人専用駐車場造成にあたり、道路面まで切下げる範囲を対象に、確認調査と諸協議を経て実施された。調査深度は現況調査地から車道面に比高差２ｍ強のスロープ状に設定されたが、協議に拠り調査区ほぼ中間から奥の調査深度を現地表から約１ｍまで、手前を現況車道面までとした。確認調査の成果から現地表下40cmまでの表土を重機で、以下をそれぞれの規定深度まで人力に依り掘り下げた。酷暑の中、調査に伴う残土を人力で敷地内に盛上げながらの作業であったが良好な地業面を４時期発見し、全ての記録保存終了後に関係各方面に連絡の上、出土遺物と諸器材を撤収し調査終了とした。

・調査の方法

調査に際して、敷地と調査範囲に合せて４・のグリッド方眼を設定した。国土座標値は調査グリッド２ラインから１・東の延長点Ｐ２と、４級基準点Ｉ053（Ｘ－76356.118　Ｙ－24306.921）・Ｉ054（Ｘ－76377.789　Ｙ－24263.842）を計測し、グリッドＣ－２との位置関係及び真北方向を図２・３に示した。但し、計測に際しては光波測定器が使用できず、調査員がトランシットとスティールメジャーで計測したため、明示すべきグリッド交点の国土座標値は得られなかった。調査軸は磁北に対してＮ—25°40′20″—Ｅである。

・堆積土層

図３は調査区壁面の堆積土層図。東面の土層図には確認調査坑の土層図も併せて図示した。確認調査時には海抜レベルに拠らず測図しているが、現地表面高と確認調査坑の最下部及び土層の連続性から判断して合成している。各土層には、確認調査坑の堆積土層にはａ～ｉ、本調査の堆積土層には１～23、同一土層には同番号を付し本報文に共通して使用する。

確認調査ではａ・ｄ・ｆ層上面を遺構面、ｈ層が中世地山とされていたが、本調査では次章で述べる様にｄ層までは近現代の造成土であり、ｅ層＝５層上面が１面、ｆ層＝６層上面が２面、ｇ層上面は測図されている様な土層の歪みはなく11層上面で調査３面。各遺構面の上面は平坦ではあるが、間層の堆積土と共に北から南へ緩やかに傾斜する。ｈ・ｉ層（15～18層）中には確認調査坑壁面からも中世遺物が出土し、16層上面は調査では遺構面として捉えている。15～18層は上層各同層に比べ北に向って傾斜が強く、砂質分を含む類似する土層が互層状に堆積し、出土した遺物点数は少ないものの摩耗した破片が観られたことから、河川の氾濫等に因る自然土層の再堆積層と思われる。各土層には共通して粒子乃至拳大の土丹が含まれ、狭い小谷戸の中で山肌を崩しながら土砂を移動し、湿地状の斜面地を克服する様に平坦な遺構面を南北へと拡張しながら構成している。東西方向では調査区幅が狭く顕著には捉えがたいが、若干東から西への傾斜が観られる。又、調査区北側下層の土層断面には地震の痕跡であろうか、下層から上層へ縦方向の亀裂状に褐鉄の浸み込んだ異質な土層が観察されている。

今回の調査地点は付近で発掘調査が行われていないことや、確認調査時に出土遺物が少ない等の問題はあったが、海抜高の記入されていない土層図が基で表土掘削深度の判断に苦しんだ結果、近世以降の造成土を人力で掘り上げる事から調査を開始せざるを得なかった。また、年に数十ヶ所行われる確認調査の成果も報告されず、確認調査の際に立会い調査員が１人ではレベル原点からの海抜高測量もままならない。今後の課題であろうか。

土層注記

a. 近現代盛土。
b. 拳大土丹層。
c. 暗茶褐色粘質土。
d. 大小土丹層。
e. 土丹地業面。
f. 暗褐色粘質土　土丹粒・炭化物粒含む。
g. 暗褐色粘質土　上面に鉄層。
h. 黒褐色粘土。
i. 暗青灰色粘土。

1. 近現代盛土。
2. 拳大土丹層。
3. 大型土丹層。
4. 暗黄褐色粘質土　土丹粒を含む。
5. 土丹粒地業面　上面が1面。
6. 暗褐色粘質土　土丹粒・炭化物粒・褐鉄を含む。
7. 黒褐色粘質土　土丹粒多量に含み、褐鉄を含浸する。
8. 暗褐色粘質土　土丹粒僅かに含む。
9. 暗褐色粘質土。
10. 暗褐色粘質土　多量の炭化物含み、褐鉄の含浸する。
11. 褐鉄層　上面が2面。
12. 暗褐色粘質土　土丹粒・褐鉄部分的に含む。
13. 黒褐色粘質土　土丹粒・褐鉄粒・炭化物粒を僅かに含む。
14. 黒褐色粘土　粘性強い。
15. 暗黒灰色粘土　調査区北寄りでは砂質粘土（15'）。
16. 暗青灰色粘土　粘性弱いが堅くしまる。上面を3面。
17. 暗黒褐色粘土　やや砂質で褐鉄を含む。
18. 暗青灰色砂質粘土　砂粒はやや粗い。
19. Pit. 1。
20. Pit. 7。
21. Pit. 8。
22. Pit. 9。
23. Pit. 38。

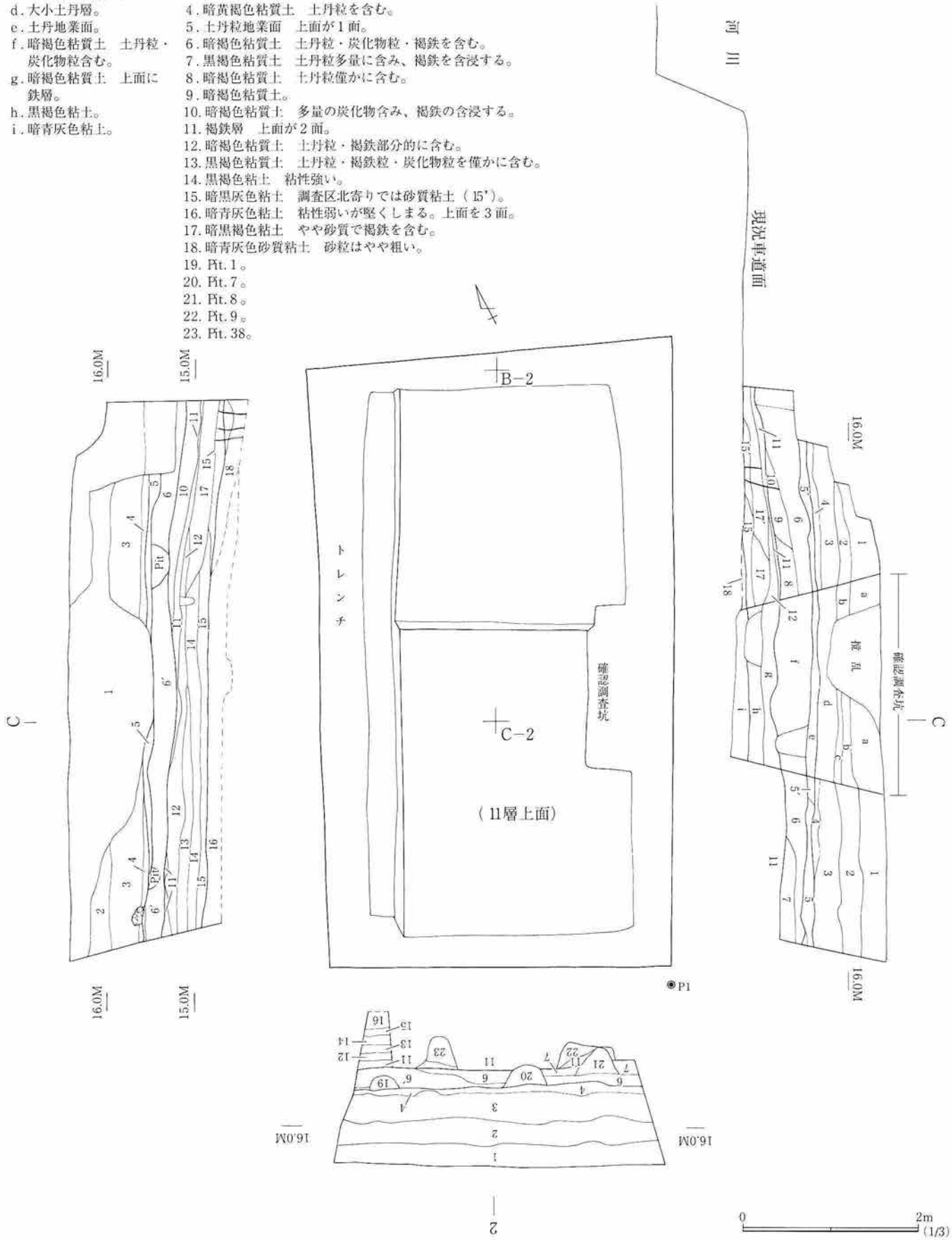


図3　国土座標上の位置と堆積土層

第３章　遺構と遺物

確認調査の成果を基に、現地表下40cmの２層上面までを重機に依り掘り下げこの面上を精査したが、遺構は皆無で近代以降の遺物が出土した。更に現地表下60cmの３層上面までを引き続き人力で掘り下げ精査を試みたが、このレベルでも遺構は何ら発見されず近世以降の遺物が混在した。調査ではこの面を１面としたが、調査区壁や掘り下げ土の観察から１～３層は近現代造成に伴う版築土と判断し、本報文から平面精査の様相や出土遺物については割愛する。結局、現地表下80cmの５層上面が中世１面であり、調査した遺構面は整理作業時に改めて１～４面とした。遺構番号は遺物が出土している等報文中で触れたもののみを調査時の遺構名と番号をそのままに使用し、土層は図３の堆積土層図中の№.を記した。尚、挿図中ではピットはＰの略号を用い、レベルは海抜高度を顕す。

１面

現地表下80cmの４層上面、海抜15.7m前後の暗褐色粘質土及びその上面に部分的に土丹地業された上面を１面とした。土丹地業は南側１／３が破砕土丹で強く版築され（５層）、中央付近は拳大の土丹が混じりやや粗く微かに高まり、それより北はしまりは良いが粘質土に土丹粒が混じる程度（５’層）で、現況河川に向って微かに傾斜する。遺構はピット４口と極く浅い土坑を一基発見した。Ｃ－２周辺からは多くの遺物が出土している。出土遺物は、概ね４層中の遺物を中世包含層、土丹地業面（５層上面）検出時に出土したものを１面上、地業層中にめり込む様に発見されたものを１面直上、土丹層（５層・５’層）のみを剥がした時に出土したものを１面構成土中として採り上げた。

出土遺物

１・２は中世遺物包含層（４層）出土遺物。１は小型の糸切り底かわらけ。器壁が厚く、底径口径比の差が小さい。胎土は橙色を呈する弱粉質土。２は龍泉窯系青磁無文碗。内面に蓮弁文が施される。素地は混入物を若干含む灰白色、釉調は不透明な灰緑色を呈する。

３・４は１面上より出土した小型糸切り底のかわらけ。３はやや内弯し、胎土が肌色を呈する弱粉質土。４は器壁が開きながら立ち上がり、胎土は橙色を呈する弱砂質土。

５～12は１面遺構精査時に面直上より出土したかわらけ。出土状況は６・10が表向き、その他は裏向き。５は小型の手捏ね底。平底状で、器壁は開きながら立ち上がる。胎土は淡橙色を呈する夾雑物を多く含む弱砂質土。６～９は小型の糸切り底で、体部外面中位に稜があり屈曲するものや、器壁が開きながら立ち上がるものが混じる。10～12は大型の糸切り底で、器壁が直立気味に立ち上がるものや、口唇がやや内弯するものが混じる。概ね肌色～淡橙色を呈する弱粉質土。８は口唇部に煤が付着。なかには表面が剥離してナデが不明瞭なものがある。

13は１面遺構ピット３より出土した大型の手捏ね底かわらけ。器高の高い平底状で、体部外面中位に稜が残る。胎土は肌色を呈した弱粉質土。

14～23は１面構成土より出土したかわらけ。14は大型の手捏ね底で13と同様の器形と胎土。15・16は小型の手捏ね底。平底状で、器壁が開きながら立ち上がるものや口唇が内弯するものが混じる。胎土は肌色を呈する弱砂質土。16は内面全体的に煤が付着。17～23は小型の糸切り底。17が内折れの他は、器壁が厚くて口径底径比の小さいものや、器壁が直立気味に立ち上がるものが混じる。胎土は概ね肌色～淡橙色を呈する弱粉質土。20は口唇部を中心に内外面に煤が付着。

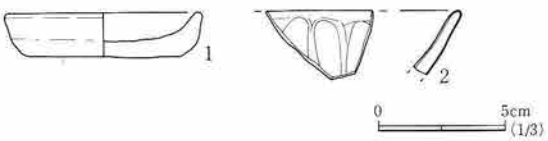


図４　中世包含層出土遺物

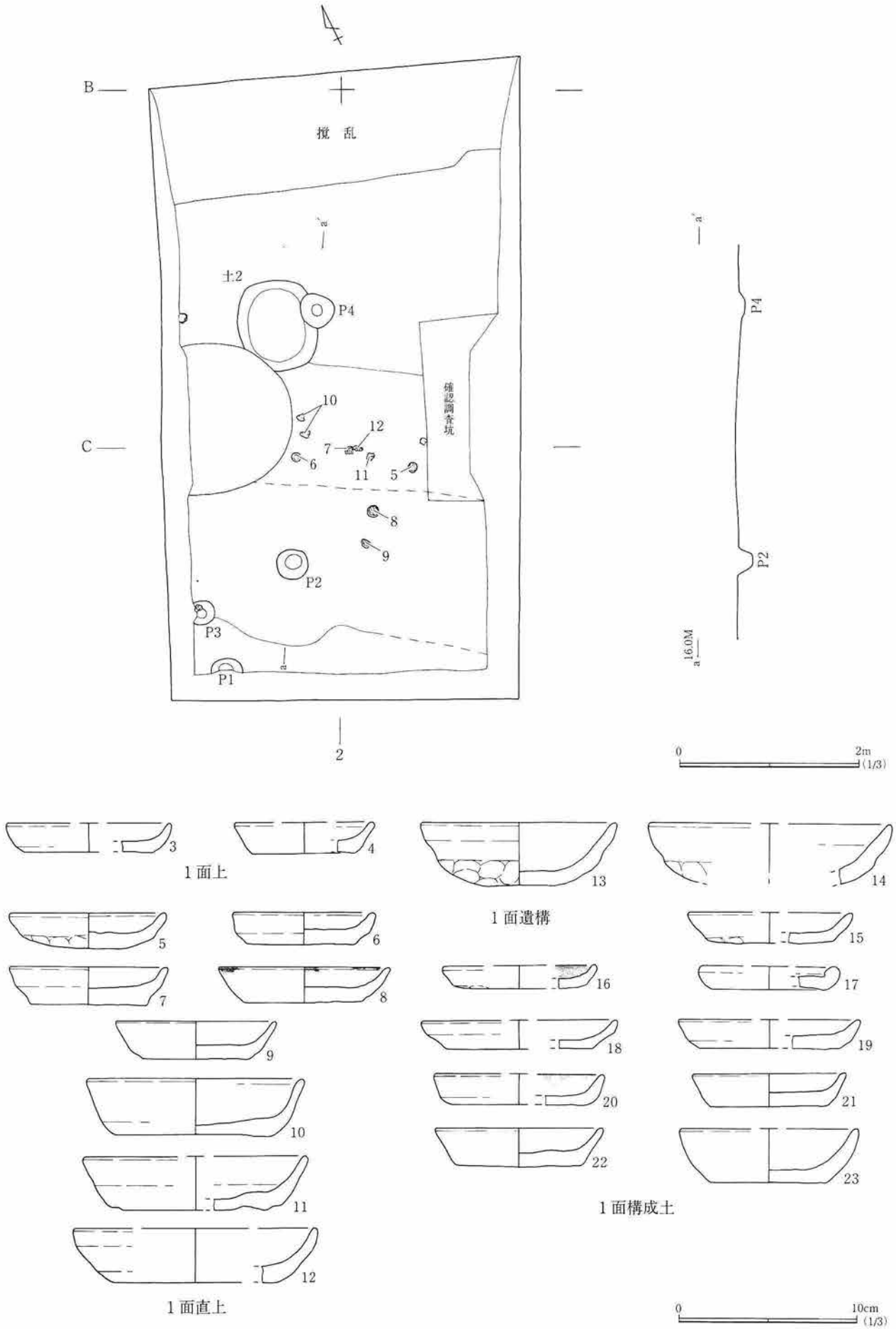

B
C
撹乱
土2
P1
P2
P3
P4
確認調査坑
10
12
7
6
11
5
8
9
a
a'
16.0M
2
0
2m
(1/3)
1面上
1面遺構
1面構成土
1面直上
0
10cm
(1/3)

図5　1面の遺構と遺物

2面

1面の土丹層除去後、海抜15.55m前後の暗褐色粘土面上（6層）を2面とした。断面図a・bの中間辺り及びピット17より北側は、遺構面のしまりが弱く北に向って若干傾斜する。遺構はピット11口を発見した。1面の土丹構築の際に地均しでもして遺構面を削平したのか、妙に浅いピットが多い。覆土はピット11～16がしまりの無い暗褐色粘質土、他は炭化物を多く含む暗褐色粘（質）土。ピット17の底面には柱痕らしき15・内外の窪みがあり、ピット10には礎板と柱が遺存している。礎板は2枚敷かれ、寸法は8寸×3寸5分で厚さ1寸強と8寸強×3寸5分寸で厚さ1寸強。柱は4寸5分寸×4寸強で面取りされ、長さ約14寸が遺存し、1面の土丹層直下で折られたと考えられようか。礎板上の柱の根元からかわらけ（図5－40）が出土している。1面の土丹地業の方向とピット10内の柱の向きを参考に、断面a・bを図示しているが、ピット間は等間隔とは言い難い。遺構面の様相から断面図aが敷地を限る柵列、ピット17・10と調査区外の南・東に延びる建物を想定するのは無理があろうか。出土遺物は、暗褐色粘土面（6層）検出時に出土したものを2面上、遺構面にめり込む様に出土したものを2面直上、下層への掘下げの際（6～10層）に出土したものを2面構成土として採り上げている。

出土遺物

24～33は2面上より出土したかわらけ。24～27は小型の手捏ね底。平底状で、器壁が開きながら立ち上がるものや、体部外面中位に弱い稜を持つものがある。25の胎土は淡橙色を呈する粉質土だが、他は肌色を呈する弱砂質土～弱粉質土。24は内外面に煤付着。28は大型の手捏ね底。平底状で、体部外面中位に弱い稜をもつ。口唇部の調整がやや尖り気味である。胎土は橙色を呈する弱粉質土。29～31は小型、33は大型の糸切り底。体部外面中位に稜をもち、やや内弯気味に立ちあがるものや、直立気味に立ち上がるものが混じる。31が橙色を呈する砂質土の他は、肌色を呈する弱粉質土。いずれも内底面ナデ不明瞭。

34～37は2面遺構精査時に面直上より出土したかわらけ。出土状況は、34・36は表、35・37は裏向き。34・35は大型の手捏ね底。平底状で体部外面中位に稜を持つ。34は口唇部が面取され、外底部にはスノコ痕が残る。胎土はいずれも橙色を呈する弱粉質土。36は小型、37は大型の糸切り底。36は口径底径比の差が小さく、やや内弯気味に立ち上がる。胎土は淡橙色を呈する弱粉質土。37は器壁が厚く、内底面が広く直立気味に立ち上がる。胎土は肌色を呈する弱粉質土。

38～44は2面遺構内より出土したかわらけ。38はピット16より出土した小型の手捏ね底。平底状で体部外面中位に弱い稜を持つ。胎土は淡橙色を呈する焼成良好な弱砂質土。39はピット11より出土した小型の手捏ね底。平底状で開きながら立ち上がり、口唇部がやや内弯する。胎土は肌色を呈する弱砂質土。40～43はピット10より出土したかわらけ。40・41は小型の糸切り底。40は器壁が薄く、口径底径比の小さい側面観箱型。胎土は肌色を呈する弱粉質土。41は器高が高く、器壁が厚くて丸味を帯びながら内弯する。胎土は淡橙色を呈する弱粉質土。42・43は大型の糸切り底。体部外面中位に稜をもち、器壁はやや内弯する。胎土は淡橙色を呈する弱粉質土。42は内底面に煤付着。44はピット5より出土した大型の糸切り底かわらけ。器形は42・43と同様。胎土は肌色を呈する弱砂質土。

45～48は2面構成土より出土した遺物。45・46は小型、47は大型の手捏ね底かわらけ。45・46は平底気味で器壁が薄く、体部外面中位に強い稜を持つ。45の口唇部は面取され、沈線を作るように段となす。46の外底部にはスノコ痕が強く残る。47は器高の高い丸底状で、口唇部が面取りされている。いずれも淡茶色～肌色を呈する弱粉質土。48は弥生時代後期もしくは古墳前期の土師器甕。全体的に刷毛目調整を施し、口唇部のみ横ナデ調整。頸部はゆるやかな「く」の字を呈している。

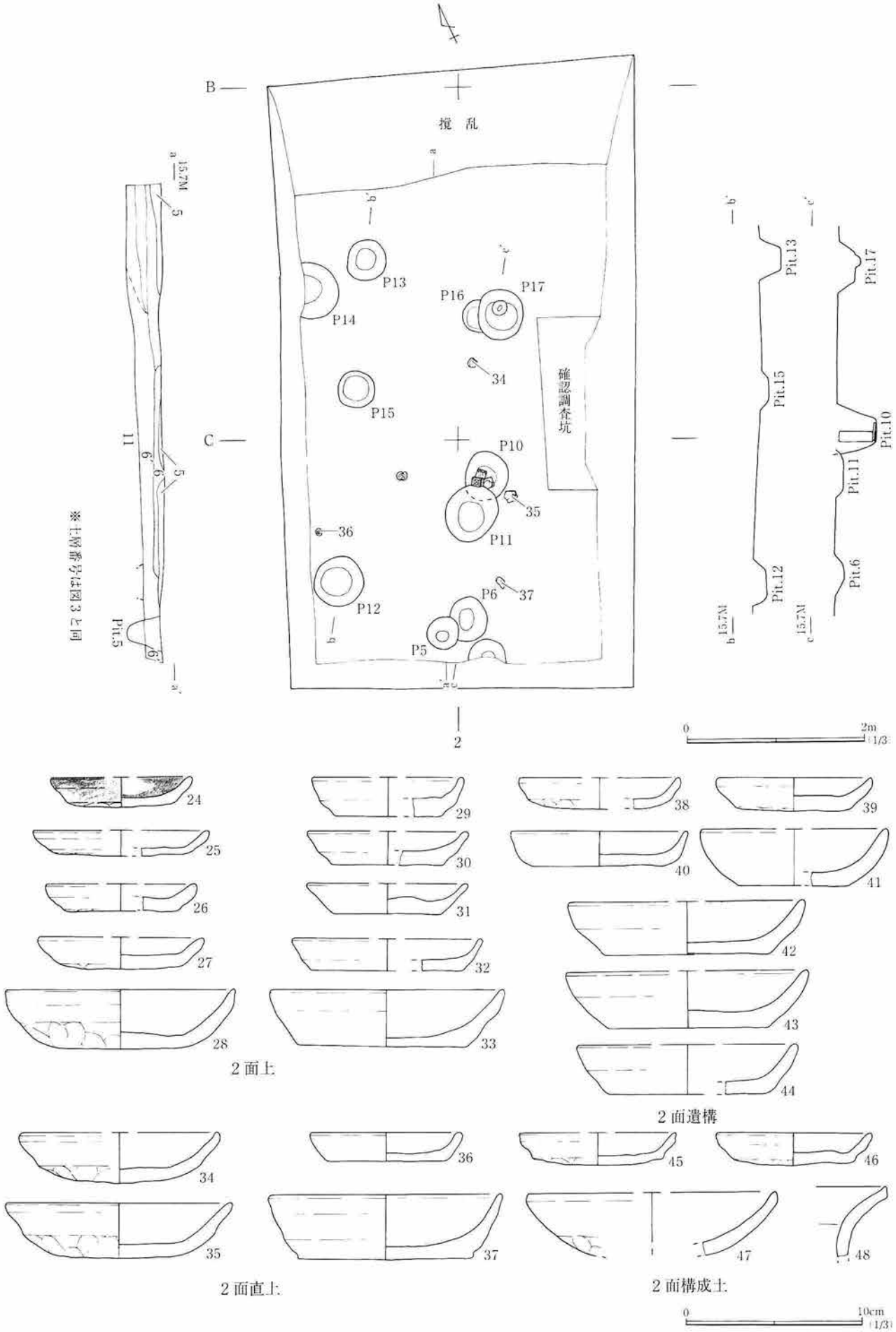

撹乱
確認調査坑
P5
P6
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
Pit.5
Pit.6
Pit.10
Pit.11
Pit.12
Pit.13
Pit.15
Pit.17
15.7M
※土層番号は図3と同
2面上
2面遺構
2面直上
2面構成土

図6　2面の遺構と遺物

3面

2面の暗褐色粘土の下層、海抜15.2m前後の全体に褐鉄分を含浸する黒褐色粘土（11層）上面を3面とした。遺構面が明瞭な範囲は上層1・2面より更に狭まり、上面が硬化しているのはC－2周辺より南であり、その範囲は上層1・2面とやや異なって調査区とほぼ同軸になる。C－2周辺より北側では遺構密度は希薄で、北に向っての傾斜が上層より若干きつくなる。遺構はピット50口以上を発見した。柱や礎板が遺存しているものはない。各ピットの覆土の観察からは、土丹粒を含みしまりの無い暗褐色土、褐鉄分を含む黒褐色土に大別される。重複関係では概ね前者が新しく後者が古いことから、同一面が少なくとも2時期に利用されているのかもしれない。硬化面の方向を基に断面を3ヶ所図示しているが、断面図a・bが硬化面範囲の外側に沿うことから柵列を想定する他は、建物址は推定し得ていない。出土遺物は、褐鉄面（11層）を検出する際に出土したものを3面上、遺構面やピット底面を掘り過ぎた時に出土したものを3面構成土として採り上げた。

出土遺物

49・50は3面上より出土した小型手捏ね底かわらけ。49は器高の高い丸底状で、体部外面中位に強い稜を持つ。胎土は橙色を呈する弱粉質土。50は平底状で、底部中央が少し上げ底になる。器壁は開きながら立ち上がる。胎土は肌色を呈する弱砂質土。

51・52は3面遺構内より出土した小型の糸切り底かわらけ。いずれも器壁は開きながら立ち上がり、丸味のある口唇を持つ。内底面のナデは不明瞭。胎土は肌色から橙色を呈した弱砂質土。

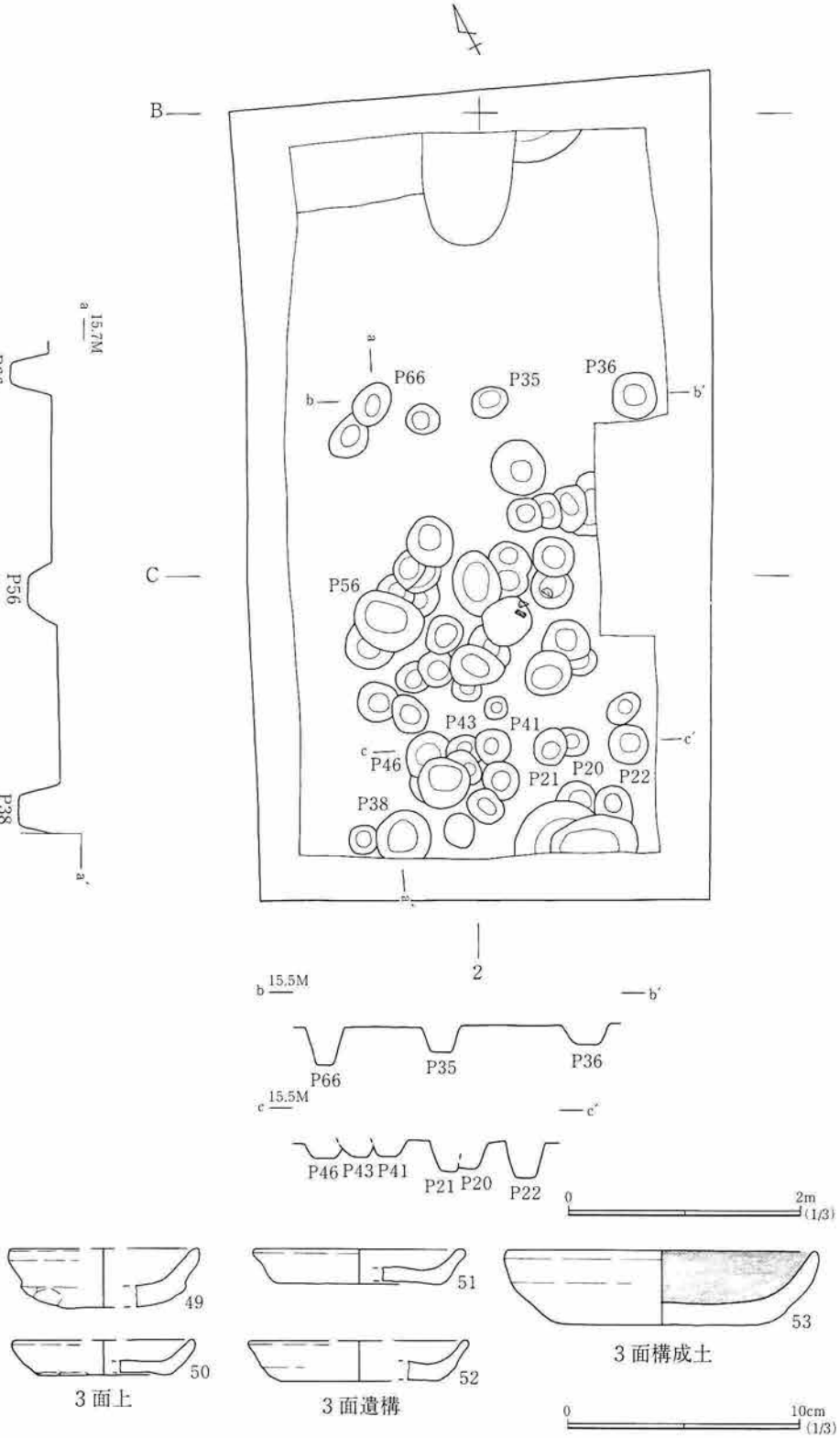


図7　3面の遺構と遺物

53は３面構成土より出土した大型糸切り底かわらけ。器壁は厚く、丸味を帯びて内弯する。胎土は肌色を呈する弱粉質土。内外面共に全体的に煤付着。

４面

３面終了時点で調査区南半が調査前の協議で合意したレベルに達した為、堆積土層は西壁沿いのトレンチで観察することとし、平面調査は北半を道路面まで下げて下層の遺構面の確認と遺物を採集することとした。３面を構成する黒褐色粘土（11層）を遺物採り上げの為に掘り上げ、その後調査区前面車道とほぼ同レベルの海抜14.7・まで掘り下げた。顕著な遺構面とは言い難いが概ね16層上面を４面とした。図８に遺構の如く表した４ヶ所は、上層の掘り残しではないことから、土層の窪みの可能性が高い。調査区北寄りには南北に走る地割れ状の筋を数条発見し、顕著なものを平面と土層断面に図示した。地割れ層１・２共に中世地山と思われる16層を突抜けて吹き上がっているが、その上面及び層中に遺物は発見できなかった。より下層の状況は不明と言わざるを得ないが、中世以前の遺物は殆ど出土していない。

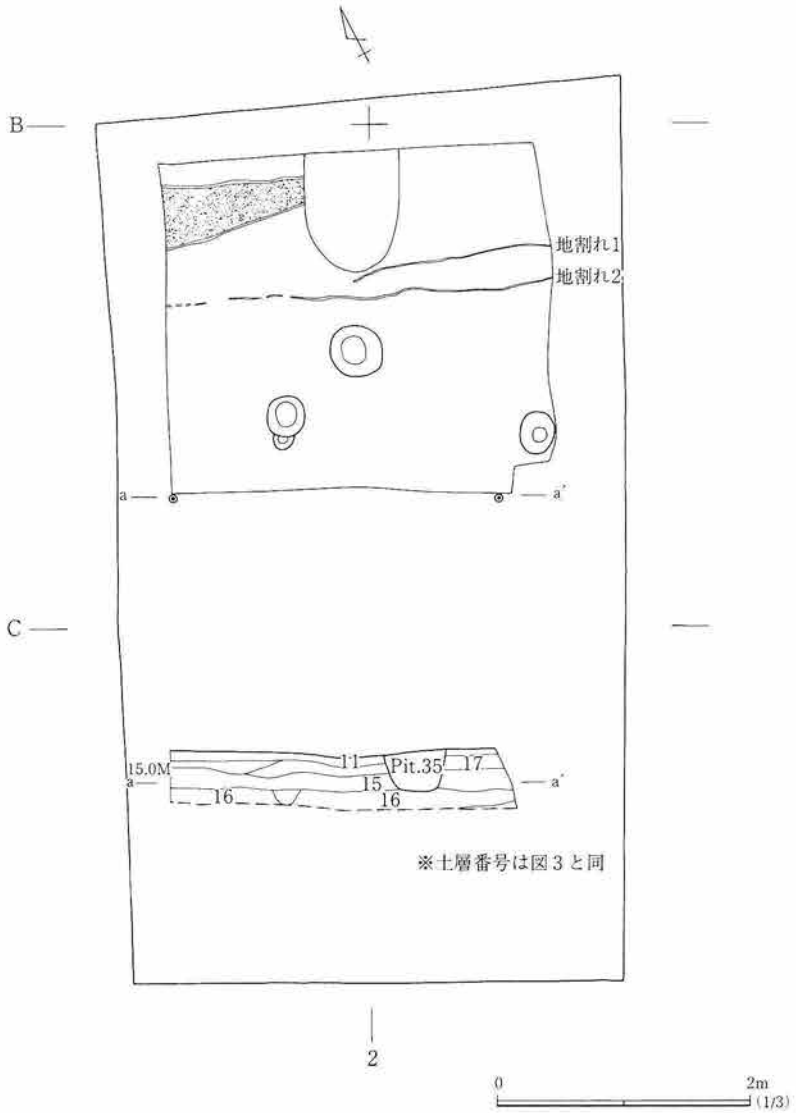


図８　４面の遺構と遺物

第４章　調査成果

本調査では、時期不明ながら地割れの痕跡と中世の生活面を３時期発見した。狭小な調査区故断片的ではあるが、付近の調査例も併せ観て調査地付近の変遷と年代観に触れまとめとしたい。

調査深度の規制に因り無遺物自然堆積層は確認されなかったが、地割れの痕跡から中世以前に付近では地面が激しく動き、土砂崩れであろうか、生活の痕跡が観られない粘（質）土が中世地山状に再堆積する。この頃の河川が在るとすれば現況河川より南とは考え難い。その後、地点４や12の様に山肌を崩しながら空間を確保し広範囲な地業を行う程の大規模なものではないが、付近は名越ヶ谷遺跡内他の調査地点と同様に13世紀代には河川に向っての傾斜地を克服しながら居住地として開発されていく。遺構から観た調査地の状況は、地業の様相から北側に河川を控えた敷地の北側隅と考えられる。出土した中世

遺物からも調査地の性格を物語る資料には乏しく、青磁3点・常滑4点・木製品4点・滑石製品1点の他は、全体の96%がかわらけで供伴遺物も殆ど無い。かわらけの糸切り底と手捏ね底の割合は、若干手捏ねが多いもののほぼ半数である。各遺構面に依る年代差は殆どみられず、概ね手捏ね底は平底状で体部外面中位の稜も弱く器壁は開きながら立ち上がる。糸切り底の大型は器壁が直立気味に立ち上がり、小型は口径底径比の差が小さいものや、大型同様に器壁が直立気味に立ち上がるタイプである。本調査で出土した遺物から観た年代観は、概ね13世紀中葉～14世紀初頭と考えられる。周辺の調査地点で出土している薄手丸深のかわらけが本遺跡地でみられないのは、宅地造成に伴い中世遺構面が削平されて失われていると思われる。その際に道路も切り下げられ河川も現況流路に付け替えられたのであろう。本調査の成果から地点12で発見された中世河川に合流する流路は、現況よりも南ではない以上のことは推定し難い。中世期には支谷の水が低地に集って流下するという自然発生的な流路なのかもしれない。

出土遺物計測表

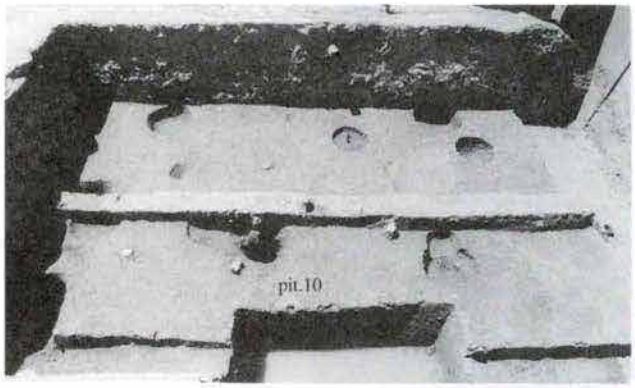
図版	遺物No.	遺構名	種別	計測値 単位：cm 《 》＝復元値		
				口径	底径	器高
図4	1	中世包含層	土器 かわらけ・糸	7.6	6.0	1.7
	2	中世包含層	舶載 青磁・碗	—	—	—
図5	3	1面上	土器 かわらけ・糸	(9.0)	(7.2)	1.6
	4	1面上	土器 かわらけ・糸	(7.6)	(5.8)	1.7
	5	1面直上	土器 かわらけ・手	8.5	7.3	2.0
	6	1面直上	土器 かわらけ・糸	7.8	6.0	1.8
	7	1面直上	土器 かわらけ・糸	(8.7)	6.5	2.1
	8	1面直上	土器 かわらけ・糸	9.5	6.6	2.0
	9	1面直上	土器 かわらけ・糸	(8.9)	5.9	2.1
	10	1面直上	土器 かわらけ・糸	11.8	8.8	3.1
	11	1面直上	土器 かわらけ・糸	(12.2)	(8.2)	3.0
	12	1面直上	土器 かわらけ・糸	(13.4)	(9.2)	3.0
	13	1面遺構	土器 かわらけ・手	(10.7)	(9.0)	3.5
	14	1面構成土	土器 かわらけ・手	(13.4)	(11.8)	—
	15	1面構成土	土器 かわらけ・手	(9.1)	(7.2)	1.7
	16	1面構成土	土器 かわらけ・手	(8.4)	(7.4)	1.3
	17	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(7.5)	(6.4)	1.3
	18	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(10.8)	(8.2)	1.6
	19	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(10.0)	(7.8)	1.6
	20	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(9.3)	(7.6)	1.7
	21	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(8.5)	6.5	1.3
	22	1面構成土	土器 かわらけ・糸	9.3	7.0	2.15
	23	1面構成土	土器 かわらけ・糸	(9.8)	(6.4)	3.0
図6	24	2面上	土器 かわらけ・手	(7.8)	(6.0)	1.7
	25	2面上	土器 かわらけ・手	(9.8)	(7.5)	1.45
	26	2面上	土器 かわらけ・手	(8.4)	(6.6)	1.5
図6	27	2面上	土器 かわらけ・手	(9.2)	7.0	1.8
	28	2面上	土器 かわらけ・手	12.8	11.6	3.4
	29	2面上	土器 かわらけ・糸	(8.4)	(6.0)	2.2
	30	2面上	土器 かわらけ・糸	(9.0)	(6.4)	1.9
	31	2面上	土器 かわらけ・糸	(9.0)	6.0	1.7
	32	2面上	土器 かわらけ・糸	(10.6)	(8.6)	1.8
	33	2面上	土器 かわらけ・糸	13.2	9.0	3.2
	34	2面直上	土器 かわらけ・手	(11.0)	(9.2)	2.9
	35	2面直上	土器 かわらけ・手	12.6	10.8	3.1
	36	2面直上	土器 かわらけ・糸	8.4	6.6	1.6
	37	2面直上	土器 かわらけ・糸	13.0	9.8	3.7
	38	2面遺構	土器 かわらけ・手	(9.0)	(8.2)	1.75
	39	2面遺構	土器 かわらけ・手	8.5	6.5	1.9
	40	2面遺構	土器 かわらけ・糸	9.9	7.3	2.0
	41	2面遺構	土器 かわらけ・糸	(10.4)	(6.2)	2.7
	42	2面遺構	土器 かわらけ・糸	(13.2)	(9.2)	3.0
	43	2面遺構	土器 かわらけ・糸	(13.6)	(9.0)	3.2
	44	2面遺構	土器 かわらけ・糸	(12.2)	(8.8)	2.8
	45	2面構成土	土器 かわらけ・手	(8.8)	(7.4)	1.8
	46	2面構成土	土器 かわらけ・手	8.6	6.8	1.8
	47	2面構成土	土器 かわらけ・手	(14.0)	—	—
	48	2面構成土	土器 土師器・甕	—	—	—
図7	49	3面上	土器 かわらけ・糸	(8.0)	(7.0)	2.5
	50	3面上	土器 かわらけ・手	(7.8)	(5.6)	1.5
	51	3面遺構	土器 かわらけ・手	9.0	7.0	1.5
	52	3面遺構	土器 かわらけ・糸	(9.4)	(6.8)	1.7
	53	3面構成土	土器 かわらけ・糸	13.2	9.4	3.2

▲　0層上面（南から）

▲　1面全景

▲　1面土丹地業・かわらけ出土状況（東から）

図版2



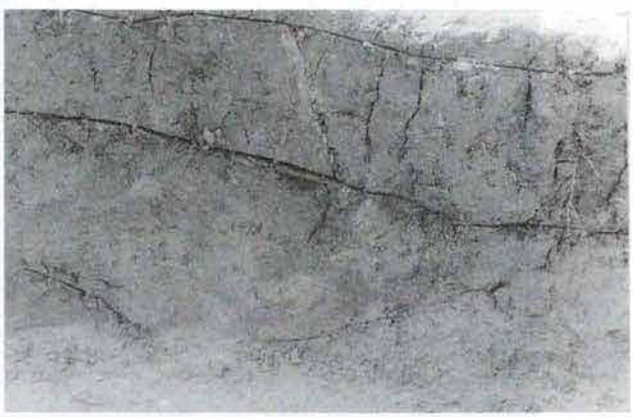
▲　2面全景（東から）

▲　2面 Pit.10（東から）

▲　3面全景（東から）

▲　4面全景（西から）

▲　地割れ（東壁・部分）



▲　地割れ（西壁・部分）

▲　調査区東壁堆積土層

▲　調査区南壁堆積土層

▲　調査区西壁堆積土層

図版4

5-5

5-6

5-7

5-8

5-9

5-10

5-11

5-13

6-34

6-35

6-36

6-37

6-39

6-40

6-43

7-51

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくし
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成15年度調査報告
巻次	20　（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	降矢順子／福田誠／菊川泉／原廣志／伊丹まどか／馬淵和雄／汐見一夫
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
おおくらばくふしゅうへんいせき 大倉幕府周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 607番１	14204	49	35° 19′ 13″	139° 33′ 43″	20011108 ～ 20011222	43.66	自己用店舗 併用住宅 （杭基礎構造）
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字会下 323番外	14204	259	35° 19′	139° 34′	20011217 ～ 20011227	15.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
みょうほんじいせき 妙本寺遺跡	神奈川県鎌倉市 大町一丁目 1140番１外	14204	232	35° 18′ 50″	139° 33′ 59″	20020107 ～ 20020201	105.00	個人専用 住宅
みょうほんじいせき 妙本寺遺跡	神奈川県鎌倉市 大町一丁目 1140番２	14204	232	35° 18′ 48″	139° 33′ 30″	20020917 ～ 20020926	28.50	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	神奈川県鎌倉市 材木座四丁目 573番１外	14204	279	35° 18′ 13″	139° 33′ 36″	20020107 ～ 20020202	45.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
だいやまいせき 台山遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字宮下小路 819番１外	14204	29	35° 20′ 10″	139° 32′ 35″	20020401 ～ 20020419	12.00	個人専用 住宅 （擁壁及び車庫）
ささめいせき 笹目遺跡	神奈川県鎌倉市 笹目町 330番11外	14204	207	35° 18′ 46″	139° 32′ 42″	20020401 ～ 20020422	43.50	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
おおくらばくふしゅうへんいせき 大倉幕府周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下四丁目 567番７	14204	49	35° 19′ 11″	139° 33′ 56″	20020625 ～ 20020722	25.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜三丁目 194番50	14204	236	35° 18′ 34″	139° 32′ 39″	20020701 ～ 20020725	51.75	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
ほうじょうまさむらやしきあと 北条政村屋敷跡	神奈川県鎌倉市 常盤字常松下 1005番２	14204	131	35° 19′ 05″	139° 31′ 59″	20020723 ～ 20020809	28.19	個人専用 住宅 （地下室）
なごえがやついせき 名越ケ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町六丁目 1708番４の一部	14204	231	35° 18′ 39″	139° 34′ 00″	20020727 ～ 20020820	27.29	車庫の築造

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおくらばくふしゅうへんいせき 大倉幕府周辺遺跡	都市	13世紀中頃 ～ 15世紀	土壙、溝跡 井戸跡、柱穴	かわらけ、瓦 舶載陶磁器 国産陶器	
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壙	かわらけ、常滑、 白磁	
みょうほんじいせき 妙本寺遺跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	建物跡、溝跡	かわらけ、常滑、 青磁、銭	
みょうほんじいせき 妙本寺遺跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壙、柱穴列	かわらけ、常滑、銭	
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	社寺	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壙、溝跡	かわらけ、常滑、瓦	
だいやまいせき 台山遺跡	集落	15世紀	土壙、柱穴列	かわらけ、常滑、銭	
ささめいせき 笹目遺跡	都市	13世紀後葉 ～ 14世紀後葉	建物跡、土壙	かわらけ、常滑、銭 青磁、青白磁、鉄鏃、 たて櫛、	
おおくらばくふしゅうへんいせき 大倉幕府周辺遺跡	都市	弥生時代中・後期 13世紀中頃～ 15世紀代	土壙、柱穴列、溝跡 井戸、かわらけ溜り	弥生式土器、かわらけ、瓦、銭、青磁、 琥珀、刀子	
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	都市	13世紀中頃 ～ 15世紀初頭	建物跡、土壙	土師器、かわらけ、 銭、骨製品	
ほうじょうまさむらやしきあと 北条政村屋敷跡	城館	律令期 12世紀末～ 15世紀代	土壙	土師器、須恵器、白磁、青磁、瀬戸、かわらけ	
なごえがやついせき 名越ケ谷遺跡	都市	13世紀中葉 ～ 14世紀初頭	土壙、柱穴	かわらけ、青磁、常滑、木製品、滑石製品	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　20

平成15年度　発掘調査報告（第２分冊）

発 行 日　平成16年３月31日

編　　集
発　　行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　朝日オフセット印刷株式会社